
魔法王国へようこそ！ ~ Welcome to the Mafo-land ~

鴉合コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法王国へようこそ！ Welcome to the Magic
f o - l a n d

【Nコード】

N0497N

【作者名】

鴉合コウ

【あらすじ】

異世界マフォーランドには、ある伝説があった。異界より現われた乙女が天の水底たる水門の鍵を開け放ち、世界を渴きから救うと。

しかし、現われたのは二人。どちらが本物の乙女か。そして水門の鍵とはなんなのか。謎に満ちた冒険がはじまる。
(本文は、二人の交互視点になります)

登場人物紹介（前書き）

読み飛ばしOK。

登場人物紹介

【主な登場人物】

<主人公たち>

朝野 真紀（あさの まき）：

16才（12月生まれの高2）。広島出身。黒髪ボブ。茶色一重の目。

得意教科：国語・生物・倫理政経

部活：コーラス部

高遠 理緒子（たかとう りおこ）：

16才（2月生まれの高2）。神奈川出身。コーヒープラウンのミディアムウェーブ。同色の目。

得意教科：国語・歴史

部活：茶道部

<周りの人たち>

ルイス（ルイセリオ・セイアン・カーツォ＝アクイナシア）：

23才。金髪碧眼の魔法士。魔法士団「双月」士団長。アクイナス出身だが天都に勤める。

別名？氷のアクイナス？。

タク（タキトウス・アルディ・ムシャザ）：

21才。青みがかった黒髪黒目、褐色の肌。イエドの近衛隊長。

功績により19才で将軍位を授かる。別名？風神？。右手に怪我あり。

ヘクター（ヘクトヴィーン・レニアス・クガイ＝ヤーマトウーロ）：

26才。黒銀の長髪、濃灰色の目。神官長。実はとっても偉い＆普通の常識人。

レス（レスライン・エルド・カシュゲート）：

29才。茶髪茶目の魔法士。ルイスの友人で魔法士団「弧月」士団長。

クガイ旧家のおぼっちゃま。

アル（ミア＝ヴェール・アルマン・シド・マフォーラス・コーツア＝イエド）：

15才。第一王子。黒髪、緑の瞳（永久の緑葉）、褐色の肌。イエドに住む。

マーレイン（精霊加護者）でもある。絵が得意。

サルディン王（ディーノ＝サルディン・オルトラン・リュビ・マフォーラス）：

国王。黒髪黒目黒い顎鬚。表情不明。異界の乙女を見つけた者に王位を譲ると公言した。

シグ（シグバルト・コバシュ）：ルイスの侍従。女性が苦手。前髪で目を隠している。

ラクエル（ラクエル・メイサ）：イエドの女性魔法士。世話好き。

ジャム（ジャメイン・ウッド）：

赤髪、金色の目。原始型マーレインで動物と喋れる。タクの御
供の豪快なにーちゃん。

アマラ（アマラリーヴァ・ラキス・スオウシア）：

23才。黒紅色の髪と目。未来視をもった魔法士。ルイスの元
婚約者のナイスバディ。

カイエ（カイエ・エルタダ・カーツォ〓ツークセア）：

21才。前髪を立てた短髪、丸眼鏡。ツークス領主。元神童で、
いろいろウザい。

リオコがお気に入り。

オズ（オリザリオ・アーヴェン）：

魔法士長。刺青ハゲの筋肉親父。平民出身。逆らえる人は希少
らしい。

シャルル（シャルローズ・セバン・カトウア）：

太政大臣。左が白髪、右が黒髪の異相。無愛想。貴族だが、家
位は低い。

早熟の天才と言われ、本をめくる速度で読破できる。

登場人物紹介（後書き）

一応載せませんが、増殖・改変していきます。作者の覚書ってことで。
(2011/7/8 5名増殖)

設定・用語集（前書き）

ほとんど作者の覚え書きです。

設定・用語集

【マフォーランド設定・用語集】

基本設定

マフォーランド：国名。 テーエの中で最大最古の王国。 現在は単一国家。

テーエ：マフォーランドのある世界（星）のこと。

マフォーラ：神界。 神の座す国。

神（神霊）：

アーミテユース：光（太陽）と創造の神

スザナ：闇と破壊の女神

ツキミカミ：運命の三姉妹

ツウク¹：1の月・白月（白い大月）：現在を司る

イミ²：2の月・青月（蒼白い小月）：過去を司る

ミイカ³：3の月・幻月（ぼんやりと見える赤い月）：未来を司る

イシエンナ：マフォーラに住まう神の始祖といわれる男神

イシュナム：神の始祖といわれる女神

精霊：天律と理律を行き来できる存在

光精オウリン・闇精レイキ・地精ゲブ・火精スウザ・風精ビヤクーガ

鬼：精霊と動物の間の存在

真名（まな）：いわゆるフルネーム。 身分の高い相手に名乗ること

によって、敬意と服従を示す。

そのため相手の真名を呼ぶことは、相手を征服しようという意志ととられかねない。

魔法関係

天律（てんりつ）：天の法則。人の触れることのできない無限の領域。神霊が支配する。

理律（りりつ）：この世界の物理法則。素（そ）によって形作られると考えられる。

魔法：理律の領域に居ながらにして天律を引き寄せ、具現化する術。

マーレイン（精霊加護者）：生まれながらに魔法をもち、精霊と対話できるもの（複：マーレイニ）

魔法士：魔法を職業として行使するもの

「双月（そうげつ）」：天都魔法士団最高峰。士団長はルイス。

「孤月（こげつ）」：天都魔法士団第二位。士団長はレス。

「無月（むげつ）」：天都魔法士団第三位。

讃詞（さんし：パルロドーア）：魔法士の祈りの言葉。魔法を使う最初と最後に唱える。

「水よ、火よ、風よ、空よ、大地よ、光よ、闇よ。生きしものよ、死したるものよ。」

時よ。すべてが宇宙の環の中につつがなく回帰せしめんことを」

基素繰術（きそそうじゅつ）・基素魔法（きそまほう）：魔法の基礎。

送心術（そうしんじゅつ）：手を触れて、心の声を送る魔法。相

手の心は読めない。

治癒術（ちゆじゆつ）：人の気の流れを整え、あるべき方向へ流すことで病状などを緩和させる。

魔法光（まほうこう）：魔法で作った光。飛ばすことも可能。

声玉（こえだま）：離れた相手に声を送る魔法。

高位魔法術

晶壁（しょうへき）：魔法光の粒で作られた守護結界。

呪声術（じゆせいじゆつ）：声に魔法をこめて、相手の意志を奪う。

傀儡術（くぐつじゆつ）：魔法力の一部を実体化して、人型を作る。

その他魔法

魔法話の指環（まほうわのゆびわ）：嵌めると意思疎通できる指環。ソロンが創った。

遠話鏡（えんわきょう）：鏡電話。

使鬼（しき）：魔法士と契約して使役された鬼。

術歌（じゆつか）：聞くものを魅了して操る歌。

地名・都市名

タキⅡアマグフオーラ：聖地。？いと高き処？？偉大な神の寝所？。水門が眠る。

フージャイ：聖なる山。マフオーランドの最高峰。

セドウ湖：元海だった巨大な湖。

タキⅡアチファ：聖地に至る荒れ果てた高原。

天都キヨウ：マフオーランドの首都。王城がある。

乾都イエド：東の僻地。聖山フージャイの膝元。

風都ムシヤズ：イエドの隣の都市。
山都アクイナス：西の都市。山野に囲まれている。
古都ヤーマトウーラ：キヨウの隣の都市。太陽神アーミテユースを
祀る神官都市。
商都アウサーガ：西の大都市。キヨウの隣の都市。
鉦都ツークス：南の大都市。
離国（りこく）：セドウ湖を挟んだ対岸の僻地。四つの都市がある。
中都ブゼナ：ツークスの隣の都市。
岳都ブングルト：ブゼナの隣の都市。
光都ヒューガラナ：タキリアチファの入口。

身分その他

デイーノ：王の尊称
ミア：王族に冠せられる尊称
コーツア：王族
カーゾオ：貴族全般を指す
クガイ：上位の貴族
ブーシエ：騎士の家系。またその生まれのもの。それを誇りにする。
（複：ブーシエイ）
カヌシエ：神官の家系。またその生まれのもの。（複：カヌシエズ）
ヒジリ：神官の尊称
ヒジリ・アーダ：神官長のみに対する尊称
クイ族：北方の狩猟民族。独自の文化と言葉を持つ。主神は死と戦
の神ヴオード。

刑紋（けいもん）：犯罪者に施される環状の刺青。三本で懲役、五
本で国外追放、七本で極刑。

動植物・食べ物

キツキーナ：菊に似た白い小花。国花。茎は固い。

フエイオウ：赤い花をつける巨木。暑さに強い。

サヴォオ：棘のある多肉植物。実は食用になる（＝火の鳥の実）。

コメイ：米に似ているが、実は豆。もちもちつぶつぶした食感。

パニ：パンに似た食べ物。テム芋を蒸し焼きにしたもの。

パニカ：固焼きしたパニ。長持ちする。

アジュ、リグ、ベイワ：果物。

イカカスの葉：聖人が沐浴をするために使う葉。泡立ちが悪い。

カフェオ：苦い飲み物。カフォの実の種から作る。

香茗茶（こうめいちゃ）：香りの良い紅茶に似た飲み物。ちよつと

スパイシー。

コジ：柑橘系の果物。

ブッセージュ：南方で一般的な、植物由来の赤い飲み物。ジュース、

お茶がある。

コマ：馬に似た、頭に瘤のある家畜。車を牽いたり、騎乗されたりする。

ベク：牛に似た家畜。食用される。乳からチーズやクリームも作る。

カケロ：食用の鳥。

イー：食用の動物。脂身があつて旨い。

ミヤウ：猫に似た動物。愛玩されるが野性味が強い。

ガウル：猫と犬の中間くらいの四足動物。体毛は黒く、銀の鬣がある。群れで生活する。獰猛。

ネウロ：モルモットっぽい動物。食用。

カシエ：トイレなどで使う紙。使用後は砂に分解される。

シトウラ：楽器。ギターに似ているが、胴は雫形、弦は八本ある。

単位

リール：長さの単位。およそ1k m。
チエク：長さの単位。およそ100 m。
ケーン：長さの単位。およそ2 m。
シエク：長さの単位。およそ30 cm。
ウエン：貨幣単位。およそ10円。
ゼン：貨幣単位。1/10ウエン。

設定・用語集（後書き）

たぶん増殖予定。（2011・8・6追記）

第1章 扉 真紀の現実（前書き）

初投稿です。展開はややゆっくりめ。よろしくおねがいます。

第1章 扉 真紀の現実

1

あたしは朝野真紀。

その日あたしは、学校からの帰り道をくたびれきつた体を引きずるようにして歩いていった。部活が思ったよりも長引いて、秋口だといふのに空は暗くきりりと冷えている。

あたしは溜息をひとつついて、制服のブレザーの前ボタンを嵌めた。

部活はコーラス部。れっきとした文科系だ。

中学と同じ感覚で入部したあたしは、初日から違うって感じた

先輩たちの熱の入れように。

腹筋背筋柔軟の基礎体力作りはもちろん、早朝からみっちり行なわれる朝練と夕方の課外練習にはマラソンとスクワットまでこなさなければならぬ状況は、退部という二文字を脳裏にちらつかせるに充分だった。

それでも一年半続いているのは、ひとえにそれを口に出すことのできない部内の雰囲気によるものだ。

放任な親は辞めるとは言わないけど、2年も後半になって？受験？という言葉が頻繁に持ち出してくるようになった。塾に行かされるのも時間の問題かもしれない。

女子高生なのに遊ぶ時間がないってどうだよ……。

内心ばやきながら、あたしは、整然と並んだ建売住宅の隅っこにある自宅に辿りついた。

無造作に灯りの点る玄関を開ける。刹那、ぐらりと足元が揺れ、目の前が暗転した。

「え……」

疲れすぎて貧血か。それとも血圧が下がったのか。空腹で低血糖

ということも有り得る。

回転する脳で色々な理由を考えているうちに、あたしはたたらを踏んで正気に返った。

さくり、と柔らかな感覚が足裏に伝わる。

モザイクが晴れていくように、だんだんとおぼろだった視界が輪郭を取り戻してきた。

疲れて……るのかなあ。

家の中に入った気がしなくて、あたしは眼をこすった。

冷たい風が頬を掠める。

「えー……と」

あたしは、まだ外に居た。見たことのない野原に。

今いる状況が理解できなくて、あたしは目を瞬かせた。何度も。

さつきまで居た家の狭い玄関スペースではない。

足元は、踝（くるぶし）くらいまでの丈の草が広がる地面。周りには不気味な翳をつくる木々が黒々と茂っている。

ざわり、と夜風が景色を波立たせる。

あたしは、完全に見ず知らずの場所に立っていた。

おそろおそろ、後ろをふり返る。が、期待していた画（え）を見ることができなかった。

数秒前、確かにくぐったはずの玄関のドアは、そこにはなかった。

あたしは左肩に掛けたバッグを胸に抱えこむようにして、および腰で歩き出した。草地を踏む普通の感覚。

この場合、普通とも違うような？

突然見知らぬ場所に現われるというどこまでも非現実的な現象の中で、何が普通なのか見当もつかない。それでも、ここに居てはどっちらにもならないことだけは、はっきりしていた。

「……寒う」

同じような夜の星空。今見る方が澄んでいる気がするのは、どうやら自然に囲まれているという認識のせいなのか。

落ち着きを取り戻してきた目に、前方でぼっと輝くものが飛び込む。建物の灯りのようだ。

人が居るかもしれない。

あたしは足を速めた。と、目の前の灯りが一気に広がる。

ぎよつとしたあたしは、闇に沈む建物の一画が開け放されたのだと気が付いた。

暗い視界の中で、四角く切り抜かれた光が、まっすぐにこちらを照らしている。

その中に立っている人物がいた。背の高い たぶん、男。

「xxxx?」

あたしの予測は、その人の発した声音で確信に変わる。

深い豊かなバリトン。いい声だ。教会のような響きのいい場所で喋らせたくなる声。しかし、どうも言葉が聞き取れない。

というより……。

ふつつつと湧き起こる悪い予感を懸命に抑える。

ここは日本だ。自分の家だ。百歩譲って、疲れきったあたしが家を間違えたのだとしよう。それでも日本語は通じるはずだ。

相手がまるつきり外国人であれば別だが。

「あ、あのー……すみません」

「xxxx?」

やはり分からない。君は誰だと問いかけられている気もする。

なんだろう。英語でもドイツ語でもフランス語でもないし……

韓国語、中国語……少し籠もったような舌が転がる感じ。ロシア語?

小・中・高と合唱をしているせいか、あたしは耳がいい。一心絶対音感なんてものもある。

洋楽とか外国映画も好きだから、話せなくても多少外国語の聞き分けくらいはできる。なのに、分からない。

「あのつ。日本語、分かりますか?」

分からないならジエスチャーだ。といつても？ここはどこ？？あなたはだれ？？道に迷った？なんて抽象的な質問に合うジエスチャーなんてあるのだろうか。

疑問を感じたが、あたしはその人に訴えた。

とりあえず、怪しいものではない（お互い充分怪しいが）と思つてもらいたい。

あたしの必死な様子に察してくれたのか、その人は、灯りを手に家から出てきた。

いたのは地面まで届くオープンテラスだったようで、履物を履きかえることなく、そのまま外を歩いてくる。少し離れたところで止まり、灯りを掲げてこちらをじっくり見直す。

眩しくて、あたしは片手を上げて、それを遮った。そして 見ってしまった。

光に縁取られた金色の髪。高い鼻筋と凹凸のはっきりした顔の骨格。

マジでガイジンだよ……最悪。

その人もあたしを見てやや驚き、また問いかけた。

「xxxxx？」

「すみません、日本語で喋ってもらえますか。アイ キャン スピーク オンリー ジャパニーズ、なんですっ！」

自棄気味にベタな日本語英語を返す。その人は後ろを向くと、室内へ何かを叫んだ。

う。通報されたらどうしよう……。

空っぽの胃がぐつと締めつけられる。

英語の？動くな？が分からなくて射殺された高校生がいた、なんていうどうでもいい知識が脳裏をよぎった。

その背の高い金髪の男の人は、あたしの警戒心を解くように、僅かに頬をほころばせた。左手に灯りを持ち替え、こちらに右手を伸ばす。

「xxxxx」

同じ言葉をくり返している。

大丈夫？こつちへおいで？　　どうとでもとれそうな言葉に、あたしはおどおどと前に進み出た。

その人の服装が目に入る。秋空に少し寒そうな開襟シャツとズボン。長めに伸ばした金髪は一つにくくつていて、髭はない。足元はごつめの乗馬ブーツ。

オシャレな人、なんだろうか。

なんて考えて、あたしは凍った。彼の腰に纏わりついているものは、なんというか武器っぽい。いわゆる？剣？というものに見える。

ハロウィン……かな。

強引に自分を納得させた。余計なことは今考えないほうがいい。

その人は辛抱強く、まるで仔猫にでも話しかけるみたいに、手を差し伸べてくる。

あたしはぺこりと頭を下げ、慣れない外国風の挨拶、すなわち握手というものをした。

その瞬間。

『君は異界の人間か？』

「ひゃっ！」

頭の中に男の声が鳴り響いて、あたしは叫んだ。すり抜けるあたしの手を、その人がぐつと握り直す。

体を支えるように肩を掴まれ、またも声でない声が頭に聞こえた。『驚かせてすまない。こちらの言葉が分からないようだったから』

超能力って、こういうのをいうんだらうか。

あたしは、泣きそうなのと逃げ出したいのと耳の奥に声がまとわる慣れない感覚とで、腰砕けになった。

『大丈夫か？　怖がるな。君を傷付けたりする気はない』

「家に……帰してもらえますか？」

彼が戸惑ったような顔になった。

『すまない。送心術（そうしんじゅつ）では、私の声は伝えられても、君の言っていることは分からない』

じゃあ、どうやって帰ればいいんだろう。

あたしは伝わらないと知りつつも、質問をくり返した。

「ここは、どこですか？」

地面を指差す。ここ、と繰り返されるジェスチャーに、彼は頷いた。

『ここは私の家の庭だ。アクィナスという都市にある』

「あきなす？」

脳内で素直に緊張感のない？秋茄子？という文字に変換される。それぐらい聞いたことのない都市名だ。

「ヨーロッパ？ アメリカ？ アフリカ？ 中近東？」

続けざまの問いに、彼はまた困惑した表情を浮かべた。「ご当地での美醜は分からないが、どこか線が細くて日本人受けする顔立ち。まるで映画のワンシーンのようだ。

『マフォーランド。この国はマフォーランドという』

「は??？」

まほうらんど。魔法ランド。

なんちゅう悪趣味なネーミングだ……。

ネズミ王国より質（たち）が悪いと思ったあたしは、性格がひねくれてるんだろうか。

そこでもうひとつ気が付いた。

前屈みになって腰を引いているあたし。その右手を握り、肩に手を置いてある彼。

辺りは闇だが視界は良好だ。

「えー……と」

あたしと彼の横には、懐中電灯ではない丸い光の玉が、ふよふよと浮かんでいる。

火でもない。電気でもない。

魔法ランド。

その一語が全速力で頭を駆け巡る。

「ここは……どこ……？」

息も絶え絶えな問いに、彼はあたしの肩から手を外し、背後の空を指差した。

ふり返って仰ぐあたしに降り注がれる、満天の星。

暗い森を抱きすくめるその夜空には、煌々と冴え渡る満月が三つ、折り重なるように浮かんでいた。

2

ここで気を失ったりするもんなんだろうな、普通は。

どう見ても十六年間生きてきた場所とは違うらしいとの認識を高めながら、あたしは思った。

なんだか、驚きすぎて笑えてくる。

「はふう……」

溜息ともつかぬ息を洩らすあたしを、金髪の男が覗き込んだ。

『どうした。大丈夫か？』

なんでもない、と言いかけて、言葉が通じないのだと思い出す。

あたしは首を横に振った。落としてしまったショルダーバッグを拾い上げ、土を払う。

『とりあえず家の中に入ろう。ここは寒い』

手からというか、心で語りかける彼に頷いて、あたしは従った。

手を握られたままついていく。

ふよ、と光る玉が、あたしたちを追い越して先導した。

魔法、なのかな。

とすれば、彼は魔法使い。剣を提げているから戦士という単純なものでもないようだ。

はあ。もうちょっとファンタジー読んどけばよかった。

妙な後悔がよぎる。

冷静に考えて、ここは異世界(さっき彼もそう言っていた)。あたしは一瞬で移動して、帰り方なんて分からない。

物語だと、主人公は異世界に行つてすぐに言葉が読めたり書けたり、不思議な力に目覚めたりする。そして、助けてくれる騎士や姫なんかと出会う。

光とか、出せるの、かなあ？

ぼんやりと、引っぱられる手に眼を落とす。

鼻も頬も耳もかじかんできた中で、そこだけが仄かに温かい。助けてくれる騎士という設定は、ひとつクリアな気がする。

彼に続いてテラスから室内に入りかけたあたしは、落ち着いた臙脂色の絨毯に足を浮かせた。

『どうした？』

「あ、く、靴を……」

ももぞと靴を脱ぎかけ、不思議そうな彼の様子に気がつく。

「このままで、いいんです、か？」

『履物を脱ぐ必要はない』

「すみません。お邪魔します」

何かあつたらとりあえず謝るなんて、日本人の悪い癖だ。

ぎこちなく運動靴で絨毯の上を歩く。ふこふこして妙な気分だ。

光の玉が大きな蛍みたいに泳ぎ飛んで、壁のひとつに止まった。

と、電源が入ったように室内がさらに光に溢れる。

「うわ……」

みっしりと草花模様が浮き彫りにされた壁紙が四方を埋め尽くし、高い天井にはきらきらと光る硝子片が房状に垂れ下がる。金ぴかの縁取りの家具と絵画、豪勢な暖炉。

これ……家っていうより、屋敷っていうんじゃないのかな。

そんなことを考えていると、別の人が部屋にやってきた。

白髪を丸くひつつめた老婦人だ。足先を隠すロングスカートにエブロン。優しそうな丸顔にどことなく不安の色を浮かべて、彼とあたしを見ている。

お母さん、かな。

「アルノ」

彼はその人に呼びかけ、あたしの手を離した。囁くように何か言っている彼女に近付き、低く語りかけている。そのうち彼は何か受け取り、あたしの方に戻ってきた。

再び手を差し出す。それを握ったあたしの手の中に、固いものが

転がってきた。

指環だ。

『なにこれ……？』

『魔法話の指環だ。これで君と会話ができる』

彼は平然と答えた。

確かに、喋っている内容がさっき頭の中で響いた声と似たような感覚で脳内変換されて聞こえる。けれど、聞こえても意味はさっぱり分からない。

『ごめんなさい、意味分かりません。どうなってるんですか？』

『その指環には魔法が籠められている。正確には嵌まっているその石に、だが。』

古くから我が家に伝わる魔法の指環で、大賢者ソロンが創ったとされる。その魔法が君の魔法力を助け、意思の疎通を可能にする『

あたしは後悔した。

異世界の法則、しかも平然と光が空を飛ぶような魔法の世界の仕組みを聞いたところで、理解できるはずもない。

紅い宝石のついた指環をぎこちなく手の中で転がす。ふいに彼の手がさつと動いて指環を取りあげ、あたしの右の中指にぎゅっと押し込んだ。

『あああたしの指、太いからっ。無理やり入れたら外れなくなっちゃっ！』

彼がくす、と笑う。目尻に笑い皺。若いが、二十歳は超えて見える。

外国人の年は分からないが 異世界の人の年齢など、もっと分からないが。

『君の名は？』

『あ、朝野真紀です』

『あさのまき？』

『あさの、が家族の名前。まき、が自分の名前』

咄嗟に苗字という日本語が出てこない。

彼は、マキ、とあたしの名前を呟いた。

『私はルイセリオ。ルイセリオ・セイアン・カーツォ・アクィナシ
アだ』

『るいせる……？』

早口で聞き取りが追いつかない。彼はもう一度ゆっくりと名乗り、

『ルイス、と呼んでくれ。親しい者はそう呼ぶ』

『ルイス、さん？』

『？さん？っていうのはいらぬな。マキ』

呼び捨てが普通なのかもしれない。お国柄はそれぞれだから、あ
たしは黙って頷いた。

『マキ。彼女はアルノだ』

離れたところで見守っていた老婦人を紹介する。あたしは頭を下
げた。

『初めまして、マキです。すみません、突然お邪魔してしまって』

『いいえ。どうぞごゆっくりなさってくださいまし』

戸惑った表情ながら、アルノはやわらかく微笑んで会釈を返して
くれた。

『彼女は私の世話をしてくれている。君も安心して任せるといい』

『あの……ルイス』

初対面の人を？さん？付けをしない心地悪さをこらえ、あたしは
言った。

『すみません、まだよく分かっていなくて……。ここは、魔法ラン
ドなんですよね？』

『魔法王国、か。そうとも言えるが、君は面白いことを言うんだな
そう言ったのはそっちのくせに。』

むっとなるあたしの心中など知るわけもなく、変わらぬ穏やかな
調子でルイスが教える。

『ここはマフォーランド王国の西部、山都アクィナスだ』

『山都（さんと）……』

『山に囲まれた都市という意味だ』

それは分かる。意味が漢字表記される感じで、感覚的に聞こえてくるから。

問題はそれが、あたしのいた世界とどう関連するのかということ。

『あたしは地球という星の中の日本という国の広島から来たんですけど、知ってますか？』

『いや』

やっぱり。

あたしは掛けていたシオルダーバッグから、教科書を引っ張り出した。世界史の本をめくり、両開きの世界地図をルイスの顔の前で広げる。

『本当は丸いんだけど、平面にすると地球はこんな感じで……これがアメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、ユーラシア大陸。で、この島が日本』

『随分と小さい国だ』

余計なお世話だ。

『私の世界の地図を見せよう』

ルイスがあたしを手招く。

教科書をしまい、傍らで見守るアルノさんの前を通り過ぎて、やや小さい書齋っぽい部屋に入る。ルイスが壁にかかった図を指差した。

『これが世界地図。この大地の大半を治めるのが、マフオーランドだ』

羊皮紙のような厚みのある紙に、インクで描かれた地図。あたしの胸がきり、と痛んだ。

マンゴーのような形をしている上下に伸びた大地。

下の方にはたくさんの小島が固まっているけど、その他に大陸は描かれていない。探していないのか、それとも。

傍らのローテーブルに、丸い球が台座に支えられて載っている。

『それは星球儀。この星、テーエを模した模型だよ』

あたしは固く目を閉じた。ここは決して地球などではない。そのことがはっきりと身に染みて分かった。

3

目を閉じるあたしに、ルイスが気遣わしげに声をかけてきた。

『マキ……大丈夫か？ 気分でも？』

『うっん、大丈夫』

大丈夫、と言うしかない。

夢なら覚めれば問題ない。現実ならなおさら、じたばたしても始まらないから。

『異界から来たばかりなのだろう。無理をすることはない』

『ルイス。なんで、あたしを異世界から来たと思うん……ですか？』

シヨックのあまり緊張が途切れ、方言が出そうになってごまかす。ルイスは少し困った様子で息をつき、部屋の右手の窓を指差した。四角い木枠に、星々の輝く夜空の断片が切り取られている。

『月が見えるか』

『う、うん』

地球で見るのとは違う、白くてなだらかな大きめの月。その脇に少し小さい青い月。その二つから少し外れて、赤くぼんやりした中くらいの月が浮かんでいる。

さつきはもつと重なっていたはずなのに、もう三つの月は別々に離れて見える。

『一番大きいものが第一の月・白月（はくげつ）。青く見えるものが第二の月・青月（せいげつ）。残るひとつが第三の月・幻月（げんげつ）だ』

『月が三つって初めて見ます。綺麗ですね』

適当なあたしの感想に、ルイスの頬に何とも言えない表情がよぎった。

『この三つの月が合（ごう）を成す時、扉が開かれ、異界より渡り

人が訪れる　この国の伝説だ』

『え　？』

あたしは、食い入るように月を見つめた。

つまり、この月があたしをここへ引き寄せた、ということなのか。

『君を見るまで、私はその伝説を信じていなかった』

驚くようなルイスの台詞が続く。

『だが、合が終わると同時に、庭に君が現われた。どう見てもこの国のものとは思えない格好で　だから、異界の人かと聞いたんだ』

あたしの格好。

つまり、地味なチャコールグレーのブレザーに臙脂のタイ、膝丈ボックススカート。ハイソックスに運動靴、シオルダーバッグという女子高生スタイルは、この世界の人間では有り得ない宇宙人服つていうことだ。

ものすごく珍獣な気分。

『？合？つて、どれくらいの間隔で起こるものなんですか？』

『三年から四年に一度だ』

結構頻繁だ。異界の扉なんて開きまくりじゃないか。そこまで考えて、

『この一年は何日ですか？』

『三百六十日』

微妙に近い。では　。

『一日は二十四時間。三十日が一カ月。最初の三カ月が始季（しき）、六カ月が盛季（せいき）、残り三カ月が終季（しゅうき）に分けられ、三つの季節を巡る』

『そこまで詳しく教えてもらわなくても』

『君は質問が多いから、先に答えておこうかと思って。それにまるで教師のように説明していたルイスが、唐突に言葉を止める。言わなくても分かった。あたしは一生をここで生きていかないといけないかもしれないのだ。』

あたしは質問をすることで、その考えを無理矢理意識の下に押し

込めた。

『そんなに頻繁に合が起きるのに、ルイスは異界の人と会ったことがなかったんですか？』

『合が起こるのは不思議なことではない。月たちはテーエの周りを廻る星だから、軌道が重なる都合は起こる。ただの自然現象だ』

なんだか科学的な発言。世界地図や星球儀があるくらいだから、科学が発達していてもおかしくはないけれど。

服装は昔っぽいけどね。

中世というより、開拓時代のアメリカくらいだろうか。そんなにびらびらせず、動き易そうではある。剣はさておいて。

『合は、ただの……象徴だ。印とでもいうか……』

歯切れ悪くルイスが言う。考え込むように拳を口元に当て、視線を逸らす。

『 そうだ。お腹が空かないか？』

『 はい???』

そりやもちろん減っている。

運動場を十周とスクワット二十回、腹筋を百、背筋を百こなして一時間のパート練習と三十分のコーラス合わせしてきたのだ。減らないほつがおかしい。こちらら健康優良女子高生だよ。

でもさ、この状況で食事なんて言い出すか？

思わず胡乱な目をルイスに向ける。が、あたしの身体は正直だった。

ぐるおう。

脳に食事というキーワードが打ち込まれた途端、声高に訴える間抜けな胃袋。

ルイスが笑った。聞こえたのか、戸口にたたずむアルノの口元もほころんでいる。

『 食事にしよう。君の口に合えばいいけど』

そう言って、ルイスはあたしを部屋から連れ出した。

やっぱりルイスはお金持ちらしい。

テーブルに並べられた食器類を見て、あたしはそう判断を下した。緑と白のテーブルクロスの上に燦然と輝く、銀色の皿とナイフにフォークにスプーン。フォークは二股だけど、なんとなく馴染みのある光景だ。食器を照らす燭台にも、普通に火(だと思う)が灯っている。

あたしは声を潜め、長いテーブルの向かいに座るルイスに呼びかけた。

『ごめんなさい。あたし、マナーとかよく分からないけど』

『フォークで押さえて、ナイフで切って口に入れる。フォークだけで食べてもいいが、フォークは食べない。皿も食べない。それができれば問題ない』

真面目な顔でルイスが教える。

あたしは笑った。冗談を言う人とは思わなかった。

『ちよつと気が楽になった。ありがとう』

『ここは私しかない。堅苦しく考えることはない』

あたしは顔を上げて、少し離れて立つ老婦人に目を向けた。

『アルノさんは一緒に食べないんですか？』

『わたくし……で、ございますか？』

驚いたようにアルノが問い返す。戸惑う瞳を一瞬ルイスへ向け、慎ましく頭を下げる。

『わたくしはお客様と御席を一緒にできないのです、マキさま』

『君の世界では、侍女も席を同じくするの？』

『侍女なんていません。うちは先祖代々平民階級ですから』

さま、と呼ばれたむず痒さもあわせて、あたしは刺々しくそう答

えた。

答えた直後、しまった、と心の中で舌打ちする。

お金持ちなのは、ルイスが悪いんじゃないのに。

『ごめんなさい。あたしつてば、こういう状況に慣れてなくて……その、失礼なこと言いました。すいません』

『……いや。風習が異なるのに戸惑って当然だ』

明らかに身分のことを無視して、ルイスが微笑む。

『アルノが同席しないのは失礼にあたるかな？』

『いえ、いいんです。ここはルイスの家ですから、気にせずこちらのやり方でいってください。そのうち慣れますから……たぶん』

慣れるのだろうか。不安が波のように足元から押し寄せる。

あたしは、右手の中指に嵌まる指環をいらいらと触った。

アルノが若い男性から大きな料理皿を受けとり、テーブルに並べていく。よく分からない白いスープに手羽先っぽい肉の山盛り。ピラフに似たぱらぱらの粒のご飯もどき。

どれも見たことはないが、臭いをかいだ限りでは食べられそうな雰囲気だ。

ルイスがナプキンを広げるのを真似て、あたしも膝にナプキンを置いた。毎日こんな食事だったら気も抜けない。しかも、太りそうだ。

なに食べよう。

きよろきよろ見回すあたしに、料理を運んできた男性が声をかける。

『どちらをお取りいたしましたしょう、お嬢様』

おおお。お嬢様、ときたよ。

心の中で悶える。居心地の悪さをこらえ、あたしは脚付のポウルに入ったスープを指差した。

『スープ、ください』

『かしこまりました』

とろりとしたスープはチキン風味。クリーミーだが舌に触るもの

がある。豆かじゃが芋を濾した感じに近い。

うん、美味しい。

空きつ腹に染み入る味だ。美味しいです、という意味を込めて、給仕の男性に頷きかける。

『これは何のスープですか？』

『キャスバという植物の根をすり潰したものです』

『すぐく出汁（だし）が効いています。鳥ですか？』

『カケロの骨から採ったスープをベースにしています。お気に召されたのであれば、料理人も喜びましょう』

『とつても美味しいです』

『カケロの肉を焙じたものもございます。お取りいたしましょうか』

『あ、お願いします』

添えられている大きなフォークを使って、食べやすそうな肉の欠片を皿に載せてくれる。

『どうぞ、お嬢様』

『あの……ちよつと、お嬢様は止めてもらえないでしょうか』

失礼は避けたいので、できるだけ丁寧をお願いする。

『あたし、お嬢様と呼ばれる身分ではないので。あなたも すみません、まだご挨拶していませんね。あの、お名前は？』

『シグバルト・コバシユと申します』

『あたし、朝野真紀です。マキって呼んで下さい。よろしく、シグバルトさん』

椅子に座ったまま、横向きで握手する。くすり、とルイスが笑う声が届いた。

『なんですか？』

『……笑わないで下さい、若様』

傍らの男が、なぜか顔を赤くしてルイスを睨む。

若様、と呼ばれた彼は、ナイフとフォークで優雅にカケロの肉を切り分けながら、笑いをこらえた目を向けた。

『君がその男を困らせているのを楽しんでいるだけだ。気にするな』

『困らせる？』

『こちらでは、若い女性から男性に手を差し伸べる時は、好意の表われと解釈される』

『つまり……』

あたしは彼に告白したようなものなのか。

『ごめんなさい。そんな気なかつたんですけど』

『……いえ』

『シグ。彼女はおまえが好みじゃないらしい。諦める』

『はあ？』 『そんな……！』

ずれたルイスの指摘に、あたしとシグバルトの声が重なる。短い黒髪を前に流して目の表情を隠した彼は、まだ顔を真っ赤にしたまま、あたしから眼を背けた。

どうやら、ものすごく失礼なことをした気分だ。

『すみません。変な誤解させたみたいで』

『……いえ、お気になさらず』

『あの、あたしの世界では女からも普通に握手するので』

『いえ、大丈夫ですので』

言えば言っただけ彼は困っていくようだ。ルイスがくくつと笑いを洩らす。

『笑ってないで、ルイスもフォローしてください』

『しなくても大丈夫だろう』

『そうじゃなくて。？若様？だったら、きちんと仕切って下さって言ってるんです』

『彼に罰を与えればいいのか？』

どうしてそう極論に走る。

元々忍耐強いほうではないあたしは、息をひとつついて傍らの男に宣言した。

『シグバルトさん。あたしは優雅に慎ましく振舞える人間じゃありません。女ですけど、あなたの知ってる女性像とは天と地ほどかけ離れているので、普通の扱いをして欲しいです』

『普通の、でございますか？』

陰になつてゐる表情が再び戸惑う。あたしの言う普通が、こちらの普通と違ふのだ。

『あまりかしまつた態度でなくていいことです。それに、あたしはこの国の人間じゃないのでマナーが分かりません。失礼になつても、見逃してもらえますか？』

『それは当然承知いたしております』

『それから、習慣やマナーやすることが間違つていたら、その場ですぐに教えてください。間違つてゐることを間違つたまま覚えるのは嫌です。』

言つてくれないと分かりませんから、きちんと教えてください

アルノさんも』

ちらりと、正面の男にも一瞥をくれる。

『ルイスもお願ひします。恥ずかしい思いをするのは嫌ですから』

『君は客人だ。さつきも言ったが、マナーを気にする必要はない。知らなくて当然なのだから、恥ずかしく思ふ必要もないんだ。堂々としていればいい』

『……あなたは知らない場所へ突然来て、知らない言葉と知らない環境と知らない習慣に晒されて、それでも普通に堂々としていられるんですか？』

腹立たしくあたしは詰問した。瞬時に、なごやかだった食事の席が張り詰めた空気を纏う。

崩壊していく感情を静めるように、あたしはまた、ふう、と息を洩らした。無作法にテーブルに両肘をついて、額に手を当てる。

『すみません。少し疲れていて』

『もう休むか？』

休む。休みたい。

靴も靴下も脱いでお風呂に入って、清潔な寝巻きに着替えて、テレビのついたリビングでまったり寝転びたい。

だけど　それが、ここでどこまで叶えられるのか。

絶望的な気がして、あたしの目につつすら涙が浮かんだ。

『シグ、彼女を部屋に』

『……いえ、食べます。せつかく作ってもらったんだし、冷えたらもったいないですから』

あたしはナイフとフォークを手に取った。緊張の加減がおかしくなったのか、手が震える。

ゼラチン状になった肉がなかなか切れない。かちやかちやと耳障りな音を立てて、あたしは敵（かたき）のようにカケロの肉に挑んだ。

切れ味の悪いナイフに苛立ち、涙が零れそうになる。あたしは諦め、フォークを突き立てた。ゴムのような弾力の肉が、にゆるりと滑る。

肉にまで馬鹿にされてるんだ、あたし。

これじゃ運命に見放されてるって思ってしまったても、嘘じゃないかもしれない。

『マキさま。お皿をお取り替えしましょう』

見かねたシグバルトがそっと声をかけてくれる。

あたしは首を振って、頑固に肉にフォークを何度もがんがん打ちつけた。そして何度目かの挑戦で、カケロの肉の切れ端は、見事に皿から飛び出て、ぽとりと床に落ちた。

限界だった。

あたしの中で何かが切れる。涙が溢れた。

ぐらりと視界が揺れ、そのまま横向きに、体が何も無い空間に落ちていく。

あたしは人生で初めて、気を失った。

5

「……何をしたのです、あなたは」

「普通に接しただけだ。最初に会った時は、彼女は冷静だったし」

「状況が呑み込めていなかったただけですよ！ どう見ても、まだコリアミスさまとそう変わらないくらいの少女です。いくら の

とはいえ、まずは体調や精神面を気遣うのが当然でしょう！ 異界から来たんですよ！」

「そう怒られても。私も異界の人間など初めてだし」

「怒ります。まあ、あなたにきちんとした女性の扱いを求めた私が愚かでしたが」

「女性と手もつなげない男が何を言う」

「女嫌いよりましです。あ、失礼しました。あなたの場合は？ 人間嫌い？ でしたね」

「侍従とも思えないな」

「侍従だからこそ、忌憚無い意見を進言しているのです。ヤムート医師はどちらですか？」

「診察をしたが、どこも悪くないというので帰らせた」

長い溜息がひとつ。

「……どうしてあなたはそうなのです。これから病状が出るかもしれないとは思わなかったんですか？」

「彼女の気は弱まっているが、安定している。病気ではないよ。異界の人間の身体の造りは、詳しく知らないが」

「分かっているのですか？ 彼女は大切な」

「……うるさい……」

間近で聞こえる、内緒話とも思えない男たちの会話に、耐えかねてあたしは呟いた。

内容はおそらくあたしのこと、もうしばらく聞いていたい気もしたけど、指環のせいで翻訳機能がかかっているから、頭に響いて眠れない。

気付いて、ルイスらしき人物が近寄ってくる。

『目が覚めたか？』

『もうちよつと寝てたいけど……こじ、どこ？』

『客室のベッドだ。狭くてすまない』

あたしはまだ半分目が開かないまま、右手を伸ばして今寝転がっている場所の幅を調べた。

きつちり片腕を伸ばして指先が出るくらい。

『……充分広いです。あと、お風呂に入って服を着替えたいけど、でき、ますか……？』

『湯浴みの準備をさせよう。着替えは用意した』

湯浴み。

バスタブと石鹸と熱いお湯を期待するけど、そこに辿り着きたくても、身体が重くて動かない。

まだ完全に目覚めきらないせいか、甘えが洩れる。

『疲れた。起きれない……しんどい』

我ながらどつちなんだと思う。

風呂に入りたいのか寝たいのか　いや、我儘が言いたいだけだ、たぶん。

『私がお連れいたしましょう、マキさま』

シグバルトがルイスの横から顔を出す。

背中に手を回され、寝惚けていたあたしの頭に？お連れ？される意味がやっと通じる。慌てて起き上がった。

『じ、自分で歩きますからっ』

『ご無理なさらさずとも』

『こ、子どもじゃないんで』

どうやら運動靴を履いたまま寝かされていたらしい。ベッドから立ったあたしは、また目の前が暗転するのを感じた。

「……うわあ。立ち眩み」

「大丈夫か？」

近くの男の腕にすぎる。逞しい腕の温もりに、自分の指先がどれほど冷えていたか思い知った。

「ちよつと、くらつときた、だけ」

「顔色がよくない。無理をせずにシグに運んでもらえ」

心揺れる申し出だけど、恥ずかしいし重いと思われたくないし迷惑かけたくないしで、あたしは頷くのを踏み止まった。

「じゃあ、手に掴まらせてもらってもいいですか？」

「どうぞ」

紳士的にシグバルトが右手を差し出す。あたしは不恰好にそれを上から掴んだ。上品に載せるだけでは、体を支えきれそうにない。

しっかり支えてもらって歩き出したのに、第一歩で毛足の長い絨毯にスニーカーのゴム底が引っかかって、つんのめる。

「大丈夫ですか」

「すみません。運動神経鈍くて」

謝るあたしの腰に突然、力強い何かが回され、ぶわつと体が浮き上がった。

「わ……っ！」

「このままでは夜が明ける。私が連れて行く」

ルイスの声が、有り得ない近さで聞こえる。

避けたつもりのお姫様抱っこ、という状態だと気付き、恥ずかしくてあたしの顔に一気に血の気が昇った。

「あの……ちよつとっ」

「君が無理をすると、この家の主人である私にも迷惑がかかる。いいいな？」

ちつとも良くないが、頷くしかない。

ルイスに掴まるのも申し訳ないので、あたしは所在無く胸の前で両手を小さく縮こませた。

「シグ。アルノとミルテに湯浴みの支度を」

『承知いたしました、若様』

敬礼のように右腕を胸の下、左腕を後ろに回して頭を下げ、シグバルトが出て行く。

浴室は、部屋の片隅にカーテンで仕切られた場所だった。タイル貼りの小部屋だ。少し凹んだ場所に作られていて、カーテンなしでも入口からすぐには目に入らない。

その横の小さな腰掛けに、ルイスはあたしを下ろした。

『……ありがとう』

『何度も言うが、君は客人だ。望んでここを選んだわけではないかもしれないが、私の責任においてできるだけのことにはする。して欲しいことがあつたら言え』

『すみません。なるべく迷惑かけないようにします』

ルイスはなぜか溜息を吐くと、ほつれた金髪をやや乱暴にかきあげる。

『君をもてなすのは光栄なことだ。アクイナスの民も誇りに思うだろう。だから……あまり謝るな。』

君に窮屈な思いをさせているのは、こちらの配慮不足だと思えてならない』

すみません、とまた口を突いて出そうになり、あたしは呑み込んだ。

彼の言葉が耳に引っかかる。

責任、光栄、誇り、アクイナスの民。

支配階級の人間が口にする言葉というだけではない、重い響き。

『あの……伝説のこと、なんですけど』
恐る恐るあたしは尋ねた。

『異界から来た人は、ここでは何と言われているんですか？』

『……渡り人（わたりびと）と呼ばれている』

『その渡り人は……何をしに、来るんですか？』

ルイスは、ためらうように口をつぐんだ。

『長い話になる。明日にしよう』

『いえ。簡単にでも教えて下さい。それを聞いて明日倒れるくらいなら、今日まとめてショックを受けたほうがましです』

座ったあたしを見下ろすルイスは、ものすごく複雑な瞳をしていた。

『渡り人は、天の水底（みなそこ）を開ける、水門の鍵を手にするといわれる』

『鍵、ですか』

くり返して、あたしは呟いた。

少し黙って、動きの悪い脳にそのキーワードを浸してみる。

『それは……この世界にとっていいこと、ですか？』

『おそらくは』

『悪いこともある、んですか？』

『テールは今、急速に乾いてきている。もし水門が開くことで雨が降れば、大地は潤い、人々は渴きから救われるだろう。だが、それを実際体現した者は、私の知る中にはいない』

『雨が降ったら、この国の人は助かるんですね？』

『ああ』

『ルイスも？』

『……ああ、そうだ』

そっか、とあたしは力なく頷いた。

少なくとも、異界から来たということと迫害されたり、白い眼で見られることはなさそうだ。助けてくれた人にも迷惑はかかからないようだし　伝説の役割を期待されると困るが。

『でも、来るなって言われなくて良かったよ』

ぼつんと本音が洩れる。

しんどくて、体も心も泥みたいで胃も頭も痛くて、これで来て欲しくなかったと言われたら、正直立ち直れなかった。

『良かった……それだけ分かればいいや、もう』

『マキ？』

『ありがと、ルイス。今日はダメダメだけど、明日はもうちょっと』

頑張るから』

何を、と言われても分からない。すっかりしなきゃと思うだけだ。ルイスが何か言おうとした時、二人の侍女を連れたシグバルトが戻ってきた。熱い湯気のたつ甕（かめ）を両手に提げて。

男二人を部屋から追い出し、ばたばたと、あたしの初めての湯浴みの支度が始まった。

湯浴みは思ったより快適だった。カーテンで仕切った部屋がもうもうと蒸気で白くなる中、大きな盥（たらい）に張ったお湯に腰から下を沈める。

石鹸もボディークリームもシャンプーもないけど、香りのする葉っぱを束ねたもので体を擦るとささやかな泡がたち、肌もすつきりした。元々日焼け止めくらいしか塗っていないから、これで充分だ。ついでに髪も洗う。さすがにそこまですると、湯の量に物足りなさを感じた。

お湯、きつと貴重なんだよね。

さつき、ルイスから聞いた話を思い出す。庭には木が茂っていたが、それでもこの世界は水に飢えているのだ。

あたしは、葉っぱの汁でやや白濁したお湯を手で掬った。

贅沢すぎたかと後悔が掠めるけど、もう遅い。それに、お湯を浴びないと、本当に正気に返れない気がした。

汚れも厭な予感も哀しい気持ちも、苛々も涙も全部洗い流さないと、明日きちんとルイスたちに会えないような　もう戻れないかも知れない、あっちの世界の親や友人達にも会えなくなる。そんな気が。

あたしは振り切るように、乱暴に何度も顔を洗った。

半身浴を終えると、あたしは、タオルの代わりに用意された切りっぱなしの無地の布で体を拭いた。吸い取りが悪いけど、我慢するしかない。

ドライヤーもないので、髪から垂れる雫に後ろめたさを感じながら、体を拭いた布で髪を巻いた。短いから、こうしていればそのう

ち乾く。

着るものが見当たらなかったので、カーテンの向こうに顔を突き出して呼びかける。すると外で待っていたアルノが、着替えを差し出してくれた。

下着は、なんだか短パンに似たざっくりした形のもの。ブラジャーはないみたいで、代わりとみられる腹巻状の布に紐がついたものを摘みあげ、あたしは眉をひそめた。

「どうやって着るんだ、これ。」

しばらく一人で奮闘してみたが、紐が絡まってどうにもならない。仕方なく、アルノとミルテに助けを求めた。

知らない人に裸を見られるのは恥ずかしいけど、アルノはおばあちゃんのような雰囲気だし、もう一人世話に来てくれたミルテは少し年上くらい。そんなにこだわらなくても大丈夫そうだ。二人とも気にしてないし。

アルノの器用な指先が、ブラジャー代わりの腹巻モドキを胸の辺りに巻きつけ、紐で下から縛って固定していく。肩紐がないので少々心許ないけど、割合しつかりしたホールド力だ。

寝巻きは前合わせで、袖の短い浴衣に紐をつけたような雰囲気。その下に長いズボンを履く。ズボンは履いても履かなくてもいいと言われたけど、寝相の悪さは自覚している。

すっかり異界の服に身を包んだあたしは、肌に馴染むその生地のやさしさに、ほっと気分が落ち着くのを感じた。

「あの、片付けは……」

「お気になさらず、マキさまはお休みください」

「すみません。じゃあ、お願いします」

「気になるようでしたら、明日の朝片付けにまいます」

「あ、いえ。あたしはどちらでも……アルノさんとミルテさんの仕事がいやらしいようではないですか」

「では、少し出入りをいたしますね。お邪魔であれば遠慮なくお申し付け下さい」

『じゃあ、お先に。お休みなさい』

あたしが頭を下げると、可笑しかったのかミルテが少し微笑んだ。黒髪の巻き毛を編んで結った明るそうな女性。打ち解けた話ができたら楽しそうだと勝手に思う。

働き者の二人の侍女が手早く盥や湯壺を片付ける物音を聞きながら、あたしはベッドに横たわるなり、あっという間に眠りに落ちた。

1 - 6 (後書き)

第1章終了。次章からは別の子の視点に変わります。

第2章 曲がり角 理緒子の現実

1

わたしは目を覚ました。

香を焚き染めたような、淡い匂いと煙が鼻をかすめる。どこなく懐かしい、お線香に似た香り。

鎌倉のおばあちゃんみたい……。

ぼんやり思う。違うことは分かっているけど、そう思うことでこの不安から逃げたかった。

不安。

そうだ。わたし高遠理緒子は、今まったく知らない場所に居た。十六年間生きてきたのとは確実に、言葉も国も、たぶん世界も違う異質な場所に。

わたしは寝転がったまま、痛いくらいにぎゅっと眼を瞑った。

どうして……？

どこがいけなかったのだろうか？ どこで間違えてしまったのだろうか？

さっきから頭の中でくり返される問い。夢の中でも、ずっと。

数時間前まで、わたしは普通の高校生だった。部活がなくて、春から通ってる塾に行つて家に帰る途中のこと。いつものように最寄の駅で降りて、歩いて五分の家に辿り着く直前だった。

年頃なんだから夜道は気をつけなさいと母親がいつも言うから、人通りの少ない駅裏に入った途端、急に夜が進んだ気がして少し怖くなった。

でも街灯はついていて、同じ方向に帰るサラリーマンの姿もちらほら見える。大丈夫だと自分に言い聞かせながら、わたしは足を速めた。まだ十月なのに、震えるくらい寒かったせいもあると思う。薄手の綿のマフラーをきゅっと巻きしめ、足早に曲がり角を左に

折れる。

瞬間、車のヘッドライトより数倍も強烈な閃光が、かあつとわたしを照らした。目の前が真っ白になる。足元が浮く。

気がつくとなわたしは 見たこともない荒野にいた。

どこなんだろう、ここ。

普段と違う場所にいるらしいと悟ったわたしの頭に、トンネルを抜けると、なんていう有名な小説の書き出しがよぎった。本当はそんな余裕ないのに。

住宅地の道路から突然荒野に現われたわたしは、最初死んだのかと思っただ。

直前に覚えているのは、視界を埋め尽くすまばゆい光。だから、車にでも引かれて死後の世界にでも来たのかと考えたのだ。それくらい景色は全く変わっていて、まばらな草の生えた岩と石のごつごつした大地が目の前に広がっていた。

ふり仰ぐと、爪先まで染まりそうな一面の星空。

そこにはちょうど月くらいの星が出ていた。でも、月じゃない。

白と青と淡いピンクがあった、三つの大きな丸い星。家族みたいに寄り添って浮かんでいる。

パパ……ママ。

高2にもなつて子供じみた呼び方は恥ずかしくて、みんなの前では違う呼び方をしていた。だけど、こっちのほうがじっくりくる。

わたしの両親。大事な家族。

わたしが帰って来ないことを知って、怒ってるだろうか。哀しんでいるだろうか。

鞆に入れていた携帯を取り出してみるけど、やっぱり圏外。

わたし、本当に死んだのかもしれない。

そう思っただけを引っぱってみる。痛い。それにさっきから風

が吹き抜けて、ものすごく寒い。

じつとしていられなくて、わたしは歩き出した。少しでも体を動かさないと、芯まで凍えてしまいそうだった。

どの方角へ行ったらいいのかわからなかったけど、後ろ側には岩が森みたいな黒々とした影が横たわっていて、とりあえず視界の開けているほうへ進んだ。

ふと、大地を叩くようなリズムカルな音が聞こえる。

わたしはきよきよと辺りを見回して、夜の闇の中を動く影を見つけた。次第に大きくなる。こっちへやってくる。

人だ！

どんな人なのかまったく考えず、わたしは咄嗟に大きく手を振った。

「おーいっ！」

我ながらベタな呼び方。でも、他に思いつかなかった。

思えば、随分わたしも不注意だったんだ。

だって冷静に考えてみれば、地を蹴るような足音は人じゃないってすぐに分かったし、近付いてくるシルエツトでその人の服が普通じゃないって気がつくはず。

だけどわたしはその時、何も思い至らないまま、やってきたその影に喜んで近寄っていった。そして凍りついた。

荒々しく息を吐く巨大な動物と、それに跨る大きな男。鈍く光る甲冑に剣。ひるがえるマント。

助けてくれませんか、と言う声を悲鳴とともに飲み下す。その人が喋りかけた。

「xxxxx？」

聞いたことのない言語。わたしはもう一度足元が浮く感覚と同時に、意識を失った。

なんでこうなっちゃったんだろう……。

くり返しくり返し投げかけても、答えられることのない問い。

涙が流れる。怖いというより、受け止められなくてぐちゃぐちゃの気分だ。

不安、疑問、苛立ち、納得できない思い。そんなものが、心の許容量を超えて溢れていた。

潤んで靄がかかった目を開くと、淡いオレンジの光に照らし出される白い壁、板張りの床と絨毯が視界に入る。今いるのは天蓋のついた一人用のベッドみたいだ。

マフラーは外されて、右手にある窓辺の机に畳んで置いてある。靴も脱がされて たぶん、どこかにある。

靴は見当たらない。気を失った時、どこかに落としたのかもしれない。布団も被されていた毛布も手触りがよくて、どこにも危害を加えられているようにはなかった。

ここが、自分の家のリビングよりも広い一室であることは分かる。あの時出会った人が、ここまで運んでくれたのかもしれない。だけど、それ以外は何一つ分からない。

ここはどこか。いつなのか。なぜ、ここにいるのか。

こつこつ、と控えめにドアが叩かれて、女の人が顔を覗かせた。

長い髪をきつくポニーテールにした、二十代くらいの女性。薄手のドレスみたいな服を着ている。西洋風というより、どこかオリエンタルな雰囲気。髪と目が黒くて、肌も浅黒い。

女の方はわたしが目を覚ましているのに気がついて、にこりと笑い、頭を下げた。そのまま開放したドアの向こうに退る。

なんだろう？

不思議に思っていると、その人はまた戻ってきて、部屋に一本だけ灯されていた蝋燭を角の透明な筒に移した。

途端、光が走って、四隅の燭台と天井のシャンデリアが煌々と明かりを灯し、まぶしいくらいに部屋を照らした。思わず眼が眩む。

電気、じゃないよね……？

知らない文明なのだと、心のどこかで不安が囁く。それでも、明るい室内に気分も少し上向きになった。

ドアから大股に別の人が入ってくる。入れ代わりに、女の人が頭を下げて出て行った。

あ……。

新しく現われた人を見て、わたしは気付いた。この人は、わたしが荒野で出会った人だ。

その時は暗くて顔も何も分からなかったけど、声と全体的な雰囲気であんなに思っ

青いくらい艶のある黒髪を短くして、褐色の肌。切れ長の黒い瞳。背がすごく高くてがっちりした体格をしてるから、軍服みたいな衣装とマントを着られると威圧感でこちらが竦んでしまう。

「xxxx？」

呼びかけられ、わたしはびくつとした。

ただの質問とは思うけど、言葉が分からないのと初対面の男の人と二人きりという状況に、ベッドの片隅に身を引く。

その人は少し困った顔をして、手に持っていた水の入ったグラスを差し出した。飲むか、というふうに首を傾げる。

わたしは、ふるふると首を振った。喉が渴いているかどうかなんて、感じる余裕もないのに。

その人は、グラスを近くの丸テーブルに置くと、しばらく悩んでいるようだった。

困らせちゃったかな……。

突然現われて倒れて、言葉も通じないのだ。向こうもわたしと同じくらい、困惑しているのかもしれない。そう思ったわたしは、少

し勇気を出してみた。

「あの……ここは、どこですか？」

「ここ、とベッドを指で差す。まだ不安だから、毛布で半分体を包んだまま。」

その人は、同じように床を指差して答えた。

「イエド。×××……×××イエド」

いえど、という言葉が二回聞こえる。地名なのかもしれない。わたしを指差して、

「ヴィ イエ カムポ ダ ムシャザ プロキシマ イエド」

ヴィ、が多分わたし。あとは分からない。頭を横に振る。

「キオ ヴィ ナーモ？」

首を傾げる。いくら聞かれても、頭の中はクエスチョンだらけだ。

「ミ ナーム イエ タキトウス」

自分を指差して、同じ言葉を繰り返す。名前を覚えてくれているみたいだ。

「タキトウス」

「たき……とす？」

上手く発音できないでいると、その人がかすかに笑った。もう一度自分を指して、

「タク」

「たく？」

馴染みのある音。日本人っぽい名前だ。

タク、と呼ぶと、その人はまた嬉しそうに笑った。笑うと最初の恐い雰囲気は全然なくなつて、とても優しいお兄さんって感じになる。

わたしはやつと安心して、胸に人差し指を当てて自分の名前を名乗った。

「理緒子。高遠理緒子」

「リヨージ？」

「り・お・じ」

「リオコ？」

頷くと、彼は交互に自分とわたしを指差しながら、タク、リオコと呼んだ。

意思の疎通ができるって、こんなに嬉しいことと思わなかった。わたしはほっとした途端、痛いほど喉がからからになっていることに気がついた。

「あの……お水、もらっていいですか？」

彼の傍のグラスを指差す。タクはにこりと微笑んで、ベッドまでグラスを持ってきてくれた。

知らない土地の水はお腹を壊すと聞いたけど、我儘は言っていない。わたしはグラスを受け取って、口をつけた。

常温の水。でもなにか爽やかな　レモンに似た香りがする。タクにじつと見られているのが恥ずかしかったけど、美味しくて一気に飲み干した。

「キオム　ウヌ　アクヴオ？」

もう一杯いるか、というくらいなのだろう。わたしはいらなにかぶりを振って、グラスを彼に返した。

タクはそれを窓辺の机に置くと、椅子を引き寄せてベッドの近くに座った。上着の内側から紙を取り出し、わたしの前に広げる。

見たこともない地図と文字。太くてごつごつした指が、王冠みたいなマークを差す。

「カステーロ　イエド。ヴィ　イエ　シエーロ」

今いる場所、なんだろうか。自分を指差し、またわたしを指差して、少し離れた何もない場所を示す。

「ミ　トロヴィス　ヴィ　シエーロ　ダムシャズ」

なんだか国境のようなところに、わたしはいたらしい。それを彼がここまで連れて来てくれた、というところ。身振り手振りを加えて分かったのはそんなことくらい。

「キエル　ヴェニス　ヴィ　ダ　シエーロ？」

地図を何度も指差される。なぜここにいたの？どうやってきたの

？ そんな質問、こっちがしたいくらいなのに。

わたしが黙ってうつむいていると、タクが心配そうに覗き込んだ。
「マルティーム」

まるでいーも、と語調を落とした低い声が繰り返す。

心配するな、大丈夫だともいうように、黒い瞳が微笑んでいた。
左目の上に白い傷があるけど、その笑顔はあくまで優しい。

わたしのほうに右手の平を差し出す。握手かと思つて手を重ねると、持ち上げられて 手の甲にキスされた。

「ミ ジュエリ ケエ ミ ヴィ デイフェニトウ アル エタル
ネル」

まるで、それはお姫様に忠誠を誓う騎士のようで。

わたしは一瞬どういう状況かも忘れて、真っ赤にのぼせあがった。

誠実そうなタクの存在で、わたしは一気に今いる現実に馴染みはじめた。それでも、ほとんど言葉は通じないから、大袈裟なジェスチャーと単語の繰り返し。

それによると、彼はここへ誰かを連れて来たいらしい。脈をとるような格好をするから、お医者さんかもしれない。わたしは頷いた。部屋にやってきたのは、小柄で頭の薄い、いかにもお医者さんぽい髭を生やしたお爺さんだった。その後ろから、ボブヘアの小柄な女の人がついてくる。

「ラクエル！」

タクが声をあげ、女の人に駆け寄った。というか、まあまあ距離があっただけで、足が長いから数歩で辿り着く。

どうやら知り合いのようで、真剣な顔で早口で会話している。入り込めないわたしは、黙ってベッドの上で医師の診察を受けた。

お爺さん医者は仰々しいくらい深々と礼をすると、わたしの手首を取り、目や口の中などを診て、また礼をして退る。

タクに何か言っていたけど、彼の表情がやや和んだのを見て、悪いことはなかったのだと察した。

さつきからわたし、タクの様子はつきり気にしてるな……。

知り合いが少ないのだから仕方ないのだけど、わたしにしては珍しい。

正直、男の人では先生でもこんなに親近感を覚えたことはなかった。中・高と女子だらけの生活を送っているから、男の人にあまり免疫がないのだ。一番よく話す異性が父親、なんて恥ずかしくて友達には言えない。

医者が部屋を出て行ったあとで、タクはわたしに、ボブヘアの女

の人を紹介した。

「リオコ、シ イェ ラクエル」

ラクエルという名前らしい女の人は、ボブの黒髪を外跳ねにしていて勝気そうな感じだ。タクとは違った雰囲気、縦襟の上着に、短いマントを羽織っている。

わたしに右手を差し伸べてきたので、まさかまたキスされるわけじゃないだろうと思いつつ、その手を取った。すると、

『初めまして、リオコさま』

不思議な声が頭の中で、うわん、と鳴った。

例えて言うなら、イヤホンなしにいきなり音だけが飛び込んできた感じ。

慣れない感覚にぼーっとしていると、次の言葉が聞こえた。

『わたしの名前は、ラクエル・メイサ。イエドの一級魔法士です。』

今は送心術という魔法を使って、あなたの心に声を送っています』

「は、はい」

『体の一部を接触することで声を送ることが可能ですので、しばらくわたしがお傍にいて、お話をさせて頂いてもよろしいですか？』

やけに丁寧な言葉遣い。他にどうしようもないので、頭を縦に振る。

「あの……ここはどこ、ですか？」

『残念ながら、これはあなたの心の声を聴いたり、言葉を理解できる術ではないのです。』

できるだけ分かり易いように説明をいたしますので、分からない時は首を振るなりして頂いてよろしいですか？』

頷く。ラクエルは、まだベッドに長座したままのわたしの枕元に腰を下ろし、右手を両手で包むようにして話しかけた。

『ここは、マフォーランド王国の東の都イエド。その城にあなたは居ます。彼は、タキトウス・アルディ・ムシャザ將軍 イエド近衛隊の隊長です。』

その彼が夜警に見回っていたところ、イエドの外れ、ムシャズ近

くの荒野であなたを見つけました』

タクの苗字はムシャザ。そして將軍らしい。わたしは脳内メモに書き込んだ。

『あなたは異界からいらしたのですね？』

「え……？」

驚いた。質問ではなく確認だ。

たしかに高校のセーラー服を着ているわたしは、この世界の人は違っつて思われても仕方ないけど。

『実はこのマフォーランドでは、百五十年に一度、三つの月の合の日に異界より渡り人が訪れると言われています』

渡り人。わたしはそんな伝説の人間になってしまったの？

驚きすぎて何がなんだか分からないわたしに、ラクエルはゆっくりと、この国の伝説を教えてくださいました。

昔、大賢者という人が、百五十年に一度の乾期を予言していたこと。

それが今、現実となりそうに乾燥してきていること。

それを救えるのは、異界から訪れる渡り人（乙女、とも言っていた）で、天の水底と呼ばれる水門の鍵を開けることができると言われていること。

あくまでも伝説は伝説だとラクエルは強調したけど、そんな重要なことのためにわたしがここにいるなんて信じられなかった。

シヨックのあまり茫然とするわたしに、ラクエルは詫びるように笑いかけた。

『戸惑われるのは当然です。われわれですら、本当に異界から人が訪れるなどと思ってはいなかったのですから。ですが、あなたにお会いできて心から喜んでいきます。歓迎いたします、異界の乙女よ』

歓迎されてもどうしようもない。

いろいろ疑問はあったのに、聞けない自分が辛かった。少し一人になっつて考えたかった。

『突然のことで、今宵はお疲れになっつていらっしやるでしょう。お

食事も用意してございますが、どうなさいますか？」

食事なんて、とても食べる気分じゃない。わたしは情けなくもまた浮かんできた涙を指で拭い、首を横に振った。

目を潤ませるわたしに、心配そうな顔をしてタクが傍に来る。

「リオコ、ネ プロウリ」

『泣かないでください。わたしも彼も、あなたの味方です。気持ちが悪くなるのであれば、なんでもお持ちしましょう。遠慮なさらず、おっしゃってください』

わたしは少し眠りたいと、身振りで伝えた。

タクが枕を整えてくれ、ラクエルが横になったわたしにそつと毛布を被せる。ラクエルがまた手を握って、心で話しかけてきた。

『灯りは点けておきましょうか？』

母親のような問いかけに、わたしは無言でこっくりと頷く。

『何かありましたら、ドアを叩いてください。すぐに、わたしは將軍に伝わります。』

見知らぬ人と顔を合わせるかもしれませんが、彼らは皆あなたの味方です。心配はいりません。いいですね？」

まるで小さな子どもにでも言い聞かせるようにそう語りかけ、わずかに部屋の明かりを弱めて、異界の男女は出て行った。

いろんなことを考えているうちに、いつの間にかまた眠っていたらしい。

眼を覚ましたわたしは、カーテンの隙間から淡い光が差し込んでいることに気が付いた。代わりに部屋の明かりは、かすかに香りを残して小さく消えかけている。

ベッドの下を探ると、履いていた革靴が見つかった。それを足先に引っ掛け、窓辺の帳をそっと引き開ける。

薔薇色の空。見事な朝焼けだ。時間は分からないけど、夜が明けたばかりみたい。

寝た時間はそんなにはずなのに、緊張のせいか目が冴えている。見ると、窓際の机に置かれたグラスには、なみなみと水が満たされていた。たぶん、タクの心遣い。

彼の優しさに、ちよつと頬が緩む。グラスを両手にとって、少しだけ飲んだ。

異界。渡り人。伝説。水門の鍵。

昨日聞いたばかりのキーワードが頭をめぐる。こちらの言葉も通じれば、もつときちんと聞けたのに。

でも、話せないのだから仕方ない。ラクエルの魔法で、向こうの言葉が分かるだけでもいいと思わないといけないんだ、きつと。

わたしはグラスを置き、部屋の中を見て回ることにした。泣きながら寝たので、顔がごわごわして洗いたかったこともあった。

部屋は落ち着いた色味の調度品でまとめられていて、天井は高くて開放的。壁は石だけど太い木の梁が渡りあって、なんとなく目になじんだ雰囲気だ。

洗面所、ないのかな……。

ベッドの奥は一段低くなってソファが置いてあり、リビングのよ
うな感じだけど他に部屋はない。片隅に大きなタペストリで区切ら
れた空間があるけど、水道が繋がっているようではなかった。

仕方なく壁にかかっていた姿見の前に立ち、ほどけかけていたセ
ーラー服のリボンを結び直して、皺の寄った制服を気休めに引っぱ
る。

癖のある焦げ茶色の髪は腰がなくて、手櫛で整えると、すぐにい
つものように肩のあたりでくるくるとまとまった。失くしてしまっ
た鞆があれば、眉を描き直したりできるのに、今はもうほぼすっぴ
んだ。

だけど今は、お化粧よりも重大な問題がある。

トイレとかお風呂って、どうすればいいんだろう。

基本的な生活が分からなくて途方にくれてしまふ。考えていると、
部屋のドアがノックされた。

「はい」

「リオコ？」

タクが顔を出す。ベッドを指差し、寝ていなくていいのかと目顔
で聞いてくる。

「ううん、大丈夫。あの……顔、洗いたいんだけど」

洗う、と言いながら、水を顔にかける動作を繰り返す。分かった
らしく、タクが部屋の外に手招きをした。

絨毯の敷かれた立派な廊下。部屋を出たすぐの横の壁には、最初
見た女の人と同じような服装をした人が三人、その向こうには鎧を
着た兵士みたいな人が等間隔に並んで立っている。

早朝のせいかな、壁に掛けられた灯はまだ赫々（あかあか）と燃え
て、廊下の奥は恐いくらい静まり返っていた。

みんな、昨日の夜からずっとこうしてるのかな？

そういえば、タクも寝ていないような雰囲気だ。

タクは壁際に立つ女性の一人に声をかけ、彼女についていくよう
にわたしを促す。

「タクは？」

「シ インフェリ トウエ バニ。リオコ、イリール」
どうやら彼はここに残るみたい。

知らない人と二人きりはちよつと嫌だな。

そう思っていると、顔に出たのか、タクが困ったように頷いた。
わたしを包むように背中の手を回し、左手を差し出す。わたしがその手に手を重ねると、にこりと笑ってエスコートしてくれた。

うわ。なんか、どきどきする……。

わたしは赤くなる頬を気付かれないように祈りつつ、白い布で覆った籠を持って先導する女性の後ろをタクと一緒にいった。

近くの階段を下りると、なんだか石造りの洞窟みたいな場所に出る。明かりはついていていけど、薄暗い。やっぱりタクについてきてもらってよかった。

隣を見上げると、安心させるように微笑まれた。この笑顔って、本当に薬みたい。心が楽になる。

洞窟に足を踏み入れた途端、なんだか前から来る空気が熱くなった気がした。床や壁が、水音がするくらい湿り気を帯びている。道の行き止まりはやや広い円形の空間で、小高い岩が丸く積まれている。

タクがそれを指差して、バニ、と教える。

わたしはようやく、目の前に現われたその正体を悟った。

「お風呂だ……」

しかも、この匂いは温泉。一気に嬉しくなる。

うそ、すごい。異世界に来て温泉に入れるなんて……。

タクが身振りで、外で待っていると告げて出て行く。

そうか、タクが最初ついてこようとしなかったのは？女湯？だったからかもしれない。わたしは大胆なことを言ってしまったと、少し恥ずかしくなった。

侍女らしい女の人が、持って来た籠のひとつを差し出し、脱いだ服を入れるように示す。中にはタオルと湯桶と石鹸。準備万端だ。

その上に重ねてあるもうひとつの籠には、見たこともない白い服が入っていた。これに着替えるっていうことかもしれない。

侍女の人が背を向けてくれ、わたしは急いで服を脱いだ。

湯船は、一見岩を積み上げただけのように見えただけ、中は木製の部屋の外まで続いている樋（とい）からお湯が流れ続けて、湯船から溢れている。世界が乾燥していると聞いたわりに、すごく贅沢だ。お風呂に入りたくて仕方なかったわたしは、用意してもらったお風呂セットをもち、樋から流れるお湯で掛け湯して、湯船に足を浸した。

もうもうと湯気がたつてすごく熱そうだったけど、意外にそうでもなくて、少しぬるめの三十九度くらい。体感温度だけだ。

透明なややとろりとしたお湯に肩まで浸かると、もう最高だった。どこかのおじさんみたいに、「うへえ〜極楽極楽」なんて声が出そうになる。

やっぱり温泉最高お〜。

すぐ傍に侍女の人がいるのが気になるけど、そちらを見ないようにしてお風呂を堪能する。

足を伸ばしても全然余裕なのが嬉しい。背は高いほうじゃないけど、マンション暮らしだからお風呂はせまめなんだ。いつも足を折って入ってる。

「ふうう、いい気持ちいい」

わたしは体が完全に温まってから一度出て、湯船の陰で体と髪を洗い、もう一度浸かった。岩屋の造りが秘境の温泉みたいで心地よくて、のぼせる寸前まで湯船から離れられなかった。

お風呂大好き。女の子に産まれて良かった、としみじみしてしまふ。

ちょっと長湯してしまっただけど、侍女の人は辛抱強く待っていてくれた。きつと待つのに慣れてるんだらう。ちょっとしたことでおろおろしてしまうわたしには、向かない職業だ。

籠の中には、服っぽいものの他に下着みたいなものも入っていた。

体を拭き、マイクロミニの短パンを履く。ブラジャーはなくて肩紐のないキャミソールみたいな感じ。頭から被つてもごもごしている。侍女の人が来て、フロント部分の紐を体に沿うように締めてくれた。

「恥ずかしかつたけど優しそうな人でよかった。拭いただけの髪から、雫がぼたりと落ちる。」

「あ、ごめんなさい」

慌てて手にしたタオルで、侍女の人の腕や肩を拭く。その人は少し驚いてにこりと笑い、わたしの髪に新しいタオルを被せて丁寧に水分を取ってくれた。

「こんなに親切にしてもらえるのは、わたしを救いの主だと信じてるからなんだろうな、きつと。」

期待されても困るよ……。

「タクも同じなのかな。戸惑うけど、正直お姫様扱いはこそばゆくて嬉しい。女の子なら誰でもお姫様に憧れるものだから。」

「白いドレスは着心地のよいシルクかなにかで、すべすべとした質感。侍女の人があつちを引っぱって、こつちを引っぱってとすると胸元はふわりと、腰まではきゅつと締まって裾が広がるきれいなAラインのシルエットができる。すごく素敵。」

「その上に、マーガレットに似た袖だけの短い上着を羽織って出来上がり。足元はスリッパみたいな布製の靴を履いた。」

「わあ、本当にお姫様の気分。」

「侍女の人が、だいぶ乾いたわたしの髪を櫛でとかし、結ぼうとしてやめた。」

「そうなんだよね、わたしの髪って、本当に貧相なんだ。ブローして巻いてスプレーしても、夕方にはくたんとなる。いわゆる猫っ毛色はもともと目と同じ艶のあるダークブラウンで気に入っているけど、この髪質だけは悩みの種だ。」

「服装には似合わないぴったりした髪のまま、侍女の人に連れられてお風呂場を出る。出口には約束どおり、タクが待っていてくれた。」

その横にはボブヘアの魔法士、ラクエルの姿もある。

二人はわたしの格好を見て、目を丸くして微笑んでくれた。変な顔をされなくてよかった、と思っていると、ラクエルがやって来て、わたしの肩に手を置いた。

『ちよつと失礼しますね』

いくらか背の高い彼女は、頭の上からふつとわたしの髪に息を吹きかける。途端、ふわんとつむじ風みたいなものが舞い上がって、一瞬で髪の毛が乾いてしまった。

「うわ、すごおい」

『髪が濡れたままだと、風邪を引いてしまいますから』

ラクエルはそう言っ、て、手ぐしで髪を整えてくれた。兄弟はいないけど、そんなさり気ない気遣いがお姉さんができたみたいですごく安心する。

こつちの世界で出会った人がいい人で、本当によかった。

わたしは心からそう思った。

トイレのことは、そんなに心配いらなかった。部屋に戻る手前で、ラクエルが気を利かせて、小さな個室に案内してくれたのだ。

狭い室内の中央に、スイカくらいの大きさの白地に青の花柄の陶製の壺がひとつ。これが便座らしい。

蓋を開けると、一瞬昔のおばあちゃんちの？ぼつとん便所？を想像させる穴が見えてどきりとしたけど、まったく異臭はしない。むしろ、焚いてある柑橘系のなにかが清々しいくらいだ。

用を足して、籠に入ったちよつと危険なくらいの小さな紙で拭いて、それも穴に落としてお終い。音もほとんど立たない。

ラクエルに使い方だけ教わって一人で済ませたわたしは、傍にあった水入れの鉢で手を洗った。

入ってきたドアから出ようとする、内側のノブがない。ぎよつとしたわたしは、壁だと思っていた左の側面に丸いドアノブを見つけた。

あれ？

ドアを間違えたかとそちら側を開けると、見たことのある部屋の中に出る。ソファと、一段高くなった向こうに天蓋付のベッド。

これって……元の部屋だよな？ 外と繋がってたんだ。

ひよつとしたら、掃除の人が入ってくるドアだったのかもしれない。

ベッドのある部屋に戻ると、ラクエルとタクが立って待っていた。丸テーブルには、また新しいお水が置いてある。

タクは、どれだけわたしが喉が渴いているか思っているんだろう。でも、嬉しい。

ガラスの隣には、フルーツみたいなものが小さな器に入れてあつ

た。

どれも皮を剥いて切つてあるので、元がどんなものか想像できない。白いのと黄色いの。ラクエルを振り向くと、手を握って説明してくれた。

『白いものが、リグのシロップ漬け、黄色いものがベイワの実です。ベイワは採れたてですし、どちらも甘いですよ』

添えられている小さな二又のフォークで差して、リグを食べてみた。梨より柔らかくて甘い。ベイワは繊維質で、柿みたいな感じだ。どちらも美味しかった。

甘いものが嬉しくてにこにこ食べていると、見守る二人も嬉しそうになった。

タクが器を指し、お腹をさすってみせる。お腹は減っているか、ということかも。果物で満足してしまつたわたしは、首を横に振つた。

『他のお食事はお持ちしなくともよろしいですか？』

大丈夫だというつもりで、首を縦に振る。否定の肯定つて、伝わりにくい。

わたしが器のフルーツをすっかり食べ終えてしまつたの見計らい、タクが声をかけた。

「リオコ、キオ ヴィ ソシエンティオ ミ シエフ、プリンセ？」

『リオコさま、これから私どもの主人に会って頂けますか？』

「主人？」

「ミアゝヴェール・アルマン」

『イエドの城主、アルマン王子です』

王子。ここは王国なのだから王子がいてもおかしくないのだけど、本当に現実とは全然違う世界なのだと実感する。

恐いけど……会わないって言ったら、きつとタクやラクエルが困るんだろうな。

それに、今はその人のお城でお世話になっているわけだし。わたしは頷いた。

ラクエルが励ますように、わたしの手をぎゅっと握る。

『少々ぶつきらぼうですが、王子はいい方です。きつとりオコさまを気に入って下さいます』

王子という言葉で頭が一杯になっていたわたしは、ラクエルが言うことを理解していなかった。気に入る、という言葉の持つ本当の意味に。

そして、それが後々まで影響を及ぼすということも。

わたしと王子の面会は知らないところで内々に進められていたものらしく、承諾するとすぐに引き合わされた。漫画に出てくるような大広間に階段状の玉座があつて、と想像していたのだけれど、贅を尽くしただけの普通の一室に通される。

通訳のためにラクエルは傍にいてくれたけど、タクは見張り番のように入口近くに立って、そこから先に入っては来なかった。

所在無く部屋の中央に立ち尽くしていると、程なく向かいのドアから颯爽と男の人がやってきた。

若い。たぶんわたしと同じくらいの年だ。黒髪を長く伸ばし、上は着物っぽくて下はズボンという感じの織のきらきらした服を着ていて、人の上に立つことに慣れた空気を纏っている。

「ミア・ヴェール・アルマン」

ラクエルが右腕を前、左腕を後ろに回して、深々と膝を折った。慌ててわたしも頭を下げる。

王子は一言声をかけ、礼を直させた。わたしを見て、にっと笑う。

なんか……すごい迫力ある……。

タクほど色黒ではないけど、カフェ・オ・レくらいの濃さの肌。眉も濃くてはつきりした顔立ち。かなり格好いいほう。

だけど、顔の造りより何より眼を惹くのは、くつきりと大きい宝石のようなグリーン・アイだ。

本当に純粋な緑。すごくきれいだ。

観察していたのは、向こうも同じだったのだろう。彼は不躰なく

らいわたしをしげしげと眺めわたし、頷いた。

「タキトウス！」

なぜか戸口に立つタクに声を投げる。わたしを見つめたまま、口早に何かを告げている。

タクは一瞬驚き、ラクエルと同じように礼をした。おどおどするわたしに、ラクエルがそつと声をかける。

『大丈夫。王子はあなたを気に入ったようです』

「気に、入った……？」

『彼に認められたのであれば、きっと天都の王も否とは言いません。大丈夫、上手くいきます』

大丈夫と二度も言われたけれど、不安が増した。

わたしの存在は、一体何なのだろう。そんなに許可を取らないといけないものなのだろうか。

「ジユヌ フィーレ」

王子が呼びかける。右手を差し出すので、手を重ねると、タクと同じように手の甲にキスをされた。この国の人の挨拶って、大胆だ。顔を真っ赤にしていると、繋いだ手から声が響いた。

『異界の乙女よ。わが国に水をもたらし 我に王冠を授けよ』

どきんとした。口元はかすかに微笑んでいたけど、その綺麗な緑の瞳はなぜだかとても冷たくて、見ているわたしの心を一瞬で凍りつかせた。

わたしから手を離していたラクエルは気付かない。

面会はほんの僅かな時間だったのに、彼の眼差しと声は強烈に頭にこびりついて、しばらく離れてくれなかった。

王子との挨拶の後、周りは急に慌ただしくなった。部屋に戻ると、ラクエルが説明してくれる。

『実は、あなたとの意思の疎通を可能にする？魔法話の指環？というものが、西の都アキュナスにあります』

「え……」

『それは国の宝。借り受けるためには、王の許可が必要です』

そして王様に許可をもらうには、普通にお願ひに行ったのでは無理だ。だからアルマン王子が後ろ盾となって、交渉を円滑に進むように算段されたのだという。

『急な話ですが、これからリオコさまには旅に出て頂くことになります。もちろん、われわれも同行いたします』

それなら少し安心だ。だけど旅ってなんだろう？

不思議そうに首を傾げるわたしに、ラクエルが続けて教える。

『まずは、王のいらっしやる天都キヨウに。そこで許可が下りれば、アキナスに指環を借りることができます。現在の持ち主は天都勤めですから、うまくいけばすぐに頂けるかもしれません。』

その後、南の聖地タキアマグフォーラにお連れいたします。水門の鍵が眠るとされる場所です』

なんだかとっても大変そう。唯一心が弾むのは、会話ができる指環があるってことだ。

聞くだけじゃなくて話がしたい。タクやラクエルや他の人とも。

そうしたら、わたしが救い主の乙女じゃないって言えるかな。

がっかりさせてしまうだろうけど、世界を救うなんて無理だ。

わたしは指環を手に入れることだけを考えて、二人に頷きかけた。そして、旅の支度が始まった。

2・5(後書き)

第2章完了。真紀視点にもどります。

第3章 予言 マキの決意

1

ぼんやりと辺りが明るくなってきたのを瞼に感じ、あたしは目を開けた。

高い天井、ガラス片を吊り下げた見慣れない照明器具。カーテンをひいていない窓から、白々と朝の空が見える。

やばい、学校っ！

がばつと布団を跳ねあげ、あたしは気が付いた。

固い生地ของシーツと薄い綿の入ったキルト風布団、草の香りのする毛布。白い浴衣に似たパジャマ。そして、右中指に嵌まる紅い石の指輪。

「あ……」

異世界マフオーランド。

昨日のことが夢じゃなかったのだと知って、あたしはベッドの上でしばらく膝を抱えた。

頭はまだ、どこへ何を収めたらいいやら分からない状態だ。それでも、眠ると気分もだいぶ違う。

昨日したことや聞いたことを思い出し、あたしは自分の落ち着きぶりに、少し笑ってしまった。

「渡り人、かあ……」

まさか、自分がこんな目に遭うなんて妄想すらしていなかった。十六年生きてるから紆余曲折はあっても、ドラマチックとは程遠い人生だったから。

だけど、その多少の紆余曲折で、あたしは極めて諦めのいい性格に育っていた。もとい、ものすごく諦めが悪いのだ。

なんとか……なるよね。

家に帰りたい。そう口にするよりも、心の中で執念深くあたしは

信じる。絶対帰ると。

そのために今自分ができるのは、目の前に掲げられたハードルを乗り越えて進むこと。

とはいえ 初っ端からこのハードルは超ド級すぎる。いきなり世界を救えと言われても、即行で無理ですと答えたい。泣いても喚いても怒ってもどうにもならないってところが、さらにカンジ悪いが。

それでも、少なくともこの家の人たちは、あたしに何かを強要するという雰囲気ではないような気がする。それは、あたしが我儘を言った時のルイスやシグバルトの態度から、そう思い込もうとしているだけなのかもしれないけれど。

考えてもしょうがないもんね。

とりあえず起き上がる。

ベッドの近くのテーブルの上には、いつの間にか持って来てくれたらしいシヨルダーバッグと、自分で畳んだ制服がそのまま置いてあった。服の間に隠した下着と靴下も同じく。

「あゝ、一緒に洗えばよかったあ」

あたしつてば要領悪い。昨日お風呂で洗っていれば、明日快適に清潔な下着を履けたのに。

アルノさんに頼めるかな。

遠い親戚の家に来た気分だ。歓迎はしてくれるが、どこまで親しく接していいのか境界が分からない。お金を払って民宿に泊まったほうが気兼ねをしない、妙な感じ。

アルノさんに聞いて、自分で洗おう。

そう結論を出して、あたしはちよつと気が楽になった。

できるだけ、自分のことは自分でするように言おう。渡り人でもなんでも、もてなされるのはいいけど、それじゃ自分が出せなくなる。遠慮はやめよう。できることはさせてもらおう。

「うん、よし！」

ぴしゃりと顔を叩いて、あたしは気合いを入れた。浴衣風寝巻き

を脱ぐと、腕や膝にあちこち青痣ができている。

寝相悪いな、あたし。

思ってた気がついた。夕食のとき、椅子から転がり落ちて気を失ったんだった。

同時に、そのときとった自分の態度をありありと思い出して、あたしは蒼ざめた。

ちよつと、やっぱ態度悪すぎたかもしれんわ。

胸中をすべり出る広島弁。ああ、これぞあたし。

だんだんと自分を取り戻せた気がして、あたしはいつも通りに制服に着替えた。昨日は体育祭の予行演習で一日ジャージだったら、まだきれいだつたのが幸いだ。

下着は仕方ないので、魔法ランド仕様のまま。バッグに入れっぱなしの予備の靴下（あたしは雨の日に必ず靴がびちゃびちゃになる）を履いて、スニーカーの紐を締める。完璧だ。

湯浴みをした小部屋で顔を洗える水がないか探そうとして、壁際の台の上に小さな盥と水瓶を見つけた。零さないように気をつけて顔をすすぎ、髪を撫でつける。

その脇にある大きな姿見で、あらためてじっくりと自分を眺めた。

違和感、あるよなあ。

シックな木彫りの枠に映し出される、高そうな絨毯と巨大ベッドと、その前に立つあたし。

正直、あたしほど、平凡っていう言葉が似合う子もないんじゃないかと思う。

住んでいた街も田舎と都会のちょうど真ん中くらい。両親、兄一人、犬一匹の核家族で、父親は会社員。母親はパート。成績も中の上から下を行ったりきたり（教科によってムラがある）だ。

見た目は、大きな声で平均的とは言えない。日本人の平均顔は、それはもうこの美男美女だよっていう結果を見たことがあるから、あれが平均だつたら、あたしは下の下だ。

たまに見知らぬ人から声を掛けられても、本当に単純な人違いだ

ったりする。それぐらい、ありがちな顔。

少し癖のある真っ黒な硬めの髪をボブにして、一重の茶色の眼。怖いと評判の兄に似ていると言われるので、女の子らしいタイプではないと自覚している。後輩と同級生から、かっこいいと褒められたことが数度。女としては間違っている。

背はあるほうだが、モデルやバレー選手になれるほどはない。大概後ろから二番目をキープ。お肉が程よくついた体型で、痩せる前に筋肉化してきたふくらはぎが目下の悩みだ。

鞆に入れていたポーチから櫛を出し、寝癖を直した。襟足がはねるけど、見なかったことにする。日焼け止めを塗ろうか考えていると、ノックが響いて、アルノが顔を覗かせた。

『おはようございます、マキさま。朝食はどちらになさいますか？どちら、というのは、何のどちらだろう。』

『あの、それは……？』

『お部屋にお持ちいたしましょうか。それとも、朝食の間でお召し上がりになりますか？』

朝食の間。そんなものがあるんだ。

うーん、さすが？若様？。

『ルイスはどうしてるんですか？』

『若様は朝食の間でお召し上がりになられております』

『じゃあ、そちらに行きます』

あたしはアルノに連れられて、朝御飯を食べに部屋を出た。

2

朝食の間は、テラスに面したオープンな空間だった。

敷いてあるテーブルクロスは淡いコーラルピンクと生成りで、優しい感じ。テーブルも椅子も白。中央には、かわいらしい小さな白い花が生けてある。

昨日も感じたけど、ルイスの家は絢爛豪華だが品が良い。飾り立てているわりに圧迫感がなくて、居心地はそんなに悪くなかった。お嬢様扱いは別として。

少し開けてあるテラスの窓から、ひんやりとした朝の空気が流れ込んでくる。庭は芝を短く刈って広々として、木立の隙間からきらめく陽射しが少しずつ辺りに暖かさと色を与えていく。

朝だなあ……。今、何時だろう。

向かいに座るルイスは挨拶をしたきり、手にした紙の束に目を落として、白いカップに入った黒っぽい飲み物を口に運んでいる。

仕事、かな。

魔法使いの仕事はよく分からないが、今はなんとなく出勤前の会社員のようだ。

『よく眠れたか』

紙の束を下ろさずに、ルイスが声をかけてくる。

『あ、はい。おかげさまでぐっすり』

『そうか、よかった』

沈黙。

『あ……。あの、昨日はすみませんでした。いろいろ失礼なこと言ったり、泣いたり倒れたり……。迷惑かけて』

『……。ああ』

『謝るなって言われましたけど、やっぱり気になるんで、きちんと』

謝っておきたいです。

それに、まだお礼を言っていなかったのだから泊めて頂いて、ありがとうございました。夕飯きちんと食べられなかったのが残念ですけれど」

『いや』

また沈黙。おや、ルイスはそんなに無口な人だったのだろうか。

『おはようございます、マキさま。お加減はいかがですか？』

にこやかに香ばしいパン（に似たもの）の籠を持って、シグバルトがやってくる。

『あ、おはようございます。昨日はお世話になりました。もうすっかり元気です』

『それはようございました。こちらはパニといひまして、テム芋の粉を練って蒸し焼きにしたものがございます。お召し上がりになりますか？』

『お願いします。すごくいい匂いです。美味しそう』

『ベクのミルクから採ったクリームがこちら、アジユの実のジャムがこちらでございます。お好みでつけてお召し上がり下さい。お飲み物は何をお持ちいたしましょうか？』

『紅茶、とがありますか？』

『お望みのものと同じかは存じあげませんが、若い女性にも飲みやすいお茶がございます。そちらをお持ちしましょう。温かいものでよろしいですか？』

『はい、お願いします』

やっぱり長い前髪で目は見えなかったが、シグバルトは口元でにっこり笑って、あたしのお皿にパニをひとつ置き、ルイスにも給仕して籠を残して去っていった。

ほんわりと湯気のたつパニは、クリームパンくらいの大きさで、色はややくすんだグレー。

食欲をそそる色ではないが、手にとって、それが灰だと気がついた。指先ではじいて灰を落とすと、ナンによく似た白い生地が出て

きた。焦げ目もついて美味しそう。

ルイスを見ると、灰を簡単に皿に落とし、気にせず千切って食べている。

あたしは何もつけずに一口食べて、なかなかいけると思った。もちもちした食感で、灰も入るが香ばしくて気にならない。

でも、お茶欲しいな。

喉が貼りつく感じがして、あたしはシグバルトが戻るのを待った。こんな時に、気付かなくてもいいルイスが気付いて呼びかける。

『口に合わないか？』

『いえ、美味しいんですけど、ちょっとお茶が欲しくて。待ってようかと』

そこへミルテが、目にも鮮やかな蛍光ピンクの物体を透明な器に盛ってやってきた。

『火の鳥の実でございます』

『うええっ?!』

素っ頓狂な声をあげたあたしを、ミルテとルイスが笑う。

『サヴォオという植物の実だよ。見た目が奇抜だから、火の鳥の実と呼ばれているんだ』

『今が旬でございます。水気があって大変おいしゅうございますよ』
皮ごと三日月形に切られたそれは、ど派手なピンクの果肉にゴマ粒ほどもない種がばらり。緑の皮には棘のような角がたくさんついて、確かにかなり奇抜だ。

添えられているスプーンで掬うと、果汁がじゅわつと溢れた。味はぜんぜん癖がなくて、やさしい甘さ。桃をもっと柔らかく水っぽくした感じだ。ルイスはフォークでざくざく食べている。

渴いた喉が潤って、あたしは笑顔になった。

『美味しいです。ほんと、見た目と違って食べやすいですね』

『お気に召して頂けるとお持ちしたかいがございます。もっとお持ちしましょうか？』

『お代わり、いいんですか？』

『かしこまりました』

ルイスがくすりと笑った。

『気に入ったようだな』

『果物好きなんです。ドリアン以外なら何でも食べれます』

あたしの世界に君臨する果物の王様は、一度チャレンジしたが、甘いのに何ともいえない匂いがダメで諦めた。本当にヒドイ匂いだ。 ビニールを三重にして即行成仏して頂いた。

『ドリアン？』

『匂いのキツイ果物で……でも、基本的に食べ物に好き嫌いはないほうです』

『じゃあ、ここにもすぐに慣れる』

励ますつもりで言ってくれたのだろうが、その一言で、あたしは現実に引き戻される。家に帰れないっていう、どうしようもない現実だ。

いつの間にかシグバルトが現われて、白いカップにこぼこぼとお茶を注いだ。

ほのかに香る甘いお茶の匂い。ゆたかな湯気。少しスパイシーだ。

ここは？異国？じゃない。？異界？なんだよね。

一文字違いだが、えらい違いだ。あたしはしみじみ、そう思った。

3 - 2 (後書き)

ドリアン好きな方、すみません…。

3

『あの……ルイス。質問いいですか』

読み物に没頭していたのだろう、ルイスが眼だけでちらりとあたりを見た。

『あ、いえ。いいです』

『遠慮はいらない。なんだ？』

やっぱりちよつとぶつきらばうだ。昨日振り回して、機嫌を悪くさせたんだろうか。

『……ルイス、疲れてるんですか？』

『いや』

『なんだか、元気ないみたい』

ルイスが苦笑して、手にしていた紙の束をテーブルに置いた。

『すまない、気にしないでくれ。私はいつもこうだ。朝は苦手で』

『朝、弱いんですか？』

『夜のほうが元気なんだ。昼を過ぎると少しましになる』

『あたしも夜型です。最近は朝練があるから、頑張つて起きてますけど』

『あされん？』

『クラブ活動の朝の練習。学校の授業が始まる前にするんです』

『マキは学生か？』

『はい。高2……えーと義務教育っていうのがあって、小学校が六年、中学が三年。それが終わったら大体の人が高校っていうのに進んで、その三年あるうちの今二年目です』

『十二年も勉強するのか。熱心だな』

『身についているかどうかは別ですけどね』

『では今は十四？ 十五？』

『十六です。ルイスはいくつですか？』

『二十三だ。君の世界と数えかたが一緒であれば』

ビンゴ。二十歳過ぎというあたしの勘は、間違ってたらしい。

『あたしの世界の一年は三百六十五日。一日は二十四時間。一年は十二カ月に分かれて、一カ月は二十八日から三十一日で区切られます。こつちとすごく似ています』

『そつだな』

『季節は春と夏と秋と冬の四つ。夏は暑くて冬は寒い。最近は温暖化で、四季がぐちゃぐちゃですけど』

『温暖化？ 君の世界も乾いてきているのか？』

『単純に乾いてきているというのではなくて、異常気象って言うたらしいですね。』

星自体の気温が上がって、ハリケーンが起きたり氷が溶けたり、局地的な豪雨が降ったりです。各地ばらばらで』

昨日見せた世界地図を思い出したのか、ルイスが考え込むように口元に手を当てた。

『かなりたくさん国があるようだったが』

『はい。数えたことはありませんけど、百はあると思います』

わが世界ながら、答えがあやふやなのが哀しい。

『こちらはマフォーランド以外に国はないんですか？』

『以前はあった。島国も合わせて七十二の国に分かれていたといわれる。それを神王ナシユベルが統一し、今の国家の礎（いしずえ）とした』

『七十二を統一って……すごいですね』

中国の歴史のようだ。あれだっているんな国とか民族をまとめるのに、かなりの年月戦争を繰り返したはずだ。

『完全な統一には百年近くかかった』

『王様、長生きですね』

『死後だよ。だが、彼の功績は大きい。現在の王家の始祖と言われ

ている。テーエが乾いて地方国家が弱体化したことも統一の大きな要因だ』

つまり侵略とか領土拡大よりも、生き延びるためにひとつに成らざるを得なかったってことだ。

まさか……水門の鍵って、かなり重要？

一国どころではなく星全体の未来を握っているようで、あたしはパニを持ったまま蒼ざめた。

『あの、そのころからずっと乾いたままなんですか？』

『いや、何度か危機を乗り越えてはいる。荒れた地に草や木を植えたり、地下水脈を探したり……だが最近、それだけではどうしようもないほど急速に砂漠化が進んでいる』

やや表情を改め、ルイスがテーブルで両手を組んだ。

『実は、以前一度、天の水底が開かれたことがある』

『えっ?!』

思いがけない言葉に、妙な間を置いて声をあげてしまう。

『それって、つまり異界から誰か来たってことですか？』

『そうだ。すでに史実ではないが……今から百五十年前、星暦三百六十二年のことだ』

『百五十年……』

『マキ。これは大事な話だから、しっかり聞いて欲しい』

『は、はい』

あたしはパニを皿に置いて、ルイスを見た。朝の空と同じ澄んだ青い瞳が、こちらをじっと見つめている。

『マフォーランドには、大賢者ソロンが遺した予言の書が伝わっている』

予言。よげん。厭な予感がする。

『ソロンは、この国に百五十年ごとに大規模な乾期が訪れると予言していた。太陽神アーミテュースが眠りから覚め、世界は永（なが）の日照りに晒され、大地は乾き、森や草は枯れて人々は飢え苦しむだろう』

天岩戸（あまのいわと）は知っているけど、これでは逆だ。
寝ている方がいい太陽神って、正直まったく使えない。

『大賢者と讃えられるほどの魔法士だったソロンは、予言と合わせ、それを防ぐための術（すべ）を見出していた。神界マフオーラに住まう神の始祖イシエンナとイシユナムに請い、アーミテュースを鎮めてテーエに雨をもたらす秘法を授かったんだ。』

それが、天の水底、雨寿（うじゅ）の水門を開けるという鍵だ。だがわれわれは、それに触ることはできない。予言された百五十年に一度の乾期の年に異界から来た渡り人のみが鍵を手にし、水門を開け放つて世界に雨をもたらす。その渡り人が訪れる印、それが三つの月の合だ』

『それが、百五十年前にも一度あったん、ですね？』

『そうだ。ソロンが予言した百五十年前に？アーミテュースの息？がマフオーランドを覆い尽くし、大地は乾ききつた。その時、三つの月の合とともに異界より一人の乙女が訪れ、水門を開けて人々を救ったといわれる』

百五十年前。昔かもしれないが、事実がひとつも残らないほどの過去でもないはずだ。

『その人のこと、なんでルイスはあんまり知らないんですか？』

『史実として明確に残っているのは、その年に熱波が押し寄せ、それが奇跡的な雨によって鎮まったというだけだ』

昨日から思っていたけど、この人かなりの現実主義者（リアリスト）だ。魔法なんか使うのに。

『乙女は伝説だと思われていた。水門の鍵も、神官たちが創った夢物語だと』

あたしは自分の右手を見た。紅い石の指環。これは確か。

『これも、そのソロンっていう人が創ったんですよ？』

『そうだ。まさか役に立つとは思っていなかったが』

だけど、この指環が家にあるってことは。

『ルイスはソロンさんの子孫なんですか？』

『傍系だ。百五十年前、聖女ユリアが訪れた際彼女を警護した魔法士の直系で、その功績でこの指環を与えられた。』

本来なら天都にあるべきものだが、聖女が帰還するとたばたのうち、先祖がこっそり持ち帰ったらしい』

結構いい加減だが、どこことなく真実味のある話だ。そして、大事なことに気がつく。

『帰還つて……その人、異界に帰ったんですか？』

『ああ、そう言われている』

帰れる。すごい。帰れるんだ、あたし。

表立って喜べないので、とりあえず心の中で叫んでおく。

うわあああ。なんか道開けたわあ！

そこでちよっと思ってしまった。

『……ルイス。なんでそんな先祖がいるのに、伝説信じてなかったんですか？』

『聖女ユリアがいたのはほんの数日間で、痕跡は全くといっていいほど遺されていない。姿もごく一部の人間にしか見せなかったそう。すべては彼女が帰還してから明らかにされた。なぜかは分からないが』

分からないと言いながら、それでもルイスは何かを知っているようだった。

『それに、異界の乙女だの鍵だのと、小さい頃から父や祖父が偉そうに話すものでね。耳にタコができるほど聞かされたよ。』

だから、ずっとそれに反発を感じていた。どれかひとつでも証拠を見つかるまでは、信じるものかって、ね』

君に会ってしまったが、と苦々しくルイスは微笑む。

なんとなく、リアリストになった理由を見つけた気がする……。そして、とんでもなくひねくれた性格の人だということも分かった。

『後悔してますか？ あたしに会って』

『いや。父たちの信じていたことが事実みたいで、複雑な気分だけ』

』と』

『好き……じゃ、ないんですか？ ご両親』

『向こうがね。私は出来損ないだから』

するりと口にされた、棘（とげ）のある言葉。しばらく考える。

『あたしの異界基準では、ごく普通に見えますけど？』

ルイスが少し笑って、空気にまとわる見えない棘を払い落とした。

『色が 変わっているだろう？』

『金髪ってことですか？』

『ああ。この世界では滅多にいない』

含みのある端的な言い方に、彼の複雑な立場を思う。

彼は、初めて会うあたしでも分かるほどのお金持ちで、若様と呼ばれる身分。

アルノはすでに白髪だが、目は黒い。シグバルトもミルテも黒髪黒目だ。その中で、確かに彼の色は異質かもしれない。期待されていた息子だったら、なおさら風当たりは強そうだ。

日本人の中で突然、金髪碧眼が生まれるようなものかな。

今の時代なら逆にカツコイイくらいの勢いだが、もう少し前ならすぐ虐められていただろう。特に田舎では、少しでも変わっていると個性ではなくて異端だ。

『マキは黒い髪に茶色の目だな。みんなそうか？』

『日本人はだいたい……でも、茶色の髪の子とかもいますよ』

『そうか』

『ルイスがあたしの居た国に来たら、みんな羨ましがりますよ、きつと。カツコイイから』

『……そうなのか？』

『元から金髪碧眼って、すごい憧れですよ。だって、みんなお金かけて髪染めてカラコン入れたりしてますもん』

『からこん？』

『目に色のついたレンズを入れて、目の色を変えるんです。ファッションですよ。髪の色もアッシュとかブロンドとか、すごい人はピ

ンクかグリーンとか入れて遊ぶんです。日本人ってみんな同じような容姿だから、そうでもしないと個性でなくて』

『ピンクとはすごいな』

『さすがにたくさんはいないですけどね』

あたしの地元ではバンドやってる人くらい。秋葉原とか行けば違うんだろうけど。

『面白いな。行ってみたい』

『きつと驚きますよ。保障します』

ルイスは背が高いから、スーツでも何でも着こなせそうだ。細身のデニムも似合いそうだし、ライダーとかロツカーっぽく黒の革でびしっと決めてもよさそう。そんな格好で街を歩いたら、写真とか撮られたりするんじゃないだろうか。

飛行機とか新幹線とか……車も驚くかなあ。

電話とかテレビとかパソコンとか携帯電話なんかも。ルイスの驚く顔を想像して、あたしは思わずにやけてしまった。

『なんだ？』

『うっん。なんだか向こうのこと思い出して』

『……帰りたいか？』

気遣うような声。あたしは、はっと首を振った。

『わわわわ。えと、そんなんじゃないやなくて。いや帰りたいけど、ここがすごく嫌とかそういうんでもなくて……』

慌てすぎて拳動不審になる。

『懐かしいなあって思っつて。全然違うから』

『そうか』

『帰れるって聞いて、ちょっと期待しちゃったんです。ひよっとしたら、もっと気軽にこっちと向こうと行き来できる方法とかもあるのかなって』

そんな出来すぎたアニメの結末みたいな甘いこと、夢観るべきじゃないのかもしれない。

でも 願うくらいは許して欲しい。どんなに子供じみていても、

ハッピーエンドはあるって。

『伝説とか予言とか、あたしには全然分かりませんが、ここにいらっしゃるって何かすることがあるからなんだと思うから。ルイスだってそうです』

あたしは思いをまとめるように、ちよつと言葉を切った。

きつと、いい顔し過ぎてる。すごく八方美人なんだ、あたしは。

それでも、どんなに理不尽でも納得いかなくても、するべきことがあるのなら、する。そして帰る。それだけだ。

『水門の鍵が何か知りませんが……それができて雨が降って家に帰って……それで異界と行き来ができるって分かったら、もう予言だって気にしなくていいわけでしょう？ みんなすごく、めでたしめでたしじゃないですか』

『……そうだな』

『だから。前向きに頑張りますね、あたし。ルイス……助けてもらえますか？』

『ああ、もちろんだ』

あたしは自分に言い聞かせるように、くり返した。

『あたし、頑張ります』

まったりと朝食を食べ終えた後、ルイスは仕事があるといって、別の部屋へ去っていった。

聞けば、彼の職業は？魔法士？という名前で、普段は王様のいる天都（てんと）で「双月」（そうげつ）という魔法士団の士団長を務めているらしい。ふむ、さすが優秀なんだ。

で、その優秀なだけでなく今も仕事っていうくらい仕事中毒のルイスが、一年ぶりくらいにとった休暇で里帰りしたところ、あたしと出くわしたというわけ。

ここアクイナスは、彼の故郷であると同時に父親の領地であり、彼は跡継ぎという立場でもある。実は、このお屋敷は実家ではなく、街から外れたところに建てた彼の住まいなんだそうだ。実家ではこ両親は健在で、年の離れた妹さんと一緒に暮らしているとのこと。妹さんとは仲が良いらしく、話している時は目尻が下がっていた。うちの兄に見習わせたいよな、こんな表情。

でもルイスの妹なら、かわいいんだらうなあ。

そんなことを考えながら、あたしはアルノに教えてもらった洗濯場で、下着と靴下を洗った。ついでにバッグに入れていた汚れたジヤージも一緒に。

お客様に洗濯をさせるなんて、とアルノは相当渋ったが、異界ではこれが普通だと強引に説き伏せたのだ。

郷に入っては郷に従えというが、従わないほうが健全なこともある。あたしは自他ともに認める頑固者だ。

昨日湯浴みで使った、葉っぱの細切れを布に包んだものが石鹸代わり。あんまり使うと流すのに大変そうだから、ほとんどたたない泡を立てて濡らした衣類に揉みこむ。で、何度かすすぐ。靴下はも

う一步って感じだったけど、黒だから分からない。ジャージなんて言わずもがなだ。

洗濯物を抱え、外の小高い野原に向かう。木の枝に括りつけた口ーブに、三列の洗濯物が万国旗のように色とりどりにたなびいていた。

異界代表のあたしは、ピンクの苺柄ブラとショーツ、黒のハイソックス、海老茶のジャージを控えめに端っこに掲げた。枝でできたクリップみたいなもので、飛ばないように止める。風が強い。

夕方には乾くかもな。

一仕事終えた気分でしたあたしの耳に、びっくりする声が飛び込んでくる。

「なんだとっ！ それは一体どういうことだ！」

ルイスの怒鳴り声だ。

「私が偽りの報告をしたとでも思ったのかつ！」

「……」

「彼女は間違いなく異界の人間だ。そう言っているだろう！」

どきり、とした。あたしのこと誰かと言いつ争っているんだ。

あたしは草を蹴って野原を滑り降り、裏手から声のする部屋に近寄った。

ルイスが仕事をするに去っていった部屋だ。天井まで届く本棚が四方の壁を埋め、黒っぽい大机が中央に鎮座している。机の端から端まで紙の束が積み上げられ、いくらかは散らばって、いかにも仕事をしている最中という雰囲気だ。

そして、誰かと話しているようだったルイスは 机の傍の大きな姿見の前に仁王立ちしていた。

なんだろう？ 鏡がおかしい。

ルイスが鏡越しに向き合っているのは、彼自身ではなく、髪の毛の長いやちつたりとした服装の男の人だった。なんとなく魔法使いの親分っぽく見える。

その親分に向かい、ルイスは今までの穏やかさが嘘のように、腹

立たしげに頭に手をやり腰に手を当てて、鋭い語調を突きつけていた。

『私は、この眼で確かに彼女が現われるのを見た。なぜ信じない？』

『ですから、天都へ来ていただければはつきりすることです。どちらが偽者か』

『彼女は来たばかりで、昨日は気を失って倒れたんだぞ。それだけのために天都へ連れて来いと？』

『そうです』

『陛下とてまったく信じておられるわけではないのだろう、水門の乙女などと。わざわざ好奇心を満たすためだけに会わせるといのか！』

『真実がなんにせよ、異界から渡り人が現われたのです。予言の信憑性はかなり高いと、われわれもみています』

『ならば、このまま行かせればいい。二日の無駄がなくなる』

『無理です。彼女が本物だという確証がない以上、タキィアマグフオーラに近寄らせるわけにはいきません』

『……あのお』

たまりかねて、あたしはルイスの背後から小さく呼びかけた。

はっとルイスが顔色を変えてふり向く。同時に、鏡の中の彼もあたしを見た。

『これは……』

『マキ、いつからそこに？』

『外で洗濯物を干してたら、ルイスの声が聞こえて……ごめんなさい。立ち聞き、しました』

『何を聞いた？』

『信じるとか信じないとか……あの、この人って？』

鏡を指差す。実際ここにいないので、等身大のテレビを見ているような感じだ。

鏡の人も、あたしを見て驚いているようだった。

『確かに……その格好は、この世界の人間のようにには見えませんね』
『彼は大神官ヘクトヴィーン。天都にいる神官長だ。君の事を報告していた』

『そう、なんですか。魔法って便利ですね』
混乱して、よく分からない感想を言ってしまう。神官の偉い人らしき彼が尋ねる。

『あなたの声には魔法がかかっているようですが、どうなっているのです？』

『あ、ルイスがこれを貸してくれて』

あたしは、右手の指環を鏡に向けた。引っぱると、さつき石鱈を触ったせいか、意外にするりと抜ける。それをルイスに渡して、また喋ってみた。

『あれがないと、言葉通じないと思うんですけど』

「xxxx」

久々に聞く、生マフオーランド語だ。やっぱりさっぱり分からない。

「ジ イエ トレ インタレシス エスト シ エルシエイン ダ

アクイナス……」

「シレンティオ！」

荒々しく、ルイスが遮る。あたしは戸惑って、彼の手の中の指環を握った。

『さつきから一体なにを揉めていたんですか？』

ルイスは大きく息を吐き、このうえない苦い表情で、信じられないことを口にした。

『東の地イェドにも渡り人が現われた。君と同じ、異界の人間だ』

『え』

驚いた。仲間がいる。

ルイスとヘクトヴィーンが言い争っていたことも忘れて、あたしは叫んだ。

『会いたいですっ！ あたし、その人に会ってみたい！』

5

イエドにもうひとり渡り人がいる。

ルイスからそう聞かされて、あたしはどきどきが止まらなくなつた。

同じ立場の人がいる。同じだ。あたしだけじゃない……！

これを喜ばずして、何を喜ぼう。

どうしようもなく顔をほころばすあたしの横で、ルイスがこれ以上ないくらい険悪な雰囲気を纏っていた。でも気にしない。仲間がいる。仲間に会える。

『ね、その人いくつくらいかな？』

『知るものか』

『まだ若い乙女と聞いていますよ。あなたと同じように』

まだ繋がっている鏡電話（勝手に命名）の向こうから、大神官だとかというヘクトヴィーンがにこやかに教えてくれた。

『ええつ。じゃあ、同じ年くらいかな？』

『そのように聞いています』

『うわ、やっぱり女の子なんだよね。どこから来たのかな？』

『異界からだと言っているだろう』

地下から染み出そうなるルイスの声。

『だって、あたしの世界は百近い国があるって言ったじゃないですか。忘れたの？』

本当は百以上だ。さっき教科書で数えたら、ざっと百九十はある。知らない国ばかり。

『日本人だといいなあ。言葉通じるかなあ。あ、指環があるから平気かな？』

『なにやら楽しそうですね』

『そりやだつて！ まったく知らないところで知り合いかもしれぬ
い人に出会うなんて、テンション上がりまくりですよ。すっこいど
きどきですよ』

『偽者かもしれん』

あくまで刺々しいルイス。鏡の男は鉄壁の笑顔で、その棘を跳ね
返した。

『そうですね。その方は、こちらの方のように運よく？魔法話の
指環？を持っている方に出会わなかったようで、随分と言葉が通じ
なくて苦労されたようですよ。最初は泣いて取り乱して大変だった
とか。まあ……異界から来られたのであれば、当然の反応ですが』

あれ？

何だ、この違和感。まさか皮肉を言われているとか。

『彼女も気を失った。そう言っただろう』

『ですが、今朝は楽しくお食事を召し上げられたそうです。あちらの
乙女は、シヨックのあまり水も喉を通らぬようですよ』

明らかに厭味だ。しかも、あたしに当て込んでルイスにまで。

ちよつとムカつく。いや、これは怒っていいはずだ。

『……すみません、ちよつと質問があるんですが』

『なんででしょう？』

『異界から来る乙女とやらは、一人と決まっているんでしょうか？
ヘクトヴィーンは堅苦しく黙り、しばらくして口を開いた。

『百五十年前は御一人だったと伝えられています』

『でも、あんまり資料残ってないんですよ？ っていうかほとん
ど』

『ええ、まあ』

『予備で二人っていう考え方はないんですか？ 一人がダメな時用
とか』

『予備？』

『そ。女の子一人じゃ荷が重いから、もう一人。世界を救うんなら、
百人来たって重いくらいのプレッシャーですよ。最初の人はどう思

つていたかは知りませんが」

「……」

「それに、あたしが指環をもってるルイスと出会ったことを怪しむんなら、もうちよつと異界と繋がる場所の調査をするべきじゃないですか？」

「調査、ですか？」

「もし最初の人が来たのがこの近くだったら、それでルイスの先祖と会ったんだしたら、この近くに異界と通じる扉がもともと備わっているのかもしれない。何かのきっかけがないと開かないだけで……だったら、二度同じことがあったっていいでしょ？ 偶然じゃなくて必然」

思いつくままに喋る。

だって絶対に、あたしもルイスも嘘をついていないから、説得の材料を探すだけだ。

「それに、扉がひとつなんて誰が言ったんです？ 予言遣して鍵も遣して扉も用意した立派な大賢者さんなら、万が一に備えていくつか扉を準備してあっても、おかしくないんじゃないですか？ 扉だけあっても、そこを通る人がいないと意味ないんだから。違う？

そんなちゃんとした事実確認なしに、頭ごなしにあたしたちを偽者扱いしないでください。すごい迷惑、です！」

実際の本人を目の前にはしていないせいだろうか。あたしは、勢いよく言い放った。

すぐ横で、ルイスが凍り付いているのが分かる。馬鹿だ、あたし。ルイスの立場が台無しだ。

ちらり、と彼を窺う。

「……いい、言い過ぎた？」

「言っていることは間違っていないとは思いますが、まあ」

「じゅめんなさい……」

気まずくて、熱くなった頬を両手で覆う。くくつと鏡の中から笑い声が聞こえた。

『どうやらこちらの乙女は、随分しっかりした考えの持ち主のようですね』

『……すみません。ちょっと調子に乗りすぎました』

『いえ、頼もしいですよ。天都でお会いできるのを楽しみにしております』

『え……?』

『もう一人の乙女は、すでに天都に向かわれています。お会いになりたいのでしょうか?』

さつきルイスが行くのをあんなに反対してくれていたのに。でも、頷いた。

『……はい』

『では、お待ち申しております。異界の乙女よ』

芝居がかった調子でやんわりと告げると、ヘクトヴィーンは右腕を折って深々と優雅にお辞儀をした。そして、消える。

あたしとルイスの前にある姿見は、暗いただの鏡になった。

6

ぎこちない。鏡の暗さが、そのまま空気にまで滲み出てきたようだ。

口を開くと、言葉の前にため息がこぼれる。

『……ごめんなさい、ルイス。ぶち壊しだね、あたしのせいで
気にするな』

ふつと顔を上げて、ルイスがあたしを見る。青い目が笑っていた。
君は……気が強いんだな。驚いたよ』

ああ。今はこのやさしさが逆にイタイです。ほんと、ごめん。
ルイス、ごめんね。

『大神官へクトヴィーンも形無しだな。彼にあれほど言う者も滅多
にいない』

『ひよつとして、上司、とかだった？』

『あー……直属の、というわけではないが、身分は上だよ。クガイ
だからな』

『クガイ？』

『上位貴族だ。カーツォの中でも位が高い
うつゝ最悪。やっちまったよお。』

『そのうえ彼はカヌシエの一族。太陽神系一門の宗家だ。普通だっ
たら……』

妙な間をおいて、にやりとルイスが笑う。

『だった、ら？』

『即刻鞭打ち牢獄行き。私であれば首が飛ぶ』
『クビ？』

『文字通り、だ』

手刀で自分の後ろ首を叩く。打ち首獄門、なんていう時代劇用語

が頭をよぎった。

『うそお???'』

『絶対身分制だからな』

『うえええ〜っ。まじ? うそ、どうしようルイス。やばいよね? あたし天都に着いたら、即行牢屋行きになるのかな? 絶対無事じゃないよね?』

捕まっつて牢屋に入れられて、鞭でびしびし叩かれて最後に首をちよきんつと、あたしの暗い妄想はジェットコースター並みに走り出す。

なのにルイスは横を向いて ぷつと噴き出した。

『……………るいす?』

『いや、すまない。君があんまり動揺してるから、つい……………』

つい……………? 冗談で乙女心をからかつちゃ困るんだよ、君いつ! わなわなと拳を握る。心の中は大噴火だ。

そんなあたしの心中も知らず、ルイスは顔を真っ赤にして笑っている。笑い転げている。

『おもしろいな、君は』

『……………オモシロガラナイデクダサイ』

『いや。ヘクターにあんな口を利いたのに、随分と動揺するんだと思っつて』

『それとこれとは別です』

『本当に斬首になったらどうする気だっただんだ?』

『ええええっ!』

『だから、冗談だよ』
どっちなんだよ。

天国と地獄のジェットコースターをたっぷり三周ぐらいした気分になって、あたしはちよつとぐれた。というか、疲れた。

近くにあつた椅子を引き寄せて座る。はあ、とまたため息。肘掛に左肘をつき頭を支えて、まだ笑っているルイスを見る。少年みたくに、笑い涙を親指で拭っていた。

『……怒んないの、ルイス？』
『うん？』

『だってその前は、あの人に一生懸命あたしを天都に連れて行かないように言ってたじゃない。なのに、ぶち壊しちゃったんだよ？怒んないの？』

今この場に敬語がそぐわない気がして、あたしはタメ口で喋った。ルイスはまだ唇の端に笑いの余韻を残したまま、乱れた金髪に軽く指を通して、あたしの前に立った。

握っていたあたしの右手から紅い指環を取りあげ、中指に嵌める。最初の時のように。

『マキが行くと決めたのなら、それでいい』
『でも……』

『マキ。水門の乙女は伝説だ。信じない者も多い。王もその一人だ』
『え……？』

驚くあたしの横に、ルイスは腰を下ろした。もともと深く座ってなかったから半分以上空いていたけれど、それでも彼に椅子は狭い。あたしにも。

異界の男性と椅子を半ケツした状態で、あたしは彼の話を聞いた。
『この世界は乾いてきていると言っただろう？ 百五十年前の大旱魃の後しばらくは、この国も潤っていた。だが、また徐々に雨が減りはじめ、ここ数年は特に、厳しい日照りで何万もの人が亡くなった。』

そこで王は、時が満ちる前に異界の乙女を呼び寄せ、水門を開けようとした。しかし……どうやっても叶わなかった』

日に焼けたブロンズ色のルイスの横顔。

きつと、元は色白なんだろうな。

聞きながら、あたしはそんなことを思っていた。

『水門は大陸の南、タキアマグフォーラに眠ると言われる』
『場所、分かってるんだ？』

『ソロンの書に残されている。アマグフォーラは、もともと神が降

り立つた神聖な場所。神が人を創り出したと言われる聖地だ。ソロンはそこで、始祖神イシエンナとイシユナムに祈った。そして水門が現われたんだ」

「あらわれた？」

日焼けした顔が、くしゃりと歪む。苦笑いだ。

「それが一体どういう状態かは分からない。アマグフォーラに近づくことはできても、誰一人として入ることはできなかった。どんな優れた魔法士でさえ」

「異界の扉は？ 開けられたの？」

「いや。文字通り世界中を探したが、異界への扉は見つからない。記録が残っていないと言っただろう？」

最初の聖女が現われた場所を調べたくても、君がさっき言ったように、私の先祖に出会ったことは確からしいが、それ以上のことは不明だ。突然現われ、突然去っていった。まさに魔法だ」

ぼんつと詰めた指先をおどけて開く。

魔法。

ルイスがしてみせた飛ぶ光や鏡電話は、実はあたしの思う魔法とは違う次元のものなのか。

あたしの世界も、知らない人が見たら魔法の世界かもしれないんだよね。

理屈の分からないことを軽々しくただ？魔法？という言葉に押し込めて安堵していた自分が、少し恥ずかしくなった。

「だけどルイス。あたし、魔法使えないよ？ いいの？」

「マキ……」

「あたし、不思議な力なんて何もないよ？ あたしが何かして異界から来たんじゃないし……正直ただの偶然だと思うし。ひよっとしたらほんとに」

ニセモノかもしれない。

その言葉は言えなかった。だけど、たぶんルイスには伝わった。ちよっと哀しそうな顔をしたから。

『そしたら、ルイス困るよね。どうしよう。それだけの人がやってダメだったのに、あたしがそこへ行って何もできなかったら、どうすればいいんだろう?』

『マキ』

横向きのまま、ルイスがあたしの右手に左手を重ねた。男らしい、大きな手。あつたかい。

『君は今朝言った。ここに来たのは何かをするためだと。私もそう思う。この指環も』

手を重ねたまま、紅い指環を指先でそつと撫でる。

『私は魔法士だ。光を読み、風を視て、気を紡ぐ……常人には感じられない細かな自然の動きや流れを、よい方向に変えるのが私の役目だ。だが、この渴きはどうすることもできない。』

みんな必死だ。神官たちは知恵を絞り、役人は資金を切り詰めて治水整備し、騎士は剣を置いて、新たな水源を探すために危険な土地を拓いている。ヘクターなどは、ソロンの書を読みすぎて丸暗記だ』

最後に出た気難しげな男の名に、あたしは少し笑った。

『水門の乙女は、夢だ。砂漠で見る蜃気楼のように、追えば消える。いつしかそう思う者が信じる者の数を超えていた。意見を同じくする者が増えると、極論を言うものも出始める。異界の乙女は、でっちあげだと』

『……そんな』

『君が天都に行けば、少なからずそういった意見を持つ者の目に晒される。好奇の目にも。私は、それを恐れた』

その非難はきつと、聖女を知る数少ない人を先祖にもつ彼にも及んでいるのだろう。以前から 今も。

『ルイスのご先祖のことは、なんて言われてるの?』

『嘘つき。虚言。妄想。だけど、何を言われても言い返しようがないよ。証拠はこの指環だけだ。それなのに……親たちは乙女を妄信していた。非難などまったく耳に入らない様子で、先祖こそがすべ

てといわんばかりだ』

親との亀裂も入るはずだ。ルイスはあたしの手を、きゅっと握った。

『私は何とか手がかりにならないかと、この指環を家から持ち出し、調べるためにいつも持ち歩いてきた。そしてやっと 役に立つ時が来た』

紅い石を支える、鈍い金属の光。この光沢は大切に磨かれていたのではなく、百五十年分の焦がれた想い。夢の乙女への。

やっぱダメだ。

あたしはそんな期待されるような子にはなれない。

ルイスの右手が、あたしの左頬を包んだ。

『泣くな、マキ。指環は古くさいが、悪いものじゃない。よく似合ってる』

下手なごまかし。

それはあたしを古くさいと言っているのと同じだと気付けよ、鈍感。

だけど 涙をぎりぎり目の端で止まらせるのは、成功したみたい。

あたしは頷いた。瞬きをすると涙が落ちそうで、我慢する。だめだ。落ちる。

『目から雫が離れたと同時に、ルイスの親指が受け止めた。』

ナイスキヤツチ。心の中で拍手喝采だ。

ルイスはそれをやさしく横へすべらせて払い、微笑んだ。

『君はまったく忙しいな。怒ったかと思えばうるたえたり、拗ねたと思えば泣いたり』

『……子どもだと思ってるんでしょ』

『うん。あー……いいや、かな？』

だからどっちだ。

『おもしろいとは思ってる』

まあそれはどうもステキな評価をありがとう。

また笑ってるし。あたしは悔しくて恥ずかしくて、見られないように顔を横に向けた。我ながら、ほんとに子供。ただの駄々っ子だ。

『……ねえ、ルイス、さ。天都、一緒に行ってくれる？』

『ああ、いいよ』

『行つてさ、一緒にヘクターさんに怒られてくれる？』

『……それはどうか』

『怒られてよね？』

『まあ考えておく』

『悩んでいるうちに引きずり込むから』

『ひどいな』

ルイスが笑う。あたしも笑った。肩と肩がくっついて、笑いの振動が二倍になる。嬉しさも二倍。優しさも二倍。あつたかさも二倍。あたしは、ありがとう、という気持ちを籠めて、彼の肩先にことんと頭を預けた。

彼と一緒になら、天都の意地悪神官も怖くない。たぶん、きっと。

信じられていなかった奇跡のひとつが、だって確かにここにあるから。

ルイスの手に包まれたまま、あたしは紅い指環を嵌めた手を、そっと閉じた。

3 - 6 (後書き)

真紀ターンいったん終了。理緒子に戻ります。(時間はそのまま進みます)

第4章 東から西へ リオコの旅

1

がらがら、がらがらと規則的な車輪の音が響く。

太陽はすっかり昇りきって、もう少しで真上に来るくらいだ。さすがに暑くて、ついているカーテンで窓を半分隠した。

『お加減は大丈夫ですか？ リオコさま』

目の前に座るラクエルが、手を握って聞いてくる。わたしは平気だと、首を振ってみせた。

ラクエルの横で、お風呂のときについて来てくれた侍女のシエナが、安心したように微笑む。

初めて乗る馬車（らしきもの）は、小さな箱型の乗り物に大きな車輪が四つついて、コマと呼ばれる大型の動物が二頭で引っぱる。

マフォーランドでは、このコマが大体の乗り物らしくて、わたしがタクと初めて会ったときに驚いたのも、この動物。頭がすごく大きくてごつごつしていて、ずんぐりした毛の長い牛と馬の間くらいな感じ。牛も馬も実物は見たことないけど。

つまり、この乗り物は？馬車？ではなくて？コマ車？ということころ。乗り心地はまあまあ 道路も舗装されていないから振動が響くのは仕方ない。内張りのふかふかクッションがなかったら、正直お尻が痛くなってしまうそうだ。

問題はこの揺れ。自慢じゃないけど、わたしは車酔いしやすい。胃には今朝つまんだ果物しか入ってなかったけど、少しでも気を逸らそうと、上下にスライドする窓を少し開けて外気を入れた。埃っぽく、乾いた熱い風が髪を揺らす。

イエドは？乾都（けんと）？と呼ばれるほど、荒涼とした地方だ。もともとは豊かな森と平野の広がる東の要だったらしいけど、世界が乾いて事情が変わってしまった。

変わらないのは　ひとつだけ。

『ほら、リオコさま。見えて参りましたよ』

「ほんと？」

天を突く巨大な山。聖山フージャイ。マフォーランドーの高さを誇る山だ。

観光名所にすればいいのと思うけど、この国の人はそういうことにあまり興味がなみたい。

フージャイは活火山で、だからお城でも温泉に入れるような贅沢ができるわけだけど、危険といえば危険。常に魔法士が監視して噴火や地震予測を立てて警戒しているらしいけれど、なにぶん相手は自然だ。触らぬ神に祟りなし、とばかりに、みんなあまり近付こうとはしない。

それでも美しい山だ。城でもその姿は仰げたのに、近くで見ると荒々しい気品すら漂う。

山裾を大きく広げ、青空を裂いて伸びる三角錐のシルエット。淡い翠色に見えるそれは、光の加減で、銀粉をまぶしたように煌めいている。

火山だけあって、もっと近付くと岩と溶岩でとても美しい姿とはいえないみたいだけど、人の手では到底成しえない自然の偉大さには、素直に畏敬の念を感じた。

タキ「アマグフォーラも、こんな感じなのかな……」。

最終目的地と教えられた南の聖地に思いを馳せる。

だけど思ったところで、どうしようもないのだ。

わたしは、水門の鍵をもつ乙女じゃないんだから。

実は出発する前、わたしたちの元に驚くような報せが飛び込んできた。

なんと、異界の渡り人がもうひとり現われたのだという。

タクとラクエルは、最初そのことをわたしに告げるつもりはなかったみたいけど、

『いずれ天都で顔を会わせるのだらう。知っておいたほうがいい』

とアルマン王子に諭されたらしく、しぶしぶ教えてくれた。

わたしと同じ日同じ夜、別の場所に異界から女の子が現われたのだそう。しかもそれはアキナスの地で、彼女はすでに意思の疎通を可能にする？魔法話の指環？を手に行っているのだと。

そんな……。

わたしがどうしても手に入れたいと願うものを、別の子が持っている　もう一人同じような境遇の子がいることよりも、わたしはそのことがショックだった。

わたしも、タクヤラクエルと普通に会話したいのに……。

たぶん、この感情は嫉妬だ。叶えられることのない望みへの。

ただ、そのことを教えてくれた時、ラクエルは不思議な表情で付け加えた。

『異例の事態に、王はどちらかが偽者ではないかと疑っています。』

もちろんリオさまが本物の渡り人であることはわれわれが証明しますから、問題はないのです。ただ……』

言い差し、ふっと眉を曇らせる。

『あのアキナスが偽者を仕立てるなどとは考えにくく、われわれとしても混乱しています』

どうやらラクエルは、その人のことを知っているようだ。

『彼は大変優れた魔法士です。わたしなど足元にも及ばないほど……』

…そして、非常に冷静で理性的な人物でもあります。あまり敵に回したい人物ではありません。渡り人には因縁のある家柄ではありませんが……。

リオ様をお守りする覚悟はできていますが、指環のことを考えると、交渉は難航するかもしれません』

そう伝え、それでも女性魔法士は、姉のようないつもの笑顔を見せた。

『これは、万が一に考えられる事態をお伝えしたまでです。ご心配は要りません。アルマン王子の協力を取り付けておいて本当によかったです。大丈夫、きっと上手くいきます』

力強くそう言われたけれど、心のしこりは晴れるどころか深まって。

もやもやした気持ちのまま、わたしはイエドの城を出たのだった。わたし、どうすればいいんだろう。

青空いっぱいを埋め尽くす山影に呼びかける。

アケイナスに現われた子は、きっと本当の水門の乙女なのだろう。だから指環も、彼女の手にあるんだ。

じゃあ、わたしはなに？ ついでに呼ばれた？ それとも間違ってます？

取り立てて何も優れたところのないわたしは、元いた世界でも重要な子じゃなかった。

一人っ子だから両親くらいは泣いてくれるだろうけど、いなくなってもただ淡々と日常は過ぎていつているんだと思う。それくらい、ちっぽけな存在。

山に問いかける。あるいは どこかにいるかもしれない神様に。

わたし、ここに居てもいいの……？

投げかけられた問いに、答える声はなかった。

第4章 東から西へ リオコの旅（後書き）

慣れない文章を読んでもいただき、ありがとうございます。
ご意見・ご感想もお待ちしています！

2

天都キヨウまでは、西へ五百リール。？リール？っていうのは長さの単位で、なんでも馬車で丸二日かかる距離だそうだ。

それを知ってわたしはすごく驚いたけれど、タクたちは普通って顔をしていた。電車とか車がない生活をしているから、そういうのが当たり前なのかもしれない。

馬車の旅に慣れてないわたしを気遣って、こっちの時計の間隔で二〜三時間に一回くらい休憩を取ってくれた。ただ座っているだけなのだけれど、これが意外に大変で、休憩のたびに外へ出ては体をほぐしたり散歩して気分転換をしたりする。もちろん　こっそりトイレにも行く。こういうとき、女の子って不便だ。通訳のラクエルが女の人でよかった。

そういえば……。

ラクエルの職業である魔法士という存在は、あまり数がいらないらしい。中でも？送心術？という心で話しかける魔法は、相当の魔法力というものが必要で、お城の魔法士でも数人しかできないと聞いた。

その条件に当てはまり、なおかつ女性である彼女は希少で　そんな人を探すのは、結構大変だったのではないだろうか。

これもやつぱり、タクの心配りなのかな。

最初にわたしを助けた義務感からか、近衛隊長という立場のせいとか、タクはわたしに関してほとんどのことを手配してくれる。しかもさり気なく、不自由がない程度にきちんと。

だから、わたしがすぐにその気遣いに気がつかないこともしばしばで。

後から思い返して、あれ？と思ったりするのだ。お水のこと、お

風呂のこと、使っていた部屋や侍女の人、着替えのことも。

大人だなあ……。

紳士というには見た目がこつすぎるのだけど、そのギャップがまた好ましく思える。

正直、こんなに大切にしてくれたのは両親でもなかったかもしれない。どちらかという娘に過保護だった両親には、我儘を言う形でしか甘えてこなかったから。こんなふうには庇護されるのは初めての経験で、くすぐったくて心地よくて　ちよつと後ろめたい。

タクは……わたしが水門の乙女じゃないって知ったら、どんな顔するんだろう。

やさしいから、傷つくことは決してしないとは思うけど。

不安になる。嫌われることに。必要とされなくなることに。

手の平を返すような人たちを今まで散々見てきてるから、知らない土地で独りにされると思うと、ものすごく恐かった。

我儘だ、わたし。

我儘で、どうしようもなく自分が大事な自己中心的な人間だ。

？わたしが水門の乙女です？

嘘でも堂々とそう言えれば、どんなにか楽だろう。でも、そんな度胸なんてない。

こんなんじゃ、本当に愛想を尽かされてしまっても仕方ないと思いい、わたしの気持ちはまた沈んだ。休憩に止まったちっちゃい木陰の片隅で、こつそり胸に詰まった息を吐き出す。

「　リオコ？」

こんなとき、沈んでいるわたしに声を掛けてくれるのは、彼以外にいない。

わたしは反射的に笑顔になって、タクを振り向いた。

わたしの乗る馬車の御者をしてきている彼は、休憩中のコマに水をあげているところだった。本来若いながら將軍の称号をもち、さらに近衛隊長という立場の彼に御者をさせるなんて、さすがに部下の人たちが止めたみたいだけど、

『人選に頭を悩ますくらいなら、自分でしたほうが早い』

なんていう彼流の理屈で決まったそうだ。

ラクエルの情報によると、タクは一度言い出したら絶対に退かないタイプで、主人であるアルマン王子もときどき手を焼いているらしい。

『頑固なんです』

送心術でラクエルが、こっそり苦笑していた。それでも、彼が皆に信頼されているのはすごくよく分かって。わたしはにこにこしながら、彼らのやり取りを眺めていた。

ちなみに今回の旅には、そのアルマン王子も同行している。わたしの馬車の二台前の白い立派な馬車がそうだ。あとは彼の荷物用に二台。兵士の馬車が二台。なぜかわたしの荷物の馬車も一台という全部で豪華七台編成の大行列だったりする。

つまりコマは十四頭いるわけで、それだけいると途中の餌や水、落とし物の量も半端ではなく、なんともロマンチックというよりは牧歌的な旅路となっていた。

コマは大人しい動物で、マフォーランドのほとんどの地域で家畜として飼育され、乗り物や荷物の運搬などに役立つているそう。

動物は苦手だけど、ずっと見ていると長い鬣（たてがみ）の間から覗く小さな眼が愛らしくて、いつまでも草をもぐもぐ食べている姿はかなり癒し系だ。

勇気を出して、タクの傍にいる一頭に近付いてみる。口の周りを水でびつちより濡らして涎（よだれ）と一緒にぶるぶるされるとさすがに悲鳴をあげてしまったけど、悪気がないのが分かるから、そんなに嫌じゃなかった。

タクに教わって、手を伸ばして首の辺りを撫でてみる。ごわごわした固い絨毯みたいな感じだ。

胴体より色の薄い鬣はもさもさで、レゲエの人の髪の毛みたいにすだれている。これは彼らの体温調節に欠かせないもので、下手に切ったり梳かしたりしてはいけならしい。それでも見えなくては

困るので、目のところだけ短くしたり、三つ編みにしたり（これは持ち主の好みによる）するのだそうだ。

頭のとっぺんの瘤（こぶ）がコマの特徴で、そこがものすごくブサイクなところなんだけど、ここに脂肪を溜めているんだって。駱駝みたい、かな？

オスはもつと瘤が大きくて気性が荒いから、こういう団体行動には向いていないらしく、わたしの馬車を牽くのは二頭ともメスだ。名前はガヤとガイラ。なんでこういう名前かというと、

「ガヤ？」

「ヤ。ガーヤ！」

タクが声をかけると、ガヤは口をもぐもぐさせながら「ガウガオホ、ガヤウツ」と返事をした。

つまり鳴き声。すごい、タクってコマとも話ができるんだ。思わず拍手。

「わー、すごい。ガヤも偉いねえ」

タクが笑って、御者台に乗ってみるか、とわたしを誘った。

わたしはドレスの裾をつまんで車輪に足を掛け、先上がったタクの手を借りて御者台にのぼった。ただの板だと思っていたら、背凭れ付きの小さな椅子がちゃんと二つある。二つあるのは、昔から長距離の旅は御者が交替で馬車を進ませていたから、というのはラクエルからあとで聞いた話だ。

御者台からコマの背越しに見る景色は新鮮で、見晴らしがよくとても気持ちがいい。出発の時間になってラクエルが呼びに来てくれたけど、お願いして、次の休憩までここに居させてもらうことにした。

「乗り心地はあまり良くないですよ？」

でも天気もいいし、タクとは今日あんまり話してないし、中に居ても退屈だし。

『では風が強いですから、これをしっかり膝に掛けておいて下さい』
やっぱりラクエルはお姉さんみたいな口調で、わたしに毛織のス

トールを持たせ、頭に薄手のシヨールを巻いて顎の下で結んだ。

なんだかマツチ売りの少女みたいな情けない格好だけど、馬車が進みはじめてその理由が分かった。

すごい風……！

この辺りは平野で、何もないとところに吹き降ろす山からの風が尋常じゃなくきつい。しかも埃っぽい。フージャイの灰まで飛んでくる。

やっぱり素直に中に居れば良かったかな、と思ったけど、そのうちふいに風が緩くなった。気がつくとかクがマントを広げて、わたしを守るように風を遮ってくれていた。

「イエ ヴィ ラカ？」

タクが訊いてくる。ラカっていうのは、疲れたとか辛いつていうくらいの意味。

疲れてないか？つて、御者もしながらわたしのことも気遣つて、彼が一番大変そうなのに。

わたしは首を振つて、

「イエ ヴィ ラカ？」

と逆に聞いてみた。彼はわたしのビミヨールなマフオーランド語に目を丸くして、

「ダンカス。ミ イエネ ラカ」

まぶしいくらいの笑顔でそう答えた。う、そんなに下手くそだったかな。

だけど、わたしだって頑張つてるんだよ？ みんなわたしが喋れないのを知ってるから、気を遣つて短い単語で話してくれるの。それをオウム返しにくり返すだけでも、少し勉強になるんだ。だってやっぱり、みんなとお喋りしたいもんね。

英語は得意じゃなかったけど、必要に駆られたら上達するつて本当みたい。すごく喋りたい。

ここに来てからほんの半日くらいだけど、ものすごくいろんなことがあったから、それを誰かに伝えたくて仕方ないんだ。

わたしはタクの隣で子供みたいに、あれは何？これは何？と指を差して、いろいろと質問をした。

本当にそれだけの、まるで幼稚園生と先生みたいなやり取りだったけど、すごく楽しかった。ずっと笑ってた。埃が口の中に入るけど、そんなの気にならないくらいに。

毎日がずっとこうだったら、ここでの生活も悪くないかもしれない。

水門の鍵のことや、もうひとりの渡り人のことなんてすっかり忘れて、わたしはそう思った。

きつと、これはタクのおかげ。彼はわたしのオアシスだ。

彼のために、わたしができることって何かあるのかな。今はまだ何にもできないけど　そのうち、いつか。

4 - 2 (後書き)

お気に入り登録ありがとうございます。

文章固くてすみませぬ…読みにくかったら教えてくださいね。

4・3(前書き)

リオコのレイアウトを変えるのをしばらく忘れてました…すみませ
ん。

3

太陽が地平線を通り赤に染めて沈んでいく前に、馬車の一行は止まり、夜を過ごす支度を始めた。

もともとが大人数だから、キャンプともなるとすごく大掛かりだ。コマを外した馬車でぐるりと周りを囲って、内側にテント、その中央で火を起す。役割は兵士の中できつちり決まっているみたいで、タクが指示を出さなくてもみんなてきぱき動いた。

すごいなあ。

役に立たないわたしは、ラクエルたちと片隅で眼を丸くしてそれを眺めていた。本当はコマを外して別の場所に連れて行くくらい手伝いたかったんだけど、手綱を解こうとした途端、タクの部下のハーゲンさんという人がすごい勢いで止めに来た。

その迫力と何度も謝られるので、わたしが何か失敗したのかと思っただけ、そうではなくて、

『あなたに仕事をさせたのでは、彼が將軍に怒られてしまっんです。あなたは何もしないで、ここに居てください』

そう、ラクエルが言った。でも、わたしもタクのお手伝いがしたかったのにな。

『では、笑顔で？ダンカス アレス？と言ってあげてください。彼らも喜びます』

ダンカス アレス ありがとう、お疲れさま。そんなくらいの意味。

試しにハーゲンさんに言ってみると、照れ臭そうだけどすごく喜んでくれた。うん、単語ひとつ覚えたぞ。

そうこうしているうちに日がとっぷりと沈んで、昼間はあんなに暑く感じたのに、急激に気温が冷え込んでくる。代わりに、熾した

焚き火がさらに明るく力強く光を放った。石組みをして作った簡単な竈（かまど）に掛けた鍋から、美味しそうな匂いが漂ってきている。

仕事が一段楽した頃、白い豪華な馬車からアルマン王子が姿を現わした。王子様の登場にみんな一斉に仕事の手を止め、頭を下げる。

「オニ イェト ラボリ アレス……」

勿体をつけて喋っている内容を、ラクエルが翻訳してくれる。

『皆、よく異界の乙女を守り、本日無事に旅を終えたことを御苦労に思う。今宵はゆっくり休み、旅の疲れを癒してくれ。天都キヨウまではあと一日余り。明日からの旅も光の神アーミテュースの加護のあらんことを。マフォーランド王国に栄えあれ！』

「……フェリシカ マフォーラス！」

という男の人たちの合唱で、アルマン王子の演説は終わった。わたしと年の違わない王子は、鷹揚に頷くと、さつさと馬車に戻ってしまった。

みんなと一緒に食事しないのかな？

不思議に思っていると、ラクエルが尋ねてきた。

『リオコさま、お食事はどうなさいますか？ 馬車に持ってこさせましょうか？』

馬車はキャンプ地を囲むように置いてあるけど、わたしとアルマン王子の馬車は一番内側の兵士のテントの間に置かれていた。

なるほど、立場のある人はテントではなくて馬車で寝泊りするものなのかも。確かにそのほうが安全そうだ。

だけど他の人はこっちにいるし、火の近くのほうがあったかいから、わたしはみんなと一緒に食事をとることにした。

男の人だけだからか、シエナが少し厭そうな顔をする。わたしも知らない男の人は苦手だけど、なんとたつてタクの部下だし大勢のほうが好きだから、火の周りに用意された木の椅子に進んで腰を掛けた。

食事はお椀に盛ったスープ。野菜とかお芋みたいな具がいろいろ

入って、味噌風味？ 本当の味噌じゃないと思うけど、すごく良く似てる。

それに、コメイっていう御飯みたいなものを丸く握ったものが、葉っぱのお皿に乗ってやってきた。

食べてびっくり。見た目はお米っぽいのに、粒粒ほくほくしたお芋のような食感。ほのかに甘くて、振ってある塩と絶妙に合う。

『美味しいですか？』

本当に美味しくて、頭をぶんぶん縦に振る。ラクエルがくすりと笑って、わたしの髪の毛の先についたコメイの欠片をとってくれた。これはちよつとさすがに恥ずかしい。

『お代わりがいるなら早く言わないと、すぐに彼らに食べ尽くされますよ？』

まさかあの火鍋が、と思ったけど、わたしが半分も食べないうちにもう食べ終えた兵士の人がどんどんお代わりして、あつという間にお味噌汁風スープはなくなっていた。

それはタクが呆れるほどの早さだったらしく、叱られた若い兵士がこちらを見て気まずげに頭をかく。まだ全然減っていないお椀を抱えたわたしとシエナは、顔を見合わせて笑ってしまった。

言葉は通じなくても、そんなふうには夕餉の時は楽しく過ぎていつて さすがにお風呂は入れないけど、水で濡らしたタオルで顔と手足を拭い、寝袋代わりのもこもこの服みたいなのを着て、わたしは馬車で眠ることにした。

馬車の中は狭いだらうと思つたら、レバーを引くと椅子が動いて背凭れが倒れ、四畳くらいの広さになった。さすがに天井は低いけど、女の子三人で寝転がるには充分。毛布も敷いてばっちりだ。

馬車ベッドに横になると、細く開けている窓から空が見えた。ちらちらと星空を、焚き火の淡い明かりが照らしている。声はほとんど聞こえないけど、兵士の人交替で見張り番をしてくれているようだ。

タクはちゃんと寝てるかな。

ほんの少し欠けたお月さまが、ひとつ、ふたつ、みつ。今日は
すぐく離れ離れになつてるみたい。

『眠れそうですか、リオコさま？』

まだ起きているわたしを気にして、ラクエルが声をかけてきた。
わたしは空の月を指差して、

「あれがお月さま？」

と聞いてみた。色も数も今までと違うんだもの。

言葉は分からないはずなのに、ラクエルは頷いて教えてくれた。

『あれはツキミカミです』

「つきみかみ？」

驚いた。音がすごく良く似てる。月ミカミ。月の神？

『ツキミカミは、光の神アーミテュースと闇の女神スザナとの間に
産まれた、運命の三姉妹です。』

白くて大きいものが一の月ツウクで、現在を司る神。青いもの
が二の月イミ。過去を司ります。そして、赤いものが三の月ミイカ。
未来を司るといわれます』

ツウク、イミ、ミイカ。それでツキミカミ。

語呂合わせみたいな感じかな。でも神秘的。

『ツウクは他の月よりも早く現われ、早く姿を消します。つまり
？今？はすぐに過ぎ去ってしまうということ。イミは青白くて哀し
げで……一番ゆっくりと現われて一番遅くに消えます。過去は後か
ら出来てゆくものだから。』

そしてミイカは、幻月と呼ばれるほど不規則に現われます。この
月だけ、淡く靄がかかっているでしょう？ 実際はガス雲があるな
どと言われていますが、未来は常にはつきりとは見えないもの。だ
から、ずっとぼんやりとしたままなのだ信じられているのですよ
決してはつきりとは見えない未来。それでもみんな願いをこめて、
この朧（おぼろ）な赤い月に祈りを捧げたんだらうな。そんなふう
に思えて、わたしはちょっとせつなくなつた。

ねえ、ミイカ。わたしの未来は、どんなふうに視えているの？

あなたには見えるのかな？

わたしは元の世界に帰れてる？ それとも、ここで誰かと暮らし
ていくのかな？

もしも未来が朧な形でも、そこに映しているのなら……夢で教
えてよ、ミイカ。

わたしはそんなことを胸の中で呟きながら、そつと眼を閉じた。
ぱたり、と頭の上で窓を閉める音がする。

優しい暗闇に包まれ、わたしは眠った。

4 - 3 (後書き)

真紀ターンに戻ります。

第5章 出逢い マキの旅

1

あたしたちは、意地悪神官ヘクターさんからもうひとりの渡り人の情報をもらった翌日、天都へ向けて旅に出ることになった。

なぜ翌日かというと、向こうの子がいる乾都イエドというのほかなり僻地（へきち）らしく、天都まで馬車で丸二日はかかるんだそう。だから、早く行って待っているもなんだから（絶対ヘクターさんと顔を合わせるのが嫌なんだと思う）、時差をもたせての出発となったのだ。

移動手段は馬車だ。牽くのは、コマという頭に瘤のあるおとなしすだれ髪のお馬さん。サラブレッドではなく道産子系だ。ガワガワいう鳴き声も愛嬌があつてかわいい。

ルイスは天にも宿舎があつて、単身赴任してるみたいだからあまり荷物はないけど、問題はあたしの荷物。気がつくと、馬車が一台余分にいるくらいの大荷物が出来上がっていた。

ちよつと待った。あたしはシオルダーバッグひとつで来たはずだけど？

ものすごく疑問を感じたけど、アルノとミルテとシグバルトはまだ詰め込もうとしている。正確には、前者二名だけだ。

『なにがこんなにいるの？』

『さあ』

ルイスは興味なし。朝だから機嫌が悪いつたら。

ただ、無事洗濯を終えたあたしの下着をアルノから手渡された時は、さすがにちよつと目が覚めたみたい。

『マキ、これはなんだ？』

『ちよ……ルイスっ！ 広げないでよっ！』

猛ダツシュで駆け寄り、あたしは彼の手からブラとショーツを奪

った。

一度洗濯したけど、下着だけ止め方が甘くて飛んじやって、砂まみれになったから洗い直したんだよね。それで干したままころっと忘れてて。

『なんでルイスが持ってたのよっ!』

『アルノが君に返すと言うから持って来たんだ。朝から大声出さないでくれ。頭に響く』

『出したくもありませんっ。ルイスのスケベ!』

『すけべ……?』

おっと、さすが魔法の指環。悪口もすっかり変換しましたか。

『なぜこれを持ってきたくらいで、君にスケベ呼ばわりされなきゃならないんだ?』

『これって……もお、人の下着に触らないでっば!』

ルイスが身長にかこつけて、あたしの母さんブラを頭上高く持ち上げる。

『下着? これが??』

『そうっ。だから返してっばっ!』

あたしは真っ赤になって、彼の周りをびよんびよん跳び回った。

ちくしょー、コイツこんな性格悪かったか? ああ、最初の日
は頑張って敬語使ってたのに、それも夢のようだよ。

『どう使うんだ。こうか?』

縦にしたり横にしたり裏返したり、ルイスは完全にブラジャーで遊んでいた。

ぜっつたいコイツ、わかっててやってる!!

『あ、こうか』

『頭に乗せるなーっ!』

金髪の上で見事な山を二つ作ったワイヤー入りブラをむしり取る。

『信じらんない、ルイス。スケベっ』

『こんなものを着るほうがどうかと思うけど?』

『普通です。ノーマルです。ごくごく一般的な格好です』

『一般的なねえ……』

『だ・か・ら！ 広げないでっば！』

『葛さんシヨーツを再奪取。まったく、油断も隙もありゃしない。』

『そんなに見られるのが嫌なら、アルノに言っておけばいいのに』

『言いました！ ちゃんと下着って』

『この世界の下着とはかなり違うと思うけどさ。』

『だからじゃないのか？ 彼女は普通に下に着る服だと思っていたみたいだぞ？』

君のところの服は変わってるからな、と事もなげに言うルイス。

そっか、ただの説明不足………なわけないだろーがっ！

『……ルイス、分かってて言ってるよね？』

『いや？』

いーえ、目が笑ってるから。嘘ついてますって、目が言ってるから！

『そんなに下着って言うなら、マキ着てみせてよ』

『あ、そうだね………って、着ると思う、ここでこの場でこの状況で……？』

『異界の文化への純粋な好奇心なんだけど』

『純粋なスケベゴゴロの間違いじゃなくて？』

『うーん。否定はしないけど、それが下着って言われても実感が湧かないな』

まあ、水着にも似たような形はありますが。

『だから、着てみて？』

だから、それは違うだろーというのに。

あたしは乱暴に、異界から持参のシヨルダーバッグの奥底へブラとシヨーツを突っ込んだ。

『あーあ、隠されちゃった』

『……すけば、えっち、変態』

『興味があるだけなのに、そういう呼ばれ方は気に入らないな。それに私はどちらかというと、下着よりもその下に興味があるほうだ』

し。ね？』

さらりと言ったよ。さらりともものすごくオヤジなことを言ったよ、この人。

あたしはシヨルダーバッグのチャックをきっちり締めると、ルイスの胴体目がけて思いきり振り回した。

第5章 出逢い マキの旅（後書き）

…らぶらぶな展開を期待していた方、こんな話でごめんなさい…。

2

なんだかんだばたばたしたけど、あたしとルイスは午前中のうちには彼の家を後にした。馬車の小窓から、見送りをしてくれるアルノとミルテと料理人のカガロフさんに手を振る。

『いつてきまーすっ』

『お気をつけて!』

道中食べれるようにと、パニでサンドウィッチも作ってもらった。本当、いい人たちだよ。なにかお土産持って帰ってきたほうがいいかな、なんて考えるあたしは、完全にこの家の人間の気分だ。

もうひとりの子が本当の異界の乙女だったら、あたしはいらないもんね。のんびり天都見物でもして帰ろうかなあ。

そんな呑気なことまで考えていたりする。だけど、口には出せない。今ルイスは軽々しく冗談が言えそうにないほど、超絶に機嫌が悪いのだ。

あたしがお見舞いしたシヨルダーバッグ攻撃のせいではない。実 は出発直前、鏡電話でルイスのお父さんから直々に実家に寄るよう に言われたのだ。

しかも彼はあたしのことを知っているようで、どうせ天都に行く のなら立ち寄れと強引に決定されたいらしい。

仕方がないよね。最初の乙女の警護をした人の子孫で、異界の乙女 伝説を強烈に信じてるんだもん。本物来たら、そりゃ会わせろって 言うよ。

ルイスは、ヘクターさんから口止めされているらしく、もうひとり 異界の乙女がいることを言い出せずに承知してしまったみたい。

『しゅめん、マキ』

今までにないほど深刻な顔で謝ってくれたけど、ううんって言うくらいしか他に励ましも思いつかなかった。それくらい、ルイスはマジで親御さんが嫌いみたい。

嫌いっていうか……どうしたらいいのかわかんないんだろうな。なんとなく思う。うちの兄も両親、特に父親との距離感が微妙だ。今は大学に行つて家を出ているからいいものの、高校時代は顔合わせるだけでも家中の空気がぴんとするくらい、妙な緊張があった。オスが二匹居るんだなって感じ。

言い方は悪いけど、成熟した男の人って縄張りができると思うんだ。そこに他の男（ひと）が入るのを本能的に嫌う。家族だし理性があるし、人間はそのへんの境界が曖昧だけど、大人になるってそういうことから避けて通れない。少なからず女もそうだ。だから、親と衝突する。

好きとか嫌いとか相性とかではなくて、根源的な問題だとあたしは思ってる。巢立つための準備だ。最近はパラサイトとか多いらしいけど、微妙に自分もそうなりそうな気がするけど。

ルイスのところは事情が複雑で、こんがらがって余計に大変そうに見えるけど、根本的に自立した子供と親って、そんなにべたべたしなくてもいいと思うんだ。うるわしい家族愛もいいけど、つかず離れずの距離感で居られればいい。お互いが悪者にならない程度に。田舎だと、近所の目とかしきたりとかあって面倒そうだけど。

ルイスの家は領主という身分だから、その辺りが半端なさそうだ。今は天都で勤めてるけど、そのうちきつとアクイナスに呼び戻されて、跡を継いで親の決めた人と結婚して、しかも結婚式には近所中を呼ばないといけないような事態で。

うわあああ、大変そう。

他人事ながら暗くなる。これで相手に男の子が産まれなかったら離縁しろとか、産まれたら産まれたでいるんなところから挨拶がきて御礼を返して、なんてどうでもいいあたしの妄想は止め処がなくなる。嫁姑問題だって、勃発確定だよ。

頑張れ、ルイス！

心の中で応援する。どうやらそれが顔に出たらしく、ルイスが胡乱な眼をあたしに向けた。

「なんだ？」

「……いえべつに」

「どうせ、ろくでもないことを考えていたんだろう」

その通りですが、ナニカ？

むっとした顔を見ると、ルイスは、ふっと笑って横を向いた。

「まったく君は……退屈をしない人だな」

「どうせあたしは異界の人間ですから？ ルイス基準では変な人間でしょうけど？」

「……」

なんだその、ここだけか？みたいな眼差しは。

「あたしは向こうではごくごく一般的な人間です。すごく普通です」

「ふーん」

「信じてないの？」

「……」

あ、また無口に戻った。

せっかく会話の糸口ができそうだったのにと、あたしは少しがっかりする。

だって道中二人きり（御者のシグバルトを忘れてるけど）、楽しく会話しながら行きたいじゃんよ？

まだじつとあたしを見るルイス。席が向かい合わせだから、どうしても視線が合いがちなんだよね。でも、見つめ返しても何にも反応がないから、仕方なく彼の視線を追って。

「……何をしているんだ、君は」

「ん。どこ見てるのかなーと思って」

なぜだか首をぐるんと傾げたまま、あたしは答えた。

「私は異界基準がいまだに理解できないんだが？」

「あたしを見てればおのずと明らかにならな？」

『……………』

ほらほらそこで黙らない、ルイス。会話はキャッチボールだよ？
返していこうよ！

『るいす？』

『……いや。いつまでそうしているのかと思って』

『そろそろ首が痛くなってきたような』

『その前に頭に血が昇らないか？』

あたしは頭を戻して、ぶるんと振った。髪の毛がもつれたので、
手ぐしで直す。空気が乾燥してるから、ぱさつき加減なのが哀しい。

『マキは髪が短いな。それも普通か？』

『校則で肩についたら結ぶか切れて決まってる、長い人と短い人
半々くらいかな』

地元の中学は長髪禁止だから、高1から伸ばしはじめの子がほと
んど。頭髪検査のある学校って、イマドキ珍しいんじゃないかな。

『伸ばさないのか？』

『似合わないもん、長いの』

しかも真っ黒すぎて量も多くて、伸ばしたら手入れが大変だ。月
イチのカットでなんとかごまかしてる髪だっていうのに。卒業して
カラーとか自由にできたら違うんだろうけどさ。

あたしの中では、ひそかに大学デビューを狙っている。ここから
無事に帰れたらの話だけだ。

『せつかくきれいな黒髪なのに』

『あたしは好きじゃないもん』

そう言うあたしに、ルイスの青い目が本気で驚いていた。

そうだった。このマフオーランドでは黒髪黒目が普通基準で、ル
イスが規格外なんだった。ずっと見てるから忘れてた。

『言ったじゃない。向こうじゃ、みんなほとんど茶色く染めてるよ。

重いもん、黒髪って。暗いし』

『暑そうだな、とは思っ』

黒が熱を吸収する色なのは、異界でも同じらしい。

『なんで元の色を染めるんだ？ そのままのほうが美しいのに』

『だって格好良く見られたいじゃない』

そういえば、金髪碧眼が変わっていると言っていたルイスは、染めたりする気はなかったのかな。ものすごく似合ってるから、染める必要はないと思うけど。

『外見を偽るのはただの虚栄だ。良いことではない』

『でも、好きな人にステキだなんて思われたいとか、理想の外見に近づけてもっと自分を好きになりたいっていうのは自然なことじゃないの？ それでも虚栄？』

偽りつて言われたら返す言葉ないけど、外見を変えることで気持ちが変わることがあるのも事実だ。たかが外見、されど外見。人は見た目が九割だよ。

『ルイスの言うことも分かるよ。だけど、大体の人が見た目で判断するんだよ。それを気にしないほうが不自然だと思う。気にしてコンプレックスもって……だから、ちょっとでも磨こうと思って努力するんだよ。気にしない人がいたら、それはただのナルシストだよ』

喋りながら、あたしは思った。ルイスが言ったことって、実は彼が過去に人に言われたことなのかもしれないって。おそらく周りとか 家族とか。

『あたし、金髪にしてみよっかなあ』

お酢で脱色できると聞いたことがある。このくらいの短さなら頑張ればなんとかいけるかもしれないと、髪を引っぱりながら思う。

せっかく真面目に考えたのに、ルイスが鼻先で笑った。

『なんで笑うの？ 黒髪でも、色抜いたら金髪になるんだよ？ お酢をさ、髪につけて放置するの。ちょっと長めに一晚とか。そうしたら翌朝キンキラキンに』

『ならなくていい』

『なんで？ 目立っていいじゃん。それでさ、ルイスと二人で王様に会いに行くの。絶対ウケると思わない？』

『その前に、ふざけるなって止められそうだけど』

「んー。でも、ヘクターさんが青筋立てて怒る顔が見れたら、それもいいかも」

「本当に処刑されるぞ？」

「金髪の二人が晒し首だったら、それこそ末代までの伝説だねえ」

「いやいやそれもすごいかも、なんてあたしが呟くと、ぷはっとき出す声　御者をしてるシグバルトだ。」

「盗み聞きかよ、と思ったけど、そのタイミングの良さに、あたしもルイスもつられて笑ってしまった。」

「君が異界の普通だったら、もうひとりの渡り人も同じ感じなのかな？」

「ちよつと考える。ものすごい美少女とかだったら、どうしよう。」

「あたしの沈黙をどう読み取ったのか、ルイスの頬に、意地悪そうないつももの笑いが浮かぶ。」

「ふーん」

「いやいや、そこで納得しないでください。あたしは普通、ですからっ」

「楽しみにしておこう、二人目に」

「おっと、ルイスに余計な楽しみを与えてしまったあたしって、墓穴？」

「馬車内の空気を変えることに必死で、あたしはどんどん自分の墓穴を深めていることに気付かなく　いや、気付いたときにはすでに遅くて。」

「アクイナスのお屋敷に着く頃には、ルイスの中であたしは決定的に変な女の子、という烙印が押されてしまっていた。」

3

『できたか?』

『もうちよつと』

『そのままでもいいと言ったのに』

ルイスの実家の門の前で繰り広げられる、あたしとルイスの押し問答。

原因は、一着しかない制服を親切にアルノが洗濯してくれて、あたしは朝から丸ごとマフオーランド風の服を着ていたってこと。もちろんドレスなんかじゃなく、ルイスが昔着ていた服をリメイクしたもの。足の長さが破格的に違いすぎるのが感じ悪いけど。

だけど、この格好じゃ異界から来たといっても信じてもらえそうになく、あたしは目下ルイスを追い出して馬車内で着替え中ってわけ。

さつさと面会を終わらせて立ち去りたいルイスは、かなり鋭角にご機嫌斜めだ。

『あの男の目には何を着ていようが分かるものか。行くぞ』

『ね、ルイス』

あたしは馬車の小窓から頭を突き出した。

『やっぱ、下着も履き替えたほうがいい?』

ものすごく冷たい目。ち、冗談の通じないやつめ。

『だってほら、気分つてもものがあるじゃない。全身のコーディネートというか』

言い終わる前に馬車の扉が開き、あたしは強引に引きずり出された。当然着替え済みだったけど、むっとなつて彼の手を振り払う。

『ちよつとルイス、着替え中だったらどうする気だったのよ! このすけべっ』

ルイスの目が恐い。まじです。あたしは即、白旗を上げた。

『はい、すみません。ふざけすぎました』

『すぐに済ませて出発する』

目顔でシグバルトに待っているよう指示し、ルイスはあたしの腕を掴んだまま、屋敷の門を潜った。

しかし、これが尋常じゃなく広い。庭だけでルイスの家の五倍はあるかもしれない。

ほけーっと感心して辺りを眺めるあたしを尻目に、ルイスはどんどん進んでいく。

『あの、ルイス。腕、痛いです』

『……』

『もうちよつと手を緩めてくれないと、あおぢが』

おっと広島弁。マフォーランド語訳はどうなってしまっただろう？

『あの、青痣ができるかも』

ルイスはあたしの二の腕から手を離し、代わりに背中にくるりと腕を回す。というと見た目はカツコイイが、実際は抱え込まれてぐいぐい運ばれている感じた。

写真でしか見たことのないような白い宮殿が、あり得ない大きさで行く手に立ちほだかり、すぐに視界から全景が切れた。巨大な木の扉が、押し掛かれそうな迫力で目の前にそびえ立ったところで、ようやく足が止まる。

入口に立つ執事さんみたいな人に頷きかけ、ルイスがあたしの頭の上で囁いた。

『挨拶して二秒で帰るぞ』

そこまで嫌ですか。

あたしは一瞬呆れ　　一步屋敷に足を踏み入れた途端、それを理解した。

『お帰りなさいませ、ルイセリオ様』

『お帰りなさいませ』

一斉に頭を下げる白と黒の一団。ルイスの家など比にならない侍

従、侍女の数だ。その中央に立つ、威風堂々とした体格の男。これがルイスの父親だと、ぴんときた。

彼と同じように長身で、日に焼けた冷たくも見える整った顔立ち。後ろへ撫でつけた頭髮も短い顎鬚も鋭い両の眸もすべて、彩る色は、まぎれもない夜空のような深々とした黒だ。

隣にいる薄紫のドレスを纏った奥様らしき人と薔薇色のドレスの少女も、まじりつけなしの漆黒の髪と瞳をしていた。

もちろん使用人一同も例に漏れずで、その中でルイスの金髪碧眼は、病的なくらい浮き立っていた。異端といわれても仕方ないほどに。

違う。

異端であることを毎秒毎秒突きつけるような空気を纏っているのだ、この空間は。

二秒で帰るのではなく帰されるんだと、あたしはそのとき思い知った。恐くて傍らの男を見上げたのに、彼はすでに武装状態のような冷たい表情を張り巡らしていた。

『ただいま帰りました、父上、母上』

『よく戻りましたね。元気そうで何よりです』

『母上もご健勝そうで。ユリアミス、また大きくなったようだな』

『はい、お兄様。お戻りお待ちしております』

美少女という言葉がふさわしい娘が、膝を折ってにつこり微笑む。だが兄と父の間にあるものを知っているのか、親しみをそれ以上表わしてはこなかった。

『ルイセリオ、そちらが異界からいらした乙女かね？』

『はい。 マキ。私の父であるアクイナス領主ザヴェルだ』

『ザヴェル・ミロード・カーツォ』アクイナシアと申します。ようこそいらつしゃいました、異界の乙女よ』

ルイスの父親が髭面を笑みくずし、あたしに手の平を差し伸べた。初めまして、朝野真紀です。どうぞよろしく』

仕方なく右手を重ねると、領主はその手を持ち上げて唇を触れた。

慌てて引っ込める。

『おやおや。異界の乙女は恥ずかしがり屋なのですか？』

『私たちはこれから天都へ参ります。長居はしていただけませんので、失礼』

宣言どおり、挨拶のみでルイスが退席しようとする。

『待ちなさい、ルイセリオ』

笑顔のまま領主が制した。黒々とした瞳は一欠けらも微笑んでいないけれども。

『異界の乙女は、われわれが送り届ける。おまえはここで待機していなさい』

……今、なんと？

『すでに馬車も用意した。失礼のなきよう、われわれとしても最高のものを用意させて頂いたよ。おまえには　まだそこまで準備はできぬだろう？』

親しげにルイスの肩に手を置く。ぴくり、と彼の体が震えた。

『私に任せなさい。それに一介の魔法士にすぎないおまえがお連れするより、ここはひとつ領主である私がまかり出るのが筋（すじ）というものではないかね？』

『すぐく正論ぽい。でも笑顔で押しつけられる正論に、はいそうですねって納得できる頭は、残念ながらこの体にくっつけていないんだ、あたし。』

『あの……失礼ですけど』

ふーっと陰で息を吐ききり、なるべく小さい声で言う。

喧嘩に来たのではない。挨拶だ。これは挨拶の続きだ。

『彼はわたしを最初に保護してくれた人です。ならば天都への報告は、その本人が直接おこなうべきと思いますが？』

領主は明らかに驚いたようだったが、年長者として金持ちらしく高い身分っぽく威厳を漂わせてあたしに言った。

『異界では、当主の責任というものは重視されないのですか？』

『このアクイナスを治める者として相応の敬意を示すことに？』

『わたしを歓迎していただいて、大変感謝しています。わたしは異界から来たばかりですので、こちらの風習をよく理解しているとは言えませんが、領主のあなたの息子さんである彼は、充分当主の代理に成り得ると思います。が、間違っていますでしょうか？』

そんなわけないよね。跡継ぎだもんね。どうでい、おっさん。

『しかし私にも、当主としての責務を果たしたいとの思いがございます。元来アクイナスは最初の乙女の』

『失礼ですが』

あたしは、声の震えをねじ伏せてそれを遮った。時間の無駄は省きたい。

『お話を中断させてすみません。こちらのご先祖さまと前の異界の乙女とのことは、ルイ…セリオさまよりお聞きしています。ですが、わたしはその方となんの所縁（ゆかり）もありませんし、むしろ』

『ごくり、と唾を飲む。呑まれるな。いけ、あたし。』

『まだ伝説のことすらきちんと分かっていない状態で、異界の乙女だと呼ばれることも納得できるものではありません。ご期待に沿えればとは思いますが、わたしは、ただの一人の人間です。』

なんの力もない、この世界で右も左も分からない、ただの迷子なんです。今ここで人前で話すのも手が震えてしまう……』

ぐっつと拳を握る。泣きそうだ。上を向いて堪える。

『こうして歓迎していただいたこと、お話させていただいたこと、とてもありがたく思っています。ですが、わたしはあくまで普通の十六の子どもにすぎないんです。』

わたしは今からこのまま、ありのまままで天都にいる王様に挨拶にいきます。それは異界の乙女などというものではなくて、純粹にこの世界にお邪魔した一人の人間としてお会いするつもりです。

水門のことは……どうなるか、わたしにも分かりません。ですから、どうか大袈裟になさらず、このまま彼とわたしを天都に行かせてください。お願いしますっ……！』

もう論旨はぐちゃぐちゃだ。あたしは思いきり頭を下げた。そのあたしの頭を、力強い腕が抱き寄せる。低い声が耳に落ちた。

『まったく君は……無茶苦茶だな』

『……ルイス』

『行こう。あいつは君が涙を見せてやるような相手じゃない』

囁き、ルイスがあたしを抱えるようにして踵（きびす）を返す。

『待ってくれ』

かすかに震える領主の声。なにかを堪えているような 怒り、

苛立ち、それとも。

『すまなかつた。君たちを傷つけるつもりはなかつた。許してくれ』

謝罪。口先だけなら何とでも言えるけど。

『せめて遠き異界より来た客人に、茶の一杯なりともてなすことを許してもらえないだろうか？ お詫びとして……頼む』

『あなたは昔から、何気ないふりをして人の心を踏みにじるのがお得意だ。彼女にそれはさせない。行こう』

氷よりも冷たい言い方をして、ルイスがあたしを促す。だけど、あたしは動かなかつた。

このまま行けば、きっと二人の関係は決定的に輝（ひび）が入ってしまふ。それでもいいと、ルイスは言うだろう。でも、直せるなら直すべきだ。

父親が他人の前で息子に頭を下げるのって、それは形だけでも、やっぱすごいことなんだよ。男は変なところでプライドが高いから、仲直りだって面倒なこと、あたしは兄で経験してるから。

『お茶、飲んでいこうよ、ルイス。あたし喉渴いたよ』

『……いいのか？』

『うん。ちよつと喋りすぎた。喉イタイ』

『分かった。シグバルトには待ち時間が少し伸びたと伝えさせる』

『うん』

頷きながら、あたしはルイスの体の陰で、潤んだ目を素早くこすった。この家の人たちにはバレバレだったのかも知れないけど。

あーあ。これで異界の乙女は変なやつって知れ渡っちゃうんだろっなあ。

あたしとルイスに注がれていた奇異の視線が、どこか生温く感じられるのは、きつと気のせいではないだろう。

慌ただしくもなく、それでいてどこかいそいそとお茶の支度が進む中、あたしはぼんやりとそんなことを考えていた。

5・3(後書き)

注) 分かりにくいですが、前半のオヤジどのの台詞は明らかに侮蔑です。土団長は「一介の魔法士」などと呼んでいい立場ではありません。

こんなところで注釈してどうするっていつ…。

結局ルイスはせっかく実家に来ていいるならと、待ちぼうけさせるところだったシグバルトを呼び寄せて、せっせと過去の資料の発掘をはじめた。最初の乙女の騎士役をしたご先祖の日記とかごっそり持っていく許可を領主から取り付けたんだそうだ。

そうだよ、強気に出られる時に出ておかないとね。おじさん、ごめんよ。半分はあたしのせいだ。半分は自業自得だけど。

放っておかれたあたしは、壁にかかった代々の肖像画をずらりと見ていった。

うふ、子どもの頃のルイスも発見したぞ。赤ちゃんのとときとか成人式っぽいのか魔法士の制服姿らしきもの。結構あるぞ。実はおとーさん、息子ラブ？

なんて考えながら、どんどんアキナスの歴史を遡る。二十枚を超える多彩な肖像画を見ながら思ったのは、総じてみんな目元涼やかな好男子ということ。肖像画なんだから多少良く描いたとしても、それでも全体的に似通った美形なのだ。

ある一枚などは、ルイスそっくりで笑ってしまった。他の人よりも髪が茶色で、目がグレーっぽいから余計そう見えてしまうのかもしれないけど。

肖像画の前で一人でやついていたら、領主がやってきた。

『なにか面白い発見でもありましたかな？』

『はい。この人って、ルイスにそっくりだと思って』

『三代目当主セオバルトですな。ふむ……そんなに似ておりますかな？』

『似てます。鼻筋とか目とか輪郭とか、あと耳も』

ちよっと出っ張ったような、くりゅんてなつた耳。三角っぽい。

『隔世遺伝なんですかね。ご先祖の血、ですよね』

『カクセイイデン？』

裏返ったような領主の声。あ、こっちは遺伝とかあんまり知られてないのかな。

『えと、人間には体を作る設計図みたいなの？遺伝子？っていうものがあつて、子どもは父親と母親からそれを半分ずつもらうんですけど、ときどきそこに隠れている形質がぴよんと遅れて出てきたりして……それを隔世遺伝っていうんです、わたしの世界では』

『なかなか……難しいことを考えておられる』

『いえ、そんな難しくありません。中学レベルですから、メンデルの法則とか』

超有名だもん。分かりやすいし、血液型とかでも知られてるし。

『めんでる……？』

『ええと、見た目に現われるカタチっていうのは、表に出てきやすいものと隠れているものの二通りあるんです。で……』

話しながらお茶席のテーブルまで来たあたしは、給仕されていたティーセットの中にクッキーに似たお菓子を見つけた。

都合のいいことに、白と茶色の二種類。それをテーブルに並べて、生物の講義を披露する。

『では、このひとつずつが遺伝子 人を作る素（もと）としますね。遺伝子は、二つ揃わないと人間が作れないというところがポイントです。』

この茶色さんは、一人でも自己主張ができるタイプ。表に出てくる遺伝子です。対して白さんはひかえめで、二つ揃わないと決して主張できないタイプ。つまり隠れやすい遺伝子ですね。

ですから、この茶色さんと白さんが結婚して子どもが産まれると、子どもは親からひとつずつ形の素をもらって、つまり全員茶色さんになるんです』

分かりやすいように、白と茶のクッキーもどきを組み合わせながら説明する。

『ただし彼らは、隠れてはいますが白の素を持っていますから、この子ども同士が結婚すると兄弟での結婚云々はさておき、の四種類のカタチを持つ子どもが産まれて、見た目だけをいうと、茶色さんから白さんが産まれるというびつくりな結果になるわけです』

あたしは周りを見渡し、理解を求めてから続けた。

『不思議なことのように見えますが、もともとこの茶色さんは白になる素質をもっていて、ただそれが表に出ていなかったただけなので同じ白の素質をもつ相手と出会うとかの条件が揃えば、起こって当然な結果なわけです。で、こんなふう隠れているカタチが世代を飛び越えて突然現われることを隔世遺伝と呼んで』

教師つぼく熱弁を奮うあたしの耳に、いきなりガタンツと振動が飛び込んできた。

つつましやかに隅の席に座っていた領主婦人が、真つ青な顔で立ち上がっている。その蒼い顔がみるみる露出している胸元まで真つ赤になって、耳まで染め変わった途端、怒声が響いた。

『あああなたっ!!』

『ど、どうしたんだね、おまえ。急にはしたない……』

『はしたないなどと今この場でおっしゃるなんて、なんて人なんですっ! わたくしは……わたくしは今日という日をずっと待ちわびておりました。汚辱を晴らすこの時を……!』

『おじよく?とは穏やかでない。ちよっと昼メロになりそうな感じだよ?』

『あなたっ!』

『はいっ?!』

思わず返事をしてしまう領主が哀れた。

『マキサマのお言葉を聞いておられたでしょう? これでお分かりですわね。わたくしが不貞を働いたのではないということが!』

つまり……ルイスの金髪碧眼が夫婦の危機を招いたってこと?

……妹さんいるけど。

『おおお、おまえこんなところでなんとということをし！』

『いいえ！ この場ではつきり申し上げておきます。ルイスはあなたの息子です！ わたくしが幼き頃より誓ったただ一人の方にすべを捧げたというのに、あなたはまだお信じになられないのですかっ！』

『し、信じているとも、ねえ？』

助けてくれと領主が娘に眼で訴える。しかし令嬢は、優雅に小指など立ててティーカップを傾けるばかり。

ガンバレ、領主。自分の奥さんだ。御してこそ、いや御されてこそ男だ。

潔く散って来い。

あたしはにつこりと、テーブルの影で小さく手を振った。領主の笑顔が微妙になる。

ついでに夫人には、横からガッツポーズを送る。あたしの親と同世代とも思えない美しい奥様は、見事に戦闘的な微笑をたたえ、ご主人をお茶の席から強引に引きずり出した。

お茶を注いで回る侍女たちの、なんと動じないことか。

嵐のごとく去っていた夫婦を見送り、喋り疲れたあたしは、淹れたてのお茶を美味しく頂いた。うん、喉に染みるよ。

『あれって……喧嘩するほど仲がいいっていう、あれ？』

『まさしくそれ』

いつの間にかあたしの隣に来ていたルイスが、お茶を飲みながら答える。たしかに顔立ちは、領主よりも婦人似だ。だけど体格は明らかに父親譲りで、なおかつあれだけ先祖に似ていれば疑う余地なんてありそうにないのに。

そんなことを思いつつ喉を潤していると、テーブル越しの席からぼつりと呟きが聞こえた。

『……本当、呆れた人たちですこと。わたくし、あとで年の離れた兄弟ができたって聞かされても驚きませんわよ』

『ぶっ！』

こっちが驚くわ！

お茶を気管に入れかけたあたしは、涙目で向かいのユリアミス嬢を見た。さすがルイスの妹。よくできていらっしやる。

『ユリはませていてね』

『あんな親を持つと嫌でも大人になりますわ』

『ユリさん、おいくつなんですか？』

『十一才です』

小5ですか。てつきり十四才くらいかと思ったのに。結構下なんだ……いや、精神年齢はすでに負けてるような気がする。

『大人つばいですね』

『マキさまはおいくつなんですか？』

『あ、さまは抜きで。これでも十六です』

『では、わたくしのこともユリと。マキはご結婚されてらっしやるの？』

さすが女の子。話題がラブリーだ。

『いえ。法律で女は十六で結婚できるんですけど、さすがに早いほうですね。だいたい二十代……なかばとか後半とか。今は三十超えても普通です』

『遅いんですね』

姫君に可哀相な目つきで見られると、ちょっとツライですが。

『では、兄でも充分ですわね？』

『はは。そういえば、ルイスも独身なんだよね。これって遅いほうなの？』

『普通だ』

『兄は女嫌いで困ってますの』

女嫌い？ 下着の下に興味があるなんて言ってたやつが？

あたしが思いきり意外そうな顔をしたせいか、片隅に座るシグバルトがくすりと笑った。本来侍従と一緒に座らないけど、お客さんつてことで無理やり一緒の席にしている。

『シグバルト、ルイスって女嫌いな？』

『私の口からは何とも……ですが、あまり女性のお客様をお招きした記憶はございません』

『陰でこっそりとかでなく？』

『……私を何だと思っっているんだ？』

『だってルイス、顔が良くて仕事も持つてて家柄もいいのに女性が近寄ってこないっていうのは、絶対性格に問題があるってことだよ。そうか、やっぱり腹黒さが滲み出るのかな？』

『腹黒いか？』

『ときどき笑顔が怖いもん』

ほら、その顔だよその顔。整ってるから余計に恐いんだって。

『ルイス、腹黒いのはきつちり隠して要所要所で押さえてかないと効果ないんだよ？ そのへんちゃんと自覚しないと、むやみやたらに敵作っちゃうよ？』

『考えて物を言わない君に言われたくない』

『考えてるもん』

考えてはいる。ただ、思考回路が混乱したまま喋る癖があるというだけ。自覚はしてる。制御できてないけど。

『あたしの深謀遠慮なお言葉が伝わらない？』

『深謀遠慮の意味を知っているのか？』

『？深いばかりごとを遠くおもんばかりか？と書くはずだけど、違う？』

こちらら日常生活漢字だけい。女子高生だけい。知ってるさ、それくらい。

ルイスが深々と息を吐いて、額に手を当てた。

『君を天都に連れて行くのが不安になってきた』

『今さら？』

『本当に本気で王の前では一言も喋らないでくれるか。いや、むしろ喋るな。絶対に』

そこまで言われると言い返さずにいられないですけど？

『ルイス。どう考えても挨拶はするよね、あたし。ってか、しない

といけない、よね?』

絶対に。

『そこで黙っているほうが、よっぽど問題だと思っただけですけど?』
『……』

『こんにちは、はじめましてと名前とさよならは基本だよな?』
つてゆうか、常識?』

ルイスの口から溜息出たぞ。幸せ逃げちゃうぞつ。

『ルイスさん、考えてから発言しましょうね?』

『……それ以外の言葉は言っなよ』

『言わないよ。必要ないことは喋らないよ』

相手が何か言ってきたら分かんないけど。

『言い返すのだけはやめろ』

『なんで?』

『疑問も禁止だ。本当に処刑されたいのか。十六の若い身空を散らしたくはないだろう?』

そうだけだよ。

『でも……正直、偉い人にぐるつと囲まれてたら、きっとあんまり喋れないと思うよ?』

『周りの目を気にする余裕があればいいが、君は頭に血が昇ったら周りが見えなくなりそうだからな』

う。凶星。なんでだ? ルイス、この三日であたしが分かったのか?』

『君は分かり易すぎる』

えーえーそうですか。腹黒大王にはかないませんよーだ。

あたしはやけ食いするみたいに、目の前のクッキーもどきを口に放り入れた。

おお、美味しいつ。

疲れた時には糖分だよな。やさしい甘さのお菓子が口の中で溶けると、あたしの機嫌もすっかり良くなる。

シグバルト曰く?仲睦まじい?あたしとルイスの不毛な会話がだ

らだらと続き、一秒で終わるはずの挨拶は二時間ものお茶会に大変身して、帰る頃にはなぜだかあたしは、すっかりユリから？マキおねえさま？と呼ばれるようになっていた。

5 - 4 (後書き)

ちよっとお勉強タイム。鴉合が習ったのは高校だった気がする…。

アクイナスのお屋敷で余計な時間を取ってしまった、結局あたしたちは予定より一つ手前の都市ヴィゼで宿をとった。

そこからシグバルトがコマを恐ろしいまでの手綱さばきで操って、でんぐりがえった胃の中身が鎮まってしまうほどの猛スピードで突っ走った馬車はヴィーゴ、ファリマと抜けて、夕方日没と共に天都キヨウの王城に到着した。

王様との約束は、二十四時間時計で十八時。ぎりぎりセーフ、なんて思っていたら、お城の門から茶髪の男の人が走り出てきた。

『レス』

『なにをしていた、ルイス。もうイエド側は着いているぞ。王はお待ちだ。急げ!』

おっとヤバイ。

あたしは女子高生スタイル、ルイスはいつものシャツの上から魔法士の正装らしき白地金糸の縦襟の上着を着て、金の飾りのついたマントをふわりと羽織る。

か、かつこいいい!

なんて見惚れてる暇はない。はぐれないようにルイスに手を握られ、あたしたちは豪華な緋毛氈を敷いた王城の入口を猛ダツシュした。

走りながら、ルイスと色違いの青の上着を着た茶髪の彼が手を差し出す。

『初めまして。私はレスライン。ルイスの同僚だ』

『マキです。よろしく』

『走りながら喋ると、舌を噛むぞ』

左斜め前からルイスの声が飛ぶ。舌噛んでおとなしくしていれば

いいと思ってるくせに。

『噛んでも、もう一枚あるからいいもん』

右側のレスラーがぎょっとした顔をする。

『冗談です』

『君の冗談は心臓に悪い』

『ルイス、鋼（はがね）の心臓って呼ばれてない？』

『しばらく黙る気はないのか』

『気、でいいんなら』

『黙っていてくれ』

そんなやり取りをしながらも、あたしたちのダッシュは止まることがない。しておいてよかった、体育会系部活動（コーラス部だけど）。

頭を塔みたいにした人や、びらびらの服を着た男か女かわからない人たちがびつくりしている顔やら、絶対に目にしたことのない破格級のお城の内装なんて見ている余裕なんて当然なく、あたしたちは息を切らして、王様の待ち受ける部屋に飛び込んだ。

左手には三段ほどの高座があつて、金ぴかの椅子に座る髭のおじさま、おそらく王様。右手にはよく分からない奇妙な化粧をしたおじさんたちに僧服っぽい長髪の集団などが、五、六列ぎつちりと並んでいる。

あたしのいる側と反対のドアから、その子がやってきた。

背が低い。守るように前に立つ大きな男の人のせいで、余計に華奢に見える。彼女の手を握って、若草色の魔法士の服装をした女の人が後ろをついてきた。通訳しているのかもしれない。

そんなことを思いながら、あたしはどきどきが高まっていくのを感じた。

少し顔色が悪そうだな。長距離だというから、移動大変だったのかな。顔が見たい。声が聞いてみたい。

なんだか初恋の人に会うみたいだ……！

きつと感動の対面って、こんな瞬間のことをいうんだろう。

あたしは高鳴る胸を押さえながら、隣に立つルイスを見た。ルイスはレスたちと眼で会話して、あたしの背中をそつと押す。

『好きに話をしていいそうだ。行っておいで』

『う、うん』

おぼつかなく頷き、あたしは一步前に出た。その子が、隠れるようにしていた男の人の背中から半身を見せる。

紺地、白いラインとリボンのセーラー服。

間違いない、同じ日本の女子高生だ。

あたしはものすごく勇気をもらったような気がして、ゆっくりと右手を差し出した。

『こんにちは、初めまして。あたし、朝野真紀です。よろしく!』

これが、あたしと彼女の出会い。

運命があるなら、その大切なピースがひとつ埋まった瞬間だった。

5 - 5 (後書き)

今回ちょっと短めでした。

次回は理緒子のターン。異界の乙女が決まります。

第6章 運命 リオコを選択

1

イエドから二日半かけて辿り着いたキヨウは、本当に大きな美しい都市だった。緑が豊かで、きちんと整備された川から抜ける風が涼しくて心地よい。

実際、緯度もいくらか高いので、イエドより五、六度は気温が低いのだそう。だけど、車酔いがひどくなつたわたしは、そんな景色を楽しむ余裕は当然なくて。

王城に着いた途端、迎えに出てきた神官という人にラクエルが頼んでくれて、わたしは早々に用意された部屋で横になった。

本当は、異界の乙女という存在は神殿のほうにいないといけないみたい。けどアルマン王子もいるし、特別に宮殿の客用寢室を借りることになった。もうひとりの子はまだアクイナスから来ていないようで、夕方の王様との会見までゆっくり休む。

しばらく振動が残っているみたいで体がふわふわしたけど、少し落ち着いた頃、わたしはお風呂に入らせてもらった。なんとって丸二日入ってないし、汗と埃でものすごい状態だった。

さすがにキヨウには温泉がない。部屋の一画で、盥みみたいなものに腰までのお湯を張って浸かる。狭いし足も伸ばせないけど、気分はだいぶ違った。

お湯から出て体を拭き、持ってきたセーラー服に着替える。白いドレスに慣れてしまって、鏡で見ると少し違和感だ。

でも、これが本来のわたしなんだよね。

言い聞かせて、わたしは王様との会見場に向かった。

その子は、まるで駆け込んできたばかりのように、息を切らせてこちらを見ていた。背が高い。スポーツでもしているみたいで、力

モシカのようなっていう表現がぴったりする子。

隣には、こちらの世界で初めて見る金髪の男の人がいて、彼女に話しかけていた。彼女が頷く。ぱさり、と真つ黒な短い髪が顔にかかる。どこか中性的だ。

きつくも見える茶色の瞳がわたしを真つ直ぐ向いて、ものすごく嬉しそうに笑った。右手を差し出してくる。

「こんにちは、初めまして。あたし、朝野真紀です。よろしく！」
はつきりと良く透る声が、明るく日本語を喋った。本当に日本の言葉。日本の子だ。

わたしは、嬉しいのとびっくりしたのとで、しばらく固まってしまった。

その子が首を傾げる。

「大丈夫？ 顔色、悪いけど」

「う……うっん、平気」

会話だ。なんて久しぶりなんだろう。わたしはうるうるきそうになって、ちよつとうつむいた。

わたしを庇うように前に立つタクが、肩越しに心配そうな視線を投げってくる。わたしは大丈夫だというように頷きかけ、一人で彼女のほうに近付いていった。ぎこちなく会釈する。

「はじめまして、高遠理緒子です」

「りおこ？ めずらしいね。漢字どう書くの？」

「理科の理に、糸偏に者の緒で子供の子」

「あたしは素直の直に、キノクニヤの紀で真紀」

にっつと笑う。

人懐っこい話し方。きつと初対面の人とも気軽に打ち解けるタイプだね、わたしと反対で。

「久しぶりだあ、日本語トーク。……ね、握手してみて？」

わたしは、おずおずと彼女の右手を握った。と、ふわんつと音の質感が変わる。

なにかひとつ膜がかかったみたいに音声がぼやけて　そして、

はつきりと分かる言葉になった。

『なにを会話しておるのじゃ、乙女らは』

『異界の言葉とは難儀よの』

『貧相な子らじゃの』

『どちらが偽りを申ししていたか見物（みもの）じゃの』

ひそひそと囁きあつた皆さんの声。分からないからと音楽のように聞き流していた音たちが、しっかりと意味を持つ言葉として認識される、奇妙な感覚。

『驚いた？ ちよつと気持ち悪いけど、すぐ慣れるよ』

『これ……』

『魔法の指環』

真紀がおどけて、あたしの手を握つたまま甲を返す。

中指に光る紅い石。アクイナスの魔法話の指環だ。

『ちなみにこれしていると、こつちの日本語トークも向こうに知られちゃうけど』

声を落としたまま囁く。そうか、ここは王様の前。べらべら喋つてばかりもいられない。

この会見は どちらが本物の異界の乙女かを見極めるために開かれたもの。

『ね。正直、どう思う？』

『……よく、分かんない』

『あたしも。まいるよね、ただでさえ知らない世界来てパニクってるのに、乙女とか言われてさ。知ったことかかって感じなんだけど』

早口で囁くようにまくしたてる。この人、けっこう容赦ないタイプだ。

『もうちよつと時間欲しいよね。二人でゆつくり話せないかな？』

わたしも同じことを考えていた。こくりと頷く。

『よし、頼むか』

男の子みたいな口調で呟き、あたしの手を握つたまま、真紀はまっすぐに王様を見上げた。

「すみません、お願いがあるのですが」

「……なんだ？」

「わたしたちは、知らない世界で旅をして疲れています。このまましばらく二人で、別の場所で休ませてもらえないでしょうか」

王様の頬髯の生えた顔に、冷たい笑いがよぎった。

「密談をいたしたいというなれば、承知するわけにはいかぬな。取引があつても我らには分からぬ。今この場で決断を示すがよい」

どちらが本物か。

王様の目は、磨きぬかれた真つ黒な宝石のようで、どこまでも感情が見えなかった。

真紀は唇を噛み、睨むように王様を仰ぐと、わたしと繋いでいた手をほどいた。ゆっくりと進み出て、中指から引き抜いた指環を誰もいない絨毯の上に置き、そのまま戻ってくる。

わたしの胸が、どきんと跳ねた。

う……わ。こんなこととして大丈夫なの？！

密談を拒否したばかりの王様に堂々と齒向かうその姿に、わたしは、すごいというより恐くなった。

心臓がばくばくして立っていらなくなるわたしの手を、真紀がもう一度取る。

「ごめん、理緒子って呼んでいい？」

「う、うん」

「あんまり時間とると王様マジ切れすると思うから、手短にいこう。」

理緒子、自分はどうしたい？」

自分はってという言い方が、少し聞き慣れない。わたしは考えるように下を向いた。

「よく……分かんないよ。家に帰りたいとは思っけど」

タクヤラクエルも好きだけど。この世界を救う自信なんてない。

「あたしは逃げたい」

はつきりと頭のすぐ傍で低い声が響いて、わたしは顔を上げた。

「え……」

「すごく逃げたい。恐くて、ここから尻尾巻いて逃げてお家に駆け込みたい。でも、できない。だから決めよう、二人で」

「なに……決めるの？」

「どっちが異界の乙女か、決めよう。あたしも理緒子も乙女にはなりたくない。でも、ならなきゃいけない。この人たちが納得しないから。だけど、約束。どっちが乙女でも、絶対ぜったい二人で一緒に日本に帰ろう。ぜったい一緒に」

「うん……うん！」

ああ、この人はわたしを見捨てる気がないんだって、そのとき思った。

一緒についていう言葉が、すごく　ものすごく嬉しかった。

「うん、帰ろう」

「約束ね」

自然と向けられた真紀の小指に、丸く曲げた小指をかける。

指きりげんまん。小学生以来かな。ちよつと照れくさい。

「でも、どうやって決めるの？」

「決め事といえば……じゃんけん？」

そんな重要なことをじゃんけんなんかで決めてしまってもいいのかな？

ちよつと疑問に思った。

ただどわたしが反対しなかったせいかな、真紀は大きく頷くと、手を離して少し退る。

「よし、いつくぞー」

最初はグー、じゃんけん……

真紀がグー。呆気にとられていたわたしは、出すタイミングが間に合わなくて、なぜかパーを出していた。

真紀が眼を真ん丸にしている。

「後出しで勝つか、ここで？」

と、ぼつり。

うん、わたしもそう思うけど、勝っちゃったん、だよな？

「け、決定？」

「うん。異界の乙女決定」

真紀のダメ押し。わたしはなぜか可笑しくなって、くすつと笑った。

世界の一大事を、じゃんけんで決めちゃった。しかも勝っちゃった。どうするんだろう、わたし。

それでも笑いは止まらない。ネジがどこかおかしくなったのか、口を押さえて笑いに沈むわたしを、真紀が思いきり両腕にぎゅっと抱き締めた。

「すっごい、理緒子天然。さいこー」

笑いながら耳元で囁く。

「一緒に水門探そうね。あたしたち、一緒に帰るから」

「うん……！」

きつと最初から、真紀はどっちかかって決める気なんてなかったんだと思う。勝っても負けても、彼女は水門の鍵を探しに行った。そう思う。だからじゃんけんなんてこと、言い出したんだ。

感激して後からそう言ったら、

「え、だって他に思いつかなかったんだってば。マジで」

なんて言われたけど。真紀ってわたしより天然なのかも。

そんな彼女は、床から紅い指環を拾いあげると、ためらいもなくわたしの左の人差し指に嵌めた。

「乙女には指環、でしょ？」

「でも……」

これは真紀がもらったはずなのに。

「ルイスには後で言っとく。今まで散々あたしが使っちゃったから、今度は理緒子が使う番。ね？」

ああ、もう。嬉しいのと驚くのとで頭ぐちゃぐちゃだよ。真紀、最高だ。

一瞬で永遠の友達になった彼女は、わたしの手を握り、王様に宣言した。

『 異界の乙女は彼女です 』

ざっと大風が湧き立つように、その場にどよめきが走った。その中、真紀の声が吹き抜ける。

『 彼女とわたし、二人で水門の鍵を取りに行きます！ 』

第6章 運命 リオコノ選択（後書き）

… やっぱり真紀暴走。

2

真紀は、わたしと同じ高2つてというのが嘘みたいなほど、堂々と王様と会話していた。

顔は赤くなっていたし、わたしの手を握る手の平は汗ばんで時々ぎゅって力が入ったけど、それでも信じられないくらい自信に満ちていた。足はがくがくだったらしいけど。

「二人で行くだと？ そんな話は聞いたことがない」

「お聞きになったというのは予言ですか？ それとも、百五十年前のほとんど残っていない記録のことですか？」

百五十年前の記録ってなんだろう？ やっぱ指環を手にしていた真紀は、わたしよりたくさんを知っているみたい。

わたしは爆発しそうな心臓を必死でなだめながら、隣でそれを聞いていた。

「先程の会話で、わたしも彼女も間違いなく同じ異界から来たかと確認できました。ただ、彼女のほうがふさわしいとの印が出たので、彼女を乙女と言っただけです。わたしは彼女の手助けをするために来たのだと理解しています。二人で聖地へ行くことを認めてください」

「ならぬ」

「では 水門は開かれなくてもいいのですか？」

再び、ざわりと部屋が揺れる。

王様に向かつてすごく挑発的な言葉だけど、本当に大丈夫かな？
なんか向こうの金髪の人、眉間にすごい皺寄ってるけど？

「王様、わたしたち二人にチャンスと時間をください。何の力もないように見えますが、この世界に招かれたのなら、そこにはきっと理由があるはずです。それを解き明かす機会を与えてくれませんか」

？二人いれば、そのチャンスは二倍ある。そう考えてはもらえませんか？』

『二人とも偽者なら、なんとする？』

『この世界は乾ききって滅ぶか　いいえ、実は滅びないかもしれない。人間はしぶとい生き物です。どうやっても生き延びようとする。本当は、そこにわたしたちの手助けなんてなくても良いのかもしれない。』

それでも、より多くの人が生き延びられるチャンスがあるなら、賭けてみるのが王という立場の務めではないでしょうか。たとえ失敗しても　』

真紀は一度言葉を切って、唇に不思議な微笑を浮かべた。

『異界の人間の命など、こちらの人たちの知ったことではないでしょう？　この世界に最初からいるはずのないものが二人いなくなる。それだけです』

『命を懸けると申すのか』

『他に賭けるものが、わたしたちにありますか？　この体ひとつで異界から来たのです。戻りたくてもその方法を知らず……この世界に保護してもらえないのですから』

そうだよ。

わたしは、真紀の腕の陰でこっそりと頷いた。

選ぶようなことを言ってるけど、元からわたしたちに選択権はない。分かりきったことなのに、わざわざそれを突きつけられているように、すごく哀しいし腹が立つ。

『与えるのは、機会と時間だけでよいのか』

『このアクイナスの魔法の指環と……あとは、旅の間わたしたちを守ってくれる信頼できる人たちを何人か。それに、この世界で基本的な生活ができる程度の自由になるお金を下さい』

はつきり言うなあ、真紀。大人っていうか、もう男前だよ。

王様も同じことを感じたのか、無表情だった顔に初めて感情の色が見えた。苦笑ってやつだ。

『ふ……威勢のいい小娘め。申すとおりにしてやる』

『あ、ありがとうございます』

『ただし、こちらからも条件がある』

『条件？』

『期限は二週間だ。それを超えたら、二人とも覚悟するがよい。無論同行する者も同罪とみなす。よいな？』

二週間。短いよ。きつとあつという間だ。タキィアマグフォーラつて遠いのかな？

『それから、明日おまえたちを城の皆に披露する。以上だ』

嫌とかなんとか言える雰囲気じゃない。王様は立ち上がって、並んでいるみんなが一斉に頭を下げる中、さつさと部屋から出て行ってしまった。

気が抜けたように立ち尽くすわたしの耳に、駆け寄ってくるタクとラクエルの声が届いた。

『リオコ！』

たぶん、これから波瀾万丈。けど大丈夫。彼らがいる。

そして 新しくできた男前な友達がいる。

きつと大丈夫。

ここへきて不思議なくらい、わたしは前向きな気持ちになっ
た。

3

『えへ。タク、ラクエル。わたしの言葉、分かる？』

そう話しかけたら、二人はちょっとびっくりした顔をして笑ってくれた。

『ええ、分かりますとも』

なぜかやや涙目で、ラクエルが頷く。タクも頷いて、すごく優しい声で言ってくれた。

『これでやっと、きちんとリオコと会話ができるな。大丈夫か？』

やだなあ、タク。魔法で会話する最初から大丈夫かなんて、本当どれだけ心配性なんだろう。

会場には、列を崩して去っていく人やまだ残っている人たちのいろんな話し声が、魔法の指環でも聞き取れないぐらい渦巻いていたけど、わたしはできるだけそこから意識を切り離すようにした。わたしたちに向けられる視線や声なんかより、もっと重要なことがあったから。

胸に押さえ込んでいた想いを落ち着かせるように、息をひとつ吐いて、二人に頭を下げる。

『えっと、二人ともこれまで本当にいろいろとありがとうございます。これからも、よろしくお願いします』

真紀のようにうまくはいかない。ちょっと声が震えてしまった。

それでもタクとラクエルは、やっぱり少し驚いて、これまで以上のあたたかい笑顔をくれた。

『もちろん、お傍におります』

『ああ、これからもずっと俺たちがリオコを守る』

『……ありがとう』

わたしが二人と和やかな会話をしている横で、真紀がやってきた

金髪の人の前で、ものすごく罰が悪そうな顔になっていた。左手を繋いだままだから、まだ魔法で会話可能なんだ。

『ごめん、ルイス。指環、勝手にまた貸ししちゃった……』

『……』

『怒ってる……よね、やつぱり？』

あれれ？ さっきの勢いが嘘みたいなのに、真紀がしよげかえってる。ええと、塩を振りかけたなめくじ はあんまりだから、ほうれん草ってくらいで。

ラクエルとは色違いの服を着た金髪の男の人は、外国の俳優に負けないくらいきれいな顔立ちで、だから余計に無言なのが恐い雰囲気だ。大きく溜息をついて、真紀の髪の毛を片手でぐしゃぐしゃつとかき回す。

『指環はいい。問題は』

『う。ででも、必要なことしか喋んなかったよ？』

『挨拶だけにしろ、と言ったはずだけど？』

あ、この人、真紀が暴走するのを予想してたんだ。それで眉間に皺かあ。納得だ。

『挨拶する暇もないくらい王様感じ悪くて……』

『当たり前だ。王が臣下の前にこにこしているとも思っのか？』
『違うの？』

真紀がきよとんとした顔で、ルイスって人を見る。きっと大企業の社長さんとか想像してたんだろうなあ。わたしもアルマン王子の時、そうだったから。

だけど、やつぱ身分制の上に立つ人と？お客様は神様です？って世界の人は全然違うんだよね。コインの裏と表くらいに。

『王が臣下に媚びる理由がないだろう？』

『こにこしてないと部下に嫌われない？』

『好きでも嫌いでも、王は王だ。こにこ笑う王など、気味が悪くて私は仕える気にならなぞ？』

『本当に面白いことを考える娘ですな』

艶のある猫みたいな声がして、髪の高い男の人がその場に現われた。さつき列の一番前にいた人だ。

ぱつと見分かりにくいけど、濃い墨のように鈍い光を放つ色の髪が印象的。ところどころ白いメッシュが入って、余計きらきらしている。

着ているのは僧服のようにも見える丈の長い上着とズボン。同じ格好をしていた人たちより、首から金色の布とか数珠みたいなものをいろいろ提げていて豪華だ。

その人を見た瞬間、真紀が二十メートルくらいダッシュで退った。「でででであああっ！」

まるで幽霊みたいなことを言っている。みんなには分からないけど、雰囲気は伝わったらしく、長髪の人が不機嫌そうな顔をした。

「何ですか、その反応は。私をなんだと思っているのです？」

戻ってきた真紀が、わたしの左手を取る。どうやら言葉の後半は聞けたらしくて、

「首切り役人？」

と即答した。

ぶはつと向こうで青い服の茶髪の人が笑い転げている。ルイスもタクモラクエルも苦笑い。だけど、当の二人は大真面目だ。

「なんですか、その言い草は」

「え、だって失礼な人の首、刎ねちゃうんでしょ？」

その人はかすかに舌打ちをして、ルイスを横目で睨んだ。恐い笑顔を見つめる。

「そうですよ。首を刎ねる相手と知って、その態度ですか？」

「だって首は一個しかないし、今さら取り繕っても無駄かなあって、だったら言いたいこと言っておこうかと」

「ほっ……」

つめたーい視線。こういうのを氷の眼差しって言うのかな。

「せっかく出発までの時を快適に過ごして頂こうと最上のお部屋をご用意したのですが、どうやら必要なかったようですね」

『え？　なんでヘクターさんが部屋を準備してくれるの？』

真紀が真剣な顔で首を傾げる。

『ヘクターさんは大神官で、クガイっていう身分でカヌシエのえらい血筋の人なんだよね？　なんでうちのらのために働くの？』

真紀ちゃん、そこまで分かっているなら敬語使おうよ。

思わず、心の中で突っ込みを入れてしまう。うちら、なんて関西のノリっばいし。

『異界の乙女は伝説の存在。神殿では？神聖な？使いとされ、私も神官がお世話をする決まりとなっているのです』

『ふーん。そつか、それでルイスがヘクターさんに報告してたんだ。お世話になりまあす』

素直にぺこりと一礼。

『あなたは乙女ではないということでしたから、どうしましょうかね？』

『まあまあ、でもほら、一応異界の人間だし？』

『初対面で首切り役人呼ばわりされたわけでもありませんし……』

『いや、初対面ではないよ？　一応鏡電話で』

『ああ、怒鳴られましたよねえ。迷惑、とか言われましたし』

ヘクターさん、遠い目。ってゆうか、真紀にしたの？

笑いを抑えた声で、茶髪の人が訊く。

『大神官ヘクトヴィーンを怒鳴ったのか？』

『いや、だって偽者とか言うしっ』

『異界の扉の調査もできていないと叱られましたよ……。私のプライドはもうずたずたです。せつかく夢にまで観た異界の乙女に会えると思つて、楽しみにしておりましたのに』

『いやだから、あたし乙女じゃないし？　だいたいヘクターさんつて、乙女信じてたの？』

『信じないと口では言っても、心の底では熱い想いがたぎっていたのです』

『あー嘘っばい』

『本当に口の悪い子ですね』

お仕置きしますよ、とヘクターさんにんまり。どわああと真紀が慌てふためく。

うん、これは完全にあれだ。コントだ。でも真紀は顔を真っ赤にして、少し涙目。あれ、まじ？

二人の間を遮るように、ルイスの片腕がすつと入った。

『それくらいでいいだろう、ヘクトヴィーン。年下の娘に意趣返しなど大人気ない』

『少しからかい方が過ぎただけですよ。あなたも彼女には甘いのですね、ルイセリオ』

『……ヘクターさん、ほんとに怒ってない？』

ルイスの腕越しに、心細げに真紀が見ている。大神官はようやく、それらしい笑みを浮かべた。

『会つのが楽しみだと言ったでしょう？ 確かに少しは驚きました
が、ね』

『よ……よかったああ』

『あなたは強気なのか弱気なのか、よく分からない子ですね。王の前で指環を外したときは、私でさえひやりとしたのに』

わたしもどきどきだったよ。

『だって……どうしても話、聞かれたくなかったし』

異界の乙女がじゃんけんして決まりました、というのは絶対に二人の秘密。二人とも、異界の乙女にかなりたくなかったってことも。

『ルイセリオ、もう少しこのお嬢さんにこの世界の常識を教えて差し上げるべきでは？』

『予想はしていたよ』

あつさりと金髪の男が言う。

『彼女が父に？ありのままに王に会いに行く？と宣言した時から、
想像はしていた』

ちよっと待った、真紀。ルイスのお父さんにも何かしたの？

『おや、アクイナス領主にも齒向かいましたか』

『あの頑固親父がよく許したものだ』

ヘクターさんと茶髪さんがしみじみしてる。真紀、すごすぎじゃ???

『だってお父さん、ルイスにすごく失礼なことを言ったし……』

真紀がぼそぼそ言い訳する。わたしは、あっと思った。

いたいた、こーゆー子。妙に正義感強くて、いじめっ子には容赦なくいじめ返す子。だけど、ガキ大将ってわけじゃない。

わたしも幼稚園のとき、おっきな女の子にいつも守ってもらってた。ちよつと真紀に似てる？

『まったく君は、他人のことだと強気になるくせに、自分のことはなぜきちんとできない？』

ルイスの口調は、子供を叱る親のような 妹を叱る兄のような

暖かいもので。

『ごめんなさい』

『最悪の事態にならなくてよかった。いつ王の逆鱗に触れてもおかしくはなかったのだぞ？』

『……はい』

『反省するなら、もっと自分を……いや、私のほうを気遣ってくれ。このままでは私の心臓が鋼でも、いくつあっても保たない。本当に君は驚くことばかりする』

それはものすごくひねくれた、心配している、という表現。

だけど、言葉よりも雄弁に動作が物語っていて。ルイスは親鳥が小鳥を胸に抱くみたいに、伸ばした片腕で真紀の頭を引き寄せた。

『目が離せないな……まったく』

どこまでも優しい囁きは、顔を真っ赤にして彼の胸にいる真紀には、たぶん伝わっていない。指環から手を離してしまったから。

ただど言葉はなくても、二人の間にはそれ以上の繋がりがあるよ
うな気がして わたしは少しだけ、うらやましくなった。

6・3(後書き)

これで「出逢い編」おしまいです。
次回幕間を挟んで、「天都編」に参ります。

I n t e r l u d e ?

男たちの会話（前書き）

第三者視点です。

異界から訪れた乙女らの接客の要を務める大神官へクトヴィーンは、少女たちを用意の部屋へ通し、イエドの使者を残して、自ら補佐と据えた二名の魔法士を別室に招き入れた。

扉を閉めるや、魔法士団「孤月」（こげつ）の士団長レスラーンが、この国には珍しい茶色の瞳を悪戯っぽく輝かせて、「双月」士団長ルイセリオに尋ねる。

「君が彼女の行動を予測していた、という話だけど……どうやって父君が君を侮辱した話から？ありのままに王様に会う？なんて台詞がでてくるんだ？」

彼よりもさらに稀有な容姿をした男が、かすかに苦笑を洩らした。「父が、私に代わって彼女を天都に連れて行くと言い出してね。それを反対した彼女が」

「わたしを最初に見つけた彼が直接報告すべき」

「彼は領主の子なのだからアクイナスの代理と成り得る」

「そこから？わたしは異界から来たというだけのための少女だから、大袈裟にして欲しくない？という論旨に移ったんだ」

「めちゃくちゃですね」

「支離滅裂　だが、きつとあの調子で言ったのだろうか　小気味いいね。俺は好きだな」

柔和な笑みを湛えたレスは、実はとても辛辣な精神の持ち主でもある。弓なりの三日月を模した「孤月」の印章は、月の剣とも例えられた。

基本的に、争いごとを善しとしない大神官が眉を顰める。

「しかし王に対してあの態度とは」

「奇抜なものを好む王だ。異界の者と多少は許されよう」

「……ルイス。君は、彼女が？自分は異界の乙女ではない？と言いつつと予想していたな？」

「ああ。あの性格だからな」

「二人の間でどのような話し合いがなされたかは分かりませんが印とっていったあのまじないのようなものも不明ですが　この結論で是（ぜ）とするほかありませんね」

「俺は、これが最善と思うよ」

茶色の髪の魔法士は、きつぱりと意見した。大神官の口元が微苦笑にほころぶ。

「まあ確かに、マキよりもリオコのほうが乙女としてしっくりくる気もしますが　」

「そんなことを言っているんじゃない。アルマン王子だ」

「イエドの王子が来ているのか？」

ルイスの声がわずかに高まる。

やわらかい童顔に皮肉な陰りを漂わせ、レスが首肯した。

「臣下の心情に配慮して、先の会見は王が列席を許さなかった。見物客に公平さを欠くと思ったのだろう。だが、これでアクイナス側が本物となれば、血を見るくらいでは済まされなかったぞ」

「異界の娘の破天荒な思いつきに、われわれのほうで救われていたというわけですか……。私としたことが迂闊でした。やはり王子の登城は止めるべきでしたね」

「今さらどうにもならない。それに、連れてきた娘が真の異界の乙女であろうとなかろうと、あの王子がそのままおとなしく背後に隠れているはずもないだろう？」

その場に流れる固い沈黙が、肯定の意を示す。

「ルイス、気をつけるよ」

茶色の瞳が、深い闇を秘めて蒼天の瞳を見た。

「いかに本物でなくとも……彼なら邪魔者を排除しかねない」

「　分かってている」

答える男の顔に落ちる表情を、異界の娘たちが見たらどう思ったであろう。

それほど冷ややかで容赦ない青の炎がその両眼に灯され、誰にも

崩すことのできない氷の仮面が表を覆い尽くしていた。

Interlude ? 男たちの会話（後書き）

ヘクターさんは、意外とフツターの常識人です。

第7章 宴 マキの後悔

1

理緒子は正直、ルイスには会わせられなくらいかわいい子だった。あたしが異界の普通と言い切ったのを即行後悔したくらいなの。顔立ちが特別というのではなく、なんというか 全体的にかわいい、のだ。

あたしの目の高さくらいしかない身長も細い手足も、ふんわりしたダークブラウンの髪も、ちょっと人を窺うような二重のつぶらな瞳も、真っ白な肌に細い顎。小さな口や鼻、華奢すぎる指なんかもすべてが？ ザ・女の子？ な感じで、保護欲をすごくそえられる。

彼女に貼りつくようにしているでっかい男の人は、モロそれにやられてるって雰囲気だ。

魔法士らしいラクエルも、通訳の仕事がなくなって逆に寂しいのか、侍女のシエナと一緒に理緒子の傍で甲斐甲斐しく世話を焼いている。かなり過保護だ。

王様との会見場を出たあたしたちは、大神官のヘクターさんの準備してくれた部屋に案内された。本当は神殿に用意するはずだったけど、二人もいるし、理緒子にはイエドからアルマン王子というのが付いて来ていて、都合上お城の中の客室が充てられたらしい。いろいろ大変なんだ、ヘクターさん。首切り役人なんて言っ、ちよつと罪悪感がうずいた。

ルイスの同僚だっというレスは、その一言がものすごくツボだったらしく、案内してくれる最中ずっとヘクターさんを笑っていた。仲、いいんだ。三人はその後、仕事があるからとさっさとどこかに行ってしまったけど。

あたしの部屋は理緒子の隣。すごい大きくなって、隣といってもきつと声は届かない。理緒子の部屋にはラクエルとシエナもいたけ

ど、あたしはそっちに移ることにした。

だって、部屋の中にさらに個室があるんだよ？ リビングと寝室とお風呂とトイレは別だよ？ さすが天都。豪華さが違うね。

シグバルトが運ぶあたしの荷物を、部屋付きの侍従とタクが手伝ってくれた。シグバルトはやっぱりルイスの仕事を手伝わされるらしく、彼の別宅？に強奪してきた資料を置きに去っていった。いつの間にか秘書化してる気がするが、まあここはひとつ頑張ってもらおうということだ。

部屋に荷物を置いて少し落ち着いたあたしは、腕を上げてぐっと伸びをした。慣れない馬車に乗って体が痛かったのと、緊張とでがちがちだ。

「あゝお風呂入りたいつ」

「お願いすれば？ わたし入らせてもらったよ」

え、だからそんなに理緒子はふわふわでいい香りがするの？

「いいなあ。つてか、王様の前に出る時くらいきれいにしとくべきだったかなあ？」

「わたし早く着いたから」

ええ、遅くなったのはあたしのせいですとも。ルイスの実家で脱線したから。

「理緒子、ごはんとか食べた？」

ふるふるっと首を振る。ああもう、お人形さんみたい。

「車酔いしちゃって、今日はあんま食べてないの」

「ええつ。痩せちゃうよ、理緒子。こんな細いのに」

理緒子の手を取る。小枝みたく、でも爪の形もきれいな女らしい指。指環を嵌めようとしたら中指では緩そうなので、人差し指にした。

紅い石に触れると、言葉が翻訳されて響く。

『しっかり食べないと、タクに吹き飛ばされちゃうよ？』

傍にいた大柄な男が苦笑した。眉の下に傷もあってこわもてな感じが、一気にあどけなくなる。

意外に若いのもかもしれない。きつと作り笑いは絶対にしないタイプ。ルイスとは真逆だ。

そんな彼は、もちろん理緒子のお気に入りだったりする。

『タクはそんなことしないもんっ』

『はいはい』

『うー、真紀ちゃんにその言い方』

だから、睨まれてもまったく恐くありませんから。

かわいくてつい、理緒子の頭を撫で撫でしてしまう。

『背が縮むから撫でないでっ』

『もう成長期終わったでしょ?』

『まだ伸びるもんっ』

女の成長期は十代なかばで終わると思うけど。背の低さがコンプレックスらしい理緒子は、ぶつと頬を膨らませた。

『真紀ちゃんの背、半分ちようだい』

『半分も取ったらあたしとんだけ縮むよ? ってか、理緒子タク超えるよ?』

タクはルイスより背が高い。大雑把に頭半分。190ってどこ?

理緒子は154くらい。それにあたしの163の半分を足して、ゆうに二メートルを超えた理緒子はかなり不気味だ。

『もー、真紀ちゃん真面目にふざけないでっ』

『どっちだよ』

けらけら笑う。理緒子は上品に口を押さえて、うふふって感じ。

だけど彼女がそうやって笑うのが本当に嬉しいらしくて、最初あたしを警戒していたタクやラクエルやシエナの視線が、一気にやさしくなる。あつたかい、家族のような目。

理緒子、愛されてるなあ。

王子様がいる関係か、理緒子はいっぱい兵士の人を連れてきていたけど、たぶん九割の心はゲットしたんじゃないかとあたしは踏んだ。

『ねえ理緒子、ひよっとしてお嬢様?』

『そんなことないよお』

『だってこれ、有名女子高の制服だよな？』

肩にエンブレムのついた、時々ドラマにもモドキで出てくる超有名私立女子校。あたしでも知ってるよ。

ちなみにあたしが広島から来たって言ったら、理緒子の反応は微妙だった。ええ、位置づけた微妙ですから中国地方は。関西でもなく？九州でもなく？中途半端な感じ？

理緒子が住んでいたのは神奈川県。関東方面に疎いあたしには？都会？っていうことしか分からない。うん、東京近郊はみんな都会だ。

『やっぱお嬢様じゃーん』

『違うよー。ただのフツーの一般家庭』

おお、この台詞をルイスに聞かれなくてよかった。

と思ったら、話し合いを終えたらしい当の彼が戻ってきた。ひとつのベッドに座り込んで話しているあたしたちを見て、くすりと笑う。

『仲がいいな』

『ルイスが言つと皮肉に聞こえる』

『君の耳が勝手に変換しているんだ』

指環の効果抜群ってことですか、それは？

『ねえ、真紀ちゃん。わたし、ルイスさん紹介してもらってないよ？ この指環を持つてた人なんだよね？』

忘れてた。王様とのやり取りの後、ばたばたと会場を出て流れでこつちに来たから、まだきちんと挨拶していなかったんだよね、両家？とも。

ルイスはベッドに腰掛ける理緒子に歩み寄ると、ふわりとマントを広げてひざまずき、彼女に手を差し出した。ちょこんと乗せられた理緒子の右手を持ち上げて、その甲に軽く唇をつける。

『魔法士団「双月」土団長、ルイセリオ・セイアン・カーツォニア クイシアと申します。どうぞよろしく』

びっくりした。

ものすごく、ものすごく様になってるけど、なにその態度の違いは？

『あ、高遠理緒子です。はじめまして、ルイスさん。指環貸して下さい、ありがとうございます』

『どうぞお気になさらず。ルイスと呼んでくれますか、リオコ』

理緒子は真つ赤だ。そりゃルイス、罪ってもんだよ。その顔でその声で紳士的にされたら、潜んでいる腹黒さを知らない限り王子様級なんだからさ。

しかし……あたしとの扱いの差はなによ？

非常に納得がいかない。あたしの非難の眼差しをもともせず、ルイスはタクとも握手する。こちらはいたってシンプルに。

『ルイスだ、よろしく』

『タクだ。タキトウス・アルデイ・ムシャザ。アルマン王子の近衛隊長をしている。噂に高いアクイナスにお会いできて光栄だ』

『ムシャザ？ これは驚いた。イエドの英雄に会えるなどは……さすが乙女は勇者を従えている、というところなのかな？』

ルイスに振り向いてそう言われた理緒子は、分からずに目をぱちぱちさせている。代わりにあたしが訊いた。

『ルイス、タクって英雄なの？』

『ああ。ブーシエの家系であるムシャズ領主の三男で、並居る兵士が手を焼いたイエドの賊徒二十余名にたった一人で立ち向かって勝利した男だ。』

その戦いっぷりに惚れ、最後にはその頭領がみずから捕縛を願い出たとは有名な話だ』

おお、かなりの侠気（おとこぎ）！ 理緒子の目は真ん丸だよ。知らなかったんだ。

『それが功となり將軍の号を授かり、憲兵から王子の近衛隊に引き抜かれたとは聞いていたが、近衛隊長とはアルマン王子もなかなか見る目があるらしい』

皮肉ではなさそうだ。ルイスの眼が本気で輝いてる。獲物を見つけた感じか？

『若いそうだな。二年前はまだ十代と……』

『十九だ。ただの若気の至りだ。改めて言われるとむずがゆい』
照れ臭そうに、タクが眉の下の傷をかく。

若気の至りで將軍になったのもすごいけど、まだ二十一ってのもびっくりだ。いやタク、君は将来大物になるよ、きつと。

『タク、すごいんだねえ』

『まあ……なんとというか、勢いだ』

困っている感じが非常に初々しくていいです。グッドです。理緒子、いい人ゲットしたね。

まだほけーつとしてる彼女を覗き込む。

『りおこ？ 知らなかったの？』

『だ……だって、そんなこと分かんなかったんだもん』

顔から湯気出てるんじゃないかっていうくらい、真っ赤になって理緒子がうなだれる。ここにきて初めて、これまでずっと一緒にいた人の基本情報を聞かされて、気まずいんだらうな。

『それに聞きたくても、聞けなかったし』

『ごめん、理緒子』

あたしはなんだか申し訳なくなって、彼女のやわらかい髪をそつと撫でた。

『ごめんね。あたしがずっと指環独り占めしてたんだもんね。ごめん。しんどかったでしょ、理緒子。言いたいこと言えなくて』

伝わらないもどかしさは知ってる。伝えたくても伝えられない寂しさも。

あたしがそう言うと、突然理緒子の眼から、大粒の涙がぼろぼろ零れてきた。

『理緒子？』

『うう……』

うわああんつと、まさにダムが決壊したように声を放って理緒子

が泣き出した。

「こんなに我慢してたんだ。子どものように泣きじゃくる彼女を、あたしは膝立ちになって両腕に抱え込んだ。」

『理緒子』

『ごめ……でも、なんか……う、と、とまんない……』

『いいよ、泣いて。ずっと我慢してたんだもんね。えらかったね、理緒子。ここまでよく頑張ったよ。だから、好きだけ泣きな』

言いながら、髪を撫でおろす。震える肩は小さくて、あたしの胸もぐつと詰まった。

「こんなに理緒子を追い詰めた王様もソロンさんも神様も、みんなまとめてぶつとばしてやりたい　　気もするが、まあ現実的ではないので置いておいて。」

理緒子は泣きながら、一生懸命言い訳をする。

「タクモラクエルもみんなやさしくて、すごく親切でいい人たちで、だから余計に喋れないのが辛かったこと。最初は慣れなくて恐かったけど、旅をしたりしてこの世界もいなくなって思いはじめたこと。あたと会って、いい友達になれそうだって思ったこと。指環をもらえるなんて　　まして、乙女になるなんて考えもなかったこと。」

『だが、らね……わたし、びっくり、して……』

『うん、そうだね。理緒子はいっぱいいろんな人に大事にされて、幸せものだあ』

ふざけて、額をこつんと当てる。ふにやっとなり緒子が、涙顔のまま少し笑った。

『そ……だね。なん、で……わたし、泣いてん……だろ？』

『泣きたかったからじゃない？』

『だけど……かな、しく……ないよ？』

強がり理緒子。だけど、きつと半分は本音だ。哀しくなくても涙は出るから。

『じゃ、嬉し涙かな？』

『うん……うん。あんまり……うれしすぎ、だね……』

理緒子はまた涙を零して、真紀ちゃんのせいだから、とぱすりとわたしの胸を叩く。

かわいいから許すけど。うん、泣いても理緒子はかわいい。そろそろ周りの空気が心配になってきたので、首を回してルイスに頼んだ。

『ごめん、お水もらえる？』

『あ、ああ』

『それと、なんか軽く食べれるものないかな。果物とか』

『……おなか、へって、ないよ……？』

まだ涙の止まらない理緒子が囁く。

『少し食べたほうがいいって。胃、痛くなるよ。車酔いしたんでしょ？』

『……うん。ちょっとまだ変な感じ』

『食べてないと胃酸で余計気分悪くなるんだよ。少し食べて、薬かなんかもらって寝てたほうがいいって』

『なんか真紀ちゃん、お母さんっぽい』

あたしは、桃色に染まった理緒子のほっぺたを指でつついた。

『当然。あたしは車酔いのスペシャリストですから？ 言うことを聞いてください』

『なにそれ』

『そうなの』

そうなのだ。実はあたしは見かけによらず、普通の電車でも酔った経験のある繊細な胃腸の持ち主だ、かつては。今はだいぶ克服したけど、小学生の時は大変だったんだから。

シエナが出してくれたハンカチで顔をぬぐい、タクの持って来た水を飲んで、理緒子はようやく落ち着いた。赤くなつた頬をハンカチで何度も拭いて、みんなにぺこりと頭を下げる。

だからね、その抱え込んだ感じが大洪水の原因なんだけどね？

溜め込むタイプだなあ、理緒子は。

ぼんぼん口にしてしまうあたしとは反対だ。

本人は辛いだろうが、周りはこういう人のほうに集まる。気がついてないようだけど、理緒子は根っからの乙女体質だ。放っておけない空気がばりばりなのだ。

よし。セレクト間違いなし！

心の中でガッツポーズ。

じゃんけんの神様、ありがとね。後出しなのに、理緒子勝っちゃいました。完璧です。ぐっじよぶです。なにかお供えしなきゃだよ。石とハサミと紙じゃ怒られるだろうなあ……。

くだらないことを考えていると、手ぶらのままルイスが近付いてきた。さつきみたいに理緒子の前に屈み込む。

『たしかに……少し乱れているな』

青い瞳でじつと彼女を見つめ、おもむろに右手を上げた。彼女の髪に触れるか触れないか程度の手が、ゆっくりと肩まで下りる。

思わず眼を閉じた理緒子が、小さく吐息をこぼした。

『どしたの？』

『もやもや……とれたみたい』

『うええっ？』

驚いて変な声をあげてしまった。ルイス、いつの間に超能力のような　　と思つて、気がついた。

職業、魔法士。手を触れて心の声が伝えられて、光の玉を浮かせて、鏡電話で話ができる人なのだ。タクのことを知った理緒子どころじゃない。

白い服を着た目の前の男が、急に遠い存在になったような気がして、あたしは愕然とした。

あたし……ルイスの何を知ってたんだろう。

胸が苦しくなる。ああ、あたし、こんなに彼に甘えてたんだ。

上辺に見せられていた彼の優しさに依存していた自分が、急にたまらなく醜く滑稽に思えた。

第7章 宴 マキの後悔（後書き）

…ちょっと長かったですね。区切りがうまくつけられなくて…。反省。

2

さり気なく理緒子の体調を治したルイスは、仕事があるらしく、また去っていった。彼がいなくなるや、ラクエルの口から深々と息が洩れる。

「さすがアクイナス。良いものを見せてもらいました」

どうやら跡取りであるルイスは、地名と同じ名前で呼ばれるらしい。彼女はルイスとも知った風に話していたけど、魔法士はみんな知り合い同士なんだろうか。

「良いものって？ 今の何だったの、ラクエル」

「失礼しました。今のはリオコ、の乱れていた気の流れを整えて、あるべき方向へ流したのです。胸がすつきりしたでしょう？」

理緒子に？さま？付けを禁止されたラクエルは、そこだけ少し言いにくそうにそう告げた。

理緒子が頷いて、そつと胸に手を当てる。

「うん……なんか不思議な感じだった。ぜんぜん苦しくなかったよ？」

「彼は稀代の魔法士です。彼の技を間近に見られて、とても光栄です」

落ち着いたお姉さんに見えるラクエルが、やや興奮している。目がきらきらだ。同業者だから、感激もひとしおなのかもしれない。

「今のも？魔法？なんだ」

「ええ」

思わず洩らしたあたしの独り言に、ラクエルが真面目に頷く。

「送心術も鏡電話も光を飛ばすのも、魔法なんだよね？」

「鏡デンワ……？ ああ、マキは遠話鏡と魔法光を見たのですね。

そうです、それらも魔法ですよ」

鏡電話は？遠話鏡（えんわきよう）？、飛ぶ光は？魔法光？というのが正式名称のようだ。それにしても、どうやってるか分からないっていうこと以外、共通点がまったく見当たらない。

あたしは、ルイスには聞きそびれた質問をラクエルに振ってみた。
『あのさ……そもそも、魔法ってなに？』

一級魔法士だというラクエルが、やや考え込み、口を開く。

『この世は、われわれ人間や物質の根本を定める理律（りりつ）と天の定めた天律（てんりつ）とによって成り立っていると考えられています。』

理律とは、物を投げれば地面に引き寄せられるといった、われわれの概念でも理解かつ介入が可能な法則のことをいいます。対して天律は、われわれの関与することのできない、神秘の領域です』

あたしたちの世界で言うと、理律が物理法則、天律が運命、といった感じだろうか。

『この理律の領域に居ながらにして天律の法則を引き寄せる力
これが、魔法です』

おっと、いきなり飛躍した。

文字通りぽかんとするあたしたちを置き去りに、ラクエルは『例えば』と、右手のひらを宙にかざしてみせる。その手のひらからほんのわずか離れたところに、瞬きほどの火花が散ったかと思うと、いきなり野球ボールくらいの炎が燃えあがった。

『わっ！』

『きゃ……ラクエル、火傷』

『大丈夫です』

ラクエルは微笑み、手のひらをくるりと返して炎を消した。再び開いた右手には、赤味ひとつない。

『今のは天律を通じて、空気中にある空気のもと 空素（くうそ）に発火を促し、火素（かそ）を強めて炎を創り出しました』

『つまり、本物の火？』

『そうです。空気にはもともといろいろな成分が含まれています。』

火・水・光……今は、われわれの息と同じく宙を漂っています、同時に？燃えている状態？というものもどこかに存在するわけです。そこで今は天律に働きかけて、？燃えている状態？を一部借り受けたのです。魔法光の原理もこれと一緒にです』

言われても見せられても、なんだかしっくりこない。分かったよ、うな分らないような顔をするあたしたちに、ラクエルは苦笑いを浮かべた。

『魔法の基礎概念は非常に込み入ったものです。その勉強だけでわれわれは数年をかけるのですから、すぐに理解できなくて当然ですよ。』

大雑把な感覚では、自然の法則をほんの少しだけ推し進めたり、形を変えることのできるもの、という捉えかたで充分です』

分かりにくいけど、普通の現象をちょっとひねるってことなのかもしれない。

送心術では言葉の代わりに意志を送ったり、遠話鏡では遠い距離を縮める、という非日常の法則を強引にやっちゃうのが魔法……なんだらうか。やっぱり難しい。

『指環は？』

『魔法話の指環はソロンの七大秘術のひとつで、その構造を解き明かしたものは未だかつて存在しません。送心術を發展させ、持ち主の魔法力を拡大して意志を声として認識させているといわれます』

ここまでできたら、ほーと感心するしかない。呪文なんてないっほいのが余計すごい。

『先程のルイセリオどのの治癒も、人の生命力の素（そ）である？気？の流れに働きかけたもので、初歩といえは初歩なのですが、あんなに的確にすばやく行うことは稀です。わたしでしたら数分はかかってしまうでしょう』

『ルイス、すごいんだね』

ぼつりと呟くと、理緒子が今さら？と言ってきた。

『だって、魔法士って数が少ないんでしょ？　その土団長なんて、』

すごいに決まってるんじゃない?」

「それだけではない。彼はマーレイン　精霊加護者だ」

「え?」

タクの発言に、あたしと理緒子は同時に驚きの声をあげた。

せいいいかごしや。

聞き慣れない言葉だ。意味は分かるが　いや、さっぱり分からない。魔法の指環で変換された意志とやらは、辞典の役割までしてくれるわけではないから。

顔を見合わせるあたしたちの無言の問いに、タクが教える。

「マーレインとは、もともと優れた魔法力をもって産まれた者をいう。本来魔法士は、素質あるものが修練してなるものだが、彼は産まれた瞬間に魔法士となることを定められた。それだけの力の持ち主ということだ」

あの難しそうな魔法を、習わずに軽々と使えたってこと?

あたしの想いを讀んだように、ラクエルが頷いた。

「マーレインは、百人から千人に一人と言われます。ですが、決して少なくはありません。先程のレスラーンドのや……アルマン王子もそうです」

「あの昔のソロンさんっていう人も、そのマーレイン、だったの?」

「ええ」

ルイスはソロンさんの子孫の一人。血を継いでいてもおかしくはない。それに、ご先祖様も魔法士だったといっていた。きっと家系なんだろう。

だけど……じゃあ、アクイナスは?　跡は継がないの?

それだけ優秀な人材を、きつと天都は手放さないだろう。

ひよっとしたらルイスのお父さんの頑なな態度は、彼をアクイナスの地からわざと引き離そうとする親心だったりするのかも知れない。

なんで、ルイスばかりなんだろう……。

異質な色というだけでなく、彼の複雑な立場を思うといたたまれ

なくなる。

アクイナスでみた屈託のない彼と、王城で魔法士として働く彼の顔がうまく重ならなくて、あたしは混乱したまま立ち尽くした。

そんなあたしの変化に理緒子が気づいて、

『真紀ちゃん、だいじょうぶ？』

腕を引っぱり、覗き込む。

あたしはおぼつかなく頷いて、お風呂浴びてくる、とその場を離れた。

ここにシグバルトでもいれば、少しはこのもやもやを解決できたかもしれない。だけど、彼の魔法士としての外面しか知らない人たちからの情報なんて聞きたくなくて、あたしは一人になるために自分の個室に入った。

部屋付きの侍女が、湧かしたお湯を盥に汲み入れている。手早い。石鹸が置いてある。

そういえば、理緒子はずっと石鹸を使ってるって言ってたな。

あたし葉っぱだったけど？と言うと、理緒子は驚いていた。

タクが教えてくれたところによると、

『それはイカカスの葉だろう。聖人が身を清めるときに用いる、特別なものだ。聞いたことはあるが、俺も本物を見たことはない。さすがアクイナス、気の配り方が違うな』

ということ。全然知らなかった。

この葉っぱなに？って聞いたなら、『イカカスの葉です』とアルノに言われて、そのまま鵜呑みにしてしまった。

馬鹿なあたし。なんだかんだ言っ、ルイスも？乙女？に気を遣ってくれてたんだ。

彼はこんなにしてくれたのに、あたし何やってるんだらう。

ヘクターさんに啖呵切つて、お父さんに怒鳴つて、王様に楯突いて、彼を困らせてばかりだ。本当、あたし彼の寿命を縮めてる。

盥に張ったお湯がすっかり冷めてしまうくらい、あたしはしばらく一人でうじうじと考え込んだ。

それでも何ひとつ結論は出なくて、冷えきった重い体を持ち上げると、お風呂を切りあげた。

7 - 2 (後書き)

葉っぱ石鹸のネタ、こんなところで回収。
実は、ルイスはいろいろと有名人です。

明日の晩は、お披露目の宴会なのだそうだ。王様が強引に決めた。あたしたちの　　というか、一応理緒子が主役。乙女だから。あたしは付き添いだけで異界から来てるので、ついでにドレスアップすることになった。

ドレスアップと聞いて理緒子は喜んでいたけど、あたしは沈んだ。悪いけど、あたしは女らしい格好が大の苦手だ。似合わないだ。びらびら、とかレースとか花柄とか。いや似合うよ、物によっては。ただ微妙に宝塚チックになるだけ。もちろん男役。

ため息を吐くあたしの横で、理緒子はシエナたちと盛りあがっている。

ついさっきまで「夕食食べ過ぎて失敗いゝ」なんて言っていたのに、王様ご推薦の仕立て屋さん一同が見本のドレスと生地をもって現われた途端、目つきが豹変した。

なんだか一回きりしか着ないのに、部屋には色も種類も想像以上に豊富な生地が山のように広げられて、もうものすごいことになっている。お金持ちって、ちょっと迷惑。いや、雇用が広がるからいいことなんだとは思うけど、一回着るだけのドレスにこのお金の掛け方はどうよ？　もっと有効活用しようよ？

それにお披露目、明日だよ？

なのに仕立てろという王様も、かなりの極悪だ。いや、凶悪だ。

あの無表情な顔を思い出して、あたしはまたむかつ腹が立った。

正確に言うと、今は自分に一番腹が立ってるんだけど。

「ねね、これどう？」

シフォンに似た白い生地をふわりと舞わせて、理緒子が笑う。何を着てもかわいいよ、うん。

「いいね、白。理緒子は淡い色が似合うな」

「ピンクと迷っちゃうの」

「その薄い水色もよくない？」

今の白と重ねたら、妖精みたいでよく映えそうだ。理緒子はきやつきやとはしやぎながら、生地を選んでいいる。

ドレスの形は大体決まったらしい。アンダーバストを締めたロマンチックなAライン。ま、細いから何でも似合うんだけどね。

「真紀ちゃんは？」

「えーあたしはいいよ」

「だーめ！ ほら立って」

あたしはせつかく着替えたルイスお下がりの上着を脱がされ、シヤツ姿で仕立て屋さんの前に立たされた。メジャーみたいなので、胸やら首やら肩やら測られる。

ちらりと覗いた仕立て屋のおじさんの手帳に、理緒子と同じふわふわドレスが描き込まれているのを見つけ、あたしは慌てた。

「わ、ちよつとそれは！」

あたしが着たらピエロだよ。

止めようとしたら、仕立て屋さんが変な顔をする。そうだ、指環してないんだった。

「ごめん理緒子、通訳！」

「あ、うん。そうだね」

ああ、意外と不便。

貸したことは後悔してないけど、なくても平気と過信していた自分の能力の低さのため息が出る。

なにやってんだ、あたし。

「真紀ちゃんは、シンプルなラインが似合うよね」

もうどうにでもしてくれ、なんて投げ遣りな気分で仏頂面のまま立っていたら、理緒子が心配そうな顔になった。あ、気を遣ってくれる。

変わらない明るさで、あたしの不機嫌なんか気にも止めないよう

なふりして、笑いながらあたしのドレスを決めていく。すごいな、理緒子。あたしなんかよりよっぽど大人だ。

「真紀ちゃん、どっちの色がいい？」

理緒子が、光沢のあるシルクっぽい生地の深い緋色と紺色をもつて首を傾げる。

きれいな色。着るなら濃い色がいいって思ってた。嬉しいな。

「……こつちにする」

あたしは緋色を指差した。これなら絨毯と同化して目立ちにくいかも、なんてちらつと思っただけは言えないけど。

「じゃ、決まりね」

理緒子は、一生懸命あたしのコーディネートを考えてくれていた。やさしい子だな。本当、みんなが助けたいくなるのも分かるよ。あたしみたいに棘々してなくて、ほんわりしてて。

二人目があたしみたいなタイプじゃなくて、きつとルイスはほつとしてるだろう。

あたしは一世一代の決意でしたつもりじゃけん、本当に運命が分かれたのだと、そのとき身に染みて感じた。

翌日お昼御飯もそこそこに、あたしたちは数十人の侍女に囲まれて、お披露目の支度に取り掛かった。香水の香りのするお風呂で体を隅々まで洗われることから始まって、羞恥心どころじゃない。これはもうドレスアップという名の苦行だ。

初めてのお化粧にドレスにハイヒール姿の自分をまじまじ確認する余裕もなく、あたしは理緒子と一緒にヘクターさんに連れられて夜宴の会場にやってきた。

胃が痛い。こんなに気持ち悪いの、人生で初めてだ。

最低最悪の瞬間なのに、人生最大のスポットライトの当たる場所にいるなんて、なんて皮肉なんだろう。正確にはスポットライトの端っこだけど。本当、主役が自分じゃないのだけが救いだ。

主役の理緒子は、幻想的に折り重ねた白と淡い水色のドレスの裾

を長く引き、髪をくるくるに巻いて花を飾って、まさに乙女にふさわしく可憐に輝いていた。

『真紀ちゃん。手、繋いでてね』

声が震えて、足も手も震えている。

大丈夫、あたしは理緒子を支える柱になる。あたしは柱。そう思うことで今の自分の姿を忘れようとした。

理緒子とは対照的な深い緋色のドレス。飾りも一切拒否したので、胸元と裾に入ったドレープだけ。リボンもなし。髪はつけ毛を勧められたけどそれも断り、タイトにまとめて服と同じ色の花を飾った。紅に濃淡の斑が入ってて、すごくきれいな花。フェイオウっていう名前だと教えてもらった。

理緒子が髪に挿したのは、小菊のような雰囲気の花だ。キッキーナっていう白い普通の花っぽいけど、実は国花。国の花だ。

この花は生命力が強くて、土地に草が根付くとき一番初めに花をつけるんだそう。だから、この花は豊かな生活の先触れ。幸せをもたらす花と信じられているんだ。うん、乙女にぴったりだ。

眼を見合わせ、二人で頷き合う。そしてスポットライトの当たる舞台から、アリーナを埋め尽くす観衆の元へあたしたちは降りていった。

正直、パーティはめちゃくちゃだった。壇を下りた途端ものすごい人数に取り囲まれて揉みくちゃにされそうになり、あたしは必死で理緒子を庇おうとした。

その時、巨大な青い影がふわりとあたしたちを包み込む。タクだ。

さすが、英雄。勇者様だ。

あたしと理緒子は、ほうつと大きな息をついた。そのうちどこからか銀色の甲冑を被った兵士たちが現われて、遅ればせに群集の整理をはじめめる。

『リオコ、マキ。二人とも大丈夫か？』

『う、うん』

『ありがとう、タク』

タクの無骨な顔が、そつと微笑んだ。藍色にも見える短い髪をざつくり後ろへ撫でつけ、ピアスと対の細い金属の鎖を額にくるりと巻いている。今まで着ていた軍服やマントも房飾りのついた丈の長いものになっていたけど、全体的な雰囲気やその笑顔はいつもと同じで、あたしたちの緊張も少しだけ緩んだ。

周りを見渡すと、少し離れたところにルイスやレスの姿もあった。やっぱり彼らも普段より数段グレードアップした衣装を纏って、きらきらして見える。

服や髪を飾る豪華な宝石のせいだけじゃなく、たたずまいそのものが、きららかな光に満ちた高貴な存在だっということが漂ってくる。そんな美しさ。

声を掛けようにも、名前を呼ぶことすらためらわれた。しかも二人ともいるんな人に囲まれて、ひっきりなしに誰かと話している。

ルイスがちらちらとこちらを見ていたけど、あたしはあえて視線を合わさなかった。彼の重荷にはなりたくない。ここは、彼らの居場所。あたしはただの影、だから。

入れ代わり立ち代わり現われる人に、戸惑いながらも笑顔を返しつつづけている理緒子の左手を握り、あたしはコバンザメみたいにぴたりとくっついて立っていた。

ときどきドレスの裾を踏まれたり、話しかけられたり、どんつてぶつかられたり、靴で踏まれたりもした。だけどその場を動くわけにはいかななくて、慣れないヒールを履いた足をぐつと踏ん張る。

『なんか……暑いね』

顔を上気させ、理緒子が息をつく。二人ともドレスは袖無しなんだけど、人いきれがすごい。

『飲み物、何かもらってこようか？』

『うん、お願い』

『俺が』

言い出す勇者殿を慌てて止める。

『だめ！ タクがいなくなったら理緒子が潰されちゃう。あたし行ってくるよ。何がいい？』

『お水でいいよ』
『分かった』

タクに目顔で頼むと告げ、あたしは思い切って雑踏に飛び込んだ。すぐに給仕の人を見つけたので声をかけて水をもらおうとして、言葉が通じないことに気がつく。また忘れてた。

しまった、指環借りてくるんだった。

理緒子の元に戻るには、距離が開きすぎていた。あたしはとりあえず給仕の持つお盆から、一番無難そうなグラスを二つもらった。よし、と来た道を振り返る。

「え……」

ものすごい人の波。人、人、人。色彩と匂いと熱が渦を巻き、それに知らない音がうわんと鼓膜にぶち当たって、あたしは一瞬頭が真っ白になった。

あたし、どうしてここにいるの？ なんているの？ なにしてるの？

いやだ……いやだ。ここに、いたくない……！

あたしの肩をぼんと叩き、顔の分からない男が話しかけてくる。

「xxxxx？」

見知らぬ言葉。

二つのグラスを両手に持ったまま、あたしは人をかき分け、押し退けるようにして一目散にドアを直指した。

7・3(後書き)

理緒子は長めのAライン、真紀はマーメイドドレスです。

何も考えられなかった。ただ逃げたくて逃げたくて　　あたしは、絡むドレスを振り払うようにしてその場を走り抜けた。

ホールから出る間際、誰かの呼ぶ声が聞こえた気がしたけど、たぶん気のせい。あの中であたしがいなくなったのなんて、きつと誰も気がつかない。

理緒子とタク、置いてきちゃった……。

だけど、もうあの洪水の中に戻る気はなかった。勝手だけど、迷子になってるとでも思ってもらおう、そう思った。

闇雲に角を曲がり、人の少ないほうを選んでいくと、庭に面した回廊に突き当たる。そろそろハイヒールに当たる踵が痛みはじめ、あたしは足を止めた。かすかに吹き込む風が、頬にひやりとした感覚を呼ぶ。

いつの間にか泣いていた。ぐいと頬を拳で拭くと、し慣れない化粧が剥がれる。

汚い。醜い。あたしの心と同じだ。

持って来てしまったグラスに口をつける。

……苦い。

お酒だ。外の廊下に出て、草の陰に吐き捨てる。ついでにグラスの中身を全部空けた。

夜気が冷たい。外は星が出ていたけど、お城から溢れる光でそこまできれいな空ではなかった。草陰には、あたしと同じく夜宴を抜け出したらしい男女が数組。他人の睦言を聞く趣味はないし、聞いても分らないから、あたしは空のグラスを持ったまま、適当に灯りの燈らない薄暗い廊下を歩いた。

人気のない、きれいなポーチに出る。少しやせた白月が明るくそ

こを照らして、あたしは手すりの陰に座り込んだ。ドレスが汚れるけど、どうせ捨てられる運命だ。しっかり汚しても、たぶん罰は当たらないだろう。

グラスを床に置き、両腕に膝を抱えた。虫の音が聞こえる。風が通って、むき出しの腕は少し寒いけど、それくらいが丁度いいような気がした。頭を振ると、フェイオウが一輪ぽりと落ちた。

人ごみを抜けたから、あたし今きつとひどい格好してる。

あたしは髪から花を振り払い、指を通していつもの頭に戻した。散ってしまった赤い花。あたしには最初から似合わなかったんだ。

ごめんね、こんなところで枯らしてしまつて。

ちよつと可哀相になって、落ちた花を拾いあげる。ぽとり、と涙が手に落ちた。ああ、もうなんて泣くんだ、あたし。泣く資格なんてないのに。

帰んなきゃ、部屋に。

どうせ帰るところは他にないのだ。帰って 水門の鍵を探しに行く支度をしないと。

頭では思うけど、現実には真っ白で何も思い浮かばない。旅の支度って？ 何を揃えるの？ どうやって行くの？ また、ルイスに頼るの？

もうやだ……一人じゃ何にもできない、あたし。

当たり前だけど、それが頭で分かってても、きちんと意味が呑み込めていかなかった。

人は一人じゃ生きていけないとか、独りじゃないとか、繋がってるとか。

きれいな言葉だけど、実際は自分が馬鹿で子供で未熟でどうしようもないって認めるところからじゃないと始まらない。あたしはやつと、ようやくそのことに気がついた。

今からみんなに頭下げて、ごめんなさいって言おうかな。

言えるのかな。

そんなことを考えていたあたしの前に、誰かが現われた。すらり

とした影に長い髪。

月の光を浴びた眼差しが、鋭いグリーンの光を弾いた。

誰……？

まだ若い男は、あたしを見てにやりと笑い、何か話しかけた。意味は分からない。人をどこか小馬鹿にしたような口ぶり。厭な感じだ。少なくとも、あたしに好感はもっていない。

立ち上がったあたしの腕を、ふいに片手を伸ばして彼が掴んだ。

「何するの……っ！」

『おまえ、もうひとりの渡り人だな』

頭の中で響く声。久しぶりの感覚に、恐怖を感じる。

『私が連れてきた娘を異界の乙女と宣言してくれて、感謝しているぞ』

くくつと笑う。感謝なんてしているようにはない。愉しんでいる、そんな気がした。

この人は、人の恐怖を愉しんでる。

思った瞬間、猛烈に腹が立ってきた。

なぜあたしは、この人にいたぶられなければならないのだろう。

『もうしばらくいい子でいておけ。そうすれば、命だけは助けてやる』

何を言っているの？ 分からない。

『おまえを聖地には行かせない。水門の鍵を手にするのは……ひとりだけだ。あの女が、この私に王冠を授ける』

どきつとした。

言っている意味はいまだによく分からないけど、ひとつだけはつきりしたことがある。この人は、あたしも理緒子も物のように思っているってこと。

ふざけんなよ。

心に怒りの灯が点る。

浅慮はしない。ついさっきそう決めたはずなのに、あたしの心は急速に怒りモードを突き進んだ。どうせ言葉など分からないのだ。

「あんだ、いい加減にしなさいよね。人のことなんだと思ってるの？」

『おまえ、なにを言っている？』

「ふざけるのも大概にしろって言ってるのよ。悪いけど、世の中がみんなあんだの言いなりになるとでも思ったら大間違いよ。ざけんじゃないよ」

怒っているというのは、口調だけでも分かるらしい。

あたしの腕を掴んだまま、男の目が丸くなった。

「あんだ王子？ そうよね？ 偉そうだし、他人のことこれっぽっちも考えてなさそうだもんね。あの王様そっくりよ！

理緒子の後見人が何のつもりか知らんけど、なんなん王冠で。自力で王様になるうっていう気はないわけ？ そんな根性のないやつに、誰が王冠なんかやるかいうんよ！」

断っておくが、これは序の口だ。あたしとしてはものすごく抑えている。だってまだ方言あんまり出てないもん。

『何を言っているんだ、さっぱり分からんぞ。奇怪な言葉だ』

ぷちん、キレたぞ。

「誰も分かれ言うたらんのだよ。黙って聞きいや」

王子黙る。広島弁効果？

「ええかげんにしい言いよるんよ。あんだね、そんな態度でおったら、ほんまに人に嫌われるよ？ ええん、それで」

王子がうつむく。ひよっとして通じちゃった？ ある意味まずいんだけど。

「あんだまだいくつよ？ あたしとそんな変わらんのんと違うん？ だったら、もうちょっと態度変えてみんさいよ。このまんまじゃったら、あんだ、ほんまどうもならんよ？」

ますますうなだれる王子。ひよっとして、叱ってくれる人とかあんまりいなかったのかな。

少し可哀相になる。ルイスのところみたいに、身分ある人の家庭環境って、あたしの想像を軽く超えた複雑怪奇な関係が錯綜してい

る感じだ。その中で、まっすぐに育つ確率は限りなくゼロに近いんじゃないだろうか。

あたしは左手首を掴まれたまま、王子の頭に右手を伸ばした。身長がそんなに違わないから、うつむかれると目の前なんだ。

さらさらの黒髪に指が触れた途端、彼がびくつとした。その瞬間、あたしは悟った。

彼自身が一番ぴりぴりしてるんだ。

たぶん、さっきの棘々していたあたしと同じ。心の中のトゲトゲが声にも顔にも態度にも出て、それが余計に自分を苦しめていて。

「……あのさ、あたしが言える立場じゃないけどさ。あたし、あんなそんなに悪い子じゃないと思うんよね。たぶん、自分が自分を一番嫌いなんじゃないん？」

おそろく正解。

ああこいつ、あたしとそっくりだ。かわいげのないところが。

「あたしも今、自分が一番嫌いよ。けどさ、自分からは逃げられないのよ」

月を見る。そして、足元の影を見る。

これがあたし。逃げても逃げてもついてくる、黒いやつ。

一生付きまとわれる。生きているから。ここに居るから。ここに居ることを選んでしまったから。

「あんたがあたしを嫌うのを止めようとは思わんよ。むしろうちの周りを傷つけたら、そっちのほうがよっぽどキレるわ。けど、あたし、あんたを嫌いにはなれんと思う。あたしも一緒じゃけ。嫌なやつじゃもん」

ごめん。あたしひよつとしたら、あんたを気持ちの捌け口（はげぐち）にしたかも分からんわ。

心の中でそう謝って、あたしはもう一度彼の髪にそつと手を触れた。その手を彼が払いのけ、そのまま軽く捕らえる。あたしははつと身を引いた。

緑の瞳が微笑みかける。さっきとは違う、邪気のない笑い方だ。

『おまえはまるで、野生のミヤウのようだな』

ミヤウ？ 動物かな、なんて考えてると、あたしの耳に聞き覚えのある声が飛び込んできた。

「マキ！」

純白と金の正装に身を包んだ、背の高い人影。宝飾品よりも輝く黄金の長髪が、蒼い闇にひらめいている。

あれ、ルイスだ。なんでここに居るんだろう。パーティにいないくて大丈夫なのかな？

振り向いてそう思ったあたしは、目が合った瞬間、彼の顔が凍りつくのを見た。

「ミア・ヴェール・アルマン……」

「アクイナス」

にやり、と王子は、最初と同じ不敵な笑顔をルイスに向けた。二人の間の妙に緊迫した空気を感じ、あたしは鈍い頭でこの状況を再確認してみた。

足元にお酒の空グラスが二つ。あたしは明らかに泣いた後で、髪の毛のセットは乱れ、花は床に。痛いくらいに左手首を掴まれてしばらくで、今は右手も取られている。これは普通に見て、

どう考えても、王子に襲われた、の図だよな？

実際は逆だ。主導権を握っていたのはあたし。ずっと怒ってた。

まあ相手は王子だし、ルイスも大騒ぎはしないだろうと思って、あたしはおずおずと声をかけた。

「ルイス……？」

「ヴェニアス、マキ」

なんだろう、行けって言われてるんだろうか。

あたしがどうしたらいいか分からないでいると、王子がふっと息をついて手を離し、ルイスのほうに軽く押しやった。

勢いがついて彼の傍まで来ると、ルイスがいきなりすごい力であたしを引き寄せる。

強張った顔。すごく、恐い。

「アデイウィー プリンセ」

ルイスはあたしを左腕に抱いたまま軽く頭を下げ、それでも王子を睨むようにして、そこから立ち去った。

7 - 4 (後書き)

広島弁訳つけませんでした。が、だいたい分かりますかね…？

5

ものすごくルイスが怒っている。恐い。彼はしばらく黙ったままその場から離れ、人気のない外廊下のなかばで足を止めた。

『腕を見せる』

王子に掴まれていた左手を月明かりに　ではなく、左手の先に灯した光で照らす。

赤い指の痕。鬱血してる。

「たいしたこと、ないよ」

いや実は、これがあるんだ。あたし内出血しやすいの、ものすごく。

たぶん明日あたり、かなり虐待の痕になっていると思う。ごめんね王子。女性虐待疑惑浮上かも。半分事実だけど。

ルイスは溜息をついて、理緒子にしたみたいに手をかざそうとした。

いやだ。

あたしは、はっと手を引っ込めた。これぐらいでルイスの力に頼るのは嫌だ。

『マキ?』

「なんともないから、余計なことしないで」

通じなくても、そう言うしかない。だって、もうルイスの負担にはなりたくなかったのに。逆にパーティ抜け出させて、探させてしまった。最低だ、あたし。

「行こう、ルイス。戻ったほうがいいんだよね。こんな格好だけど、今さら戻れるかな?」

髪も顔も服もぐちゃぐちゃだよ。服仕立てた人、きつと必死で縫ってくれたのに。侍女の人も一生懸命メイクしてくれたのに。あた

しは誰の心も大切にできない、王様よりひどい人間だ。

会場に向かおうとするあたしを、ルイスが止めた。そのまま両腕に抱き締めてくる。

昨日の会見の後のような、やさしいハグじゃない。胸が痛くなるくらい、きつい抱擁。

「ルイス……？」

なんだろうなんだろう。すごく怒られるのかな。もう知らないって愛想尽かされるのかな。

そう思うだけで泣きそうになるあたしに、全身からルイスの声が響いてきた。

『すごく心配した……何をされたんだ？ 王子は、君に何を……』

ほとんど一方的に喋ってただけなんだけど、な。

ごめん、王子。なるべく早く誤解を解いておくから。ここは少し、今の間だけ悪者になってもらおう。

『君に何かあったら、私は……王子を許さない』

ルイス。すごく嬉しいけど、ごめん、考えすぎだ。まじで、そこまで王子を悪者にはできないよ。

でも 心配してくれたんだ。申し訳ないけど、やっぱりちょっと嬉しい。

涙の決壊が切れる。高そうなルイスの上着に染みこんでいく、あたしの涙。

どうしよう、ここで泣き崩れたら、きつとルイスは王子を本気で疑う。だけど王城で働く立場の人に、王子と喧嘩はさせられないよ。どうしたらいい？

格好よく窮地を助けに来てくれた騎士。だけど、ヒロインの姫はあたしじゃないんだ。あたしは姫じゃない。なれるとしたら今は。

「ルイス、ちょっと苦しいよ。やりすぎ」

道化だ。あたしは道化で居よう。何もなかった。王子とは楽しく喋っていたって顔しよう。

「深刻になりすぎだよ、ルイス」

笑って、彼の腕から抜け出る。彼の優しさ、気遣い、心配。全部踏みにじって。

「迎えに来てくれてありがとう。帰り道わかんないから、教えてよ？」手を差し出す。

ほら、女が先に手を出すのは好意の表われとされるって教えてくれたじゃない。ルイス、少しでいいから笑ってよ。お願い。

氷の王様のような顔をしたルイスは、結局あたしを部屋に送り届けるまで、一言も口をきかなかった。

ひどい顔色で帰ってきたあたしを、部屋にいた理緒子が半泣きになって出迎えた。あれからすぐにあたしが戻ってこないことに気付いて、ヘクターさんに伝えて城中捜索がかけられていたらしい。

あたしはふらふら歩いていて分からなかったけど、かなり中庭の外れたところにいたそうで、発見に時間がかかったみたい。なんでそんなところにいたのかと聞かれたけど、答えるには込み入りすぎている。

戻ったあたしの様子を見て、みんなきつといういろいろ想像を膨らませたんだろう。これはただの身から出た錆（さび）なのに。事情を聞きたがる理緒子にどう説明しようかと、あたしは回らない頭を一生懸命働かせた。

よくよく思い返すと、結構すごいことを言われていた気がする。この国の王子から直々に、言うことを聞かなければ命を取るぞと脅されたのだ。

なんで王子はあんなことを言って来たんだろう。

思った瞬間、あたしの頭の中は、彼ともう一度きちんと話さないといけないという焦りに似た考えで一杯になった。

「ごめん、理緒子。今だけ指環貸してくれる？」

「う、うん。いいけど」

侍女のシエナが不安そうに見ている。あたしは自分の部屋に飛び込むと、ドレスを脱いでアクイナスから持ってきたシャツとズボンに着替え、指環を嵌めた。

『ちよつと出てくる』

「真紀ちゃん?!」

説明したいけどその時間すらもどかしくて、あたしは廊下に飛び

出し、そこに立つ男と鉢合わせした。凄い形相をしたままのルイスだ。

『どこへ行く?』

『ごめん、ちよつと行かなきゃ』

『部屋に戻れ』

『だけど』

『戻るんだっ!!』

叩きつけるようなルイスの怒声が廊下に響く。頭を殴られたみたいなのショックが、少し遅れて脳にびいんときた。

ああ、あたし、もう彼の信頼を失ったんだ。

はつきり分かった。腕を掴まれ、強引に部屋に戻される。もぎはなすように、指環が取られた。

真つ暗な部屋に一人置き去りにされ、あたしは一晩中泣き明かした。

カーテンも閉めていない窓の青い闇が、薄紙を剥がすように明るさを増してゆき、あたしは朝が来たことに気がついた。

朝は好きだけど、今日はどうも好きになれそうにない。ベッドの上で仰向けになってそんなことを思っていると、こつこつとドアが叩かれた。控えめに、理緒子が顔を覗かせる。

「真紀ちゃん、起きてる?」

「寝てないからね。」

「ちゃんと、眠れた?」

仰向けのまま、頭を振る。シンプルなワンピース姿の理緒子をちらりと見上げると、目が赤く腫れていた。

「理緒子も寝れてないの?」

「……うん。なんか、いろいろ考えちゃって」

のそのそと上体を持ちあげるあたしの横に、理緒子がすとんと座る。

「なんか、わたし昨日から全部真紀ちゃんにいろんなこと押し付け

て、頼りすぎて悪いことしたなあって……」

「はあっ？」

驚いて飛び起きた。

いや、全然違うんですけど？ むしろ振り回したのあたしだし。

「理緒子、そんなこと考えてたの？」

「……違うの？」

思わず正直に、うんと頷いてしまった。

「じゃあなに？ なんていなくなっちゃったの？ わたしものすごく心配したんだよ？」

理緒子が涙声で、ばしばしとあたしを叩いてくる。

「一緒に行こうねって約束したじゃないっ。置いてくなんてひどいよ……！」

「いやだって、タクいたし。ちゃんと戻る気でいたし」

「関係ないよっ」

いや、それはタクに対してひどいでしょ。ってか、タクは人のうちに入っていないのか？

「いくら待っても帰ってこないから、誘拐されたとかすごい騒ぎだったんだから！」

「あー……ごめん」

「帰ってきたら、指環もってどこか行ってくて言うし。何がなんだか分かんないよ！ ちゃんと説明してよっ！」

「……うん」

頷いたけど、あたしは迷った。王子の言ってきたことは理緒子にも関わることで、到底さらりと聞き流せる種類のものではなかったから。知れば、きっと理緒子は傷つく。王子を主君とするタクを想うと、板ばさみになるかもしれない。

だけどあたしは、全部話すことにした。二人に関わることで理緒子に隠しごとはするべきじゃないと思ったから。

会場を飛び出したのは、気持ちが混乱してて恐くなっただけだから、素直にそう言った。あたしにも恐いことがあるのだと、理緒子

はほつと笑ってくれた。

王子のことは、彼の言ったことだけを伝えた。あたしが話した内容は正直自分のためだったから、あんまり詳しくは言わないでおく。まあ、言い返した事だけは教える。

伝え終わると、理緒子はしばらく考え込んだようになり、ぽつりと言い出した。

「あの、ね……。アルマン王子、あたしにも同じこと言ってきたの」「ええっ?!」

「最初に会って、挨拶をね、されたとき」

あの手の甲にチュツてやつですか。あたしはおじさんにしかされたことのない、あれ。

「彼の声が聞こえたの。？わが国に水をもたらし、我に王冠を授けよ？ って」

「それ、誰かに言った？」

「ううん、言っていない。なんか言えなくて……」

あたしは黙って、少しの間考え込んだ。

それでも、あたしたちの知識だけではそれ以上なんのいい知恵も浮かびそうになくて、誰かに打ち明けて相談したほうがいいって感じた。

誰がいいかな……。ルイスは絶対ダメ。ヘクターさんもダメ。レスモ……。同僚だからダメ。シグバルトも却下。あとはラクエル……。タク。

「タク、だね」

決定だ。アルマン王子をよく知っていて、でも理緒子のことは絶対裏切らない人間といえば、彼をおいて他にいない。

主人に逆らわせることになるかもしれないけど、あたしたちはタクを呼んですべてを話した。

『そうか……』

彼の表情に変化はない。笑顔と無表情以外、表情筋ないのかな？
『話は分かった。だが、ルイスには話したのか？』

『うつん、まだ』

『話したほうがいい。彼は本当に君を心配していた。きちんと説明をするべきだ』

『でも……その前に、王子とちゃんと話をしたいの。なんでこんなことを言ってきたのか、とか。昨日のこと、きちんとカタつきたいの。それが終わったら、ルイスに説明する』

タクは、あたしが引きそうにないと思ったのか、かすかにため息をついた。

『王子と会うつもりなら、きちんと冷静に話ができる環境でするんだ。第三者の……少なくとも、俺かルイスのいる前で。そうすれば王子も無理なことは言わない』

『それじゃ意味ないじゃん』

あたしは声を荒げた。本音で話さなきゃいけないんだよ、あの王子とは。

『タク。あたしき、王子はさ、悪い人じゃないと思うんだ。すごく強がってるけど、中身はきつと……違うんじゃないかって思う。王冠にこだわる理由とか、本当は彼、もっと違うことが言いたかったりしたかったんじゃないかって、そう思うの』

『……』

『なんとか会えないかな、二人で』

『真紀ちゃんっ?!』

理緒子がびっくりするような声をあげる。当然自分も一緒だと思っただろう。

『だめだよ、理緒子。これはあたしが王子に売られた喧嘩なの。あたしが買う』

『真紀ちゃん……ふざけないですよ』

『ふざけてないよ。たぶん王子は、理緒子には手を出さない。だから一緒にいたら』

本音が聞き出せない。なんであたし、あんなやつの本音が聞きたいんだ？

『本気の喧嘩にならない。タク、理緒子を頼むね』

『だめだ』

うそ。タク、そこでダメって言う？

『王子と会う約束は取りつけよう。ただし、俺が立ち会う。リオコはシエナたちとここに残れ』

『だけど』

『マキの言うとおり、王子はリオコを狙うことはない。だが、狙われるのはマキ、おまえだ。その場に一人で行かせるわけにはいかない』

戦闘経験を積んだ若き將軍の迫力に、ただの高校生のあたしが逆らうことなんてできるわけもなく、それから間もなく、あたしはタクと一緒にアルマン王子との面会に臨むことになった。

7 - 6 (後書き)

次章は彼の視点で。

第8章 王冠 アルマンの野望(前書き)

少し時間が過ぎます。

第8章 王冠 アルマンの野望

1

異界の乙女など興味はなかった。だが或日、父であるマフォーラ
ンド国王ディーノ・サルディンが驚くべきことを口にした。

「異界の乙女を連れてきたものに、わが王冠をやるう」
耳を疑った。

霸王などと称され、正妃を迎えず幾人も王妃らに種を植え、そ
の子の数は十を超えると噂されながらも玉座への執念を燃やし続け
た男。それが、王冠をやるだと？

俺はその話を鼻で笑ったが、同時に強く惹かれるものも感じてい
た。俺は第一妾妃ミア・コローユ・ジェニア・エメリア・スウーマ
の息子。事実上の長子で、第一位王位継承権を持つ。だが、安泰で
はなかった。

母は無欲な人で、あの王を心底慕っていることで、他のどの妃よ
りも寵愛を得ている。しかし姦計には疎く、王城内で繰り広げられ
る後継者争いから俺を守りきる策を講じることができなかった。

三歳になり母のいる後宮を出た俺に待っていたのは、毒や刃物の
襲撃から逃れる日々。当然父の庇護はなく、俺は母の縁者にあたる
イエドに居を移して難を逃れた。その間、腹違いの兄弟たる王子王
女の数は半分に減ったと聞く。

俺はイエドで悠々自適な生活を送りながら、のんびり父の寿命が
尽きるのを待つつもりだった。

乾都と称されるイエドは荒涼とした土地で、贅沢は望めないが、
住まう人も質実堅固なブーシエの家系が多い。豊かさとは程遠いこ
こで、俺は自由と安らぎを見つけた。そのはずだった。

あの日。近衛隊長に抜擢したタキトウスが、異界の渡り人らしき

娘を保護したと聞いて、俺の心に奇妙な感覚が湧きあがった。

これで俺は、誰に後ろ指差されることなく王になれる。

王になりたいと願っていたわけではない。ただ、幼き頃より命を狙われ、周りに翻弄され続けてきた俺が、天都の王と貴族どもに一矢を報いる時がやってきたと悟ったのだ。

胸が高鳴る。俺はこの瞬間のために今まで生きてきたのだと感ずる。

見ている、王。俺が貴様の前に、異界の乙女を引きずり出してやる……！

どうせただの女だ。王子という身分に群がる淑女の皮を被った狸（たぬき）どもをよく知っていたから、年も変わらぬ若い女と聞いても、さほどの感慨はなかった。

だが、彼女が滞留する間、世話をさせて欲しいとタキトウスが言い出してきたのには、少しばかり驚いた。

あの堅物が心動かされた女か……面白いかもしれない。

そう思い、会つのを楽しみにしていた。いや、それよりも頭の中を占めていたのは、俺が連れてきた異界の乙女を見て驚く王の顔だったのだが。

リオコという名の異界の娘は、小さくはかなげな風情の娘だった。話す言葉は異質で、落ちていたという持ち物を見たが、やはり目にしたことのないものばかりだった。

間違いなく異界の乙女……。

身の裡（うち）の深いところから、表わしようのない優越感が込み上げてくる。あの王ですら手に入れることのできなかった娘を、俺は手にしたのだ。

俺はタキトウスに身柄を引き受ける旨（むね）を伝え、白く細っそりとしたリオコの手を取った。

『異界の乙女よ。わが国に水をもたらし……我に王冠を授けよ』

思いが嵩（こう）じてそう告げると、リオコは驚いているようだった。怯えたのかもしれない。

そんなことはどうだって構わぬ。好かれようと嫌われようと、俺はこの娘を手放す気はないのだ。

しかし、嬉々として天都に報告を入れる俺の元に、恐ろしい一報が舞い込んできた。アクィナスにも渡り人が現われたというのだ。

なんだと……？

聞いた瞬間、俺はそいつを偽者だと直感した。しかもアクィナス。魔法話の指環をもつ家柄の元に、都合よく異界の乙女など現われてたまるものか。

俺がそう言うと、大神官ヘクトヴィーンも困惑した顔になった。

俺はそいつの化けの皮を剥がし、この手で正式にリオコを乙女と認めさせるために、自ら天都に向かうことを決めた。

2

デーノ＝サルデインは実際的な男だ。水が出そうだといえれば惜しみなく投資して井戸を掘らせるが、失敗に終わった時には容赦なく首を刎ねる。神話としてみられることの多かった異界の乙女の伝説をもう一度神官たちに調べ直させ、異界の扉を探させたりもした。大賢者ソロンの遺した予言の時間が間近に迫っていたことも、彼を駆り立てたのだろう。

だから異界の乙女に関心はあっても、畏怖も敬意も彼にはない。ただひたすら国のために、雨をもたらず天の水底を開け放つてもらいたいだけだ。

それを知っている俺は、天都の王城に着くと同時に王に面会を求め、リオコの持ち物を見せて本物であることを証明した。そして、魔法話の指環を彼女に差し出すことをアクイナスに命じるよう、頭を下げた。

「何卒ご配慮をお願い申し上げます、我が君」

「実は、な。アクイナス側も本物と見られる節がある」

「なんですって？」

「確かに話としては都合がよすぎる。その点は儂（わし）も疑う。しかしだな、ミア＝ヴェールよ。その娘は、ヘクトヴィーンにこう申したそうだ。異界に繋がる扉が存在するのなら、再びそこが開かれるのは必然ではないかと」

信じられない。俺が呆然としてみると、王は黒い瞳を興味深そうに煌かせ、くくつと笑った。

「しかも、大賢者たるものが扉をひとつしか用意していないという証拠がどこにあるのかと。二人とも本物という可能性を考えないのかと、恐れ気もなく言い切ったというのだ」

「しかし……」

「珍妙な娘よ。だが　その言葉に偽りはないと僕はみる。そして歯痒いながら、それを一笑に伏すだけの確証をこちら側が持たぬということもまた事実」

王は淡々と指摘して続けた。

「おまえの意見は受け止めよう。しかし最終判断は、アクイナスの到着をもって決する」

「王……！」

追いつがる俺を冷たい眼差しが一顧し、そして去っていった。

俺は納得がいかなかった。しかも二人の渡り人が会いまみえるその場に列することを、王から直々に拒否されたのだ。

「くそ……っ！」

思わずテーブルを拳で殴りつける。レニエの木は硬材として有名だが、日頃剣や武道で鍛えている俺の拳に傷など入らない。そんなことなど気にもならなかった。

王め……どこまでも俺を舐めよって！

あの王には、俺のすることなどただの飯事（ままごと）のように映るのだろう。

どうせ、まだ成人もしていない十五の俺だ。いくらでも舐められようが、虚仮（こけ）にされて黙って引っ込んでいるほど子供でもない。

俺は身形を変え、接見が行われる会場に潜り込むことにした。会場は王城の表御殿にある「太極の間」。表御殿の中心部であり、公式行事を執りおこなう通例舞台だ。

接見の内容が内容だけに見張りの数も相当なものだろうが、物見高い貴族連中が軒並み揃うことを考えると、混乱は必至。潜り込むに問題ないと、俺は判断を下した。だが、不安はある。

背は男としては高くない方だから何を着ても目立ちはないが、問題はこの眼だ。母と同じ？永久の緑葉（とわのみどりば）？と讃

えられたこの色だけは、ごまかしようもない。俺は、甲冑を深く被る会場の警護衛視に成り済ますことに決めた。

ついてきた近衛や侍従は、俺がこっそり部屋を抜け出たことなど気付くはずがない。王子が単身で気軽に行動するとは考えもしないのだ。この癖を知っているのはただ一人、二年前から近衛に入ったムシャザの三男、タキトウスだけだ。

あいつは誰よりも俺の行動に通じている。しかも、剣の腕も比類ない。だから近衛隊長に抜擢したのだ。

だが今、彼はリオコにぴったり貼り付いている。あの女のどこがいいのだからさっぱり分からないが、守つてやりたくなると普通の男は考えるようだ。俺にはただ、伝説の水門を開けてくれるだけの存在にすぎない。

俺は部屋を出るとドアの影に潜み、「太極の間」に向かう一人の衛視に体術をかけて失神させた。すばやく物陰に引きずり込むと、鎧を剥ぎとつて身につけ、会場に入って何気なく様子を窺う。

ち。人が多いな。

異界から来た渡り人を一目見ようと、大臣やら神官たちがぎっしり列をなしている。どうせ冷やかし程度の者も多いのだろう。顔を白く塗り、紅を差したクガイの化粧が、気味の悪いことこのうえなかった。

化け物どもめ……！

久しぶりに目にした、他人を蹴落とすことしか頭にない連中に、心の中で唾を吐き捨てる。

なぜか、とてもイエドが恋しくてたまらなくなった。あの荒れ果てた大地を吹き渡る風が。

俺は人の間から、必死に前を見ようとした。鎧が体に合っており、上手く動けない。人々がどよめいて、渡り人たちが到着したのが分かった。

騒がしく駆け込んできたのがアキナス側、対してリオコは、タキトウスに守られるようにして静かに入場する。

俺は兜のひさしを上げた。姿がはつきり見えない。リオコよりも背が高く、やはり変わった服装をしている。異界の人間というのは、あんなに足を出しても平気なものなのか？ 膝が丸見えで、年頃の男としてはちょっと目のやり場に困る。

兵士のような短い黒髪。リオコも女としては短いほうだが、色気というか整っているものを感じた。こちらは飾りも何も無い。すばりとした感じだ。

アクイナスの渡り人は、明るい声で「あさのまき」だと名乗った。どれが名前だか分からない。名前がこれで全部なのかも不明だ。

リオコも名前も短かったし、このようなものなのかもしれないと納得する。思わずはっとした。

何を考えているんだ、俺は……！

まるで自分が、もう一人も異界の乙女だと認めているような気がして焦る。

その間にも少女達は囁くように会話し、やがてもう一人がりオコの手を握って、王に二人になりたいと頼んだ。当然王は拒否するが、そのとき女は、とんでもないことをした。

それは見えたわけではなかった。会場がざわつき、王が信じられないという顔で玉座の前に視線を落とす姿が隙間から捉えられただけだ。

聞いたことのない言語の会話が聞こえはじめ、ようやく状況を理解する。

恐ろしいことをする……。

二人になることを拒まれた異界の娘たちは、魔法話の指環を外し、自分たちの言葉で誰にも分からぬ会話を交わしはじめたのだ。これが水門の鍵をもつとされる異界の乙女でなければ、即刻打ち首を申しつけられているに違いない。

おそらくリオコが言い出したことではない。あのもう一人、大神官ヘクトヴィーンに意見したというアクイナスの娘だろう。

なんてやつだ……。

くつと笑いが洩れる。

自分ですら恐ろしくてできぬこと　王に齒向かうということ、この衆人環視の場でやってのけた異界の娘が小気味よすぎて笑えてきた。

しかもリオコを乙女だと言い、二人で水門を探しに行くとは抜かした。それだけでなく、恥じらいもなく人員や金銭まで要求するとは。

こいつなら、叩きのめすにちょうどよいかもしれぬ。

その高い鼻っ柱を叩き折ってやろう。俺はそう、心に決めた。

3

異界の乙女のお披露目の宴など、いかにもクガイたちの言い出し
そうなくだらぬ馬鹿騒ぎには、最初から出る気はなかった。だが、
あのもう一人の渡り人を間近に見てみたくて、俺は会場の周辺で待
つことにした。

立場上どこにいても咎められることはないが、誰の目に触れても
困らぬよう礼式の服装を整え、中庭に通じる外回廊の片隅に立つ。
宴はすでに始まり、早々と抜け出た男女が連れ立って木陰に走って
いた。興味がないわけではないが、俺には刺激が強すぎる。そう思
い、場所を移した。俺はあのように人目も憚らずいちゃつく神経が
理解できない。

会場からだいぶ離れた中庭の端のポーチに、一人の女がいた。
どきりとした。体のラインに添って仕立てられた、質のよい綺羅
地の緋のドレス。うなじや体つきに花ほころんだばかりの初々しさ
が漂う。数年もすれば匂いたつような妖艶さが滲み出そうな、危う
い女。

空のグラスを傍らに置き、月光の降りしきる中で座り込んでいる。
男にでも振られたかと思つて、はっとした。女が花飾りの落ちた髪
に手をやり、乱暴に手ぐしでほどく。

短い……！

花でごまかされて気がつかなかったが、女は、兵士並みに短い髪
をしていた。

「おまえ、アキナスの渡り人か。こんなところでなにをしている
？」

思いつくと同時に、俺は声をかけていた。驚いたように女が振り
向く。頬に涙の痕。

泣いていた？

あれだけのことをしてのけた女が泣いているのが奇妙で、俺は少し笑ってしまった。

女が警戒した眼で、俺を見る。俺はその腕を掴んだ。思ったよりもしつかりした腕。抵抗する力も強い。が、俺の手を振りほどくほどではなかった。

『おまえ、もうひとりの渡り人だな』

送心術を使ってそう伝えたと、娘は一瞬怯えた顔をした。

『私が連れてきた娘を異界の乙女と宣言してくれて、感謝しているぞ』

王を脅した娘を怯えさせることに成功して、俺は優越感にひたっていた。ここでもう少し、念を押しとおこう。俺に齒向かおうなどと思わぬように。

『もうしばらくいい子でいておけ。そうすれば、命だけは助けてやる』

そつだ。怯えろ。俺を憎め。憎まれてこそ俺は 本物の王になる。

『おまえを聖地には行かせない。水門の鍵を手にするのは……ひとりだけだ。あの女が、この私に王冠を授ける』

涙に濡れていた茶色の目が、きらりとした光を帯びた。

なんだ？

この目、見たことがある。

俺がわずかに気を抜いた隙に、異界の娘は未知の言葉で喋りはじめた。ひとつひとつの音がはつきりした言葉だが、まるつきり意味が分からない。思わず問い返す。

『おまえ、なにを言っている？』

しかし、言葉が通じないことなど構わぬとでもいうように、娘は喋るのを止めなかった。

時折甲高くなるが、ヒステリックというほどでもない、耳馴染みのよい低めの声。それでも、確実に怒っているのだと分かる言葉。

しかも、なんだか馬鹿にされているような印象まで受ける。

『何を言っているんだ、さっぱり分からんぞ。奇怪な言葉だ』

そう告げると、女の語気がさらに荒くなった。イントネーションが先程とは桁違いにおかしくなる。

だが、通じないと分かっているのに、泣き腫らした顔を真つ赤にして自分を睨むように見据えたまま懸命に喋り続ける娘に、だんだんとこちらの心も萎えてくる。

俺は……何をしようとしていたんだ、この娘に。

どうみてもただの娘だ。自分とそう年も違わない。

こんなところで背伸びしたドレスを着て、ひとりで泣いていた娘。それに俺は、なんと声をかけた？

情けない。俺はやはり……ただのつまらぬ子供だ。

女から眼を逸らす。するといきなり、女が俺の髪に触れた。びくりとする。そんなことをしてきたのは母くらいなものだ。

異界の女は少し驚き、先程よりやわらかな口調で話しかけてきた。よく喋る娘。それに物怖じしない。俺が王子だと分かっているのだろうか。

女が月を示し、足元の影を差した。自分は影だと言っているのか。俺も同じだ。

王の光に照らされて落ちる影。光が消えれば、また消える。それでも大丈夫だというように女は俺を見、もう一度髪に手を触れた。俺はその手を掴んだ。

かすかに怯えた瞳。ああ、そうだ。これは昔飼っていた、小さな野生動物の目に似ているのだ。

近付くと退き、遠ざかれば近付く。誇り高く、決して手懐けられない熱い命。

『おまえはまるで、野生のミヤウのようだな』

気がつくのと、そう言っていた。

この女をもつと知りたい。そう思った瞬間、その場に金色を纏った男が現われた。

「双月」土団長にして最強の魔法士、そしてマーレインでもある男　ルイセリオ・セイアン・カーツォ「アクイナシア」。

この娘を連れてきたはずの男は、俺の手に捕らえられている彼女を見て、蒼ざめた。

珍しいこともある。

氷の男として有名なアクイナスは、有能だが感情がないともつぱらの評判だった。俺は可笑しく思い、同時に腹立たしかった。彼を見つけた瞬間、娘の頬に浮かんだ喜びの色を目にしてしまったから。その口が、親しげに彼の名を呼ぶ。

「ルイス」

「おいで、マキ」

冷静さを欠いているのか、アクイナスは通じないこちらの言葉で娘に話した。娘が戸惑った顔をする。俺はかすかに息を吐いて、彼女の腕を離れた。

本当はおまえとは、もっと別の形で会いたかった。

そんな想いが込めながら、彼女をアクイナスの元へ押しやる。娘が小走りに、彼の胸に飛び込んだ。

「失礼、王子」

精一杯怒りを押し殺した声でそう告げ、アクイナスと異界の娘は去っていった。

なぜあんなことを言ってしまったのだ、俺は。

後悔がよぎる。

おそらくアクイナスは、娘が俺に脅されたとヘクトヴィーンに報告し、すぐに王の耳にも伝わるだろう。王は最初から俺がリオコに執着しているのを知っていたから、イエドに戻って謹慎などと言いつ渡されるかもしれない。

去れと言われるなら、お望みどおりここから消えてやるさ。

自室に帰り、一人になった俺は、自暴自棄にそう思った。どちらにしる、あとは無事にリオコが水門の鍵を手にするのを待つばかり。元よりイエドに戻る気でいたので、どうということはない。

ただ、あのもう一人の渡り人に会えずに帰るのが、心が痛んだ。会って謝りたいというのではない。どうせ嫌われている。だが、もう一度あの目に会って、おまえを殺す気はないと言ってやりたかった。

あの娘、これからどうするのだろうか。本当にリオコと一緒に水門の鍵を捜しに行くのか、それとも脅されたとおり、このまま天都に残るのか。

あの娘に、この天都は窮屈すぎる。

風の吹き渡るイエドを見せたら、どんな顔をするだろう。あのアクイナスに見せたような嬉しそうな顔を俺にも向けるだろうか。

馬鹿な……。

妙な想像をしている自分に、胸中で舌打ちをする。

ベッドに転がり、そんなことを考えているうちに、朝が来てしまった。やむなく起き上がる。

早朝から珍しく客が来ていると思ったら、侍従がやってきて、ム

シヤザ將軍があゝの異界の娘と共に面会を申し込んだと告げた。

なぜタキトウスが……アクイナスではないのか？

怪訝に思いつつも、俺は会うことを了承した。

場所は、客室に面した小さい庭園に決める。見晴らしのよい高所の部屋を好む者もいるが、俺は揺れる木々や草の香りが好きだ。母が草花を愛する人だったから、見ると心が癒されるのかもしれない。天都で泊まる時にいつも利用する離宮の角部屋は、風が吹き抜け、戸外はとても心地よかった。

そこに小さなテーブルを出させ、俺は朝食の支度をさせた。メニューは侍従に任せ、女性の好みそうなものを用意させる。俺は女のもてなし方など、あまりよく知らなかった。

身形を整え席に向かうと、略式の軍服を着たタキトウスと知らない少年がいた。

おや、と思うと、少年が振り向く。異界の女だ。ドレスではなく、こちらの少年が着るシャツとズボンを履いている。女の服装ではない。

その意図が分からなくて考えていると、女のほうから話しかけてきた。

『おはようございます。すみません、朝早くに押しかけて』

言葉に魔法が掛かっている。右手に光る紅い石。なるほど、文句をつけにきたというわけか。

しかもわざわざ男の格好で……騎士を従えて、か。

女の浅知恵に笑いが出てくる。

俺は軽く手を振って、座るように促した。

「文句なら後で聞いてやる。先に食事にしよう」

『……あの』

見ると、女が一人まだ立っていた。やや顔色が悪く見えるのは、化粧を落としたせいだ。

どこか中性的な顔立ちに、昨日のような不思議な迫力はなかった。

『アルマン王子。あたし、文句を言いに来たんじゃありません』

「ではなんだ」

『あたし、あなたと話をしに来たんです』
ちよつと驚いた。

「話にもいろいろある」

『あの、あたし……あなたと、友達になってみたいです』

友達。これほど意外な言葉が出てくるとは想像もしていなかった。
タキトウスも同じだったらしく、眼を丸くして彼女を見ている。

「なぜ友達になりたい」

『なれるような気がしたから』

「昨日私はおまえに、言うことを聞かねば命はないと脅したはずだが？」

『はい。だから……』

ちよつと言葉を切って、うつむく。黒い短髪が、ぱさりと頬にかかる。

『あたし、最初の挨拶からやり直したくて。……やり直しませんか、最初から』

手を差し出す。

女から手を許すのは求愛の表われ。だが、この娘は異界から来て、しかも男の服装で堂々と王子と友達になりたいと言いつつ放った。

どうかしている。

頭がおかしいに違いない。俺はそう結論づけ、そしてなぜか、それに乗っってみる気になった。

どうせ産まれてすぐに殺されていたかもしれない身。策略に巻き込まれすぎて、凶王子などと変名で呼ばれる自分だ。一時、頭がおかしくなってみるのも悪くなかった。

野生のミヤウを思わせる茶色の瞳が、俺を射抜く。

『初めまして、マキです。よろしく』

「……アルだ。よろしく」

俺は、やわらかなその手をそつと握り締めた。

5

侍従の用意したパニに、ベイワとリグにクリームをかけたものを乗せ、それを嬉しそうに頬張りながら、マキは端的に訊いてきた。

『ねえ、アル。異界の乙女と王位って関係あるの？』

俺はスプーンでベイワの果肉を掬いながら答えた。

「ああ。今年初め、王が異界の乙女を連れてきた者に王位を与えると言った。もちろん継承権を持つものに限るが」

『うえっ』

マキが奇妙な声をあげる。

『それって本気なの？』

「たとえ冗談だとしても、一度王の口から発せられたものは命として下される。継承順位など関係なく、これで誰もが王になる可能性があるというわけだ」

『アルは継承権ってどれくらい？』

「一位だ」

マキが眉を寄せる。なぜだか女というより、やはり動物っぽい。

『余裕って気がするんだけど？』

「一位だから面倒なんだ。いろんなやつらに狙われる」

『それでイェドにいるの？』

「ああ」

質問の多いやつだ。まあ質問に来たようなものなんだろうが。

『そっか……』

考え込むように、マキはお茶のカップを両手に握った。

『だけど、理緒子は本物だよ。よかったね』

「知っている。おまえもそう言った」

ぷす、と頬を膨らませ、俺を睨む。

『じゃあ、なんであんな意地悪言うわけよ？』

「おまえに水門を開けられたら困る」

『二人で行くから、どっちがどうなるか分かんないよ。それに、できてどっちがしたかなんて黙ってればバレないじゃん』

「なんのために王が同行者を許可したと思う」

濃いカフェオを飲みながら、俺は気付いていないらしいことを指摘する。

質の良いカフェオの種を煎じた芳ばしい湯気の向こうで、マキがきよとんとした顔を見せた。

『え……』

「おまえたちがきちんと責務を果たすの見届けるために決まっているだろう。まさか、本当にただの護衛だと思っていたのではないだろうな？」

こくりと頷く。案外と素直だ。

王の前でのことも計算ではなく、ただの勢いだったのかも知れぬと思い、俺はこの娘の強運に呆れた。

「おまえ、意外と何も考えていないのだな」

『そ……そんなことないよ』

「俺に会いに来ると、アキナスは知っているのか？」

マキの顔が強張る。まったく分かり易い。言ってません、と顔に書いてある。

傍らで黙って話を聞いていたタキトウスが、ようやく口を出した。

「俺が手紙で知らせておきました。一応、俺の知る範囲の一部始終を」

『たたたたたくっ?!』

「彼には知る権利がある。君は、どこまで彼に心配をかければ気が済むんだ？」

諭すような口調に、真っ赤になったマキがうなだれる。

俺は笑った。俺も部屋を抜け出してこいつに見つかっては、今のような穏やかな口調でよく諭されたものだ。ただ怒られるよりも自

分の愚かさを思い知らされているようで、悪いことをしたと素直に反省を促される。

「俺から離れている間も面倒ごとは避けられないな、タキトウス」

「まったく困ったものです」

「俺はてつきりアクイナスが乗り込んでくるものと思っていたが、どうしてまたおまえなんだ？」

「マキに頼まれました」

「気まづげに左手で眉をかく。」

こいつの弱点は女子供。つまり、マキや俺のような者にはすごく甘くなるのだ。

『だってルイス、すごい機嫌悪いんだよ。もう近寄れないよお』

「それは、それだけ君を心配しているということだ」

「昨日迎えに来た時もかなり見物だった。あれの動揺する姿など、珍しいこともある」

マキが妙な顔をした。

『あたし、ルイスに怒られてはっかなんだけど？』

「それはヘクトヴィーンに異界の扉を調べると言ったときか？」

「そう訊き返すと、マキの目が点になる。」

『なんで知ってるの？』

「王から聞いた」

『うわ……』

王様知ってるの、とマキが椅子にのけぞる。うん、いい反応だ。面白い。

『だってあれ、ヘクターさんがルイスに偽者連れてきただろ、みたいなこと言うから』

「それで、異界の扉が他にもあると？」

「マキはこくりと頷いて、」

『あたしも理緒子も嘘ついてない。二人ともちゃんと異界から来る。だけど、どっちが水門の鍵を手に行けるかなんて、あたしたちにも分からないよ』

「じゃあ、なぜリオコが乙女と言ったんだ？」

『だってあれは……なんとなく、どっちかに決めないといけないような雰囲気があった……』

「ごによごによと口の中で言い訳する。俺は容赦なく問い重ねた。

「じゃあ、おまえも水門の鍵を手にする可能性があるということだな？」

『ただただ、アルがだめって言うなら理緒子に譲るよ？』

ぶるぶる両手を振って言い、ふと考え込む。

『あ、でも理緒子が嫌だって言ったら、そのときは違つかも』

「俺よりもリオコの意志が先か？」

『うん』

即答だ。タキトウスが苦笑する。本当にここにいるのが彼だけでよかった。これで他の者なら、不敬だとマキを退場させていただろうに。

『だって、理緒子は大事な友達だし　アルも友達だけど』

マキは真面目な顔になって少し黙り、ぽつりと言った。

『絶対一緒に二人で帰ろうねって、約束したの。だから、彼女は裏切れない』

「俺がおまえに行くなと命じても？」

『友達は命令しないの』

「じゃあ……頼んでも？」

マキは黙り、しばらく考えているようだった。

困らせるつもりはなかった。ただ、彼女の率直な意見を聞きたいと思った。

飾らない言葉を、もっと。

『じゃ、アルも一緒に行くっていうのは？』

「それは……無理だ。俺はイエドに戻る」

『なんで？』

「王命だ」

そうだ。彼女たちに会う直前、予想通り王からイエド帰都の命を

記す文書が届けられていた。アクイナスの意志が働いたようにはない。早すぎる。つまり、これは準備されていたもの。

王は最初から、異界の乙女のお披露目が終わった段階で、俺をイェドに引き上げさせる腹づもりだったのだ。

誰の差し金か知らんが……くだらぬことにばかり知恵を使う愚か者どもよ。

よぎるのは乾いた想いばかりだ。異界の乙女を連れてきたところで、所詮王は端から王位を譲る気などなかったのだ。

黙りこむ俺に、マキが呼びかけた。

『ねえ、アル』

『なんだ？』

『なんで、そんなに王様になりたいの？』

王になりたいわけではない。では 何に？

『あんな感じの悪い王様になんか、ならなくていいと思うよ？』

『感じが悪かろうと、国の王だ。この国の全てを握る』

『だけど、アルにあんなふうに人に恐がられる人には、なって欲しくないな』

『おまえ、俺を恐いと思わないのか？』

『昨日はちよつと思っただけ……でも、悪い人には思えなかったよ』
俺は手を伸ばして、マキの左腕を取った。シャツの袖口をめくると、くつきりと手首に指の痕が赤紫の痣となって浮かびあがっている。

『……すまない。ひどいことをした』

『平気。あたし、内出血しやすくして』

照れ臭そうに、マキが腕を隠す。俺は女の体を傷つけてしまったことを恥じた。

どう考えても王子の為すべきことではなかったのに、マキはこうして自分からまた会いに来て、友達になろうなどと言う。本当に不思議な娘だ。

「アクイナスに殴られても文句は言えんな。治癒をしてもらわなか

ったのか？」

『迷惑……かけたくなくて』

マキの顔が沈む。

それしきの怪我、迷惑になるなどと思われれば、アキノナスの名が泣きそうだ。魔法力の一滴で事足りるものを。

「治してもらえ。あいつも自分の女に傷がついたままでは嫌だろう」

『じ……あたしとルイスはそんなんじゃないやありませんっ』

顔を真っ赤にして否定された。昨日の様子ではそうは見えなかったが、ではアキノナスの片想いかなどと考えて、俺は少し可笑しくなった。

あのアキノナスが……まあ、それも一興だな。

面白いものを発見した気分していると、マキに恨めしそうに睨まれる。

『アル、変なこと考えてない？』

「いや」

ごまかすように、残りのカフェオを飲む。すっかり冷えてしまった。

侍従を呼んで入れ直させながら、パニをぱくつく女を見る。いい食べっぷりだ。タキトウスのことを考えて多めに用意させたパニの皿が、すっかり底が見えている。

「もう少しもって来させるか？」

『ううん。これだけあれば充分』

「マキは美味しそうに食べるな」

右隣を向き、タキトウスが感心したような声をあげた。こいつが女にそんな褒め方をすると珍しい。褒められたと思っていないのか、マキが顔を赤くした。

『食意地張ってるように見える？』

「いや。とても健康的だ」

「慎ましやかな女は俺も苦手だ。全員マキみたいだと、気が楽でいいのにな」

『あたし、ドレス着れないよ?』

確かに今日の服装はどうかと思うが。

異界の服が一番似合っていたな。

俺はふと、そんなことを思う。

「昨日のドレスも綺麗だったぞ?」

『あんなの最悪。変、だったでしょ?』

「いや」

今のマキより大人びているとは感じたが。

『でも、あんなのあたしらしくないんだもん』

「女は着飾るのが好きだと思ってた」

『オシヤレはしたいよ。だけど、年齢とか状況とか気持ちとかにふ

さわしい格好をしたいの。昨日のあたしは……最悪で』

マキが言いよどむ。

『昨日さ、気分最悪で、あたしすごく棘々してたの。だから、すごく嫌なやつだったと思う。アルにも……いろいろ言っちゃった。通じてなかったと思うけど、でも謝っとく。ごめん』

「そんなにひどいことを言っていたのか?」

『うーん……』

腕を組んで唸る。

『あたし、自分がすごく我儘で身勝手に自己中人間だって気がついてさ。それでちょっと、アルにも八つ当たりしたんだ。ふざけるなどか、根性のないやつに誰が王冠やるか、とか……』

「だいたい雰囲気は伝わったぞ」

『うわ、ごめん』

マキが顔を両手で覆う。

『だけどさ、あたしが文句言ってるの分かってて、言い返せたのにアル黙ってたじゃん。なんかさ、この人怒られたかったのかなあつてちょっと思つて』

俺は被虐趣味か?

『なんか……ああ、この人もあたしと同じで、どうしようもなく今

の自分が嫌いなんじゃないかって思ったの。だから、友達になりた
いって思った』

ああ、それは伝わったよ。

俺は、胸のつかえが、すっと取れた気がした。こいつは、魔法士
よりも癒しの力があるんじゃないだろうか。

「おまえ……月がどうとか言ってたな」

『うん。っていつか』

「影、か」

『うん、影。どんなに嫌いでも自分からは逃げられないんだって。
付きまとう影みたいに』

そうか。そう言っていたのか。

「俺は自分自身が影のような気がしていた」

『アルが？』

「ああ。いつも王の光の下にいる」

『アル』

マキが腕を伸ばして、テーブル越しの俺の手に指先を触れる。

『それなら、アルは月だよ。太陽の光を浴びて輝く、やさしい月』

「夜にだけ現われる、か」

『うん。だけど、百五十年ごとに起きて日照りで人間を苦しめるよ
うな光になって、アルにはなあって欲しくないよ』

すごいな。まさに水門の鍵を握る乙女らしい発言だ。

『アルはアルになればいい。王様になる必要はないよ』

「……そうだな」

俺はその細い指を、指で引き寄せた。やさしく握りしめる。

「そうだな」

王になどならずともいい。俺は、俺として生きていく。生きたい
道を。

「……マキ。気をつけて行けよ。タキ＝アマグフォーラまでは、馬
車の通らぬ険しい道だ」

『うん……』

「タキトウスを貸してやる。どうせこいつもついて行くと言っただろうしな。こいつの腕なら、必ずおまえとリオコを守ってくれる」

『うん』

「俺は王に言っつて、ここで戦うことにする」

『アル……？』

不安そうに見る茶色い双眸を、俺は笑って見つめ返した。

「おまえたちを偽者だつていうクガイたちを黙らせておくよ。おまえたち二人が水門を開ける時まで」

『ありがとう、アル』

「俺たちは友達だ。だから……約束する」

指を絡め、俺は息を吐き切った。

「俺は、おまえを決して裏切らない。ミアゝヴェール・アルマン・シド・マフォーラス・コーツァゝイェドとしてここに宣言する」

『じゃあ、あたしも絶対に水門を開けるつて……あ』

マキが空いている手で、慌てて口を覆う。

『絶対に理緒子に水門を開けさせるつて』

「どちらでもいい。おまえたち二人でやるんだろつ？」

『でも……』

「俺は、俺自身の力で王位につく。そのことは気にするな。おまえはリオコと水門を開けて、絶対に無事にここまで帰って来い」

俺の言葉にマキの目が潤み、一瞬黙つて、最高の笑顔で頷きかけた。

『うん……！』

その笑顔は、明るさを増した朝の光よりも眩しいくらいに輝いていて、今まで俺の胸に燻っていたものが一気に晴れたような、そんな気がした。

異界か……悪くないかもしれないな。

心の中でそう呟く。

そのあとマキに無理矢理させられた？指きりげんまん？という謎のまじないのことは、まったく理解不能だったが。

だが、異界の娘に触れたことで、俺の心に新しい風が吹いた。それだけは確かだった。

8 - 5 (後書き)

次章はルイスの登場。

第9章 氷と光 ルイスの想い

1

マキの心が分からない。

黙っていることなどできない性格だから、最初からいつも思っていることが次から次へ表に現われる。表情も豊かで言わなくても本音が見えてしまうから、言葉など通じずとも分かりあえる。そう思っていた。

私が……甘かったのか。

指環をリオコに渡してから、マキとは極端に話す機会がなくなっていた。二人がタキ・アマグフォーラに発つまでに前の乙女の資料に目を通し直しておきたかったこともあり、忙しくしていたせいもある。

だが、まだ天都へ来て二日目。期限は二週間と決まったが、もう少しゆっくりしても間に合うし、その間にマキとも時間が取れるだろう。私は安易にそう考えていた。

思ったより仕事が押し、再びマキと顔を合わせたのは、城の上位から中位貴族まで招いて開かれた夜宴の会場だった。

誰に何を吹き込まれたのやら、王が異界の乙女のお披露目すると言い出した時から、厭な気はしていた。？お嬢様？と呼ばれることを拒み、自分で自分の服を洗濯すると言い張った娘が、飾り物の舞台にあがることを素直に受け入れたがるまい。

それでもドレスは仕立てたとラクエルから聞き、意外に思ったが、ほっともしていた。あの娘も女だったかと。

しかし、宴の席に現われたマキは、まるで人が変わったようだった。象牙色の肌に映える緋のドレス、頭に飾ったフェイオウの花。

すべてが彼女を美しく引き立てていたというのに、そこに笑顔はない。人形のように立ち、リオコの隣でぴりぴりしていた。

ヘクターが護衛を手配していたはずだが、予想以上の観衆の興奮に全く役に立たず、壇上から降りた直後二人の娘は一瞬で人の波に呑み込まれた。

ムシャザが駆けつけたので安堵したが、それでも気になって何度もそちらを見る。しかし、マキは目を合わそうとしなかった。

また機嫌を損ねたかな。

私はあまり深く気に留めなかった。思えば、そのときすでに様子がおかしいと気付くべきだったのに。

マキは、すぐに怒ったり拗ねたりする。

そこが子供っぽくて、まあ十六なのだから仕方ないと思うが、本人はおおいに反省して落ち込んでしまう。その急落ぶりが、最初可笑しくてたまらなかった。こんなにも人間は感情の振り幅が大きいのだと、初めて知った気分だった。

喜怒哀楽とはよく言うが、あんなに濃厚に詰まっている人間も珍しい。私とは正反対だ。

私は、この容貌とマーレインという力で、この世に生まれ落ちた瞬間から浮いた存在だった。

あまりの奇異な容貌に両親は一時別居し、元々仲の良かった夫婦だからすぐに元に収まってユリアミスが産まれたわけだが、それでも自分が家族に埋められない風穴を開けているのだとは、ずっと感じていた。

マーレインの力を持つ者の常で、私は六才で天都に上がり、魔法士となった。

世界の気を読み、操るのが魔法士。産まれながらに精霊の加護を受けている私にそれは難しいことではなく、すぐに大人たちを追い抜いて魔法士の初級士団たる「無月（むげつ）」へと昇格した。

そんな私にやっかみや僻み、奇異の視線などはない。回るもので、氷のようだと評されることの多い表情や感情の淡さは、それらから身を守るための自身の鎧として生まれたものだった。

それは長い間、私の心までも覆っていたのに。

マキに引きずられるように発露していく、ありのままの感情。機嫌の悪さや怒り、皮肉、笑い。それらすべてを見せても、彼女は受け入れてくれた。何事もないように。

随分と……いろいろなところを見せてしまったな。

そもそも、私が誰かをあれだけ身近に置いたこと自体、異例なのだ。

人というものに不信感を持つ私は、男性の友人とでも一晩いると苦痛になる。天都での侍従も通常三名以上つくところが、僅か一名という徹底ぶりだ。マキにここまで踏み込ませた自分が、自分自身で一番信じられなかった。たとえ彼女が私以外頼れる者がおらず、寄る辺ない身であるとしても。

だから、その存在がここまで私の心を縛っていたとは、あの時まで気付きもしなかった。マキの姿が会場にないと送心術でレスラーに告げられた、あの瞬間。あの痛み。

なにをしているんだ……私は。

飲み物を取りに行ったマキが怯えたように走り出した時、私は声を掛けたが、呼び止めようとはしなかった。なぜ、すぐ連れ戻しにいかなかったのか。悔やまれてならなかった。

いや、それより……。

傍にいたべきだった。イエドの勇者のように、仕事をすべて放棄して彼女の傍にいたべきだったのだ。それをいろいろなことを口実にして、遠ざけてしまった。

異界の乙女は神官の領域。魔法士が口を出すことではないが、保護した者としてヘクトヴィーンは私にも権限を与えてくれていた。その事実で守っている気になっていたとは言えない。

腹を立てていたのだ……私は、彼女に。

同じ異界から来たりオコと楽しそうに喋り、泣きだす彼女を抱き締めて守ってやろうとするマキを見た瞬間、なぜだか傍にあったはずの自分の居場所が急に小さくなったような気がしたのだ。

彼女が他人を守るうとする意識の強い娘だということは、分かつ

ていたのに。

ヘクターのことも父のことも、彼女の怒りの発端は私だった。私にまわり機嫌を気にし、他人である私の名誉を守ろうと一生懸命になるマキが、たまらなくいらしくかわいく思えた。それが関心がリオコへと移った途端に、私は彼女を切り捨てた。

マキがいないと知った瞬間、襲ったのはそんな怒涛の後悔。

気がつくつと、レスに怒鳴られていた。頭が真っ白になる。探そうとして、基本的な魔法士としての探査すら思いつかない有様だった。印を組もうとすると、指が震えていた。

情けない……。

マキが命を懸けて水門の鍵を探す旅に出る決意をしたというのに、私は彼女を失うかも知れないという状況で、ただおろおろするばかり。

やっと気がまとまり、彼女の気配を中庭の外れで見つけたときには、二度と離さないと考えた。どれだけ彼女が大切か、思い知った気がした。しかし、彼女は無事ではなかった。

若い男に腕を掴まれ、頬に涙の跡。誰に何を言われようと、相手を引き裂かすにはいられない状況だった。

さらに男の顔を見た瞬間、血の昇った頭が一気に冷える。

「ミア・ヴェール・アルマン……」

永久の緑葉と讃えられる瞳が、妖しく笑っていた。

王位継承の確執を逃れて乾都イェドで暮らす、サルディン王の血を最も濃く継ぐと言われる御子。その性格は激しやすく、幼き頃は飼っていたペットの死を哀しむあまり、世話をしていた侍従三名の首を刎ねさせたという、凶王子の呼び名をもつ若者だ。

異界の乙女を連れてきた者に王位を譲るという王の気まぐれな一言を信じ、リオコの後ろ盾としてこの天都にやってきた彼は、もっとも気をつけるべき存在だと忠告されたばかりだというのに。

自分の不甲斐なさに齒軋りをした。それ以上事を荒立てる気はなかったのか、王子はすぐにマキを解放したが、私の怒りは抑えられ

なかった。

とりあえずその場を離れ、彼女の具合を視る。気はそんなに乱れていない。

彼女は心が強い。何をされても耐えたのだろう。

空素の密度を高めて魔法光を灯し、左腕を診ると、掴まれていた指の痕があつた。

これ以上の傷が他にあつたら……。

私は、アルマン王子を刺すかもしれない。一瞬そんな妄想にとりつかれる。

傷を残したくなくて治癒をしようと思つたら、マキが腕を引つ込めた。

『マキ？』

なぜだ？ 恐がっているのか？

傷をなくすくらいでは、彼女の負つたものは消せないのかと思つた。

苦しくなり、どうしていいか分からなくて、彼女を抱き締める。

君の話す言葉が、これで分かればいいのに。

『すごく心配した……何をされたんだ？ 王子は、君に何を……』
想像するだけでおかしくなりそうだ。マキ、なぜここにいるのに遠く感じる？

『君に何かあつたら、私は……王子を許さない』

胸に抱かれたまま、マキが泣き出した。

これからすぐ王に会つて、アルマン王子の処分を求めようと心が固まる。だが、マキは泣きながら何か言い 笑ってみせた。

心が凍る。

なぜ笑つんだ、マキ。

君は、辛い時に笑うような子ではなかったはずなのに。

王子が いや、私がそうさせたのか。

もう何も考えられない。差し出してきたマキの手を無視し、腰を抱き寄せて部屋まで連れて行く。

彼女の心は、どうやっても見えなかった。

第9章 氷と光 ルイスの想い（後書き）

…字、多い。すみません…。

2

彼女の部屋の前をどうしても立ち去れなかった。最後に見せた笑顔が心に引っかかっていた。

誰にも言っなど脅されたのか。それでも、状況を知っている私になぜ相談をしない？

指環か……。

指環を嵌めていたら、マキはすべてを私に打ち明けてくれたのだろうか。

分からない。分かるのは、彼女の心が今はもう遠くにあることだけだ。

先にシグバルトに魔法話の指環の作り方を探させるか……。

そんなくだらないことにまで思いを巡らせていると、突然ドアが開いて、服を着替えたマキが飛び出してきた。

「どこへ行く？」

「ルイス」

喋った一声で気がついた。マキの指に紅い指環が光っている。

『ごめん、ちょっと行かなきゃ』

こんな夜中にどこへ行く気だ。しかも指環をして、あんな後で誰に何を話す気だ。

思うだけで全身の血が逆流する。

「部屋に戻れ」

『だけど』

「戻るんだっ！！」

分からない、何ひとつ。彼女の望みが 自分の想いが。

私はかつてないほど乱暴に指環を抜き取り、彼女を部屋へ押し込めた。泣き声が聞こえる。

煩わしい。もう、私の心から出て行って欲しかった。
リオコに指環を返し、

「どんなに頼まれても、絶対にマキには渡さないでくれ」
そう頼んだ。

マキがこれ以上他の誰かに心を向けるくらいなら、二度と会話できなくても構わない。私は、本気でそう思った。

王城の東南、主宮殿と繋がった一画にある魔法士宮の部屋では、シグバルトと部屋付の侍従であるセアンがまだ起きて待っていた。私は香茗茶（こうめいちや）を淹れさせると、老齡のセアンに宿舎へ帰るよう命じ、二人とも退らせる。

私にも宿舎があるが、天都にいる間はほとんどこの士団長の執務室に入り浸りで、寝室や使用人室までついたそこは、自室と呼んで差し支えなかった。私は服をくつろげ、魔法光で点した室内灯をやや弱めると、高ぶった気を鎮めようとお茶を口に運ぶ。

いつも平靜さを与えてくれる香りも、今回はかりは違うようだ。飲み終わってから落ち着かなくて、私は仕事部屋のソファでアクイナスから持って来た資料に眼を通した。

だが、それも頭を素通りする。浮かぶのは、マキの泣き顔ばかりだ。

何をしているんだ、私は……本当に。

くだらないことで笑い合い、寄り添ったあの時間が、夢の中の出来事であったように指の間を滑り落ちていく。

もう、取り戻せないのか。

取り戻せるわけもない……あれは、夢だ。

おのれに言い聞かせる。そう、彼女は夢の世界から来たのだ。

それでも、三つの合が終わりかけた、まさにその瞬間。あの何ともいえぬ内側から全身が湧き立つような感覚は、今でもこの身にはつきりと焼き付いていた。

そして、突き動かされるようにして庭を見た私の眼に飛び込んだ、

奇妙な服を着たおびえた娘。

乙女と讃えられるような神秘性も気高さも纏わず、ただ真つ直ぐにこちらを見て、すべてのものに驚きはしても、不思議と眼を逸らさなかった。

どうせ、いずれ帰ることだ。こちらの常識など判断もつくまい。そう思つて、最初から胸襟を緩めてしまったのが、そもそも失敗だったのだ。

好奇心が強くて口先が立つて表情がくるくる変わつて、もの珍しさから、気がついたら目が離せなくなっていた。心が　離れなくなっていた。

……夢であるはずもない。

溜息をついて、両手で顔を覆う。

何度目だろう。私の様子のおかしさに、きつと使用人室に控えるシグバルトも目を皿のようにして起きているだろう。この状況を説明したら、日頃の上品さを吹き飛ばして謝つてこいと怒鳴りつけられそうだ。

あいつはマキびいきだからな。

幼い頃女性にからかわれたことが元で赤面症となつたシグバルトは、叔母のアルノと姉のミルテ以外の女性に免疫がない。マキに手を握られた時など、シヨック死するのかと思つたほどだ。

それでも、お嬢様扱いは嫌だと言つたマキはあいつの中で別格となり、私とマキがひとつ椅子に座つて笑つているところを見て、アルノは私の人間嫌いを治したと絶賛していた。

アクイナスの実家ではなんだかイデンという話で母（と父）を丸め込むし、ユリアミスは私に言い返す姿に？姉？と仰ぎ出す始末。

いつの間にか味方が増やす天才だな。

ヘクターも、あそこまで言われて扉を見つけないわけにはいかないかつてない張り切りようだし、レスはレスでマキの毒舌ぶりに？弟子にしたい？などと言い出す。王もなにやら気に入らしく、珍しくうるさいことは一切言つてこなかった。

最初から、自分だけの？異界の娘？などであるわけがなかったのだ。

彼女は、何かをしにきたのだと言った。ここにいる理由が、きつとあるはずだと。

私がいる理由は……あるのか？

君の傍に。

君自身にその理由はあるのかと、問いたい。だが、怖くて聞けない。

だめだ。やっぱり会って話そう。

朝になって、ようやくそう決意した私の元に届いたのは、ムシャザからの一通の手紙。

読めば、これからマキと一緒にアルマン王子に会いに行くという。愕然とした。

手紙には、昨日のことも簡単に書かれていた。旅に出れば命をもらうと脅されたこと。だが腹が立って異界の言葉で言い返したこと。それ以上のことはなかったこと。ただ、気持ちがかなり混乱しているので、私への説明はまだしたくないと本人が言っているということ。

なぜだか力が抜けた。

ムシャザに打ち明けた　つまり、リオコにも打ち明けたのだろう　ことは、王子が関わっている以上当然と言える。私を通すよりは王子に近い。それでも、なぜ脅した相手に会いに行くか理解できない。

そういえば、実家でもお茶を飲んだな……。

あれだけ失礼な態度をとった父をよく許す気になったと驚いたが、ふとあれは、私のためだったのではないかと言う気がしてきた。

『お茶を飲んでいこうよ、ルイス』

ああ、もう。なぜ君は、そんな分かりにくい形でしか自分の希望を伝えられないんだ。

はつきりといつもの調子で言えばいい。私と父に仲直りをしてく

れど。

なぜか、涙が出てきた。

守りたい。そう思う相手に守られていたのだという想いが、涙になつて流れ落ちてきた。

マキ。声を聞かせてくれ……。

いつものように自分を呼ぶ声を。

それを壊したのが自分なのだと思い知り、私は力なく、冷たい革のソファに身を沈めた。

9 - 2 (後書き)

部屋の描写付け加えました。

3

昼近くになって、私の部屋にマキがやって来た。

昨夜と同じく、ドレスが嫌だからと私の家から持って来た、少年用のシャツとズボンを着ている。動きやすく本人は気に入っているらしいが、女性らしい丸みを帯びたラインが際立って、最初見たときは正直落ち着かなかった。

この格好で王子に会ってきたのか？

さぞ驚かれたことだろう。変な目で見られていなければいいが。アクイナスは服も揃えられなかったのかと非難されるくらいは業腹だ。

私は執務机に山積みされた仕事に手をつけることなく、まだ昨日のまま資料を握り締め、ソファに座っていた。やや鈍る目で、所在なげに入口近くで立ち尽くすマキを見上げる。

普通の顔色で安堵する。どうやら会いは、悪い首尾には終わらなかったようだ。

読んでいなかった資料をサイドテーブルに重ね、ソファを空ける。

「座らないか？」

『う、うん』

魔法話の指環をしている。王子と会ってきたのだから、そのついでなのかもしてない。私は荒んだ気持ちでそう思う。

情けない……。

言葉が何も思い浮かばない。王子の名を口にしていいのか、それに触れるのもためらわれた。

「用があるんだろう？」

『うん。あの、き、昨日のことなんだけど……』

「今朝もらった手紙に書いてあったよ。脅され……たのか？」

震えかける声を気力で捻じ伏せる。

『う、うん。だけど、今日ちゃんと謝ってもらったから
謝ってもらった？ 驚いて聞き返す。』

「王子が？」

『うん。きちんと話したらね、アル、すごくいい人だったんだよ』
アル。親しげにそう呼ぶことを、あの王子が許したというのか。
「命をとると脅した相手が？」

『んんと、それだけど……まあいろいろと複雑な事情があつて』
「全部話してくれ。最初から」

『最初つて、タクの手紙にあつたことも？』

「全部。君の口から聞きたいんだ」

隣に座る膝の上の手を取ると、少し冷たかった。それでも私の手
よりわずかに暖かく、やわらかい。

『ルイスの手、冷たい。寝てないの？』

「ああ」

『ごめん、帰ろうか？』

ぐっと手を握り直す。ここで彼女を逃がしたら、私は一生後悔す
る。そんなのはごめんだ。

「君の話が先だ。話してくれ」

『う、うん。でも最初つて……アルに会った時から？』

「宴に出席したとき、緋色のドレスを着ていたな」

『うん』

「そこから」

『えっ？』

マキの目が真ん丸になる。

『なんで……そこ？』

「どうしても。話してくれ。なぜあの色に決めたんだ？」

空いているほうの手で、艶のある短い黒髪に指をからめ、滑らす。
『理緒子があれば紺色を見せて、どっちがいいかって聞いてきた
の。だから……』

「すごく大人っぽい色だった」

マキの顔が赤くなる。眼を逸らそうとするので、手でそっと戻した。

「マキ？」

『似合って……なかった、でしょ？』

どうして彼女がそう思うのか分からない。マキはときどき自分を過小評価しすぎる。こんなときに、うまく気持ちを解きほぐしてやれない自分の口下手が嫌になった。

「すごく綺麗だった。驚いたよ。別人に見えた」

『初めてお化粧されちゃった』

「髪にフェイオウを挿していたな。紅いドレスだから？」

『うん。あの花、かわいいね。どんな木に咲くのかな』

「私の家の庭にあっただろう？ 君が来た辺りの大きな木だ」

『そうなんだ。ルイスの家、いっぱい花が咲いてたから見逃してた。もったいないな』

「また見に行けばいい」

言いながら、胸が苦しくなる。あの家に彼女を再び連れて行くことはあるのか。数日前の楽しい出来事が、急に遠い過去になる。

気がつくと、彼女が泣いていた。

『……ルイス、ごめんね』

「なぜ泣くんだ？」

『あたし……すごく我が儘で自分勝手だった』

「我が儘を言われた記憶がないけど？」

『だって、ヘクターさんに怒鳴って、お父さんにも怒鳴って、王様にも反抗して、ルイスすごく困った、でしょ？』

しゃくりあげながら話す。

全部終わってしまったことだ。今さらそんなことを気にする必要などないのに。やはり慰める言葉が思いつかなくて、無言で彼女を抱き締める。

『服、汚れ……ちやう』

「着替えるよ」

『し、し』と、いいの?』

「後でするよ」

『あたし、と、いて嫌じゃない?』

困った。なんだか激しく彼女に誤解させてしまっていたのは、私のほうなのか?

「嫌じゃないよ」

『めいわく、してない?』

振り回されてはいる。もう本当にこんなことは初めてで、二度とごめんだと思うほど心身がぼろぼろに引きずり回された気分だった

今日彼女に会う一瞬前までは。

こつりと彼女の頭を額をつける。

「してないよ」

『でも……』

「なぜ私が、マキを嫌いになって、迷惑していると思うんだ?」

『だって、ここ、ルイスの仕事、場、でしょ? 邪魔、じゃ、ない?』

そうか……。

仕事にかこつけていたのを、彼女は本当に忙しいのだと勘違いしたのだ。確かに休暇後だから雑務が山積みで、初日の夜はずっとそれに追われてはいたのは事実だが。

私のせいか……。

彼女を悩ませていた原因がそんなことだと分かったら、一気に心が軽くなる。

「すまなかった、マキ」

『ルイス……?』

「私のせいだな。最初から何を置いても君の傍に在るべきだったのに」

『そんなの……』

「タクもいるし、君はかわいいイリオコに夢中だし、もう私など要ら

なくなつたのかと思つていた」

「冗談めかしたら、マキがもう、と私の胸を叩いた。半分は冗談でもないのだが。」

「間違いでよかつた。君の傍にいる」

『でも……仕事しないと、クビに、なるよ……?』

まあそれはそうだが。甘い気持ちに水を差したくはないな。

「変な王子に付きまとわれたりしたら困るだろう?」

『アルは、変な王子じゃないよ?』

「君に痣を作るような男がか?」

胸の間に縮こめている彼女の左腕をとり、赤紫に変色していた内出血の痕を消す。正確には代謝されるべきものを少し強引に押し流したというところだ。

手首の痕がなくなり満足した私に、マキはなぜか、シャツの右の袖をめくつて肘辺りを見せる。やや淡い、別の指の痕。日にちが経つたのか少し黒ずんでいる。

『ルイスの』

「……なに???」

『おとーさんのところに行くのに、腕掴んだでしょ。その痕』

「……」

即座に癒した。気まずい。確かにあの時は気が焦つて、ちよつと力を入れて掴んだような気もする。マキもたしか青痣ができるとか言っていたような。

「……悪かつた」

『いいよ。治つたし』

明らかにあまり許しているふうにない顔で、マキが言う。

あれだけ気が強くて元気そうなのに、こんなところで弱いとはどういうことだ……?」

女性の体とはそういうものだったかと思ひ返す。こんなことでは、キスも迂闊にできそうにない。

下心が顔に表われていたのか、マキが胡乱な眼で私を見ていた。

『……ルイス。今、絶対なんか変なこと考えてた』
だから君は、なぜそんなところで妙に聡いんだ？
「いいや？」

できれば、もっと別のところで聡くなつて欲しい。
異界の？制服？とやらの短すぎるスカートから出ている足に、大半の男たちの目が釘付けになっていることや、着々と増え続ける味方の面子の濃さに立場を危うく思っていることや、誰かを守ろうと予想外の方向に無鉄砲に突き進む姿に胃を痛くしていることなど。

知ったら逆に、情けないと思われしまつたらどうかな……。
哀しく思う。

マキ、それでも君を守りたいんだ。こんな私でも。

「傍にいさせてくれ」

万感の想いをこめて囁く。前髪に唇を触れる。痕が残らないように、そつと。

「私ではだめかな？」

『……ううん』

手も頬も熱い。マキの全身に真つ赤に血が昇っている。

『ルイス……』

「なに」

『……もう、怒ってない……？』

これが、どう怒っているように見えるというんだ？
本当に分からない。

君は掴んだと思つたら、すぐにその手を擦り抜けてしまつ。風のよつに、光のよつに。

「怒ってないよ」

『ほんとに？』

「……ちよつとは怒ってる」

『う。ごめんなさい……』

「嘘」

もつつと怒る彼女を両腕に閉じ込めながら、私は絶対に、ソロン

の指環をまじひとじ創るじと固く心に誓った。

久しぶりに、マキとたくさん話をした。内容は、リオコのことやアルマン王子との会話。

他の男のことを嬉しそうに語られて面白いはずもなかったが、心の狭い男と思われるのも嫌で笑顔で聞いておく。

なにしろ、こちらは七つも年上。異界との周期差を差し引いても、余裕で年長者だ。心の広いところを見せておかねばならない。アルマン王子には即刻イエドに御退去願うとしても。

泣いたのと話し続けたので疲れたのか、マキが私の胸に頭をもたれるようにしてきた。まあ、彼女を自分の横にぴったり寄り添わせていたのは私だが。

「どうした？」

『なんだか……安心して眠くなってきちゃった』

「寝ればいい」

『だってルイス、仕事行くでしょ？』

「行ってほしいのか？」

意地悪で聞くと、マキは困ったように顔を赤くしてうつむいた。

行ってほしくない、と答えてもらいたいものだが、彼女にそれは期待できない。自分より他人の都合を優先させてしまうから。

私は頭を寄せ、彼女の体を抱える左手で黒髪を撫でた。張りのある冷たい手触りの髪が指に心地よい。これが嫌いだなんて、本当にどうかしている。

「だいぶ仕事をして疲れたから、私も寝るよ。いい天気だし、昼寝にはちょうどいい」

『うん』

マキが体を離そうとしたので、腕に力を籠めた。

「どこへ行く？」

『だってルイス、ベッドで寝るでしょ？』

できれば、もうちょっとロマンチックに聞きたい台詞だ。意図したつもりはないのだろうが。

「マキも一緒？」

火がついたように、マキが耳まで真っ赤になった。意味は通じたらしい。

『……るいす、やらしい』

やらしくない男がいたら、見てみたいものだ。

「じゃあ、ここに居て」

『……え』

「ベッドに行ったら、マキは帰るんだろう？ だったら、ここで寝るよ」

マキの眼が泳いだ。寝るという意味に二通りあるのは異界でも一緒か？

彼女の中で自分が男性なのだ知って、ちょっと安心する。少し保護者としての立場が強くなってきていたから。

肩を抱き寄せて髪にキスをする、かすかに震えた。恐がらせてしまったか？

「何もしないから。マキも眠いんだろう？ 一緒に寝よう」

『ここで？』

「うん。寝心地は悪くないよ」

ソファは三人掛けの広さ。座ったまま仮眠を取るなど、私には日常茶飯事だ。

マキは頷くと、私の胸に頭を寄せ、わずかに服を握り締めた。

『……うん。寝心地悪くないかも』

呟くように言って、目を閉じる。少し いや、かなり厭な予感がした。

マキは私を、本当に何もしない男だと思っ込んだんじゃないだろうか。

「ここはもつと強引にいくべきだったか……？」

後悔してももう遅い。異界の娘は、私の腕の中で安らかな寝息をたてていた。

私はその頭にもう一度やさしくキスを落とし、瞼を閉じた。

人の気配がして、目を覚ました。すぐ傍に、シグバルトが苦笑をして立っている。はっと左腕の中を見ると、マキはまだそこで眠っていた。

「なんだ？」

ぶつきらぼつに尋ねる。

「お二人ともよくお眠りなので、起こすのに憚りましたが」

「マキはまだ寝ている。用件なら手短に言え」

囁くような詰問に、前髪から垣間見える瞳が笑った。

「ムシャザ將軍とリオコさまがお見えになっております。マキさまをお迎えにあがられたと」

「……そうか」

私のところに行つたきり戻らないので、心配になったのだろう。

つまらぬ気苦労をかけてしまったな。

まったく我ながら、今回ばかりはどうかしてしまつたようだ。

腕の中にいる少女を覗き込む。安心しきつた、子どものような寝顔。あどけない。この娘にわが国の命運を背負わせるなど、神も非情な運命を用意したものだ。

だが　そのせいで逢えたのだと思えば、複雑な気持ちになる。

「マキ……」

そつと肩を揺さぶる。わずかに身じろいですがみつき直されては、起こすに起こせない。

手を振りほどくべきか考えていると、シグバルトの後ろから、待ちかねたらしい少女と大柄な男が駆け込んできた。

「マキ×××！」

淡いシンプルなラインのドレスを着たりオコが、泣きそうな声で

呼びかける。

マキよりもかなり華奢な彼女は、折れそうだがその実しつかりしていて、マキがいなくなつた時も「彼女は自分からいなくならない絶対何かあつたはず」だと、ヘクトヴィーンの尻を叩くようにして探させていた。異界の娘とは、みな肝が据わっているものなのかもしれない。

彼女の声を聞き、マキが頭を持ち上げた。まだ開けきらない目が探す。

「……りおこ？」

私の胸にもたれ夢見心地でいるマキの姿に、状況を誤解したらしいリオコが真つ赤になつて横を向いた。彼女はマキよりも男女の仲に敏感なようだ。ムシヤザも気まずげに苦笑している。

私は笑つて、気にするなど手招いた。今は異界の娘の貞操を汚したと思われるより、昼寝用の枕にされた情けない保護者のほうが良い。

「マキ、ほらしっかり起きろ。リオコが迎えに来ている」

「ごめん、りお。寝てた。……今何時？」

完全にとぼけたマキに、理解したりオコが駆け寄る。異界の言葉でまくしたてた。

マキはほわりと笑い、指環を彼女の指に嵌める。

「ごめんつて。昨日寝てなかったから、ほんと落ちちゃつて。ルイスも寝れた？」

「ああ」

誤解されるから、そういうことはこっそり聞いて欲しかったが二人きりで。

そう思うと、出しゃばりな侍従が口を挟んだ。

「お二人で寄り添われて、本当に仲良くお眠りでしたよ」

「シグバルト、見てたの？」

「はい。異界のお客様に主人が失礼をしてもいけませんので、しつかりと」

いつかこいつの首を絞めよう。まあ、マキが赤くなって私を意識してくれたから、多少は大目にみるが。

「幸いにもご兄妹のように仲睦まじくお休みで、傍で見えておりましても、ほのぼのした雰囲気がとても心温まる様子にございました」

「……シグ、仕事に戻れ」

命じると、乳兄弟でもある侍従が、にんまりと私を見た。

「御主人様がお仕事をくださるのであれば、おのずと私も仕事に戻ります」

私は呻いて額に手を当てた。外せないままの腕の中で、マキが笑う。

『ほら、仕事しろってさ、ルイス。あたし戻るね』

「ああ、分かった」

するり、と腕の中から異界の娘が抜け出る。名残惜しくて、指先を捕らえた。マキが軽く握り返し、何か言った。言葉は分からない。だが、その瞳はもう知らない娘のものではなかった。

指が離れていく。それを胸の前で小さく左右に振り、マキはリオコと出て行った。

「タキトウス」

最後に出て行こうとした男を呼び止める。

「ありがとう」

「気にするな」

飾らない言葉。彼が仕える相手なら、アルマン王子もそう悪い男ではないのかもしれない。

妃探しを王に勧めるか。

違う方向へ頭を振り替えてみる。まだ座ったまま、腕と胸に残る重みと温もりが消えていくのを惜しんでいたら、物言いたげに立つ侍従の視線を感じた。

前髪で隠れていても、私に気付かれないなどとは思っていないだろう。

「……何も言うなよ」

「申しませんとも」

皮肉なやつだ。

「では何だ？」

「いえ。叔母と姉に良い土産話ができたと、喜んでいただけにございます」

確かに、彼女たちなら喜びそうだ。

そういえば、来る途中マキが、彼女らにお土産を持って帰りたいたと洩らしていたのを思い出す。つまりマキも、あの家の者に好意を寄せているわけだ。

周囲から搦め手でいくか……それも悪くないな。

私の頭の中で、異界の娘をこちらに引き止めておくための算段が組み上がりはじめる。だが、その前に私には為すべきことがあった。二人の娘が旅立つ日までに、できるだけの仕事を片付けておかねばならない。

二週間も留守にするのだからな。

ムシャザー一人に護衛を任せるなどという発想は、最初からない。

私は、心置きなくタキ・アマグフォーラに向かうべく、ソファから立ち上がった。

9 - 4 (後書き)

ルイス終了。真紀のターンに戻ります。

第10章 表と裏 マキの学ぶもの

1

アルとの長い朝食が終わったのは、たぶん十時を過ぎたくらいだった。時計もあるんだけど、こっちの人はあまりそういうのを気にしていなくて、神殿の鐘を目安に？一の鐘の半時すぎ？とか？二の鐘の少し前？なんて表現をするので、すぐく分かりにくい。

ちなみに、一の鐘は六時。鐘の数は最大十二回。頭が混乱するから、あとは割愛だ。

中庭をぐるっと回って理緒子の待つ部屋に戻る途中、タクと話をした。饒舌な人ではないけど、根がまじめだから短いやり取りが途切れもせずぽつぽつって感じで、結構会話が続いた。

そんな中で、彼があたしにこんなことを言ってきた。

『マキ。王子を責めないでくれてありがとう』

『え？』

『あのとおり彼はいい若者なんだが、とても誤解をされやすい。マキは厭な思いをしたのに、最初から王子を悪く言わなかっただろう？』

『う、うん』

『すぐく嬉しかった。まあ……ひとりで話に行くだとか、友達になるだの言われたときは驚いたが』

ちつとも表情変わりませんでしたか？

『王子は小さい頃から命を狙われてきた。だから、周りの人間をほとんど信用していない』

『……そうなんだ』

『本当はとても繊細な方なんだ。俺は持たないので分からないが、マーレインの力のせいかな、人の気配や心の動きにも敏感で、だから環境によっては余計に神経質になる。特に宮廷では、侍従も迂闊に

近づけない』

感受性が強いってことかな。同じ力をもつルイスと、ちょっと重なった。

『昔はもつと穏やかな方だったそうだ。だが……』

タクが言いよどむ。

『なに？ 教えてよ』

『楽しい話ではない。でも……そうだな。マキには聞いてもらって
おいたほうがいいかもしれない』

言葉を切り、タクはやや声を低めて続けた。

『彼にはあまりよくない渾名がついている。？凶王子？という』

確かにちよつと恐い感じではある。

『言われはじめたのにはいろいろと理由がついて回るが、おおよそ
二つある。ひとつは彼と同じ母親の血を引く兄弟が、彼を除いて全
員死亡していること。二つ目には、幼い頃仕えていた侍従の咎（と
が）を許さず、首を刎ねたことだ』
う。

あたしは蒼ざめた。さつき食べたパニが、一瞬胃の中ででんぐりが
えりする。

『……ほんとに首、刎ねたの？』

無意識に首をさすってしまう。ああ初心者。

『ああ。噂では、世話をしていた侍従がペットを傷つけたのに腹を
立て、係累を含め三名を処刑したなどと言われているが、俺が王子
から聞いた話はそれとは少し違う』

タクの切れ長の眼に、哀しいようなやさしいような色が浮かんだ。
『首を刎ねられた侍従がいたのは本当だ。それは乳母だった女性の
甥で、王子も信頼をしていた男だったそうだ。』

人をあまり信用できなかった王子は、当時数多くのペットを飼っ
ていたが、あるとき一匹が死んだ。戯れに王子の食事を横取りした、
そのあとで』

ぞくり、と厭な感覚が背筋を走った。

王位継承権第一位だから命を狙われるって、さっきアルから聞いた話が心に警鐘を鳴らす。あたしの想いを讀むように、タクが頷いた。

『それは、王子の命を狙う者が仕込ませた毒だった。しかも、王子のもつとも身近にいたその侍従が買収されて行なったものだったんだ。

罪を公（おおやけ）にすれば、彼の一族は計り知れない打撃をうける。だが、乳母に恩のあった王子は公表せず、代わりに彼個人の失態として極刑を許可した。それでも真実を勘付いた乳母は、責任を感じて職を辞したんだ』

『……それで、そんな渾名つけられちゃったんだ』

アルのことだから弁解もせず、噂なんて気にも留めないような振りをしつづけたんだろう。

ただの噂と分かっていても、心が傷つくことに変わりはないのに。

『かわいそうだね、アル』

簡単にそんなふうには思っちゃいけないかもしれないけど、呟いたあたしに、タクが同意した。

『俺もそう思う。王子には……年の離れた兄上と姉上がおられた。

だが、お二人とも成人を待たずして亡くなっている』

『それって……まさか』

『ああ。特に姉のミア＝シエル姫は、王子が訪ねていった部屋で毒入りの水を飲んで亡くなっていったそうだ』

ペットが毒殺された時のアルの心境を思うと、やりきれない。

こんな間違いってるって。

泣きそうになりながら思う。

なんだよ王位って。小さい子を虐めて殺して何がいいのさ。こんな立派な児童虐待だよ。

殺された子たちも勿論可哀相だけど、残されたアルが一番辛い。体が寿命を終える前に、こんなんじゃない心が殺されちゃう。

『……やっぱりアル、王様になんかならなくていいって思うな』

平民でいいから生きていて欲しい。友達だもん。

『ああ、俺も同じだ』

タクが大きく頷いた。あたしを安心させるように、ふわりと微笑む。百点スマイルだ。

『イエドに逃げた卑怯者だと罵る者もいるが、俺はそれで構わぬと思う。王子にはこんな宮廷ではなく、あの簡素な城が似合う。まあ……ここに残ると言われてしまったが』

それでも城なんかいつ。

ちよつと元気の出てきたあたしは、心の中で叫んだ。

でも、これはタクのおかげだ。言葉の端々から王子を気遣う優しさが溢れていて、知らない間に一緒にその優しさに包まれてる気がする。現実の苦さが少し和らいだ。

『マキが王子と友達になつてくれて良かった。ありがとう』

タクはそう言つて、本当にものすごく嬉しそうに笑つた。

スマイル百二十点！

あたしの得点ランプが最大限点灯する。

ああ、理緒子はずっとこの笑顔に癒されていたんだなつて、そう思つた。

それに優しいだけじゃない。彼にはきちんと周りを見て、判断を下す冷静さがある。これが將軍と呼ばれる人と一般人の違いなのかもしれない。

ここまでついてきてくれたこともルイスへの手紙も、すごく的確なのに決して押し付けがましくない。

アルの話も、彼の噂を他であたしが聞く前に教えてくれたのだから。そして彼がどういう立場にあり、あたしがどれだけ危ない橋を渡ったかも、何気に気付かせてくれた。すごい配慮だ。

おつきいなあ……。

ルイスと違つて、タクには懐の深さと安心感がある。大木のようなまっすぐな強さ。

だから心が病的になつたり、すぐにひねくれたりいじけたりあた

しにとつて、彼の存在は嫉妬するくらい眩しかった。

軽く頭一個分上をいく身長や、服を押しつけそうに盛りあがった胸や腕、大きな足なんかを見ながら、あたしは思う。タクの強さは肉体的なことじゃない。心が、強いんだ。

負けたくないな。

素直にそう感じる。ひねくれアル王子が、タクを身近に置いている気持ちがちよつと分かった。彼も、タクみたいになりたいと思っっているのかも知れない。

そう言ったら、タクは少しはにかんだ笑顔をした。

爽やかすぎだ。ある意味罪だよ、タク。

そんな彼と今度は他愛もない会話をしながら、あたしは理緒子の待つ部屋に帰った。

2

不安だったのか、シエナとラクエルにサンドイッチされるようにして待つていた理緒子の元に辿り着いたあたしは、指環を返し、怒涛のようにアルとの話し合いの様子を語って聞かせた。

そんなあたしを、シエナとラクエルがほとんど呆然と見ている。彼女たちに見れば、王子があたしと普通に会話したっていうことだけでもう、目の玉飛び出そうな驚愕事実らしい。

シエナとラクエルにも分かるよう、理緒子の両手（ほんとは左手だけでいいんだけど）を握ったまま喋りたおすあたしを、理緒子はずっとここにこしながら見ていた。

「……なに？」

「ううん。なんか、やっと真紀ちゃん戻ってきたって感じ」

「うう、ごめん理緒子。そこまで心配させたのか。」

「うるうるっときて、思わずがしつと理緒子を両腕にハグする。」

「りおこ〜、ごめんね。心配かけて」

「うん。ほんとに心配した」

「うえええ。だからごめんって。」

「寝直したくても心配で眠れないし、まだ朝ご飯も食べてないし」

「ごめん、りお」

「今度黙って消えたら、許さないからね？」

「うう、ごめんなさい」

両手を合わせて体を縮めるあたしを、理緒子が下からじとりと睨む。

「あー、怒ったらお腹減っちゃった」

「……ごめん、アルと一緒に食べてきちゃった」

しかもがつつり。理緒子はあたしと、ついでにタクも睨んで頬を

丸くした。

「いーもん、シエナとラクエルと三人で食べるからっ」

「怒らないでよ、理緒子。謝るからさ。ねっ、許して？」
手を合わせたまま、えへえへ笑って擦り寄る。

理緒子はぶいとあたしから離れ、ティーセットの並んだテーブルに腰を下ろした。まだこちらを見ないまま、お披露目の時よりもシンプルな白いふんわりしたドレスを丁寧直す。

「……いいよ。許しても」

「ほんとっ？」

「ただし条件がありまっすっ」

突然、お笑いの司会をする女子アナみたいな言い方をして、理緒子があたしをくるりと振り向いた。紅い指環を外し、あたしの手にぽんと落とす。

「なにこれ？」

「はい、条件です。今から真紀ちゃんは、ルイスに謝ってきてくださいーいっ」

「は????」

ちよつと待った、理解不能だ。なんで理緒子に許してもらうのにルイスに謝る？

つてか、関係……なくなかないか。動揺して日本語おかしくなってきたぞ。

『やだ』

「えーっ。だめだよ、真紀ちゃん。きちんと謝りに行かないと。真紀ちゃんいなくなって、ルイスほんとめっちゃめっちゃ心配して、周りの人がびっくりするくらい動揺してたんだから！」

だから余計に無理です。考えただけで泣きそうだ。

『……だめだよ』

許してくれそうにないよ。許してくれなかったら、あたしまじでヤバい。壊れるかもしれぬ。だから、謝りにいけないよ。

『会えないよ』

指環を返そうとするあたしに、理緒子がかたんと席を立った。色白の顔が、さくらんぼみたいに真っ赤になっている。

「もう、真紀ちゃんのへたれっ!」

うん、もう心はくたくたのへによへによさ。だけど、あたしの心のひねくれ天邪鬼がわさわさ騒いで、口からは違うことが飛び出す。

「……へたれじゃないもん」

「じゃあ、なんで謝りに行けないのよ?」

真っ赤な顔のまま、理緒子が腕組みをしてあたしを見た。身長差約9センチ。その差をぐんと追いついて、あたしより高いところから見下ろすように理緒子が言った。

「勝手なことをして心配かけた真紀ちゃんが悪い。だから謝る。なんでできないの?」

「だ、だって……」

「もお、ルイスは真紀ちゃんが嫌いだから怒ってるんじゃないんだよ? 逆じゃない。す、好きだから怒ってるんだよ?」

まあ、どの種類の好きかはさておき。怒られながらあたしは、少しずつ冷静に考えられるようになってきた。理緒子の言っていることがもつともだという気がして、こくと頷く。

「分かっているなら、ほら行ってくる。わたし、朝ごはん食べるんだから」

なんだか理緒子、どこかのお母さんばいぞ。ってか、それって絶対、理緒子のお母さんの口癖だ。

手の中の指環をぎゅっと握り、あたしはもう一度頷いた。

「……分かった。行ってくる」

「行つてらっしゃい」

やっぱり見送る母親のようなことを言つて手を振る理緒子に、あたしは手を振り返して、ルイスのところに向かった。

3

結果は　まあ、うまくいったんだと思う。予想通り徹夜したつばいルイスは、アクイナスの実家に向かったとき以上に、最高最悪に機嫌が悪そうだった。

　　だけど意外と声は普通で、ちょっと安心した。タクの手紙を先に読んでたからかもしれない。何書いてあったんだろう。あとでタクにきちんとお礼言っておかなくちゃだ。

　　ルイスとは、三人掛けくらいのソファに隣同士に座って話した。びしばし問い詰められるのかと思っただらそうでもなく、彼はあたしの手を握り、話が聞きたいと言ってきた。しかも、ドレスを選んだところから。

『なんで……そこ？』

　　動揺してしまう。あたしの気分が急降下した初っ端をなんで突いてくるんだ？

　　マーレインって力のせいかな？

　　思ったけどそんなこと聞けるわけもなく。話をしながら、なんとなく彼の顔を見てた。

　　顔色が悪くて目も重そうで、ちょっと顎の先とか髭も伸びてて、今のルイスはかっこいいって感じではない。年下のあたしの知らない経験を積んだ、大人の男の人だ。

　　なんであたしが、彼の隣にいるんだろう。

　　せつなくなる。異界から来たってことがなければ、絶対にあたしなんか近寄れもしなかったんだろうな。もし最初から同じ世界に生まれていたら。

　　あたし、ここにいても……いいのかな。

　　思ったら泣けてきた。彼に抱き寄せられて、子どもみたいに胸で

泣いてしまう。

ああ、また迷惑かけてる。

そんなあたしの耳に落ちてきたのは、思いも寄らない言葉。

『すまなかつた、マキ』

なんでルイスが謝るの？

『私のせいだな。最初から何を置いても君の傍に在べきだったのに』

違つよ、そんなの逆だつてば。ただ、あたしはルイスの負担になりたくなくて。いやもうなつてるけど、それでも少しは頑張りたかつたのに。

いろいろ思うのに、うまく喋れない。泣いたせい。いや、ルイスのせいだ。

『タクもいるし、君はかわいいりオコに夢中だし、もう私など要らなくなつたのかと思つていた』

ちくしょー、大人の余裕の冗談で躲してやがるよ。

悔しくて、ぼすりと胸の辺りを拳で突いたのに、それも笑つていなされてしまう。

『間違いでよかつた。君の傍に在る』

ああ、こつこつこのを殺し文句つて言うんだよ、馬鹿。

百ぐらい普通の文句で返してやりたいけど、泣いてたし、それでも気分は一瞬乙女になつてつまらない言葉しか浮かんでこない。

『でも……仕事しないと、クビに、なるよ……？』

『変な王子に付きまとわれたりしたら困るだらう？』

ルイスはそう言つて、あたしの腕の痣を治した。

なんか痛くはなかつたけど、違和感がある。ちよつと軽い運動をしたような、それでいて暖かい。ストレッチで解れた後、体が気持ちよく弛緩する、そんな感じ。

超人的なことをさらりとされるとやつぱり悔しくて、あたしは袖をまくつて、過去のルイスの悪行を晒した。

『ルイスの』

『……なに???'』

『おとーさんのところに行くのに、腕掴んだでしょ。その痕』

痣の絶えないあたしとしては、これくらいはいいかと黙っておいたけど、ちよつとくらいは優位に立ちたいもん。ルイスは気まずそうな顔になつて、すぐに癒した。

なんだつてこいつは、見た目もよくてすごい力もあつて殺し文句まで言えるんだ？ 天は二物を与えずつていうんじゃないのか？

ここの神様は偏りすぎてるんだ、絶対。

そんなことを思っていると、ルイスが何か企んでいる眼をあたしに向けてきた。

『……ルイス。今、絶対なんか変なこと考えてた』

『いいや?』

そういや、こいつは尋常じゃなく性格がひねくれてるんだつた。

容姿も力も相殺されるくらい。

『傍にいさせてくれ』

だから、そんなふうには耳元で囁くのは反則なんだつてば。

慣れないシチュエーションに凍りついていたら、あつたかい息が

髪にかかり、額の辺りに軽く キスをされた。

なんで……?』

『私ではだめかな?』

ううん、そんなわけない。でももうなんか、いっぱいっぱいで倒れそうだった。

恥ずかしいのと泣きそうなのとどうしていいか分からなくて、胸がすごく苦しくなつた。もう心臓の音が耳の傍でがanganいつている。

ひよつとしたらまだ怒つてて、意地悪とかだつたらどうしよう……。

よく分からない思考で哀しくなる。混乱する。

『ルイス……もう、怒つてない……?』

精一杯そう聞いたのに。彼は笑つて冗談を返してきた。

あーもう、ほんま腹立つわっ！

悔しくて腕をぶんぶん振り回して暴れたけど、ルイスの両腕にとられて効果なかった。

彼にとつてあたしは、いったいなんなのだろう？

異界から来た、ひよっとしたら世界を救えるかもしれない子。ア
クイナスの名誉を挽回できるかもしれない子。それ以外は？

なんも思いつかん……。

最初ルイスは穏やかで優しくて、うちの兄と取り替えたいと思っ
た。見た目も性格もすっかりそのまま全部まるっと。

だけど一緒にいるうちに、彼の馬鹿っぽいところや意地悪なところや怒るとめっちゃめっちゃ恐いところや複雑な生い立ちなんかも見えてきて、日数は浅いけど居た時間が密だったから、余計にもう他人のような感じはしなくなっていた。

友達というには馴れ馴れしく、兄妹というには下ネタもちらほら（あたしをからかうだけかもしれないけど）。ルイス的には保護者の立場なのだろうから、親子って感じにも近い気がする。まあそこまで年が離れていないにしても。

あの頭にチュツてやつも、外国映画でよくある親が子どもにするようなものなのかもしれない。濃厚なスキンシップに慣れない身としては、心臓ばくばくだから、もうちょっと控えて欲しいのだけ。ルイスがこのままソファと一緒に寝よう、と言ってきた時、あたしは思った。なんとなく彼にとつてあたしは女とかではなく、もの珍しい動物のようなものではないかと。

アルにもミヤウみたいだつて言われたしな……。

そういえば、タクにミヤウってどんな動物か聞くのを忘れていた。かわいいといいけど。

ルイスの腕に抱っこされ、仕方なくあたしは彼の胸を枕にした。

女の子と違って、やっぱり平らで硬いんだな。人生で初めて密着した男性がルイスでよかったような、複雑な気分。

だって、あたし今からこれを基準に男の人と付き合うことになる

んだよ？ ハードル高すぎだー。

複雑な思いで、彼の腕の中で目を閉じる。

自分ではない人の温かさ匂いに包まれている。だけど、嫌じゃない。心地よいまどろみの中で、もう一度髪に暖かいものが触れ、彼の頭が倒れて体から力が抜けるのが分かった。

寝たのかな。

彼の眠りも、あたしと同じくらい穏やかで安らかであればいい。そう思っ、あたしは意識を手放した。

気がついたら本当に熟睡してた。起きたらルイスがいるのはいいとしても、理緒子にタク、シグバルトまで揃っていた。寝過ごして心配かけてしまったらしい。

『ごめん、りお。寝てた』

「だったら一言言いに来てよっ！ 心配しちゃったじゃないっ」

寝てたから言いに行けなかったんだってば。

あたしはえへらと笑い、涙目の理緒子に指環を返して手をつないだ。

『ごめんって。昨日寝てなかったから、ほんと落ちちゃって。ルイスも寝れた？』

『ああ』

枕にされていたルイスが苦笑する。あんな格好で本当によく寝れたんだらうか？

なんだか性格的に平気で無理しちゃいそうだから、体が心配になる。そう思っ、どう言おうか考えていると、シグバルトが口を挟んだ。

『お二人で寄り添われて、本当に仲良くお眠りでしたよ』

『シグバルト、見たの？』

『はい。異界のお客様に主人が失礼をしてもいけませんので、しっかり』

う。一体どのあたりから見てたんだらう。泣いてたのも頭にチ

ユツも、しっかり見てたつてこと？

「恥ずかしくて頭の先が燃えるようだった。」

「幸いにもご兄妹のように仲睦まじくお休みで、傍で見えておりましたも、ほのぼのした雰囲気がとても心温まるご様子にございました。」
平然と報告する侍従をルイスが睨んだ。

「シグ、仕事に戻れ。」

「御主人様がお仕事をくださるのであれば、おのずと私も仕事に戻ります。」

「御主人様？だって。シグバルトの厭味に呻くルイスとの遣り取りが面白くて、あたしは笑ってしまった。」

「ほら、仕事しろってさ、ルイス。あたし戻るね。」

「ああ、分かった。」

立ち去ろうとすると、ルイスが指を引っぱった。なんだろう、じやれてるのかな。

青い瞳が少し笑って、少し寂しそうにあたしを見ていた。ぐっと胸が辛くなる。

ああ。彼は本当に、あたしを心配してたんだ。

彼にとって、あたしが何であるかが問題じゃない。どう想ってくれているかなんだ。

あたしは一瞬でそう悟り、その指を指先で握った。通じないと思いながら話す。

「いっばい心配かけてごめんね、ルイス。今度はちゃんと行く先伝えて出てくから、ね？」

彼の瞳がちよつとだけ和んだ。あたしは手を振り、理緒子と一緒に部屋を出た。

あたしができることって、一体なんだろう。

たぶんみんなは、タキィアマグフォーラに行って、水門の鍵とやらを理緒子と一緒に見つけてくれればいいと思っているだけなんだろう。だけど、なんだか物足りない。もし救うなら、この世界のことをもつと知っておきたい。

言葉もきちんと喋りたいし。

ぺらぺらとはいかなくても、意志の疎通くらいできないと旅の間困る。

指環をもつ理緒子といつもべつたりってわけにもいかないし、文字だって読めない。予言のことだって、もつときちんと聞いておきたい。

理緒子にそう言うと、だよねって話になった。理緒子もいろいろと不安に思うところがあったみたい。

なので、二人で相談して、ヘクターさんに頼んでみることにした。あたしたちの世話係だし、なんたって神官長様なのだ。

『よろしいでしょう？』

ヘクターさんは、あっさりあたしたちの勉強を認めてくれた。しかも、じぎじぎに教えてくれるという。

『忙しいんじゃないの？』

『忙しいですよ。異界の扉やら娘やら乙女やら、私のすべきことは山積みです』

能面というか人形というか、絶対に笑ってない笑顔で、ヘクターさんはさらりと言う。まあ彼の仕事はあたしたちの世話でもあるわけだから、いいことにしてもらおう。

お勉強会は夕方、あたしたちの部屋のリビングでお茶を囲みなが

らはじまった。

ヘクターさんはよく分からない人だ。年はたぶんルイスより上な
んだろうけど、何歳って言われてもすぐには答えられない。お香に
似たいい匂いがして、星屑をまぶしたような不思議な黒髪を腰まで
長く伸ばして、落ち着いた物腰に穏やかな微笑。

この笑顔が曲者なのだと、ルイスが言っていた。怒る時もみんな
同じ顔なんだって。

クガイという身分の人は、この手の人が多いらしい。笑顔で自分
の意志を貫き通す、腹黒タイプ。宮廷はそんな人たちの腹の探りあ
いだから、表面上は穏やかでも裏は殺伐としているようだ。だから
王位継承者の暗殺なんてのさばるんだよ、絶対。

そんなクガイの中でもヘクターさんはかなりの若手で、新進気鋭
の神官長というわけ。前の神官長が亡くなる時、直々に指名をした
ということだから、かなり優秀なのだろう。

『若いというだけで、確実に奴等の後まで生き残りますから』
と、陰で毒を吐きつつ、日々年寄りクガイたちと丁々発止している
というのは、レスから聞いた話。

彼ら三人は、若いのにいい身分に就いてしまった同士で、なんだ
かんだと気心の知れた仲らしい。

特に同じマーレインで魔法士でもあるルイスとレスは、学生時代
からの知り合いだそう。

『ヘクターさんは、マーレインじゃないの？』

『私がマーレインであれば、神官ではなくレスのように魔法士の道
を進んでいるでしょうね』

む。その言い方はもはや。

『レスもクガイ？』

『そうですよ。名家カシユゲートの長子。本来ならば跡を継ぐので
しょうが、マーレインの力のために家督は弟君に譲られたそうです』

お坊ちゃんなんだ。確かに、まるやかな物腰なのに毒のある感じ
は、クガイっぽい気もする。

花の香りがするお茶を飲みながら、理緒子が訊いた。

『クガイって、あの変なお化粧をしていたおじさんたち？』

『そうですよ』

『ヘクターさんはお化粧しないの？』

『不気味だからじゃない？』

突っ込んだあたしに、ヘクターさんが苦笑した。

『あの化粧は、伝統的なクガイの正装です。由来ははっきりとは知られていませんが、化粧をすることで豊かさを表わそうとしたのではないかと言われています』

豊かさというより趣味の悪さだろう。歌舞伎のようでも京劇のようでもなく、白塗りの上に赤や黒で線を引いたお面チックな化粧。見た瞬間、正直ひいた。

『家柄によって紋様が異なり、家同士を見分けるためとも言われていますが……確かにかなり不気味ですよ。私もしろといわれたら全力で嫌がります』

『なのに、なんでみんなしてるの？』

『古いしきたりを重んじる者は、いつの世もいるものです』

しきたり。伝統。慣習。過去の時代の人が頑張って作った形式と、いうのは大切だ。その上に則って今があるから。カタチは年月を経て洗練されて磨かれていくもの。だから、安易に否定すべきではない。カタチから入って、それを自分に染み込ませることで学ぶことは多い。

『だけど、あんまりカタチにこだわりすぎても本質を見失ってしまう。時の流れは止まらないのだ。』

『家を見分けるなら、他にも方法がありそうなもんだけど。お化粧で顔分かんなくなったら、それこそ挨拶もできないよ？』

『ええ。若いクガイの中では化粧をせず、紋章を服やマントに縫い取らせる者もいます』

それが普通だろう。そう思っていると、理緒子が首を傾げてヘクターさんの胸元を見た。

『そのボタンの模様って、ヘクターさんのお家の紋章?』

『ええ。我が家はヤーマトウーロ。古都ヤーマトウーラの地を治める家柄です』

『古都(こと)?』

『ここキヨウに移る前、天都はヤーマトウーラにありました。太陽神アーミテユースを祀る最大神殿をもつ神官都市です。ですので、私の家の紋章は太陽です』

そう言ってヘクターさんは、ボタンの模様をみせてくれた。いろいろ装飾はあるけど、簡単に言くと八角の星型模様。ルイスの家にもあるのかな。今度聞いてみよう。

『天都って移るもんなんだね』

『遷都は過去に数度あります。疫病や王の即位に合わせてなど……昔は、イエドが天都だった時もあるのですよ』

『えっ!』

驚いたのは理緒子。あたしはへーって感じだったけど、イエドから来た理緒子にはビッグニュースらしい。

『イエドってどんなところ?』

『んー、何もない……かなあ。お城からちょっと見たのと馬車からだけだから、全部はよく知らないけど』

『一度目の乾期が訪れる前、イエドはもっと豊かな都市でした。聖山フージャイの麓も見事な森が広がっていたようです。今となっては見る影もありませんが』

聖山フージャイ。そんな山があるんだ。

せっかく勉強するならと、ヘクターさんは持ってきた地図を広げて説明してくれた。リアルな山地が色つきで描かれている豪華なものだ。

『ここがイエド。これがフージャイです』

『えっと天都は……』

『ここだあ。うわ、結構離れてるねー』

『だねー』

数えると、六都市くらい通過しないと辿り着かない。自分が来た道なのに、理緒子は他人事のように笑った。うん、こののんびりさんがとても良い。

『あ、アキナス発見!』

文字は覚え切れてないけど、見覚えのある単語の並びが目止まった。

『そうですね。よく覚えましたね』

『ねえ、ヘクターさん。アマグフォーラってどこ?』

『南です。ここ、ですね』

指差されたのはマフォーランドの端と思いきや、大きな湖を飛び越えたアキナスの斜め下辺り。

『あれ、意外と近い?』

『だけど交通手段がねー』

そうなのだ。新幹線も飛行機も車もないのだ。あ、車はあるけど馬車ですから!

『どれくらいかかるの?』

『馬車ですと、一週間といったところですか』

軽く言われたけど、じんわりと焦りが出てくる。こんなところでお茶飲んで地図広げてる場合ではないのでは、あたしたち?

『急がんと間に合わんじゃん……』

『だよな』

思わず出たあたしの広島弁をスルーして、理緒子が同意する。

なにせ二週間すぎたら首をちょん!なのだ。やっぱり自分の首を撫でてしまう。うう、ネズミの心臓め。

『明日には支度を済ませ、遅くとも明後日には出発して頂こうかと』

『ヘクターさんもついてくるの?』

『いえ、私は参りません』

じゃあ誰がついてくるのだろう。アルの言った『ただの護衛ではない』という言葉が耳に甦った。不安そうに理緒子が尋ねる。

『誰が来てくれるの?』

『タクは来てくれるみたいだけど……さすがに一人じゃないよね？』
あたしの言葉に理緒子が嬉しそうな顔をし、ヘクターさんが眉を
顰めた。

『タキトウス・ムシャザの承認は誰が？』

『アル』

『……』

おや、ヘクターさんが黙ってしまった。考え込むように顎に手を
当てている。

『アルというのは、もしかミア＝ヴェール・アルマン殿下のことだ
すか？』

『うん』

『あなたを脅した？』

その情報を知ってるなら、あたしがアルとタクと三人で会ったっ
て話も聞いてそうなのに。

『そうだよ。アルとは友達になって、アマグフォーラまでタクを貸
してやるって言うてくれたの』

偉そうな言いかただが、一応タクの主人はアル。上下関係はきつ
ちりさせておかないとまずいからね。

『友達、ですか』

『うん。変な噂があるみたいだけど、アルは悪い人じゃないよ。謝
ってくれたし。ね？』

理緒子の焦げ茶色の頭がこくと頷いた。実は昼過ぎ、アルの方
から訪ねてきてくれて、理緒子とあたしにもう一回謝ってくれたん
だよ。

で、ついでに明日乗馬に誘われちゃった。理緒子とタクも入れて
四人で。

『最初の印象と違って、なんか普通の男の子だったよ』

理緒子も言うなあ。確かに年下だけど。今度はヘクターさん、額
に指先を当てている。

『どしたの？』

『……いえ、予想外の展開にいささか疲れただけです』

『疲れるとは失礼な人だ。大変だったのはうちら（タクとルイスを含む）だからっ。』

『ヘクターさん、アルを誤解しすぎだよ』

『友達を悪く思われるのは嫌だ。あたしはできるだけ誤解を解いておこうと言った。』

『アルは気をつけて行って来いって応援してくれたし、あたしに裏切らないって誓うって言うてくれたんだから』

『裏切らないと誓う？』

『えと……うん』

『手にちゅーとかではなかったけど、あれはきちんと彼自身が正式に宣言してくれたのだと思う。あたしを裏切らないと。』

『口で言うてくれたただけだけど。ながーい名前で、ほら、さくつと』

『名前？』

『ん、ミア、ヴェール・アルマン・シ……』

『言おうとしたあたしの口を、ヘクターさんの手の平ががっしと塞いだ。』

『他人から教えられた真名（まな）を軽々しく人前で言うものではありません。特に王族の方のものは絶対にお止めなさい』

『え？ ちょっと今お茶噴き戻しそうになっただけど。』

『そ、そうなの？』

『真名とは正式な名という意味です。われわれも礼節をもって名乗る時は、真名を名乗ります。ただし、王族は自ら真名を明かすことはほとんどありません。相手が対等か、それ以上でないといふと真名を明かすことは許されないので。』

『ですから王族は王以外、敬称である？ミア？を冠した名で呼ばれます。王族の真名を口にするには、不敬罪にあたるって言われてもおかしくはないですよ』

『アルって呼んでますが。つまりこれも、かなりやつちやってる？』

『タク。そーゆーこともきちつと教えておいてよ。』

心の中で恨めしく思う。

『アルは、自分で？アル？って名乗ったけど？』

『どういう挨拶をしたのです？』

『？友達になりたいです。よろしく？』

『……………』

ヘクターさん、またも無言。そして溜息。首切り役人風の恐い視線で、あたしをちらりと見る。

『彼が名乗ったのなら、そう呼ばなければかえって失礼にあたるでしょう。アルマン王子が真名にかけてあなたを裏切らないと誓ったのであれば、それは本物です。まったく……………』

深々ともう一度息を吐いて、あたしと理緒子を見つめる。

『あなた方の行動力には完敗です。われわれの案じた問題を軽く飛び越えてしまう』

問題って王位のことかな。

なんだかヘクターさんの言い方だと他にもあるって感じだけど、彼の穏やかな表情からはそれ以上のことは読み取れなかった。

ヘクターさんからはいろんなことを教わった。

マフォーランドは、一つしかないテーエの大陸のほとんどを支配しているから管理が大変で、元々国があつた範囲を主権領、それ以外を属領と呼んで治め方を変えているらしい。

イエドやアクイナスなどは主権領なので代々の領主が統治、納税を行なうけれど、属領はキヨウの貴族などが数年の交代で領主を務める。目が行き届かないから、統治者を固定しないことで地方の力を削ぐ意味があるのだそうだ。

ところで、この？領主？というのが曲者で、単に地方の土地持ちの人なんじゃないんだな。

あたしたちの世界の感覚で？州？や？県？のトップ、つまり知事だ。聞いた瞬間、あたしはムンクの叫びみたいになつたね。

おおぅ……知事に意見しちゃいましたか、あたし。

ルイスのお父さんもそうだが、実はアルも領主だったりする。イエドは彼の領地なのだ。キヨウから出て行く時に王様からもらったらしい。どれだけ感覚がデカインだ？

ビッグすぎる……。

蒼ざめているあたしの心境など露知らず、ヘクターさんは説明を続ける。

まずは身分。この国は絶対身分制という、民主主義と正反対の境地にある。トップは王様。次が王族、貴族、平民というピラミッドになる。その下にはさらに賤民（せんみん）というすごい身分の低い人がいたんだけど、人身売買が問題になって王様が撤廃したらしい。だけど事実上はまだ残っているという、シビアな状況だ。

身分は名前に反映されて、王様は？デイーノ？。王族は？ミア？

を冠した名前を特別につけられる。

王族はコーツァ、貴族はカーツォ。カーツォの中でも特に高い身分の人たちはクガイと呼ばれて区別されることなんかも教わった。

な、なんか単語が頭の中でぐちゃぐちゃですう……。

これに職業が加わると、さらにえらいことになる。平民は商人、工人、農民が大多数で、貴族は官僚や神官、騎士など。

ヘクターさんのように代々神官の家系の人をカヌシエ、代々騎士の家系がブーシエと言われて、またここでどっちが上だのあって。

うー分からん……。

ちなみに魔法士は資質が大いに関係しているので、家系というのはあまりないそう。特別なんだ。大きな神官の家系に多く産まれるとも言われているらしいけど、それも確かではないみたい。

特にマーレインの力は突発的で予測不能。かなり貴重な人材ということで、場合によっては平民からも抜擢されることがあるとか。

『今の魔法士長は平民出身です。だいぶ苦勞をされたようですが』

おお、マフォーランドドリーム？ 王様って意外と寛容なのかな。

『王はかなりの実利派です。能力のない者はクガイであつても容赦なく格下げをしますし、失敗をすれば首を刎ねます。年寄りクガイたちも必死ですよ』

だから、その簡単に首を刎ねるのはどうかと。

『王族の人はあんまり見ないね？』

『コーツァの位を持つ方は、比較的穏やかでもの静かな方々が多いのです。というより、王に成り得る他の人物に権力を持たせることを王が嫌いますので、宮殿に住まいを設けて属領の管理に出たり、王の代人として命を授受しています。』

キヨウ周辺の領地に居を構えるものもいますが、基本的に地方領主に口を出すことはできませんので、おとなしいものです』

『なんでクガイは偉そうなの？ ……あ、ヘクターさんもそうか』

『クガイは、もともと大臣以上の役職の名前でした。王が他の王族に支配特権をもたせなかつたせいもあり、それが世襲化して、代々

政治面の主導をクガイが握る図式が出来上がったのです。いくら王でも一人で財務から何からできませんからね。そこで、王に影響力をもつクガイたちが出てきたというわけです』

むむ、これぞ宮廷ドラマ？ 巻き込まれそうな身としてはいただけないが。

『独裁政権よりはましでしょうが、意見を言うクガイが腐っていてはどうにもなりません。幸い王はあまり耳を傾けるほうではありませんが、擦り寄るのが巧い者が多いのも事実です。それをどう利用できるかが施政者の資質なのでしょうが……』

日々そんな暗黙の闘争を続けているらしいヘクターさんは、軽く溜息を吐いた。

『すみません、あなた方には関係のない話でしたね』

『ううん、いいよ。聞いたのはこっちだし』

わたわたと手を振るあたしの横で、ぽつりと理緒子が呟いた。

『……わたし、廊下でお化粧したおじさんに？ 君の正体は分かっている。私が味方になるから、こっちへおいで？ って言われちゃった』
『ええっ！』

なんだそれ。それってつまり、理緒子が偽者だっという前提で言っているわけで。

『馬鹿にするにもほどがあるでしょーがよ、それ……』

『だよ。その時はパニクって何言われたか分かんなかったけど、後から考えてすごく気持ち悪くなって……』

『それいつ？ お披露目のとき？』

『うん。真紀ちゃんが帰るのを待ってる間、落ち着かなくてラクエルと散歩に出たの。その時ちよつとはぐれちゃって』

『うわ、ごめん。あたしのせいだ』

『ううん、いいよ。すぐにラクエルが駆けつけて追い払ってくれたし』

口ではいいって言っても、理緒子の唇は白く噛み締められていた。ヘクターさんが、あたしとつないでないほうの理緒子の手をテー

ブル越しに優しく握る。

『恐かったでしょう。申し訳ありません、われわれの落ち度です。よく話してくれました。すぐに護衛の数を増やしましょう』

『いいの。だって大袈裟にしたら、みんなに迷惑がかかるでしょう？ ラクエルにも黙ってて頼んだの。今のは、ちょっと話が出たついでに思い出しただけ、だから』

『リオコ。謙虚なのは美德ですが、すぎる遠慮はかえって事を乱します。もしこれでああなたの身に何かあれば、その相手は一族もろとも極刑に処されるでしょう。今の間に正しい手を打つべきです』

『え……』

また首切りの話ですか？

『あなたがたは正式な王の客人。しかも、異界から来た特別な方々です。その方に手出しをするということは、王に歯向かうものとみなされます』

『じゃあ、アルは？』

『彼は王子ですからそこまでの咎を負わせることはできませんが、たとえ子供でも罪は罪。ですから万が一を考えて、あなた方と顔を合わせないよう配慮がなされていました。まあ……会ってしまったのです』

ルイスが血相を変えたのも頷ける。王子を敵に回すというより、王に王子を処罰させる可能性がそこに潜んでいたのだから。

あたしたちって、まだまだ子どもだ。

なんだか大人の世界の複雑さを思い知った気分だ。理緒子も同じだったらしく、重い気持ちで目を合わせる。そんなあたしたちに、ヘクターさんは仮面をとり払った微笑を投げかけた。

『不自由なようですが、大人しく守られておいて下さい。われわれにそれは誇りですし、喜びでもあります。旅のことも心配しないでよいですよ。』

準備はわれわれがいたします。この世界の手助けをして頂くのですから当然でもありますし、それは大変な名誉なのです。これ以上

の遠慮は無用ですよ』

たぶん、これには二つの意味がある。あたしはなぜかそう直感した。

ひとつは、あたしたちはそれだけ手厚く守られているということ。もうひとつは、あたしたちは選ぶ権利などなく、彼らの保護下にいる義務があるということ。

この旅が終わるときまで。

『ヘクターさん。もし……旅がうまくいかなかったら、みんなどうなるの？』

『おや、マキ。あなたの口からそんな弱音が出ては困りますね』

ヘクターさんは、いつもの意地悪な口調に戻って言った。あたしはむっと頬を膨らませる。

『悪いけどあたし、最悪の事態を考えて行動する人間なの。そうじゃないと覚悟決まんないし、上手くいったら嬉しさ倍増だもん』

あたしの人生訓は？だめもと？だ。

ダメで元々。ダメだったことが前提なら、何でも挑戦してみる価値はある。念じるだけでは前に進めないのだから。

ヘクターさんは真面目な顔に戻り、やや低く言葉を口にした。

『王は……たとえ口約束でも、違えることを善しとされる性分ではありません』

つまり期限を過ぎたら、ルイスやタクヤヘクターさんも極刑ってことか。

あたしは、理緒子の左手に重ねた、少し血の気の失せた右手に力を籠めた。

『分かった。じゃあ、頑張る』

あまりにもシンプルなあたしの言葉に、ヘクターさんの顔が微妙になる。

『意味を分かっているのですか？』

『うん。失敗したらあたしたちの首はない。あたしたちが逃げたら、ルイスたちの首はない。そういうことでしょ？』

簡潔な表現に、理緒子がさらに蒼ざめたのが分かった。

『きつと王様も必死なんだよね？ ルイスやタクやヘクターさんはこの国にとつて大事な人なのに、その人たちがあたしたちに関わってるって知っててそんなこと言ったんでしょ？』

だから、頑張る。やれるとこまでやってみる。それでだめなら

『為せば成る為さねば成らぬ何事も、だよ。ばかやろー。』

『みんなを連れて異界に逃げる』

『はっ？？？』

ヘクターさんの口があぐりになった。真紀ちゃん…と、理緒子の呆れた視線がイタイ。

あたしは顔が赤くなるのを感じながら、必死に言い訳をした。

『だ、だって死にたくないもん。命惜しいもんっ』

『だからといって、なぜそこで異界に逃げるんです？』

『マフォーランドに居たら王様に見つかって首をちょん、だからに決まってるじゃんっ』

『そんな簡単に……』

『だーから、そこはヘクターさんにお任せするってゆーことでよつと左手を挙げる。頑張れ、というあたしなりの励ました。』

『異界の扉探し、よろしく』

『私、ですか……？』

『決まってるじゃん。分担作業だよ。あたしたちは水門を探す。ヘクターさんは万が一の脱出用として異界の扉を探す。これではっちり！』

親指立ててグーだ。とーぜん、仲間なら分かち合わなきゃね！

『真紀ちゃん、問題を無理矢理軽く考えようとしてない？』

『重く考えても軽く考えてもやることは一緒だよ？』

どうせやるのだ。気楽に行く。あたしはそんな深刻にひたれる性分ではない。

ヘクターさんの目が、完全に遠くを仰いだ。

『一瞬たりとも、あなたを弱気と評した自分が哀しくなりますね』

『いやいや褒められても』

『褒めてなどいません。むしろ逆です』

心なしか、リオコまでが冷めた吐息をつく。

『あーあ、わたしちよつと真紀ちゃん尊敬したのになあ。なんかがつかり』

なぜそこであたしの評価急降下？ なにがいけなかった？ どう考えても、これ以上ないほどの素晴らしいアイデアでしょうがよ???

しみじみと溜息をつく二人の傍で、あたしは訳が分からずおたおたし、そうこうしている間に本日のお勉強時間は終了となった。

10・5(後書き)

次章は…誰でしょう？ お楽しみ。

(1) シグバルトの憂鬱

天都にマキサマを連れていくと聞いた時、正直厭な予感がした。面倒なことになると。アクイナス領主邸で資料探しに呼ばれ、その予感的中し、現実さらには悪いほうへと転がっていった。

我が主人たるルイセリオ・セイアン・カーツォ「アクイナシアは、悪い人物ではない。魔法士団の最高峰「双月」の士団長を務め、あのレスライン・エルド・カシュゲートをして次代の魔法士長は彼以外にいないと言わしめるほどの人物である。

しかし、その能力や経歴に反して、人格はいささか問題があった。その容姿が能力と同じく稀有なもので、日の光を紡いだような金の髪と青空を写し込んだ碧眼ということが、彼の人格形成に深く関わってしまったことは否定できない。

極端に人と距離を置き、故郷たるアクイナスだけでなく公務の場ですら、侍従はもちろん客人も滅多に寄り付かせることはないと思う。

氷のアクイナス その二つ名がごく自然に彼に纏わりついたのも、至極当然のことだった。また本人もかえってそれをよい仮面にしてるように見えた。

それが、たつたひとつの出会いで崩れた。異界の娘との出会いで。「若様が笑っておられますっ」
血相を変えて叔母のアルノがそう報告に来た時は、一瞬何が起ったのかと思った。

それが、あの異界の娘とひとつ椅子に腰掛けて寄り添って笑っているのだと聞き、私は最初信じなかった。あの主人が、誰かに心を開いたと？

しかし、それは事実のようだった。アクイナスの邸宅に呼ばれた

時、顔馴染みの侍従から領主との会見の様子を聞き、それは確信に変わった。主人はあの娘を必要としているのだと。

最初から変わった娘だと思っていた。身形や言動もだが、時折驚くほどの真つ直ぐさで人の懐に飛び込んでくる。

私は、過去のトラウマのために女性ときちんと話すことができない。それなのに、彼女に対してはそれができた。私が赤くなつたことを自分のせいのように謝ってくれたことか、お嬢様ではなく名前で呼んでくれと言ったことか。

そのどれもが要因で、どれもが違う。おそらく、マキさまがマキさまであることが最大の理由なのだ。

最初は、人嫌いの主人の代わりに私が彼女の世話をするつもりで接してきた。だが、そんなことなど杞憂だったのだ。彼女はとっくに彼の心の鍵を掴んでいた。

まったく……こんな日が来るなどとは。

肩の荷が下りた気がする。主人がやっとなんか寄り添える相手を見つけたのだ。素直に祝福をしよう。心清らかにそう思ったのは、ほんの数瞬だった。

なぜ、こうなる……？

主人とマキさまが仲良く眠っている様子を、あたたかく傍らで見守っていただけだというのに。

私は今、主人である「双月」土団長の仕事場の一画を占拠し、古書を三方に積み上げた状態で苦行の二日目を明かしていた。

主人の状況は、予想以上に難航していた。仕事を片付けたくとも、テーエの早魑が進み水の探査に魔法士が多く借り出されて、城に残った者がほとんどいないのである。

もちろん主人もその役割を大いに期待されていたが、なにしろこちららは地ではなく天の水を探そうという立場。事情を説明すると無理強いもされなかつたようで、副団長であるニコラウス・シェズキスとフェイラード・イシェイを呼び戻し、引継ぎをすることになつ

た　　ここまでではよい。問題は別にある。

「どうだ？」

「……なにをどうお聞きになりたいんです？」

いつもの調子で主人にさらりと訊かれ、私は陰鬱に答えた。

私は昨日主人から、魔法話の指環の創り方を探せとの勅命を受けたのだ。古書の山の隙間から長い前髪の下でも分かる隈の浮かぶ顔を覗かせ、恨みがましい視線を注いだとして無理はあるまい。

「どこまで進んだんだ？」

「神王記の第八章が済んだところです」

「まだまだだな」

思わずキレた。

「当たり前ですっ。だからだと四十巻もあるわが国最長の叙事詩を原文で読めって、あなたは侍従を殺す気ですかっ！」

「ソロンが予言の書以外に書物を記していないんだ。そこに指環の創り方が載っていない以上、他から当たるしかないだろう」

「けどなんで原文なんです？　古語ですよ？　すでに使われなくて久しい死滅した言葉ですよ？　現代語訳が山のようにあるのに、なんで原文なんですっ？！」

訴えるだけでもう泣きそうだ。主人は氷と称えられた表情で淡々と言う。

「訳文では落ちているところや意味が曲解されているところもある。わざわざヘクトヴィーンが神殿の書庫から貸し出してくれた、本物の原文だぞ？　歴史好きのおまえも垂涎の代物だと言っていたじゃないか」

「あんな喜びは一瞬で消えました。なんですか、明日までに全部読み切れて。もう無理です。私の能力の限界です」

拗ねて捻くれまくった私の状態を悟り、主人は仕方なさそうにとっておきの一言を放った。

「シグ。古語を現代語並みに操れるおまえだから任せているんだ。マキのために頼む」

「……マキさまではなく、あなたのためでしょう?」

主人の頬がぴくりと引きつる。凶星だ。

「旅の間マキが不自由をしてもいいのか?」

「マキさまのご性格なら心配要らないでしょう。通じていないのに喋ってなんとなく雰囲気でご話してしまいそうですし」

私もとっておきの情報で言い返す。

「ヤーマトウーロ神官長様に文字も教えて頂くということですから、二日後の出立までには簡単な意思の疎通くらいできるようになってくるんじゃないですか? 順応性高そうですし」

主人が明らかに気まずそうな顔をした。多少はかわいいところがある。これで口が悪くなければもっと良いものを。

「だが言葉が不自由だと、何かあった時に助けてやることのできな
いだらう? 女性だし」

「国一番の魔法士なら、ご自分で指環を創ってはいかがですか?」

主人はソロンと同じくマーレインにして超一級の魔法士。他人に頼るのが嫌いな彼は、持ち得る知識を総動員して自力で魔法話の指環を創ることも当然考えたはず。しかし。

「すでにあるのなら、その方法を学ばせてもらうのが近道というものではないか」

「……できなかつたんですね」

大きな溜息がこぼれ出る。

まあ、予想はしていた。なにしろ相手は伝説の大賢者。これだけで力で指環を創るなどできたら、主人はさらに人間離れしてしまう。

これ以上常識からはみ出てくれば、こちらが困るというものだ。

「では、若様にも古書の旅にご同道願いしましょうか」

「ちよつと今仕事を立て込んでいて……ああ、行かないと。ニコルを待たせているんだつた」

「ありがちな台詞で逃げるとは、若様も落ちぶれたことで」

皮肉を言いつつ、私は布をとって再び神王記を読み始めた。国宝級の書物だけあって、手袋をはめ、会話するときは布を掛けて細心

の注意を払う。

本当はマスクがいいのだが、そこまでするとさすがに自分の精神状態に自信が持てなくなりそうなので勘弁させて頂いた。一応保護魔法はかかっているらしい。

なんだかんだと私もお人好しだな。

そもそも、こんなものは侍従の仕事ではないのだ。主人が簡単に他人を受け入れないのを知っているから、こうして度々関係のない仕事も引き受けてしまう。損な性分ではある。多少厭味を口走るくらいは見逃して欲しい。

私よりねじくれた性格の主人は、何も言わずに引き上げた。よほど仕事をしてもらいたいらしい、と思っていると、突然ふわりと暖かいものがかざされた。

主人の手の平が、ちょうど私の頭の上辺りにある。光が出ているわけでもなく風が流れるでもなく、そこから伝わる何かが疲れ切っていた私の頭、うなじ、肩、目の周りをじんわりと包み込んでいく。治癒術　魔法士の初歩らしいが、いきなりされるとさすがに驚く。

「……ありがとうございます、若様」

「礼なら完全読破した後に聞かせてくれ。期待している」
どうしてこの人は普通の励ましができないのだろうか？

私の口の悪い原因の何割かは、絶対にこの主人にあると思う。仕方ないので皮肉で返す。

「ご期待に沿うつもりは一欠片もありませんが、善処いたします」
「なぜそこで素直に頑張ると言えないんだ？」

「主人が主人ですから」

カシユゲート士団長にも？似たもの主従？と評された。毒舌家に毒舌呼ばわりされるとは、なかなかのものではある。

こんな人にマキさまを任せて大丈夫なんだろうか……。

姉や叔母には絶対に打ち明けられない不安が、胸をよぎる。だがひねくれすぎてある意味一周回ってしまっている主人の性格は、実は単純なのだ。好きなものが極端に少なく嫌いなものが大半なだ

けで、その限られた対象に異常なまでの情熱を注ぐのだ、仕事同様。私は出て行きかける主人に、少しばかり治癒の礼をしてやった。

「若様。シエズキス副団長とお話し合いが終わられたら？ エスイ？と？イオ？という物質について調べておいて下さいね」

「なんだそれは？」

「両方とも古代の鉱物または石と考えられる物です。エスイとイオを密閉した容器の中で結合させ、腐敗させた後に生じた？白い金？を精錬し？赤化？したものが？緋色の金？。それをさらに発酵させて、ようやくあの魔法話の指環の石たる？緋煌石（ひこうせき）？の完成というわけです」

青い目がやや見開かれた。照れをごまかすように、私は素っ気なく続ける。

「私も愚かではありません。これだけの量全てに眼を通すと本気で思われたのですか？ 神王記の現代語訳くらいは、とつくの昔に全巻読破しております。」

そこから必要そうな箇所を選び抜いて、片っ端から拾い読みしていつているのです。時間がないのですから、完璧より効率を選ぶのは当然でしょう？」

「なるほどな。だが、鉱物を？腐敗？や？発酵？させる方法に辿り着きそうか？」

「言葉の意味が変化していると考えるか、別の状態を表わしているかのどちらかですが、もう少し時間を頂けるのでしたら、万が一にでも辿り着く可能性がないともいえません」

「万が一か……希望が見えてきたな」

どうしても皮肉を言いたいらしい。私は睨んだ。

「せっかく進捗状況を教えて差し上げたのに、厭味を言うならもう教えませんか？」

「そう睨むな。勉強が済んでいるようなら、あとでマキに声援を送りにきてもらおうように言っておくから」

「声援を送りたいのはあなたでしょう。これで若様があの方を掴

まえ損ねたら、私の努力も水の泡なのです。せいぜい頑張ってくださいね。若いライバルも現われたことですし」

途端に主人の顔が険しくなる。他の人が見たらどれほどの叱責をされて見える状況だろうが、私は軽く笑い流した。

「あなたが普段そんなに表情豊かではないと、マキさまはご存知なのですか？」

「知るわけないだろう」

「私としては嬉しいばかりなのですがね。いろんなあなたが見れて「勝手に愉しんでいる」

「私だけではありませんよ。叔母の中ではすでに屋敷に子ども部屋を作る腹積もりのようですから」

この事実には、さすがの主人も呆れたらしい。だが、浮かれている叔母や姉の心情を思ったのか、何も言わなかった。

三年前の婚約破棄以降、主人に女性の影が皆無だったのは事実だし、われわれがみな家族同様に思っていることを彼は知っている。

「本当に……みな喜んでいるのです。マキさまが来て下さって良かったと、あなたのために。異界の乙女であろうとなかろうと、われわれにとっては重要ではないのです。無事にお戻りになられること、それだけを願っています」

「分かっている」

「旅の途中で手など出さないで下さいね」

一応、釘は刺しておく。

「……善処する」

微妙な答えに一抹の不安がよぎったが、私は気に留めないでおいた。二人のことは二人がどうにかすればよい。私はこの古語と戦って、ソロンの指環の謎を解き明かすことが急務だ。

その日の夜は当然、一睡もすることはなかった。

Interlude ? 男たちの思惑(1) (後書き)

…とゆるわけで、シグバルトでした。

(2) レスラーの愉しみ

昼過ぎ、王との会見を済ませた私が、ルイスやニコルらと合流して廊下で語らつてしていると、慌ただしい駆け音をさせてマキがやってきた。男物の服に革のブーツ、上着を着た姿だ。私は話に聞いていたのでそこまで驚かなかつたが、「双月」の二人の部下は目を丸くしている。

髪も短いので一見まだ成人前の少年のようでもあるが、きゅっと締めたウエストから伸びるまろやかな曲線はまぎれもなく女性のもの。

中性的な感じがかえって目を惹いて、部下の視線に気付いたルイスの顔にさつと暗雲が差した。おそらく、早急にマキの服装を改めさせようと心に決めたのだろう。私でもそう勧める。

「ルイス！」

あんなに大声で彼の名を呼ぶ者もない。苦笑していると、マキは息を切らせながら、われわれの前までやって来た。

「えー……と、あたし、行く、馬乗り」

習いたてのたどたどしい言葉が、初々しいかぎりだ。ルイスがやや表情を和ませて頷く。

「ああ、聞いているよ」

話によると、異界の二人の娘たちはあのアルマン王子から乗馬に誘われているのだという。しかもマキと？友達？になったという彼が、じきじきに部屋に顔を見せて誘ったらしい。律儀にもルイスのところまで報せを寄越したというから驚きだ。

ルイスは保護者らしくマキの肩に手を乗せ、送心術で見送りの言葉らしきものを伝えていた。

マキはこくりと頷き、なにか言いたそうに彼を見上げた。どこか

心配そうな、不安そうな顔をしている。

「ルイス……」

呼びかけて彼の頭を下げさせた彼女は、突然腕を伸ばすと、ルイスの両頬を手のひらで挟んだ。そのまま、むにゅっと指で左右に引っばる。

「わらって！」

その場の全員が固まってしまった。呆気にとられるルイスを尻目に、異界の娘は弾けるような笑顔で、手を振りながら駆け去っていく。咄嗟に私は後ろを向いた。

「あれが異界から来たという、噂の娘ですか」

「なんともまあ……元気でいらっしやる」

背後でニコルとフェイリーがぶつぶつ言っているが、それどころではない。この腹筋の痙攣の波をどうしてくれよう。いや、押さえ込まずにいられるものか。私は爆笑した。

「しかし……笑って、とは」

「異界のゲームか何かなのでしょうが？」

「いやいや、さすがに好意の表われなのでは？」

土団長の立場を気遣ってか微妙な感想が述べられつつづける陰で、私は必死に声だけを押し殺す。今にも殲滅（せんめつ）させられそうなるルイスの脅しが、その場に低く響いた。

「……笑うな」

「いや……あはは。はは、すまん」

私は笑いに息を引きつらせながら謝った。

「いいね。いや、いいよ、うん。俺もしてもらいたいなあ」

「何がだ」

照れ臭さのあまり、ルイスは苦虫を噛み潰したような顔になっている。

「だって、ほつぺた摘んで？笑って？だよ？俺、娘にもあんなことされたことないのに」

「改めて言うんじゃない」

「いいな。マキちゃん最高。息子の嫁にもらおうかな」

私の息子は五歳だ。娘は三歳。さらにその下に今年産まれた息子がいる。ルイスと同年齢に見られるが私は二十九才。三児の父だ。

「年の差を考えろ」

「冗談だよ。だけど、十一才差ってありだと思っけど？」

ルイスの青い眼が明らかな殺意を帯びた。面白い。一昨日の夜動揺しているこいつの姿もかなりの見物（みもの）だったが、こんな表情が見れるとは夢にも思わなかった。

あまり笑うと本気で殺されそうなので堪えたが、それでも唇の端が緩んでしまう。

笑いの余韻を楽しむように、私は独りごちた。

「笑って、か……。しばらく愉しめそうだな」

「確かに団長には笑いが足りませんが」

「氷のアクイナスがとるところですね。団員たちが見たら卒倒します」

「とるところというより、でれでれなんだよ」

私の指摘に、ルイスが唸って額に手を当てた。まあ、事実だから仕方ない。本当にあの娘には彼も形無しという訳か。

こんな姿を他の者に目撃されなくて良かったような、惜しいような気になる。もし彼女が嫁いだら、どうなってしまうのだろう？

想像が膨らむ。このアクイナスが本気であればそれも興味深いが、先程の彼女の様子では好意以上のものは感じられない。それよりむしろ。。

「微妙に親子な感じが、またたまらないね？」

私は止めを刺した。

ルイスが絶句する。さて、彼はこの状況を彼女にどう伝えるのだろうか？ この複雑極まりない男心というものを。

愉しみが増えたな。

異界の娘が、これほどの変化をもたらずとは思わなかった。水門の鍵どころではない。

またも笑いに沈む私の側頭部にルイスの痛い一撃が見舞われ、わ

れわれはなかば強引にその場から引き上げさせられた。

Interlude ?

男たちの思惑(2) (後書き)

∴ ルイス、ごめん(笑)。

(3) ヘクトヴィーンの驚嘆

異界の娘には驚かされてばかりだ。二人現われたというだけでも驚くのに、さらにあの言動。ルイセリオが？氷？のままでは無理はないのも無理はない。

彼からの報告の直後、イエドのアルマン王子からも異界の乙女を保護したとの連絡を受けた時は正直、王ともども困惑した。

それまでも王が戯れに出した通告のせいで、多くの偽者が現われていた。このたびの三月の合を狙って多少なりともそういった者が現われるだろうことは、予測の範囲内ではあった。

しかし、このたび連絡を寄越したのは、あのアクイナスとアルマン王子。騙すにせよ騙されているにせよ、相手が悪すぎる。早急に確かめる必要がある、王は私に召喚の命を下した。

懐疑的な気持ちが大きかったのは否めない。だが、まさか当の娘から反論が来るとは予想だにしていなかった。それが可能性として考えていた、王への言い訳のひとつであったとしても。

あの時点で、すでに彼女が本物であることは明らかでしたね……。

苦々しく心中で呟く。実は最初は、イエドの娘が本物かと思っていた。

見たことのない持ち物。異界の言葉しか喋れず、怯えきつた態度。なにより発見者があのムシャザだということも、嘘のないように思われた。しかし、本物は二人いたのだ。

まったく……これが異界から来た？乙女？の力なのですかね。

王の意向に逆らい、指環を外して堂々と異界の言葉で会話し、さらに保護をする者と？基本的な衣食住が賄えるだけの自由になるお金？が欲しいとは。

無欲にすぎる。

彼女らは特別な客人なのだ。疑われているのを知っているのであれば、いくらでも自分たちを正当化する言葉を並べたて、好きなだけ金品を要求すればよい。そうしなければ異界に帰ると、駄々をこねてみせればよいのだ。偽者たちは皆そうして、王の不興を買ったが。

本当に真の異界の乙女であるからこそ、彼女たちは取り繕うことができない。恐れれば怯え、孤独に泣き、理不尽なことに腹を立てる。普通の娘だ。

普通の娘……。

思い至ったその考えに、私の中で急激に罪悪感が膨れあがった。異界の乙女は、神官たちの間で伝説の救世主として神聖化されていた。百五十年前の史実がほとんど残されていないことでそれはさらに神秘さを増し、信仰が篤いところでは女神のように慕われている。

苦境に忽然と現われてわれわれを救い、忽然と消える奇跡の存在それが異界の乙女だと。

ところが実際現われた彼女たちは、われわれが想像していたような神秘に満ちたものではなかった。それどころか、この世界の存在すら知ってはいなかったのだ。

それなのにわれわれは、彼女たちを住んでいる世界から無理矢理引き離し、勝手に使命を押し付けようとしている。ただの十六の少女たちに。

自室に引きこもり、重苦しい気持ちでいた私に、レスラーが訪れて声をかけた。

「どうした？ 暗い顔がさらに暗いぞ」

「……もし、あなたの子どもがどこか別の場所に行っただけ戻らなかつたら、どうします？」

皮肉屋の年上の男は、何とも複雑な笑みを浮かべた。

「血眼になって探すだろうね」

「私もそうします」

お互い幼い子どもを持つ身だ。実感として、わが子を失うことに耐え難いものを感じる。

「まさか、おまえの口からそんな台詞が出てくるとは思わなかったな」

「甘いとおっしゃるのですか？」

レスが口の端で笑う。

「クガイらしくないと言いたいのさ」

「名門の異端児からお褒めの言葉を頂けて、感激のあまり泣きそうですよ」

同じクガイの家に生まれた彼は、棘を隠したいいつもの穏やかな顔を見せた。それでも、明るい茶色の瞳は、どこか深い翳を湛えているようだった。

「まったく……おまえが神官長で正解だったな」

「なぜです？」

「他の者では彼女らを祀りあげて人形のようにするか、さっさとクガイの餌食にしていたらどうからさ」

キヨウへの遷都以降、神政分離が叫ばれ神官の地位は下落している。代わりにクガイの台頭が著しく、異界の乙女の存在は神官の勢力を盛り立てる有益な材料としてみる者も多い。神官が政務に口を出していた頃の名残で、クガイでありながら神官でもあるという一族に生まれた私に、大きな役割を期待されていることは否めなかった。

政府要人である年寄りクガイたちは、頭から二人を偽者と決めつけ、われわれに恥をかかせようと大々的な会見の場や披露の宴を開くことを王に進言した。

おのれこそが本物だと主張する醜い争いが勃発することを待ち望んでいた彼らに、彼女たちの行動はさぞ度肝を抜かれたことだろう。同時に神官たちも、異界の娘がおとなしくこちらの手駒となるような者たちではないと思いつたはず。それはまた宮廷の権力争い

に飽き飽きしていた私にとって、良い憂さ晴らしとなった。いや、それ以上に愉しめたと言っている。

私は絡みつく因習を振り切るように一瞬目を瞑り、閉じた書物の上で両拳を握った。

「どちらの手にも彼女たちは渡しません。こちらは一方的に彼女たちを家族から引き離し、国の命運というトンでもない重圧を与えているのです。それ以上何を求めるといえるのです？」

「だと思ったよ。旅の人員に気を配らねばならないな」

「その点は考えてあります。イエドの王子が協力を申し出たと聞きましたので、多少は道が広がりました」

レスラインが、少年のような童顔をしかめた。

「協力？ 王子がそんなことまで言ったのか？」

「なにしろ？ 友達？ だそうですから」

「……やっぱり息子の嫁にもらおうかな」

なにやら不穏な呟きが聞こえる。

「だが、イエド側がしてくれたのであれば助かる。あとは俺がツークスで手配しよう」

「助かります」

名門の生まれというものは、こういう時に役に立つ。彼は主権領のほぼ全域に顔が利くのだ。魔法士ながら政治世界の裏表を自在に歩く男は、ひよいと私の手元を覗いた。

「なんだ。ソロンの書ではないのだな」

「あんなものは今さら読みたくもありません」

素っ気ない私の言い方に、くすりとレスが笑う。予言の乾期が迫り、どれほどの間私があの手物にかじりついていたことか。思い出すだけで頭痛がする。

「夕刻から部屋に籠もりっぱなしと聞いたから、ルイスに魔法話の指環の創り方でも探させられているのかと思った」

「そんな途方もないことなど、即刻お断りです。代わりに、アクイナスから連れて来た彼の侍従に神王記の原文を貸し出しました。気

の毒に」

「露ほども思わないのにそう言うところはクガイなんだな。　　じや、それはなんだ？」

私は、手の平ほどの大きさの冊子を持ち上げて見せる。

「ルイセリオがアクイナス領主宅から借り受けた、キリアンの手記です」

キリアノール・エクタル・カーツォ・アクイナシア。

世界で初めて異界の乙女と出会い、タキ・アマグフォーラまで護衛した人物である。ルイス同様優れた魔法士であり、最終的には魔法士長の座に就いた彼であるが、異界の乙女に関しては口を封じ、記録は一切残さなかったと聞く。

「手記があったとは知らなかった」

「先日家探しをしたところ、別の本を剝り抜いて隠してあったそうです。日記ではなく追想録ですね。覚書のような形のを後日まとめたのでしょうか。なかなか興味深いです。」

これによると彼は異界の娘に心惹かれていたようで、その様も詳しく書かれています」

「心惹かれた、か。血筋だな」

「かもしれない。その乙女は？肌白く、黒髪にして目は大地を思わせる深い茶色。話す言葉は異質にて、作法もまた知らぬようであった。だが魔法話の指環で会話が可能と知ると、次々と質問を浴びせてはわれわれを困らせ、また愉しませた？」

「マキみたいだな」

「ええ。ただ問題なのは、この手記がアマグフォーラに到達した途端、終わっていることです」

「それは……？」

「護衛二人を残し、彼女が一人聖地に消えたことまでは仔細に書いているというのに、ぷつりと記録がそこで途絶えているのです。後にはただ雨の中もう一人と共に帰還し、民と共に感謝の祝祭を開いたというだけで、彼女のことには一切触れていません。」

どう帰還したのかも……アマグフォーラから戻ったという記述すら

「まさか、異界に帰るための扉が、タキィアマグフォーラにあるとでも？」

「分かりません。聖地にわれわれは入れないのです。そこで何が起こったか知る由もありません」

私はそこまで言っ言葉を止めた。息を吐き、語を噛み締める。

「それに、さらに肝心なことがこの手記には抜けているのです」

「肝心なこと？」

「ええ。いつどこで出会ったか　そこがまるつきり抜け落ちていくのです。手記は彼女を王に謁見させたところから始まります。おかしいと思いませんか？　普通は異界の娘を見つけたのであれば、その部分を飛ばすはずがないでしょう。まさに最初の発見者なのですから」

「では……替え玉、か」

「ええ。ルイスもそれを疑ったようです。発見者は別な者、あるいは、彼女は本当は異界から来てはいないのではないかと」

まるで振り出した。抜け出せない迷路を延々と彷徨っているようなこの謎を、私は解き明かすことができるというのか。

励ますように、レスラーンが私の肩にぼんと手を置いた。

「まあ、頑張れよ。手記を読み解くのが先か彼女たちが来た場所を調べるのが早いか、それは分からんが　やるしかあるまい」

「心強い励まし、かたじけなく思いますよ。レスラーン」

皮肉の香辛料をたつぷり効かせた笑顔を送る。とはいえ、彼に通じるはずもない。わずか三才ほどしか違わぬというのに、老獪という言葉の似合う童顔の彼に勝てた例（ためし）がないのだ。

「異界の扉の探査は、本来ならば魔法士の仕事です。どうです？」

あなたが指揮をとっては」

「自由にやらせてくれるならやってもいいけど、どうせあとで神官に口を出されるんだらう？　面倒だな」

「となると、ここはやはり、オリザリオ魔法士長にお願いする他ありませんね」

途端レスが渋面になった。彼が逆らえない存在は、王と妻とこの男だけである。

「あの親父に話をもつていったら、ルイスがいなくなる以上、俺に振るに決まっているだろう。やめてくれ！」

「魔法士長にも先程のように辞退を申しあげればいいのでは？」

「あの頑固親父が辞退など許すわけないだろうっ。万一断りでもしたらアイアンクローで押さえ込まれて、無理矢理領かされるんだぞ！……ああ、もう俺も旅について行くって言えばよかったよ」

レスががっくりと肩を落とす。平民出身のオリザリオ・アーヴェンが魔法士長となった背景には、優れた魔法力もさることながら、個性の激しい魔法士たちを御しこなせる人格が大きいのだと言われる。レスの様子を見れば、それも頷ける。

「……分かった。やるよ。あの親父に勝ち誇った顔をされるよりましだ」

「それは助かります」

「ただし神官が文句つけてきたら、即撤収するからな。それに報告は直接おまえにする。他を間に立てると揉めた時に面倒だ」

「分かりました。マキからも任せたと言われていますので、よろしく頼みますね」

「はん？」

「分担作業なんだそうです。彼女らは水門を探し、われわれは異界の扉を探す」

「なんでまた？」

「失敗した時はわれわれも一緒に異界に逃げるのだそうです。脱出用とか」

くつと喉を鳴らし、レスが笑った。

王が本気になれば異界の扉を超えても追いつけるだろうし、また残された者たちを盾にとつて戻るように命じることもある。それ

を幼稚な思考と一蹴するのはたやすい。

だが、そんな濁った勘繰りなど全部捨てて あっけないほど単
純な空論に興じてみるのも悪いものではない。

「脱出か……俺も連れて行ってもらおうかな」

「妻子を捨てて、ですか？」

「いいや、もちろん一緒さ。彼女たちなら、一緒に行くと言っても
許してくれそうだろう？」

「では私も家族連れということだ なんだか大所帯ですね」

「ああ、大移動だ。それも面白そうだな」

冗談を続け、レスが笑顔をふつとおさめた。私も真顔に戻る。

「だが、それはさせられない。彼女たちに命の責任をとらせるわけ
には」

「……分かっています」

「しかし、俺たちができるのが過去の謎解きと異界の門探しとはね。
なんとも情けないな」

「魔法話の指環の創り方を探すよりはましでしょう？」

私の言葉に、レスが苦笑した。

「ツークスでの手配、お願いします」

「ああ。任せろ」

頷き、彼は出て行った。ちり、とかすかな音を立て、部屋を照ら
していたエイドスの燃える匂いが濃くなる。

異界の娘たちの旅立ちが、もうすぐそこまで迫ってきていた。翌
日、彼女たちはタキ「アマグフォーラに向けて旅立つ。

Interlude ? 男たちの思惑(3) (後書き)

ちょっと長めでした。。次章、ようやくリオコに戻ります。

第11章 白い野の花 リオコの居場所

1

天都に来てなんだか事件続きだった。お披露目のパーティーで突然真紀がいなくなって大騒ぎになるし、それにはアルマン王子が関わって、真紀は一人で解決しようとして心配するルイスと気まずくなるし。

結局タクが間に入ってくれて、アルマン王子のこともルイスのことも上手くいったみたいだけど、見守るしかできないわたしはハラハラし通しだった。

正直 真紀がいなくなった時、わたしが一番ショックだったと思う。

裏切られたって思いと、そんなわけないって気持ちの間でものごく混乱した。様子を見ようというヘクターさんにも、思わず強く当たってしまった。

わたしのせい……わたしがいけなかった？

ドレス選びの時から真紀の様子はおかしくて、心ここにあらずっで感じて。だからひよっとしたら、わたしが泣いたり甘えたりしたのが嫌になって出て行ってしまったのかと心配した。

そう。わたしは親友がいなくなったのに、彼女の身ではなくて、自分を心配していたのだ。捨てられたらどうしようかと。

ひどい……最低だね、わたし。

泣いたのはそのせい。だから、戻ってきた真紀のひどい顔色と腕の痣を見た途端、ものすごく後悔した。

わたし、なにを考えていたの？ 何を心配していたの？

翌朝、空白の時間に起こった出来事を聞かされて、わたしの後悔はさらに深くなった。真紀が恐がっていたことにも気付かないで、ずっと頼っていたんだ、わたし。

なんとか力になりたかったけど、タクに部屋にいろって言われるし。真紀は自分でアルと話に行つて、友達になつたつて笑顔で帰つてくるし。

わたしの居場所つて、どこにあるんだろう……。

本当に情けない。話しかけてきたたつた一人のクガイの人にも恐くて固まつてしまつて、結局はラクエルに助けてもらつた。真紀だつたらきつと一人で追い払つたんだろうな。

そう考えてまた厭になる。嫉妬してるんだ、わたし。ないものねだりの醜い子だ。

わたしは真紀にはなれっこないのに。

言いたいことをぼんぼん言つて、思いついたらぱつと行動して、無理そうなことも勢いでやつてのけちやいそうなあのパワー。わたしにも欲しい。でも、無理だ。

真紀は優しいから、わたしをすぐく褒めてくれる。いてくれてよかった、理緒子で良かったつて。不機嫌な顔も意外に泣き虫な顔も甘えん坊なところも見せて、心を許してくれる。

だけど、わたしにそれはできない。本当のわたしは醜くて汚くて絶対に誰にも見せられないから。

抑え切れなくて一度真紀の胸で泣いちゃつたけど、それでもかっこいいこと言わなきゃつて、心のどこかで意地を張つてた。

強く……なりたいのに。

小学校のときにいじめられていた。理由なんて分からない。背が低くてやせつぽちでおとなしくて、いじめるのにいい標的だったんだと思う。

いじめのきつかけは、一人の男子だ。その子がある日突然いじめてきて、そこから急速に周りに広まつていった。仲の良かった女子でさえも。

そのことを話すと？男の子が好きな女の子をいじめる、あれじゃない??なんてにやにやされたこともあるけど、わたしは違つと思う。だって、わたしには本当に辛いことだったから。

みんなの前で癖毛をからかわれたり、ランドセルの中身をばらまかれたり、帰ろうと思っただけなら運動靴が見つからなくて真っ暗になるまで泣きながら探した。変な貼り紙や落書きもいっぱいされた。

それが小4の時から続いて、ずっと我慢してたけどクラス替えしてもやっぱり変わらなくて。何度も親や先生に言おうとしたけど、チクつたらぶっころすぞ？って影で脅されて言えなかった。だから中学受験して、遠く離れた誰も知らない学校に通うことだけをずっと目標にして耐えた。

本当に、あの受験だけはわたしの我儘を貫き通したのだと思う。私学だから受験料も馬鹿にならないはずだけど、頼み込んで親に塾にも通わせてもらった。

わたしの受験を知って、周りからは？またお嬢様面してる？だの？落ちろ、死ね？だとか悪口が酷くなっただけど、耳を塞いでいた。受験して受かった時は飛び上がるくらい嬉しくて、人生の運を使い果たしたっていうくらいの気分だった。

だから、びくびくしながら通い始めた私立の中高一貫校では、絶対に敵を作らないと決めていた。愛想よく笑って、みんなと友達になるのだと。

そんなの……無理なのに。

だけど幸運は続いていたらしく、その学校はおとなしくて温和な子ばかりで、中にはわたしみたいにいじめられてた子もいた。十二年間生きてきて、初めてわたしにも友達ができて学校生活も楽しくて、やっと春が来たって感じだった。

それでも、いつもにこにこしてみんなに付き合うのも結構疲れる。誘われて入った週三の茶道部の部活も、放課後の買い物も休日の遊びも合わせるとかなりの出費だ。みんなより遠くから電車通学してるせいもあってお小遣いは多めだったけど、あつという間に消えていった。

友達に言われて、好きでもない男の子と付き合ったりもした。女子校だから友達の彼の友達とか、紹介で引き合わされる。みんな彼

氏がいるのが普通だったから、適当に付き合って別れて。

この春まで付き合ってた人とはまあまあいい感じで、それなりのもした。でも本当は好きとかどうとかより、これでみんなに追いつけたって達成感のほうが勝っていたのかも知れない。

いつも周りの顔色窺って、おどおどして。作り笑顔を振りまいて。今も乙女だと言われて調子に乗ってドレス着て。

わたしって……最低。

本当にもう底なし沼の泥にはまった気分だった。ただ、この精一杯の？かわいい理緒子？の演技が旅が終わるまでもってくれればいいと、それだけを思った。

真紀は時々予想外のことをする。突然「ヘクターさんに勉強を教えてもらいたい」と言い出してきた。わたしも確かに文字が読めたらいいのにな、とは思っていた。タクとの会話も広がりそうだし。

あ、またいい子ぶってる。

自己嫌悪に浸りながら、それでもなんでもないって顔で、わたしはヘクターさんのお勉強会に賛成した。勉強の内容は、最初はマフオーランドのことや身分などのしきたりのこと。二日目は言葉の練習だ。

マフオーランドの文字、つまりわたしのいた世界でいうアルファベットは二十八文字ある。平仮名は五十一文字だから少ないように見えるけど、これが大変。

二十八文字中母音となる文字が六文字。それ以外の子音との組み合わせは22×6通り。それに母音だけの音、子音だけの音なんて合わせたら……もう文系のわたしの頭では分からない数の多さだ。ア？に聞こえる音も？ウア？だったり？アウ？？アー？と様々。

え、英語もこんなに大変だったっけ？

なんて真紀と二人で冷や汗をかきながら、綴りと発音の練習をした。これでアクイナスの指環がなかったら、どれほど困ったことだろう。

真紀は最初もつと気楽に考えてたみたいで、携帯用の辞典みたいなものを作ろうかと目論んでいたらしい。それもすぐにお手上げと分かり、単語よりも簡単な文節？おはよう？とか？こんにちは？なんてのを丸暗記することにしたようだ。

『単語は使っているうちに覚えていくでしょう。地名もだいたい覚えようですし』

『ヘクターさん、地名にも意味があるの？』

真紀は何にでも好奇心旺盛だ。

『ええ。古語が混じっていたり、本来の意味から離れたものもありますが』

『じゃ、キヨウは？』

『大きな都という意味ですね。古語です』

『イエドは？』

『河口、あるいは門という意味の古語です。古代は海に通じる川が流れていたようです』

『アキナスは？』

『不明です。奥地という古語が訛ったものらしいのですが、国としては古く、確かなことは分かりません』

へー、ヘクターさんでも分からないことがあるんだ。

『アキナスって古いんだ？』

『われわれの祖先はタキアマグフォーラで発祥したとされています。一番古い資料では現在の鉾都ツークス、ナカ辺りが天都とされ、アキナスが最奥の土地と書かれています。そこから東北方向に国が広がっていったのではないかという説が有力ですね』

他の国の成り立ちって面白い。歴史とか考古学が好きなわたしには、興味津々だ。

『タキアマグフォーラは？』

『？いと高き処？？偉大な神の寝所？などという意味の古語です』

真紀が考え込む。

『？タキ？が？高い？ってこと？』

『そうですね。偉大とか、大きいという意味合いですね』

『じゃ？タキトウス？は？』

あ。そっか、真紀するどーい。

『偉大な男、大いなることを成し遂げる者……なるほど。深くは考えていませんでしたが、改めてみるとこれほど彼にふさわしい名はないようですね』

十九才で將軍、今は近衛隊長だもん。すごいよね。感心してると、今度はヘクターさんが尋ねてきた。

『お二人の名前にはなにか意味があるのですか？』

『意味といわれると……』

真紀が呟いて、文字練習用の黒板（紙は貴重だから勉強には使わないんだそう）に水筆で大きく自分の名前を書いた。ヘクターさんに見せて、

『あたしの？ま？の字はこれ。真実とか真つ直ぐとかって意味。？き？は物事のすじ道とか、物を書き残すっていう意味』

『興味深いですね。リオコは？』

『わたしは……』

同じように黒板に自分の名前を漢字で書いて、

『これで一文字ずつで？りおこ？。？ことわりの初めの子？っていう意味みたい。初めての子供っていうことと、正しい道を選んでいって欲しいからだって』

嘘ばかり。本当は画数と字面で選んだって聞いたのに。言葉の意味はあとで無理矢理くっつけたんだって、他の人に聞かれて困らないように。

そんなわたしの思いも知らず、ヘクターさんは感心したように、にっこり笑った。

『二人とも良い名ですね。それに、文字もとても素敵です』

『うん。？理緒子？って名前、あたし好きだな』

『マキもいいと思いますよ？ 意味もあなたにふさわしい気がしますし』

せっかくヘクターさんが褒めたのに、真紀はほっぺたをぷつと膨らませた。

『えー、あんなのこじつけだって。適当に決まってるじゃん』

え、そうなの？

『そうなのですか？』

『うちの親、ほんといい加減でさ。あたしが産まれる時に男だと思

い込んで、男の名前しか準備してなかったんだよ。で、産まれて慌ててその中から一番女っぽい名前を探したの！」

『そーなんだ』

真紀の家のどたばたが目には浮かんで、わたしは思わず笑った。

『そーなの、ひどくない？ 本当は？まさき？とかだったんだよ！

？き？が樹木の？樹？で？真樹？』

『かつこいい名前だね』

『せめて希望の？希？がよかったなあ……』

しょぼくれる真紀を見て、わたしもつい口にした。

『でも、わたしも似たようなものだよ。母親が？りおこ？っていう名前がどうしてもつけたかったんだって。響きが女の子っぽくてかわいから』

『親って困るよねー。そんな大事なこと、簡単に決めないで欲しい

よ』

『はは、だよね』

『いろいろ曰く付きでもさあ、そこんとこ黙っててくれよって感じだよ。大人なら胸にしまっとけ！って言いたいよお』

わたしと真紀が話していると、傍で聞いていたヘクターさんが苦笑した。

『なんだかとても耳の痛い話ですね』

『え、なんで？』

『私も似たような理由で息子の名前をつけましたので』

一瞬二人で固まった。

ヘクターさん、既婚者？ しかも子持ち？？

『息子さん、いくつですか？』

なぜか敬語になる真紀。

『三才です』

『なんて名前付けたの？』

『グローエンダー。愛称はエディです』

『なんか……重そうな名前だね』

『そうなのです。私の好きな叙事詩の主人公からとったんですよね。ですので、安易に決めたと言われるとそれまでなのですが……』

うん、安易だと思う。子どもが知ったらちよつと傷つくよね。

『ですが、これでも悩んだのです。家名が重いものですから、負けない立派な名がいいか、呼びやすい簡単な名前がいいか。結局どちらも本人が選べるように長い名で、愛称も名前としてあるものをと考えてこうなりました』

『ふうん……お父さんも苦労してるんだ』

『そうです。きっと二人のご両親も、口では簡単に言いながら、いろいろと悩んだのですよ。なにしろ子どもが産まれてくるまで十ヶ月間、考える時間は限られていますからね』

そう話すヘクターさんは、いつになく優しいお父さんの顔になっていた。ふと両親の顔が重なる。

寂しいとか会いたいていうより、もっと話をしてあげればよかったなっと思う。

パパ……ママ。わたし、もう少し素直な子になれるかな。

道のはじまりを歩けるように。

二人のかけてくれた願いが、少しでもわたしを強くしてくれればいい。そう思った。

その日の午後は、アルマン王子の乗馬のお誘いを受けて、真紀とタクと三人で出かけた。向かう途中、真紀がルイスの許可をとりたいた言うので、宮殿に立ち寄る。

天都の王城はものすごく広くて、お城の中に宮殿や神殿がある。表御殿とも呼ばれる宮殿は上から見ると下膨れた十字架の形をしていて、右側の腕がわたしたちのいる客室があるところ。左腕がアルマン王子などのいる王族のいる場所。頭側に王様の王妃様たちと王様の部屋があって、足元が会見や会議なんかを行う政治の表舞台だ。ルイスはここにいる。

白い魔法士の制服を着て短いマントを羽織るルイスは、金髪だからすぐに見分けがついた。同じ白い服の部下みたいな人と、青い服の魔法士のレスと一緒に通路を歩いている。

「ルイス！」

名前を呼んで、手を振りながら真紀が駆け出す。気付いたルイスが苦笑して立ち止まった。苦笑といっても、仕方ないなっていうお父さんのような微笑みだ。

部下の人はどうやら真紀の姿を見て驚いているようで、目を真ん丸にしている。

こちらの女の人は滅多にズボンを履かないんだって。ラクエルもシエナも、真紀がルイスのお下がりを着ているのを見て驚いていた。似合ってるからいいと思うんだけどな。

真紀は「ルイスはお尻が小さくて足が長すぎるんだよ！」とぷりぷり文句を言いながら、ベルトや裾上げをしていたけど、ちよつとタイトめのパンツにシンプルなシャツを着てブーツを履くと、すごく格好いい。

ドレスの時も思ったけど、真紀は身長があつて体形も結構女らしいから、男の子っぽくならずきれいなお姉さんって感じになるんだ。本人はあまり気付いていないけど。

メイクとかもすれぱいいのに。

コスメも集めていたわたしには、真紀が化粧水もつけてないことが一番の驚きだ。肌、あんなにつるつるの艶々だから、いらないうえにええそうなんだけど。乾燥肌で手放せない身としては羨ましいの一言だ。

鞆を失くしてしまったから、話が出来るようになって早速シエナとラクエルに相談して、こっちの化粧水を分けてもらっているくらいなのに。

小鹿のように飛び跳ねてルイスの元に辿り着いた真紀は、習いたてのマフオーランド語でたどたどしく話しかけた。

「えーと、ミ イリール アル シェーバロ（あたし、馬乗りいつてくる）」

『ああ、聞いているよ』

ルイスは真紀の肩に手を置いて、送心術で何か話しているみたいだった。真紀はそんなルイスをちよつと小首を傾げてしばらく見つめ、ちよいちよいと手招いた。ルイスが長身を屈める。

と何を思ったか、真紀は突然ルイスの顔に両手を当てると、そのまま指でぐにゅんと摘みあげた。

「リーデイ（笑つて）！」

わたしは目が点になった。というか、見ていた人全員そうだったと思う。ルイスなんて完全に固まってる。

そんな状況に気付いていないのか、真紀は明るくまたねと手を振つて、こちらに駆け戻ってきた。

「ごめんお待たせー」

『……真紀ちゃん、今のなんだったの？』

『今のつて？』

『ルイスのほつぺた引つ張つてたでしょ？』

真紀は、ちょっと照れたような顔で言い訳した。

『だってルイス、他の人と話してる時すんごい眉間に皺寄せて恐い顔なんだよね。ちょっとは笑顔になったほうがいいかなーって思っ
て』

笑顔になったのは、本人じゃなくて周りだと思っよう？

『え、なんかあたし変だった？』

変だと思ってないこの人スゴイ。わたしは笑った。タクも笑っ
てる。

『うっん。もう、真紀ちゃんはそのまんま真紀ちゃんでいい』

『俺もそう思っつ。マキは今のマキがいいな』

あ……。

ちよつと、胸が痛んだ。わたしもそう言ってもらえたらいいの
な。

喉の奥に小骨が引っかつたような鈍い痛みを抱えたまま、わた
しは真紀たちとアルマン王子の待つ森へ向かった。

乗馬で乗ったのは、もちろんコマだ。王子のは白っぽい若いコマで、タクのは黒くて、見たことないほど大きなコマ。両方ともオスだ。そのほうが力が強いんだって。

アル王子の言っていた森というのは、王城の城壁に囲まれた小高い丘と林のことだった。それでも東京ドーム二つ三個分くらいはあると思う。とにかく広い。

ズボン姿の真紀は、颯爽と王子の後ろに跨っている。シエナに相談して短めのスカートの下にレギンスみたいなのを着込んでいたわたしは、タクの前に横座りする格好で乗った。

『王子、供の者は？』

『いない。そのほうが、おまえも良い治療になるだろう？』

王子はにやりと笑い、ぴしりとコマに鞭を打つと、丘に向けて駆け出した。

治療ってなんだろう？

思ったけど、口に出して聞けなかった。タクがどこか重く黙ってしまったから。

『タク……』

『早々と行ってしまわれたな。では、俺たちも行くか？』

『うん』

そう言うことしかできなくて、わたしはぎこちなくタクの胸に掴まった。わたしの左手が取られ、鞍の前端にそっと乗せられる。

『絶対にこの手は離すな。俺が落ちてても、リオコだけは掴まって落ちないようにするんだ』

『タク、コマから落ちるの？』

わたしの問いに、タクはくすりと笑って、

『残念ながら、まだその経験はない。子どもの時からコマとの相性は良かった』

『じゃあ、大丈夫だね』

『万が一ということだ。離さないように、忘れるな』

わたしの手の上から、タクがぐっと握り締める。わたしは頬が赤くなるのを感じながら、頷いた。右手で手綱を持ち、タクがコマを駆る。

『はっ！』

鋭い掛け声とともに、コマが大地を蹴って走り出した。

息が……詰まる。

わたしは吹きすぎる風に眼を細め、息苦しさを堪えるように少し喘いだ。

馬車とは全く感覚の違う獣の息遣いと躍動感、体の下をうねる筋肉。すぐ傍にあるタクの鼓動なんかと一緒にたになって、胸が一杯で苦しくてどうしようもなくなった。

必死で左手で鞍を握り、右手でタクの上着を掴む。わたしの様子に気がついたのか、タクがコマの歩調を緩めた。

『リオコ……大丈夫か？』

『……う、うん。なんか、あんまり早くてびっくりしちゃって』

『そうか。すまない、リオコはまだコマに慣れていなかったな』

わたしは深呼吸をくり返して、どうにか自分を落ち着けた。先に行ったアルマン王子と真紀は、もう丘の向こうだ。

『ゆっくり行こう。時間はまだある』

『うん』

ぼくぼくと蹄の音をたてて、わたしとタクを乗せたコマが土の道を歩く。

なんとなくぎこちない。タクは口数の多い人ではないし、わたしもどちらかというと聞き役が多いから、よく喋る真紀が間にいないと会話が進まない気がする。

真紀に会う前はどやって会話してたっけ？

ぼんやり考える。魔法話の指環が手に入った途端、喋ることが思いつかないなんてずいぶん皮肉だ。シエナやラクエルとなら、なんでもない女同士の会話ができるけど、タクはそうはいかない。

わたしは、うまく動いてくれない口をなんとか開いて話しかけた。

『真紀たち、ずいぶん先に行っちゃったね』

『ああ』

『早く追いつかないといけないんじゃない？ コマ走らせても、もう平気だよ？』

『マキはあの格好だからコマに跨れる。だから速度を出しても大丈夫だ。リオコは横に腰掛けているから、コマを早く走らせるのに向いていない。それだけのことだ。急ぐことはない』

タクはやさしい。だけど、そのやさしさが少しだけしんどくなる時がある。まるで自分が未熟だということを思い知らされているみたいで。

それでもわたしは明るく会話を繋げようと、思いつくことを喋った。

『わたし、初めて馬に乗ったの。だから、すごいときどきする』

『……俺も女性を乗せたのは初めてだ』

ほんわりと嬉しさが込み上げた。タクがわたしの右手を取り、自分の腰に回させる。

『掴まって。このほうが安定する』

『うん』

密着度も高くなって、なんだか早く走らせている時より、ときどき感覚が増した。

ぼくぼく、ぼくぼく。コマが丘を歩く。ふとタクが手綱を引いてコマを止めた。

『リオコ。見て』

指を差されたそこには、丈の低い白くて小さな花が、それこそ本当に絨毯のようにその場一杯を埋め尽くしていた。

『わあ……』

『キツキーナだ』

お披露目の時、頭に飾った花だ。小さなマーガレットに似ていて、地味でシンプルな花だと思ったけど、こうやって群生している光景はとても感動だ。すごくかわいくてきれい。

国の花ですって説明されたけど、ほんとは正直、真紀の髪に飾ったフェイオウが華やかで羨ましかった。他人の芝生は青く見えるって言うけど、わたしとは正反対の彼女の姿に自分が余計小さく子供っぽく感じて卑屈になってたんだ。

だけど、そんな心の奥に溜まっていたどろどろでさえ、この花たちの清らかさが消し去ってくれるみたい。それくらい純粹に、素直に美しいと思っただ。

遠乗りに来て良かったあ。

『きれい。……ね、お花摘みたいな。降りてもいい？』

『ああ』

タクがざばりとマントを翻して先にコマから降り、わたしの腰を持って下ろしてくれる。

キツキーナの野原にしゃがみこんで花を折ろうとしたら、意外に筋張って切れなかった。

なにこれ。かったーいっ！

一人で茎を握って格闘していたら、タクの手が伸びて、小さなナイフでぶつりと切ってくれた。

『キツキーナは強い植物だ。素手では切れない』

そう言っつて、ナイフの柄をわたしに差し出す。

『使えるか？』

『う、うん』

柄の部分に刃が収まる、携帯タイプの小刀だ。幅はカッターナイフよりちよつとあるくらい。

わたしはそれを借りて、きれいそうなキツキーナの花を摘み、緑の葉っぱもちよつと切った。長めに取った茎を数本束ね、それに新たな花の茎を絡めてくるりと回す。そうやって次々繋いで、わたし

はキッキーナで花の王冠を作った。

コマの前で座ってわたしを待つタクのところに、それを持って行く。

『はい』

タクの頭に被せたら、ちよつと小さかった。だけど青みがかつた黒髪に白が映えて、とてもよく似合う。タクが笑った。

『器用だな、リオコは』

『小さい頃、従姉に教わったの。良かった、作り方覚えてて』

子どもの頃からお姫様に憧れていたわたしは、どうしても花の冠が作ってみたいくて、田舎に住む従姉に頼んで作り方を教えてもらった。近所の河原に咲いていたクローバーと蓮華で、被りきれなくらいの花冠を二人で作ったのを良く覚えてる。

タクは片手で花冠をとり、わたしの頭に乗せ替えた。

『俺よりもリオコのほうがよく似合う』

嬉しい。だけど、せつかくタクにあげたのにな。

『あ、じゃあちよつと待ってて』

わたしはまたナイフを持って、今度は短めのキッキーナの花輪を手早く編んだ。それをタクの右手に通す。

『お揃いにしちゃった』

『……ありがとう』

タクが少し驚いたような、照れたような顔をした。

『タク、ナイフ返すね。ありがとう』

『いや、それはリオコにあげるよ』

『いいの？』

嬉しいのに、すぐに人の行動の裏を勘繰ってしまう。悪い癖だ。

『ああ。これをもらったから、お返しに』

『ありがとう……』

今度はわたしが照れてしまう。男の人に花をあげてナイフを女のがもらうなんて、普通は逆かもしれない。でも、初めてタクから貰ったもの。しかも彼が使っていたものだ。今まで誰に貰ったどん

なものより、わたしにとってはものすごく特別なプレゼントに感じた。

『そろそろ行こう』

『うん』

手を差し出すタクに掴まり、わたしは再びコマの背中に戻った。

甘いというよりどこか緑の濃い爽やかなキツキーナの香りに包まれ、ぼくぼく、と再びコマが歩き出す。

『タク。あのね、怒らないで聞いてくれる？』

『ああ』

『わたし、このキツキーナを髪に飾った時、地味な花だなんて思ったの。国の大事な花って聞いたけど、地味で素朴でどこにでもありそうな普通の花だなんて……まるでわたしみたい』

『……』

『でも、こうやって地面に咲いているところを見たら、間違ってたって思った。しっかり地面に根を這って、強くていじらしくてとても綺麗な花だと思う。』

きつと、あの時あんなふうにしたのは、この花のせいじゃなくて、わたし自身がそうだったただけなんだね』

うまく言えない。だけど、なんだか言わなきゃいけないって思った。この可憐な白い花を誤解してたこと。それをタクに聞いて欲しかった。

『わたし……真紀みたいになりたいな』

今まで言えなかった本音が洩れる。

『真紀みたいに、辛いことがあっても乗り越えられる人になりたい』

『マキはマキだ。リオコじゃない』

そうだけど、なれないのは分かってるけど。ぼくぼく、ぼくぼく振動が響く。

『リオコはリオコになればいい』

『え……？』

わたしは、思わずタクを見上げた。切れ長の瞳が微笑んでいる。

『マキならそう言う。他になる必要はないと』

やっぱりタクも真紀をすごいって思ってるんだ。少し、心が沈んだ。

『昨日アルマン王子と話したとき、マキが王子にそう言っていた。アルはアルでいい。王になる必要はない？』

真紀らしい。言ってる顔が思い浮かんで、ちよつと笑った。

『すごい言葉だと思う。誰でも皆、誰かになりたいと思う。その誰かを目標に努力をする』

『タクも？』

『ああ。父も上の二人の兄も剣の師匠も、みな俺の超えられない人たちばかりだ。だけどマキの言葉を聞いて、俺も吹っ切れた気がした』

落ち着いていて、將軍といわれるタクがコンプレックス持つてるなんて、信じられなかった。

『俺は、俺にしかできない生き方をする。リオコモリオコの道を行けばいい。リオコならできる』

『うん……』

俯いてくれたわたしの花冠の位置を、タクの左手がそつと直す。

『あの時マキは、フェイオウをつけていたな。フェイオウは木に咲く、力強い花だ。暑さの厳しい場所でも根を張り、花を咲かす。その木で人は家を建て、火を起こす』

『……』

『キツキーナは、小さく可憐な花だ。だが、フェイオウよりもつと過酷な環境で育つことができる。その草が乾燥を耐え、白い小さな花を咲かせてようやく人々は、そこに田畑を開いて住むことができることを知る。』

どちらが優れているのではない。どちらも美しく大切で、人々の心の慰めとなる。その意味は違ってても』

タクの静かな声が、じんと心に響いた。

どちらも大切な花　どこかで聞いたような歌のフレーズが甦る。

さらっと聞き流していたけど、その意味を知っているのと理解するのでは全然違うのだと、そのとき感じた。

世界にひとつしかない花で在ること。たとえ？世界？は違っても、悩みも願ひも同じなのだ。

『ねえ、タク。タクは、何の花がいい？』

タクにはどんな花が似合うだろう。花のイメージは青だ。雲の流れる空の青。

大きな木が似合うかな。

大地にしっかりと立つ巨木がふさわしいだろうか。そんなことを思い巡らせていると、タクがぼつりと呟いた。

『俺は……木に咲く花よりも、野の花のほうが好きだ』

それって……。

じんわりと嬉しさと恥ずかしさが同時に込み上げてくる。まるで自分のことを好きだと言われたみたいに、全身が熱くなった。

確かめたかったのに、タクはわたしと眼を合わさしないで、コマの首を森のほうへ向けた。

『そろそろ急ごう。少し走らせてもいいか？』

『う、うん』

『しっかりと掴まって』

そう声を掛け、タクはコマを走らせた。最初よりはゆっくりだったせいかな、今度はもう恐いとは思わなかった。

真紀たちと合流してお茶を飲み、帰りに四人で丘に沈む夕陽を見た。空が燃えるような大きな夕焼け。あの素晴らしさはきつと一生忘れない。

わたしを支えるようにずっといてくれた彼のおかげで、わたしは誰よりもわたしらしくその場において、友達と語り笑いあうことができたから。

タク。

心の中で何度もその名前を呼ぶ。わたしの心を変えてくれた、大きな人の名前を。

わたしはその時、自分でもはつきりと自覚するくらいに、
うもなく真っ直ぐ彼との恋に落ちていた。

11-4 (後書き)

次は真紀のターン。次章で天都篇が終わります。

第12章 出発 マキの戸惑い

1

ルイスの様子がこの頃変だ。正確には、仲直りをした時くらいから。

どうおかしいかというところ、やたらべたべたする。頭にちゅーとか、ハグとか。

それに、あたしのことにいちいち口を出してくるようになった。

昨日は服装をきちんとすると散々言われた。ルイスのお下がり、結構気に入っているのに。お尻と太腿が少しキツいけど。

『えー、じゃあ何着ればいいの？ ドレスはやだよ？』

『もう少し女性の自覚をもった格好をしてくれ』

女の自覚はあるよ。ってか、どう見てもあたしゃ女でしょ？

ルイスには女の子に見えないのかなあ……。

ちょっと寂しくなる。隣にいるのが理緒子だし、びらびらドレスとお化粧の宮廷の貴婦人たちと比べると、あたしは女の範疇に入らないのかもしれないけど。

『うー。じゃあ、ラクエルたちに相談してみる』

『そうしてくれ』

ルイスは結構偉い立場だから、周りの人からも何か言われたのかもしれない。あたしが承知すると、彼はほっとした顔になり、あたしの頭の上辺りに軽くキスして出て行った。

指環の都合上、横で見ていた理緒子が目を丸くしている。頬を染めて、こっそり耳打ちしてきた。

「ルイス、大胆だね」

「たぶん、ただの挨拶なんだと思うんだけど……」

あたしはがつくりとその場に沈み込んだ。十六年間彼氏もできたことのないあたしにとって、平気なふりをして心臓によくない出

来事なんだ、これ。

「なんかこないだから、ラブラブだよね？」

「もー勘弁して欲しいよ。あたしや日本人だっつーの。普通にしてくれー」

ルイスのラブラブごっこに付き合えるほど大胆な性格じゃない。

沈んでいると、理緒子が首を傾げた。

「真紀ちゃん、ルイスと付き合ってるんじゃないの？」

「ぶっ！」

あたしの耳の先が一気に熱くなる。大慌てで両手をぶんぶん振った。

「ないないない！ 全然、付き合っていないですからっ！」

「そうなんだ。仲直りした時からいいムードだなくって思ってたけど、違ってたんだね」

確かにその頃からべたべただけだ。

あつて欲しいような、ないほうがいいようなその可能性を、あたしは溜息で押し殺した。

「ルイスにとつてあたしは保護対象なの。心配かけたからその分、微妙にやりわり仕返ししてるだけだよ」

あれだけルイスの心臓に負担をかけたのだ。倍返しくらいしてもいいと思っっているに違いない。心臓への負担の意味合いが、若干違うけど。

「そうかなあ？ ルイス、そんな意地悪する人には見えないけど？」

「意地悪だよ。ヘクターさんのことだって、ずっとからかわれてたんだからっ」

そうなのだ。彼らは仲が良い。鏡電話でルイスが怒っていたのも、ヘクターさんが厭味バリバリだったのも親しい間柄があつてこそ

つまり、首切りなんてあるはずもない事態なわけで。

「さんざん脅かされてからかって笑われたの！ あたしの下着を見つけた時も」

言いかけてちょっと止まった。さすがに頭にブラ被ったっていう

のは、イメージが悪すぎる。見た目がイイ男だけに、夢の崩れ方が著しく激しい。

乙女心はビミョーだよ。

「と、とにかく！ あいつは見た目とは逆をいく性格なの。理緒子も気をつけてね？」

理緒子がこつくりと素直に頷く。花のような笑顔になつて、

「だけど、そうされるの真紀ちゃんだけだと思つよ？」

ぐさりと指摘。そんな特別扱い嫌ですつてば。

「ルイス、真紀ちゃんがかわいくて仕方ないんじゃない？」

「……なんか、可愛がられ方が微妙に動物なんだよねー」

愛情というより愛玩だ。愛でておもちゃにされている。

ちなみに、アルの言っていたミヤウというのは砂漠に住む小さな動物で、たまにペットとして捕まえられることがあるけど、気性が荒くて馴れさせるのにすごく大変なんだそう。

『王子もなかなか面白いことを言う』

教えてくれたタクは笑っていた。黄色の縞のあるかわいい動物らしいけど、複雑な気分だよ。

どんな意味合いであれ、ルイスがあたしを大切に守りたいと思つていてくれるのは分かる。彼にとって、それがすごく特別だということも。

だけど いや、だからこそ彼の想いを勘違いして受け取つてしまふいような自分が恐い。

好きになりたくないよ……。

あたしはいずれ元いた世界に戻る。いくら親しくなつても、別れはくるのだ。別れ前提での恋愛がダメだとは思わない。でも、あたしには無理だ。

理緒子はどうするんだろう。

彼女がタクに想いを寄せているのは気が付いてた。昨日の乗馬で、それがはっきり分かつた。

理緒子が白いキツキナーの花冠を載せ、タクも同じ腕輪をつけて

やって来た時は、それはもうものすごく絵になる光景で、あたしはしばらく見惚れた。そして気付いてしまった。理緒子のタクに向ける視線の甘さに。女のあたしがどきりとするくらい、とろけるような眼差し。

「ねえ、理緒子」

「うん、なに？」

理緒子がくせのある髪を揺らしてあたしを見たけど、首を振ってごまかした。彼女の想いはあたしが口を出すことじゃない。問題は、あたしの気持ちだ。

どう、したいんだろう……。

彼と恋をする？ だけど、もし両思いになっても別れるなら。もし彼があたしに興味を失ったら。もし別の女性を選んだら。

そんないくつもの暗い仮定を想像したあたしが辿り着いた結論はひとつ。このままでいること。これ以上は望まない。ペットくらいの立場なら、甘えても我儘言っても守られても許される。彼の心が他に移っても、たぶん許せる。

恋は、しない。

我ながら、なんて卑怯で逃げ腰なんだと呆れる。それでも、それが今のあたしにできる精一杯の決断だった。

今日のお昼にはタキ「アマグフォーラ」に向けて出発するとヘクタ「さん」から聞いていたので、あたしは朝からルイスを探した。彼の部屋でシグバルトたちというところを見つかる。

仕事をしている時のルイスは別人だ。目つきも厳しいし、口調も態度もなんだかデカイ。土団長って立場もあるのかもしれないけど、ちょっと怖い。近寄りがたい雰囲気がある。

ルイスは金髪碧眼っていう容姿を気にしていたけど、どっちかというとその雰囲気の問題なんじゃないかとあたしは思う。それに、向けられる視線の半数は貴婦人たちの乙女な視線だ。

モテモテなのに……。

これを好奇心とか奇異の視線と言われると、姫君たちも辛いだろうに。

部屋にやって来たあたしを見て、集まっていた男たちの表情が仕事モードから切り替わる。

「ボナン マテン、シンジヨリノ マキ」

「サルーナ、マキ」

にこにこシグバルトとレスが声をかけてくる。うん、これは基本の挨拶だ。

「ぼ、ボナン マテン（おはようございます）」

「イオ ヴィ エスタス？」

何か用っていう意味かな。

「えと、ミ ソシエント イェ アル（あたし、アルに会ってくる）」

そう、出発前にアルに挨拶をしたくて、わざわざルイスの許可をもらいに来たのだ。あたし偉い！

ルイスは頷くと、机から立ち上がってあたしのほうまでやって来た。右手を肩に置いて、いつものように送心術で話しかける。

「一人で行くのか？」

「うん。メル エストロ ダム（少しの間だけ）」

だめ？というように彼を窺う。

ルイスはちよつとあたしの格好に視線を走らせ、左手を口元に当てた。考える時の彼の癖だ。

「その格好は？」

ルイスが女らしい格好をしるというから、こうなったんだけどな。

言葉が分からないから、日本語で聞き返す。

「変かな？」

「なんとというか……似合ってはいるんだが」

あたしの今の格好は、縦襟の腰丈の上着とスボン。つまり、ルイスとお揃い。色はグレーで、ルイスやレスのようになっていて刺繍は

入ってない、シンプルなものだ。

だって、どうしてもドレスは嫌だったんだもん。

ラクエルに？女らしい服装？を相談しようとして、はたと気がついた。魔法士の彼女はズボン履いてるんだよね。聞くと、女性でも騎士や魔法士は仕事柄ズボン姿なんだって。

というわけで、あたしはルイスのものから彼女のお下がりになり替えた。見習い魔法士の服装だ。

「ラクエル プルンティス（ラクエルくれた）」

「……」

なんだろう、この送心術での沈黙って。

「マキ、ヴィ エスタストレ ジョリ」

困っていると、レスが笑顔で話しかけてきた。ルイスの横からあたしの肩に手を置いて、送心術で言い直す。

『とてもよく似合ってるよ。息子の嫁に欲しいくらい』

聞こえたのか、ルイスが横目で睨んだ。自分のマントを外し、ふわりとあたしに着せかける。左肩のところで金具を留めて、

『これでいい。気をつけて行っておいで』

乗馬に行った時と同じことを言う。どこまで過保護なんだろう。

もうちょっと信用してくれたっていいのに。

少し腹の立つたあたしは、臆面もなくみんなの前で頭にちゅーをしようとするルイスの顔を腕で押しのけた。高い鼻を指で摘む。

「マルティーモ パルトロ（心配しないで、お父さん）」

ルイスが固まった。前に「笑って！」って言った時と同じくらいか、それ以上。

笑い上戸らしいレスが横を向いて嘖き出したので、ちょっと悪かったかな、と思ったけど、ずっと遊ばれ続けるのも困る。これくらいの復讐、かわいいもんでしょ？

鼻高々でその場から立ち去ったけど、後でルイスに絶対二度とするなと叱られた。とくに？鼻摘み？よりも？お父さん？が嫌だったらしく、私は君の父親ではないと懇々と諭された。親子な態度をし

てるのはルイスのほうなのに。

やっぱり分からん。

男性だからか年上だからか異界の人だからか。あたしにとってルイスは？見た目はいいのにひねくれた意地悪な人？ただけでなく、大きな謎を抱えた人物になってしまった。

アルの部屋は宮殿の端っこにある。なんでそこ？って聞いたら、風が通って気持ちいいからって言われた。タクの言うとおり、アルは天都よりイエドの方が性に合うのかもしれない。

そんな彼は、あたしとの約束を守るために王様に直談判して、ここに残ることを認めさせたのだそう。王様の首切り話を聞いていたあたしはちょっと不安になったけど、

『心配するな。俺ももう子どもではない。自分のことくらい自分で決める』

アルは笑って、送心術でそう言った。

あたしとの約束が負担になっていたらやだなと思っていたら、片手でくしゃりと、子どもにするみたいに頭を撫でてきた。

『そんな顔をするな。おまえたちのことだけではない。ここには…母がいる。少し親孝行をするのも悪くない。長い間、離れていたからな』

そんな話をしたのが、昨日の乗馬でのこと。

アルは、最初の時もそうだけど、イツコ下ってというのが信じられないくらい大人びている。王子という立場とかマーレインの力とか、小さい頃から権力争いの中にいたことなんかが、彼に乾いた大人っぽさを纏わせたのかもしれない。

それでも同級生の男の子には絶対ない鬚の部分と親しみのある少年ぽいところが入り混じって、一緒にコマに乗っている間、あたしは柄にもなくときどきしていた。

だって、よく考えたらダブルデート、なんだよね。

人生初のデートがイツコ下で王子で異界で乗馬って、どんだけ有り得ないんだあたし？って思ったけど、それでもすごく楽しかった。

これが日常であれば、アルに恋したかもしれないくらいに。

お返しのつもりで、アルに草で冠を作ってあげた。完全に理緒子の真似。だけど、どうしてもアルに冠をあげたかった。あたしでは彼に本当の王冠をあげることができないから。

名前のよく分らない草と蔓を絡めて作った冠は、風の吹く緑の丘に立つ彼にとてもよく似合った。ミアゝヴェール　緑に祝福されし貴人という呼び名にふさわしく。

そんなことを思い返しながら、あたしはアルの部屋を訪ねた。侍従の人はあたしを覚えてくれていたらしく、ぺこりと頭を下げてすぐに部屋に通してくれた。

開放的な庭に面した広い室内にアルの姿はなく、扉を開けて奥の部屋を覗くと、床に紙を敷きつめ、上半身裸のアルが真剣な顔でキャンバスに向かっていた。

「アル？」

「……マキ」

アルが慌てて筆を置き、椅子に投げ出していたガウンのような上着を羽織る。それでも薄い褐色のきれいな胸板や割れた腹筋なんかが、しっかり目に入ってしまった。

き、鍛えてるなあ。

剣と乗馬をタクに教わっているとは聞いていたけど、細身だからこんなに筋肉がついているとは思わなかった。いつも下ろしてる髪をひとつに束ねているせいで、余計男らしく見える。

兄と父で男の裸は見慣れているけど、それでもあたしは顔を赤くして、入口辺りでまごまごしてしまった。アルが手についた絵の具を布で拭い、あたしの手を取る。

『こんな格好ですまない』

あたしは首を横に振り、後ろ姿を見せているキャンバスを指差した。

「絵、描くの？」

『ああ、俺の唯一の趣味だ。男らしくないと言われるが』

言葉は分からないはずなのに通じたらしく、アルは照れ臭そうに言った。

『昨日丘で見た夕陽がすごくきれいだったから、どうしても描いておきたくて』

あたしはにっこり笑って、大きく頷いた。あれは本当に見事な夕焼けで、空じゅうが燃え上がるような溜息の出る美しさだったから。見ると、キャンバスを固定するイーゼルのてっぺんには、少ししおれた草の冠が掛けてあった。

まだ持つてくれてたんだ。

彼の気遣いが嬉しい。決して王子様にプレゼントするような物ではないのは分かってはいるけど、それでも贈った側としては自分が大事にされているようで胸にぐっとくる。心が熱くなる。

『本当は、おまえたちが出発する前に仕上げて渡したかったのにな』
「え……」

思わず彼を見てしまう。少し疲れたような顔色。まさか昨日から寝ずに描いたとか？

「アル、寝てないの？」

空いている片手を枕に見立て、ジェスチャーを交えながら、日本語のまま聞いてみる。

『少しは寝た。だけど何度か描き直したから、半分ほどしか仕上がらなかった』

「見てもいい？」

キャンバスを指差す。絵に近付こうとすると、手を引っぱって反抗された。でも意地悪く笑って手を振りほどこき、あたしは最初に彼がいた位置に立つ。

「わあ……」

すごい、と思った。あたしに絵の才能は皆無で良し悪しなんて全然分からないけど、それでも何か打たれるものがその絵にはあった。夕陽だから赤、というんじゃない。ものすごい数の色彩が渦を巻いて空を埋めていて、それが大地も森も全部を圧倒している。片隅

に小さく馬に乗る影が二つ描かれてるけど、それがなかったら地面もなにも溶け込んでしまいうぐらいの色の洪水。

絵は目で見たことを描くんじゃなくて、心で描くんだって、そのとき思った。

「すごい……すごいよ、アル。あたし、この絵すごくいいと思う」「我ながらボキャブラリーの少なさが情けない。日本語でこれなんだから、マフォーランド語なんて出てくるはずもない。

だけどアルにはあたしが感激しているのが伝わったらしく、少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうに笑った。後ろにやってきて、あたしの肩に手を置く。

『マキが気に入ってくれたのなら嬉しい』

「うん、すごく気に入った。完成したところが早く見たいな。あー……えと」

あたしは覚えてたての言葉を脳みそから引つ張り出した。

「ミ レガルディ エト テイオ（あたし、これ見たい）。ミリ ヴェニオス テイエ アプレス（あたし、ここへ戻る、後で）」

『……分かった』

「プロメシオ（約束ね）」

この間のように指きりげんまんをしようとしたら、アルが背後からぎゅっと両腕に抱き締めてきた。心臓がばくりと飛び上がる。

『俺も……行けばいいのにな』

少し辛そうな声。やっぱりここに居るのがしんどいのかな。それなら一緒に来ればいいと言いたくなるが、なかなか言葉が見つからない。

「アル イリール イェ ニ？（アル、あたしたちと行く？）」

『……いや。見てみると辛いから、ここで待っているよ』

辛いつて、なんだろう？ 疑問に思っていると、アルがようやくあたしを抱き締める腕を緩めた。白いマントを摘んで、

『これはアクイナスのものだろう？』

なんでここにルイスの名前が出て来るんだ？

「ミ パルレ イエ ヴィ（わたし、あなたと話す）。ネ ルイス（ルイスじゃない）」

なんだか心配した気持ちを汚されたような気がして精一杯そう言
うと、アルはしばらく考え、あたしの後頭部にこつ、と頭をぶつけ
てきた。

『もし……旅から帰っても、おまえがおまえのままだったら』

思い詰めたような、囁くような意志。

『俺はおまえに言うことがある。だから、絶対に戻れ』

「……うん、分かった」

背中越しに響く声が、いつになく真剣な響きを帯びているようで、
あたしは頷いた。だけど心が波立つのは止めようがなくて。彼の部
屋を後してもしばらく、あたしはひどい船酔いでもしたような気分
に浸っていた。

旅に出たあたしが、今のままの自分ではなくなることなど想像も
しない。

考えながらアルの部屋を出たら、道に迷ってしまった。どうやら景色が違うらしいと気がついたのは、高い生垣と宮殿とは違う静まり返った空気に包まれきってから。

うーん、困った。

道を聞こうにも、人の影も話す声も気配すらない。とりあえず大きな建物のありそうなほうへ向かった。生垣を曲がって覗き込むと、白い石畳が敷きつめられ、同じく白い石で造られた三角屋根の建物が見える。建物右手には噴水、左手には木が植えられていて、塵ひとつ落ちていない美しい空間だ。

これだけ立派なら誰かいるだろうと、石畳の道を歩きながら、あたしは不思議な感覚にとらわれた。なんだかこの景色、どこかで見ることがある。

どこだろう……？

疑問に思いながら建物の前まで来て、大きな三角屋根の下に立つたとき、はたと思い当たる。

これは神殿だ。

まぎれもなく石造りの宮殿調だけど、この清浄なたたずまいとい三角屋根といい、これが木造だったら日本のお社にそっくりかもしれない。

太陽神が主神らしいし、神様にまつわることとは万国、いや万世界共通なんだと、あたしは妙に納得をした。

とゆーことはつまり……。

あたしは、扉の開いていない神殿の前まで進み、ぱちんと大きく手を叩いてみた。

ぴい……んと、全身に弾きかえる残響。やっぱりだ。

神殿、お社というものは、神様と対話する場所。だから拍手（かしわで）を打って、神様に語りかける。そのため反響がよくなるように設計されているのだと、何かで聞いたことがある。

それは聖歌を奉じる西洋の教会にも通じるものがある。

「あー……」

試しに声を出してみると、すごく響く。自分の声が二、三割増しに気持ちいい。

あ~~~~歌いたいっつっ!

ふつふつとコーラス部魂が湧きあがる。だって、もう一週間も歌ってないんだよ? これってほぼ毎日歌っていたあたしにとって驚異なんだよね。

こっそりと首を伸ばして、辺りに誰もいないことを窺う。こぼんと咳払い。乾燥しているから水が一杯欲しいところだけど、まあ我慢して。日本式に神様に一礼して、あたしは息を吸い、止めて、ゆっくりと声と共に吐き出した。

曲目は? Amazing Grace?。完全に歌う場所を間違っているけど、知っている宗教歌ですぐに歌えそうなものはこれしかなかった。それに、とても美しい曲だ。低い音と中域の音で構成されているから、あたしの声にも合っているし。

歌詞は?なんてすごいんだ。神様、あたしみたいな子にも恵んでくれてたんだね。今まで見えてなかったけど、やっと分かったよ。ありがとう?ってな感じ。気付く、悔いる、感謝するっていう人生で大事なキーポイントの曲なんだ。今のあたしにも必要なんじゃないかな。

そう思う思いを込めて歌う。アルは心で絵を描いていたけど、あたしは心で歌を描く。目覚めてしまった馬鹿野郎な神様に向かって。あたし負けない。あんたに絶対、勝つてやる。

それは改悛や感謝とは程遠いけど、この世界に来てあたしはいろんなことを教わった。だから感謝の気持ちを込めて、あたしは戦うことを決意する。この世界のために。

水門の鍵、手にしてやろうじゃん。あんたがやれっていうんなら……あたしにやれっていうんなら。 やってやるぞ。

歌いながら思う。ひよっとしたら太陽の神様は、この世界が好きで好きで、抱きしめようとしてるのかもしれない。抱きしめた相手が燃え死ぬとは思わずに。

熱すぎる愛。ある意味悲恋だ。

オトナだったら、一步退いて見守るくらいのことしろよな。

あんたも頑張れ。あたしも頑張るから。

なんだか楽しくなってきた、調子に乗って三番に突入しようとしたあたしは、背後に何かを感じた。はっと歌い止めてふり向くと、そこにはここにこの顔のヘクターさんと、神官の人数名が妙な顔であたしを見ていた。

ま……まずい。

あたしは焦った。異界の神殿で異界の神の賛美歌を大熱唱だよ。これはまじで怒られる！と思って首を竦めたのに、ヘクターさんはいつもの笑顔で何か話しかけてきた。内容は分からないけど、笑顔が曲者の人だけにびくびくしてしまう。

ヘクターさんはあたしが魔法話の指環をしていないことに気付いてか、話すのを止め、あたしについて来るように手招きをした。しよんぼりと後をついていく。

部屋に戻ると、すでに出発のために準備万端整っていたらしく、いつにない質素な格好をした理緒子にルイス、タクが並んでいた。

そう、驚くなかれ。旅はこの四人で行くのだ。

ヘクターさんは何も言わなかったけれど、アルに会いに行った拳銃神殿に迷い込み、さらに心地よく歌を歌ってきたと聞いた理緒子は、軽くマジギレしていた。

ごめん、理緒子。って、あたし理緒子に怒られてばかりだ。

思わず正座してしまうあたしとぶんぶん怒る理緒子の姿を、どこか苦々しくどこか微笑ましく、ルイスとタクとヘクターさん（と、

その他大勢（が見守っていた。

理緒子のお説教から解放されると、あたしはすぐ自分の客室に飛び込み、大急ぎで用意されていた旅の服に着替える。というより、すでにあたし待ち状態だったので、即行で着替えるよう言われた。

見習い魔法士服も動きやすく良かったので、ルイスたちに『これじゃダメ?』と聞いたら即答で拒否された。まあ確かに汚れたら困るけどさ。

こちらの世界の女の人は滅多にズボンを履かないということだけど、さすがに旅ではそれも難しいらしく、用意されていたのは地味なグレー系のズボンと上着。素材はインナーらしきものも含め、全部綿っぽい肌触りの良い感じた。

着方はよく分からなかったけど、みんなが着ていたのを思い出して、なんとなく袖を通す。ゆとりを持たせた上着が腰周りだけぼついたので、その辺にあった緑色の布でベルト代わりに締めた。

あたし、肩幅あつてお肉もそれなりだから、ウエストマークしないと太つて見えるんだよね。

服と一緒に編み上げの革靴も置いてあった。これがファスナーなしで本当に編み上げだから面倒だけど、岩や山を歩くのにはこういうタイプが向いている。最後にフード付きのマントをひっかけて出上がりだ。

「お待たせー」

出て行くと、一斉にみんなの視線が向けられた。

ルイスやタクがいつもの笑顔なのはいいとしても、ヘクターさんにその他諸々の面子と理緒子が、驚いたような顔をしている。彼女の手を取り、訊いてみた。

『ね、なんか変?』

『うつん、変じゃないよ。けど魔法士さんの格好も似合ってたけど、真紀ちゃん、こつという格好似合うね』

『そ、そう？』

『魔法士さんはコスプレのエロカッコイイお姉さんって感じだったけど、これは本当に普通にカッコイイよ』

ちよつと待て。理緒子の中でのあたしの評価が微妙だぞ。

たしかにラクエルより身長もあって肉厚な体形ですが、普通は膝丈ないといけない上着が股下辺りで終わってましたが、エロカッコイイとは何事だ？

そんなもの目指してないっつーの。

しかも今度は？普通にカッコイイ？だよ。あたしゃどうすればいいんだよ？

ヘクターさんがしみじみと呟いている。

『これほど衣装によって違って見える方も珍しいですね。まあ……今がちょうど変容の年頃ということですか』

『真紀ちゃん、ジャーニーズ狙えるかもよ？』

なんて言う理緒子をよくよく見れば、形も素材もあたしと同じ服なのに、なぜかとてもキュートだ。

長めの上着を臙脂の布で締めてふんわりさせているから、まるでミニ丈のシャツワンピースにレギンスとブーツを合わせたようなかわいらしい組み合わせなのだ。

なぜ、違う……。

どよんとしていると、突然後ろから、ぱさりと頭にフードが被せられた。

『旅の間はこのほうが安全だ。それに、こちらのほうがよほど君らしい』

少し笑いを含んだルイスの声。ぷつと頬を膨らませてフードを払いのけ、隣に立つ男を睨む。

いつものように涼しげな表情を纏った男は、あたしたちと同じような旅装をしていた。腰には細身の二振りの剣を差している。

そうだ。ルイスもこれからあたしたちと一緒に旅に出るんだ。じんわりと嬉しさが込み上げる。ラクエルの服でお揃いの格好になっても、感じられなかった嬉しさ。きつとあれは、何の能力もないあたしの背伸びにしか見えなかったんだろう。ただ今とは違う。彼と同じ場所に立てている。なぜだかそのことが、無性に嬉しかった。

荷物は、昨日侍女の人と一緒に詰めたものが、もう先に運ばれているらしい。理緒子と手を繋いで、ヘクターさんたちの後についていく。

『馬車に乗っていくの？』

『いえ、船です』

『船？？』

あたしと理緒子は顔を見合わせた。行った先は、今まで足を向けたことのない王城の西南。たぶん来る時に馬車で通り過ぎたはずなんだけど、すっかり記憶にない。だいたいここは広すぎるんだよね。なので、行った先に船があると言われても「川なんてあったかな」くらいの感覚で、着いた瞬間あたしたちは言葉を失った。

そこにはまったく、水一滴もなかった。あったのは途方もなく巨大で見上げるような。

『ひ……飛行船？』

『船です』

そりゃまあ、船っちゃー船ですが。

『もしかして空、飛ぶの？』

『この船が他にどこを通るといいます？』

平然として答えられれば、すみませんと言うしかないですけどねども。

理緒子と二人で、ぽかんと仰いでしまう。

『うわー。大きいねえ。初めて見るよお』

『うん』

『本当に空飛ぶのかなあ？』

『うん』

驚きすぎて、適当な返事しかできない。ペしりとはたかれた。

『もう、真紀ちゃんしっかりしてよお』

『だ、だってこんなの知らなかったし。それに、こんなのあれば時間かけて馬車で来なくても余裕でイエドから来れたんじゃないかなあつて』

『あ、そっか』

なぜそこに気がつかない、理緒子。

『船を所有し、航行の許可ができるのは天都だけだ。今回は王が特別に貸し出してくれた』

言いながら、ルイスが船から下りてきた梯子を地面に設置し、少し上ってふり返る。

『これで半日でツークスに着ける。乗って』

『う、うん』

高いところが苦手らしい理緒子が蒼ざめていたが、ルイスに手を取られ、あたしに押し上げられるようにして小さな船室に移った。

この？船？と呼ばれる飛行船もどきは、ぱっと見大きな楕円の気球だ。その底に箱型の船室がついている。船室の前後にはプロペラが計八つ。船室は、客室と操舵室、機関室なんかがぎゅうっと詰め込まれていて、お世辞にも広くはない。だけど船内は絨毯にシャンデリア、固定された家具も立派なものだ。

『王も査察の時には利用される。私も数度しか乗ったことがない。』

二人はラッキーだな』

『俺は初めて乗る』

後からきたタクが、もの珍しそうに辺りを眺める。長身の彼にはちよつと窮屈そうだ。

『本当に飛ぶのか？』

『発動機の音がうるさいが、すぐに慣れる』

びくり、とあたしの耳がその単語を捉えた。

「ね、ルイス。マフォーランドには、なんで車ないの？」
「くるま？」

「そうだよ！ これだけ大きい飛行船浮かせて飛ばせられる技術があるなら、それを小型化するとか、エンジンを別のものに組み込んで地上を走らせるとかできるんじゃないの？ なんてしないの？」

ルイスが困ったような顔をした。

「君は本当に質問が多いんだな」

「だって、不思議なんだもんっ」

車、便利だよ？

「船は天都しか所有できないと言っただろう。浮力を生み出す気体も、発動機のためのエネルギーとなる材料も非常に貴重なもので、おいそれと手に入るものではない。マキが言っただように地上を走らせる乗物も開発が考えられていたが、中断された」

「なんで？」

「エネルギー源となるエイドスを採掘するよりも、水源を探すほうが優先される」

水不足は深刻らしい。

「でも、エネルギーを採掘して車作ったほうが遠くまで水を探しに行けるよ？」

「君の言う？ くるま？ がどのような乗物を指すか分からないが、車輪を持った発動機付き乗物ということであれば、砂が機械に混入して技術的に無理だという話だ」

そっか、道は整備されていないもんね。

「道作れば？」

「石の道をか？ 天都内ならまだしも地方にそれだけの労力をかける意味がどこにある？」

む、確かに。

「じゃあ、エンジン搭載して自動で地下を掘れる機械作るとか」

あたしが滔々とルイスに疑問を並べていると、ひょっこり現われたヘクターさんが話に割り込んできた。

『あなたは本当に奇妙な娘ですね。そんなことが気になるとは』

『そ、そんなことないよっ』

『……真紀ちゃん、ここに乘ってくる間でそれだけの疑問が出てきたの？』

『うん』

もうあたしの頭の中は疑問で一杯さ。中に入っている気体ってなんだろうとか、どうやってそれを積めたんだろうとか、どういふうにこれを造ったんだろうとか、聞きたくてうずうずだよ。

『ね、ひよっとしてルイスとずっとこんな会話してたの？』

質問攻めにはしたような気もするが。

『うん。地図の話とか星の話とか？』

『星の話？』

『一年が何日で、とか。一ヶ月が三十日とか。あとは月の合が三ヶ月四年に一回あるとか』

鏡電話のことも聞いたけど、ルイスは詳しく知る必要はないと教えてくれなかったんだよね。

なんて説明をしたら、ヘクターさんがちよっぴり苦笑の眼差しをルイスへ向けた。

『彼女はあなたのところへ現われて正解ですね』

『だろっ？ 退屈はしないんだが、最初はちよっぴりと指環を取り上げようかと思っただよ』

そんなこと思ってたんかいっ。

『そうだ、リオコに訊くのを忘れていた。マキは自分が異界の普通だと言い張るんだけど、そうなのか？』

『うん。普通、かなあ？』

ちよ、ルイス、今ここでそれを聞くか？ それに理緒子ナゼそこで疑問形？？

『見た目は、まあ普通と思うよ。結構いそうな感じ。ここまでコスプレ似合うってのは意外だけだ』

あーそーですか。あくまであたしはコスチュームプレイヤーです

か。

『言動は……あたし、広島の人と友達になったことないから分かんないけど、まあ……アリ?』

上目遣いであたしを窺わないで下さい。頷くに頷けませんから。

『友達に一人いたら楽しいタイプだよー。……ね、真紀ちゃん、得意教科なに?』

『国語と生物と倫理政経』

『……ばらばらだね』

ええ、おかげで自分が文系か理系か分かりませんとも。ちなみに有機化学も好きだ。数学もログとか好き。漢文は好きだが古文は苦手。もう、わやですわ。

『なんか理屈っぽいから理系オタクかと思っちゃった』

『物理と歴史と図形と英語は苦手だよ』

英語は先生とのトラウマで拒否モードなのだ。

『動くの好きそうだよね?』

『走るの好きだけど、球技はダメ。ちなみに部活はコーラス部』

『ええっ』

理緒子が驚いたように身を引いた。しばらく考えて、大きく頷く。

『うん、分かった』

『なにが?』

『結論。真紀ちゃんは普通に見えて、意外性の多い人です。ねっ?』

かわいく同意を求められても困るんですけど。

ひきつった笑顔になるあたしの前で、異界の男たちがぷつと噴き出した。特にルイスの目がものすごく嬉しそうなのは、絶対あたしの気のせいではないはずだ。

『なるほど。マキは?意外な?タイプなんだな。異界でも』

『ぐ……っ』

今までの彼への感謝の気持ちもどこへやら、あたしが一瞬殺意を覚えたのは如何(いかに)ともしがたい衝動といえるわけで。

そうこうしているうちに、出港の音が船内を響き渡った。

12-4 (後書き)

胸が隠れると、マキは爽やか少年系(笑)。なんだかな。

5

『ヘクターさんは一緒に行かないんじゃないの？』

『ええ、鉦都ツークスまでお見送りします』

ツークス。さっきからよく聞く名前だ。確か南の大きな都市だったはず。

『船はツークスで停まり、そこからみなさんには移動して頂くことになります』

『直接タキィアマグフォーラに行くわけじゃないんだ』

『港がありません。この船を下ろせ、新たな燃料を積み込むための施設はツークスでなくては備えてありませんから』

ちよつと残念だ。ぴょんとひとつ飛びを期待していたのに。理緒子も同じだったらしく、少し惜しそうに顔を見合わせる。

『ほら、船が離れます。見送りの方々に顔を見せて差し上げては？』

ヘクターさんに言われ、あたしたちははっと立ち上がった。そういえば、シグバルトやレスやシエナやラクエルは一緒に来れない人だった。慌てて窓へ近寄る。

嵌め込みのガラス（たぶん）窓は、空の景色を楽しむためか、かなり大きめだ。理緒子と二人で貼りつくように立つと、王城の庭にずらりと並んだ人垣が見えた。

『あーシグバルトだあ。おーい』

『シエナ、ラクエル』

窓を叩き過ぎないように気をつけながら、手を振ったり声を掛けたり。だけどさよならってという言葉だけは使いたくなくて、二人で「行ってきます」を繰り返した。

ゆっくりと、ゆっくりと大地が遠くなっていく。そこに立つ人たちとともに。

「ね、ほらあれ、理緒子と一緒に来た兵士の人じゃない？」
「ほんとだ」

あたしが指差した、ちょっと地味目な灰色の兵士の一団が上空に向けて敬礼をしている。

理緒子が笑顔で「ありがとう、行って来るね」と大きく手を振ると、彼らは拳を突き上げて、わあっと大歓声をあげた。

「理緒子、大人気」

「ふふ。すごくいい人たちなんだよ」

「タクの部下だしね」

意味深に言うと、肘打ちをされた。しょうがないので横腹にお返りする。

「もう」

「なんだよ」

ふざけながら、それでもお互いの顔は見れなかった。見ればきつと目が潤んでいるのが分かってしまうから。

ふう、と二人の口からそろって溜息が洩れる。

「なんか……寂しいね」

「また戻ってくるじゃん」

「うん……」

理緒子が重く頷く。と、指を窓にくつつけて、

「あ、アルだ！」

「え、どこ？」

あたしは窓におでこをつけて覗き込んだ。ちょうど飛行船のある場所を見下ろすような宮殿の窓辺で、白い王子様服を着たアルが立っていた。長い黒髪が風になびいている。表情は見えなかったけど、かすかに笑っているようだった。

アル、行って来るね。

心の中でそっと呼びかける。

「ね、真紀ちゃん」

「ん？」

「アルって真紀ちゃんのタイプ？」

「……ぶっ」

むせてしまった。この感動の気持ちがぺしゃんこになるのをどうしてくれるよ？

「まあ、カッコいいんじゃない？ 成長の余地ありまくりだけど」

「年下OKなんだ？」

あたしにとって問題なのは、年よりも身長だ。顔は二次。付き合う最低条件は、あたしより身長の高い人っていうのは譲れない。いくら理想と言われても。

「性格はすごく合うんだよね。だけど……ヒール履いたら絶対あだし超えるもん……」

「真紀ちゃん身長あるもんね」

「めっちゃめっちゃ高いほうじゃないんだけどなー。あー……理緒子が羨ましい」

「どして？」

「だって大抵の男の人って、自分より背、高いでしょ？」

「まあね」

「身長あるとき、フォークダンスの時とか辛いんだよ。あれって背の順に並ぶから、ずれてくじゃない？ そうすると絶対一番背の低い男子と背の高い女子が踊ることになって、めっちゃ悲劇なんだよ」

あれは、男子女子双方にとって屈辱以外のなにものでもないはずだ。先生も考えてくれればいいものを、頭イッコ違う相手の腕の下くぐるの大変ですから！

「考えたこともなかった」

「いろいろ悩みがあるわけよ、身長あっても」

あたしはミニチュアサイズになる宮殿を見ながら、大袈裟に息を吐いた。

「まあ……アルは五年後に期待だな」

「二十歳か。カッコよくなってそうだね」

「でしょ」

あたしは自分のことのように得意げに言った。アルはきつといい男になる。その先を見れるかどうかは分からないけど、彼の未来はきつと輝いていると思う。そう信じたい。

やっぱり感動のお別れなんてどこへやら。なんてことのないガールズトークをしながら、あたしたちは天都から旅立った。

12-5 (後書き)

天都篇終了。

第13章 空の道 リオコのすべきこと

1

飛行船はじわじわと宮殿の地から離れたと思うと、あっという間に上空へ舞いあがった。鈍くエンジンの音は響いているし振動もあるけど、そんなに揺れないから気分は悪くない。だけど、景色を見続けるのも飽きてきて、わたしと真紀は船内の個室へ入った。

天井が低くてちよつと狭いけど、秘密の小部屋みたいでなんだか落ち着く。備え付けのソファベッドに寝そべって二人でだらだらと喋ったり、習ったマフォーランド語なんかを復習していると、ドアがこつこつと叩かれた。

『はい』

二人で返事をする、タクが長身を折り曲げるようにして入ってくる。

『リオコ、いいか？』

なんて聞かれて笑顔で頷いたけど、彼の手にあるものを見て、顔が強張るのが分かった。

見覚えのある黒革の手提げバッグ。わたしの学生鞆だ。

『なんで……タクが持つてるの？』

尋ねる声がうわずってしまふ。答えなんて聞きたくないのに、それでも聞かすにはいられない。

異界に持って来たはずの鞆。わたしが失くしたと思っていただけを、タクが持っているという状況の真実を。

『リオコ……』

『それ……タクが探しに行ってくれたの？ わざわざ、ありがとう、ね』

わたしの様子がおかしいことに気付いたのか、真紀が黙って左手を握ってきた。

『なんで……今頃？』

『すまない。君が異界から来たと証明するために、王子に君の持ち物を見せて説明する必要があった。君は……気を失っていたから』
つまり、タクはわたしと一緒に城にこの靴を持ち帰ったってことだ。

ひどい……。

すごく裏切られた気分だった。

信じていたのに。あんなに優しくしてくれた影で、わたしをずっと騙っていたんだ。そう思うと、頭が真っ白になって涙が滲んだ。

『すまないことをした。だが、どうしても必要なことだった』

『……ちよつと待つてよ。異界から来た証明ってことは、断りもなく靴取り上げて勝手に中覗いたってこと？』

真紀が苛立たしげに口を挟む。

ああ、もう言わないで。分かっているの。分かっているのにわたしは勝手に信じて、また騙された。また、だ。

もう誰も信じられない……。

悔しさと哀しさと腹立たしさと恥ずかしさで頬が熱くなる。わたしは唇を噛みしめ、泣くまいと我慢した。

それくらいのプライド、わたしにだってあるんだから。

そう思ったけど、うまくいかない。眼を上げてタクを見ると涙が零れそうだったから、俯いていた。肩が強ばるくらい、必死で。

『すまない。すぐに取り返そうとしたのだが……王子が王に渡して
いて』

『はあ？ なにそれ。有り得くない？』

真紀の尖った声。もういいよ。友達のふりして無理してわたしを庇おうとしてくれなくても。これ以上惨めになるのは嫌だ。もう嫌だ。

『なんなの。女の子の靴勝手に開けといて、もういらなくなりましてから、はいすいませんでしたって、謝って返せば済むと思ってるわけ？』

『もういいよっ！』

わたしは怒鳴って、タクの手にあった鞆をひったくった。ぎゅつと力を込めて腕に抱きしめる。

『もういいから！ みんな出て行ってよおっ！！ 出て……行ってよお……』

どうやっても怒鳴りつけるなんて、わたしにはカッコよく決まらない。

わたしは泣きながら床にへたり込んだ。そのまましゃくりあげて号泣してしまう。

『……リオコ』

タクが声をかけようとしてくれたけど、言葉が途切れ、彼は出て行った。わたしの言ったとおり。

わたしは泣きむせぶ口を抑える両手の隙間から、その大きな後姿を涙目で追った。もし彼がふり返って、哀しそうな顔をしていたら許せるんじゃないかと期待をこめて。

でも、タクはふり返らなかった。

2

床に指環を投げ捨て、わたしは抱え込んだ両膝に泣き顔を押しつけた。

泣いているのだから痙攣しているのだから、しゃっくりのような声を必死で止めようとしていたら、視界の片隅に誰かの足が見える。

なぜかさつきまでいたソファベッドでなく、わたしと同じように床にしゃがんでいる真紀の姿。

「で……で……」

一人になりたい。一人になって、このどうしようもない可哀相な自分を小さく小さく隠してしまいたい。失くしてしまいたい。惨めな自分を。

「で、てってえ……」

しゃくりあげながらだから、きちんと言葉にならない。

真紀が同じように膝小僧を抱えて、ぷつと頬を膨らました。

「やだ」

「ひと……りに、して」

「だから、さつきから一人にしてるじゃん」

なぜか不機嫌そうに、真紀が自分の爪先を見る。いつからそこにいたんだろう？ 自分のことに精一杯で、全然気がつかなかった。

膝に顎を乗せて、真紀がぼそぼそ喋る。

「外に出てったってタクを殴りつけたくなるだけだし？ 中にいる理緒子が気になるだけだし？ たぶんルイスにも八つ当たりすると思っから、出てってもろくなことにならない」

たしかに真紀ならやりそうだ。

「だから、理緒子が泣き止むまでここにいます。好きなだけ泣きな」
そういえば、前に泣いた時もそんなふうに言ってくれてたな。我

慢しなくていいって。

わたしの鼻を嚙りあげる合間で、ぼつ、と真紀が続ける。

「気が済むまで泣いたら……さ。二人で、タク殴りに行く」

ちよつと笑ってしまった。失敗。あーあ、また真紀にやられちゃったよ。

ぐす、と鼻をすすりながら、指で涙を拭う。

「……殴るの、やだ」

「なんで？」

「手、痛くなりそう」

真紀もちよつと笑った。彼女を見ると、少し目が赤い。もしかして一緒に泣いていた？

「なんで……真紀、ちゃん……泣いてる、の？」

「もらい泣き」

少し恥ずかしそうに言う。そうだ、彼女は気が強いくせに涙もろいんだった。

「……泣き虫」

「あー理緒子がそれを言う？ 誰のせいだっていうかなー」

真紀がおどける。わたしもそれに乗った。

「タク」

「それは間違いないね。あいつが患者お」

「……でも、悪く、ないよ？」

思わず言い返してしまう。タクは悪くない。悪いのは 気づかなかつたわたし。

真紀はすごく怒るかと思ったけど、意外に変わらない調子でまた返してきた。

「うん。あたしもそう思う。タクは悪い人じゃない」

少し、驚いた。はっきり言ったわけじゃないけど、わたしのタクへの気持ちも知っているはずだから、からかうのかと思ったたらそうでもなくて。

「だって考えたらさ、タクはずっとこのまま黙っていることもでき

たはずなんだよね。鞆捨てるか隠すかして、そのまま知らん振りしてさ。でも、タクはそれをしなかったんだよ」

「……」

「鞆は王様に渡してあったって言うたでしょ？ ひよっとしたら、返すようにかけ合ってくれたのかも知れない。たぶん……アルが。王様に直接話すのは、タクじゃ無理だと思うから。」

「だけど、アルにそうするように言うてくれたのはタクだと思うんだ。あのばかちん、年下だけあってそういう気配りできなさそうだから」

王子をばかちん呼ばわりするかな。本人聞いたら卒倒しそう。

「だけど、わたしが泣いている間、真紀はそんなことを考えていたんだ。」

わたしは涙が止まっていることも忘れて、真紀の話に聞き入っていた。

「想像だけど、理緒子の鞆渡すの、タクは反対したと思うよ？ でも……どうしようもないことってあるじゃん、オトナはさ。それで取り戻して頭下げてきてくれたんだから、今は許せなくても、いつかは許してあげなよ」

「でも……ずっと黙ってた」

「うん、それは酷いと思う。だけど、鞆を取り戻した後で全部話そうって思ったたかもしれないじゃん。言い訳下手くそっぽいもんね。タクはどう見ても、全身筋肉系だし」

「なんだかなあ、その表現。真紀はタクをどう見てたんだろう？」

「こつ、思ったら一途な感じ？ だから周りに配慮………できるんだかできないんだか分かんないな、あの大男は」

「なんだか独り言。」

「だけどさ。タクは、嘘だけはつかないと思うよ？」

「どきん、とした。嘘。嘘をついていたのは彼？ それとも」

わたし？

「タクが言うことは、なんていうのかな、すごく芯があるんだよ。」

自分の言葉っていつのかな。自分の経験から出たこと感じたこと、そうしたいと思ってることしか話さないと思う。あたしはそう感じた」

うん。わたしも同じだよ。だから信じようって思ったんだ。だけど。

「理緒子さあ、裏切られたって思ったかもしれないけど、タクの？ごめん？は本気の？ごめん？と思うよ？」

そんなこと分かってる。それなのに許せないって思う自分が、大嫌い。

「……ねえ。理緒子は、タクが好きなんじゃないん？」

素っ気ないような、確認でも疑問形でもあるちよつと訛った問いかけ。

わたしは鞆を胸と膝の間でつぶした格好のまま、両手で顔の真ん中を覆った。泣きすぎて鼻の奥が痛い。

「……もう、分かんない」

「あたし、恋愛に疎いけんよう分からんけど　タクはいい人よ？けど、完璧じゃないんよ？」

ふと、乗馬の時彼が言っていた言葉が甦る。誰かを羨ましく思うつて。彼ですら、いや彼もそうなんだ。

「今はいいとこしか見えてないかもしれないけれど、弱いところもダメなところもあるんよ。それ全部好きになれとは言わんけど、受け入れんと。受け入れて欲しかったら、自分も受け入れてあげんと」

「……わたし、真紀ちゃんみたいに強くないもん」

「あたしのどこが強いんよ？」

即答で真紀が返してきた。

「王様の前であたしが足震えとったこともパーティから一人で逃げたことも、ルイスに謝りにいけんどうじうじしとったんも知ったうえで、理緒子はあたしをそう言うん？」

「……でも」

「あたしが強く見えるんじゃないやったら、それはあたしの演技力万歳よ」

「え……」

あたしは真紀を振り返った。まだ赤い、ちよつと怒ったような一重の眼。表情の加減で二重にも見えるのに、今は腫れぼったい。

「あたしは弱いよ。弱いけん、強く見せようとする。強い自分おろうとする。そうありたいと思う。けど、それは錯覚よ。あたしは……理緒子のほうが強いと思う」

「……わたし？」

「うん。ドレス選びの時、あたしの代わりに全部決めてくれたじゃん。すごいなって思った。あのときから心の余裕なかつたんよね、あたし」

「わたし……服、好きだから」

「でもさ、あれだけあたしが機嫌悪いと普通は構わんよ？ ほつとか無視るかウザがるか。でも、理緒子そうせんかつたでしょ？」

「だって、服決めないと真紀ちゃん困るし。わたしも困るし」

「それにさ、あたしがいろいろ勝手なことしても、理緒子はきちんとな怒ってくれたじゃん？ なんか……嬉しかったんよね。変になんでもないって流されたり、マジで愛想つかされたりせんで、ちゃんと受け止めてくれとる感じで」

だってそれは、わたしが真紀に置いてかれたりするのが嫌なだけだったから。それに真紀に謝られると許せちゃう。それだけなのに。「なんか居心地いいんよね、理緒子の隣。あたし……理緒子に甘えとるわ」

「ごつん、と真紀の額が膝小僧に落ちる。

「はあく失敗」

「なに……？」

「せっかく理緒子励まそう思つとつたのに……自分の愚痴で終わってしもうたあ」

？しもうた？って、絶対女子高生の発言じゃないと思う。

なんだかすつかり広島弁モードに突入した真紀がおかしくて嬉しくて、わたしはまた泣きそうになった。

すごく励まされた…… ンだけどな。

こんな愚痴なら大歓迎だよ。そう言いたいけど、口を開けば泣き声になりそうで、わたしは黙った。

ぐすん、ぐすん、とわたしと真紀の鼻を鳴らす音が、不規則に続く。低いモーター音が響く部屋にそれだけが籠もった。

「……ぷ」

わたしはなんだか可笑しくて、吹き出してしまった。くくつと横から真紀の笑い声が聞こえる。

「笑わないでよ」

「どつちがよ」

言いながら、わたしたちは笑った。泣く時間は終了だ。自分を可哀相がる時間も。

わたしは笑いながら顔を上げ、浮かんだ涙をぐいと手の甲で強く拭った。

13 - 2 (後書き)

2 / 20 冒頭改稿。

3

「鞆の中身、確かめんと」

という真紀の勧めに従い、わたしは戻ってきた学生鞆を開けることにした。一昔前のものではなく、最近デザインが変わったポストンバッグ風の洗練されたタイプだ。

机に鞆を置き、どきどきしながらファスナーを開く。中身はぐちゃぐちゃにされている感じではないけど、サイドポケットにあったものやバックインバックの中身が全部外に出ていたりして、わたしは一瞬また泣きそうになった。

「無くなってるものとかない？」

「ん、調べてみる」

わたしは一つずつバッグの中身を取り出して確かめた。ファイルしたノート三冊、ペンケース、手帳、財布、化粧ポーチ、ハンカチ、ペットボトル、お菓子、ウェットティッシュ……。

「理緒子、どんだけモノ入っとるん？」

「えー普通だよー」

「化粧ポーチ二個もいらなくない？」

「必須だよ。一個はメイク用、もう一個は基礎化粧品なの。メイク落としか」

「うわ、理緒子メイクするんだ」

「するよー。学校では禁止だけど、ばれないようにみんなしてるもん」

「あたし、こっちきて初めてされたよ」

「真紀ちゃんもしてみる？」

「うー……いいわ。もうちょっと後で」

なんて会話をしながら、わたしはバッグの底を攫った。何しろ肝

心なものが出てきていないのだ。

真紀がソファベッドに寝そべったまま、大きなビニールの包みを手に取る。

「……これ、まんま入れてんの？」

「だって使うでしょ？ これだって一番小さいやつだよ」

女の子なら誰だって月に一度お世話になるんだから。女子校だからみんなこうやって入れてたり、袋ごとロッカーに置いてたりするのが普通なんだよね。

共学らしい真紀が微妙な表情で唸った。

「うーん。開いてないし、まあ、この状態のほうが良かったといえは良かったかも？」

バラよりいいかってこと？

わたしの頭に嫌な妄想がよぎった。

「た……タクも見たかな？」

「あいつは見んでしょ、さすがに。でも、アルは見たかもね」

「み、見ても分かんないよね？」

「たぶん何かは分かんと思うよ。ってか、これじゃフツー分からんって」

「わ、分かんない、よね。はは」

わざとらしい笑いでごまかしながら、わたしは顔を赤らめた。ほとんどのものを机に広げ、わたしの指が冷たく固いものをようやく探り当てる。

「あ……あつたあ〜っ！」

わたしの携帯だ。メタルホワイトのフリップを開けると、画面は真っ暗。一週間も放置していたのだ。電源なんてとっくに落ちちゃってるに決まっている。

「ふう……」

なんて重い溜息をつきながら、それでも親指は電源ボタンを押ししてしまう。すると、ピロリロ〜と明るいメモロディが響いて、画面が復活する。

「あ……電源入った」

「誰か間違つて電源落としたんじゃない？ よかつたじゃん」

真紀は軽い感じでそう言ったけど、わたしは複雑な気分だ。もちろん表示は圏外のままで、メールも着信もなし。本当に今届かないどこかにいるのだと、元いた世界の連絡ツールをもって、わたしはしばらく考え込んでしまった。

「だけど、あたし理緒子の見方少し変わったな」

いつのまにか広島弁モードから戻った真紀が、鞆のチャームを摘みながら呟く。

「なにが？」

「だつてさ、てつきりめちやめちやお嬢かと思つてたのに、鞆の中身見ると、なんかギャルっぽいんだもん」

「だから、お嬢様じゃないつて言つたじゃん」

「うゝだまされたあゝ」

言いながら、真紀がチャームのクマで遊んでいる。淡いチェックのピンクとブルーの二匹のテイベアは、おつきなどピンクのハーフトとセットになっていて、恋守りだとか謳い文句がついてるやつ。元彼に告られる前に自分で買ったんだけど、気に入ってるからまだつけてるんだ。

真紀が遊んでいる横で、わたしは携帯をいろいろいじつた。ネットの接続はダメ。保存されているメールとか着信履歴は見れるみたい。カメラは。

「あ、映りそう！」

「あんまりいじつてると充電切れるよ？ こつち充電器ないし」

「そだね……」

充電マークも二つしか点いてない。もし帰れるんだつたら、大事にとつておいて、使えるようになったらすぐ家族に連絡を入れたいけど。

「使っちゃおつかなあ」

「なんで？」

「んー……ここに来た、記念、かな？」

先のことは、考えない。考えたくないっていう逃避かも知れないけど、今はなんとなく目の前のことだけに集中したかった。もう、泣き言は言いたくない。

「真紀ちゃん、写真撮ろ！」

わたしは強引に真紀の傍にくつつき、携帯をかざした。カシヤツという合成音と共に、手の平サイズに収まった、わたしたちの笑顔。

「ふふふ、ほ・ぞ・ん」

「理緒子、キャラ変わってるよ？」

「いいのいいの」

わたしは、向こうでは有り得ない格好をした自分たちを携帯に保存した。

学生服とビルが映る写真たちに紛れていく、新しい一枚。これが今のわたしの日常だ。

「他のみんなも撮りたいな」

「驚くよ、きつと」

「だね」

隠し撮りとか、しちゃおっかな。

想像して、わたしはくすりと笑った。

「ね、真紀ちゃんの携帯は？ 電池あるうちに赤外線しておこうよ」

「あー、ごめん。ない」

「え？」

ないって、まさか。

「持っていないんだ、携帯」

「ええええええっっ！！」

驚いた。ひよっとしたら、異世界にきて一番 とまではいかににしても、それくらい驚いた。同い年で携帯持たない子がいるとは思ってもしなかった。

「真紀ちゃん……それかなりやばいよ？ 時代とかいっちゃってる

よ？ 女子高生じゃないよ??」

「だって使わないもん。部活忙しくて、家と学校の往復だし。遊びに行く時も、だいたいのは会って決めちゃうし」

「持てつて、友達とか彼氏に言われぬ？」

「彼氏いないし。友達も、あたしはどうせ携帯を携帯しないタイプだと思われてるから、諦められてるもん」

ま、周りは持つてるわけね。ちよつとだけ安心だ。

「遠距離の友達と長話するときは不便だなくって思うけど、あとはあんまり必要って思わない。家族はみんな持つてるし」

「友達と連絡取りにくくならない？」

仲間外れが一番心配だよ。情報は先取りしないと、お喋りから取り残されちゃう。

「メールとネットはパソコンしてるし、携帯なくて連絡なくなる友達ならそれだけのモンでしょ」

さらつとすごいことを言うんだな、真紀つて。手にした携帯が、すごく重く邪魔に感じた。

「……やっぱ真紀ちゃんはすごいね」

「なにが？」

どうしよう。一瞬迷う。ここで感じたことを話せば、少し楽になるかもしれない。けどすごく重く取られて嫌われるのも嫌だ。

『リオコはリオコになればいい』

ふと、耳元でタクの声が甦った。

わたしが唇を噛み、震えそうになる声を絞るようにして言い出した。

「わたしね……小学校の時、いじめられてたんだ。だから、人がすごく恐いの。人が嫌いって言うか……自分が、嫌われるのが、恐いの。だから、真紀みたいに、強くは、なれない」

やっぱり、ちよつと涙ぐんでしまった。息を吐いてごまかす。

「メイクも、彼氏も、携帯も、みんなと一緒にじゃないと、不安なの。お守り。だから、一人でいれる人とは、違うの」

「いじめ、どれくらい続いたん？」

「……小4から卒業まで、かな」

真紀はふつとわたしから眼を背け、鞆についている学校のエンブレムを見た。おそらく？私立？という文字も。

「理緒子。あたしははつきり言うほうだから、キツイ言い方になってたらごめん。謝る。でも……」

言い差し、真紀はわたしの横にすんと座った。

「あたしは一人でいられるっていうより、一人でいたいタイプなだけよ。それだけの違い」

「え……」

「みんなでいるのも楽しいよ。でも基本、少人数が好きなんだよね。一人も好き。たくさんいるとなんだか圧倒されて、苦手なんだ」

わたしに気を遣ってるのか、真紀の言葉が微妙なイントネーションを漂う。

「友達も深く狭くっていうほうで、結構レア」

「……真紀ちゃん、誰とでも仲良くなるタイプと思ってた」

「人にはこだわらないよ。だいたい、どういう人でも初対面で喋れる。けど1対1に限るかな。で、仲良くなったらとことん。だけど大勢でうわーって来られると、どん引くんだよね。つるんだりも五人くらいが限界。集団も、クラスの人数までだね。それ以上は体が拒否する」

「意外……」

「だって恐いじゃん。人の話聞かずに勝手に盛り上がりそうだし。すっごい冷めるんだよね。名前と顔覚えるのも面倒だし」

真紀、結構ひねくれてる。まっすぐ、少し天然気味に育った明るい子っていうイメージが、ちょっと変わった。

ブラック真紀、発見だあ。

「だから、理緒子もあんま気にしない。どっちがすごいとかすくないとか、いいとか悪いとかないんだからさ。比べっこはもう止め」
真紀はまだちょっと赤い目で、わたしを見た。ぱさんと黒髪が頬にかかる。

「どーしても決めたいんなら、じゃんけんする？」

そうきたか。

わたしは笑った。きつとじゃんけんって聞きたびに、わたしはあの光景をあ瞬間を、このひねくれた友達を思い出してしまっただ。

「そう……だね。決めなくていいよね。お終いにしよ」

だぶん、お終いにはならない。きつとまた真紀ではなくても誰かと比べて、わたしは悩む。だけどそれでいい。悩むのが、わたし。わたしはわたしだ。

「ん、お終い……あ！」

真紀が突然声をあげた。

「なに？」

「しまった、お終いじゃないっ」

「なにが？」

「理緒子、タクに仕返しせん！」

本当に真紀は、なんて思考の持ち主なんだろう。

「仕返し、するの？」

「うーん。じゃあ……罰ゲーム？」

「……」

それ、あり？ ありかも？

わたしはくすりと笑って頷いた。

意外に黒いわたしたちは顔を突き合わせ、タクの罰ゲームへ向けて真剣に作戦を練りはじめた。

そろそろこのあたりで、異界の乙女の本領発揮？しておかないとね。

鞆を勝手に取り上げて見たタクに仕返しという名の罰ゲームを決行するにあたって、使えそうなものを選ぶために、真紀は自分のシヨルダーバッグをひっくり返した。

学校指定のものではなく、某スポーツメーカーの大容量のバッグはすごく重そうな雰囲気。

中からはジャージや小物入れなどの他に、数冊の教科書とノート、使い込まれた音楽プレイヤー。それに楽譜の束が出てきた。

「わー楽譜だ」

「部室におきっぱだと先輩に怒られるんだよ。鞆重くなるから、やなんだけどねー」

わたしたちは結構真剣に自分たちの異世界グッズを並べ、意見を出し合ってタクへの罰ゲームを決めた。

内容は二つ。罰ゲームらしく、彼を心底驚かせることと、ちょっと恥ずかしい思いをしてもらおうということ。詳しい内容は　あ　とのお楽しみだ。

罰ゲームを決めてからも、真紀はまだ片耳にネックバンド型のヘッドフォンを当て、手の平の半分サイズの音楽プレイヤーをいじっている。結構高価そうなそれらはお兄さんからのお下がりで、コーラス部としては必須アイテムらしい。

わたしは泣き顔が分からないように軽くお化粧をして、ソファベツドに座って真紀を眺めていた。なんとはなしに、疑問が口をついて出る。

「ルイスは真紀ちゃんの鞆の中、見なかったんだね」

質問というより確認の問いかけ。少し困った顔で、真紀がこくと頷いた。

「興味なかったんじゃない？ それかどうでもよかったか」

「そんなはずはない。少なくとも？ 異界の乙女？ という存在は、この国の人にとって決して軽々しい存在ではないはずだ。」

「やっぱ指環で会話できてたから、違うのかな」

「それはどうかなあ。だってあたし、都合よく指環持つてるルイスんとこに現われたせいで、ヘクターさんに最初かなり疑われてたもん」

「え……」

驚くわたしに、真紀も驚いた。

「あれ、聞いてない？ 絶対どつちかが偽者だろうって、結構揉めてたんだよ。あたしよりルイスが疑われててさ、なんかスゴイ嫌な感じだったんだ。だから、鞆どころじゃなかったのかもね」

「そうなんだ」

真紀がヘクターさんに突っかったのも頷ける。

あんまり話分かるのもどうだろうって感じなのかもね、と真紀は曖昧に濁したけど、わたしがタクヤラクエルに護られている間、聞かなくてもいいいろんなことを彼女は耳にしたのかもしれない。

だから、この世界のことを勉強するなんて言い出したのかな。

伝説のことも、真紀はわたしより詳しい。百五十年前に同じように異界の乙女が現われて、なのに記録がほとんど残っていないということも、その人はどうやら異界に帰ったらしいということも、真紀から教えてもらった。

わたしは、伝説のことはあまり本気で考えないようにしている。

お姫様は好きだけど、ファンタジックな世界はどうしても日常とは思えないから。

それでも、過去に同じような人がいたかもしれないってことと、話をする真紀の口調がいつになく齒切れ悪かったことが、わたしの心に引っかかっていた。

床に転がっていた紅い指環を拾い上げ、そつと撫でる。これを身につける以上、きつと耳に入れたくないような声だって聞こえるは

ずだ。小学校時代の自分のように。

でも……あれが耐えられたんだから、平気よね？

胸の裡（うち）で囁く。

大丈夫、大丈夫。言葉で自分に呪文をかける。

一番しんどかったときは、いつもこうやって言い聞かせて、顔と心に硬い壁を張り巡らせていた。だけど、四年と半年かけて少しずつ解きほぐされてきたそれは、すぐに元の硬度を取り戻してくれそうにない。

どんな顔をすればいい？ どんな声を出せばいい？

グロスを塗った唇を噛みしめ、ドアを睨みつけるように見るわたしを、ひよいと真紀が覗き込んだ。茶色い目がわたしを見て、唐突に両頬が摘まれる。

「笑って！」

ルイスに言ったのと同じ台詞を言って、真紀が間近で笑う。

「笑おう、理緒子。笑って、余裕見せつけてやろう。あたし、ついでるから」

摘んだわたしの両方の頬つぺたを、今度は両手で挟みこむ。

「女の笑顔は最高の武器なんだって。一緒に笑って、タクに罰ゲームさせてやろう？」

「なにその微妙な格言」

「んー、先輩の口癖」

真紀に頬つぺを包まれたまま、わたしは笑った。真紀も笑う。おでことおでこがくつつくくらい二人でくすくす笑いあって、わたしたちは手を繋ぐと、外へ出た。

わたしの左手に合わさる真紀の右手。二人ともその手は少し冷えて、かすかに震えていた。

だけど、わたしたちに涙はない。まだ少しだけ赤くなった目元のまま、わたしたちは何度目かの質（たち）の悪い神様の企みに、笑顔で喧嘩を仕掛けにいった。

部屋から現われたわたしたちを見て、タクたちは少し驚いたようだった。

個室の壁にもたれる形でヘクターさんが立ち、奥の壁際に置かれたスツールの左端にルイス、右端にタクが浅く腰掛けている。彼らの間に広がる分厚い窓ガラスの向こうには、どこかのっぺりとした青空が壁紙みたいに貼り付いていた。

話が盛りあがっていた雰囲気はない。ぎこちない会話が途切れた間の悪い沈黙の中に、わたしと真紀は飛び込んでしまったようだ。

こちらを見る彼らの表情に、わたしとタクのことを知っているのだと察する。思わず、真紀の手を握る力を強めた。真紀も握り返し、わたしを見て口の端をきゅっと上に向ける。

わたしはふうつと大きく息を吐くと、真紀の手を離した。タクのほうへ歩いていく。

気まずそうな、腫れ物でも見るようなタクの目つき。これは、わたしにすまないと思っっているせいのだと思いたい。だけど、全部を信じるわけにはいかない。魔法の指環を使っても、人の心を覗けないから。

わたしは、どきどきする心臓を落ち着かせようと胸の前に手を当て、口を開いた。

「あのね、タク。わたし、すごくショックだった。勝手にバッグを取られたっていうことだけじゃなくて、なにも言ってくれなかったことが、すごく……すごく嫌だったの。そのことは、本当に怒ってる。」

でも、タクがわたしに親切にしてくれたことは、嘘じゃないと思う。こっちへ来て何も分からないわたしにいろいろ教えてくれたり、励ましてくれたり。だから、もう一度タクのことを信じたい。信じるの恐いけど、信じようって決めた」

わたしは、心に溜めていたことを一気に喋った。日本語で。

指環をしなかったのは、そのほうが好きに言えるんじゃないかっていう真紀の意見だ。

たしかに言葉が伝わらないと思うと、肩の力が抜ける。なにしろ？バカ？と言っても通じないのだ。それはそれで悔しくもあるけれど。

いつにない勢いで喋ったわたしを、タクはやや吃驚したように見ている。

何か言おうとしたので、わたしは首を横に振って止めた。

「まだ、わたしタクを完全に許せる気持ちになれない。だから罰ゲーム、受けてね？」

目に力をこめて、わたしは顔いっぱい笑いかける。合図の言葉を聞いた真紀が進み出て、タクに「頭下げて」と言った。指環は、今は真紀がしているのだ。

タクが不審そうに、頭を下に向ける。真紀が上から被せるようにヘッドフォンを彼の両耳に当てた。わたしのところに戻ってきて、手を握る。

『じゃ、罰ゲーム、開始！』

真紀の口からその言葉が出た途端、その場の男の人全員が目を丸くし、同時に彼女の手の中のプレーヤーのボタンが押された。

両耳から大音量で流れ出した異界の音楽に、タクの体が、まるで雷にでも当たったみたいにびくと震える。切れ長の両目がこれでもかというくらいに見開かれ、啞然呆然という顔になった。

罰ゲームに選んだのは、真紀セレクトの激しめハードロックだ。

真紀の音楽プレイヤーにはありとあらゆるジャンルの曲が放り込まれていて、詳しくないわたしは彼女に一任したのだ。

なにしろこちらの世界は、お城に馬車に剣に魔法。リズムの早いギターサウンドなど聞かせたら、絶対に飛び上がるという予想の結果が、これ、だ。

実際かつてない驚きの表情を作ったタクは、ヘッドフォンをしまったまうなだれ、やがて小さく肩を震わせはじめた。笑っているらしい。

『なんで笑うかなあ』

真紀はかなり不満そうだ。声もなく笑いながら、タクが顔を上げると耳の隙間から、かしゃかしゃとノイズが洩れ聞こえた。

『いや、これはかなり強烈だ。頭が痛い。くく……』

『笑わないのー。これはタクの罰ゲームなんだから。理緒子を泣かせた罰』

『……ああ、もちろん罰を受ける覚悟はしていた。まさか、こんなことをされるとは思っていなかったが』

ヘッドフォンを外さないまま、タクが笑い顔を真顔に戻し、わたしを見る。

椅子に座った彼と私の瞳が、ほぼまっすぐに合わさる。

『リオコ、君を傷つけて本当にすまなかった。心から謝る。だが初めて会ったあの夜、俺が君に言ったことは本心だ』

『言ったこと？』

問い返すわたしに、タクは『まだ言葉が通じない頃だったな』と呟き、改めて言い直した。

『あの荷物は俺の知らない間に回収され、王子に差し出されていた。知らなかったといって済ませられることではないのは分かっている。だが、君が使命を果たすこの旅で、どうか君を守り助ける担い手となる許しを俺に出来ないか』

そう言っつて、タクはふわりと床に降り、片膝をつきその横に拳を当てて、わたしの前で頭を垂れた。ヘッドフォンを嵌めて、どこか苦しそうな彼は、それでも真摯だった。

知らない間に回収され、王子に差し出されていた。

その台詞が、わたしの頭の中をぐるぐると回る。

そうだ、タクは鞆をわたしに返したとき、一言も自分で拾ったなんて言わなかった。決めつけたのは、わたし、だ。

ひくつく喉を押さえ、何度か唾を飲む。歩み出ようとするわたしの手を真紀が掴み、黙って左手に紅い指環を通した。

わたしは頷いて、タクの前に立ち、その頭からヘッドフォンを外

した。いつの間に電源を落としたのか、音楽は聞こえない。

居心地の悪い沈黙を、飛行船のエンジン音が埋めていく。規則正しいその音は、まるでこの船の鼓動のようだ。手を当てたわたしの胸が、まだどきどき跳ねて、時を刻んでいる。

『タク。わたしね、小さい頃いじめられて、いろんな人からすごく悪口を言われたの。一番ショックだったのは、友だちだと思ってた子が、陰でわたしの悪口を言っていると知ったとき。だから嘘は大嫌いだし、嘘をつく人は信じられない。』

でも……タクは、嘘をつかなかったよね？ 正直に、話してくれただ。だからわたし、タクを信じる。タクも、わたしに正直でいてください。』

『ありがとう、リオコ。』

タクが顔を上げて、もう一度わたしを見た。その切なそうな深い藍色の瞳に、わたしの胸がきゅうつと詰まる。わたしはぎこちなく微笑んで、スカートのポケットから用意していたものを取り出した。『今回のこと忘れないように、タクに印をつけていい？』

『ああ。』

頷いたものの、タクはわたしが持っているものが何なのか、よく分からないみたい。たしかに、こちらの世界ではいなさそうだ。わたしも、本物は動物園でしか見たことがない。

わたしはタクを立たせ、剣を提げている紐のところを結びつけた。軍服を着替えても、旅の剣士っぽいきりりとした彼の腰にぶらりんとしがみつくと、ブルーのテイベア。

くつと真紀が笑う声をした。そちらを向くと、ルイスとヘクターさんも笑いを堪えているのか、横を向いている。

タクが戸惑うように、クマを指で摘んだ。

『リオコ、これは……？』

『だから、タクの罰！ 絶対外しちゃだめだからね？』

『あ、ああ。分かった。』

ちよつと睨んでみせると、神妙にタクが頷く。なんだか急に立場

が偉くなつたみたいなのがして、わたしは可笑しくなつて、ちよつとだけ笑つた。タクの表情が、ほんの少しだけ緩む。

わたしの肩に圧しかかっていた空気が、ふつと軽くなった。

重かつた時間がやつと動き出して、窓の向こうの雲がゆっくり流れはじめたような、そんな気がした。

5

わたしとタクの様子に安心したのか、ルイスとヘクターさんがこちらへ近づいてきた。真紀が手に提げているヘッドフォンを覗き込む。

『マキ、それは一体なんなんだ？』

『あ、ルイスも聞く？』

真紀がさらつと尋ねて、ルイスの両耳にヘッドフォンを被せ、元のプレイヤーを再生する。その瞬間、ルイスが叫び声をあげてそれを振り外した。

床に叩きつけられかけた異世界の道具をヘクターさんが受け止め、一瞬取り落としそうになった。その丸い小さな機械からは、恐ろしい金切り声とギターのかきむしる音が鳴り響いている。

わたしは目を見開いて叫んだ。

『真紀ちゃんっ。一体タクになに聞かせたのっ?!』

『なにつて……ガンズ?』

ほら、と真紀がプレイヤーの画面をわたしに見せる。

Guns N' Roses (ガンズ・アンド・ローゼズ)

といつてもわたしにはぴんと来ないけど、真紀の説明によると、ハードロック界の金字塔を打ち立てた超有名なバンドなんだそう。ロック好きなら知っておかないと恥レベルというのは、真紀のお兄さんの話だ。

『理緒子がちょっと激しめの曲っていうから、これにしたのに』

『こんなに激しいとは思わなかったの!』

『デスメタルとかパンクじゃないだけいいと思ってよ』

しれつとした顔で真紀は言う。

真紀のプレイヤーに入っていたのは洋楽がほとんどで、わたしの

知らない曲ばかりだったのだ。曲数がいくら入るといつても、こんな音楽とポップスやミュージカル曲なんかが普通に混在している人も珍しいと思う。

真紀は、癖なのか片耳だけヘッドフォンをつけ、音を絞ってプレイヤーをいじっている。

『ちよつと音量大きすぎたかなって思ったけど、曲はいいんだよ？』

他のも聞いてみる？』

その申し出に、タクとルイスはうんざりした顔で首を振って辞退した。初の異界の音楽は、彼らには激しすぎたみたい。たぶん、わたしにも。

『でも、罰ゲームならこれくらいいしないとね？』

『今度君を怒らせるときは、気をつけるようにしよう』

言って、ルイスがひょいと真紀の手からプレイヤーとヘッドフォンを取り上げる。操作方法は教えていないのに、するのを見ていたのか、簡単に電源をOFFにして曲を中断させてしまう。

『とらないでよ、ルイス。それ、あたしのなんだから』

『後で返す。人と話している時に、他のことをするのは失礼だぞ』
先生のような口調で、ルイスが諭す。真紀がふくれっ面で、はいと返事した。

なんだろう、この親子な感じ……。ルイスは、本当に真紀のこ
と好きじゃないのかな？

わたしの恋愛リーダーが騒いだが、残念ながら今回はそれ以上進展はないみたいだった。

ヘッドフォンのコードをくるくるとまとめ、それをプレイヤーごと脇に挟み持ち、ルイスがわたしを向く。整いすぎて冷たい雰囲気もある顔をやわらかく崩した彼は、意外な台詞を口にした。

『リオコ、よく彼を許してくれた』

『許す、なんて』

『君が気を悪くするのは当然だ。だが、それでも君は彼を許し、同行を認めた。許すということは、言うほど簡単にできることではない。』

よく決断してくれた』

ルイスが言うと、なんだか重く聞こえる。そんな大袈裟なことじゃないのに、と言おうとして、わたしは気付いた。はっとタクを見る。そして、ヘクターさんに目を向けた。

まさか……。

誰も何も言わない。それでも、わたしには分かってしまった。ここでわたしが許さなければ、タクは船が降りるツークスで別れるつもりでいたということ。

タクが、なぜ旅が始まった今、鞆のこと持ち出したのかは分からない。鞆をとり返せたのが出発直前だったのか、それともアルマン王子や王様の目から離れるまで待っていたのか。そのことをタクは教えてくれる気はないのだろう。

騙すのではなく たぶん、彼自身の責任のひとつとして。

彼の想いも知らず、軽々しく？ 罰ゲーム？ なんてふざけていた自分が、急に考えなしの子どもに思えて仕様がなくなった。

『ルイス、わたし……』

『リオコ。彼は君に罪を犯し、君はそれを許した。その事実が変わらない。それこそが大事なんだ。君の決断は正しかったと、私は信じている』

まるでわたしの考えを見透かすようにルイスはそう言い、そっと、本当に優しくわたしの頭を撫でてくれた。タクの温かさとは違う、春風のような微かなぬくもりに、ほっと心が落ち着く。わたしは頷いた。

信じよう。わたしを……タクを。

その傍らから、ヘクターさんもわたしに声をかけてくる。

『リオコ。まさかこのようなことになるうとは予想していませんでしたが、私も良い決断をされたと思いますよ。ただ盲目的に信じるよりも、試練を乗り越えた後のほうがより信頼が深まるというもの。彼は必ず、貴女を守り抜いてくれるはずですよ』

『はい』

『しかし……罰を遊戯（ゲーム）にすると、あなたがたの世界の法は一体どうなっているのです？』

怪訝げにそう訊くヘクターさんに答えたのは、なぜかルイスだ。

『おおかたマキが言い出したのだから。まったく』

すごい、さすがルイス。大正解。

おーと小さく拍手したら、真紀に恨めしそうに睨まれた。

『理緒子だって盛り上がってたくせに』

『だって、やっぱりちよつとは仕返しがしたかったんだもん』

仕返し、という言葉に、男三人が軽く噴き出す。

『仕返しがこれか？』

とタクがテディベアを摘み上げる。

『ううん、それは仕返しのおまけ』

『おまけ？』

タクが、さらに不思議そうになった。本当はペアのクマの片方を好きな相手に渡すと気持ちを通じるとか、ずっと一緒にいられるとか言われる恋守りテディなんだけど、そこは恥ずかしいから内緒だ。それに、無骨で男らしいタクがかわいいぬいぐるみを提げているというだけで可笑しいし、なんだか和む。

こっちの世界の人はテディベアなんて知らないと思うけど、それがタクと釣り合わないということは分かるらしくて、みんなにやにやにしていた。タクは困った顔をしつつも、外そうとはしない。わたしと目が合うと、照れ臭そうな顔をした。

さっきまでの気まずさとは違う、ちよつと前までの関係に戻れた気がして、わたしの胸がどきんとした。

え……！

予想もしなかった高鳴りに、わたしは驚いて自分の胸を押さえた。どきどき、している。

今までとは明らかに種類の違う動悸に、わたしはなぜか、胸の深いところからじんわりと嬉しさと安堵感が込み上げてくるのを感じた。

わたしまだ、タクが好きなんだ。

分かってる。この気持ち、不安から来てるってこと。誰かを頼りたいって思う気持ち、一番身近でわたしを気にかけてくれた存在に傾いただけってことも。

でも、だからこそタクを疑ったり悪く思ったりした後でも、自分がまだこの気持ちを持てたことが、素直に嬉しかった。

わたしは、タクが好き。

すべてが曖昧にされている状況の中で、この気持ちだけが確かなことのように感じる。

これだけは絶対に手放したくないと、わたしの心に決意に似た気持ち湧きあがった。

そんなわたしと彼を、他の三人がどんな顔をして見ていたのか、わたしはまったく気付かなかった。

13・5 (後書き)

ガンズ知ってる人、どれだけいるんでしょつか……。
ほとんどいないような気がします(汗・)

『外、見よう』

わたしの手を引いて、真紀が誘った。

窓辺のストールに腰掛けると、窓の向こうで白い靄（もや）が薄いヴェールのように斜め上方に吹き過ぎていくのが見える。どうやら雲の中を飛んでいるらしく、細かい水蒸気の粒が窓に散りかかり、かかる寸前、ぱらんと光を発して消えた。

魔法……？

思わず、真紀と顔を見合わせる。真紀は追及したいようで、ルイスに何か言いながら窓に指を触れたり覗き込んだりしていたけど、わたしはそれほど気にならなかった。

まったく気にならないといえば違うけど、自分の世界の飛行機の構造だつてくわしく知らないし、説明されても理解する自信なんてない。いわんや異世界をや、だ。

ぱらり、ぱらりと、まるで夜光虫の輝きのように淡く明滅して消えていくそれに、わたしは虚ろな視線を注ぐ。雲の切れ間からときどき山々や大地の色が覗いて、それほど高度をとっていないことが分かる。飛行船のエンジン音は相変わらず酷くて、どれだけ重いものを運んでいるのだろうという感じだ。

頭の中に地図を広げてみる。わたしが最初についたイエドから天都までが、馬車で丸二日。天都から今回の目的地ツークスまではだいたいその三分の二くらいの距離だから、多く見積もって馬車だと一日半はかかる。その距離を半日でいけるってことは、飛行機までの馬力はなくても、車よりは断然早いつてことだ。

それでも、これが最速の乗り物かと思うと、ちよつとため息が出てしまう。

こつちの人つて、のんびりしてるなあ……。

文明が違うから、ということ片付けようとして、厭な考えがわたしの胸をかすめた。

船も車も飛行機も列車も、わたしの世界では立派な交通手段だけど、飛躍的にそれらが発達したのには理由がある。

戦争だ。

戦闘機を積むために船は大型化し、空中から敵を狙撃するために飛行機は速く確実に飛ぶようになり、物資を運ぶために列車の路線は拡大し、車は発展のすえ装甲車を産み出すに至った。

のんびり優雅な印象のこの飛行船でさえ戦時中偵察をおこなうために活躍したのだと、授業で習った歴史の四方山話（よもやまばなし）が思い出される。

その時は「へー」っていうくらいだったけど、今思い返して、ぞつとした。わたしたちの生活を便利にしていたものが戦争の産物だ、という事実だけじゃない。この世界には、それほどの戦争がないのだということが、現実としてわたしの頭にはつきりと認識されたのだ。

この国、この世界は、今ひとつに統合されている。よくよく考えると、それはものすごく不自然なように思えた。それでも、ひとつに寄り添わないと生きていけないほど状況が逼迫（ひっばく）しているのだと言われれば、そうなのかもしれないけれど。

でも、と思う。

その状況が変わったら、じゃあどうなるの？

もし伝説が本当で、世界の渴きが救われたら 豊かさを得たこ

の国は、再びばらばらになってしまうのだろうか。

怖い。

わたしは真紀と繋いでない右手で、ぎゅっとお腹の辺りを掴むようにした。

豊かさの光の次に必ず訪れる衰退の陰、そして戦争という闇。歴史が好きで、その変動していく劇的な流れをどこか御伽噺のように

捉えていたわたしは、それを目の当たりしている気がして身震いした。

高いところを恐がっていると思ったのか、真紀が気遣うような声をかけてくる。

『理緒子、ごめん。あたし夢中になりすぎて……中、もどる？』

『う、ううん。真紀ちゃんいるから、平気だよ。ちよっと寒かっただけ』

『そんなこと、早く言えばいいのに』

真紀と話していたルイスが、羽織っていたマントを脱いでわたしの肩に着せかけてくれた。そのまま足を崩して、隣の椅子に座る。

『ずいぶん熱心に外を見ていたね』

『え、と。結構速く飛んでるんだと思って』

『そうだな。もう少し晴れていれば、下の景色がもつときれいなんだけどね。雲の切れ間にしか見られなくて残念だ』

ルイスの淡い青の瞳は、外の空を透かしこんでとても綺麗だ。でも、たまにその瞳にいろんなことを見透かされているようで、ちよつと恐くなる。今のわたしの気持ちも、もしかして気付かれてしまったんじゃないだろうか。

真紀ちゃんは、彼を恐いとは思わないのかな。

恐いと思っていいたら頼つぺた引つぱったり、鼻を摘むなんてできないとは分かるけど、彼のやさしさの底に潜む、融けない氷のような絶対的な冷たさ、硬さというのは傍にいたら気付かないはずがない。

それとも、タクのもうひとつの思惑に気付かなかったわたしのように、見えていないだけなのだろうか。

また、わたしの心が傾く。暗い方へ。こんなに揺れて、自分の心さえ見失いがちなわたしに、この世界の何が分かるというんだろう。ふらり、ふらりとまた物思いのブランコにわたしが揺られていると、突然真紀が声をあげた。

『あー！ 海だ！』

指差すほうを見ると、白い雲間が切れ、青い色が広がっている。紺碧よりももっと深い光を含んだそれは、小さな三角の波頭を浮かべては消していた。

窓に額をくつつけるようにして見るわたしたちに、笑いを含んだルイスの声が教えた。

『海じゃないよ。あれは湖だ』

『うそ?!』

『嘘ではありませんよ。天都の南西、商都アウサーガのさらに南には、大陸最大の湖があると教えたでしょう』

呆れたように言うのはヘクターさん。そういえば、とわたしは頭の中に、覚えてたの地図をもう一度広げる。

『えっと……セドウ湖、だっけ?』

『正解です、リオコ』

ヘクターさんが腹黒そうな、とびきりの笑顔を見せた。真紀が口を尖らせる。

『えー、海じゃないんだ!。だって、波立ってるよ?』

『そういうものです』

『真紀は海を見たことがあるのか?』

『うん。うちの近くにはないから出掛けなきゃいけないけど、ときどき家族とか友だちと遊びに行ったりする。理緒子んちは、海近い?』

『そんなに近くないよ。でも、夏の海は絶対行くかなあ』

わたしの水着姿は本当に貧相なんだけど、でもやっぱり誘われると、海って行ってしまふ。あの潮騒と海風と太陽があるだけで、なんでもないことも楽しく思えるから不思議だ。

『そうか、二人とも海を見たことがあるんだな』

『ルイスはないの?』

『ない。というより、この国で海を見たことがある者を探すほうが難しい』

『じゃあ、タクも? ヘクターさんもないの?』

『ああ』

『ありませんね』

真紀の問いに、二人が口々に頷く。海に囲まれた島国に住むわたしたちには、結構大きな驚きだ。

地図で見せてもらった限り、マフォーランドは大陸のうちの山が集中するやや中央よりに位置していて、海岸周辺には何も描かれていなかった。あれは行ったことがないというより、本当に砂漠のよくな不毛地帯なのだろう。必要な土地であれば、必死で水源を探している彼らが見逃すはずがない。

『実はこの湖は、もとは海だったんだ。ヘクターは意地悪だから教えていけないようだけど』

『え』

真紀の目が点になる。ヘクターさんが、つまらなそうに長い髪を耳にかきあげた。

『ルイス。簡単に種明かしをしては面白くないでしょう』

『面白さで決めないでよ。ね、じゃあ干上がっちゃったってこと？』

『まあ、そうだ。昔セドウ湖はもっと広く、西側の端で外海と繋がる内海だった。だが世界の渇きが進んで、内海は湖としてここに残されたんだ』

『じゃあ、最近？』

『まさか。数百年前の話だ』

『ふうん』

真紀は軽く頷いたけど、どこか真面目な顔をしていた。きっと、わたしも同じ顔をしていたと思う。

気付いてしまったから 前の水門の乙女でも、渇きを癒しきることではできなかったのだということ。

そんなわたしたちの気を逸らすように、ルイスが新たに眼下に見えてきた大きな陸影の説明をはじめた。

『あれは離国。四集都とも呼ばれる、小さな四つの都市でできた属領だ。豊かな山脈を擁する土地なのだが、いかんせん切り立った溪

谷が多くて、おいそれとは人が入れない。だから、天都に勤めて
いる者が突然？離国へゆけ？と言われると

『分かった。左遷でしょ』

『当たり前』

内容的にはシビアなのだと思うけど、ルイスはにつこりきっぱり
笑顔だ。やっぱり根性ちよっとひねくれてる。真紀の言っていたこ
とが、分かった気がした。

見た目とは逆をいくってゆうか、見たまんま、なんだよね。

性格と顔の良さは反比例する、というのがわたしの持論。十六年
間生きてきて、今だかつて両方を兼ね備えた人に会ったためしがない
のだから仕方がない。ラッキーなのは、ルイスの性格の悪さが人
畜無害だったことだ。真紀を除いて。

『君が左遷という言葉を知っているとは思わなかった』

『馬鹿にしないでよ。深謀遠慮だって知ってたでしょ』

『偶然ということもある』

偶然で？深謀遠慮？なんて普通言わないと思う。っていうより、
なんで日常会話でそんな言葉が出てくるわけ？

顔を顰めると、真紀の向こうにいるヘクターさんと目が合っ
てしまった。彼も同じことを考えたらしく、二人で無言で苦笑する。

タクはわたしたちのやや後ろにいて、さつきからほとんど会話に
加わらないけど聞いていないわけじゃないようで、わたしたちの様
子に小さく口元をほころばせた。

目敏く、真紀が見つける。

『あーもう、タクにまで笑われたあ。ルイスのせいだからね！』

『それは君の言動が原因であって、私のせいではないだろう』

うん、その原因の素（もと）を作ってるのは確実にルイスなんだ
けど、面白いからわたしは黙っていた。それに二人の遣り取りを聞
いていると、気がまぎれる。わたしを間に挟んでいるのが、ちよっ
と困りものだけだ。

『ルイスって絶対に、あたしのこと馬鹿だと思ってるでしょ？』

『頭の働きが悪いという意味で馬鹿だとは思わない。が、考えが足りないという意味では、どうかと思うときはある』

『それ、遠回しの厭味だよな？』

『直接的に言って欲しいなら言うけど？』

意地悪さ満点のルイスの笑顔。このシヨットだけならすぐく絵になるのに、状況的にまったく爽やかさが似合わないのが残念だ。真紀が、うう、と呻いた。

『ルイスの変態』

『……なぜここでそういう言葉が出てくるのかが、私は理解できないが？』

『変態だよ。だって、人いじめて喜んでるじゃん！』

『異界の？意外な人？から変態と言われたということは、それはつまり、私はものすごく常識的な人間という評価を受けたととっていいのかな？』

ひねくれてぐるぐるんに曲がった論旨を振りかざし、ルイスがなぜかわたしに顔を向ける。

『えーと』

『理緒子に振らないでよ、ルイス。異界の？意外な人？からの評価だから、変態中の変態ってことです』

鼻に皺を寄せ、真紀が語尾を厭味っぽく持ち上げる。仮にも魔法士の土団長という立場の彼への？変態？の連呼に、さすがにタクとヘクターさんは苦笑していた。

『君は本当に口が減らないな』

『こつちに来て磨かれたの』

『前からだろう。？意外な人？だし、不気味な曲は聴いているし』
『不気味じゃないよ。超有名なんだってば』

『あの曲は私も好きになれませんか。神殿で歌っていらしたのは、とても美しい曲だったというのに』

ため息混じりに、ヘクターさんがルイスに同意する。

そういえば出発前、王城内の神殿に彷徨いついた真紀は、異界の

歌を歌っていたところをヘクターさんに保護してもらったんだ。

『真紀ちゃん、神殿でなに歌ってたの？』

『ん？ アメイジング・グレイスだけど』

意外なことに、有名な賛美歌だ。わたしの通っている学校はミッシヨン系なので、礼拝で歌ったりするから知っている。

異界の英語の曲名がどう翻訳されたのかは分からないけど、ルイスたちもちょっと驚いた顔をしていた。

『それって、日本語？』

『英語。部活でやった楽譜が英詞だったんだよ。全部力ナ振って丸覚え』

『歌ってみせてよ』

『ここで？ やだよー』

真紀がスツールから下ろした足をじたばたさせる。

『お上手でしたよ？』

『ヘクターが聞いたというのに、私には聞かせてくれないのか？』
三方から追い詰められ、真紀は後ろのタクに救いを求めた。

『たく〜』

『歌ってみればいい。エンジン音がうるさいから、少々失敗してもごまかせるぞ？』

『あ、そっか』

適当なタクの勧めに、真紀は単純にぼんと手を打った。

『でも、ここじゃアメイジング・グレイスって雰囲気じゃないしなあ。別の曲でもいい？』

『うん』

『あの雄叫びじゃなければ、なんでも』

ルイスの余計な一言に真紀はやや頬を膨らませたが、何も言わずスツールから降りた。恥ずかしいのか、こちらへやや背を向けるようにして、窓に直る。

ちよつとだけね、と前置きし、真紀はすつと息を吸い込んだ。

直前まで、ふざけて変な歌を歌わなきゃいいけど、なんて考えを

巡らせていたわたしは、その横顔を見てはっとした。落ち着いた、祈るようなどこか静かな表情。

集中してるんだ。

思った瞬間、真紀の口から歌が流れた。

ゆったりとした旋律。英語の曲だ。抑揚のあるきれいな発音の歌詞が、途切れ途切れにわたしの耳に意味をもって飛び込んでくる。

これは……。

? Over the Rainbow?。ミュージカルのオズの魔法使いで歌われた曲だ。だけど、そんなことはわたしの頭ではすぐに思いつかなくて、息を詰めてその歌に耳を傾けていた。

真紀が一体どういう想いで、この曲を選んだのかは分からない。

それでも、その掠れたような低い囁きと、いとおしむように紡がれるサビの歌詞はわたしに深く染みとおってきて、体の芯が痛くなるほどの郷愁をかき立てた。

窓の向こうに広がる青空。

雨に飢えているこの世界に、虹はあるのだろうか。

もし虹を見ることができたら、その向こうには、わたしたちの世界が存在してくれるのだろうか。

そして、もし本気で帰りたいと願いをかけたら 元の世界に帰れる日がくるのだろうか。

どうしようもない空想が、歌によって解き放たれた元の世界への恋しさと相俟って、途方もなく膨らんでいく。

お話の中でドロシーはオズの国に迷い込んで、いろんな人と出会って最後、家へと帰っていく。彼女にとって楽しい場所じゃなかったはずなのに、それでも家に帰りたいと思うものかと、小さい頃は不思議だった。

ドロシーの気持ちは今だに分からない。だけど、ひとつだけ確かに分かったことがある。それは、今まで気付かなかった?家?という意識が、自分の中の深いところに根を張っているという事実だ。

わたしの?家?は、ここじゃないんだ。

この世界にはない。わたしが？家？と呼べる場所は、虹の彼方にあるかもしれない、遠い遠い異世界なのだ。

知らないうちに涙ぐんでいたわたしの肩に、ルイスがそっと手を置く。

ちよつとだけと言いながらも、いくつかのサビの繰り返しからなる短いその曲を、真紀は結局最後まで歌いきった。虹の彼方にある国への夢　信じれば夢は叶うと、強く後押しして。

澄んだ高音が、空気に溶け、青空の向こうへと消えていく。

飛行船の唸り声も止んだような、不思議な静寂を感じさせるひとときだった。

歌い終えた真紀が、照れたようにこちらに向き直り、ぎょつとした顔になった。

「り、りおこ?!」

慌ててわたしの左手をとる。わたしはマスカラが滲まないように、指で目尻を押さえた。

『うっ、真紀ちゃん、うますぎ。泣いちゃったよお』

ふざけて言うと、真紀が恥ずかしそうに笑う。

『泣くような曲じゃないと思うけど、あ、ありがとう』

『今のはなんと言っ曲だ?』

『オーバー・ザ・レインボー』

『虹の彼方に、か。いい曲だ』

おや、魔法の指環は英語も自動変換してくれるみたいだ。

へー便利ー。

新しい発見に、わたしの涙もすると引っ込む。その隙にポケットからハンカチを取り出そうとすると、中で引っかかって、入っていた携帯が一緒に出てきてしまった。

元へ戻しかけて、わたしは手を止めた。ハンカチで目の端を気をつけて拭き、手の平におさまるその機械を開いてみる。節約のために切っていた暗い画面の向こうで、少しづーたれたわたしが覗き込んでいた。

あー、わたしってぶっさいく。

憂鬱になって、ますますブサイクになるわたしの頬に、ぶにっと固いものが当たる。真紀の指だ。

『りお、ホームシック？』

『……』

わたしは無言で真紀を下から睨んだ。いつもこうやってふざけて、深刻な人の悩みとか考えとかをぶち壊そうとするんだから。

わたしは素早く指を操作して携帯を立ち上げ、ツールを開いた。

『真紀ちゃん』

『ん？』

まだわたしのほっぺに指を押し当てて、真紀が首を傾げる。わたしはむっつりしたまま、手にした白い機械を彼女に向けた。

『ドアップ激写』

『ええっ』

真紀が目を見開いた瞬間、わたしの指が決定ボタンを押す。パシヤリという音と共に、わたしは胸のすくような彼女のお間抜け顔を手の平のツールに納めた。

『ちよつと理緒子、そんなの保存しないでよ！』

『やだよー。落ち込んだら、これ見て元気出そうつと』

『理緒子、ほんと携帯持つと人格変わるよね』

『文句言わないのー。ほら、次はみんな撮るよ〜』

無理矢理明るい声を出しながら、わたしは真紀とルイスの腕を引っ張ると、タクとヘクターさんを並べて、1足す1は？なんて言いながら再び携帯のシャッターを切る。

『じゃ、今度はタクとルイスとヘクターさんの三人ね』

何をしているのだからさっぱり分からない様子の彼らを巻き込み、嫌がる真紀を連れ回して、わたしは携帯が使えなくなるまで写真を撮り続けた。シャッターを押すたびに、感傷を封じ込めるように。

この旅は、彼らの世界を救うために水門の鍵を探す旅。

だけど、わたしにとっては違う。この旅は、わたしの虹の向こう

を探す旅なんだ。

虹の向こうのわたしの未来を。

その先には、何もないかもしれない。虹だって、出ないかもしれない。

それでも、信じることは止めたくない。止められない。

それが、わたしがわたし自身にできる唯一のことだから。

飛行船が変わらない唸りをたて、青空を裂いて進む。あくまでも穏やかな外の景色を一瞥し、わたしは、もう二度と立ち上がらない真っ暗な画面を手の中で閉じた。

蓋をする一瞬、鏡となった画面が映したわたしの顔は、かすかに笑っていた。

13 - 6 (後書き)

*英詞翻訳も著作権に関わるらしく(無知ですみません;)、削除いたしました(2011/7/31)。よろしく願います。

次章は真紀です。久しぶりだ〜。

第14章 鋼の街 マキの役割

1

鉦都ツークスに着いたのは、日も沈んだ夜だった。

さすがに大きな飛行船は、着陸するときに結構衝撃があったけど、すぐに収まった。窓の向こうの暗闇からちらちらと並んだ明かりが見えて、大地にいるんだと実感する。

着陸してもいろいろと手筈があるようで、あたしたちはまだ客室に取り残されたままだ。ドアから覗くとルイスもヘクターさんも忙しそうにしている、邪魔になると判断したあたしは、部屋のソファベッドに戻って腰掛けた。

楽な旅のはずだったのに、体を動かしていないせいか、やけにだるい。それに飛行船の発動機の音と振動で食欲が湧かず、昼食もろくに採らなかつたから、余計に胃がむかむかした。

車酔いしやすい理緒子は、後半ほとんど寝ていたけど、起きた今も調子が良くなさそうだ。顔から血の気がない。

「だいじょうぶ？」

「ん、ちよつとしんどい」

横に座った理緒子が、あたしの肩にことんと頭をくっつけてきた。うう、かわいい。

タクのことがあって、一緒に泣いたり過去話をしたりしたせいか、ちよつとだけ理緒子は甘えてくるようになった。まあ今までのことを考えると、あたしはあまりにも頼りないから、なかなか信頼してもらえなくても仕方ないけど、こうやって甘えてくれると、心を開いてもらえてるのかと思つて嬉しくなる。

あたしも理緒子のほうへ頭をくっつけた。そうやって二人で和んでいると、扉を叩いてルイスが顔を出す。

『二人とも出ておいで。降りるぞ』

『分かった』

声を返し、あたしと理緒子は、すでにまとめていた荷物を持って外へ出た。出た途端、冷たい風が足元を吹き抜ける。

来る時に上つてきた床の入り口が再び開けられ、勢いよく外気が吹き込んでいたのだ。ズボンを履いていてよかった。

ルイスに荷物を渡し、先に地面に着いたタクやヘクターさんたちに見守られながら、理緒子、あたしの順で後ろ向きに梯子を降りる。風が梯子を揺らすので少しどきどきしたけど、明かりが足元を照らすから、そこまで危ない感じはしない。と思つたら、

「きやつ」

最後の一段を踏み外して、理緒子が梯子から手を放す。よろめいた体を、タクの両腕ががっちり受け止めた。

「あ……ありがとう」

礼を言う理緒子にタクが何か言っているけど、指環がないから聞きとれない。体格の良いタクの体にすっぽり収まってしまふ理緒子の姿を見ながら、あたしの胸は小さく痛んだ。

理緒子、今笑ってるんだろうな。

陰になって見えないけど、そう直感する。理緒子がタクを好きなのは前からで、あの鞆の一件のせいで嫌いになったかといえば、そうじゃなかった。むしろ、理緒子は不思議なくらい冷静に自分の気持ちと向き合っているように、あたしには見えた。

あんなことされたのに、許せちゃうんだ。

あたしだったら幻滅しそうだけど、理緒子みたいな恋愛をしたことがないから否定をする気にはなれない。

いろいろ考えていると、頭上からルイスが声を掛けてきた。片手を伸ばし、梯子を握るあたしの指先に触れる。

『マキ、恐くなったのか？』

どうやら梯子の途中でしがみついているあたしが、降りるのを恐がっていると思つたらしい。下を見ると、地上から全員がこちらを仰いで、心配そうな視線を送っている。

「うっん、大丈夫」

あたしは笑ってみせ、早い調子で階段を降りた。あたしが地面に着くと、作業員のような格好をした男の人たちが梯子を駆け上がり、あたしと理緒子の荷物を運び出し、最後にやっとルイスが降りる。長い金髪と外套をひるがえして立つ姿は、魔法士の服装じゃないのにとても様になっていた。

「xxxx」

偉そうな態度で口早に、作業服の人たちに何か言っている。飛行船が降りた場所はだだっぴろい広場のようなところで、魔法光らしき丸い光の玉が直線の列を作っている。建物は見当たらない。出発先の王城のように、どこかの敷地の一部ではなくて、敷地の外れとといった雰囲気だ。

飛行船から少し離れたところに、コマ二頭立てのやや大きめの馬車があった。その馬車の後ろにあたしたちの荷物が積まれ、紐で括りつけられる。

魔法光の淡い明かりしかない薄闇に目が慣れてくると、作業服姿の人の他に鎧をつけた人も結構いて、あたしたちはかなりの人数に囲まれていることが分かった。

『リオコ、マキ。馬車にお乗りください。今夜の宿泊先までお連れいたします』

ヘクターさんに話しかけられ、あたしは慌てて理緒子の手をとって言葉を聞きとった。

手を繋いだまま馬車に乗り込み、あたしの胸にふと疑問がよぎる。これって、四人乗りだよな？

ふり向くと、案の定タクが御者台のほうへ向かいかけ、ヘクターさんに止められていた。

『何をしていますのです。あなたは護衛でしょう。戻りなさい』

『しかし、ヒジリ・アーダをそのような場所に座らせるわけには…』

『おのれの役目を忘れたのですか、タキトウス・ムシャザ。あなた

今は將軍でもなければ、ミア＝ヴェール殿下の近衛でもないのです。われわれと　リオコさまが賭けた信頼を裏切ってはなりません」

『……承知いたしました』

タクが右腕を前、左腕を後ろに回して一礼する。ヘクターさんはそれに軽く頷いただけで、さつさと御者台に乗り込んでしまったようだ。

？リオコさま？か……。

この国は身分制があると分かっていたつもりだけど、みんな親しげにしてくれるから時々それぞれの立場というものを忘れてしまっていた。だけど、ヘクターさんは国中の神官の頂点に立つ人で、現時点では一番偉い人。ルイスは特異な力を持つ指折りの魔法士。タクは功績こそすごいけど、一地方の騎士にすぎない。

そして理緒子は、そんな彼らに守られている立場だ。あたしもおまけで若干近い立場にいることはいるけど、表立つのは理緒子一人ぞくり、とあたしの心を厭な感覚が走り抜ける。

ルイスとタクが護衛ということだけでなく、ツークスまでヘクターさんが着いてきたという事実が、急に禍々しいことの先触れのような気がしてきたのだ。

それに、さつきのタクとの会話。

タクは、理緒子が好きで護衛してたんじゃないの？

あたしがドア側に座っていたので、手をつないでいても、理緒子にあの会話は聞こえていないはずだ。声も押し殺したように低かった。

気付かないふりをしたほうがいいのかな。

一生懸命タクを許して信じようとしている理緒子に、証拠もない憶測なんて伝えられない。

それに正直、知らないで済むなら、のほほんとした馬鹿な子供のままでいたほうが楽だ。

考えているうちに、あたしたちの前の席にルイスとタクが乗り込

んできて、馬車はがたごと進みだした。相変わらず気遣いやさんの理緒子が場をつなくようにルイス相手に話をしていたけど、体調がよくないせいかな、あまり会話も弾まない。

『泊まるどころって、どれくらいかかるの？』

『たいしてかからない。五分か十分ほどで着くはずだ』

『なんだ。もつと遠いのかと思った』

『移動ばかりで疲れただろう。すまない』

『ううん。さすがにちよつとお腹減ったけど』

『……それより、あたしは眠いよおー』

情けない声で訴えると、三人が少し笑った。

『船の中ではしゃぎすぎたんだろう』

『はしゃいでないもん。こんなにおしとやかなのに、なんでそんなこと言うかな』

あたしは心の淵に押し寄せる暗い波を追い払うように、明るく喋った。すぐに顔に出る自分をなんとかごまかそうと、眠たいふりをして理緒子の腕に腕をからめ、顔を押しつける。

子どもだな、とルイスの笑う声が聞こえる。理緒子の手が、やわらかく髪に触れた。

『着いたら起こしてあげるよ』

どうしてなんだろう、知られたくないのに、どこかで悩んでいる自分を気付いて欲しいなんて考えてしまうのは。

身勝手だな、あたし。

混乱した思考のまま、あたしは自分の言葉通り、ほんの一瞬の短い悪夢のような眠りに就いた。

第14章 鋼の街 マキの役割（後書き）

？ヒジリ・アーダ？の説明は次回で。

馬車が着いたのは、石造りの三階建てくらいの大きさで、城というより館（やかた）という印象の建物の門の前だ。あたしの右肩では、『起こすよ』なんて言っていたわりに、理緒子がすっかり熟睡している。

到着を知らせるのに起こそうとしたあたしを、タクが身振りですました。

『いや、まだ大丈夫だ。もう少し眠らせておくといい』

辺りが薄暗いせいか、理緒子の寝顔は疲れきってみえる。あたしは素直に、上げかけた肩を元に戻した。

人の会話する声が聞こえたので、あまり体を動かさないように、ドアのほうに耳だけをそばだてる。先に馬車を降りたヘクターさんが知らない人と会話していた。

内容はよく分からないけど、どうやらヘクターさんが怒っているらしい。内容が分からないのは指環の力不足なわけじゃなく、言い回しが古風すぎてさっぱりなのだ。

『 どういうことですか？』

『 は……誠に申し訳もございません』

『 先般カシユゲート魔法士より内報があったはず。いくらお忍びの御来駕（ごらいが）とはいえ、治者の不参とは申し開きにすらなりません。若いのに随分と厚い面（つら）の皮をなさっているご様子だ』

『 何卒ご容赦ください、ヒジリ・アーダ』

『 謝罪は無用。カイエ・エルタダ・カーツォックセア本人の口から聞かぬ限りは、如何な言葉もただの讒言（ざんげん）にすぎぬと、こなたより申し伝えるがよいでしょう』

ソロンさん、魔法かけるんなら、持ち主の理解力に合わせた翻訳機能もオプションでつけといてよお。

心の中でこっそり愚痴を吐く。

黄色い頭巾を被った水戸のおじいちゃんは嫌いじゃないけど、生で時代劇並みの台詞を聞くと呪文みたいだ。だけどまあ、意味はなんとなく分からないでもない。

あたしたちというか、？異界の乙女？と神官長さまを出迎えるはずだった偉い人が来ていなくて、ヘクターさんはご立腹、代理の人は真っ青というやつなのだろう。

ちなみに？ヒジリ・アーダ？というのは、神官長さまに対する尊称だ。アル王子が？ミア・ヴェール？と呼ばれるのと一緒に、ヘクターさんは正式には？ヒジリ・アーダ・ヤーマトウーロ？と呼ばれる。

これが普通の神官だと、苗字の上に？ヒジリ？だけがつくのだ。勿論これも、お勉強で習ったことのひとつだ。

間違っても？ヘクターさん？なんて呼んじゃいけない、というのを本人の口から聞くのは、結構辛い。今さらだから別にいいと言っていたけど、たぶん異界の人間だから許されたんだと思う。

そうじゃないといけないような張り詰めた空気が、今まさに馬車の壁の向こうから、ぴりぴりと伝わってくる。

ああ、もうさっさと終わらないかな。

肩に理緒子の寝息を感じながら、あたしは苛立ちをお腹の底に沈めようと努力した。

飛行船の次は馬車の中で、気分はずっと箱詰めだ。一分だって早く、広いベッドに寝転がって開放されたい。理緒子だってこれだけ疲れているんだから、横になりたいはずだ。

まだ旅の始まりなのにこんなところでつまずくなんて、とあたしは思い、半分瞼を閉じながら、まだ続いている不毛な会話の意味をぼんやりと考えた。

話題の主は、名前にカーゾオとつく以上、貴族だ。ツークセアと

いう音と状況からして、ここツークスの領主とみるのが正しいだろう。

飛行船がすんなり着陸できたのだから、あらかじめ連絡がいつていたのは間違いない。それでも領主が出てこないということは。

そういえばツークスって……。

あたしの頭の中を、付け焼刃で叩き込んだ異世界の歴史や基本情報、目まぐるしく駆け巡る。

ツークスは鉦都。南北に走る豊かな鉦脈が露出していて、古代から精錬の技術を発展させてきた鉦業都市だ。豊かさはそれだけでなく、かつてセドウ湖と繋がって細長い海だった部分とその周辺に広大な平野を抱き、コメイの生産量は国内有数だという。

余談だけど、このコメイって、実はお米じゃなかった。ヘクターさんの図鑑で確認したところによると豆っぽい植物で、房の中に種のような実がぎっしり詰まっていたのだ。さすが異世界。

話を戻すと この、都市として規模も大きく、さらに昔は天都だったこともあるツークスは常々、中部にあるキヨウが天都となつたことで、聖地タキアマグフォーラがないがしろにされていると主張しているようなのだ。ぶっちゃけ、自分のほうが天都にふさわしいんじゃないかと言っているわけだ。

王様は歴史ある都市の主張を軽々しく扱っわけにもいかず、のらりくらりとやり過ごしているそうだが、ツークス側はちゃっかり今の領主のお姉さんを第三妃として送ったりして、やる気満々だ。

幸い強引な前領主は早く亡くなって、跡を継いだ息子は穏やかな性格らしいけど、これがまだ十七歳。領内の古株連中を押さえ込むには、てんで力不足なのだ。

そんな状況の中、本日あたしたちがやって来た。大神官ヘクトヴィーンを伴った異界の乙女の登場は、ツークス領主にとって降つて湧いた災難に違いない。踏み絵みたいなものだ。

丁重に扱えば王になびいたと内側から非難され、素気無くすれば王に楯突いたと非難される。

どちらにしても非難されるのであれば、ということでも辿り着いたのが、おそらくこの態度。

つまり、出入りは認めるが歓迎はしない、ということ。

だからか……。

ここまで考えれば、ヘクターさんが怒っているのもパフォーマンスだと気がつく。

二重底の腹をした神官長さまは、ここで機嫌を損ねたふりを見せて、あわよくばツークスに貸しを作っておこうという魂胆に違いない。

あたしはなんだか気分が重くなって、周りに分らないよう溜息を洩らす。寝入っていた理緒子の頭が、がくんと垂れた。

あたしはもぞもぞと体を動かして、その頭をそつと元の位置に戻した。理緒子の起きる気配はない。

薄目を開けて前の席を窺うと、二人ともヘクターさんの魂胆を知っているのか、苛立つ様子はなかった。ルイスは窓枠に肘をついてぼんやり外を眺めているし、タクはうつむいて腕を組み、置物のようじつとしている。

その視線が、ドアのほうへちらつと走った。それを見て、あたしは静かに口を開く。

『二人にお願いがあるんだけど』

あたしが眠っていると思っただろう、二人がやや身じろいでこちらを見た。

『理緒子が寝てるから、静かに聞いて欲しいの。彼女の耳には入れたくないし』

黙って、二人が頷く。

『ヘクターさんが今何をしているのか、だいたい考えてみたの。当てずっぽうだけど、交渉してるんでしょ？ だったらそれ、もう止めてもらいたいんだ』

『……』

『この国の政治事情に巻き込まれるのは仕方ないとは思うけど、で

も嫌なんだよ。あたしたち、水門の鍵を探しに行くので精一杯だから。

飛行船なんて乗っちゃったから、お忍びなんていうのは今さら無理だと思っけど、わざわざ夜にここに着いたんでしょ？ だったら、このまま普通に宿に泊まって旅を続けたい。

ヘクターさんにそう言ってもらえないかな？ 領主の人に会う必要はありませんって。あたしたちのことがあまり公（おおやけ）にできないんなら、ヘクターさんも普通にツークスに来たようにしてくれないと、お互いに困ると思うんだ。

あたしたちがいることで揉めてるんだったら、あたしたちの意見も聞いて欲しい。あたしたちが今必要としているのは、誰にも邪魔されずに早く休むことだけだよ」

二人の瞳がそれぞれ丸くなり、自然とその行き先が重なり合った。タクが頷く。

「分かった、言って来よう」

天井が低いので背を屈めたまま、ほとんど音を立てず、タクが馬車を出て行く。外から入り込んだ夜気が、生暖かくこもった熱をミントのように清々しく冷やした。最大の重量を失って、木製の車体がわずかに揺れる。

その振動に、あたしは理緒子の寝顔を確認し、つないで汗ばんだ手をズボンで拭いて握り直した。顔を上げると、ルイスと目が合う。「忘れていたよ。君はいろいろと聡いんだった」

「なにそれ」

「……いや。気を遣わせてすまない」

ルイスの謝罪に、あたしは口元だけで笑った。彼がこう言うということは、あたしの推理が八割がた当たっていたということだ。ミステリ好きな甲斐があったってもんだよ。

ふう、ともう一度息を吐く。すごく疲れた。割合安全な国で、親や社会の庇護の下ぬくぬくと暮らしてきたあたしにとって、自分で判断して動き続けるのは精神的にも肉体的にも結構な負担だ。

あたしは、下りてくる臉をまばたきでこらえ、気になっていた疑問を口に乘せる。

『ねえ、ルイス。あたしたちを嫌ってる人って、どんな人たち？』

『気にしなくてもいい。私たちが守る』

『それは知ってる。でも、つきつきりってわけにはいかないじゃない。教えてよ。嫌ってる人たちがいるんなら、狙うのは旅の間ですよ？ 知っておきたいの』

あたしの頑固さを知っているルイスは、観念したように額に指先を当て、それから目を開けた。寝ている理緒子の様子を気にしつつ、低い声で話し出す。

『クガイとは何者が、ヘクターから聞いたな？』

『うん』

『クガイは本来単なる役職名であり、今クガイを名乗っている連中も、元を正せば貴族の一派に過ぎない。このクガイの中核を成すのが、フージェ・ハランという一族だ。フージェ一族の勢力は絶大で、この血を受け継がないクガイはいないが、彼らの血を受け継ぐものはクガイのみにとどまらない。今の王の母君も、この血族にあたる。なんだか悪い予感が的中したようだ。本当に宮廷の泥沼メロドラマにどっぷり浸かってしまっている。』

あのふぎけた白塗りメイクは、馬鹿な格好をしても偉いんだという証なのかもしれない。裸の王様の正体を暴く子どもは、マフォーランドにはいなかったらろう、きっと。

『マフォーランドの統治は王を頂点とし、祭祀を司る神官と、政務を司る政官の二つの柱で成り立っている。神官の長はもちろんヘクターだが、政官の長である太政大臣の地位は、代々フージェ一族が握ってきていた。ところが、王はこれを覆した。カーゾオの下級貴族である男を抜擢したんだ』

そういえばヘクターさんが、王様は実力主義だって言っていたな。好きこのんで危ない橋を渡らなくてもいいんじゃない、と思うのは、あたしが生温く育ったせいだろうか。

『カトウア大臣は早熟の天才と呼ばれた方で、政官としての才能も実力も申し分ない。だが、このことで王は貴族最大の一族を敵に回してしまった。』

勿論この一件だけが原因ではないのだが、フージェー族は大臣のみならず、王もろともその座から引き摺り下ろそうと画策している。君たちは、格好の標的だ』

とっても嬉しくない注目の的だ。そして、やっぱり気がついてしまふ。

『ひよつとしてツークスの領主も、そのフーナントカの一族なの？』
ルイスがちよつとだけ、引き締めていた唇をほころばせる。

『だから君は聡いというんだ』

『からかわないで、褒めるんならきちんと褒めてよ』

『最大限に褒めているよ。実は今言ったことは、ツークスを出た後で時間を見つけて、落ち着いたところで話そうと思っていたんだ。』

まさか、こんな場所で話すことになるとは思わなかった』

『そっか』

『リオコにも聞いておいてもらいたい。旅に連れ出しておいて、今さら何をと言われるかもしれないが、君たちには状況を正しく知ってもらっておきたい。恐がらせてしまっかな』

あたしは無言で、首を横に振った。

ルイスが手を伸ばし、あたしと理緒子の髪をそつと撫でる。離れたと思つたら、するり、ともう一度あたしの耳元の髪に、ルイスの指がからんだ。

『君たちは、私を守る。いいね？ 君のこの髪の毛のひとすじでさえ 傷つけることは、私が絶対にさせない』

低い囁きで告げられた言葉は、どこか深い響きを帯びて、あたしの胸がばくんと跳ねた。

長い指にたわめられ、あたしの硬い髪が戻ろうと弾んで、さらさらと隙間からこぼれ落ちる。滑るように離れていった指先が、ほんのわずかに触れただけなのに、あたしの耳たぶと頬はこれ以上ない

くらい熱く火照った。

ごまかすように、理緒子のほうにうつむけた顔を寄せる。さつきまで頭を占めていた現実が、熱と一緒にどこかへ吹き飛んでしまっていた。

この暗がりや表情を消してくれているはずだと思いつつも、あたしはしばらくそのまま顔をあげることができなかった。

周囲を包む夜の空気が、なぜかじつとりと汗に濡れたように暑く、湿っぽく感じられた。

14-2 (後書き)

わく説明ばかり…うう、すみませぬ。

3

結果として、あたしたちはツークス領主の館ではなく、別の（と思われる）ところに泊まった。なんで不確定かというと、さすが南の要である大都市を治める領主の敷地はアクイナスにも増して広大なようで、移動の間中どことなく張り詰めた雰囲気、夜の景色からずつと漂ってきていたからだ。

それでも木立に囲まれた一軒家は静かで落ち着いたたたずまいで、一泊するにはもったいないくらいの家だった。看板もなかったから、誰かの持ち家なのかもしれない。

だけど、そんなことどうだっていいくらい、あたしと理緒子は疲れきっていた。馬車を降りても意識が朦朧として、飛行船からここまで連れて来てくれた御者の若い男の人にお礼を言うのがやっとの有様だった。

上品な女の人に案内され、食堂らしき部屋でほんの少しパニトスーブを頂いた後は、湯浴みもそこそこにあたしたちはダブルベッドにひっくり返った。

そして、あれだけ頭を悩ませていたはずなのに、夢も観ずに朝までぐっすり眠った。

あたしの寝起きは、あまりよくない。

翌朝、いつまでもふわふわ布団と仲良くしているあたしを、理緒子が引き剥がすようにして叩き起こした。半分開けた目の向こうですっかり身支度を整えた理緒子がむくれ顔で立っている。その背後から差し込む、ぎんぎんの太陽光線。

「起きてっ、真紀ちゃん！」

「うっ、ご勘弁を、お代官様あ」

「ふざけてないの。遅刻しても知らないから」

あたしは観念して、重い体を引きずるように起き上がった。旅に出ることを決意した自分を恨みつつ、顔を洗って、二着しかない旅の服に着替える。

旅の間へビロテだな、これは。

妙なことを考えながら、だぼつとした上着を滑りのいい腰帯で縛り、最後に髪に櫛（くし）を通す。寝起きが悪いわりに、あたしの支度は時間がかからない。

「じゃ、いこか」

「うん」

自然と理緒子と手を繋いで、あたしたちは部屋の外に出た。廊下には、いつからそこにいたのか、三人の侍女が頭を軽く下げて並んで立っている。

『お、おはようございます』

『おはようございます。よくお休みいただけましたでしょうか？』

笑顔で聞いてきたのは、昨夜案内をしてくれた女の人だ。

『はい、ありがとうございます』

『お食事のご支度ができております。どうぞこちらへ』

女の人に案内され、あたしたちは廊下を歩いて部屋へと案内された。規模からするとルイスの家より小さめだけど、床も壁も落ち着いた色味と細かい幾何学模様で埋め尽くされていて、豪華さはこちらが勝っている。

そんなことを思ううちに、昨夜夕食を頂いた広間に着いた。中央に薄紅色のテーブルクロスを引いた長机があり、同じく旅の服に身を包んだルイスとタク、いつもの神官の格好をしたヘクターさんが数人の知らない人と話していた。ヘクターさんは机の右の一番端、ルイスとタクは机の中程に向かい合っていた。あたしたちを見つめるや、立ち上がる。

『おはようございます』

『おはようございます。すみません、遅れて』

口々に言つ理緒子とあたしに、右手を胸に当てヘクターさんが軽く頭を下げる。さらに、と銀色の光沢を放つ黒髪がテーブルの上で揺れた。

『おはようございます、リオコ、マキ。ごゆっくりお休みになられましたか?』

『うん。おかげで今朝はおなかぺこぺこ』

『朝食はしっかりご用意させていますよ』

会話をしながら、なぜだかヘクターさんは、さっきまで話をしていた横の人物を紹介しようとしなない。

したくない理由でもあるんだろうか、と考えて、数人の一団の中心に立つその人を見た。豪華に刺繍のついた上着と、たつぷりと布地をとったズボンを履いている。

痩せ型の中背で、短い黒髪を前髪ごと立て、丸い眼鏡。あたしたちより年上でルイスよりは下に見える彼は、明らかにただの人ではない。あんまり見るのも失礼かと視線を外そうとした時、理緒子が小さく呟いた。

『……あの人、御者の人?』

御者というと、ゆうべここまで連れて来てくれた馬車の運転手の陽気なお兄さんのことか。暗かったので、声は覚えていても顔の造作にいまいち自信のなかつたあたしは、すぐに返事ができない。

代わりに、その彼がすごく嬉しそうな笑顔になって、こちらへとやってくる。そして、初めましてもなく、いきなり空いている理緒子の右手を両手にとつた。

『やあ、覚えてくれていて嬉しいなあ。僕と君は、赤い糸で結ばれてるのかな?』

なんだこの軽いノリは。

反射的にあたしは顔を顰め、理緒子は顔を真っ赤にする。ヘクターさんの声が鋭く飛んだ。

『カイエ! 無礼ですよ』

『いいじゃないですか。あくまでこれは非公式。だったら僕は、僕

個人として知り合いになりたいんだよね』

理緒子の手を握った眼鏡くんは、にやにやと軽薄な言葉を吐き続ける。

『君、本当にかわいいね。旅が終わったら、僕のお嫁さんにならない？』

『あ、あの……』

『照れちゃって、かわいいなあ』

『ちよつとあんた、その手離しなさいよ！』

隣から睨みつけるあたしに、眼鏡くんはさも厭そうな視線をくれた。

『おまえに言ってるんじゃない。使用人は黙ってる』

こいつ最悪だ。

ぶるぶると左手を握り拳にするが、あたしは忍耐を総動員してそれを抑える。相手は貴族だ。撲つたらまずい。平手なら いや罵倒するくらいならいいかと考えていると、軽く背中をつつかれた。ふり向くと、いつの間にか背後に立っていたルイスが何かを差し出している。

あ。

あたしは理緒子から手を外し、すっかり存在を忘れていたそれを受け取るや、すばやく親指を走らせた。ヘッドフォンのコードを抜き、まだしつこく理緒子に言い寄っている馬鹿男に向けて、手の平サイズのその物体をかざす。

爽やかな朝の空気を跡形もなくかき消す、大音量のシンセサイザー音。

この世界では絶対に耳にすることのないリズムミカルな機械の和音とそれに重なる激しいドラムが、あたしの手から鳴り響いた。

眼鏡くんがぱつと理緒子の手を離し、すごい勢いで後退る。あたしはがなりたてるオーディオをかざしたまま、数歩追いかけた。

危険を察知したのか、先程一緒にいた従者っぽい人が、あたしと眼鏡くんの間に立ちはだかった。強面（こわもて）の髭のおじさん

従者は、だが、あたしの手から放たれるのが音楽のみということに気付いて、戸惑い顔になる。

不審そうに発せられた問いは、聞きとれないけど、意味するところは分かった。あたしは日本語で威勢よく言い放つ。

「天下のヴァン・ヘイレンだよ。軽々しくこんなところで女口説くな、このチャラ男！」

ちょうどいいところで、ギターソロ。耳を押さえて、眼鏡くんが顔を歪める。

一足先にハードロックの洗礼を受けたヘクターさんも、机の向こうで目を真ん丸にしていた。

エディの早弾きの前にひざまずくがいいさ！

ちよっとおかしな人格の降りてきたあたしに、ルイスが近寄る。

あたしの腕を取って、

『昨日とは違うな』

「一応朝だから、ちよっとな変えてみた」

朝からガンズは、さすがに遠慮してみたんだ。ボーカルのハイトーンボイスが、寝起きの耳にはツライかと。

とはいえ、そんな気遣いなど通じるはずもなく、ルイスはまた勝手にあたしの手からプレイヤーを取り上げて、曲を途中で切った。

「いいところなのにー」

「でも、効果抜群だよ」

理緒子がそう言って、手を繋いできた。繋ぐ直前こっそり「ありがと」と囁いてくれたので、あたしの気分も多少良くなる。指環の魔法が、喚いている眼鏡くんの声を自動変換した。

『なんだ、あれはー！』

『落ち着いてください、閣下』

『……あんな曲ひとつでびびる男が、朝っぱらから初対面の女口説いてんなよ』

『なんだと、この男女。おまえを口説いたわけじゃない、引っ込んでろ』

『うつさいな。色魔退散!』

あたしは再びルイスからプレイヤーを取り戻し、再生させた。ついでに音量も二割ほどアップする。なんだか一度籬(たが)が外れたせいかな、あたしの言動は止め処がなかった。

『この曲聞いて性根入れ替える、この色魔!』

『貴様、僕が何者か知って』

『知らないわよ。非公式って言ったの、そっちじゃない』

『う……』

『だいたいねえ、初対面の女の子の手握って?お嫁さんにならない??なんて言う男、誰がいいと思うのよ。女の口説き方も初対面の人への挨拶も最悪。そんなやつ身分なんて知りたくもないよ』

まあ、察しはついているが。領主だつて言っても信じないぞ、コノヤロウ。

『偉そうな口を利くな、この男女。僕が声をかけた女性は、皆喜んでいたぞ!』

『そのうちのどれだけが、あんたを個人として見てたかっての。どうせ今まで、その身分に喜ぶ女の子ばかりかと遊んでたんでしょ』

『そ、そんなことはない。そうだよな、メーダ?』

『……閣下は、今は少し口を慎まれましたほうがよろしいかと』

同意を求められた従者のおじさんにまで、眼鏡くんは振られてしまった。あたしと理緒子は軽く嘖き出す。

『わ、笑うな!』

『笑うよ。それだけ威張れる身分があるんなら、こんなところで女口説いてないで、さっさと帰ってそれにふさわしい仕事してくれれば?』

『そこまで』

あたしと眼鏡くんの口論を、ルイスが遮った。あたしはまた取り上げられる前に、おとなしくプレイヤーの電源を落とす。いくら若くて礼儀知らずでも、身分のある人を人前で貶めつづけるほど、あたしの神経は凶太くない。

それに口論している間、周囲もなんだかあたしを後押ししてくれていることに、あたしは気付いていた。理緒子の脇に立つタクは腰の剣に手を当てる髭のおじさんに鋭い牽制を送っているし、ヘクターさんも神官長の顔に戻って、後ろには騒動を聞きつけた甲冑姿の兵士が続々と並びはじめている。

髭のおじさんも状況を察し、姿勢を改めると「失礼いたしました」と頭を下げ、その場から退る。タクがようやく剣から左手を外した。後ろにいたルイスが、半歩前に出てあたしと並ぶ。

「カイ工殿。われわれは身分を秘しての旅の途上です。こちらへお世話になったことはツークス領主に感謝申し上げますが、私の連れに対するあなたの失礼な態度は見過ごせません。ただ」

ルイスが言い差して、あたしの頭に手をぼんと置く。

「彼女も少々言葉が過ぎたようです。私が代わってお詫びいたします」

「ルイスが謝らなくてもいいよ。こういう人って、一度ガツンと言わないと一生わかんないと思うよ？」

「マキ」

「それに、なにさこの茶番。あたしたちが気に食わないなら、昨日のうちに言えばよかったじゃん。なにもこそ隠れて様子窺わなくてもさ」

あたしは腹立たしく、しゃがんで頭を抱えている眼鏡くんを睨んだ。

状況を総合するところだ。立場的に微妙だったツークス領主は、異界の乙女の旅を黙認する、という態度を表面上とりつつも、御者に姿を変えて様子を探りに来た。

ヘクターさんは当然それに気付いていて、怒っていたのは挨拶に来なかったことではなく、そういう探り方に対してだった、ということ。

ただツークスの立場も分からないわけではないので、それを尊重する形での怒り方だったから、余計混乱したのだ。とんだ化かし合

いだよ。

やってらんねー。

あたしの険悪な視線に、眼鏡くんはしゃがんだままうつむき、くつと肩を震わせた。

『いやあ、だって正体の分からない相手には慎重になるでしょ？』

言葉遣いは変わらず乱暴だったけど、あたしたちを見る彼の表情は、一都市を治める施政者そのものだった。

日頃平静なヘクターさんの声に、苛立ちが混ざった。

『言い訳にもなりませんよ、カイエ。どれだけ不躰なことをしたと思っっているのです』

『怒らないでくださいよ、師匠。僕だってこれでも、南方随一の都市を預かる領主ですからね。天都神殿の言い分を頭から信じるわけにはいかないでしょ』

ほがらかに、だが明らかに先程と違う口調で言い、眼鏡くんはよつと声をかけて立ち上がった。右手を胸に、左腕を脇へ広げ、足を引いて優雅に腰を折る。

『ご無礼をいたしました、お嬢様方。当館のおもてなしはお気に召していただけましたでしょうか』

『……あなたのせいで最悪』

『真紀ちゃんっ』

理緒子が咎めたけど、あたしのツークス領主に対する心証は、1ミリぼつちも改善されることはなかった。

『泊めてくれて、お世話になったことにはお礼を言うよ。ありがとう。だけど、あなたの態度はやっぱり失礼だよ。別に歓迎してくれとか仲良くしてくれってわけじゃないんだから、もうさっさと目の前から消えてくれる？ どうせあたしたちもこれから出て行くんだし、金輪際会うことないと思うし』

ツークス領主の口元に、微妙な笑みが漂った。さっきまで見せていたへらへらした笑いじゃない。人を小馬鹿にした、鋼（はがね）のような微笑だ。

『君、使用人にしては言いたいこというね。……ああ、ひよっとして昨日ムシャザに僕との会見を拒否するよう伝言したのは、君の考

えかな？』

眼鏡の向こうの目が、鋭さを帯びる。

『君、何者？』

『カイエ、詮索はしないとの約定を忘れたのですか』

『忘れていませんよ、師匠。ただ、そちらから与えられる情報がありに漠然としているので、こちらも余計な勘繰りをせざるを得ないということです。とはいえ、労力のわりにあまり成果は上がりませんでした』

平然と答え、領主は探るような視線を投げて、固く繋がれた理緒子の左手とあたしの右手の上で止めた。

『……まさか君も異界の人間？ ああ、それで』

『カイエ！』

がたり、とヘクターさんが椅子から跳ね上がるように立つ。

『落ち着いてくださいよ、師匠。最初から、個人的な興味だっけ言ってるじゃないですか』

『興味？』

『そう。やっぱり未知の世界から来た女の子って、興味があるじゃない？』

『やっぱり最低だ、こいつ。』

思いつきり呆れた顔をしたあたしに、領主はにっこりと害のない笑顔を向ける。

『あ、大丈夫。君は対象外だから』

『良かった。あたしもあんたは論外だわ』

『……容赦ないね、君』

『だったら自分の言動改めれば？ 正直胡散臭い』

『わー、そういう切り捨て方、男がひくよ？』

『あんたにいくらひかれようが、別に興味ない』

領主の笑顔に、さつきと同じ冷たいものが混じった。

『子どもだねえ。大きなことを言ったわりに全然事情が理解できていない。……ねえ。君たちは駒だっけこと、分かっけ？ 今は神

官長の後ろ盾があっても、君たちが旅から帰っても同じとは限らないんだよ。味方は多いほうがいいと思わないの？」

「あんたが味方にふさわしいと思うんなら、ヘクターさんが事情をきちんと話して紹介してくれるはずだもん。そうじゃないんなら、必要以上に関わるなってことだと思っから」

「へえ。じゃあ彼は、君たちが命を狙われているってことも話しているのかな？」

途端、あたしは血の気が引くのがわかった。繋いだ手を握ると、理緒子も力を込めてくる。

「……知ってる」

「りお？」

「ごめん、真紀ちゃん。昨日ルイスと話してたの、少し聞いちゃったんだ。途切れ途切れで、意味は全部分かったわけじゃないけど」

「……ふうん。神殿が用意した傀儡ってわけでもないんだ、君たち面白いね。少し突いたらぼろを見せるかと思っただけけど、そうでもないみたいだし」

「あんたやっぱり最低」

「これくらいのこと動揺するなら、異界の乙女失格だね。ここでさっさと帰るといい。僕は水門なんてどうだって構わないしね」

「帰れたらとっくに帰ってるよ！」

あたしは、自分でもびっくりするくらい大声で怒鳴った。悔しいのと腹立たしいので喉が震える。

「帰り方分かってたら、こんなとこいないで帰ってるよ！ なによ、偉そうに。ちよっと宿借りて土地通過するのに、なんでこんなふうにな言われなきゃいけないのよ……」

マキ、と囁いて、ルイスがあたしの肩を抱いてくる。あたしはうつむき、歯を食い縛って必死で涙を見せないように堪えた。

「ちよっと待って……君たち、本当に異界から来たのか？」

「そうだよ。真紀ちゃんの持ってたプレイヤーから聞こえた音楽、知らない音だったでしょう？」

いつになく強い口調で、理緒子が言い返す。呆然という色の混じった領主の声がくり返した。

『本当に……？ しかも二人もなんて』

『カイエ』

『師匠、どういうことです。僕は、王が水門を開けに行く旅人を選出したとしか聞いていない』

あれ？

やや蒼ざめて見えるツークス領主とは対照的に、あたしの頭は冷えていった。ぐすん、と鼻を鳴らし、訊いてみる。

『あたしたちのこと、なんだと思ってたの？』

『いや。クイ族あたりの娘を丸め込んで仕立てあげたのかと』

『くいぞく？』

『……北方に住まう少数民族だ。王国への併合がもつとも遅く、彼らは今も独自の文化と言語を有している』

ルイスの説明に、あたしは脱力した。つまり領主は、この水門探しが神殿と王の仕組んだ茶番だと思っていたわけだ。

『なんで本当の話が伝わっていないのさ？』

『お披露目もしたのに……』

不満そうに理緒子も呟く。ため息を洩らして、ルイスが教えた。

『あのお披露目は緘口令（かんこうれい）が施かれている。天都でもごく一部のものしか知らされていない』

『え？』

『でなければ、二人とも旅に出るところの状況ではなくなる。異界の乙女とは、それほど存在だ』

欠けていたパズルが、ひとつずつ嵌めこまれていくような感覚だ。あの天都での不自然な扱われ方　王様との謁見や翌日の夜宴などが急ピッチで進められたのは、早く水門を開けて欲しいだけじゃなく、異界の乙女の存在が知れ渡る前に旅に出す必要があったからなのだろう。

それに意地の悪い見方をすれば、王様が？異界の乙女？であると

して披露した娘が、本当に異界から来ている必要はない。王様がそう認めた、ということが大事なのだ。

真実がどうであるかじゃない。あのとき王が認めた瞬間に、あたしと理緒子は？異界の乙女？になってしまったのだ。

冷酷に光っていた黒曜石の瞳は、あの短い会見の間に、どれだけのものをあたしたちに見たのだろう。ふと、天都に残してきたアルのことが気にかかる。

『ルイス、アルは大丈夫かな？』

『……大丈夫だ。ヘクターがいる』

少し複雑な顔で、ルイスが答えた。彼の身を案じ、あたしの胸が痛む。帰ったら毒殺されていた、なんてことになったら、あたしは悔やんでも悔やみきれない。

あたしたちの話をじつと窺っていた領主が、顎に手をあてて二度三度頷いた。

『なるほどねえ……妙な守護者を選んだから、おかしいとは思っていたんだ』

『カイエ、あなたはいい加減』

『お説教はあとで聞きますよ、師匠。とりあえず今は、ご一行に朝餉を供したい。手配はその間に済ませておこう。メーダ』

またがらりと口調を変え、ツークス領主は先程の髭の従者を呼んで、いくつかの指示をした。

ころころと変わる彼の態度に、あたしたちは理解がついていかずに呆気にとられた。

『なんなの？』

『ええと、遅まきながら君たちを歓迎したい、と言っても信じてはくれないよね』

『当然』

『うーん、実は？本物の異界の乙女だった？っていうのは想定外だったから、僕もまだ決めかねているんだけど……面白そうだからね。協力するのでもいいかなあって』

『は？』

『だから、君たち自身が面白そうだからさ。これから何をして、どう振舞うか、興味があるんだよ。少なくとも、天都の駆け引きの道具ではなさそうだしね』

これは……あたしたちを信じてくれたってことなのかな。

納得できない気分で理緒子と顔を見合わせる。どう言ったものか考えていると、理緒子がにこりと彼に向かって笑いかけた。

『よく分かんないけど……でも、ありがとう』

領主の眼鏡の奥の目が見開かれ、何かに引き寄せられるように、またもつかつかと歩み寄ってきた。

『いや、どういたしまして。　っていうか、本当に君ってすごく僕のタイプなんだけど』

こいつ、やっぱりこっちが本性か。

一気にマイナス評価を下したあたしの心情など知らず、目をきらきらさせた領主は、さぶいぼが立ちそうな台詞を並べたてる。

『ねえリオコ。良かったら、旅なんて出ずにここに残っていかない？　僕、一生面倒をみるよ？』

『え、あ』

あたふたしている理緒子の手を、エロ領主が掴もうと手を伸ばす。瞬間、彼の顎先に何かが突き出された。思わず頭を仰げ反らせる

領主の首元に押し付けられているのは、タクの剣の柄の先だ。

『ちよ、ちよっと』

『異界の乙女と知ったうえで、これ以上近づくことは俺が許さない』抑揚のない低い声が恐い。領主の顔が引きつった。

『だけど、それじゃ僕の首は切れないよ？』

『顎の骨を砕くことは可能だ。一生喋れなくなるのをご所望なら、してみせても構わないが？』

おっと、タクの目が本気だ。散々理緒子に口説き文句を浴びせた彼に対して、相当怒りを溜め込んでいたに違いない。

それを気付かないのか、それともわざとか、領主のすべりのいい

口は止まることを知らなかった。

『ああ、でも顎の骨を砕かれても、僕の愛は抑えることができないよ？ リオコ、旅が辛いようならいつでも僕の胸に飛び込んで』

『成仏しろ、この色魔領主！』

あたしの手の中のオーディオプレイヤーが、再び唸りをあげたのは言うまでもない。

長い話し合いの後、用意してもらった豪華な朝食を堪能し、あたしたちは馬車でツークスを旅立つことにした。エロエロ領主は言動こそいまいち読めない人だったが、領主としては優秀らしく、彼の指示で手配された馬車やお弁当は、どれも一分の隙もなく完璧だった。

完璧といっても贅沢というわけではなく、？天都の神殿に召し上げられることになった地方貴族の娘が聖地を巡礼する？という仮の名目にふさわしいという意味で、だ。

聖地タキアマグフォーラに行くまではあと三都市ほど通過しなければならぬが、都市を通行するための許可証も発行してくれた。本来は天都が発行するもので充分なだけ、南の地方をまとめるツークスの許可があるとないとでは、地方都市の対応がまるつきり違うらしい。

『ツークスに縁故があるということでは理由は通るんじゃない？ あとは君たちの演技次第ね』

『演技力にはこれっぽっちも自信ないけど』

『うん、君には端（はな）から求めてないから。せいぜい目立たないように気をつけて』

ふうう、殴りたい。

ふるふる握り拳を作るあたしに、領主は笑顔で念押しした。

『あ、貴族令嬢が暴力なんてあり得ないから、よろしく。それから僕は目上。忘れないで？』

『あたしは使用人設定なんだからいいでしょうよ』

『バツカだねえ、この子は。使用人が令嬢差し置いて、目上の貴族殴ったら大問題でしょ』

なんでこうこいつは、いちいちいち人の神経を逆撫でするよ
うな台詞しか言わないんだろうか。

『……禿げる』

『ないない。僕の家系、多毛だから。じいちゃんになってもふっさ
ふさだよ』

『じゃあ筆る。粘着テープで頭頂から釣り上げて筆りとしてやる』

『えーもう、この子恐いんですけど、師匠』

領主が、ちつとも恐がつていない顔で、師匠ことヘクターさんを
振り向く。なんで？師匠？と呼ぶかというと、彼は小さい頃天都の
学院で勉学を学び、その後ヘクターさんの下でしばらく働いていた
のだという。

そう、このツークス領主は、領主兼神官などという訳の分からな
い肩書きの持ち主なのだ。

『ちつとも神官らしくない』と突っ込んだあたしに、

『僕のところのタージエフ神殿は、もともと領主一族を祀る墓
所。一族の優秀さが転じて勉学や芸事の神とされるようになったも
ので、普通の神官と根源的に違うんだよ。あー優秀な家系つても
楽じゃないよねえ』

などとほざいてくれた。これが、本当に天都の学院を主席で卒業し
たつていう頭脳を持ち主らしいから、余計に腹が立つ。

『あんたは学問じゃなくて、性格のいい家系に生まれ直したほうが
いいんじゃない？』

『君は、そのかわいげのない態度をどうにかしたほうがいいよ。ま
じで貰い手つかないから。それとも異界じゃ違………わないか』

領主は、どうやら好みドストライクらしい理緒子に満面の笑みを
向け、それからあたしに憫笑を注いだ。

『本当に君、リオコの足だけは引つ張らないでね？』

『誰が呼び捨てにしていっつたよ？』

『君の許可はいらないよね？』

『いるよ、当然でしょ。あたしは理緒子の使用人。貴族令嬢とお話

したければ、まずは使用人をお通しくださーい』

『うわ、もう君最悪』

ずっとこんな調子で話しているあたしと領主を、ヘクターさんや理緒子たちが生温い顔で見守っている。下手に口を出して巻き込まれたらまずいと、透明な文字で書いてあるのが見えるようだ。

『リオコ、マキ。用意ができた。行くぞ』

微妙な空気を中和するかのようになり、あたしたちの荷物を馬車に積み込んでいた、ルイスがタクとやって来て声をかけた。

あたしと理緒子は、お弁当の入った小さな肩かけ鞆を持ち、ヘクターさんの前に並んで立つ。

『お世話になりました、ヘクターさん』

『お世話になりました』

『お二人の旅のご無事をお祈りしております。ですが……本当にあれらを持っていかなくていいのですか？』

そうヘクターさんが尋ねたのは、あたしと理緒子の鞆のことだ。あたしたちは、異界から持ってきたその荷物を、旅に持参せずにヘクターさんに預けることにしたのだ。

ひよつとしたら、異世界の品物の何かが水門の？ 鍵？ になるのかも知れないけど。

ヘクターさんたちもきつとそう考えて、理緒子にバッグを返したのだろうけれど、あたしたちの考えは違った。

あたしたちが持ってきたのは、教科書やルーズリーフ、筆箱、日焼け止め。ハンカチにティッシュ。そんなくらいしか共通点がない。理緒子の携帯ももう充電がなくなったし、あたしの携帯オーディオの電池はまだ大丈夫だけど、ネットもCDもない今は、ただの音楽再生機だ。こんなものに重要な？ 鍵？ なんて隠されていそうにない。

そう判断してあたしたちは、旅の邪魔になる荷物を思いきって置いていくことにしたのだ。もちろん使いなじんだ歯ブラシや日用品の入ったポーチ、筆記用具なんかはリュックに詰め直した。オーディオは迷ったが、これも置いていくことに決めた。

『はい、貸してあげる』

『……は？』

突然ヘッドフォン付きのオーディオプレイヤーを差し出され、領主が鼻に皺を寄せる。

『なにこれ』

『異界の音楽楽器。ここ押すと曲が再生されるから、これ耳に嵌めて聞いてね。全部で298曲入ってる』

『なに君、もしかして僕に惚れてた？』

『今の状況で、気持ちの悪い冗談言わないでよ。旅が呪われちゃう。あ、これ兄のお下がりだから、ぶっ壊したら鉄拳食らわすからね？』

と、あたしはここで領主の背後で彫像のように佇んでいる、従者のメーダさんを見る。

『あの、この馬鹿がどうにもならなくなったら、これの8曲目と32曲目と162曲目を音量最大で流してやってください。足止めくらしいにはなると思うんで』

8曲目はガンズ、32曲目はヴァン・ヘイレン、162曲目はアイアン・メイデンだよ。ひゃっほーい、ロック最高！

メーダさんは真面目に、『承知いたしました』と渋く笑い、頭を下げる。ツークス領主がちよつとふくれ面をした。理緒子がやるかわいいのに、こいつだと殴りたくなるから不思議だ。

ああ、ちなみにこのエロバカ領主は二十一才だ。十七才という情報、領主に就任した年齢だったらしい。同じ年なのに、タクとはえらい違いだ。

『そんな音じゃ、僕もう驚かないよ。悪いけど』

『そう言うと思って、貸してあげるんじゃない。頭の超イイあなたなら、これが本当に異界のものかどうか、確認できるでしょ』

黙ってしまった彼に、あたしは自分の見当が間違っていなかったことを悟った。

『これいじってたら、あんたも余計な詮索してる暇なさそうだし、あたしたちへの興味もとりあえず少なくなりそうだし。……あ、く

れぐれも言語解読はやめたほうがいいよ。最低でも二種類の国の言葉が混じってるし、歌詞だから文脈的にどうかと思うのもいっぱいあるから』

『君、僕がまだ疑ってるのと知っていたわけ？』

『あんたみたいな人、あたしの世界にもいないわけじゃないんだよ。手を変え品を変え、態度をこころ変えて他人を窺うヤツ。そういう人って、百%他人を信じるのができないんだよね。裏切られても馬鹿を見てもいいから、まず信じたいと思うあたしには絶対理解できないけど』

一気に言い、あたしは眼鏡の向こうに表情を隠した、領主を見据えた。

『あなたにはお世話になったから。だから、これで我慢しといて』

『ふ……ん、しょうがない。預かっておいてやるよ』

憎まれ口を叩いて、領主がプレイヤーを受け取る。

『くれぐれも聞くときはヘッドフォンつけてね？ じゃないと、領主が悪魔に憑かれたとか評判たっちゃうから』

『変わらないだろ』

『そうよねー、元から根性悪魔並みだもんねー』

『はあ？ 君やっぱ一人で旅に行つて来なよ。リオコをここに置いていって』

領主が手の甲で、しっしつとあたしを追い払う。あたしは思いきりあかんべをして、ヘクターさんに手を振り、一足先に馬車に向かった。さようならはいつも苦手だ。

進行方向とは逆向きの窓際の席に身を埋め、あたしは理緒子に抱きつこうとしてタクとメーダさんに止められるツークス領主と、もう一度あたしをふり返って一礼するヘクターさんをぼんやり見ている。

そして、本格的な旅が始まった。

旅は時間的なこともあつて、ほとんど馬車に乗りっぱなしだった。ツークスを昼前に出て、そこから休憩を挟みつつタクとルイスが交代で馬車を運転し、夕方隣の都市ブゼナに着く。

宿はさすがに普通の宿だけど、街外れの人の少ないところにタクがとつてくれた。あたしと理緒子、タクとルイスで隣同士の部屋だ。ルイスは止められる場所に一人で馬車を置いてきたらしく、あたしたちを降ろしたあと、しばらく姿を見なかった。宿に現われたのは日が沈んでからだ。

ツークスを出発して以降、ルイスは極力自分の容姿を晒すのを避けるようにしている。頭から大きなショールを巻きつけ、それを目深まで引き下ろして、目と髪の色を隠しているのだ。

『髪を染めてくればよかったな』と笑っていたけど、ルイスは元から目立つのを嫌う。あたしたちのことで無理をさせているのだと思つと、笑つては流せなかつた。

隣の部屋に誰かが入った物音がしたので、あたしは廊下に出る。隣のドアを叩くと、案の定ルイスが開け、あたしを見て驚いた顔をした。

何か言いかけ、あたしが一人で、魔法話の指環もしていないことに気づくと、ドアを肩で押さえたままあたしの頭に手を載せる。

『一人で部屋の外に出ないよう、タクに言われなかつたか？』

「そうだけど、帰ってきてるか気になつて」

もごもごと日本語で言い訳するあたしに、ルイスがいつものように微笑む。

『心配することはない。君たちのことは私たちが守る。安心して休むといい』

心配なのは自分たちのことじゃなくて、ルイスのほうなのに。
伝えたいけど、あたしの異世界語スキルはあまりに低すぎた。仕方なく頷く。

『いい子だ』

扉の陰で、素早くルイスの唇があたしの髪先をかすめる。このあいだは『髪の毛ひとつも傷つけさせない』なんてことを言われたけれど、ルイスはそんなに黒髪が好きなんだろうか。

よく分からないことを考えつつ、あたしは跳ねあがる心臓を押さえ、ルイスの胸に軽く拳骨をくらわせた。そして、つつがない宿の一夜が過ぎていった。

出発は早朝だ。まだ朝靄が色濃く残る時刻から、あたしたちは再び馬車を走らせる。といつても運転はタクとルイスなんだけど、座っているだけでも結構な苦行だ。

ブゼナを半分も過ぎていないところから街の様子はすっかり消え、鉦都ツークスから続いていた手入れされた土の道が本格的な砂利道に変わって、馬車はがったんがったん揺れた。それはさらに山道に入ったようで、上がっては下りながら周りはどうんどの山の景色を深めていく。

王様に期限を宣言されて、もう七日。旅を急ぐのは分かるけど、これが連日ひっきりなしだと、さすがに理緒子だけでなくあたしも辛くなってきた。吐き気とかなんとかより、揺さぶられすぎて同じ体勢で居るのがしんどいのだ。

三都市めのブングルトで一泊し、山道との格闘を再開して数時間後、あたしは根をあげた。

『ごめん、ちよっと休憩欲しい』

『わたしも』

消え入りそうな声で、理緒子が同意する。乗り物酔いしやすいうえに体もほっそい彼女は、二人掛けの前の席を占領して、完全に伸びていた。

実は朝出発した後すでに一度トイレ休憩をとっていて、もう少しでお昼休憩にさしかかるところだったんだけど、あたしの体はかなり真剣に悲鳴をあげていた。

ルイスが座席の壁についている紐を引っ張り、御者のタクに伝えて馬車を停止させる。

「大丈夫か？」

「うん、ごめんね。少し外の空気吸ったら、気分良くなると思う」

「もう少ししたら街に入って、宿でゆっくりできるから」

ルイスが労わるように、あたしの頭を撫でた。触れた部分が、カイロでも当てたようにあつたかくなる。魔法のひとつの？治療術？ってやつだ。

だけどこれは、もともと本人の持っている傷を治す力だとか代謝機能を高めることができるだけで、根本的な？治療？ではないのだそう。強引にやると、あとから反動で疲労がどつとくるらしい。だから、今体力の落ち気味な理緒子には、頻繁にできなかつたりするのだ。

それでも時折？治療術？をかけてもらうと楽しく、最初に天都にきた時のように食欲がなくなるところまではいかなかった。街道を外れ、やや開けた場所で馬車が停止する。

理緒子がやつと起き上がって、座席の背にかけていた水筒を取って水を数口飲んだ。柑橘系のいい香りがその場に漂う。

水筒の水には、疲れに効くコジという果物の絞り汁を混ぜてあるとかで、とても爽やかで飲みやすい。今さらだけど、異界の生水や生の食べ物合わなかったらどうしようかと頭をよぎったけど、散々いろいろ飲み食いしたあとなので、とりあえず考えないことにした。

あたしもコジ水を少し飲み、二人に「外に行ってくるね」と言い置いて、席を立つ。

座席の肘掛に頭を戻した理緒子が、ひらひらと手を振った。

「いつてらっしやい」

『あまり遠くへ行くなよ』

心配性のルイスが腕を取り、送心術で伝えてきた。あたしは頷き、まだ浮遊感漂う体をぎこちなく移動させて馬車を降りる。御者台の上から、タクが声を掛けてきた。

「マキ、キエル ヴィ ファルン？」

うーん、なんだかこれは、基本の挨拶にあつた気がする。

あたしは悩み、とりあえず心当たりのある決まり文句を口にする。
「ダンカス。ミ ファルン（ありがとう、元気です）」

「クイ ヴィ イリス ネットセージョ？」

熱線所？ いや、そんなところはないか。

あたしが適当に笑ってごまかすと、タクは分かっているのが分かったように苦笑した。

「エスト クイダート」

？ 気をつけて？ じゃないかと思われる言葉に、あたしは手を振って応え、お花摘みに向かった。

断っておくと、お花摘みは本当に花を摘むわけじゃない。その？ お花を摘む？ 格好 地べたにしゃがみこむっていう姿から想像してもらおう行為のことだ。

辺りの景色は、山なんだか岩なんだか石なんだかというくらい殺風景さだ。木は生えているけど、茸みたいに緑の帽子を被ったタコ足状の枝をしたものが、ぽつぽつとあるくらい。あとはアロエみたいなのとか。岩陰にはキッキーナも、花はついてないけど生えている。

緑といえばそれくらい。アクイナスやキヨウが、どれだけ恵まれているか身につまされる気がした。深刻な現実をごまかすように、あたしは咳払いして喉の違和感をとった。

しばらく歩くうちに、体のこわばりや浮遊感が落ち着いてくる。あたしはときどき馬車をふり返って離れすぎないことを確認しつつ、それでも見えないところを探して進んだ。

大きな岩場を乗り越えようと、足がさわりと柔らかなものを踏みし

める。砂地だ。

このあたりでいつか。

岩と砂が広がる景色を眺め渡し、あたしは岩陰の砂を足で掘った。おもむろにしゃがみ、素早く用を済ます。仕上げに持ってきたのは普通のトイレでも使う小さなティッシュもどきだ。なんでもカシエというそれ用の紙で、放っておくと自然に砂と一緒になるのだという。

エコだな、異世界。

なんて思いながら、あたしはズボンを履き直し、犬か猫みたいに足で砂をかけた。痕を見られるのはなんとなく恥ずかしい。

すつきりしたあたしは、両腕を突き上げて伸びをし、胴をひねって体を充分にほぐした。こっちへ来てから、すっかり運動量が減ってしまっている。といって、飛行船の中で腹筋をして眩暈がしたので、馬車の中では絶対に無理だ。実際それどころじゃないし。

気温は、酷暑というほどではなかった。ここはキヨウよりは南だけど、山の上だし、空気も乾いているので過ごしやすい。でも直射日光は結構きつい。

帽子被ってくればよかったなあ。

ぶつぶつ思つてストレッチを続けるあたしの目に、なにかを照り返した太陽光線が飛び込んでくる。ピカ、としたものが、数メートル先で二度、三度きらめいた。

不思議に思うより早く、あたしの体が動いた。あたしは岩を伝いながら近づき、岩場から一段低くなった窪地に辿り着く。そこへ、

「きつ」

と、なにかの鳴る音。

あたしは窪地を覗き込み、音の主を発見した。砂でできたすり鉢状のそこに足をとられてもがいているのは、黒い毛もじゃの小さな生き物だ。

「きつ、きつ」

ゴムが擦れたような声なんだけど、どこか甘えたかわいらしさが

漂つのは、この生き物がまだ保護を必要とする大きさだからなのだろう。

というか、どう見ても、しかも面をしてる黒い垂れ耳の犬の子どもにしか見えない。

野生の犬かなあ。

助けてやりたいけど、迂闊に触ると咬まれそうだ。子犬に似たそれは、短い四本の足をじたばたと動かして上へのぼろうとする。が、滑りのいい砂が、嘲笑うようにそれを阻んでいた。

「きょう〜」

母犬を呼ぶように鳴かれ、あたしは負けた。

岩場に生えていたキツキーナを右手で掴み、砂の斜面に足を滑らせると、砂から突き出ている石に爪先をかける。そこから思い切り左手を伸ばして、もがく子犬の腹の下に差し入れた。

よしゲット！

むくむくして見えるその生き物は意外に軽く、片手で簡単に持ち上がる。

「きゃきゃっ、きゃっ」

「あ、こら動くなって」

「ぎゅー」

浮き上がるのが恐いのか、子犬が暴れて変な鳴き声をあげる。あたしはまだ、やわらかい砂の斜面から突き出た小さな石に足先を乗せているところだ。

体勢を踏ん張ろうとした途端、足元の石が砂に持っていかれる。

「わっ！」

咄嗟に、キツキーナを持つ右手に力を籠める。力のかかった茎は岩から外れたけど、砂の奥深くに下ろした根が、あたしと子犬の体重をなんとか支えた。砂が、ざあつと音をたてて流れる。

ふう、と息を吐くあたしの目の前を、砂より早く落ちた小石がころころ転がっていった。窪地の最深部までその勢いは止まらない。転がる先には、きらりと光る何かがあった。

そういえば、あの光を見つけてきたんだっけ。

思った、そのとき。

光るものに小石が到達し、した刹那、窪地全体がぐるりと擦じれたかと思うと、真ん丸い巨大な穴がそこに開いた。赤黒い穴はぬらりと艶を帯び、周辺には卸金（おろしがね）も真っ青な尖った棘がぞろりと並んでいる。

「え、っつー！」

慌ててあたしは岩によじ登ろうとした。だけどそこに足場になる石はなく、滑る砂に足をとられ、先程の子犬と同じ状態にまんまと陥る。

しかもあの大きな口のようなものが、砂ごと周りのものを呑み込みはじめていた。あたしの足回りの砂が、どんどん吸い寄せられていく。

半泣きになりながら、あたしはそれでも子犬を手放せなかった。

脇に挟みかえ、左手をキツキーナに伸ばすが、体勢がいまいちでまったく届かない。状況を悟ったのか、脇に抱えた子犬がまた暴れる。

「きつきつきつきつきつ！」

咬まれこそしないが、ここで暴れられるのは辛い。今さらながら、迂闊に馬車を離れた自分の馬鹿さ加減を呪った。

ルイス……！

助けを求めるように、あたしは金髪の魔法士の名前を心の中で呼んだ。

7

ふいに、体を支えていた右手が軽くなる。仰ぐと、誰かの大きな手があたしの右手首をがっちり掴んでいた。

ルイスじゃ……ない？

逆光で分かりにくいけど、浅黒い肌にがっしりした体格。束ねた長い黒髪が一房、前へと傾けた胸先に垂れている。

「xxxx？」

ハスキーな洪い声で呼びかけ、その人は片手であたしの手首、もう一方の手であたしの襟首を掴むと、軽々と岩場に引っ張り上げてくれた。

「xxx、xxxxxxx？」

厳しい口調で、何かを言っている。早口すぎて、聞き取りなんてレベルじゃない。

彼は、まだ窪地でぐねぐねと動いている大きな口を顎でしゃくり、あたしの腕の中の子犬に視線を移した。どうやら怒られているらしい。

よくよく見ると、彼は思いのほか若かった。それでもルイスに増して長身でイイ体格をしているせいか、彼より年上に見える。タクほどではないけど、スポーツ選手並みに胸板が厚い。

癖のない長髪は、鉄のように冴えた光を放つ緑味を帯びた黒。幾何学模様の藍染めの服を着て、マントにブーツ、背中には大きな荷物がつ。旅の人のようだ。

やや冷静さを取り戻したあたしは、今さらながら小刻みに体が震えるのを感じた。あまりの急展開に、心がついていけてなかったらしい。座り込みそうになるのをどうにかこらえる。その代わり、習ったマフオーランド語がまるごと頭から吹き飛んでしまったようだ。

お礼の言葉が出ずに、子犬を抱えたまま深々と頭を下げると、彼はなぜかあたしの肩に手を置いて覗き込んできた。

『おまえ、言葉が喋れないのか？ それとも聞こえないのか？』

送心術だ。魔法士に見えないけど実はそうなのかと考え、アルも送心術を使ったことを思い出す。

マーレインだけど、魔法士じゃないってことなんだろうか。

あたしの頭の中をいろいろなクエスチョンが飛び交っている隙に、彼がまた話しかけてきた。

『大穴喰（おおあなぐい）の巣の傍でなにをしていたんだ、おまえ？』

あたしは困って、腕の中の子犬を指差した。

『助けたのか？ それはガウルの子だろう。野生のものに軽々しく手出しをするな。群れから離れたら、どのみち生きていけない』

その言葉を拒むように、あたしは黙って子犬をしっかりと抱き締めなおした。

片手でつかんだ時は暴れまくっていた小さな動物も、両腕で胸に抱え込むと安定がいいのか、落ち着いてびすびす鼻を鳴らしている。助けてくれた彼は、呆れたような顔をしつつも、それ以上は触れなかった。

『おまえも親とはくれたのだろうか？ どこだ。送ってやる』

そう訊かれ、あたしはきよきよと辺りを見回した。方角を変えて眺めると、どれも同じような岩と砂地で、来たほうがさっぱり分からない。

道路標識、なんて立ってるわけないよね……。

あたしが途方に暮れていると、彼がまた話しかけた。

『まさか徒歩で来たわけじゃないよな？ 馬車か？』

頷いた。

首を振ってから、ヤー（はい）くらい言えよあたし、と心の中で自分に突っ込む。

『とりあえず街道まで送る。後は自力で何とかしろ』

なんだかルイスにされたみたいに手を引かれ、あたしは彼の後について歩きはじめた。

左手に子犬（ガウルというらしいけど）、右手を彼と繋いで、あたしは凸凹した岩の上を進み 数歩も行かないうちに。

『伏せる！』

突然彼が送心術で怒鳴り、あたしの手を下にくつと引いた。

こんなごつごつの岩に伏せるのは嫌だ！

思ったけど、彼の力に負けてしゃがみこむ。下を向いたあたしの視線の先で、進むはずだった岩の先が、がっつと妙な音をたてて弾け飛んだ。

……え。

また変な生き物か、と考えていると、『動くな』と囁いた彼が、空いている右手を腰の剣に伸ばした。少し反った、短めの剣だ。

「×××！」

聞いた声でしたので、あたしは顔を上げ、岩場の向こうでシヨールを巻きつけて立つ人の姿を見つけた。

「ル……」

名前を呼ぼうとして、素性を隠してる最中だと思い出す。言葉を呑み込んだ。

ルイスは鋭く同じ言葉をくり返し、左手の先に光を点す。

魔法光……まさか、さっき岩砕いた……。

ルイスの怒りを察したあたしは、蒼ざめた。アルとのいざこざが脳裏をよぎる。

明らかにルイスと警戒の火花を散らし、庇うようにあたしに覆いかぶさる彼の袖を引き、味方だと告げようとするが、その単語が出てこない。あたしは何度も首を横に振り、違うのだと伝えた。

気付いたらしく、鋭い鉄色の瞳が、わずかに戸惑う。

『知り合いか？』

必死で頭を縦に振る。ここで魔法なんかで大暴れしたら、旅どころじゃなくなってしまう。

あたしはまた鳴きはじめたガウルの子どもを抱え、彼の腕の下から這い出して立ち上がった。膝から砂を払い、繋いでいた手をほどいて、それをひらひらさせる。

納得がいかないのか、彼が不審そうにあたしの腕を取った。

『あいつは……いや、おまえ……』

言いかけ、首を振る。

『まあいい。行け。二度とはぐれるなよ』

「……ありがとう」

あたしはつい出てしまった日本語でお礼を言い、もう一度手を振って、小走りにルイスの元に向かった。岩の上を渡る振動に、ガウルの子の鳴き声が飛び飛びになる。

「マキ」

待ちきれなかったのか、ルイスもこちらへとやってくる。あたしがちよこまか進む距離を、優雅な仕草で数歩で縮めてきた。

それでも息が少し弾んでいる。さすがに前にみたく抱きしめてはこなかったけど、ルイスはすぐにあたしの両肩に手を置いて、声を送ってきた。

『怪我はないか？』

「うん」

彼が助けてくれて、と振り向いたあたしは、目が点になった。すでにそこには、あの鉄色の髪をした彼はいなかった。

「あれ……？」

『彼はなにを？』

「えと、ミイリ（あたし 行っただけ）……」

あっち、と岩の隙間から見えている窪地を指差す。あの気味の悪い口はまだ動いていて、見ているうちにぐるりと擦じれ、また砂の下に潜った。エグさ満点だ。

シヨールから覗くルイスの青い目が、明らかに険しい。

『大穴喰の巣に近づいたのか？』

「えーと、ミイディ（あたし 見た）」

これ、と腕の中の黒い毛玉を示す。ルイスが呻いた。

『まさか……ガウルの子を助けようとして、巢に嵌まったところを助けられたのか？』

「ヤー（うん）」

さすがルイス理解力が早い、と感心したのに、彼の怒りは増したようだ。

早速、送心術でのお説教が始まる。

『危ないことを……。ヘクターに習わなかったのか？ あれは鼻先の発光体で獲物を引き寄せて喰らう、地中生物だ。あの大きさなら、人もコマも一呑みだぞ』

あの光っていたのは、どうやら大穴喰とかいう不気味くんの鼻だったようだ。

光る鼻はトナカイさんだけにしてくれよ。

などと、異世界の人には絶対理解できないことをあたしは思う。思っているうちにも、お説教は続く。

『遠くへ行くな、と私は言ったはずだけど？』

「デソーレ（ごめんなさい）」

不気味くんの存在は抜けていたけど、この単語だけはしっかりと頭に叩き込んでおいた。使うのは目に見えていたから。

ルイスが、苦笑を含んだ眼差しをあたしに向けた。

『まったく、君は私を驚かせる名人だ』

「トレ デソーレ（とても ごめんなさい）」

『謝るくらいなら、きちんと私の言うことを聞いてくれ。君を危ない目に合わせたくないんだ。山には何がいるか分からない。大穴喰どころじゃないものもいるんだぞ？』

彼だって、さっきは君を助けてくれたが、だからといって信用してついていくななんて危険すぎる。売り飛ばされたりしたら、どうするんだ？』

まさかあたしが、と笑ったら、ものすごく真剣な声で怒られた。

『冗談で言っているわけじゃない。素性の分からない人間を甘くみ

るな』

「……ごめんなさい」

涙声になりそうで、あたしは小さく謝った。うつむくあたしを、ルイスが腰を曲げて覗く。

『すまない、きつく言いすぎた。だが……君たちはいろんな意味で危ない状況にある。守るためには、できるだけ目の届くところにいて欲しいんだ。いいね?』

「わかった」

あたしは頷いた。ルイスはあたしの頭を撫で、やっとほんの少し表情を緩める。

『帰ろう。リオコモタクも心配している。ほら、その子は置いて』

素直に歩き出そうとしたあたしは、最後の一言に動きを止めた。

置いて??

こんなにちっちゃくて耳も目も開いてないみたいで、今もお乳を探すようにふごふごあたしの服をまさぐっている、このいたいけな生き物を置いていく?

「ネイ（やだ）」

言い捨て、あたしはルイスが現われた方へ勝手に歩きはじめた。

ルイスが追いかけてくる。

「マキ」

「ネイ（やだ）」

「マキ！」

「ネーイ！（やーだ!）」

後ろから腕を取ろうとする手を振り払い、あたしは彼に向き直った。

「やだよ！ この子、まだ赤ちゃんだよ？ せめて一匹でも大丈夫なくらいの大きさを放さないで、またあの変なのに食べられちゃうよー!」

『マキ。ガウルは大きくはならないが、獰猛な生き物だ。馴れさせ

るのは無理だ』

あたしの手首を取り、ルイスが告げる。

『いいか、野生のものを人の世界に引き込むことは、気紛れで許されることじゃない。彼らには彼らの摂理がある。それを無視してわれわれの生活に馴染ませるといふことは、この子がガウルであることを否定することになるんだぞ?』

狼が犬になったように。

なぜか、その言葉が頭に浮かんだ。

あたしは黙った。助けてくれた彼も同じようなことを言っていたし、それがこの世界の人の考え方なのかもしれない。

それでも、あたしは腕の中の温もりを手放すことができなかった。「一晩だけ……だめ? 一晩ご飯あげて、この子もお腹いっぱいになったら、ここへ来て帰すから」

ああ、二日漬けの勉強くらいじゃ、ちゃんとした言葉が出てこないよ。

歯噛みをする思いで、あたしは日本語を変換しようと頭を絞った。五年習った英語でもうまく喋れないんだから、かなり絶望的だ。

それでもなんとか伝えようと、思い出せるだけの単語を並べる。

「リ マージエ ウヌス(彼 食べる 一度)、ボルヴォーレ(お願い)」

『……この子を食べるのか?』

「ネイツ(違うつ)、リ マージエ ウヌス(彼 食べる 一度)、クン ニ(わたしたちと)」

ルイスはしばらく考え込み、マフォーランド語と一緒に送心術を使ってきた。

「ミ ペタス ドウヌ アル リ ウヌス マージヤント、クンニ?」

『? 私たちと一緒に、彼に一度食事をあげたい??』

「ヤー!(そう!)」

『……分かった。そのことは後で話し合おう。もう行こう。だいぶ

時間を取った』

あたしの腕を取り、促す。不安そうな顔をするあたしに、ルイスがやさしい目をして、腕の中で眠りかけていたガウルの子の背中を指先でつついた。

『君が助けたんだ。君がきちんと面倒をみるんだぞ？』

「ヤー（はい）」

『あの二人にも、君から説明すること』

「や、やあつ？（は、はいっ？）」

『といっても、今の君の言語能力じゃ誤解されるのが落ちだな』

事実なので、あたしは黙って彼を睨んだ。シヨールから見える青い眼が悪戯そうなのは、気のせいじゃないはずだ。

『やっぱり、もうひとつ魔法話の指環を創ればよかつたな』

さらりと言ってきたけど、実はこの発言、大問題だ。

異界の乙女が二人いるのに指環がひとつしかないのはおかしい、とかなんとかという理屈をこねて、なんと彼はシグバルトに古い書物を解説させ、もうひとつ指環を創ろうと企んでいたのだ。ルイスつてば、本当とんでもないことを考える。

天都を出る日、飛行船に乗り込む直前シグバルトに会ったとき、彼はげっそりやつれ果てて、あたしはものすごくびっくりしたんだよ。

『旅立ちに間に合わず誠に申し訳ございません、マキさま』

結局解説はできたものの、大雑把な方法しか載っていなかったらしく、材料を揃えて試行錯誤するには時間的に間に合わないということになったのだそう。

シグバルトはとても申し訳なさそうに謝ってくれたけど、あたしは気の毒になってしまった。だって前髪で隠れているはずなのに、目の下の隈が見えるんだよ？ 重症すぎる。

思わず彼の前髪をあげて惨状を確認したあたしは、理緒子の指環を借りて怒ってしまった。

『なに考えてんの、ルイス。自分でするんならともかく、他人に自

分の好き放題押し付けちゃダメでしょうっ！ 指環は一個あればいいの！』

しかも髪を上げてみて気がついたんだけど、シグバルトは斜視だったのだ。片目と片目とが、微妙に見ている方向が違うというやつだ。こういう人は、得てして両目の視力のバランスが悪い。

『それにシグバルトは目が悪いんだから、無理させてどうすんのよ！ 視力のバランスがもつと悪くなって、物につまづいたり転んだりしたら危ないじゃない。せめて眼鏡くらい掛けるように言ってあげなよ！』

両目の視力が極端に違つと、物を立体的に見るのが難しくなる。あたしにも斜視の友だちがいて、その子に聞いて知つたから、偉そうなことは言えないけど。

シグバルトの赤面症や前髪の原因がなんとなく分かつてしまつて、あたしの怒りの矛先は、なぜか当の本人にも飛び火してしまつた。

『シグバルトも、そんな前髪してたら目に良くないよ！ さつぱり切つて、目に合う眼鏡で視力矯正したらもっと楽になるし、斜視だつて分かりづらくなるんだから』

『は、はい』

シグバルトはおどおど、周りは目をぱちくりさせている中、なぜかルイスは一人爆笑していた。それが三日前のこと。ものすごく昔のようだけど。

ルイスもそのことを思い出したのか、目に宿る悪戯そうな光が強くなる。

「……ルイス、ネリーディ（笑うな）」

『君を笑つたんじゃないよ。君と出会えた幸運に感謝しているんだ』
なんでこんな齒の浮くような台詞をすらすら口にでき いや、
心で送れるんだ？

言い返す単語を探しきれず、あたしは日本語で言った。

「馬鹿」

『前も聞いたことあるけど、その？バカ？ってどういう意味なんだ』

？』

「馬と鹿って書くけど、意味なんて教えられるかつ！」

『君はこの旅で、日常会話くらいはできるようになるべきだな』

ちよつと待った。なんであたしの課題が増えるんだ？ 水門の鍵どうしたよ？

「ルイス、最低」

『ほら、きちんとマフォーランド語で喋って。喋らないと上達できないよ？』

わあ、この人さりげに鬼だ。

ってか、シグバルトに指環の創り方探しをこり押しした段階で、すでにサド決定だよな。

あとでタクから、マフォーランド語の悪口全般を教えてもらおう。

決意するあたしは、その考えがすでにルイスの術中に嵌まっていたということに気がつかなかった。気付いたのは、もっとさらに先のこと。

あたしはそのとき、そんなくならない彼とのやりとりに夢中になっていた。

シヨールを被っている口元は目にはできなかつたけど、たしかに彼はずっとやさしく微笑んでいたから。

太陽はもう天高く昇りきっていて、足元から光と熱がゆらゆらと漂う。

腕の中のガウルの子どもが、くしゃ顔をさらに顰め、かわいらしい小さな欠伸をひとつした。

14-7 (後書き)

次は理緒子です。やっとだ…。

第15章 闇夜 リオコの混乱

1

岳都ブングルトから光都ヒューガラナに向かう山道の途中で、わたしたちはいつもより早い昼食をとることにした。

ひどい砂利道を走り続ける馬車に、あの真紀がとうとう不調を訴えて、まだ太陽が空の天辺にくる前に旅は一時停止したのだ。

『せっかくだから、もう食事も済ませてしまおう』

というタクの思いつきで、トイレに行ったマキを待つ間に彼が場所作り、ルイスが火起こし、わたしが配膳、という分担で準備を進める。道から少し入った岩と岩の間の砂の平地が、今回の休憩場所だ。

二人とも手際がいい。前の旅でもそうだけど、タクはアウトドアに慣れていいのか、積んであった木の杭を二本立てると、コマを外した馬車の屋根の前側についた布の庇（ひさし）をぐーんと伸ばしてそれにくっつけ、あつという間に簡易のテントを作ってしまった。

魔法士のルイスなんて、適当な枝を拾ってきて穴を掘った中にそれらを並べ、指先でぽつと火を点けておしまい。最初見たとき、これにはタクも苦笑していた。

わたしはみんなのカップを用意して、火をまたぐようにタクが作ったコの字の枝の真ん中にフックをひっかけ、水を入れたヤカンを下げる。これはお茶用だ。

暑いところでお茶って意外だけど、結構美味しい。味は 複雑。不味いってわけじゃなくて、ハーブティーとか苦手な人はダメかもしれない。

香茗茶っていう名前のお茶は、もとから少し八角に似た香りがするんだけど、旅ではこれにさらにいろんな薬草を煎じて煮出す。色も匂いもものすごくなるけど、岩蜜蜂の蜜蝋の欠片を入れると飲みやすくなる。それに飲んだ後、どこか体がすつきりするんだよね。

今ではお気に入りだ。

タクが木に繋ぎなおしたコマに水をあげている間、わたしは椅子になりそうな手頃な石を見繕って、陰を作った場所に運んだ。気付いて、ルイスが手伝ってくれる。

四人分を並べ終わり、ヤカンが湯気を上げはじめた頃、ふいにルイスが何も無い荒野に顔を向けた。大地にひざまずいて、右の手の平を触れる。

頭からすっぽりシヨールを被っているので、表情は分からない。

『近くで大穴喰が暴れている。マキを探してくる』
『分かった』

口早にタクに告げ、ルイスはいつも二本持っている剣を一本だけ提げると、周囲の岩を乗り越えて行ってしまった。

『タク、大穴喰ってなに？』

『砂の多い荒地に棲む生き物だ。普段は砂の中に潜っていて、通りかかった人やコマを捕らえる。巣に近づかなければ、それほど恐ろしくはない』

タクは恐がらせないようにそう説明してくれたのだろうけど、人を食べるっていうだけで、想像力的に完全にアウトだ。モンスターにしか思えない。

蒼ざめたわたしは何でも無いことを祈ったけど、そのとき真紀は、やっぱりそのモンスターの巣穴に嵌まりかけていたのだそう。そして、戻ってきたのは二人だけじゃなかった。

『か〜わ〜い〜い〜』

語尾にハートがついちやいそうな声で、わたしは真紀の腕の中を覗いた。ガウルと呼ばれる四足動物の赤ちゃんだというその生き物は、本当にぬいぐるみたいにもふもふふわふわの黒い毛をしている。

毛の少ない顔はしわくちゃで、どっちかというとブサかわいい系だ。耳は小さく垂れて頭に貼りついていて、目もまだちゃんと開か

ないみたい。

大穴喰の巣に落ちそうになつていたところを助けたらしいんだけど、それを聞いた途端、タクが呆れた顔をした。タクの呆れ顔なんてめずらしい。

『その子は野生だ。人の匂いがつく前に帰せ』

『帰すつていつても、周りに親いなかつたよ？』

『ガウルは耳が良く警戒心が強い。それに仲間意識も強い。君がその子を助けたところも、どこかで見ていたはずだ。よく襲われなかつたな』

『私も一応確認したが、付近で群れは見当たらなかつた。日が昇りきつているし、隠れたのかもしれない。夜行性だからな』

ルイスの説明に、タクがため息をひとつつく。

『だが、旅には連れていけないぞ？』

『あたしが世話するから。お願い』

『ガウルがどうという生き物か、知識のない君にどこまで世話ができる。こいつらが何を食べるか、知っているのか？』

『でも……まだ赤ちゃんだし。今だけ置いててもいいでしょ？ かつてもお腹減つてるみたい。お願い！』

真紀の言うとおりに、その子は彼女の腕の中で丸まったまま、しきりにふんふん匂いを嗅いでいる。ときどき腕の下に鼻を突っ込む仕草をするのは、お乳を探しているのかもしれない。

真紀に拝むように両手を合わされ、タクは納得していないようだったけれど、頷いた。途中だった昼食の支度を、四人プラス一匹分に改めて準備し直す。

『じゃあ座つて。昼食にしよう』

食事を配るのはタクの役目だ。片手でさつとハンカチサイズのカシエを折り畳み、器の形に整えた中へ一人分の食事を入れたものを渡してくれる。

旅の食事は、イエドから出たときはコメイが主食だったけど、今回はパニカという固焼きしたパニだ。普通じゃが芋に似た根菜を生

のまま擂って蒸し焼きにして作るパニは、擂ったものを乾燥させて粉にし、発酵させて二度焼きするとかなり日持ちがするのだそう。

ビスケットに近い風味のそのパニカと蜂蜜入り薬草茶、干し肉、ナッツ。野外で食べるメニューは、そんな感じだ。

わたしたち女の子はいいけど、男の人はちよつと物足りなさそう。しかも、いつも等分なんだよね。体格が違いすぎるから遠慮するんだけど、

『旅では体力が肝心だ。食べられなかったら後でもいいから、きちんと自分の分は食べる』

と、かえってタクにお説教されてしまった。今鞆の中に食べ切れなかったパニカが二つもあるんだけど、いつバレるか冷や冷やしてる。ルイスに治癒術をかけてもらっただけど、胃の調子いまいちなんだよね。RPG世界にでてくるみたいないなルイスの魔法は、わたしの元気の素を高めるだけで、本当の意味で治しているわけではないのだというし。

本気で体力つけないと、この先まずいよね……。

運動全般の苦手なわたしは憂鬱に思う。そのわたしを、ルイスが覗き込んだ。

『リオコ、まだ顔色がよくないな。お茶は飲めそうか？』

『あ、ありがとう』

わたしはぎこちなく笑って、彼から蜂蜜薬草茶の入った木のカップを受け取った。湯気と一緒にたち昇る甘い複雑な香りが、鼻をくすぐる。

『今日はキツキナーを入れてみたんだ。いい香りだろう？』

『キツキナーって飲めるの？』

『主に薬としてだけれどね。花も葉も茎も乾燥させて、お茶にしたり粉末にして服用する。美容にもいいというから、ぜひ飲んでみる』

お茶担当はルイスだ。魔法士という職業のせいか、彼は薬草や自然のことにすごく詳しい。

彼の勧めに、わたしは素直に薬草茶を一口飲んだ。蜂蜜は控えめで、代わりに清々しいキッキーナの香りと甘味が喉をすべり降りていく。

『美味しい』

『それはよかった』

わたしの左隣では、真紀がガウルの子どもを膝に乗せ、困った顔をしていた。小さな珍客のためにタクが用意してくれたのは、小さなパニカと蜜蝋が一欠け。

『ねえタク、牛乳はないの？』

『ない。ベクのミルクは街にいつてもなかなか手に入るものじゃない』

『でも、さすがに固形物は無理っばいよ？』

真紀が蜂蜜の塊を指先で砕き、それを鼻先に持っていくと、ガウルの子どもは舐めるといふより吸いついてきた。そのまま指をくわえて、もぐもぐしている。お乳が欲しいんだらうな。

タクはまだ機嫌が直らないのか、普段のやさしさが嘘のように冷たく、『ちよつと待て』と真紀をあしらった。あつという間に自分の分を食べ終えて、ぐいっとお茶を飲み干す。

どうするんだらうと見ていたら、タクは空のカップに真紀が砕いた蜜蝋の欠片を全部入れ、ヤカンのお湯を少量注いだ。それをすっかり溶かして、

『貸してみる』

ひよいと左手でガウルの子を摘みあげ、パニカを蜂蜜湯に浸して口元に持っていく。

『あ』

ぱくん、とパニカをくわえたガウルの子が、そのままちゅっちゅとしゃぶりはじめた。しばらくするとパニカを口から外し、また蜂蜜湯に浸して吸わせる。それを繰り返していくうちに、溶けたパニカがしゃぶられて、少しずつ小さくなっていくのが分かった。

右手でガウルの子のお尻を支え、食事をあげているタクは、あれ

だけ言ったわりになんだかやり慣れてる雰囲気満載だ。

そういえば、アル王子は動物好きなんだっけ？

同じことを思ったのか、真紀が尋ねる。

『タク、慣れてる。もしかしてアルのペットの世話でもしてた？』

『ガウルは滅多に人に馴れない。それに、俺が近衛に入ったときはもう王子は動物を飼うのを止めてしまった後だ』

教えつつ、タクの手は小さな黒い生き物をやさしく持って、食事をあげ続けている。

ちゅっちゅとパニカを吸う音が、タクの声に混じった。

『以前、ガウルの子を育てたことのある男に会ったんだ。……まったく、こんなものを世話しようなどと思う人間に、人生で二度も出会うとは思わなかった』

滅多にないため息まじりのタクの愚痴よりも、気になったのはその言葉の前半部分だ。

『その人が育てたガウルってどうなったの？』

『成獣になり、群れにも属さず彼の元にいた。彼は少し特殊な男だったからな』

『特殊？』

『ああ、獣と話せる』

真紀とわたしの目が、タクの右隣のルイスへ向かった。金髪の魔法士が苦笑する。

『私は無理だよ。だが、稀にマーレインでそういう古い力を持ったものが現われる』

『古い力？』

『そう。魔法力は昔の人のほうがもっと強かったんだ。今ではほとんど弱くなっている』

ルイスの笑顔に、どこか複雑な陰が纏う。

『ガウルを連れた原始型マーレインか……なかなか大変そうだな』

『ああ、ガウルにも人にも敬遠される。彼は自分と離れて群れに入るよう何度も言い聞かせたが、結局そのガウルは彼を庇って人の手

に倒れた』

予想できる結末。あっさりと告げられた事実は、それでもやっぱり重い。

わたしはお茶のカップを持ったまま、黙って下を向いた。お昼の日射しは痛いほど暑いはずなのに、なぜだか急にしんと冷え込んで感じられた。

『マキ。命を大切にすることは大事だ。俺も生き物は好きだし、小さい頃から何頭もコマの世話をしてきた。だが……』

『……分かってる。ごめん、タク。手、しんどいでしょ。代わるよ』
真紀が遮ってそう言い、ちっとも手に負担のなりそうにない小さな黒い毛玉を、再び膝に戻す。

タクがあげていたパニカの欠片はすっかり食べられてしまい、真紀は代わりに自分の分のパニカを砕いて蜂蜜湯に浸して吸わせはじめた。あげながら、ぽつんと言い出す。

『うち、さ……あたしたちの世界では？犬？っていう動物がすごく身近で、家族として飼うこともあるんだよ。うちも飼ってても、兄の喘息が……埃とかに弱い咳の出る病気が酷くなって、結局愛護センターに……その、飼えなくなつた動物を引き取ってくれるところへ連れて行くことになったの。あたしはすごく反対したけど、親はあたしが学校に行ってるうちに連れてって』

タクたちに分かるように説明を加えながら真紀は話し、ちよつと言葉を切った。

『親は、センターが少しの間だけど新しい飼い主を探してくれるから大丈夫だって説明してくれたけど、あとから調べたらそうじゃなかったの。子犬以外貰い手がつかないんだよ、そういうところってさ……つまりあたしは、間接的にその子を安楽死させてしまったわけ。』

そのことを知って、あたしは親を恨んだけど、でもやっぱり自分がいけなかったんだと思う。その子が大事だったら、親にも話してちゃんと自分で別の飼い主を探すべきだったんだよ。どんなことを

してでも』

わたしの左手を握る真紀の手に、少し力が入った。じつとりと熱が伝わる。

『大変だからとか、よく分からないからで済ませてしまっべきじゃなかったんだよ。あたし、ずっと後悔してる。だから、もうそういうことはしたくないんだ。』

タクの言っていることは分かる。ルイスにも怒られたけど……けど、やっぱりあたしはこの子を放っておけないの。できるできないじゃなくて、やるかやらないかの問題なんだと思う。あたしはこの子を助けると決めた。だから、知恵を貸して欲しいの。

あたしが飼うことがこの子を助けることにならないなら、どうすればいいか教えてよ。どうすればこの子がきちんと生きていけるのか、一緒に考えて欲しいの。お願い』

真紀は一気にそう言つと、膝にガウルの子を乗せたまま、ぺこりと頭を下げた。

タクが、やや驚いたようにしている。隣に座るルイスは少し笑つて、膝につきそうにうなだれる真紀の頭に、やわらかく片手を載せた。くしゃりと髪をかき回す。

『君らしい説得だな。これがマフオーランド語で喋れたら完璧だ』

『……人が真面目に喋つたのに、なんでルイスはすぐそういうことを言うのかな』

顔を上げ、真紀が左隣の男を睨む。意味深な言い方に、わたしも彼を見た。

『なんなの、ルイス。マフオーランド語って？』

『ああ、マキが魔法話の指環はひとつで平気だと言い張るから、だったらマフオーランド語を上達してもらおうかということになったんだ』

『いや、勝手に決めないでよ！』

意地の悪そうな笑顔を見せるルイスと慌てる真紀を眺め、わたしは内心冷や汗をかいた。

わあ、スパルタそう……。

タクも同じことを考えたらしく、苦笑して、いつものやさしい表情を見せた。

あ、タクの機嫌が直った。

『分かった。その子のことは、できるだけ考えよう。だが、旅の目的も忘れるなよ?』

やんわりと釘を刺され、真紀がぐっとうまる。どっちに転んでもスパルタな雰囲気の流れ男の二人の視線を浴び、目顔でこちらに救いを求めてきた。

わたしは仕方なくにつこり笑うと、『ふぁいと』と一声やる気のない励ましを贈る。ん、自分で蒔いた種だからね。

真紀の大きなため息が、膝の上のガウルの毛をふわりと波立たせて通り過ぎた。

第15章 闇夜 リオコの混乱（後書き）

…また長い。申し訳ないです。

2

『では、全員の意見をまとめよう。マキは、その子を助けるという意見でいいな?』

真紀が連れて戻ったガウルの子の行く末をどうするか、タクの声掛けによって全員の意見が出されることになった。旅は四人であるからというのが理由だ。

ちなみに、旅に関して大まかなことはタクが指揮を執って、その日の宿の場所のような細かい設定はルイスが判断を下すことが多い。なんだか二人の間で取り決めがあるみたいだ。

話題の主を膝に乗せたまま、彼の言葉に真紀が頷く。タクは、深い藍色の瞳をわたしに向けて尋ねてきた。

『リオコはどう思う?』

『わたしも……助けてあげたいと思う』

『それで旅が遅れても?』

『う、うん。旅を進めながら、その子の親を探すっていうのはどうかな?』

『これを連れていけると宿に泊めてもらえなくなるが、それでも構わないか?』

『う……』

馬車ベッドも嫌いじゃないけど、一日に一回くらいは足をまっすぐ投げ出して横になりたいよね。

ちらり、と横目で真紀を窺う。真紀が顔を赤くした。

『じゃ、じゃあ、あたしだけ馬車に寝るから!』

『……その話は後にしよう。ルイス、意見を』

『私はここに置いていくことを提案する』

意外だ。

真紀の味方をすると思っていた金髪の魔法士の言葉に、わたしは眼を丸くし、真紀は一瞬泣きそうな顔になった。

『まず、旅に連れて行くにはその子は幼すぎる。産まれて三、四日といったところだろう。まだ母親の乳にぶら下がっている時期だ。食餌も頻繁にあげないといけないし、トイレの問題もある。馬車の移動でただでさえ体調を崩しがちな君たちに、世話をし続けるのは無理だ。』

それに逆を返せば、これだけ未熟な幼獣が親から離れて元気でいるということは、離れてそんなに時間がたっていないということでもある。ここに置いていても、親が見つける可能性は高い』

食事時でシヨールを外してたルイスは、あくまで淡々とした表情を見せて指摘した。

『ひどいルイス、あたしが世話をするんなら連れてつてもいいっていったじゃん！』

『後で話し合おうと言ったんだ。連れて行くことを認めたくはない。君は、自分が気分を悪くして休憩を早めたことを忘れたのか？』

厳しいけど、ルイスが真紀のことを考えて言っているのは分かる。分かってても、真紀は納得できていないようだった。それでも、口を噤んだ。

『では、俺の意見だが　俺もこの子は群れに戻るのが一番だと思う。つまり全員の意見としては……』

タクが一度語を止め、わたし、ルイス、真紀と見て視線を止めた。『このガウルの子を助けるということで一致した』

『……へっ？』

真紀が変な声をあげる。ルイスはにやりと微笑んで『そういうことになるな』と呟いた。

そっか。置いていくって、別に？助けない？つてわけじゃないんだ。

つまりそれは？殺す？という選択肢もあったことを同時に窺わせ

るもので。わたしは少し蒼ざめて、真紀の服の袖をきゅっと掴んだ。タクが続ける。

『この子が生きられるようにするには、やはり群れに戻すのが一番だ。だが、群れを探すことに今は時間を使えない。俺は、リオコの案を採用したいと思う』

『わたしの？』

『そう。旅を進めながら、この子に戻れる群れを探す』

タクの提案は次のようなものだった。

ひとつ、ガウルの子はなるべく人間の匂いがつかないように、籠に入れる。

ふたつ、世話は交替でおこなう。

みつつ、旅に連れて行くのは、群れの行動範囲と思われる、この山の麓までとする。

『俺たちからガウルの群れに接触することは難しい。ならば、旅をしながら群れの形跡を見つけ、そこにこの子を置いていくしか方法はない』

『妥当な線だな』

ルイスが同意する。

やっぱり置いていくのは決定なのか、とわたしは肩を落としたけど、真紀は抵抗した。

『えと、街に降りて、あのガウルと話せる人に連絡とるっていうのはだめ？』

『彼とうまく連絡がとれるか保障できない。それは最終手段だな』

そうだ、ここには携帯電話もない。タクは言い聞かせるように言葉を重ねた。

『マキ。助けると決めたのだから、みんなで最善は尽くす。だが、最善がすべて最良の結果になるわけじゃない。分かるな？』

『……うん。ごめん、みんな迷惑かけて』

真紀がまたぺこんと頭を下げた。パニ力を二つ半も食べたガウルの子どもは、さすがに満腹らしく、彼女の膝で丸くなって眠ってい

る。

タクはその丸い背中を指先で撫で、微笑むと立ち上がった、食事の入っている袋から新しいパニカをひとつ真紀のほうへ放った。

『君もすっかり食べる。馬車に座っているだけで気分を悪くするよ
うじゃ、その子の世話はできないぞ？』

『うん、分かった』

パニカを片手で受け取り、真紀が少しだけ笑顔を見せた。

？異界の乙女？とかなんとか言われて救世主気取りでも、実際目の前に守るものがあるのとないのとは全然気持ちが違う。わたしと真紀は、気分が悪かったのが嘘みたい、甲斐甲斐しくガウルの子の世話を焼いた。

タクの助言どおり、木の枝で作った籠に入れられたガウルの子どもは、馬車の後ろの荷物の陰に繋がれている。ちょうど日陰だし風が通るし、ひよっとしたらどこかでこの子のお母さんが見かけないとも限らないし。

なので、馬車の中を行ったりきたりしながら世話をすることになる。午前中までぐったり横になっていたのが、自分でも信じられないほどだ。

食事は二、三時間ごとで大丈夫だとタクは言ったけど、一時間もしないうちに鳴き声が聞こえ、わたしたちはまた席をたった。真紀がカップに蜜蝋の欠片と水を入れ、御者をしているルイスのところを持っていき、微温に温めてもらう。その間わたしが後ろへ行き、籠からガウルの子どもをタクに手渡しする。なぜか自然に決まった連係プレーだ。

わたしが席に戻ると、『あげすぎじゃないのか？』というルイスの呆れた声が前のほうから聞こえたけど、指環をしていない真紀は分からなかったようで、

「ダンカス アレース！（ありがとごじゃいまーす！）」
と元気に返して、こちらへやってきた。

拙いマフオーランド語（英語で言うLとRの発音が混ざっているせいだと思う）がそのまま翻訳されて聞こえるのが、ちょっと可笑しい。

一人でくすくす笑っていたら、真紀が「なに？」と聞いてきたので首を振った。

『なんでもない。あ、ね、これ余ってるから使つてよ』

鞆に入れておいた食べ残しのパニカを差し出す。

「いいの？」

『うん、食べ切れなかった分だから』

目の前に座るタクの視線が痛いけど、わたしは気にしないふりを決め込んだ。

真紀がだいぶ慣れた手つきで、ガウルの子を膝に乗せ、その子を落ちないように抱えた左手にカップを持つ。右手でパニカを蜂蜜湯でふやかそうとして、お腹を空かせたガウルが真紀の指をぱくんとくわえた。

「あー、もう待ってれば」

『真紀ちゃん、カップ持ってようか？』

「じゃあ、この子お願い」

わたしは両手のふさがった真紀の膝から、ガウルの子を抱き上げた。思ったよりも全然軽いけど、体はしっかりしてる。膝に乗せると、まだ薄く膜が張った目がわたしを見た。

いくつも八の字に皺のよったおでこが、すぐくおじさんくさい。

頭を撫でようとしたとき、その真ん中の皺がふたつ、小さく縦に動いた。

『え……』

「うそ。この子、目が四つあるの？」

真紀も気付いて声をあげる。普通の眼に見えるその上に、麻呂みたいに二つの小さな別の目が開いているのだ。ちゃんと瞬きもする。恐いというより、不思議な感じだ。

『それは副眼（ふくがん）

補助用の眼だ。この辺りは砂嵐が多

いから、砂に身を埋めてやり過ぎすために使うのだと言われる。本来はどうか知らないが』

両手が塞がっている真紀の代わりに、わたしは指環を嵌めた手で彼女の腕を掴んで、タクの言葉を伝えた。直接肌に触れなくても、薄い衣服なら指環の効果が大丈夫なのは試し済みだ。

案の定、真紀は分かったらしく、大きく頷く。

『へえー。環境適応ってやつかなあ。あ、指の水かきおつきい』

湿らせたパニカを差し出す真紀の手に、待ちきれないガウルの子が前足をかける。体に比べて太めの足は四つ指で、パニカを掴むように広げられた指の間には黒い皮膜が伸びていた。

『砂に沈みにくくするためらしいぞ』

『物知りだね、タク』

『そうでもない』

『謙虚だなあ。ルイスだったら絶対、？これくらい常識だ？とか偉そうに言うんだよ』

『何か言ったか、マキ？』

御者台から話題の主の声が飛び、真紀は首をすくめて舌をペロりと出した。わたしも口を押さえて笑った。わたしの膝のガウルにふやかしたパニカをあげながら、真紀が言う。

『そうだ、タク。マフォーランド語で悪口教えてよ』

『悪口？』

『うん。ルイスが日常会話ぐらいマフォーランド語でできるようになれっていうから、まず悪口から覚えようと思って』

完全に頑張る方向が間違ってるけど、真紀はやる気満々の目をしてる。タクが眉を上げた。

『本気で言ってるのか？』

『うん。馬鹿とかアホとかって簡単に使えそうなのから、？豆腐の角に頭ぶつけて死んじまえ？みたいなまで』

『過激だな。悪い言葉は覚えなくていいだろう。女の子なんだし』

『ルイスに馬鹿にされるから悔しいのー』

覚えたら、真紀なら連呼しちやいそうだ。わたしとタクは笑った。気付くと、膝の上のガウルの子はパニ力をくわえたまま寝てしまっていた。

『まだひとつしか食べてないのに』

『さつき食べたから、お腹いっぱいなんじゃない？』

『もう少し時間の間隔を空けて、一度にあげる量を多くしたほうがいいぞ』

『うーん、でも鳴いてると気になって』

『よく鳴くほうが赤ん坊が元気になる。放っておけばいい』

タク、ひよつとして人間の赤ちゃんも育てたことがあるんだろうか。いいパパになりそうな感じがする。

そういえば……タクって、彼女とか奥さんとかいるのかな。

肝心なことを確かめるのを忘れていたことに気づいて、わたしは蒼ざめた。まだ二十一だと聞いて勝手に未婚だと思っていたけど、こっちの人は結婚が早いかもしれないし、と考えていたら。

『タクって絶対いいお父さんになりそうだよー。結婚してるの？』

わああ、真紀ぐっじよぶ！

『いや。俺にはまだ早い』

！

頭の中でガッツポーズを決めながら、わたしはこの好機を逃さないように尋ねた。

『じゃあ、か、彼女はいるの？』

『彼女？ 付き合っている女性ならいないけど』

やったーっ！

わたしは顔がにやけそうになって、思わず下を向く。そのとき真紀と目が合って、彼女がにっと笑いかけてきた。わたしの考えは丸分かりだったみたい。

よかったね、と音を出さずに真紀の唇が動く。わたしも同じように、ありがとと呟いた。

『さて。こいつ戻してくるかあ』

『えー、もうちょっと置いといちゃだめ？』

『また次ね』

『じゃ次のご飯、わたしがあげてもいい？』

『いいよ』

蜂蜜でべとついた指をカシエで拭き、真紀がガウルの子を持ち上げて馬車の後ろへ連れて行く。膝の上が急に温もりを失って、汗ばんでいたせいで余計に涼しく感じた。

名残惜しそうに真紀の背中を見ていたら、タクの視線と合った。

『なに？』

『いや。ずいぶん顔色が良くなったと思って』

やさしい目で見つめられて、わたしの頬が熱くなる。

『馬車の速度も落としてくれたし、だいぶ慣れたから。ルイスもいてくれるし』

『あんな動物一匹で元気になるなら、最初から何か連れてくれば良かったな』

『……タク、それって』

タクは片目を瞑って、人差し指を唇に当てた。

『ルイスが承知しない。彼は魔法士だからな。自然の摂理をとても重視する。マキに変な期待を持たせないようにしてくれ』

『分かった』

わたしは頷いた。ラクエルが教えてくれた魔法の法則のことが頭に甦る。理屈はさっぱり分からなかったけど、魔法士の人はわたしたちとは違う視点で世界を視ているのかもしれないと漠然と思う。

そんな人たちでも分からなかった水門が、本当にこんなただの素人のわたしたちの前に本当に現われてくれるのだろうか。

『ねえタク。ちゃんとわたしたち、辿り着けるかな？』

『大丈夫だ。信じる』

『何を……？』

その問いに、タクは静かにわたしを見つめて言った。

『君自身を』

わたしがわたしを信じる。

一番簡単そうが一番難しいそのことに、わたしは知らずため息を洩らした。目の隅で、タクの腰にぶら下がる青いティディベア的笑顔が、ひどく薄っぺらく見えた。

3

その日の夜は、この旅初めての野宿だった。ガウルの子がいるので宿屋に泊まれないのと、馬車のペースを落としたので目的の街まで辿り着かなかったのだ。

真紀は申し訳なさそうにしていたけど、みんなで決めたことだからと、わたしは気にしないように言った。事実、気にしても仕方ないし。

友たちの中には絶対アウトドアはNGっていう子もいるけど、わたしは割合平気なほうだ。学校行事でいい思い出はひとつもないけど、父親が海岸バーベキューとか好きな人だったから。前の旅でも、みんなでわいわい楽しかったし。

でも、さすがに知らない場所で四人だけっていうのは、ちょっとぴり不安だ。少しの木と大岩に囲まれている場所に馬車を停めたけど、日が暮れると辺りは本当に真っ暗の闇。中央で燃やす焚き火が明るいだけに、余計周りの暗さが増して見えるようだった。

星空はガラスビーズをこれでもかっていうくらい散りばめたようなすこさで、三つの月も綺麗だけど、やっぱり電気の明かりが正直恋しくなる。

配膳を終えて、わたしはポットのお茶を注いでいる真紀の背中へばかりついた。

『どしたの？』

『なんか、くつついてたい気分』

『甘えんぼさん。はい、これ理緒子の』

『ありがとう』

わたしは複雑な香気を放つお茶のカップを両手に受け取った。すうっと鼻に抜ける香りは、キッキーナだ。

「ルイス、ここに置いとくね」

真紀が一足先に石の椅子に腰掛けるルイスの足元に、お茶のカップを置いた。世話は交替でと決めたとおり、今はルイスがガウルの子の食事をあげている。

自然とルイス、わたし、真紀、タクの順に、馬車を背中にして焚き火の周りに半円を描いて座る。真紀が自分のお茶とタクのお茶を持って席に向かいかけ、ふと止まった。

「タク、あたしと席代わる？」

日本語で言ってから、石の椅子にカップを置き、わたしの左手をとって言い直す。

「タク、あたしと席代わる？ そっち当たるでしょ」

タクの席の左横には、ちょうど二人分くらいの大きな岩がある。確かに体格のいいタクには邪魔になりそうだけど、そういう微妙なことを口にしていいものなのかな、とわたしは思う。

「いや、大丈夫だ。ありがとう」

「ならいいや」

真紀はあっさりそう言うと、タクにお茶を渡して自分の席に座る。なんだっただらうと隣を窺うと、非難するような目の色が出たのかもしれない、真紀がわたしを見た。

「ん？ だってタクって左利きでしょ。食べる時、岩が邪魔かなあつて」

「え……」

わたしは一瞬混乱して、その場に不自然な沈黙が下りたのに気付くのが遅れた。

わたしの頭の中で、タクとのいろんな場面がぐるぐる回る。

だけど、手を差し出してくれるときはいつも右手だったし、字を書くところは見てないけどコマの手綱を持つときも右手だったよ
うな……あれ、左手だったっけ。

今まで一緒に食事をした時も、片手にカップ、片手にパニという状態だったからあまり気に留めていなかった。しかも、タクはいつ

も右側にマントをかけていて、右手を見ることがほとんどない。

あれ……。

頭の中で何かが引つかかる。混乱する思考から抜けようと、別のことを口に出した。

『よく、知ってるね』

『あー……アルと三人で食事したとき左手を使ってたから、タクって実は左利きだったんだなあって思ったの。それだけだよ』

真紀は明るく流そうとしたけど、タクはなぜか重く黙っている。

膝の上に置いた左手に視線が落ちた。

『マキは良く見ているな』

『ごめん、タク。あたし余計なこと言った』

『……そうか。本当に良く見ているんだな』

真紀が謝ったのに、タクは同じ言葉を繰り返し、その言葉の含みにわたしの心はざわめいた。

『俺の利き腕は、左に見えたか？』

『うーん。実はよくわかんないんだよね。だって剣は左側にあるし、普段は右手を使うでしょ。元は左だったのが、右に矯正されたのかなあとか……。でも、咄嗟には右が出るんだよね。右手に防具嵌めてるし』

『俺は最初から右利きだよ。本当は右を使わないといけないのに、つい癖で左が出てしまっただ。気をつけるようにはしていたんだが』
そう告げ、タクはマントの下から引き抜いた右手を外気に晒した。指先までの滑り止めのついた革の手袋。手首のボタンで留めているそれを、タクは左手と口で外し、脱いだ。

『！』

タクの右手は、ぼろぼろだった。かろうじて？手？と分かるくらい、四本の指は節くれて折れ曲がり、親指は先が切れて短くなっている。傷痕らしきピンク色の筋が何本も走って、一度ばらばらになった指を誰かがめっちゃめっちゃにくっつけ直したようだった。

『タク、それ……』

『見てくれは悪いが、普通に動く。だが以前ほど動かせないから、ときどき左手が出てしまうんだ。傷を治すうちに左を使うようになって、今では両利きだ』

『ある意味便利？』

『まあな』

おどける真紀に、タクも唇の端を微妙に曲げた。

『診せてみる』

ルイスがガウルの子をわたしの膝に乗せ、タクのほうへ歩み寄る。その右手を両手に取り、空にかざすようにして、厳しい眼差しを注いだ。

『刀傷だな。一年……二年前くらいか？』

『そうだ』

『例の討伐か』

類を見ない盗賊団との対決がタクに与えたのは、名誉だけじゃなかった。乗馬のときに言っていたアル王子の？良い治療になる？という言葉が、急に重い意味をもって耳元で甦る。

わたしは、訳も分からず喉の奥が震えるのを感じ、膝の上のガウルの子を抱きしめた。

『若かったからな。無我夢中でやつらと戦って、気がついたら指が手から外れかけてた。繋がっただけましなほうだ』

『繋げ方がひどすぎる。うまく気が回っていない。これでは力も入らないし、長く使うのも難しいぞ。早く医者か魔法士に診せればよかったものを』

『そのあと荒野で一晩彷徨ったんだ。指が腐って落ちなかっただけ幸運だと、叱られたよ』

『今度同じことがあったら私に言え。一晩経っていようが、まともな指に治してやる』

『土団長さまにか。法外な治療費をとられそうだ』

『特別価格で提供するよ』

喋りながら、ルイスはタクの右手に治療術をかけているようだった

た。ほんのりと、その周りが焚き火とは違う明かりに包まれている。こんなに長く続けるなんて、いつもないことだ。

五分ほどして、ルイスはタクの手を離れた。

『動かしてみろ』

『ああ……だいぶ楽だ。ありがとう』

『こういうことは早く言え。隠していても、誰の得にもならん』

ルイスは素っ気ない口調で言い、タクの肩をぼんと叩いて席に戻った。彼が石の椅子に腰を落ち着ける間もなく、真紀の質問が飛ぶ。ルイス、タクの手治りそう？』

『斬られたてならともかく、あの状態で固まってしまっている今は無理だ。地道に気をめぐらせ、運動させて筋力を補えば、日常生活で問題のない程度には回復するだろう』

『日常生活、か……。剣を持ってない騎士にどれほどの価値があると思っ？』

呟くタクの声に、苦く、澀むものが漂う。わたしの胸がきり、と痛んだ。

『満足に剣を振るうことのできなくなった俺が、將軍の号を授かるのは皮肉としか言いようがない。何度も辞退したが……聞き入れてはもらえなかった』

『武人とは、腕力のみを求められるものではない。君がたった一人で凶暴な賊徒の集団に立ち向かった、その心根に与えられた荣誉だ。充分に値する』

『王子からもそう言われた。が、やはり簡単には納得できない』

ルイスの台詞にそう反論し、タクは歪んだ右手で拳を作った。目を閉じる。

『というより、納得したくないのだろうな。俺は、まだこの手の過去に未練を残している』

『剣は握れるの？』

『ああ、問題ない。投げてみる』

タクは足元の焚き火用の小枝を真紀に放り、自分は剣を持って、

焚き火の向こう側に立った。

真紀が座ったまま大きく振りかぶって、バトンくらいの枝を投げつける。瞬間、タクの腰からひとすじの銀色の光が奔り、彼に届く前に枝がぼとりと地面に落ちた。

『わ……』

見ると、枝はきれいに縦半分に分かれている。もう半分は、どうやら向こうの茂みに落ちたみたいだ。タクの右手には、あの大きな長剣が抜き身で握られている。

にやりとルイスが笑う。

『なかなかの腕前だ。安心したよ』

『さすがに「双月」土団長の治療術を受けると違うな。格段に楽だ』

『あとで王子に請求を回そう』

なんだかルイスが守銭奴じみたことを口にかけている間、真紀とわたしは開いた口がふさがらない状態になっていた。

『わー……なんも見えなかった。なにがどうなったん？』

『まじわっかんない』

驚きすぎて、思わず二人とも地が出てしまう。剣を鞘に納めて戻って来たタクに、真紀が尋ねる。

『タク、あれで剣を満足にふるえんって、どんなレベル求めてんの？』

『剣はその重さと大きさで、威力が決まる。前はもつと幅広でこの倍ほどの重量の剣を使っていたが、握力が弱って片手一本でも使えるものに替えたんだけ』

鞘に納めた剣を岩に立てかける。鞘を固定する紐に結んだデディベアが、ぶらんと揺れた。

『俺はずつとこの体格と、巨大な両手剣の破壊力を武器にしていた。だからそれが不可能になったとき、自分の価値がなくなったように思ったんだ。』

だが……戦い方はひとつじゃない。破壊力がなければ、それを超える速さと正確さを身につければいい。最近やっとそう思えるよう

になった。俺は俺でいいのだと……』

タク……。

『リオコはリオコになればいい』

以前、そう励ましてくれた彼の抱えていたものを知り、わたしは胸が熱くなった。彼はどれほどの想いをもって、あの言葉を口にしたのだろうか。

何も言えないよ……。

不自由な右手を補おうと左手を使っていたこと、知らずにその怪我をしている右手に何度も手を預けたこと。そして、そのことにずっと自分が気付かなかったこと。

いろんな想いが一気に頭を駆け巡った。

わたし、タクの何を見てたんだろう。

タクの視線の先、笑い方、歩き方。手の温もり、声の響き。全部、わたしに向けられていたものしか見ていなかった。

彼が、わたしにどう話したか。どう微笑んだか。どう接してくれたか。

わたしに見せていたのなんて、タクの一部でしかなかったのに。

「好きなら、受け入れてあげんと」

真紀の言葉が、今さらながら身に染みた。わたしの？好き？は、なんて一方的で身勝手だったんだろう。

タクの顔が見れなくて下を向く。食事を中断されたガウルの子どもが、腕の中できうきう鳴き声をあげはじめた。

そのわたしたちの様子をどう思ったのか、タクが右手に手袋を被せ直す。

『見て、あまり気持ちのいいものではないな。すまない』

はっとする。弾けるように真紀の声があがった。

『謝ることなんてないよ、タク。元はといえば、あたしが変なこと言い出したせいだし』

『マキのせいじゃない。俺がもっと右手をしっかり使えていたら、君に気付かれることもなかった』

淡々とした調子が、今までその右手を見た人たちの反応を窺わせた。わたしは焦る。

違う、タクの右手が嫌なんじゃないのに。
嫌なのは、こんな自分の心なのに。

手は傷だらけで、剣を上手く握れないかもしれないけど、わたしは何度もその手に支えられてきたのに。わたしはタクを。

心の中が声でいっぱい埋まる。だけど、わたしの唇は、上と下が頑丈な糊でくっついたみたいに離れなかった。

少し難しそうに手袋を嵌めるタクを、真紀が手伝いの声をかけそびれたのか、戸惑い顔で黙って見ている。沈黙が気まずい。かわい
いガウルの鳴き声も焚き火の音も、石のような気まずさを和ませてはくれなかった。

何か言わないと、何か言わないと……！

気持ち空回りするだけで、かっこいい台詞は何も浮かばない。
しゅる、と衣擦れの音をたてて、タクの右腕がいつものようにマン
トの下に隠れる。

『わ、わたし……っ』

突然声を発したわたしに、タクが顔を上げる。真紀も、ルイスも
こちらを見た。

『わたし、タクの手、好き……だよ。たくさん、助けてもらったか
ら』

『……ありがとう』

驚きと喜びと戸惑いが混じったその言葉を、タクがどんな顔で言
ったのか、残念だけどわたしは見る事ができなかった。

自分の口から出た台詞の恥ずかしさに、腕に抱えたガウルの子の
毛に顔を埋めるのが精一杯だったから。

うわ。やっぱい、超恥ずかしいよ。

顔から火を噴くとはこのことだ。もうなんか頭の先まで熱い。

抱きしめられたのとお腹が減ったのとで、腕の中から情けない『
きうっ』という鳴き声があがり、わたしが我に返ったのは、たっ

ぶり五分後のことだった。

その夜、わたしと真紀は馬車で眠った。タクとルイスは火の番をしながら、外で毛布に包まっていた。いくら暖かい気候でも、結構山を登ってきたから寒いはずなのに。

風邪引かなきゃいいけど。

思いつつ、さすがに馬車で四人で寝ようとは言えず、わたしたちは彼らの勧めに甘えた。

「あー、なんか悪いことしたあ」

倒した座席の上で寝転がりながら、真紀が唸る。ガウルの子を連れてきたことが、こんなにも旅に影響したことに、さっきから軽く落ち込み気味だ。

『もう、言っただってしょうがないじゃん。みんなで決めたことだし』
「でもさー、あたしたちはいいけど、あの二人きつと交替で見張り番とかするんでしょ？ 馬車運転してくれた拳句見張り番とか、どんどんだけこき使うよ。あたし馬鹿だー」

『んじゃ、あの子置いてく？』

「やだ。やなんだけど……なんか、やっぱり軽々しく考えすぎてたのかな、あたしって」

『真紀ちゃんも勢いのヒトだからねえ』

茶化して言うて睨まれた。

『だけど、わたしたちにできることって、ほんとに少ないんだよ。だって、まだ来て十日でしょ？ 環境だって全然違うんだから、そんなにすぐいえるんなことなんてできないよ』

「うん、分かってる。ルイスが聞いたら絶対？君のできることは、みんなに迷惑をかけないようにおとなしくしていることだ？とかなんとか言っただろうけど」

『はは、ありえるー』

「でも、なんか口惜しいんだ。してもらってばかり、てのがさ」
うつぶせで両肘をつき、その手の上に顔を乗せて、真紀は外を見ながら呟いた。

その瞳と横顔に、赤い火の色が揺らめいて映る。真紀の花は、真つ赤なフェイオウ。わたしの花は。

『そのために今、旅してるんだよ。わたしたち、なんにもできないんだもん』

聖地へ、行く。

わたしがわたしでいる理由は、辿り着いた地にはないかもしれない。だけど、わたしがわたしでいるために、わたしにしかできないことをするために、わたしはそこへ行く。

タキ「アマグフォーラへ。」

真紀が、小さく微笑んでわたしの手をとった。きゅっと握る。

『うん、そうだね。一緒に行こう』

『うん、行こう』

囁き合いながら、わたしたちは眠った。

真紀の連れてきた小さいお客さんがもたらした変化は、野宿だけじゃなかった。それは睡眠。

だよね……。

食べては寝て、寝ては食べる赤ん坊に昼夜は関係ないことを、わたしたちはすっかり忘れていたのだ。長く続く鳴き声に、真紀がむっくり起き上がる。

「行ってくる」

『ん〜ついてく』

「いいよ、りおは寝てなよ」

『いく』

わたしは毛布を頭から被り、そのまま真紀の後ろにくっついた。なんだか真紀の背中って気持ちいいんだよね。実は胸もふっかふ

かなんだけど、いらぬ嫉妬が燃え上がりそうなので、抱きつくのはもっぱら背中だ。

やわらかいのに安定感があるその背中に、わたしはぺったんと貼り付いて、眠い目をこじあけてご飯を用意し、ガウルの子を籠から出す真紀について回った。ちなみにご飯一式は真紀が、ガウルはわたしがつけて歩く。

『ルイス、お湯ちょうだい』

火の傍で長く伸びている布袋の細いぼうが、ぺろんとめくられて金髪が頭を出した。

『もう少し放っておけ』

『ん。さつき食べが少なかつたんだよ。これあげたら朝までほっとく』

『君たちも寝ろよ』

『分かつた。お休みー』

お湯を入れたカップの中の蜂蜜をスプーンでかき混ぜながら、真紀がずるとわたし（とガウルの子）を連れて立ち去る。馬車に戻りかけ、はっとふり向いた。

焚き火から離れたその奥は、わたしたちの目では何があるかわからないくらい、洞窟のような暗さだ。夕方まだ日があつたときは、そこには岩と木が何本かあつたはずだ。それすら眼を凝らしても見えない。

その闇が、なぜだか揺らめいて、こちらへ襲いかかってきそうな錯覚がした。首筋の肌がぴりぴりと騒ぐ。わたしはガウルごと両腕で真紀に抱きついた。真紀も抱きしめてくる。

『なにこれ……なんか、周りざわざわしてる』

『怖いよお』

『落ち着け、二人とも。彼らはこちらが何かしない限り、何もしない』

ルイスの言い方に、本当にこの真っ暗闇の向こうに何かがいるのだと気付いた。焚き火の向こうを見ると、そんな状況なのにタクは

すっかり寝入ってしまったている。

『夕……』

『寝させておけ。この中で眠れるとは豪胆な男だ。危機を察したら、勝手に起きるぞ』

『ルイス、これってまさか』

『ああ、おそらくこちらの様子を見に来たんだろうな。タクの作戦が上手くいったようだ』

つまり、今ここにガウルの群れが来てるってこと？

あのミルクを求める鳴き声は、馬車の中だけでなく外にも聞こえて当然だ。わたしは今さらながら、タクが言っていた？群れを探す？という意味がようやく飲み込めた気がした。

『危なくないの？』

『近くにいるように感じるが、実際はもつと遠い。半チエクほど離れた崖からこちらを見張り、ときどき数頭が様子を偵察に来ているようだ』

わ、さすがルイス。真っ暗でも見える魔法とかあるのかな？

なんてくだらないことを考えていたら、ルイスに優しく『そろそろ馬車に戻れ』と促されてしまった。仕方なく二人で返事をして、ひつつきもつつきしたまま馬車に戻り、そこでガウルの子に食事をあげる。

ルイスもタクも、見張ってくれている。あのうごめいた闇が襲ってくることはないのだと言い聞かせつつも、わたしたちは恐くて、ガウルの子を元の籠に戻しに行くことができなかった。

そのままもつれ合うようにして、二人と一匹で朝までのわずかな眠りに浸った。

朝、起きたらいつの間にか、馬車の前側の庇が扉のように閉じられていた。窓を開けると辺りはひんやりと寒く、濃い霧に包まれていた。手を伸ばしても指先が見えるかどうか、それくらい濃厚で真っ白なガス。

寝起きの悪い真紀を起こすと、さすがにその霧を見て驚いていた。鳴きながらふんふんうるつくガウルの子を座席から落ちないようにつるんとした真紀の髪は、指でざつと梳かすだけでも形ができるんだ。羨ましい。

着替えの早い真紀は、わたしが鏡を覗きながら髪を整えている間に、馬車の後ろからガウルの子の籠をとってきた。その籠に、昨日よりも犬らしくなってきたその子を押し込める。

「やばい、なんかやばそうだよ、理緒子。早く片付けよう」
「う、うん」

気圧されるように頷くと、わたしは化粧ポーチをおさめ、寝巻きを片付けて座席の背もたれを起こした。

外に出ると、すでに焚き火は消え、ルイスがこちらに背を向けて立っていた。その手には、細身の剣が白く輝いている。わたしたちに気付いてふり向く。

『二人とも馬車に戻れ！ すぐに出るぞ』

出る、と言われて目を凝らすと、馬車はすでにコマが繋ぎ直され、御者台にはタクが座っていた。

わたしの手を握る、真紀が震えている。いや、震えているのはわたしかもしれない。二人で小刻みに震えながら、わたしたちは金縛りにあったようにその場から動けずに、白い霧の海を注視した。

ミルク色の波がふわり、ゆらりと形を変えるたびに覗く　光。
明らかにぎりりとした生き物の目は、大きく小さく無数の灯火と
なって、白い波の向こうから瞬きもせずはこちらを見ている。

取り囲まれてる……！

わたしは慄いた。膝が笑う。壊れたおもちゃみたいにかくかくし
ている。

恐くてたまらないのに、一方では、あの小さなほうの光はガウルの
額の目なのだろうか、なんて考えてしまふ。完全な逃避だ。

『全員早く乗れ！　ここを出るぞ』

鋭いタクの声に、びくつと背筋が震え、わたしは現実に戻った。

真紀とくつついたまま、馬車によじ登る。変な表現だけど、足が萎
えてよじ登るしかなかった。

最後にルイスが馬車にやってくる。剣はまだ手に持ったままだ。

『マキ』

『……やだよ』

『マキ。これが最善なんだ』

『っ……』

真紀が半泣きになりながら、腕に抱えていた籠からガウルの子を
引っ張り出した。ルイスに渡そうとして、引っ込める。

『マキ』

『ちゃんと戻れ、るの……？』

『私が責任を持って戻してくる。君がその子を渡してくれたら』

ルイスの声は冷静で、突き放していて、それでいてやさしかった。

ガウルの子をルイスに渡した途端、真紀が泣き出す。つられてわ
たしも泣いた。

何も知らないしわくちやの変顔が、ぼやんとした目でわたしたち
を見ている。耳は付け根から少し立って、目を覆っていた膜が薄く
なってきた。体もなんだか、すっかりして見える。

たった半日にもならないのに。

この子は、生きて、成長してるんだ。そう思ったら、また泣けて

きた。

『いつかまた会える』

ルイスの声に何度も頷いて、わたしたちは、彼に連れられて去っていくガウルの子をじっと目で追った。ルイスの金髪が白い霧の向こうに隠れた瞬間、真紀が馬車を飛び出そうとする。

わたしははっと、彼女の胸にしがみついて押さえた。

『だめだよ、真紀ちゃん。邪魔しちゃう。帰れなくなっちゃってもいいの？』

『理緒子……』

『あの子、帰れなくなってもいいの？ お父さんとお母さんのところに、きちんと帰ってあげようよ』

なんて子どもっぽい説得なんだろう、わたしってば。

だけど、わたしの頭の中はそのことでいっぱいだった。あの子は、きつと両親のもとに帰る。わたしがそう願うように、それが一番幸せなんだ。

こっちの世界の人に恋しながら、元の世界を恋しがる。その矛盾を心の底に押し込め、わたしはただ祈った。無事に帰れますように、と。

数分後、ゆっくりと薄らいでいく朝霧の合間から、再び金色の頭が覗き、こちらへとやってくる。かさりとも音を立てずに、ルイスは帰ってきた。剣は鞘に納めて、手ぶらだった。

『ちゃんと戻したよ』

それだけを言うと、真紀の頭をくしゃりと撫で、馬車に乗り込む。すぐに馬車が動き出した。

真紀が、涙で真っ赤になった頬ぺたを手のひらで拭う。

『ど……どうだった？ ちゃんと、仲間だって、分かってくれた？』

『ああ』

『みんなに齧られたりとか、なかった？』

『現われたのは、一匹だ。私はあの子を群れから離れた岩の上に置いて、少し距離をとって待ったんだ。すると群れから一頭が出てき

て、子どもに近づき、匂いを嗅いですぐに首をくわえて連れて行ってしまった』

『く、首くわえたの？』

わたしは驚いて語尾をひっくり返した。声もなくルイスが笑う。

『首の後ろの柔らかい皮膚を口で咬んで持ち上げるんだ。母親は子どもをそうやって運ぶ』

『なんだ。じゃあ、お母さんだったのかな？』

『分からない。ガウルは母系集団だからな。複数のメスがみんなで子どもを育てる。母親だったのかもしれないし、兄弟かもしれない』
『でも、くわえて運んだってことは、あの子を受け入れてくれたってことだよな？』

『おそろくな』

『よ、よかったあ』

座席に腰掛けたまま、真紀が手足を投げ出してへによりと崩れる。およそ女の子らしくないだらけ加減に、わたしは笑い、ルイスは眉を顰めた。

『はしたない』

『気が抜けたのー。だって、鳥とか人間が巣に戻すと、親が子どもだと思わずに殺しちゃうとかいうじゃない。二人が脅すから、いろいろ想像しちゃったんだもん』

そんなことがあるんだ。わたしは感心したのに、ルイスは違ったようだ。

『なぜそれを知っているのに拾ったりしたんだ』

『気がついたら拾ってたの。もういいじゃん。ルイス、お説教ばかり』

真紀が子どもみたいに、ぷう、とまだ赤い頬を膨らませて、そっぽを向く。

『説教をするのは、君がそうさせるようなことをするからだろう』

『あーもう。ほんとルイスしつこい』

泣いたのが照れ臭いのか、苛立たしげにぼやいて、真紀は席を離

れた。わたしから手を離し、

「タクんとこ行ってくる」

『分かった』

日本語は分からないはずだけど、ルイスは真紀の言ったことを察したらしい。

『邪魔はするなよ』

「聞こえませんか」

お互い言葉が通じてないのに、会話として成り立つちゃうところがすごい。

愛の力かなあ。

なんて、心の中でにまにま考えていたら、なぜか前の席に座るルイスは沈んだ顔をしている。

そういえば霧がすごいせいか、今日はいつものシヨールをつけていない。なんでもルイスの金髪碧眼はこの国ではめずらしくて、目立つのを避けるために被っているらしいけど、すぐもつたいないと思う。

ルイスの顔は本当に綺麗だ。男の人に綺麗というのもなんだけど、女性的というのでもないやや面長の輪郭に、すっきりした鼻筋、深く切り込まれた両眼。その造形に淡い色彩が、この上もなくよく似合う。

あー眼福。

タクもかっこいいんだけど、ルイスは別格。観賞用だ。少しうつむいて、窓枠に頬杖をつくルイスの斜め顔を眺めていたら、青い瞳がちらりとこちらを見た。

『なに？』

『うん。なんか、ルイス落ち込んでるっぽいから』

『朝は苦手なんだ』

『そっか』

うん、朝の物憂げな美形。絵になります。

『少し気をつけたほうがいいかな。マキにも言われた』

『真紀ちゃんも寝起き悪いよ。朝起こすの大変だもん』

『そうなのか？ うちにいたときは、そんなことはなかったみたいだけど』

『一度起きると平気なんだよ。起きるまで、二度寝三度寝しちゃうの』

『三度寝……』

肘をついたまま、その手を額に当ててルイスが笑う。そんなふう
に真紀をネタにしてしばらく二人で喋っていたら、会話の途切れた
あと、ルイスが真面目な顔でわたしに尋ねてきた。

『リオコ、やっぱり君は家に帰りたいか？』

わたしは目を逸らし、黙って頷いた。その質問は、きつと真紀に
したかったんだらうと、直感的に思う。

そっか。それでルイス元気なかつたんだ。

わたしが、群れに帰るガウルの子にわたし自身を重ねていたよう
に、ルイスも元の世界に帰る真紀の姿を見ていたのかもしれない。
ルイスはそんな感情をひとかけらも見せずに、ただ綺麗に微笑み
かけた。

『そっか。きつと帰れるよ』

『……ねえ、ルイスは、わたしたちに帰って欲しい？』

これはちよつと意地悪な質問だ。そしてもちろんこの？わたした
ち？は？真紀に？という意味でもある。それはわりとすんなりルイ
スに伝わったようだ。

表情を隠すように、彼は長い指で目の辺りを覆う。

『困ったな。そういう質問をされるとは』

『答えてよ。そうじゃないと、水門開けたら、わたしたち元気に帰
つちゃうかもよ？』

『それは、元気に帰っていかないという選択もあるということか？
』教えない。だって、旅の間なにがあるか分からないじゃない。で
しょっ？』

謎かけみたいなやりとりに、ルイスは少し黙り、口を開いた。

『帰りたくない、と言わせるように努力はするつもりだよ』

わあ、ルイス、結構本気だ。

恋愛経験のないっばい真紀は、こういう人にロックオンされて大丈夫なんだろうか。

心の中で同情はするけど、基本的にわたしは恋愛の味方だ。真紀には悪いけど、ここはルイスを応援させてもらおう。

『そっか。がんばって』

『リオコは頑張らないのか？』

『わたし？』

『そう。やっぱり……帰りたいたらどう？』

タクを好きなのに。

口にされない一言は、それでもけっこうきつい。わたしは下唇を噛んで、ちよつと黙った。声がかさつく。

『がんばるよ。でも……分かんない。わたし、先のこと考えるの苦手だもん』

『私もだ』

ルイスがいつもと違う、どこかにはかんだような顔で、わたしの唇にまとわりつく髪を指先で払ってくれた。さすがに照れ臭い。

だけど……男の人と恋バナかあ。

元いた世界じゃ考えられないこの関係はなんとなく、一人っ子のわたしには経験のない、お兄さんという感覚が一番近い気がした。

もし、こつちへきてすぐにルイスに会っていたら……その後でタクに会っていたら、わたしはタクを好きになっていたのかな。

どうしようもないことを思う。

『ねえ、ルイス』

『ん？』

『わたし、二人に会えてよかった』

このまま、どちらの結果にも辿り着かないまま、旅がずっと続いていけばいいのに。

絶対にありえない空想に飛ぶ心を、耳慣れた馬車の車輪の音が、

少しずつ少しずつ現実へと引き戻してくれていた。

『もう霧は晴れたようだな』

しばらくして、ルイスが閉めていた窓の木戸を開ける。真っ白な霧が包んでいた朝は肌寒かったのに、今は馬車の中に熱がこもっていた。

窓を開け、外気を入れたルイスは外を覗き、わたしを手招く。

『見てごらん』

『なに？』

『ほら、あそこだ』

指差されたほうに目を遣ると、坂を下って来た道の周辺に転がるごつごつした岩場に、何かが立っていた。黒っぽい体。犬にしては体形が丸くて、猫にしては大きくて鼻が飛び出ている。

体はふさふさした毛で覆われ、首の後ろには銀色の鬣（たてがみ）が炎みたいにたなびいている。岩と木の間を動く横姿には、脇腹から後ろ足にかけて、見事な銀の縞模様が浮かびあがって見えた。そして、どの顔にも四つの輝く眼。

『あれ……』

『あれがガウルだ。すごい数だな。三十はいる』

それはとても不思議な光景だった。黒くて銀色の鬣をもつその獣たちは、四つの目でただわたしたちを観察しているようだった。

怒るでもなく、拒むでもなく、ただじっと。

ここはきつと彼らの社会で、わたしたちは招かれざる客だったのだろう。だから、帰るのを見届けられてるんだ。なぜだかわたしはそう感じた。

『これだけいるのに襲われないというのも、気味が悪いものだな』

魔法士のルイスにとっても、これはあまりない出来事みたい。緊張した顔色をしている。

遠くの岩場には、大きめのガウルが小さなガウルを傍に連れて立っていた。一瞬あの子か、と思うけど、何匹かそういう親子がいて、

どれがそうなのか確信がもてない。

そのとき、ふいに視線を感じる。はっと見上げると道のすぐ傍の大岩の上に、一際巨大なガウルが立って、こちらを見下ろしていた。赤っぽく光る四つの瞳は、血に飢えた獣ではなく人でもなく、わたしたちの及ばない未知の言葉を発しているようだった。その足元に纏わりつく、小さな影。

あの子だ……！

ぐっと胸が熱くなる。ああきつと、お別れの挨拶をしに来てくれたんだろう。そう信じたい。

『……真紀ちゃん、会えたかな』

『会えただろう。こんな近くにいるんだ。気付いてるよ』

刺激をしないように、小声でわたしはルイスと会話をした。御者台にいるタクと真紀も、この親子との最後の挨拶を交わしてくれてくれればいいと願う。

やがて、大きなガウルは子どもの首を口でやさしく啜えあげると、風のように岩山の陰に消えた。それをきっかけに、他のガウルたちも瞬く間に姿を消す。

静かな別れにふさわしくない車輪の音が、やけに耳に大きくざわめいて響いた。砂利の多い道にうすく轍（わだち）の跡を残しながら、わたしたちはガウルの棲む山を下っていった。

山を下りて行き着いた先は、ブングルト最後の村ナアカだ。ガウルの群れの見送りを受けたわたしたちは、馬車を停めて朝食をとる間もなく、村に着いてしまった。

石の多かった道が土埃の立つやわらかい道に変わって景色も緑を増すと、馬車にすれ違う人たちも増えてきた。多くは外套をすっぽり被った旅の人だ。見た目は暑そうだけど、旅にはこの外套が必需品らしい。わたしたちのマントにも、同じようなフードが付いている。

似通って見える外套姿の旅人たちも、馬車の窓から眺めているうちに、いろいろ種類が分かれることが分かる。

地味な灰色や茶色の無地の外套を被るのは、主に大きな荷物を抱えている商人たちだ。白っぽい外套は、ヘクターさんのように胸にお守りを提げているので、たぶん神官関係の人。たまに模様が入ったり、縁に刺繍を施した外套を見かけるけど、そういう人は剣などを提げた数人の集団で、ちょっとお偉い雰囲気がある。

人間観察が好きなわたしは、そうやっていろいろと想像を巡らせながら、すれ違う人たちを見ていった。馬車ががらごろと、背を丸めるようにして歩くベージュの外套の人の左横を通りすぎる。そのとき、窓から遠ざかるその旅人が、うつむいたまま小さく笑いかけた。

……え。

フードの陰になって顔の造りが全部見えなかったわけではないけど、とぼとぼとした足どりは確実に違和感を覚える、力強く笑みこぼれる白い歯。そして、不思議に光る両目は　金色だ。

なんだろう、あの目。

今朝、朝霧の中に輝いていた灯火のような獣の眼を思い出し、わたしはぶるりと震えた。ふいにその旅人が立ち止まり、フードの下の口元に、立てた人差し指を当てる。

黙っている、という意味なんだろうか、と思った瞬間。

『えっ！』

その人が飛び上がったと見えた間に、そこから消えた。

思わず窓を上げて身を乗り出し、土埃のたつ道をふり返る。それでも、どんなに周りに目を凝らしても、あの外套の人の姿は最初からいなかったように消え失せていた。

『どうした、リオコ？』

ルイスの声に我に返る。わたしは『なんでもない』と答えて、席にお尻を戻した。

夢、だったのかな……？

それくらい一瞬の出来事だった。

ルイスから聞いた、標的にされる可能性がある、という話が頭を掠める。

だけどそれを現実と理解するには、今までの日常とかけ離れた内容だけに実感が伴ってくれないし、ガウルの一件で疲れていたわたしは、もやもやする思考を頭から追い出した。

わたしが考え事をしているうちに馬車は村の入り口をくぐり、市場の並ぶ街中へと入っていった。小さな村みただけど、まだ朝のせいか道路の両側いっぱいにはテントが立ち並び、目にも賑やかな品物たちが山となつて積まれて売られていた。

人の出入りも多くて馬車は自然、速度が落ちる。すると、ばんつと音をたてて、馬車の窓の外枠を誰かが掴んだ。子どもの手だ。薄汚れた顔が開いた窓から、ぬつと覗く。

『五十ゼン！』

『え、なに？』

『おじよさま、コジ、五十ゼン！』

馬車の横で小走りになりながら、その子は手に持った籠を示す。

前に座るルイスが舌打ちして、

『だめだ、あっちへ行け！』

低い声で脅しつけ、乱暴に窓を閉めた。降りてきた木枠に指を挟まれ、子どもが悲鳴をあげる。

『なにすんだよ、畜生！』

乱暴すぎるんじゃ、とルイスをたしなめようとした途端、ダンツと激しい勢いで窓が外から殴りつけられた。

『ねーねー、四十にまけとくから買ってよー』

ダンダン、ダンダン、と衝撃は激しさを増す。恐くなったわたしは窓から離れ、椅子の端に移動した。と、今度は扉のほうが叩かれる。ルイスが席を立てて御者台へ怒鳴った。

『マキ、こっちへ戻るんだ！ タク、速度をあげて吹っ切れ。とりあえず市場を抜けたら、一度どこかで止まろう』

『分かった』

御者台にいた真紀がルイスの隣の席に座るなり、馬車が勢いよく走り出した。周りはまだ人がひしめいているはずだけど、タクが掛け声で追い散らしているみたいだった。

すぐに馬車を叩いていた音は車輪の音の向こうに消え、子どもたちの声も悪態と一緒に遠退いていった。

『な、なんだったの、今の？』

『物売りの子どもたちだ。この市場を抜ければ、いなくなる』

『すごい数だったよ。馬車をぐるっと囲んでさ』

御者台で間近に見たのか、真紀が少しこわばった顔をしている。

『なにかひとつくらい買ってあげればよかったかな？』

わたしが言うと、ルイスが金色の眉を顰めた。

『一人だけ買うと、他のものも買ってくれと言い出して收拾がつかない。危険だ』

たしかにあの人数で迫られたら、ちよつと恐いかもしれない。

『それにあの子たちの売っている物は、売れ残りの果実や混ぜ物をした酒などだ。買っても碌（ろく）なことがない』

『ひよつとしてルイス、買ったことがあるの？』

『……社会勉強というやつだ』

気まずそうに、ルイスが肯定する。わたしたちは笑った。

なるほど、一度痛い目に合ってるから、なおさら拒否なわけだ。

真紀が意外そうに、魔法士の端正な顔を覗き見る。

『あれ、ルイス。ここに来たことがあるの？』

『ああ、一度ね。それに、物売りの子どもたちは地方に大勢いる』

あんなに小さな子たちが、物を売って生活している。きつと学校にも行っていないだろう。

まだ小学生くらいの子が働くという現実はわたしのいた世界にもあつたはずなのに、身近になかったせいかけに重い。

でも真紀は、そっちよりも別のことのほうに気をとられたようだ。

『じゃあルイス、タキアマグフォーラにも行ったことあるの？』

『ああ。調査をしていたと言っただろう』

調査。無機質な空気をまとうその言葉は、冷たい風のようにわたしたちの間を吹き抜け、ここにいることの意味をもう一度はつきりと認識させた。

『タキアマグフォーラってどんな場所なの？』

真紀が尋ねる。？聖地？としか説明を受けていない最終目的地は、神話的な香りが濃厚で、どんな場所だか想像つかないのはお互いさまみたいだ。

『残念ながら、期待されているような絢爛豪華な場所ではない。このあたりの山岳地帯の一部で、タキアマチファと呼ばれる高地にある古代遺跡だ。巨大な岩の塔とでもいうのかな。あの大きさはすごいが、それだけだ。周囲は岩の荒野で、他はなにもない』

『そ、それだけ？』

『そう、それだけ』

につこり笑ってくり返すルイスは、どことなく意地悪そうだ。

『神殿とか建ってるんじゃないの？ 神聖な場所なんでしょ？』

『周囲は荒野だと言っただろう。人が住める環境ではない』

『……神様、もうちょっといい場所に降りればいいのに』

『神が降り立ったから不毛になった、というのが一般的な説だな。神自身の存在に大地が耐えられなくなったとも、国造りをおこなう際に生じた神の火が灼いたとも言われる』

『前から思うけど、ここの神様って、神様なのに人間にちつとも優しくないよね』

『……以前から疑問なんだが、君は至高の存在や国の頂点に立つ人に対して、何を求めているんだ？』

『やさしさと思いやり？』

漫才みたいな二人のやりとりわたしに噴き出し、ルイスの眉間の皺が一本よけいに増えたとき、馬車が止まった。

馬車が停止したのは、市場のあるメインストリートから少し過ぎたところにある、一軒の食堂の前だ。入口に座っている男の人にお金を渡して馬車を頼み、わたしたちは四人でその店のドアをくぐった。

食堂はこの辺りでよく見かける三角屋根の木造の二階建てで、一階がオープンな食堂、二階が寝泊まりできる宿屋になっている。こちの世界の飲食店はだいたいどこもこんな形で、お店と居住スペースが一緒になっているそうだ。二階がお店の人の自宅というパターンも多い。

そのせいかどうか、お客さんも大部分が顔なじみで、下手をするともものすごくフレンドリーな大家族の食卓にお邪魔しているような気分になることもある。例に漏れず、その食堂もそんな感じだった。朝もだいたいぶ回ったというのに、わたしたちの座ったテーブルの右隣では髭もじやおじさんたちが五、六人、豪快にしゃべりながら食事をしている。そこから、なんとなく酸っぱいような香りが漂ってきた。

これって……アルコール？ 朝から??

奥の階段に近いほうのテーブルでは、おばあさんとお孫さんらし

き小さな女の子が、にこにこしながらお茶を飲んでいる。おじさんたちの大騒ぎなど気にも留めていない。

あとは、カウンターに旅の人っぽいのが二人。外套を着た後姿に、あの金色の目をした不思議な人がいるかと思っただけど一人は女性で、一人は地味な黒茶色の髪と目をしていた。

丸いテーブルにルイス、タク、わたし、真紀の順に座る。ルイスはいつものように頭からショールを被っていたけど、注文を取りに来た店の人は気づいたらしく、彼の目の色を見て無言でぎよっとしていた。

真紀が、やや不満そうに口に皺を寄せる。慣れるしかないけど、ルイスの容姿が変な目で見られることが嫌らしい。

まあ、つまりそれは真紀がルイスに好意をもっているからに他ならないわけで。

好きの一步だと思うんだけど、真紀ちゃんはニブそうだからなあ。

つまらないことをしみじみしてしまう。メニューの読めないわたしたちの代わりに、ルイスとタクが店のお勧めを聞いて、その他に数品注文してくれた。しばらくして、ツークス以南の特産であるブッセージュで作った飲み物が運ばれてくる。

わたしと真紀がジュース、ルイスとタクは冷たいお茶だ。いつも飲む香茗茶は中北部が主な産地なので、こちらではあまり飲まれないう。というより、庶民の間では一般的ではない。

そう、わたしたちは？かなりのお嬢様？という設定なのだ。貴族のお嬢様とその護衛というちょっと強引な設定は、主従は席を共にしないとかタメ口をきかないとか、いろいろ当てはまらないこともあったけど、これまでなんとかやり過ごしてきた。

真っ赤な色の甘酸っぱいジュースを飲みながら料理が出てくるのを待っていると、二階につながる階段から大きな荷物を抱えた人が降りてきた。

うわ、かっこいい！

タクほどではないけど長身で肩幅の広い、引き締まった体つき。暗い緑味を帯びた長い髪を首の後ろで縛って、日に焼けた顔立ちは整っているというよりひたすら鋭い。刃物のような鋭利さは、どこか孤高の狼を思わせる。タクともルイスとも違う、ワイルドな恰好良さだ。

その人に向かって、本格的に酔っぱらってきたおじさんたちが声をかける。

『おっい、ヴェルグ。ひとつやっとなれよ!』

『悪いな。これから発つんだ』

ワイルドな容姿にぴったりの少しハスキーな声で、ヴェルグと呼ばれた彼が答える。荷物を抱えたままカウンターへ行き、店員から飲み物の入ったグラスを受け取ると、一口飲んだ。

『どうしたよ。今回はやけに早くに発つんやな』

『訊くなよ、ラッド。野暮つてもんだぜ?』

『その調子じゃあ、女でも鉢合わせたかい?』

ヴェルグは答えずに、口の端を片方にやりと吊り上げた。もうそれだけで危険な香りの漂う男のフェロモンがむんむん伝わってくる。あの真紀でさえ、目を丸くして彼を凝視していた。

真紀ちゃんの好みなのかなあ。ルイスとは全然違うけど……でも、前はやけにアル王子にこだわってたし。今度しつかり好みを聞いておかなくちや。

こっそりルイスを窺うと、案の定シヨールに隠れた目と口元がまったく笑っていない。なんだかタクまでが厳しい表情をしているようだ。

『そう言わんと、一曲歌ってくれや。一仕事して疲れた俺たちの心を癒すんが、吟遊詩人の自負ちゅうもんやろ?』

『今はまだ禁獵期だろ?』

『鳥射ちさ。あとは小物。ガウルが獲れんでも、何か獲らんと食うていけんもの』

どうやら獵師さんらしいおじさんが、ちょっと訛った口調でしみ

じみ言う。？猫？という言葉に、真紀の肩がぴくりと震えた。

そうだよ。ここは、あの山の麓だもんね。

ガウルたちの棲む山は、彼らのものであると同時に人の介入も許しているのだ。人の通れる道がある以上、それは当然のことなのに改めて、わたしたちの認識の甘さを思い知らされる。

いろんな意味で店中の注目を集めた彼は、グラスの中身を飲み干すと、コン、と小気味いい音をたててカウンターに戻した。隣の椅子に置いた荷物のひとつを手取る。

『じゃあ、挨拶代わりにひとつやるか』

『お。いいねえ。さすがはヴェルグ！』

『陽気なのを頼むよ！』

口々に掛け声がかかる中、ヴェルグは袋の口を開いて中身を取り出した。それは一見、ギターに似た楽器。だけど、大きな涙形の胴体に長いネックが伸びていて、弦は四本 違った。二本ずつ組まれて、全部で八本もある。

隣のタクに『あれ、なあに？』と訊くと、『シトウラという楽器だ』と教えてくれた。

シトウラを持ったヴェルグは、食堂の椅子を階段下のスペースへ移動させて腰かけた。組んだ脚の上にシトウラを抱えあげ、確かめるように指で弾く。

キーンと、意外にも金属的な音色が響いた。

『さて、まずは軽く一曲。？朝日の昇る丘？を』

そう告げて歌いだされた曲は、不思議な曲調だった。フォークソングのようにシトウラを爪弾いたかと思うと、たちまち流れるように音符が繰り出され、心地よい三拍子がテンポ良く続く。そこにハスキーな歌声が乗って、初めて聞くのにすぐに耳になじんだ。

歌詞は『君と僕を引き裂く光が訪れる』とか『君と二人、このまま朝日の昇る丘を裸足で駆けたい』とか、めっちゃめっちゃベタなラブソング。指環の効果で日本語変換されちゃうおかげで、余計に残念な感じだ。

だけど、陽気で早いリズムと伴奏のせいか、歌詞なんて吹っ飛ばすくらい楽しい曲だった。耳のいい真紀は、指環がなくて歌詞が分からないはずなのに、もう一緒にサビを口ずさんでいる。

お酒のまわったおじさんの一人は立ち上がって腰に手を当ててステップを踏み出すし、手拍

子は起こるし、指笛も鳴って店中なんだかすごい様子になった。

最後はシトウラの速弾きとおじさんのステップ対決みたいになって、手拍子も追いつかないくらいヴェルグの十本の指が弦の上を走る。小太りのおじさんはふらふらだ。

おじさんが顔を真っ赤にして足を止めると、ようやくジャラン、とシトウラが鳴り止んだ。わたしはもちろん、ルイスたちも痛いくらいに拍手して、その中おじさんがヴェルグと握手して席に戻っていく。

わたしたちのテーブルにはいつの間にか、お粥によく似たコメイのスープが運ばれてきていた。緑の葉っぱと茸の入ったスープは、あっさりした塩味で、胃腸の不調が続くわたしはいつもこれ。コメイのほんのりした甘さが嬉しい。

真紀も同じもので、ルイスとタクはコメイの上に焼いたお肉と野菜を載せてソースをかけた、ロコモコのようなお店オススメのがつりメニューだ。

『さて、次はどの曲にしようか。そちらの小さいお嬢さん、リクエストは？』

マイク持ってDJやったらいいんじゃないかっていうくらい色っぽい声で、ヴェルグが前の席に座る女の子に訊く。まだ小さいのにしっかりその子もフェロモンにやられてるみたいで、少し恥ずかしそうに、だけど目をきらきらさせて口を開いた。

『？ユリアの花？がいい！』

『おや、これはずいぶんと大人っぽいお嬢さんだ。好きな人でもいるのかな？』

『うんー！』

『お父さんには内緒にしておくんだよ？ 彼女のように、報われな
い恋が花と散ってしまわないように、ね……』

シヤラリ、とシトウラが哀愁を帯びた和音を奏でる。そして歌が
始まった。

それは物語だった。 偶然出会った、貴族の男と貧しい娘。ひ
っそりと愛を育んだ二人は、やがて男の親に関係を見つかってしま
う。

二人の仲を裂こうとした親たちは、男に嘘を教え込む。女が裏切
っていると。信じた男は別れを告げ、絶望した女は一人荒野をさま
よう。やがて真実を知った男は、やり直そうと追いかけるが、彼女
はずでに荒野で倒れ、息絶えていた。

男の涙に応えるように降り注ぐ、天からの雨。そして湿った荒野
には、可憐な小さな花が咲き乱れる。男はその花に、女の名をつけ
て慈しんだ。？ユリア？と。

うわあ、こういう話だめだあ。

いい話とか聞くとすぐに涙腺の緩むわたしは、潤んだ目頭を指先
で押さえた。ただでさえ色気のあるヴェルグの声は、バラードの旋
律にこれ以上ないくらいはまっていて、鳥肌が立つほど情感に溢れ
ていた。

みんな食事の手を止めて聞き惚れている。歌が終わった途端、店
内が拍手と指笛の嵐に包まれた。手を叩きながら、真紀が興奮した
ように言う。

「すごいね、生歌。歌詞は全然わかんなかったけど」

『ごめん、真紀ちゃん。指環忘れてた』

「ううん。歌詞わかんなくても曲よかったし。ラブソングだったの
？」

わたしは真紀の手を取り、歌の内容を簡単に説明した。

『ユリアの花って、どんなの？』

『高地に咲くピンク色の小さな花だ。雨期にしか咲かない』

『じゃあ、この先の高地で見れるかな？』

『……雨期は、もう終わる』

そう教え、ルイスがどこか重苦しく黙る。真紀はふーんと言って、再び始まったヴェルグの歌声とコメイのスープに意識を切り替えていた。

わたしも同じようにスプーンでスープを掬ったけど、歌声はあまり耳に入ってこない。言葉の断片が、解けないパズルのように心の中で浮かんでは消えていく。

？高地？？雨？？女性の死？。

胸の奥がざわざわする。何かを形作るにはピースが足りず、かといって流してしまうには引っかかる小骨のような断片をつまぐ処理できずに、わたしはしばらく胸苦しさを持て余した。

ハスキーな声が、硬い響きで奏でられる異国の旋律と複雑に絡み、耳の縁を通り過ぎていく。

歌い手に背中を向ける形となる真紀は、何度もそちらをふり返り、そのたびに食事の手が止まって、ついにはルイスに無言でお叱りを受けていた。

真紀があのかん遊詩人のヴェルグを気にしていた理由が分かったのは、食事のあと市場へ買い物に行ったときのことだ。わたしたちは足りなくなってきた旅の必要品の買い出しをするタクに付き添って市場に並んだ露店の間を縫うように歩いていた。

ちなみに、ルイスは市場の外れに馬車を止めて待機している。昨日の夜寝ずの番をしてくれたから、昼寝も兼ねて休憩だ。

「実はあの人、大穴喰の巣に落ちそうになったあたしを助けてくれたんだよね」

『え、そうなの？』

「うん、ルイスも知ってる。おっきな荷物持ってると思ったら、ミュージシャンだったんだね」

わたしたちの世界風に？ミュージシャン？と呼ぶには、なんだかイメージが違うけど。

『ミュージシャンっていうより、吟遊詩人みたいよ？』

「どう違うの？」

『よく分かんないけど』

言いながら、わたしは日除けのために被ったマントのフードの下から、人波の向こうの大きな背中を目で追った。人がこつた返して、話しているうちに前に行くタクと随分距離が開いてしまっている。

そのとき、向こうから来る人が激しくわたしの肩に当たった。こらえきれずに左側の露店の台に腰をぶつけて、後ろへ倒れかかる。

「りお！」

仰向いたわたしの背中を、やわらかい壁が支えた。さらり、と頬に冷たい何かが触れる。

「大丈夫？」

背後からわたしを支えて覗き込んでいるのは、年上の女の人だった。大きな目はワインのように艶のある紅を含んだ黒。長い髪をポニーテールにまとめて、その端がわたしの頬に降りかかっている。その髪も同じ黒紅（くるべに）色だ。

「気をつけて歩かないと、この辺りはみんな周りをよく見ないから」
にっこり笑うその女性は、眉も濃くて目鼻立ちのくっきりした顔立ち。どちらかという个性的な容姿は溢れるほどの生命力に満ちて、磁力のように人を引き付ける。

「こういう人を本当の？美人？というのかもしれない。それに、なんだかどこかで見ることがある気がする。」

「あ、ありがとうございます」

「いいえ。彼からはぐれないようにね？」

眼差しで促されて目を上げると、人の波を押しよけるようにして、タクの大きな姿がこちらに向かってやってきていた。

真紀の手を借りて立ち上がり、もう一度お礼を言おうとふり返ると、そこに彼女の姿はない。驚いて、真紀が声をあげた。

「あれ？ いない」

「どこいつちゃったんだろ。名前聞きそびれちゃった……」

あの金色の目の人といい、こつちの人は神出鬼没なのかな。魔法の力だつてあるんだから、そういうこともあるのかもしれないと、わたしと真紀は話した。

やって来たタクは、お店で買ったらしい紙袋を小脇に抱えている。

「リオコ、大丈夫か？ ふり向いたらいないから驚いた」

「ごめんなさい。ちょっとおしゃべりに夢中になって」

「いや、俺も君たちは市場が初めてなのを忘れていたよ。はぐれなように、きちんと手を繋いでおけばよかった」

ごく自然に、タクの右手がわたしの左手を取る。聞いたばかりの怪我の話が頭をよぎって、握り返すのを一瞬ためらった。でも、その手をわたしに預けてくれるのが嬉しくて、少しだけ力を籠める。

指環を右に移し替え、その手を真紀が取って、三人でぞろぞろ歩く。

『必要なものは買ってしまつたから、あとは二人の欲しいものを買うとしようか。次のヒューガラナからは徒歩になるから、ゆっくり市場を見て回る時間はもうとれないかもしれない。今のうちに買うといい』

『欲しいものつて言われても、思い浮かばないよ』

そう言つたけど、タクはお小遣いだと百ウエン硬貨を五枚ずつ、真紀とわたしにくれた。こっちの貨幣価値は分からないけど、さつき食べた食事が四人分で百ウエンちよつとだから、数万円の感覚かな。これだけあつたら、なんでも買えそうだ。

市場には木の棒に布を張つただけの簡易のテントでできた露店が、みっしりと軒を連ねている。もちろん大きな籠を抱えた物売りの子どもたちもちらほらいたけど、剣を提げたタクと一緒にいるせいかな、声をかけてくることはなかった。

露店では、いろんな果物や野菜、茸、木工細工や金物、加工した石や動物の骨まで並べられている。小豆より小っちゃい種類みたいなのが精製する前のコメイ。これを木のカップで量り売りしていた。パニの原料であるテム芋は、黒っぽい皮のごつごつした形で、籠に盛つた一山で売っている。

コジは丸いグレープフルーツくらいの黄色い実。ベイワは瓢箪型のオレンジの実だ。食べていたものの元の形を見るのは楽しい。料理は好きなほうだから、色とりどりの食材を見ながらどんな味かを想像するだけでもわくわくする。

もちろんお肉も売られていて、籠の中に閉じ込められたカケロという鳥がそれだ。なんていうか、鶏というには貧相な、ぱさぱさの銀色と青の羽根。長い首にはほとんど羽毛がなくて紫っぽい地肌が見えて、小さな飾り羽が頭の上で数本ふよふよしている。近づくと、首でも絞められたような声で威嚇された。

『な、なんか脅されたあ』

『あつちかわいいよ？』

真紀に指差されたほうを見れば、小さな木の格子の中にまんまるの生き物がいた。両手大くらいの大きさで、丸い団扇（うちわ）のような耳とくるんとした黒い目がすごく愛らしい。

白と茶色のまだら模様で、もぐもぐしている感じがリスとかモルモットに似ている。とはいえ、やっぱり目は四つあった。模様に紛れてあまり気にならないけど。

『あ、ほんとだ。かわいいかも』

『ねー、飼いたいなあ』

動物大好きらしい真紀が、満面の笑顔で木の檻に指を近づける。

その動物は咬みつきもせず、ふんぶん匂っていた。

すごくかわいいーんだけど、ここにいてってことは……。

『お嬢さん。そのネウ口は今朝捕まえたばかりだから、美味しいよ』
やっぱりね。

店の人に笑顔で教えられ、わたしたちはうう、と呻いた。

『食用なんだ……』

『はあ、お肉食べれなくなっちゃう……』

肉食主義じゃないけどさ。ガウルのことといい、生きてる姿見ると食べる気なくなっちゃうんだよね。お肉は好きなんだけど、しばらくは無理かもしれない。

そう思っていると、後ろからタクが声をかけてきた。

『ネウ口を飼う人もいるぞ。おとなしいからな』

『ひよつとしてアルが飼ってたのって、これ？』

『ああ。食用として売られていたのを数匹引き取ったら、みるみる増えて収拾がつかなくなつて止めてしまったが』

ネズミ算式というやつかな。真ん丸のネウ口に埋もれているアル王子を想像すると、ちよつと可笑しい。

食用じゃないけど、その店には、真紀がアル王子に似ていると言われたミヤウもいた。

ほっそりしたウサギくらいの動物で、立った耳が長くて、大きな

目には太い隈取りがある。黄色っぽい毛を縦にぎざぎざと走る縞は、茶色いのに光線の加減で緑にも見えた。

気が強いのか、きーきー鳴きながら檻の中を暴れ回っている。

『珍しいだろう？』

店の人は得意そうに言ったけど、なんだか痛ましくて、わたしはあまりかわいいとは思えなかった。真紀がぼつんとつぶやく。

『この子、足怪我してる』

見ると捕まえる時に傷ついたのか、そのミヤウは、左前脚だけ下につけずに中途半端に上げていた。それでも三本足で木枠を引っかいている。その子から目を離さないまま、真紀が言う。

『タク。好きなもの買っていいんだったら、あたしこの子が欲しい』

『旅へは連れていけないぞ？』

『わかってる』

真紀は真面目な顔で頷くと、たちまち店のおじさんと交渉して、持っていた五百ウエンでそのミヤウを買ってしまった。そのうえ、

『これ、書いてください』

肩にかけた鞆から、ルーズリーフとペンを取り出して差し出す。

『あたし、これから旅に出るから、その子は連れていけないの。だから、戻ってくるまでおじさんに預けるから、これに証文書いて下さい』

『わ、わしは字は……』

突然のことにおじさんがうろたえる。

『じゃあ、タクお願い。おじさんの名前と、この子をあたしに売ったってことと、あたしが戻ってくるまで大事に預かりますってこと書いてくれない？ 念のため今日の日付も入れて』

どれだけ男前なんだろう、真紀ちゃんてば。

わたしには思いつかない。怪我をした動物を助けるためにその子を買って、そのうえ書類で約束をかわそうなんて。

タクもおじさんも意外だったようで、心底びっくりした顔で真紀を見ている。タクが日に焼けた顔を崩すようにして苦笑いした。

『まったく、なにを思いついたかと思えば』

『そんなに変?』

『いや。だが、彼がきちんと世話をするか保障はないぞ?』

『じゃあ、戻ってきたときに無事じゃなかったら倍額返金とか、付け加えてもいい?』

店のおじさんが首をぶるぶるふるい、タクに何事かわめきたてはじめた。どうやら条件を加えるなら売らないと言っているらしい。

揉めた拳句、戻ってきたときにミヤウが無事じゃなかったら支払額を返金するということで話がまとまった。タクが書いた簡易の契約書に、おじさんがミミズののたくったような字でサインする。

書類は二枚作って、一枚は店のおじさん、一枚はタクが保管することになった。真紀は上機嫌だ。

『じゃあ、よろしく!』

スキップでもしちやいそうな彼女に、わたしも少し協力することにした。小さく切ったルーズリーフにソーイングセットで穴を開けて糸を通し、それをリボンにくっつけてミヤウの籠のてっぺんに結ぶ。このリボンは、わたしの鞆にぶら下がる、ピンクのクマのぬいぐるみからとったものだ。

そのリボンにつけた紙に、大きく?売約済?真紀?とピンクのボールペンで書く。

『わ、ありがと理緒子。これでおじさん、他の人に売れないもんね。だけど……こっちの文字で書かないと分かんなくない?』

『あ、そっか』

『俺が書こつ』

わたしからペンをとり、タクが丁寧な筆致で、マフォーランド文字を裏面に書き入れた。曲がってしまったている右手は、持ち方が多少おかしいことを除けば、まったく問題なく使えているように見える。きつとこれは、タクの努力の賜物なんだろう。

二種類の文字の書かれた札を掲げ、わたしたちはペット屋さんを後にした。おびえきつたミヤウは、真紀が声をかけてもただシュー

シュー怒っているだけだったけど、それでも真紀は、しばらく離れてからも、すごく名残惜しそうに何度もそちらを見ていた。

『……あーあ。ルイスにバレたらやばいよねえ』

『黙ってるの？』

『だって、絶対怒られるもん』

それは確実だ。それでも、ルイスは真紀のためを思っているからお説教もするわけで、むやみやたらに反対するんじゃないと思うんだけど。

過保護なんだよね、ルイスって。

タクも心配性なんだけど、それとはまた違う。守ろうとするだけでなく、積極的に手を差し伸べる保護者的な意識。突っ走ることの多い真紀は煩わしいようだけど、わたしにはちよっと羨ましい。

手を繋いだまま斜め前を行く、タクの顔をちらりと見上げる。

タクはやさしいし、誠実だ。鞆を隠していたことも素直に謝ってくれた。だけど、彼はあくまでわたしを？守護？してくれるだけ。

それだけ、なんだよね……。

わたしがどんなに我が儘を言っても、無茶なことをして、タクは受け入れてくれるだろう。よほどの危険が伴わない限り。

わたしとタクの間には、見えない壁がある。それは、わたしが異界から来たということや立場的なことだけじゃなくて、もっと心の根深い部分で拒まれている感じがした。

わたしの腰の辺りで、肩から提げた鞆についたティディベアが、ぽんぽん跳ねている。

タクと両想いになりたくて、学生鞆につけていたのをわざわざ付け替えた。もうそんな幼稚なおまじないも、この壁を超えるパワーを与えてはくれそうにない。

わたしの視線に気づいたのか、タクの藍色の目がこちらをふり向いた。

『もう市場は終わってしまうが、リオコは何も買わなくていいの？』

いつの間にか、市場の外れまで来ていたみたい。わたしは慌てて首を振った。

『あ、うん。思いつかなくて。果物でも買えばよかったかな』

『それなら買ってある。もう少しきちんと案内できればよかったんだが、そろそろ発つ時間だから』

『ううん、平気』

『次のヒューガラナでも、市場を見て回る時間がとれるようにしよう。せつかく来たんだから、少しは旅を楽しまないとな』

切れ長の瞳が笑う。わたしもつられて笑ったけど、うまく笑えていたか自信はない。胸の奥が、大きな石でも詰まっているように重い。

市場のテントが途切れ、道の向こうの木陰にわたしたちの馬車が見えてきた。この道は重要な街道筋らしくて、旅路を急ぐ外套姿の人がちらほら行き交う。

人いきれを抜けたせいで籠もったような熱からは開放されたけど、高く昇った太陽が、地面を真っ白に焼いていた。もういいと思ったのだろう、タクが繋いでいた手を離れた。離れてはじめて、自分の手が汗ばんでいたことに気づく。

そういえば、ずっとタクに荷物持たせっぱなしだったな。

馬車までもうちよつとだけど、少しくらい手伝おうかとわたしが口を開きかけたとき、ふいにタクが何かに気づいたように立ち止まった。

『すまない、忘れ物をした。取りに行ってくるから、二人とも先に戻っていてくれ』

『分かった。荷物、持って行つところか？』

真紀に先を越されてしまった。

『いや、軽いから平気だ。二人とも寄り道はしないで、まっすぐに馬車に帰るんだぞ？』

もう数メートルなのにタクはそう言い、笑顔で来た道を引き返していく。

「タクでも忘れ物するんだね」

後姿を見送りながら、真紀がのん気に呟いた。背の高いタクは割と目立つのに、混雑している市場の路地にすっと入り、もう見えなくなっている。

市場の入り口となる道路の片隅では、黄色い果物の入った籠を抱えた幼い兄妹がしきりと旅人にまとわりついていた。馬車のあるほうへ向かおうとしたわたしたちの耳に、シャラリと聞き覚えのある音が飛び込む。

「あ、あの人だ」

本通を少し外れた露店のテントとテントの狭間に、シトウラを抱えたあの吟遊詩人の姿が見える。歌詞は雑踏のせいで聞き取れないけど、甘くてハスキーな歌声は外でもよく響いた。心地よい音楽が、太陽の暑さをやわらげてくれるみたい。

馬車へ促したけど、真紀はその場に立ち尽くして動かなかった。聞き惚れているというより、何か思いつめたように彼を凝視している。

彼のこと、気になってるのかな……。

危ないところを助けてくれた人だから、いろいろ思うところがあつて当然なんだらうけど、わたしは少し苛立った。ずるい、と思う。

ルイスがあんなに大事に想ってくれてるのに、なんで他の人を気にできちゃうんだらう。

勝手な言い分だとは分かつてる。人の気持ちなんて、理屈じゃ動かないってことも頭では理解してるつもりだ。でも。

やっぱり真紀ちゃんはずるい。

ルイスに想われて、アル王子を味方につけて、王様の協力だつてもらつて わたしには何も無いのに。

タクは守ってくれるだけ。アル王子も王様も？異界の乙女？が必要だっただけ。ツークス領主がいろいろ言ってきたけど、あんなのはただのお世辞だ。

元の世界でも、わたしは同じようなことがあった。たぶん、あんまり意見をはつきり言わずに笑ってごまかしてるから、勝手な理想を押し付けやすいんだと思う。今まで付き合った人は二人しかいないけど、二人とも最初はすごく積極的だったのに、付き合った途端「つまらない」って言われて浮気されて終わった。

だから、今回もそう。平凡の固まりのような本当のわたしを知ったら、きつとみんな去っていく。でも、タクだけは本当のわたしを受け入れてくれるんじゃないかって、期待してた。

もう、どうしたらいいか分かんないよ。

彼との距離の縮め方がまったく分からない。すごく怖い。なにをしても受け止めてくれるのは、逆になにをしても彼の心に入っていないってことなんじゃないだろうか。

だめだめ。

恋に弱気は禁物だ。嫉妬や猜疑心や、その他のどす黒い感情を消し去るように、わたしはクマのぬいぐるみを掴んだ。

そのとき小さな悲鳴が聞こえ、足元を転がる黄色いものが目の端に入った。旅人にまわりついていていた物売りの少女が倒れ、持っていた籠のコジが地面にばら撒かれている。

「おまえ、なにすんだよっ」

兄らしい男の子が食ってかかるけど、旅人もしつこい物売りが嫌だったのか、冷たく追い払った。倒れた女の子はまだ起き上がらない。

「ちよつと、乱暴はやめなつて」

「真紀ちゃん」

止めに入る真紀を、慌てて追いかける。わたしと真紀が泣きもせずにつぶせる女の子を看てるうちに、旅人はさっさとどこかに行ってしまった。

「大丈夫？」

声をかけると、女の子は唇を噛み締めたまま、うなずいて起き上がった。手のひらも膝も擦りむいて痛々しい。

「あたし、ルイスに治癒頼んでくるよ」

「分かった」

わたしは真紀が戻るのを待つ間、その兄妹と一緒に道に散らばったコジを拾って集めた。確かにルイスの言うとおり、市場で売られているものよりも小さくて色や形もいびつだ。それでも二人は、服の裾で拭きながら、丁寧に籠に入れていく。

「これで全部かな」

マントの裾を入れ物代わりにして集めていたわたしは、木立の近くまで転がっていた最後の一個を手に取り、足を止めた。

え……。

市場の裏手になる建物の陰で、二人の人が話していた。影になって顔ははっきり見えないけど、見覚えのある姿にどきんとする。

ベージュの外套をすっぽり被って横向きになっている人は、あの金色の目をした旅人。そして、その話している相手は　タクだった。

なんで……忘れ物じゃなかったの……？

頭が混乱する。

会話は聞こえないけど、すれ違ってちよつと挨拶を交わしていると、霧囲気ではなかった。明らかに知り合いのような親しさで彼が話し、タクが頷く。そしてタクは取り出した紙切れと何かを、彼に手渡した。

ほとほと、とわたしのマントの裾からコジが滑り落ちていく。

今のは、お金……？　まさかタク、なに、してるの……？

タクが裏切るはずがない。きっと理由があるはずだ。そう自分に言い聞かせるしかなかった。

わたしは震える指先でそつとコジを拾い集め、音もなくその場から立ち去った。

何気ないふうを装って、物売りの子たちにコジを返す。でも、焦りと不安でいっぱいなのはわたしは二人からお礼を言われても、真紀がルイスを連れてきても、心は上の空だった。

タク、早く安心させてよ……。

あのやさしい声で、なんでもないのでと言って欲しかった。

だけど、帰ってきた彼が告げたのは、『次の街まで一緒に行けない』という一言だった。

15・8(前書き)

一部残酷(に近い)表現があります。ご注意ください。

『すまない。すぐに追いかけて、ヒューガラナでは合流できるから
どうしても抜けられない急用ができたのだ、とタクは説明をした。
いつもの真っ直ぐな眼差しで、やさしい声で。』

『そっか。急用じゃ仕方ないよね。あたしたちが馬車使つてて大丈
夫なの？』

『ああ。追いつく手段ならいくらでもある。俺は足が速い』

『無理して走らなくてもいいよ。気をつけてね』

なにも知らない真紀が、明るく手を振る。わたしはどうしても笑
顔を作ることができなくて、ずっとうつむいていた。

『リオコ』

気遣うように、タクの声が呼びかける。わたしは、弾け出しそう
になる感情を抑えるために唇を噛み、ゆっくりと彼を見た。

タクは長身を屈め、馬車の窓の向こうから少し困った顔で、わた
しを見ている。

木の板を荒々しく削ったような、無骨な顔立ち、太い鼻筋。濃い
眉毛は左側だけ白い傷跡に断ち切られている。最初は怖いと思っ
たけど、大きな切れ長の瞳はいつも優しく、その優しさにいつもわ
たしは救われてきた。

本当のことを話してよ、タク。

心の中で叫んでも、声は出せない。今を失いたくないから。

正直でいてくれるって約束、したはずだよ？ 忘れたの？

無言で問いかける。何度も何度も、痛いくらい。

『リオコ……』

『タク。絶対に 帰ってきてね？』

言えたのはそれだけだ。これが弱虫のわたしの、精一杯。

真紀と二人だけの馬車の中は、なんだか広い。

わたしはあの物売りの兄妹から買ったコジ　籠全部で三十ゼン、つまり十分の三ウエンだったけど、細かいのがなくて一ウエンで買った　を膝に抱えたまま、ぼうつと窓の外を見ていた。

爽やかな香りに誘われて、試しに皮を剥いてひとつ齧ってみたけど、酸っぱくて苦くて口の中がイガイガしてとても食べられなかった。

芳香剤代わりに置いておこうかな。

フルーツの、とくに柑橘系の香りがわたしは好きだ。今みたいに沈んだ気分の中には、無性に身近にまとわせたくなる。

まるでお守りのようにコジを膝に乗せたまま、わたしはほとんど喋らず、馬車の振動に身を委ねていた。ことんことんと、胸に詰まった重りが揺れる。少しでも心が傾くと、もう深いところから戻ってこられないような危ういバランスだ。

いつも通りに休憩して昼食もとったはずなのに、ほとんど印象がない。わたしは灰色の感情の海に溺れ尽くしていた。

気がつくともう日が傾いて、窓の外は鮮やかな夕焼けに染めあげられていた。

『あと少して街に着く。二人とも、もうちょっと我慢してくれ』

御者台からルイスの声が聞こえる。今夜は、高地タキ「アチファの入り口といわれる光都ヒューガラナで一泊する予定だ。だけどガウル的一件で時間をとってしまったことと、道の状態が思ったよりも悪くて、日が沈みきる前に街に着くのはどうやら難しいようだ。

わたしたちが先に街に入ることも考えてルイスとタクは打ち合わせをしていたみただけど、ヒューガラナはナアカのような小さな村ではない。聖地に行くための最後の関所といわれる都市だ。

タクはちゃんとわたしたちの居場所分かるのかな……。

ぼんやり考える。タクが二度と現われないのでは、という想いがよぎり、わたしは固く目を瞑った。

ふいにガタンと大きな衝撃がして、馬車が傾いて止まる。今日何度目かの穴にはまったらしい。真紀が、布で仕切られた外に呼びかける。

『大丈夫、ルイス？』

『ああ。ちよつと見てくる。二人とも、絶対に降りるなよ』

苛立つこともなくルイスはそう声をかけ、御者台から降りて様子を窺いに行く。

ナア力を出てからずつと上り勾配の続くこの山道は、本当に悪路だ。石と穴ぼこだらけで、今までの馬車のがたごとがかわいいくらい、体が何度も浮いて危なかった。シートベルトが欲しくなる。

たぶん今回も、車輪が穴にはまって動けなくなつたんだろう。普通なら大人数人で押し上げないといけないような状況だけど、魔法士のルイスは穴に手を当てて、土を盛り上げて車輪の位置を戻していた。しかも数分もかからない。

便利だよね。

そんな魔法があるなら、雨だって簡単に降らせてしまいそうなのに。

そんなことを思っていて、気がついた。いつもより時間がかかっている。

疑問を口にしようとする、向かいに座る真紀が、わたしの左手をぎゅつと握ってささやいた。

『なんか変な感じがする』

『え……』

聞き返そうとしたとき、突然ぱあつと窓の外が明るくなった。ルイスが魔法光を灯したのか、と思った瞬間、すごい声で馬車を牽くコマが鳴きはじめた。

同時に激しい音を立てて、馬車のドアが内側に弾け飛ぶ。

なに?!

驚いて声も出せずに、わたしは真紀にしがみついた。真紀も抱きしめてくる。

ドアを壊したのは、髭面の見るからに荒々しい雰囲気の男の人だった。

「いたぞ、当たりだ」

言いながら、そのまま馬車に乗り込んでくる。わたしたちは悲鳴をあげて窓際へ退った。

「ぎゃあぎゃあ喚くんじやないよ、お嬢ちゃん。怪我したくなかつたらおとなしくしてな」

岩みたいにごつごつした手が、わたしの腕を掴んで引つ張る。膝から籠が落ち、コジが床に散らばった。

「いやああつ」

「りお！」

抵抗したけど、すごい力でドアのほうまで引きずられる。そのわたしを別の手が掴んだ。

「ほら、静かにしてな」

髭のない別の男が覗き込み、わたしの口に臭い布を押し入れる。その臭いと侵入者への嫌悪感に胃が軋み、涙が浮かんだ。竦んでいるうちにわたしの手首は後ろで固く縛られ、腰にもロープを巻きつけられる。

外では同じような雰囲気の男たちが十数人、松明を手に馬車を取り囲んでいた。その中の一審体格のいい たぶんタクよりも大きな男が、誰かを地面にひざまずかせて後ろから押さえている。

ルイス。

殴られたのかもしれない。あのきれいな金髪が、ぐちゃぐちゃに乱れている。彼はわたしに気付いて少し顔を上げ、大丈夫だというように頷いてみせた。

「やだ、放せつてば！ 放せつ！」

髭の男が、暴れる真紀を両手で抱え上げるようにして馬車から出てきた。

「おい、二人とも女みたいだぞ。どっちが本物だ？」

その一言でわたしは蒼ざめる。ひょっとして彼らは？異界の乙女

?を探しているのだろうか。

タク……タク、助けに来て!

一番頼りたい相手を念じる。だけど男たちの背後に姿を見せたのは、彼じゃなく、ターバンをみたいな布を被った痩せた男の人だった。

『こつちへ連れて来い。偽者だったらとんだ茶番だ』

『本物でしようよ。金髪の色なし?が守護する娘 あつちは囷(おとり)だったってことか。連中は大損だな。フェアリマの情報もたいしたもんだ』

囷? フェアリマ? なんのこと?

恐怖と混乱で、思考が追いついていかない。まさか、わたしたちの身近で裏切っていた人がいたということ?

なぜこんなときにタクがいないんだらう。恨めしいを通り越して苛立つ。

この場でわたしたちを唯一守ってくれるはずのルイスは、大きな人に後ろ手を捕まれ、ばさばさの長い髪を別の人にぐっと掴んで持ち上げられていた。

『見ろよ、この色。不気味だな。目にも色が無いぞ?』

『たしか金髪の色なし?は、魔法士だと言つてなかったか?』

『逆じゃないのか。剣なら持つてるぜ。畸形が魔法士なんて話、聞いたこともない』

髪を掴んだ男が、ルイスの腰から外したらしい二本の細い剣を地面へ投げ捨てる。ターバンの男が、ふんと鼻で笑った。

『異界の娘を守るには貧相だな』

『……おまえたち、何が目的だ。ただの強盗じゃなさそうだが』

『考えてみな。いくら?色なし?でも、脳みそまで出来が悪いわけじゃないだらう』

『フージェー族の金に目が眩んだか。子飼いにしても野党じみている』

嘲笑い、ルイスは突然身をひねった。目の前の男に頭突き、後ろの男のお腹辺りを蹴り上げて拘束を解くと、懐から取り出した細い何かを投げつける。

松明を浴びてきらめくそれは、だけど剣に阻まれて四方へ散り、コマの手綱を切っただけに終わった。ガワワ、と鳴いて、二頭のコマが山道を逃げ出す。

ルイスの首に腕を回し、大男が後ろから羽交い絞めにした。

『暴れやがって、この出来損ないめ!』

『逃げられると思っただけなのか、この野郎っ!』

頭突きをされた男が、ルイスの腹を蹴った。重く鈍い音が断続的に響く。別の男が太い縄をかけ、彼の両腕を後ろに回してきつく縛った拳句、胴をぐるぐる巻きにした。

『どうします、御頭。ばらしますか?』

『いや。?色なし?だが、顔はきれいだ。こういうのが好みのやつもいる。いくらかで売れるだろうよ』

御頭と呼ばれたターバンの男が、感情のない声で淡々と言う。こういつたことに慣れているのだと知って、わたしの体の芯が震えた。

『そこへ座るんだ、お嬢ちゃん』

わたしを縛った男が、道から外れたごつごつした岩の上を指す。

言われたとおりに大きな横長の岩に登ってしゃがむと、腰にまわした紐を岩の突起に括りつけられた。

同じように真紀も連れて来られ、背中合わせになるように岩に結ばれる。真紀の指が、探るようにわたしの背中に当たった。

指環がなくて会話が分からない真紀は、きつと不安なんだろう。

だけど、ぶっそうな言葉の続く今だけは、分からないほうがいい気がした。

口の中の布が取られる。やっと新鮮な空気が吸えて、わたしは大きく息をついた。

『叫ぶんじゃないよ。どうせ、誰にも聞こえない』

わたしは、体の震えを押し殺すように頷いた。ターバンの男は少

し離れた小高い岩の上に腰掛けて、こちらを眺めている。片膝を立て、その上に肘をつけてリラックスした感じだ。

松明をもった他の男たちは、どうやら馬車を物色しているようだ。道を背中側に行っているから、状況がよく見えない。ルイスも連れてこられたけど、暴れたせいかな、大男ともう一人にしっかりと後ろから捕まれていた。

『さて、質問だ。お嬢さんたち、異界の娘はどっちだ？』

やっぱり。やっぱりこの人たちは、わたしたちを狙っていたんだ。頷くわけにはいかなくて、ルイスを見る。彼は目でなにか合図を送ってきたけど、気付いた男の一人に殴られて分からなくなった。

平坦な声で、ターバンの男がくり返す。

『俺たちも無益な殺生はしたくない。異界の乙女でないのなら、命は助けてやろう。だが素直に答えないと、死人が一人増えることになる』

ルイスの喉に、半月形の大きな刀が突きつけられる。わたしの喉がひっと鳴った。

今はもう日はとつくに沈みきって、月もない星屑だけの夜空が地表すれすれまで降りてきている。それくらい、辺りには岩と砂以外何もなかった。木も、人も、家も、街も見えない。

絶望的な感じだ。それなのに空の星だけはやかに綺麗で、地面にまで光が届いたのか、すぐ傍の砂地が一ヶ所だけきらりと輝きを放った。

なんだろう？

わたしたちを囲むようにしている男たちは、気にしたふうもない。手を動かしていた真紀が、ようやく指環を探り当てた。当てるや、いつもの気の強い言葉が飛び出す。

『あんたたち、あたしたちをどうする気よ？ 誰と間違ってるか知らないけど、いい迷惑だよ。さっさと帰して！』

『元気なことはいいいことだが、これが仕事なんでね。答える。どっちが異界の娘だ？』

『答えたら命が危ないって分かっているのに、誰が言うもんかつ！』
『……ほう。じゃあ、おまえが本物か』

言質をとった問いに、真紀がはっと息を呑む。

『じゃあ聞くけど、あたしが教えたからって、それをそのまま信じるの？ もしあたしが本物庇って嘘ついたら、本物逃げ出しちゃうんだよ。それでもいいわけ？』

『御頭。面倒だ、全員殺っちまいますよ』

部下の一人が苛立ったように言う。ターバンの男が冷たく笑った。『どのみち、あと五日も経てば国王が殺してくれる。本物でも偽者でも、な……。おまえも目の前で同じ年頃の娘の首と胸が離れれば、逃げる気もなくなるだろう？』

わたしの体の震えが止まらなくなる。つまり、もう逃げられないってことだ。異界の娘だったらこの場で殺され、そうじゃなくても彼らに連れて行かれる。

『さて、考える時間はやった。返答がないなら、男の耳を削ぐ』

『ま、待ってよ！ じゃあ……言うから。その代わり、違うほうとその人は助けて』

『いいだろう』

『異界の娘は こっちだよ』

真紀の声が向けられたのは、わたし。

ま……き？ なに……言ってるの？

驚きすぎて悲鳴も出ない。頭が真っ白になる中、真紀とターバンの男の会話が続く。

『本当か？』

『本当だよ。あたしは北のクイ族の娘で、お金もらってふりしてただけ。本物はこっちのほう。疑うんなら、指環してるから見えてみれば？』

『指環？』

『そうだよ。聞いたことない？ アクイナスの魔法の指環。彼女、異界から来たからその指環がないと言葉が通じないの。だからずっ

と嵌めてる』

なにを言ってるの？ 真紀、なんのためにそんなこと言うの？
なんで……？

『主人を売るのが』

『あたしだって命は惜しいんだよ。疑うんなら、確かめてみれば？
今も嵌めてるから』

真紀の言葉に、男たちが無言で顔を見合わせ、ターバンの男が顎
をしゃくった。最初に馬車に乗り込んだ髭の男が、一步前に入る。

『い……やあ。来ないで……』

うわ言のように声が漏れる。逃げようにも岩のでっぱりが邪魔し
て、わたしは足をじたばたさせた。

背中合わせの向こうから、真紀の日本語が聞こえる。

「ごめんね理緒子。だけど、なにがあってもここから降りちゃだめ
だよ」

『なに……わかんないよお……』

「怖かったら目を閉じて。絶対に、ここから動かないで」

『いやだ。怖い……たすけてえ……』

すすり泣きながら、わたしは懇願した。男はゆっくりと近づいて
くる。一步、二歩、三歩。

ここへ来られたら 指環を見つけられたら。

恐ろしい可能性に、全身を恐怖で握りしめられたようだ。圧迫感
に胸が苦しい。息ができなくなって、忘れていたはずの過呼吸が再
発する。全身から血の気が引いていく。

苦しいよ……怖いよ。助けて、タク……！

四歩、五歩、六歩。

男が手を伸ばせば触れるくらいの距離まで来た。その瞬間。

「理緒子、伏せて！！」

大地だったはずの目の前の砂がえぐれ、真っ暗な穴になったそこ
から何かが出てきた。そのまま男の姿が 呑まれる。

え……。

巻き上がる砂塵。天へと伸びる、長く巨大な生き物。ぬめりとした体。

誰のものとも分らない悲鳴が、遠く響く。

景色が白と黒の砂嵐にまぎれてゆき、電源の切れた携帯みたいに意識がブラックアウトした。

『……………リオコ!』

暗闇の中で、なぜかタクの声が聞こえた気がした。

15 - 8 (後書き)

15章終了。続きは真紀視点になります。

第16章 砂上都市 マキの心(前書き)

一部残酷(に近い)表現があります。ご注意ください。

ルイスとタクがなにか隠しごとをしているのは、気付いていた。あたしたちが命を狙われてるということを教えたくらいだから、その隠しごとは悪いものではないのかもしれない。でも、それに関係する何かであることくらい、平和大国から来たあたしにだって分かる。

知らないほうがいいのか。知る必要がないと思っっているのか。どっちかは分からないけど、自分のことが自分の関知しないところで進んでるっていうのは、あんまりいい気持ちじゃない。

だから、食堂であたしを助けてくれたあの人に再会したときも、素直に喜べなかった。

いや、ギターみたいな弾いてるのは驚いたけどね？ 歌うまいのもびっくりしたけど。

だけど、それ以上に疑問が湧き起こる。なぜ、送心術の使えるほどの人が吟遊詩人なんてやってるんだらう。それに、明らかにルイスは彼を知っていた。

じゃあ、やっぱり魔法士ってことだよな……。

あたしを助けたのも、ナアカの村にいたのも、何か謀るところがあつたような気がしてどうしようもない。

最初はまだ一度お礼くらい言おうと思ってたんだけど、ルイスに視線で止められた。空色の普段やさしい瞳が、魔法士団長の顔で咎めてきたから、素直に従うしかない。

それなのに、ルイスからの説明は一切なかった。こんなときいつもフォローに入ってくれるタクも、理緒子までがどこか自分の中の想いに沈んでいて、あたしたちの間はすぐきこちなくなってしまう。

雰囲気をはぐそうと、あたしはあえて明るく振舞った。でも、慣れないテンションはちよつと疲れる。そんなとき目に入ってきたのが、市場で売られていたケージの中のミヤウだ。

ひどい……。

左前足の先を怪我して血が出ているし、暴れすぎて体の毛の抜けたところもある。衛生なんて考えてないのか、木の籠からはひどい臭いがした。しかもペットとして売ってるのに、この暑い中、飲み水も置いてない。

動物愛護の精神はこの世界にないんかい！

ネウロを飼っていたというアルが、すごくいいやつに思えてきた。もし水門を見つけられて雨が降ったら、王様に動物愛護法を制定してもらおう、なんて考える。ふと乾いた笑いがよぎった。

？もし？か……最近そればかり。どんだけ樂觀的なんだ、あたしって。

不確かすぎる未来への不安を打ち消すように、半分やけくそでタクにミヤウを買うことを告げる。もちろん？飼いたい？んじゃなく命が売り買いされてるんだったら、あたしが？買って？自由にしてあげようと思ったのだ。

貰ったお金よりも高かったら諦めるつもりだったのに、あっさり値切れてしまい、あたしは支払いと同時に店の人に証文を要求した。とーぜんだよ。旅には連れて行けないし、口約束じゃ守ってくれそうにないしね。

あたしにはいたって普通のこと。うちはわりとみんな筆まめで、大事なことは文章にして残す習慣があるからその延長のつもりだったんだけど、周りほとんど引いていた。

だけど最終的に証文も貰えて、タクも理緒子もちよつとだけ明るい顔になって、あたしは大満足になる。

絶対、迎えに来るからね。

心の中で誓う。小さな約束だけど、戻ってくると誰かに誓うだけで、少しだけ強くなれる気がした。

でも　その後で、戻ってくるどころか、聖地に辿り着けないかもしれない事態が起こってしまった。

タクが次の街まで一緒に行けない、と言い出す前から、理緒子の様子はおかしかった。

言いたいのに言えない。疑いたいのに疑えない。怒りたいのに怒れない。

そんな負の感情と打ち消そうとする気持ちの振り子が、ぐるぐるめぐって渦を巻いて、自分でも持て余してみたいだった。こんなとき、あたしのとる態度はひとつ　静観することだ。

悩みつて結構口に出してしまったほうが、すっきりすると思うんだ。自分では重大だと思っていたことが案外みんなの標準だったりして、言うだけで気持ち軽くなることも多い。

だけど本当に大事な悩みつて、そう簡単に口にはできない。したくても、言うべきとつかかりが見つからない。そういう悩みだつてある。あたしだって、十六年間生きてきてるんだ。

だから居心地の悪い空気にも耐えて、あえて見てみないふりをした。そのうえ馬車の行く道は悪いし（二度ほど天井に頭突きしかけた）、別の意味でしんどい道中だった。

理緒子の抱えるコジが柑橘系のいい香りをずっと漂わせていて、それだけが緩和剤。

無言の空間に飽きてきて、あたしが眠気に襲われはじめた頃、派手な音を立てて馬車が傾いて止まった。左前側の車輪が穴にはまつたみたい。

『見てくる』と声をかけ、ルイスが御者台から降りる気配がする。あたしは理緒子の向かい合わせに座った窓際で、ガラス越しに外を見た。埃がすごくて閉めっぱなしだった窓からは、推定A4サイズの窓枠いっぱい少しばやけた夕焼けが貼りついている。

ふと、窓の近くで小石を踏みしめるような音がした。ルイスが降りたのは進行方向の左、つまりドア側だ。胸騒ぎがする。

とつさに理緒子の手を強く握り、ささやいた。

『なんか変な感じがする』

『え……』

人の顔覚えるのは苦手だけど耳はいいんだ、あたし。ついでに悪い勘ほどよく当たる。

案の定ドアが蹴り破られ、見知らぬ髭面の男が乗り込んできた。悲鳴をあげる理緒子と抱き合いながら窓へびったり身を寄せるけど、当然逃げ場なんてない。やすやすと理緒子はあたしから引き剥がされ、別の男に連れて行かれた。

髭面が顔を近づけて、なにか言いながらあたしの肩を掴む。言葉は分からないけど、確実に味方の対極にいる人だと、冷静なもう一人のあたしが告げた。

だいたい？いかにも？すぎるんだよ、その格好。

オシヤレじゃない、むさくるしいだけの髭。脂ぎった体形と脅しつけるようなドラ声。しかも口臭も腋臭もすごいんだ、このおっさん。

恐怖よりも、あたしの心には怒りが湧きあがる。たとえ万が一まかり間違つてこのおっさんがすぐく優れた人格であったとしても、立ち往生してる馬車のドア壊していきなり入ってくる人と友だちになるうとは、絶対に全くまるつきり一欠けらも思えない。

女の子なら怖がるべき状況かもしれない。実際、理緒子は半分放心状態だ。けどあたしは、わりと怖い場面に慣れている。

「おまえなにしょんじゃ、コラ」

という地元ではいたって標準的な言葉での言い合いというのを、小さい頃から目の当たりにしてきたからだ。小児喘息だった二つ上の兄は、医療の進歩のおかげで180センチを超えるまでにすくすく育ち、病弱だった体を鍛えるためにはじめた柔道は県代表レベル。

あたしとよく似た一重切れ長の目に長身、ごつい体格、低い声できつちり訛る兄は、妹視点でも本気で怖い。県内でこれなんだから大学で県外に出て大丈夫なんだろうかと思っていたら、やっぱりこ

の夏、睡眠を邪魔した選挙カーを怒鳴って止めさせたと言っていた。ビバ広島弁。

そんなわけで、兄と喧嘩して負け続けるあたしは、たいていの？怖い？と言われる人に対して妙な免疫がついてしまっていた。ついでに、がさつだから怪我也絶えない。生爪はがれたことも、ナイフでぐっさりも足首骨折も経験済みだ。ああ、兄との喧嘩では髪掴まれたりとか足蹴とかざらだしね。ってことで。

どんな目に遭わされても、絶対逃げてやる。

あたしは決意する。痛いのも怖いのも嫌いだけど、それ以上に嫌なのは自分の意志を奪われて言いなりにされることだ。

だけど、腕力がないのが女子の悲しさなんだよね。散々わめいて抵抗したけど、あたしはその髭面に抱えあげられるようにして馬車から連れ出された。

外に出てはつとした。せいぜい五、六人だろうと踏んでいた相手は、十数人の集団だった。ルイスは剣を奪われ、一番体格のいい大男に捕まえられている。理緒子は悲鳴がうるさかったのか、猿轡（さるぐつわ）みたいなのをされていた。

ちくしょう、なにやってんだよタク。

女の子にあるまじき暴言を胸中で吐いて、やっぱりマフォーランド語の悪口を教えてもらうべきだったとあたしは後悔した。

いつもの調子で気の済むまで暴言を言い連ねてやるうと考えて、はたと思に至る。ルイスが黙って捕まっていることの意味を。

横目で窺うと、彼がかすかに首を振って、おとなしくしている、と指示してきた。

ルイスは屈指の魔法士だ。魔法光で岩を砕いたこともある。その彼が手を出さないのは、おそらくあたしと理緒子がいるからに違いない。彼の實力でも、あたしたちを守りながらこの人数と戦って逃げるといふのは慎重にならないといけないうことだ。

強盗集団に思える男たちは、ルイスの髪を掴んで嘲笑っている。彼の色を見て、馬鹿にしているんだろう。

おまえらみんな禿げる！

心の中で呪う。それでも言動だけはおとなしく、言うままにされた。

一回だけルイスが反撃に出たけど、投げたナイフは変な方向へ飛んでいって、すぐに取り押さえられる。パニくって暴れていたコマたちの手綱が切れ、仲良しの二頭があたしたちを置いて逃げていくのが恨めしい。

あれ？

あたしの胸に、もやっと疑問が湧いた。偶然にしては、二頭とも逃げるなんて出来すぎている。何かを果たして気が済んだのか、ルイスは男たちに殴られ、蹴られるままにされている。

あたしたちは街道を外れた荒野に連れて行かれ、大きめの岩の上に理緒子と背中合わせに座らされた。縛られた両手は痣どころじゃないくらい痛いし、そのうえ括りつけられた岩の突起が背中に当たって最悪だ。

あたしは少しでも状況を知ろうと、後ろ手のまま指をもぞもぞ動かして、理緒子の指に嵌まっているはずの指環を探した。恐怖のせいか、理緒子の震えが指と肩越しに伝わる。

探りながらあたしは考える。どうみても『お宝はどこだ？』と聞かれていた状況ではない。

だけど、こちらから？異界の乙女？のこことを持ち出して墓穴を掘るのも問題だ。

とりあえず人違い路線でいくか。

指先で指環に触れ、あたしは腹筋を使って声を絞った。リーダーらしい男が右斜め後ろの岩にいるから、体をひねって顔を向ける。

『あんたたち、あたしたちをどうする気よ？ 誰と間違ってるか知らないけど、いい迷惑だよ。さっさと帰して！』

『元気なことはいいことだが、これが仕事なんでね。答える。どっちが異界の娘だ？』

もういい加減？どっちが？って聞かれるの、うんざりなんだけ

ど。

ちよつとだけ期待してた、ただの強盗という設定があつさり却下されて、あたしはまた頭を回転させた。とりあえず、今までの会話が理解できていなかったことがバレるのはまずい。

なんとなく推測して、強気に出てみる。

『答えたら命が危ないって分かつてるのに、誰が言うもんかつ！』

『……ほう。じゃあ、おまえが本物か』

あたしは息を呑んだ。異界の乙女を教えなかったら殺すぞ、ではなくて、この人たちは異界の乙女を殺す気なんだ。あたしは仕方なく、交渉の段どりを探ることにした。

『じゃあ聞くけど、あたしが教えたからって、それをそのまま信じるの？ もしあたしが本物庇って嘘ついたら、本物逃げ出しちゃうんだよ。それでもいいわけ？』

『 御頭。面倒だ、全員殺つちまいましたよ』

短気なのか、あたしの声に被せて部下のひとりが言った。ターバン男は笑って、さらに恐ろしいことを告げる。

『どのみち、あと五日も経てば国王が殺してくれる。本物でも偽者でも、な……。おまえも目の前で同じ年頃の娘の首と胸が離れれば、逃げる気もなくなるだろう？』

わりと内情を知っている。だけどルイスが何者か分かつてる様子はないから、天都に詳しいわけではないようだ。となれば、結論はひとつ。天都にいる誰かが、お金で彼らを雇って異界の乙女を殺そうとしているということだ。

ああ、もう。なんでこんなときにいないかな、タクは！

まさかタクが関係しているんじゃないかと考えて、あたしはそれを打ち消した。彼が裏切っていたら、こんなまどろっこしいことなんてするはずもない。

理緒子の震え方が尋常じゃなくなる。正直、どうしたらいいか分からない。なにかきっかけでもあればルイスが動きやすくなるんだけど、それすら思い浮かばない。

あたしはロープが痛いふりをして体を動かし、わずかな希望を探すように辺りに必死で目を配った。と、視界の隅の地面で、なにかがきらんと光る。

……まさか。

角度的にはぎりぎりだ。めいっばい右に首をひねってターバン男のほうを向くと、やっぱり確かに、あたしたちのいる岩の手前の砂地の一画が小さく輝きを放っていた。

小さくて、だけど不気味な輝き。しかも悪いことに、理緒子の目の前だ。

あたしたちが馬車を照らす松明を背にする形だから、ちょうど逆光になって、彼らは誰一人気付いていない。あたしは賭けに出ることにした。

ごめん、理緒子。

先に心で謝っておく。あたしは今から友だちを裏切るんだ。

『さて、考える時間はやった。返答がないなら、男の耳を削ぐ』

『ま、待ってよ！　じゃあ……言うから。その代わり、違うほうとその人は助けて』

できるだけ哀れっぽく、怖がっているように見えればいい。この作戦がうまくいかないのが不安で震えているのだとは気付かれないように。

『いいだろう』

『異界の娘は　こっちだよ』

あたしは、背中越しに理緒子のほうを顎で示した。理緒子の細い肩が、ぴくんと震える。

ああ、ごめん。ごめん理緒子。

心の中で頭を下げながら、それでもあたしは芝居を続けた。どうにかして理緒子のほうへ誰かを来させるために　罨に嵌めるために。

『本当だよ。あたしは北のクイ族の娘で、お金もらってふりしてただけ。本物はこっちのほう。疑うんなら、指環してるから見えてみれ

ば？』

『指環？』

ターバン男が疑うように聞き返した。

立たされているルイスが、非難する眼差しをあたしに送ってくる。あたしは一瞬だけ目を合わせ、向き直るふりをして例の光に彼の目を誘った。

ルイスがいるのは、あたしのいる岩の右横。馬車よりさらに離れた砂地の上だ。角度的に微妙かもしれないと思ったけど、分かったみたい。ルイスは二度と視線を向けてこなかった。

芝居続行だ。

『そうだよ。聞いたことない？ アクイナスの魔法の指環。彼女、異界から来たからその指環がないと言葉が通じないの。だからずつと嵌めてる』

『主人を売るのか』

『あたしだって命は惜しいんだよ。疑うんなら、確かめてみれば？ 今も嵌めてるから』

ターバン男はさすがにまだ疑いを解かないらしく、少し黙り、目顔であの髭面に指示した。

よし来い。

胸がばくばくする。これがもしアレじゃなかったら ただの見間違いで、本当に理緒子が殺されてしまったら 。

そのときは、あたしも一緒に死のう。

だってもう他に考えつかない。理緒子ひとりを死なせるのは絶対嫌だ。自分が死ぬのもルイスが死ぬのも嫌だ。だったら、みんなが生きられるようにもがくしかないじゃんよ。

あたしは、小さく悲鳴をあげて逃げ出そうとする理緒子の後ろで、岩に擦りつけて必死で体のロープを解こうとした。この岩はさほど切りたつてないけど、ぎちぎちに縛ってあるロープも動かせば緩むんじゃないかっていう淡い期待だ。

あたしは作業を続けながら、理緒子にささやいた。少しでも気が

紛れるように。

「ごめんね理緒子。だけど、なにがあってもここから降りちゃだめだよ」

「なに……わかんないよお……」

「怖かったら目を閉じてて。絶対に、ここから降りないで」

「いやだ。怖い……たすけてえ……」

かすれた理緒子の叫びは、ほとんど懇願に近い。胸が痛い。なんてひどい友だちなんだ、あたし。

一步、二歩、三歩。男が近づいてくる。ロープはまだ解けない。

数メートルをこんな長く感じたのは、人生で初めてだ。早く来て欲しいのに、来て欲しくない。あたしの馬鹿な決断の是非を問われる、その一瞬が怖くてたまらない。

四歩、五歩、六歩。ついに彼の足先がはじいた砂が、あの輝きにかかった瞬間。

砂粒が動いたと同時に、あたしは叫んだ。

「理緒子、伏せて!!」

螺旋状にあたしたちの岩の下の砂が一点に吸い寄せられ、すり鉢になったその底から、あいつが不気味な長い姿をみせて宙に踊りあがる。

直前にいた男が、おもちゃみたいにその大きな口に吸い込まれた。湧き起こる悲鳴や怒号、混乱、恐怖を隠すように、括りつけられたロープを無理矢理たわませてあたしは体を捻りきり、理緒子の上に覆いかぶさった。

同じく様子を窺っていたルイスが、暴れまくる大穴喰に目もくれず、捕まえていた男を殴って拘束を解く。というか、殴った段階でロープなんて外れている。

やっぱ、ふりだったんだ。

結構殴られていたように見えたけど、ルイスは華麗なフットワークで男をあしらい、金髪をなびかせて少し外れた一際高い岩の上に飛び移った。その手には、二本の白銀の剣。

いつのまに……？

疑問に思ったのは、あたしだけじゃなかったらしい。一匹の巨大な虫に逃げ惑う男たちも、あつという間に形勢逆転したルイスの動きに、驚きの目をみはった。

あたしはまた解けきらないロープを纏わりつかせたまま、気を失ってぐったりとなる理緒子の頭を膝に乗せて、それを見守った。タバノ男がさすがに蒼ざめ、それでも冷静に問う。

「貴様、やはり魔法士だな」

「……」

「しかもその剣 「双月」か」

「双月」はルイスのいる魔法士団の名前だ。その土団長なんて知ったら、この人たちはどうするんだろうとあたしは考える。

「双月」土団長？氷のアクイナス？の異名をとる彼が、静かに告げた。

「私が何者かなど知る必要はない。どうせ貴様たちの行き着く場所はひとつだ」

喧騒の中でも凜と響く声は、星の光さえ凍りつきそうな怒りに満ちている。

「彼女たちを傷つけた罪は深い。償うがいい」

「なに……」

「いや、私だけの成敗では済まないな。貴様たちが怒らせた者ももうひとりいる」

その台詞に、あたしは首を伸ばして、きよろきよろと周りを見回した。

そして、わずかに松明が照らす薄闇の向こうから、見えない土煙が目に見えぬほど激しい蹄の音が、ぐんぐん近づいて来ているのに気がついた。

まさか……。

その、まさかだった。ものすごい勢いで走ってきたコマに乗っていた人物は、道を逸れてこちらに踊りこむや、鞍から飛び上がり、

逃げようとする男たちの間を走り抜けた。

剣で斬ったのか、殴ったのかは分からない。それでも大きなマン
トがひるがえるたび、お芝居でも見てるかのように、面白いように
男たちがばたばたと地面に倒れていく。

まさに一陣の風のように現われたその人物は、あたしたちの頭上
で暴れる大穴喰を剣の一薙ぎでとどめを刺すと、ひらりと岩に飛び
乗り、

『怪我はないか？』

と聞いてきた。思わず皮肉が口をつく。

『……遅いんだよ、タク』

無骨なタクの顔が、すまなそうに、少し安堵したようにやさしく
ほころんだ。

2

現われたタクを見た瞬間、あたしは彼の？急用？がなんだったのかを悟った。

いつも後ろへ流した短い髪がばさばさに乱れて額にかかり、顔も服も擦れて汚れて、男たちに乱暴されたルイスとたいして変わらないくらいだった。つまり、同じようなことをしてたってことだ。

タクは言い訳ひとつせず「すまない」と謝り、あたしの膝にいる理緒子に目を向けた。そして、息を呑む。

「リオコ……！」

「たぶん気を失ってるだけと思うけど」

大穴喰から庇おうと思っただけで抱きついたら、頭を打ってないか自信のないあたしは、あやふやに言った。息はしているけど、本当に理緒子はぐったりしていた。

無事を確かめるように差し出した、タクの左手が震えている。

タク？

「まさか、そんな……」

日に焼けたタクの顔から、みるみる血の気が引いた。まだ目覚めない理緒子といい勝負になる。そのとき、タクの来たほうから同じくコマに乗って現われた人物が、背後から声をかけた。

「落ち着きな、大将」

大将、とは古風な呼び方だ。タクのことなんだろうな、この状況だと。

「そのお嬢ちゃんは死んじやないよ。怖くて意識を別のところにぶっ飛ばしてるだけだ」

医者なんだろうか。その人物はぞんざいに言ってコマから降りると、理緒子の傍に膝をつき、被っていた外套のフードを脱いだ。

あたしは驚いた。声を出さなかっただけえらいけど、久しぶりに初対面の人をガン見してしまった。体格はややがっしりめの中背で、右頬に大きな傷があるけど、顔立ちもいたって普通。問題は色だ。髪は燃えるような赤。癖毛なのか、前髪ごと逆立ってくねってる髪は、きれいな篝火にも思える。左の横の一房だけを細い三つ編みにして垂らしていた。

そして、その両眼は金。肌が焼けているから余計に瞳が引き立つ。その瞳があたしを見て、にっと笑った。

『今の状況じゃ、気を失ってくれてたほうがこっちも気が楽だけだな。そっちのお嬢ちゃんも、怖かったら目え瞑っててな？』

『えー……と』

アナタハイツタイダレデシヨウ？

あたしが疑問を口にするより前に、理緒子の髪を撫でていたタクが、ようやく顔を上げた。

『……ああ、すまない、忘れていた。マキ、彼はジャムだ』

『よろしく』

ジャムという名前の彼が、あたしに大きな手を差し出す。理緒子がいて動けないあたしは、座ったままその手をとった。

『朝野真紀です。よろしく』

どうやらタクとは知った仲みたいだし、悪い人ではなさそうだ。なんでそんな人が突然この場に現われたかは後でゆっくり問いたですとして、今は一人でも味方が多いほうが心強い。

しかし？ジャム？って……苳って感じじゃないな。人參だ。

疲れのせいかな、あたしの思考が変な方向を漂う。

あんまり人の顔と名前を一致させるのが得意じゃないからこれは覚えやすいと思ったら、手を握ったまま、ジャムが肩を震わせはじめた。笑いながら名乗る。

『オレはジャメイン・ウッド。大将の下で働いている』

『アルのお世話係？』

『いや、あの王子にじゃなくて、個人的に仕えてるんだ。彼の手足

が増えたと思つて使つてくれたらいいぜ？」

そうになると、タクは手足が八本になるんだけど。なんてことを思つていると、ジャムが今度は嘔き出した。それでも遠慮はあるのか、横を向いて耐えている。

あたし、そんなに思つてることが顔に出てるかなあ。

友だちからは歩いてるだけで機嫌不機嫌が分かるとは言われるけど、わりと小芝居もできるほうだと思つんだけどな。

『……女の子は素直が一番だぜ？ 嬢ちゃん』

はつとあたしは、握手していた手を放す。理緒子の指環を触つてるから会話可能なのに、目の前の彼が使つたのは、まちがいに送心術だ。

この人、何者……？

呆然とするあたしに軽く片目を瞑つて、ジャムはタクに再び声をかけた。

『さつさと済ませようぜ、大将。アクイナスの旦那を一人で活躍させるのは、さすがにまずいだらう』

『ああ』

二人の体越しに改めて周りを眺めると、十数人いた連中は十名以下まで減っていた。大穴喰の騒ぎで何人が逃げ出したらしい。

で、さっきタクが倒したのが四名。残りの五、六人相手に、ルイスは一人で奮闘 でもないか。

せつかく取り戻した剣をなぜか二本とも腰に収め、ルイスは星空に金髪を舞わせて、大きな半月形の刀を振り回す男たちを右に左にさばっている。

決定打はないみたいで、連中はすぐに剣を構えなおしてかかってくるけど、ルイスは気にせず腕で止め、体をひねり、足で払って休みなく相手をしていた。

すごい。

格闘技はくわしくないけど、明らかに細身のルイスが、複数のいかつい男たち相手に互角かそれ以上であるのは分かる。余裕が違い

すぎるのだ。

刀を持ったあいつらが力任せだとしたら、こちらは技術。まるで演舞でも披露しているような無駄のない足さばきと身のこなしで、その優美さのため息が出た。

額に汗を浮かべる様子もなく、冷やかに凍りついた瞳のまま、ルイスは戦いの舞を舞いつづける。

何度攻撃してもダメージがないと知って焦ったのか、男が二人、息を合わせて両サイドから大きく振りかぶって剣を斬りおろしてきた。

はっとあたしが息を呑む間に、ルイスは背後へくるりとトンボ返りし、そのまま音もなく岩の上に降り立つ。

『そろそろ終わりにしようか』

告げるともなく口にされた呟きは、死神からの最期通告っていう表現がぴつたりだった。

気のせいか、ルイスの背後に真っ黒な翼が見える。

ああ、ルイスが魔王モードだ……。

今度から怒らせるときは気をつけよう、とあたしは肝に銘じる。

魔王化したルイスは、岩の上に立ったまま軽く目を閉じ、ふうつと唇から息を吐いた。開いた右手を前に突き出すようにする。

瞬間。

風もないのにルイスの髪が宙へ舞い上がり、舞ったと同時に男たちに向かって何かが奔った。

え……？

音も、色も、光もなかった。ちよつと耳がきーンとするけど、あいつらはそれ以上の何かを受けたみたいで、声もなく地面に卒倒する。

『な……に、今の……？』

『衝撃波だ』

一言で答え、タクはあたしたちから離れて、倒れてる男たちのほうへ 正確には、ただ一人立って残っている、あのターバンを巻

いたリーダーの元へ歩いていく。

その背中からルイスと同じくらい黒いものを感じ、あたしは代わり説明を求めるように、ジャムを見た。

あたしがルイスに見惚れてる間に、ジャムはあたしたちの縄をほどいて、傷になった腕を癒してくれていた。どうやら医者じゃなくて魔法士らしい。

『ねえ、なにがどうなってるの？ ショウゲキ八って？』

『あれは……そうだな。アクィナスの旦那が魔法士なのは知ってるな？』

『うん』

『簡単に言ってしまうと、さっきまで旦那が格闘してたのは、ただ単に攻撃を避けていただけじゃないんだ。避けながら、あいつらの体の中を魔法で痛めつけてたわけ』

『は？』

あの優雅な舞がソウデス力？

『見えない拳でちよつとずつ体の中を殴ってたっつーか、そんな感じだ。で、ある程度痛めつけたところで、同じようなことだが、今度は体の外から大気を全身にぶち当てた。それがさっきの衝撃波だ』
ぜんっぜん簡単な解説じゃないんですけど？

『だから、見た目には分からないがすでに痛手を受けてたあいつらは致命傷だけど、近くにいるオレたちに被害はないってわけだ。ま、制御が完璧なものもあるけどな』

『うーん、よく分かんないけど、風圧とかそういうの？』

『圧力が分かるんなら話が早いな。魔法で空素を圧縮して叩き込んだ、と言ったほうがいいか？』

『ああ、そっちのほうに分かるかも』

魔法は力じゃなくて手段。なんとなくだけど、ルイスたちを見てきて学んだことだ。

『ルイスは風を操れるの？』

『嬢ちゃん疑問には、間違いがふたつあるな。まず、旦那がした

ことは？風？を使ったわけじゃない。重力を操作したんだ。そして第二に 旦那の特技はひとつじゃない。全般、だ』

まさかの最強兵器仕様。どんだけなんだ、ルイス。

そしてあたしは気がついた、ジャムの漏らした一言に。

『……あの人たち、致命傷、なの？』

『あー、いや、けつこうな怪我つてことだ。旦那の手加減にもよるが、しばらく飯が食える状態じゃないのは確かだな』

曖昧にジャムがごまかす。

『ちよつと乱暴すぎるけど、嬢ちゃんたちを守るためだから見逃してな？』

あたしは、膝の上で目を閉じたままの理緒子に視線を落とした。

彼女の意識がなくてほんとよかった。

地面に倒れた男たちは、かすかにうめき声が聞こえるけど、動けないみたいだった。その中央に残されたターバン男は、ここからでも分かるくらい動揺して、岩の上のルイスと近づいてくるタクを交互に見ている。

『 タキトウス。血は流すな、彼女たちの前だ』

『 分かった』

ルイスの言葉に頷き、タクが長いマントをひるがえして男の前に立つ。相手は剣こそ構えているけど、完全に彼に吞まれていた。

タクの拳が宙に掲げられる。それが動いた瞬間、あたしの視界が暗くふさがれた 男の手だ。

『 ジャム』

『 見るの、やめとこうな？ あんま気持ちいいもんじゃないし』

確かに見えないんだけど、見えない向こうから、体の何かがどうにもならないダメーシ受けたみたいな湿った音が聞こえるんですけど。

気づいたのか、ジャムのもう一方の手があたしの右耳を覆う。

むう。

見たいわけじゃないけど、なんとなく息苦しい。それに、こうや

って大事に庇われるのって慣れてないんだ。あたしは居心地悪く眉を持ちあげて、ジャムの指の間からこそっと様子を窺った。

あ。

そこでは今まさに、男の体が飛んでいくところだった。文字通り、決して小さくはない男が宙に浮き、砂と石を撒き散らして夜の彼方に吹き飛んでいく。しかもタクが使ったのは、左腕一本だ。

やっと？成敗？が終わったのか、目隠ししていた手がどけられる。あたしはその腕の袖をつまんで、ちよいと引っ張った。

『ねえねえ、ひよっとして、ルイスとタクって強いのか？』

『強さの種類にもよるけど……ま、国中で無差別格闘技戦したら、間違いなく上位に入るだろうな』

『上位って？』

『たぶん、上から数えて十人くらい』

『……………』

うん、今度から二人を怒らせるのは絶対にやめにしよう。

3

タクとルイスの怒りはまだ冷めないみたいだったけど、ジャムが間に入ってくれて、あたしたちはその場を引き揚げることにした。もちろん真つ二つの大穴喰も、砂の上に伸びたあの男たちも放置だ。だけど、

『馬車へ戻ろう』

とタクに言われ、一瞬あたしは頷くのをためらった。

他に街へ行く手段がないとはいえ、あいつらがドアを蹴破って乗り込んできた場所に戻るには、ちよつと抵抗がある。察したのか、タクが言葉を続けた。

『大丈夫だ。別の馬車がある。乗ってきたほうは、ジャムにでも牽かせればいい』

『別の馬車？』

『ああ』

タクは、まだ目覚めない理緒子を両腕に抱き上げ、あたしを促した。

土埃を気休め程度に払ってついていくと、彼の言うとおり、道にはなぜか馬車が二台止まっていた。しかも、大きさも形もよく似てる。あの男たちが乗ってきたものとは思えない。

あいつらが道に落としていった松明がそろそろ燃え尽きて、辺りは本格的な夜の闇に包まれていた。あたしは目を細め、暗闇に潜むなにかを探るように凝らす。

その、どちらかというときれいなほうの馬車の陰から、誰かが顔を覗かせた。どきりすると、その人が手に持ったものを左右に振ってみせる。風に漂う香りで気づいた。

「……コジだ」

タクが、開けてあった馬車のドアから理緒子を運び入れて座席に寝かせ、その指から魔法の指環をとってあたしに渡す。

『安心するといい、彼は味方だ』

『はじめまして、マキさま。イザルク・ヤムートと申します』

コジを両手に抱えた彼が、にっこり笑って頭を下げた。ルイスより背が低くて中肉中背、黒茶色の髪をあたしと同じくらいの長さにそろえている。容姿も物腰も目立ったところがなくて、言葉は悪いけど？平凡？っていう感じがぴったりだ。

『はじめ……まして？ イザルクさん』

疑問形もどうかと思うけど、この状況で戸惑わないほうがおかしい。警戒心を解くように、彼はおだやかな笑顔で返した。

『どうぞ、イジーとお呼びください』

『じゃあ、あたしも呼び捨てで』

『そついうわけには……ああ、そつだ。お手回りの品をあちらの馬車から持ってまいりました。どうぞお確かめください』

どこかの添乗員のような口調で言い、イジー（呼び捨て即決）は理緒子の前の席にコジを置いた。座席の背もたれには、あたしと理緒子の肩掛け鞆が下がっている。

小さくていびつなコジを転がらないように整え、イジーが独り言のようにつぶやく。

『いくつか踏まれて、少し数が減ってしまいました。もったいないですね』

『どうせ苦くて食べられなかったから』

『これだけ小さなコジを、そのまま食べるのは無理ですよ。料理の香りづけにするくらいですね』

タクはいなくてルイスも運転中だったから、聞かずに皮をむいて二人で齧ってみただよね。それがまた苦くて。

胸先に込みあげる、コジの味とはまた別の苦さを飲み下すように、あたしは明るく喋った。

『そうなんだ。じゃあ目が覚めたら、理緒子にも教えてあげよう』

くつたりと目を閉じる理緒子は、ジャムが何かしてくれたのか顔色こそ前ほどじゃないけど、起きる気配なんてない。タクは馬車には入らずに入口に膝をついて、その寝顔を黙って見つめている。

後悔、謝罪、自責　そんな想いが浮かんだタクの横顔。なにがそこまで彼に、こんな表情を浮かべさせるんだらう。

『……タク、なにがあったの？』

『大したことでは』

『大したことだよ。あたしたちはあいつらに襲われて、それで理緒子がこんな』

『分かつている！　だが、それを今ここで口にしたところでどうしようもないだらう。知ったふうな口を利くなっ！』

タクが怒鳴った。理緒子が起きるんじゃないかっていうくらいの音量で。

怒鳴られたことよりも、あたしは、はじめて見る彼の取り乱しように言葉を失った。

はっとタクが蒼ざめる。

『すまない。八つ当たりだ』

『……うん。分かつてる』

あたしは頷き、タクの隣で、立ったまま馬車の外の壁に背をもちた。

『ねえ、タク。気がついてる？　タクつてば、最近謝ってばっかだよ？　謝るって大事だけど、でももっと大事なことだってあるんじゃないのかな。怒鳴ったり八つ当たりしたり……カツコ悪く言い訳したり。』

なんでもかんでも自分の心の中にしまい込んでたら、自分を分かってもらえないだけじゃなくて、他の人のことも分からないと思うんだ。悩みも弱さもダメなところも見せてくれない相手に、自分の弱い部分は預けられないよ、あたしは』

ちよつとえらそうなことを言いすぎたかなと、あたしは一人小さく笑った。

『……なんて、これはあたしの意見だけど。タクがいろいろ頑張ってくれてたの、知ってるから。当ててみせようか？ この馬車、困だったんでしょ？』

似たような馬車がもう一台あって、そのうえタクが格闘してきたっぽい、となれば、結論はひとつだ。タクはこの襲撃を事前に知って、陰で対処しようとした。まあ、半分失敗に終わったわけだけど。

タクが大きく息をついて、乱れた髪をかきあげる。

『……まいったな、君は。ルイスが聡いと言っはずだ』

『簡単な推理だよ、ワトソン君。よく観察すれば分かることさ』

ふざけて言うと、タクが怪訝な顔になった。

『わとそんくん？』

『誰なんだ、それは？』

聞き返すタクに続いて、冷静な声が尋ねる。ルイスだ。

金髪はまだ背に流したままで、服も顔も汚れていたけど、ルイスはもう普通モードに戻っていた。やって来て、ロープで括られていたあたしの手首や腕を確かめる。ジャムの治癒は完璧だ。頭をくしやりと撫でられる。

『怪我はもうないな？』

『うん。ルイスは？ 痛くない？』

血の滲む唇の端に、そつと指を伸ばす。

『ああ、汚れているだけだ』

ルイスが拳で拭くと、血の痕が消えた。そういえば、あれだけやられてたわりに顔も腫れていない。さすが万能魔法士だ。

ルイスは同じように馬車を覗き込み、理緒子の様子を診た。白い頬に手を触れ、

『落ち着いているな。このまま宿まで行こう』

『宿は？』

『アマラが取っているはずです』

タクの問いにイジーが答える。

……ちょっと待て。何人いるんだ？

ジャムにイジーにアマラって人に、と頭の中で指折り数えたあたしは、ふと荒野のほうを向いて固まった。強盗集団をぐるぐる巻きにしているジャムの傍で、手伝う見知らぬメンツが数名。

『……ねえ、なにこの大人数。どういうこと？』

『マキ、その話はあとでゆっくり話そう』

『あとでゆっくりじゃなくて、今すばやく聞きたい』

脇でこっそりイジーが笑う声が聞こえるが、そんなのはスルーだ。観念したように、ルイスが口を開く。

『彼らは味方だ』

『それは見たら分かる。確か行く前、一緒に旅するのはタクとルイスの二人って言ったよね？』

『？君たちと一緒に？旅するのは、私たちだけだと言ったんだ』

言葉遊びかい！ ナゼニ味方の揚げ足をとる。

『じゃあ、この旅に関わっている人は何人いるの？』

『それは分からない。私も全部を知っているわけではないんだ』

『どうせ黒幕はヘクターさんなんですよ。分かる範囲でいいよ』

上から目線のあたしの促しに、しぶしぶルイスが教えてくれたのはこうだ。

まず、あたしたちが進むより前に行くグループがひとつ。それがジャムとイジーとアマラさんって人で、彼らの役目は安全確認だ。

つまりブゼナでもブンゴルトでもナアカでも、使った宿や店は全部、この三人が事前に問題ないことを確かめていたというわけ。

さらにあたしたちの後から、少し遅れて別のグループがついてくる。これは警護のためと、他の人があたしたちに後ろからちよっかいを出したり、情報を買ったりするのを防ぐためだそうだ。

その後続集団と前に行く三人の連絡をとる係や、先行グループ以外の交代要員（二十四時間監視らしいよ、まったく）も合わせると、ルイスでもちよっと把握しきれない数になるらしい。

しかも、この手配をしたのはレスだそうだ。ただの柔らかな笑顔の

人だと思っただのに、さすがにクガイ。食わせ者だ。

『大集団じゃん……』

『だから教えるのが嫌だったんだ。大勢に見られていると知れば君たちも気を遣うし、本来なら旅が終わるまで顔を合わせることはないはずの連中だからね』

もう会っちゃったよ。遅いよ！

『隠していた形になってしまって、すまない』

『タクに謝られても、どうしようもないってば。で、この先もずっとこうなの？』

『？異界の乙女？の警護をわれわれ二人だけに任せるはずがないだろう？ 陰ながらだから、ほとんど気にかからない』

『気にするしないは主観の相違なの。問題は』

お花摘みとか頭にちゅーとかも見られてたんだろうか、ってことも気になるけど。

『これだけの大人数、異界の扉くぐれんのかな……』

『なんのことだ？』

『んー、ヘクターさんに言っちゃったんだよね。もし水門探しの失敗したら、みんなを連れて異界に逃げるから、異界の扉探ししておいてねって』

『……』

タクとイジーは失笑、ルイスは怖い雰囲気無言だ。

『そんなくだらないことを考えていたのか』

『くだらなくなんてないよ。重要じゃん』

『重要なものか。挑戦する前から失敗の言い訳を考えてどうする。威勢のいい君らしくもない』

『だって』

押し掛かるものが大きすぎるんだよ。言おうとして、熱い固まりが喉につかえる。

ルイスが、ぽすんと大きな手であたしの頭を包んだ。

『自信を持って。君とリオコを信じて、私たちはここにいる』

それが重たいんだってば。

そう返したいけど、代わりにあたしの左目から、雫がひとつ零れ落ちた。

『マキ。自分を信じるのが難しいなら、君たちを信じている私を信じてくれ。君を守る。たとえもし水門が存在しなくても、異界の扉が開かなくても、私が君たちを連れてどこまでも逃げる。それではだめか？』

だめじゃない、と言いかけて、やっぱり涙が溢れてきて、あたしは首を横に振った。

まったくこんな感動的な状況なのに、どうやってもみんなの前だよ。

『他のみんなも一緒、だよ？』

『ああ、きつと嫌だと言つてもついてくる。隠れてね』

『……隠れるのが趣味なの？』

『それは違うと思うけど。マキ』

囁くように名前を呼んで、ルイスが両腕にあたしを抱きしめた。

『怖い思いをさせてすまなかった。よく、頑張ったな』

『……う』

その声も布越しに伝わる体温も、すべてがあたたかくて、あたしの胸の中のなにかが弾け飛ぶ。ルイスにしがみついて、あたしは声をあげて泣き出した。

すごく　ものすごく怖かったんだ。今やっと？普通？に戻って、あたしはようやくそのことを自覚した。今さらだけど、おかしいくらいに体が震える。

『よくやった。もう大丈夫だから』

いつもはちよつと腹立つけど、子どもをあやすように撫でるルイスの手が心地いい。

彼の肩口に、ぎゅつと額を押しつける。存在を確認するように。

つい数十分前までは本当に、お互い二度と会えなくてもおかしくないくらいの状況だったんだ。心の底に押し込めていた最悪の予想

とか恐怖とか、それを逃れた安堵感とかで、もう頭がぐちゃぐちゃになる。

ひくつく喉から押さえきれない嗚咽が漏れて、あたしは赤ちゃんみたいにわんわん泣きじゃくった。

耳元で、ルイスの声が甘くやわらかく響く。

『大丈夫だ、マキ。もう安心していい。全部片付けたから』

……カタツケタ？

ちよつとだけ涙が引っ込んだ。まだルイスの背後に、あの真っ黒な翼が広がっている気がする。

『ルイス……』

『なんだ？』

『えと、弱いものいじめはしないでね？』

『……』

なんだか空気が微妙に凍りついたけど、とりあえず釘は刺しておかないと。だってルイスってば、自分が嫌いな相手には容赦しなそうなんだもん。

ルイスが眉間にしわを寄せ、それでも魔王化したときの数倍やさしい瞳で、あたしを睨む。濡れた頬を指先でぬぐうついでに、むにゅんと摘まれたのは、凶星を突かれたささやかな復讐なんだろう、きつと。

あたしは気恥ずかしさをごまかすように、もう一度彼の肩に顔をうずめ、その服でこっそり強く涙を拭きとった。

4

あたしたちを襲った男たちは、まだどうにか生きていたらしく、後方部隊の人たちにロープで数珠繋ぎにされ、傷だらけのままおとなしく連れられていった。

列の最後尾はあのターバン男で、あたしたちの横を通り過ぎる途中、ふと足を止めてこちらを見た。まだ泣き顔のままリスにもたれていたあたしは、反射的に彼の背中に隠れる。だけど気になって、目だけで様子を窺った。

「おまえ、本物だったのか」

この質問は非常にカンジが悪い。あたしは黙って睨みつけた。

「さつさと歩け！」

長い棒で突かれても、男は血の滲んだ口元で薄笑いを浮かべて動かない。

「王の私兵をここまで動かすとはな。そのうえガウルの群れは寄ってくる、大穴喰は出る……異界の乙女が神の使いだという伝説は本物だったのだな。あの世のよい土産話になる」

「……うっさいよ。本物とか偽者とか知らんし。正直どうだっていい」

気が緩んでたのか、地が出てしまった。でも、もう取り繕う気にはなれない。

「あたしはこの世界のためじゃなくて、うちらを助けてくれた人のために水門探すの。水門見つけて、雨が降るんか槍が降るんかも知らん。もう、ほつといて。振り回されるのは、ほんまいい加減疲れたわ」

「俺たちを恨むか？」

「大嫌い。きつちり牢屋で償え」

あたしの一言に、ターバン男だけじゃなく周りの空気が変わった。

『……俺を死罪にしないのか？』

『あんたを死刑にして、なんかいいことでもあるわけ？ どうせ今まで碌（ろく）なことしてないんだろ？ 多少は世間様の役に立つことやってから死ねば？』

死刑制度反対じゃないけど、自分の判断で誰かが命を失うなんて、あたしには重すぎる。ただ単に自分の手を汚したくないっていう、甘い気持ちかもしれないけど。

そこまで考えて、あたしは大事なことを思い出した。

ああ……そうだ。もう、あたしは。

剣や服の切れ端や、なにか分からない、分かりたくもない染み痕の散らばった岩と砂の荒野には、痛いぐらいの星明かりが降り注いでいる。なんだか急に体が寒くなった。

背中越しにルイスがささやく。

『マキ、君の意見は絶対だ。望めば当然死罪にもできる。それでいいのか？』

『……いいよ。人が死ぬの、見たくない』

彼の服を握りしめたまま、あたしはもごもごそう言った。もう一度棒で小突かれて促され、ターバン男が歩き出して、また立ち止まる。

『もし、おまえが本物なら』

もういいってば、その話は。

『俺の村を救ってくれないか』

虫の良すぎるその訴えに、ロープをもっていた一人が罵声を浴びせる。ただ棒で叩かれても肩を掴まれても、そいつは喋るのをやめなかった。

『俺はアチファの村で生まれた。水源などなく、あったのは砂と灰まじりのひどい泥水だけだ。兄弟はみんな幼くして死に、若い男といえど村で俺一人。土くれを食らって生き延びたこともある』

『……』

『もしおまえが本物の異界の乙女なら　俺の命など、いくらでもくれてやる。どうか俺の村を救ってくれ。ここに、どんなわずかでもいい、雨を降らせてくれ……!』

彼は、泣いていたのかもしれない。それくらい、耳に突き刺さる叫びだった。

あたしは、その声を一切遮断するようにルイスの背中にしがみつき、ぎゅっつと目を閉じた。

『……マキ?』

あたしの様子に気付いて、ルイスが呼びかける。あたしは答えなかった。

男たちがその場から完全にいなくなるまで、あたしは凍りついたようにそこから動くことができなかった。

深夜すぎ、あたしたちはヒューガラナの宿屋に到着した。理緒子は眠ったまま、タクに抱き上げられて建物に入った。

実は着く前に馬車の中で一度目を覚ましたんだけど、今が移動中だということと全員無事だということを伝えると、作りおきしてあった蜂蜜入り香茗茶を飲んで、またこてんと寝てしまった。あのお茶になにか入っていたのかもしれない。

あたしも同じものを飲んだあと眠たくなっただけで、馬車の停まった物音で目が覚めてしまった。自分で歩いて宿に向かう。

あたしたちの乗っていた最初の馬車は、タクの言ったとおりジャムが牽いてくれて、宿の近くの安全な場所で荷物を移し替えてくれた。

『マキ、なにか食べるか?』

ルイスが声をかけてくれたけど、あたしは首を横に振った。なんだか疲れて、口を動かすのも億劫だった。

『体、拭きたい。湯浴みじゃなくていいから』

『すぐに用意させる』

ルイスは頷き、そっとあたしに体を寄せてきた。いつものように

頭にちゅーでもされるのかと思つたら、両手で頬をはさみ、真剣な顔で見つめてくる。

『大丈夫か？』

そんなことを聞かれても分からない。もう本当に、理緒子みたいに全部の意識を投げ捨てて休みたかった。こんな疲労感、この世界へ来た最初の夜以来だ。

『……うん』

『無理をしないで、相談があつたらなんでもいい、私に言うんだ。いいね？』

頷いた。ルイスはまだいろいろ言いたいみたいだったけど、無言であたしの頭に頬を触れる。包み込まれるように腕を回され、密着してるわけでもないのに二人の間に熱が籠もった。

治療術。

反射的に、ルイスの胸を手のひらで押し返す。

『だめだよ。ルイス、疲れてるのに』

『鏡を見るといい。君のほうがひどい顔色だ。それに、私は男だよ。これくらいなんてことはない』

普通は女のほうが痛みが強いかというのに。

でもさすがにルイスの魔法を受けて、気持ちの悪さが緩まった。

それでも反論する言葉が思い浮かばないのは、疲労が相当きてるのかも知れない。

おとなしく治療術を受けたあたしに、ルイスは『おやすみ』と言つて、やっぱり頭に軽くキスして去つていった。

部屋に入ると、二つあるベッドの奥側に理緒子が横たわり、その足元にタクが座って彼女を見つめていた。その視線にあたしは気付いた。

兄が、家に連れてきた彼女に向ける眼差しと一緒だつてことに。

あたしに気がついて、タクがこちらを見る。あたしは小さな燭台の明かりが灯る薄暗い室内を歩いて、彼の隣に腰掛けた。

『よく、寝てるね』

『ああ』

『睡眠薬?』

『……いや、不安を消す薬だ』

タクは否定をしない。たぶん、あたしたちに関して起こることを予想して、いろいろと準備をしてきたんだろう。

疲れていたあたしは、もうそのひとつひとつに突っ込む気にすらなれなかった。

タクもだいぶ疲れているようだ。肉体的にというより、精神的になにかを手に持っていると思つたら、紐がちぎれて足の外れかけた、あのクマのぬいぐるみだった。

『……汚してしまった』

ぼつんと、タクが呟く。たぶん今夜の乱闘のせいだろう。すさまじい彼の動きを考えると、失くさなかったただけすごいんじゃないかとあたしは思つたけど、そうは口にしなかった。

『それ、理緒子に直してもらいなよ』

『……彼女から貰ったものだぞ?』

『だからじゃん。そんなになつても持つててくれたつて知つたら、喜ぶと思つよ?』

『当たり前だ。彼女がくれたものを粗末にはできない』

そして、苦く絞り出すように言葉を吐き捨てた。

『……彼女は俺を軽蔑するだろうな』

『どうして?』

『守れなかったから』

彼女を　それとも、約束を?

たぶん、両方なんだろうな。

あたしは思う。タクは、理緒子に危害が及んだということよりも、彼女の心に傷がついたことを悔やんでいるようだった。

『タク、理緒子とちゃんと話しなよ』

『なにをどう伝えればいいか分からない』

タクのダメージは深刻そうだ。こんなに弱気になってる彼は、初めてかもしれない。いつも懐の深さをみせる大人の彼が、迷子の少年みたいに憔悴しきって途方に暮れていた。

『ねえ、タク。あたしたちは子どもだけど、馬鹿じゃないよ?』

『知っている』

『じゃあ、どうしようもない事情があったことを説明されて、きちんと誠意をみせられて、それでも理不尽に軽蔑したり腹を立てたりすると思う? あたしたち異界の人間だけど、人としての常識くらいあるんだよ。まして人形でもない。ねえ、タク』

あたしは理緒子を起こさないように今まで話していた小声から、やや声を高めた。

『あたし、タクだけはあたしたちを変な立場で見えていないんだと思ってた。ちゃんと? 朝野真紀? と? 高遠理緒子? っていう二人として接してくれてるんだと思ってた。違うの?』

『……』

『理緒子とちゃんと話をして。ちゃんと、彼女を一人の人間として受け止めてあげてよ。それができないのに、軽々しく守るとか言わないで』

あたしは言いたいだけ言つと、ベッドから立ちあがった。ぎし、と木が軋む。

あたしは右手から指環を抜き取り、理緒子の左手に嵌め直した。その手を握って、

『起きるまでついててあげてよ? で、ちゃんと二人で話して』

『俺がここにいるわけには』

『気がつかないふりしないでよ。今理緒子に一番必要なのはタクだつて、分かってるんでしょ?』

タクの反論はない。なるほど、彼も知ってたってわけだ。

あたしはため息をついて立ち上がった。そのとき、

「だれ?」

「理緒子」

あたしは慌てて腰を下ろし直した。枕の上で頭を動かし、少しまぶしそうに理緒子が部屋を見渡す。

『タク……？』

『目が覚めたのか』

馬車にいたときは、タクは御者をしていたから、昼以降会うのはこれが初めてだ。目が合った瞬間、理緒子の両目からぼろっと涙が零れ落ちた。

足早にタクが、あたしとは反対側の枕元まで移動する。

『すぐく……すぐく、怖い夢を観たの。タクがいなくなっちゃう夢』

まだ薬が効いているのか、うわ言のように理緒子が喋る。

『すぐく怖かった……』

『大丈夫だ、俺はここにいる』

『わたし、ね……見たの。タクがね、あの、金色の目の人と話してるの』

ジャムのことだ。いつ見たんだろう。あたしの全身から音を立てて血の気が引いていく。

『村で、タクをね、待ってるとき、見たの。だから……すぐく不安で』

『すまない。彼は』

『あのね、護衛の人なんだって。陰でこっそり、あたしたちを守ってくれてたんだってさ』

あたしはなんとか、何でもないことだったように言い繕った。

『ジャムっていうの。いい人だったよ』

『……そっか。それで……忍者みたい、だったんだ』

忍者みたい。理緒子は、いったい何を見たんだろう。気付いてあげられなかった自分に、心の中で舌打ちする。

そんな彼女をあたしは、あのとき追い詰めたんだ。

彼女の左手を握り、重く沈黙してしまったあたしの代わりに、タクがゆっくりと話し出した。

ツークスを出て以来、姿を見せないように、あたしたちを見守る

人が何人もいること。

旅に集中して欲しくて、内緒にしていたこと。

金色の目のジヤムは、事前に危険を知らせたりする連絡係だったこと。

『君が村で見たというのは、その連絡を受けていたときだと思う。本当は夜にしかしないはずなんだが、あときは緊急で……』

『きん…きゆう?』

『……ああ。行くはずの道の途中で、君たちを待ち伏せしている者がいると教えてくれたんだ。だから、馬車を離れた』

『なんで……?』

理緒子の疑問はもつともだ。危険が及ぶことが分かっていたなら、なおさら傍にいて欲しいと思ったんだろう。タクは唇を噛み締め、重く言葉を紡いだ。

『よく似た馬車を仕立て、そっちにおびき寄せようとしたんだ。そうすれば、君たちが戦闘に巻き込まれることはないだろうと、そう思ってた』

『……おとり』

『ああ、そうだ。だが、俺たちが甘かった。敵は用心を重ねて、二つの集団に分かれて攻撃してきた』

『ファリマって、言ってた』

『え?』

『ファリマの情報がなんとかって、あのひとたち言ってた、よ……?』

あの騒ぎの中、あいつらが何か喋ったに違いない。タクが武人の顔に戻って頷いた。

『そうか、ありがとう』

『へへ、ちよつとは……役に立った?』

『ああ』

タクが笑って、ごつい手で理緒子の髪を撫でた。いつくしむように。

子犬みたいに、理緒子が目を細める。

『タク。わたし、ね。くやしいの』

『くやしい?』

『みんなが、一生懸命何かしてるるとき、なにもできなかったのが、くやしいの。……ごめんなさい』

理緒子のまなじりから、涙の雫が伝う。あたしは思わず声をあげた。

『理緒子のせいじゃないよ。あたしが』

『いいの。真紀ちゃんが、助けようとしてくれてたの、分かった、から』

天井を向いたまま、理緒子は腕で顔を覆った。

『怖かった、けど、分かった、から。でも……』

『リオコ、すまなかった。君を守ると誓ったのに、こんな目に遭わせるなんて、本当に……自分の未熟さが情けない』

タクの声は、わずかに潤んでいた。あたしは音をたてないように、そっと枕元から立った。

「……真紀ちゃん、どこいくの?」

「お風呂借りに行ってくる。だから、二人でちゃんと話すんだよ?」

精一杯の気力を振り絞って、あたしは笑顔を作った。タクに目まぜで、頑張れと親指を立ててみせる。そして部屋を出た。

正直言って、他人を気遣える余裕は、あたしにはひとつも残ってなかった。あの場で支離滅裂なことや暴言を吐かなかっただけ、よかったと思う。

……つかれた。

部屋を出たところの廊下で座り込みそうになるのを、必死でこらえる。でもたぶん、眠れないだろうと思った。あれだけ泣いたのに、まだ泣いて喚き散らしたかった。

どんだけ甘ったれてるんだ、あたし。

元いた世界で、どれだけあたしは庇護されていたんだろう。無条件にあたしを受け入れてくれていた家族や友だち、嫌いだっただ学校の先生までもが、すごく貴重な存在だった気がした。

よろよると立ち上がり、隣の部屋をノックする。中から聞こえるルイスの声に、「開けて」と日本語で言うのと素直にドアが開いた。

「ごめん、今晚ここで寝させて」

『マキ、どうしたんだ？』

腕を掴み、ルイスが聞いてくる。あたしはそれをふり払い、すたすた歩いて靴を脱ぐと、ベッドのひとつにごろんと横になった。ベッドの片隅に腰掛け、ルイスがあたしを覗き込む。

とつくに湯浴みを済ませたのか、服を着替えた彼からは、かすかに石鹸の香りがした。髪もきれいに束ね直している。

『リオコはどうした？』

「タクと話してる。あたし、今日はここで寝るね」

マフオーランド語ではなんて言うんだっけ？と、あたしは記憶を探った。

「ミドルム（わたし 眠る）」

『リオコと喧嘩でもしたのか？』
首を振る。

『タクは？』

「クン リオコ（理緒子と一緒に）」
ルイスが、かすかにため息を吐いた。なにか呟いて離れようとするので、服をつまんで止める。

「ネイ（だめ）」

『さすがにまずいだらう』

眉間に皺を刻んで、ルイスが渋い顔をする。イイ男が台無しだ。
あたしは寝転がったまま首を横に振って、もう一度ネイ、とくり返した。

『ヘクターにばれても知らないからな？』

「ヤー（いいよ）」

あたしは頷き、横を向いて目を閉じた。

『湯浴みはどうする？』

「ネイ（いらない）」

断ると、ルイスは黙って部屋を出て、お湯の入った洗面器とタオルを持って戻ってきた。壁際のテーブルに洗面器、ベッドの足元にタオルと彼の荷物から出した着替えをたたんで置く。

『外に出ておくから、体を拭くといい。済んだらドアを叩いて。取りに来るから』

ルイスはあたしの手に軽く触れてそう言っていると、言葉通り出て行った。閉まるドアを見送り、あたしは起き上がった。

お湯になにか入れてあるのか、淡い香りが漂う。ハーブのような爽やかな匂いだ。

立ち昇る湯気をしばらく嗅いでいると、少し気が鎮まった感じがした。あたしは顔を洗い、湯に浸したタオルで体を拭く。タオルは真っ黒になった。

わあ、やばい。

こんな状態で寝るとか言っていたさっきの自分は、かなり女子失

格だ。

本当は湯浴みをしたほうがいいんだろうけど、さすがに湯浴みのできる場所　たいていの宿には共同風呂ならぬ共同湯浴み所がある　まで移動する気力はなかった。ダメ女子だ。

ダメついでに、お湯を跳ね散らしながら髪だけですすぐ。ドライヤーがないのが、本当にこの世界の欠点だ。タオルでぐいぐい拭きとって、それから用意されたルイスの服に袖を通した。

おつき！

身長が違うと思ったら、肩幅も袖の長さもぜんぜん違った。ルイスはズボンも用意してくれていたけど、シャツだけで膝まで充分隠れる。

あたしは袖をまくって調節し、着心地を整えると、靴に爪先だけを引つ掛けてドアをこんこんと叩いた。すぐにルイスが顔を出す。たぶんドアの外にいたんだらう。あたしは洗って絞ったタオルと洗面器を手渡した。

「ありがと、ルイス。すつきりした」

『じゃあ、私は外で寝るから、マキはここで使うといい』

にこやかに告げられ、あたしは一瞬疲れが吹き飛んだ。言葉が出なくて、部屋を指差す。

「ルイスも」

『……それはまずい。さすがに私も今日は自信がない』

「なんで？」

『男女が同室で眠るのはよくないだらう。わきまえる』

前は？一緒に寝よう？なんて言ってきたくせに。

なんとなく腹が立つ。理不尽だと分かっているけど、苛立ちを簡単に抑えられないくらい、あたしの心はささくれ立っていた。

「分かった。あたしが外で寝るから、ルイスが部屋使って」

日本語で言い捨てて部屋を出て行こうとすると、ルイスが片手で肩を掴んで止めてきた。洗面器持つてるから危ないってば。

『どうしたんだ、マキ。おかしいぞ？』

「悪いけど結構これで普通。あたし寝るから、ほつといて」

『マキ、待て』

送心術で言いつつ、ルイスは宿にいる誰かに向かって声をかけた。暗がりからイジーがやって来て、彼の手から洗面器とタオルを取りあげる。

両手の空いたルイスは、あたしを無理矢理部屋の中に押し込めて、自分はドアに半身を差し入れた状態でイジーに話しかけ、それからドアを閉めた。

『ほら、座って』

あたしの腕を取り、手前のベッドに連れて行く。

『まったく、なんて格好をしてるんだ。ほら、きちんとスポンを履いて』

いらぬ、とあたしは首を振った。どうせ履いても、ぶかぶかですれまくりだ。

『マキ』

あたしは返事の代わりに、ごろんとベッドに寝転がった。

今の自分って、ものすごくめんどくさいやつだと思う。ルイスに世話を焼かれたかったわけじゃない。心配させたり、困らせる気もなかった。

ただ 今夜だけは、一人は嫌だった。

理緒子も限界みたいだから、タクとの仲を邪魔する気にはなれない。馬車で寝ても良かったけど、守ってくれる人がいると知ってても心細かった。

なんだが、とても孤独な気がしたんだ。違う世界にいるっていうだけじゃなく、あたしから？異界の乙女？っていう存在をとってしまったら、何が残るんだろうっていう不安。

最初は肩書きなんて知ったことかかって感じて、やってみて？できたらいいな？くらいの軽い気持ちだった。それがだんだん？やらなくちゃ？になつて。

『 雨を降らせてくれ』

あんなふうToStraitに言われたの、はじめてだ。ルイスやヘクターさんは優しいからほつきり言ったことはないけど、あれがきつと普通の人の本音なんだろう。

今ここで悩んでも仕方ないのは分かってる。分かってるけど動けない。

あたしはうつぶせになって、枕にぎゅっと頭を押しつけた。ふいに後ろ頭にあたたかさを感じ、顔をあげる。ルイスが枕に右手をつき、こちらを覗き込んで、軽く左手をかざしていた。

指で、あたしの髪をかき分ける。あたたかさがそこから沁みて、濡れていた髪の毛がみるみる軽さを取り戻していく。

『……髪が濡れたままでは、風邪を引く』

「すごい、ルイス。ドライヤーいらないんだ」

こんなことをされると、一人で拗ねていたのが急にくだらなくちっぽけに思えてしまう。まだ立ち上がる気にはなれないけど、あたしは横を向いて彼を見た。

「ルイス。ミネ エスト ジュヌ フィーレ（あたし 乙女じゃない）。ネ プルーヴォ（雨 降らない）」

『あの男が言ったことを気にしているのか？』

頷くと、ルイスがため息を吐くように笑みを洩らした。

『気にするな。いちいち他人の願いなど気にしては、身が持たないぞ？』

首を横に振る。

『マキ。私も、異界の乙女の伝説が本当かどうかなんてどうだっていい。君はあのおとき？助けてくれた人たちのために水門を探す？』
言うてくれた。それだけで充分だ』

どうやら広島弁は割合正確に伝わっていたらしい。

なんて、ふざけたことを思いながら、あたしは心の一番下に澱む、あのおときからあたしの胸の内側をぐちぐちと食い破るそれから目を背けようとした。

あたしは？乙女？なんてすごい存在じゃない。あたしは……。

認めるのが怖くて、唇を噛む。日本語では口にできない言葉が、乾ききつた茨（いばら）のようにあたしの喉を突いて出た。

「……リ　モルテス（彼　死んだ）」

あたしの髪を撫でていた、ルイスの手が止まる。見つめる青い瞳から逃げるように、あたしはまた枕に顔をつけた。

「エン　サブロ（砂の中）」

「マキ」

ルイスが枕のすぐ横に足を崩して座り、膝にあたしの頭を抱き寄せる。少し癖のある金髪が、あたしの頬にやわらかく降りかかった。君のせいじゃない」

「ネイ（違う）」

「よく聞いて、マキ。君は囚われていた。彼は自分で歩いて、あの巢に嵌まったんだ。場所を選んだのも彼らだ。大穴喰もタクが殺した。なにひとつ君のせいであるはずがない」

「でも」

あたしが挑発しなかったら、まだ無事でいたかもしれない。彼はまだ、彼を待っている家族のもとに帰れたかもしれない。どんなに酷いやつらでも、雨を降らせてくれと言ったあいつが村を想うように、あの人もきつと大事に想うものがあつたはずなのに。

あたしが　奪ってしまった。

無様な泣き顔になるあたしの髪を撫でながら、ルイスが続ける。

「もし、どうしても誰かが殺したと言うなら、それは私だよ」

あたしはまじまじと彼を見上げた。穏やかな青い瞳は、あのときの凍りついた表情が嘘のようにやさしかった。

「私は君を守りきれなかった。君が無茶なことをしようとしているのを知っていたのに、止めなかった　いや」

ルイスの唇に一瞬、冷気をまとった微笑がよぎる。

「君があいつを誘き寄せなかったら、私が殺していた。私がなぜ、あの場ですぐに動かなかつたか分かるか？　君たちが、いたからだ。君たちに血の流れるところなど見せたくなかった。だが、あのと

もし、あいつらが君たちを少しでも傷つけていれば、私は躊躇わず皆殺しにしていたらろう』

ルイスの言葉はよどみなかった。？守る？と言われたことの意味を、あたしはようやく理解した気がした。彼にとつて、そのことはまるで空気のように当たり前で、事も無げなことなんだ。

『まったく君は、自分を軽んじすぎる。牢屋で償えなどと……。あいつらなど、熱湯で煮て百回切り刻んで逆さ吊りにしても飽き足りないほどなのに』

……ふー。やっぱりルイスが魔王だ……。

今日はスイッチが入りっぱなしなんだろうか。あたしは憂鬱に考え、苦笑し、そしてまた涙をこぼした。

人が、死んでしまった。

病気で亡くすのとも事故で亡くすのとも違う。正当防衛だって分かってるけど、大事ななにかが一緒に壊れて、もう元へ戻らない気がした。

みつともなく泣きべそをかくあたしの頬を撫で、ルイスが低くあたしに何かを囁く。マフオーランド語だ。

「……なに？」

『くり返してごらん』

送心術で言い、ルイスはゆっくりと、単語をひとつずつ区切りながら喋る。

「アクヴォ、ファイロ、ヴェント、シエル、テッレ、ルミール、オスキュレート」

「あくヴお、ふあいろ、ヴェんと、しえる、てつれ、るみーれ、おすきゅれーと」

「デイ エスト ヴイヴァンテ、デイ エスト モルテス」

「でい えすと ヴい… ヴあんで、でい えすと もるてす」

「テンプ」

「てんぷ」

「トウドス テム クエ レプロディセント エン ウヌス ロン

ダ ドウ エスパシオ」

ながつ。

ちよつと怯む。だけどルイスが一生懸命教えてくれるから、気合を入れてくり返した。

「とうどす てむ くえ れぷろでいせんと えん うぬす るんだ どう えすぱしお」

『じゃあ、最初から続けて言ってごらん。ゆっくりでいいから』

初めのほうはもう忘れた気がしたけど、うながされて、あたしはしぶしぶ口を開いた。

「あ…… アクヴォ、ファイロ、ヴェント、シエル、テツレ、ルミール、オスキュレート」

『水よ、火よ、風よ、空よ、大地よ、光よ、闇よ』

『デイ エスト ヴィヴァンテ、デイ エスト モルテス』

『生きしものよ、死したるものよ』

『テンプ』

『時よ』

「トウドス テム クエ レプロデイセント エン ウヌス ロン

ダ ドウ エスパシオ」

『すべてが宇宙の環の中につつがなく回帰せしめんことを』

ルイスが送心術で教えてくれた意味は、お祈りのような内容だった。

? 水よ、火よ、風よ、空よ、大地よ、光よ、闇よ。生きしものよ、死したるものよ。時よ。すべてが宇宙の環の中につつがなく回帰せしめんことを ?

無神論者の多い日本人気質のせいか、そのお祈りはすごくすんなり心に入ってきた。

『魔法士が、一番初めに覚える讃詞(さんし)だよ』

「さんし?」

思わず日本語で聞き返すと、ルイスは苦笑して「パルドーア」と教え、また送心術に切り替える。

『魔法士は、自然の流れを読み、形を変えて利用する。だから魔法を使う最初と最後に、今の言葉を捧げるんだ。魔法士にとってもっとも基本で、もっとも大切な概念でもある』

「いつそんなのを喋っていたんだらう。思ったのが顔に出たのか、ルイスが続けた。」

『口に出さなくても、心で唱えるんだ。まあ、時間のないときは省略するか、あとでまとめて言うこともないでもないけど』

「冗談めかせ、ルイスはマフォーランド語で、さっきの言葉を唱えた。」

「アクヴォファイロヴェントシエルテツレルミレオスキュレート、
デイエストヴィヴァンテ、デイエストモルテス、テンプ、トウドス
テムクエレプロディセントエンウヌスロンドンダドウエスパシオ」

……句読点ありませんでしたが？

「あまりの早口に目を丸くするあたしに、ルイスは少し笑って解説に戻った。」

『この世界にあるものは、すべて繋がっている。今手に持っていたものでも、やがては形を変えて別のものへと移ろっていく。食べ物も水も、火も土も光も……命も』

ルイスが、濡れて頬に貼りついたあたしの髪の毛を指先で払う。

『死んでしまった命は戻らない。その存在は、この世にはもうないんだ。悔やんでも悲しんでも、どうすることもできない。どんなに受け入れたくないことであっても　マキ』

ルイスが、ひっそりとあたしの名を囁く。

『辛かったら、今の言葉を唱えてごらん。きっと君に力をくれる。ほら』

「……あくヴお、ふあいろ、ヴェント、シエル、テツレ、ルミール、
オスキュレート」

『そう、続けて』

「デイ エスト ヴィヴァンテ、デイ エスト モルテス」
「テンプ」

「トウドス テム クエ レプロディセント エン ウヌス ロン
ダ ドウ エスパシオ」

最後の一句は、二人の声が重なった。あたしは、乾きかけていた頬に熱い涙がひとすじ、伝って落ちていくのを感じた。

苦い涙。それでも、その一滴は確かに、あたしの気持ちが小さく前へと進んだ証だった。

すべての命が、つつがなく宇宙の環の中に還りますように。

『なかなか上手い。君は魔法士の素質がある』

おどけるルイスのお世辞が、痛い心に沁みていく。

あたしは自然と、腕を伸ばしてルイスを抱きしめた。この言葉をくれた彼に、感謝とごめんねをどうにか伝えたかったから。

といつても位置的に難しく、お腹辺りにくつつく感じになる。

あまり様にならない。

「マキ」

どこか戸惑った声で、ルイスがあたしを呼ぶ。

「ルイス。トレ ダンカス（とっても ありがとう）。ミ フェリ

ーセ クン ヴイ（あたし 嬉しい あなたと一緒に）」

『私もだよ。だが……その格好は、どうにかしてくれないか。目のやり場に困る』

目のやり場と言われても、細くもない生足なんか見ても楽しくないだろうに。

あたしはそのそのそ動いて、布団にあった薄い毛布をお腹にかけた。これでいいかな、と思ったのに、

『ズボンを履けと言っているだろう』

……最初の会話に戻ったよ。なんでだ。

「あれ、だばだばで寝心地悪そうなんだもん。下着だって履いてるし」

『私が落ち着かない。頼むから、ズボンを履いてくれ。お願いだ』

お願いされるとしようがない。あたしは毛布の下で、ごそごそとズボンを履いた。やっぱり予想通りウエストはゆるゆるで、裾も二

十センチくらい生地が余る。

ウエストは仕方ないので腰パン仕様ですらし、裾をくるくるとま
るめてあげると、なんとか形になった。

「できたよ」

「……」

見たとたん、ルイスが無言であたしのズボンの裾を下ろしはじめ
る。

「なにすんの、せつかくきれいに折ったのに！」

『こんな足を見せるものじゃない』

見てるのはルイスだけだってば。しかも膝下だし。

「あんまり長いと邪魔なのー」

『だめだ』

ベッドの上で散々二人でやりあった拳句、あたしの寝巻きズボン
は、足首がぎりぎり見える長さ、というところで落ち着いた。

『まあ……これくらいなら、なんとか、うん』

ルイスは一生懸命自分になにかを言い聞かせているようだ。

やっぱりあたしは、ただの手のかかる子どもなんだろうか……。

ちよっぴり寂しく思う。天都でも服装をつるさく言われたことを
思い出し、あたしはルイスが保護者とか飼育主的立ち位置にいるこ
とを改めて認識した。

まあ、ミヤウがかわいかったからいいんだけど。

よく分からない理屈で自分を納得させる。

タクが理緒子へ向けていたような眼差しを、あたしが向けてもら
えることは、たぶんないだろう。だいぶ慣れた頭にちゅーとか、
『私が守る』なんて台詞を言ってくれるから、ちよっとは違う関係
になるのかって、どこかで期待してたのに。

……期待？！

自分で思ってた驚いた。びっくりしすぎて、体がびくっと動いてし
まう。

『どっつした？』

完全に一緒のベッドに上がりこんでいたルイスが、足を投げ出した姿勢のまま、首を傾げてあたしを見る。ベッドは大きめでセミダブルくらいだから、二人で並んでも落ちることはない。

あたしは今ももう、家族よりも見慣れてしまったその顔を黙って眺めた。やっぱり、かつこいい。整っているだけじゃなくて、なんだかじつと見つめ続けてしまいたくなる不思議な魅力がある。

あたし、面食いだっただのかな。

きれいな男の人って一緒にいると腰が引けちゃいそうで、どっちかというと苦手だったんだけど、ルイスは別格だ。性格の悪さとひねくれ加減とセクハラでイイ男度半減だし、なにより彼自身が自分をイイ男だと思ってる。

それにたぶん　？ルイスだから？いいんだと思う。この金色の髪も青い目も、日に焼けたブロンズの肌も目尻の笑い皺も、顎もちよつと尖った耳も、喉も肩も手も長い足も、ちよつどいいくらいの低い声も。？ルイスだから？いいと思うんだ。

あたし、相当疲れてるわ……。

傍にいる人が最高の男に見えるのは、非日常のストレスのせいだとあたしは結論づける。溜め込んでいたものを出し切ったせいか、体も心も妙に気が抜けていた。気だるい波が全身を襲う。

あたしは手まねでルイスを傍に招いた。ルイスが体を伸ばし、あたしの左隣に肘枕をして横たわる。

「なに？」

なんでもない、と首を振る。うん、近くで見てもイイ男だ。

ルイスは困ったように笑い、髪を束ねていた紐を片手でとった。頭を振ると、さら、と音をたてて金色の長い髪があたしの枕元になだれ落ちる。

金色の風がたなびいているようで、きれいだとあたしは思った。手を伸ばして、ひとすじすくう。

「きれい。あたし、この髪好き……えと」

マフオーランド語力モン。だめだ、頭が回ってない。

「ミ アモス（わたし 好き）……デイ（これ）」
髪のもつてなんていうんだっけ？ もういいや。ルイスが苦笑してて、なんとなく通じたっばいから、よしとする。

『……惜しいな』

そう言われても、思い出せないものは思い出せないだよ。今日の授業は終了して下さい、先生。

『今度は、ちゃんと目的語を変えて言ってくれ』

それからマフォーランド語でなにか言われた。？デイ？じゃなくて？ヴィ？だとかなんとかか。

だけど、もう本当に眠くて、その声を聞きながらあたしの瞼は完全に閉じていた。

ルイスの大きなため息が耳のすぐ傍でしたような気がしたけど、あたしの意識はまさに夢の中に転がり落ちていく最中だった。

真っ暗な、すべてが還る宇宙の環の中へ。

あたしが眠りに落ちた直後、理緒子と話が済んだタクが戻ってきてルイスと揉めたみたいだけど、たぶんきっとあたしのせいじゃないと思う。

16・5(後書き)

注1)「讃詞」は、こちらの世界と意味や使い方が異なります。近い意味の言葉ということで、変換されたと思ってください。あしからず。

注2)マフオーランド語は適当です。あとで改変していたらすみません。。。

注3)？ヴィ？は真ん中下あたりに出ています。

あたしたちが起きたのは、昼近くになってからだだった。結局あたしは眠った後、タクカルイスに部屋に担ぎ込まれたらしい。目を開けると、隣のベッドに理緒子が座っていた。

「おはよ」

「…………おはよ」

なんだか微妙に睨まれている気がする。

「真紀ちゃん、ルイスとなにかあった？」

あったと言えはある。なかったと言えば、そういえば珍しく頭にちゅーすらされてない。

「んー…………ないよ」

「だって、その服」

「借りたの。寝巻き持っていかなかったから」

「目、腫れてるし」

「…………泣いたから」

「なんだか妙に色っぽいし」

「い…………っ！」

色気はないよ！むしろお勉強だったよ！！

でも、相談して気が楽になったのは確かだ。妙に意地悪い理緒子に反撃する。

「理緒子だって、タクとなにかあったんじゃない？ 結構長いこと話してたでしょ」

「な、なにもないよ。謝ってもらっただけ」

「ほんとにー？」

寝転がったまま下から覗きこむと、理緒子は顔を真っ赤にしてぷいと横を向いた。

「……だって、タク真面目なんだもん」

それにはあたしも異論はない。タクから真面目を取ったら、なにが残るんだっていうくらい真面目で一途な性格だ。まあ、だからそれで誤解されるようなこともあるわけだけだ。

「仲直りできて、よかったね」

「べつに……喧嘩してたわけじゃないけど」

口の中ではそばそと、言い訳するように理緒子が喋る。

「でも、話せてよかった、かな」

その言い方に、あたしはやっぱり？謝ってもらっただけ？じゃないんだと悟ったけど、それ以上は突っ込まなかった。理緒子がそう言うんなら、それでいい。

理緒子の横顔は、すごく穏やかで、きらきらした表情をみせていた。

あたしたちが着替えて下の階の食堂に行くと、三つある四角いテーブルの一番奥に、タクとルイスと 見知らぬ女の人があった。

あれ……？

いや、完全に知らない人じゃない。くりんとした大きな目と長いポニーテールが、あたしの記憶を刺激する。理緒子が呟いた。

「ナアカで会った人……？」

そうか、市場で転びそうになった理緒子を助けてくれた人だ。この人も乙女護衛隊（勝手に命名）の人だったんだ。

ルイスとタクの間に座っていた彼女は、立ち上がると、あたしたちに笑顔で手を差し伸べる。

「アマラよ。よろしく」

なるほど、この人がアマラさんか。

身長は、日本人よりやや大きいこつちの人にしても、ちよつと高め。あたしと十センチくらい違う。口調も仕草もきびきびしていて、デキる女性って感じた。

あたしたちと似た旅の格好なんだけど、砂時計もびっくりな凹凸

のせいで、セクシーさが半端ない。理緒子と二人で見惚れて、ぽつとしたまま握手した。

『ま、真紀です。よろしく』

『理緒子です。えと、このあいだはありがとうございました』
律儀に理緒子が頭を下げる。

『いいのよ。あなたたちを守るのが仕事なんだから。だいたい、女の子の歩幅を考えずに歩くほうがどうかしてるのよ。ねえ？』

笑顔でふられ、タクが気まずそうに視線を逸らす。このお姉さま、お口もおデキになるらしい。

『ほら、二人とも座って。お腹減ってない？』

うながされ、いつものようにタクの左に理緒子、あたし、ルイスと並ぶように腰掛けた。ルイスは下ろした髪の上からシヨールをざっくり巻いて、気だるげに黒っぽい飲み物を口に運んでいる。香ばしい薫りが漂う。

テーブルの中央には小さめのパニと、ざく切りの火の鳥の実がお皿に盛って置いてあった。

アキナスでの最初の朝食を思い出し、あたしは何気なく隣に話しかけようとして驚いた。シヨールの陰になったルイスの顔はいつになくやつれて、目の下には隈ができている。

魔法で乱闘して怪我したうえに、あたしに治癒術使って愚痴まで聞かされたんだから、当然といえば当然だけど。

『ルイス、大丈夫？　なんかしんどそう』

『ただの寝不足だよ』

『ごめん、あたしのせい？』

『まあ、半分はね』

『……ルイス！』

咎めるように彼を呼んだのは、珍しいことにタク。しかも眉間に皺なんか作って。

ごまかすように、ルイスが肩をすくめる。

『冗談だよ。マキが悪いんじゃない。私が未熟なんだ』

あたしの髪の毛に指をすべらせ、くしゃつとかきませる。

『君がよく眠れたならそれでいい。なにか飲むか？』

『それ、飲んでみたい』

『苦いぞ？ 子どもの飲み物じゃない』

ちよつとカチンとするな、その言い方。

『飲めるよ。アルだって飲んでたし』

『……』

なぜかむつとした顔で、ルイスがカップをテーブルに置く。あたしはすかさず手を伸ばした。

『ちよつと貰っていい？』

断りを入れ、カフェオというらしいその飲み物を一口飲んでみる。

『どう、真紀ちゃん。美味しい？』

隣で香茗茶をもらった理緒子が聞いてくる。あたしは、もう一口飲んだ。うん、やっぱり苦いっていうより辛い。

『アメリカン・コーヒーを五倍くらいに薄めて、それに赤唐辛子エキスを加えた感じ』

『……それって美味しいの？』

『酸っぱくはない。甘くもない。ほんのり苦くて辛いって、美味しいっていうのかな？』

『わたしに聞かないでよ』

『あ、なんか口の中熱くなってきた。理緒子も飲む？』

『絶対いらない』

笑顔で拒否された。気がつくのと、他の三人が必死に笑いをこらえている。声は出さなくても三人とも目も口も笑ってるから、ばれればなんですけど。

頬を弛緩させたまま、ルイスがあたしに言う。

『口に合わないなら、無理に飲まなくてもいい』

『でも、なんか目が覚めそうでイイ感じだよ？』

『ちよつと濃いめに入れてあるから。薄めたのを持ってこさせよう』

『……あ、ごめん。全部飲んじゃった』

『飲んだのか？』

ルイスが目を丸くして、あたしの手の中のカップを覗き込む。

『夜眠れなくなるぞ』

『平気。だいたいどこでも眠れるし』

『……確かにそうだな』

寝つきが悪くて困ったのは昨日くらいだ。本当にあのテンションはおかしかった。

『ルイス。昨日は、ほんとごめんね』

『謝ることじゃない。目が覚めるように、私ももう一杯もらおうかな』

ルイスが、あたしの手の中からカップを取る。給仕をしているお姉さんと呼ばうと持ち上げると、別の手がそれを奪った。

『こんなもの飲んでいないで、部屋に戻って休めば？』

『アマラ』

『旅の途中で寝不足で倒れたなんてことになったら、天都魔法士団の恥なのよ。せっかくわたしが協力を申し出てるんだから、ありがたく甘えておきなさい』

きれいで自信に満ちた大人の女性にしかできない顔で、アマラさんはにつこりと隣の男に告げる。眉尻を下げ、ルイスが苦笑した。

『アマラリーヴァ・ラクス・スオウシア。君を推挙したレスを少しばかり恨むよ』

『ルイセリオ・セイアン・カーツォ・アクイナシア。それはわたしが力不足だということかしら？』

よそよそしさの中にどこか親しみの籠められたその会話に、二人の距離の近さが分かる。

『君の優秀さは知っているよ。ツークス勤務にしておくにはもったいない』

『そう？　じゃあ自分を律しきれない未熟者に代わって、わたしが旅に同行するという提案なんてどうかしら？　彼女たちも気遣いの足りない男たちと旅するより、女の子同士のほうが気楽なはずだも』

の。ねえ？』

いきなり話が飛躍して、あたしと理緒子はきよとんとしてしまった。

女子同士でわいわいって、基本的に嫌いじゃない。気兼ねがなくて楽しいけど、でも好きかと言われるとそうでもない。なぜか女子で固まって話していると、絶対に恋バナの暴露大会や、そこにいない誰かの噂話になる。その雰囲気があたしは苦手だ。

それにアマラさんは？女同士？というより、なんだか？知り合い同士？で話したがっているみたいだった。あたしの胸の奥が、みしりと軋む。

なんか……やな感じ。

思ったのが顔に出たのか、ルイスが口元で笑って、またあたしの髪を撫でてきた。一応これでもセツトしてきてるから、ちよつとは控えて欲しいんですけど。

『アマラ。いくら君が優秀でも、この役目ばかりは譲れないな。諦めてくれ』

『あら残念』

『だが、好意には甘えさせてもらおうよ』

え？

頭に置いた手をそのままに、ルイスは、あたしと理緒子に向けて切り出した。

『マキ、リオコ。実は、少しここヒューガラナで休憩をとろうと思うんだ。そんなに長くはとれないけれど、少なくとも出発は明日以降にしようと思う。どうかな？』

『だけど……』

『わ、わたしなら平気、だよ？』

倒れたことを気にしているらしい理緒子が、顔を真っ赤にして言い出す。ふわりとルイスが微笑んだ。

『リオコ、君のせいじゃない。正直なところ昨日の襲撃で、後衛部隊が今こちらの護衛どころじゃなくてね。情けない話だけど、態勢

を整えるのに時間が必要なんだ。この先は徒歩になることだし、万全の態勢で君たちを見守りたいと考えている。私も休憩が欲しいところだしね。いいかな？」

自分の顔色の悪さを逆手にとって、ルイスが聞き直す。ずるいけど、それが彼なりの気遣いなんだと分かった。あたしたちは承知した。

『よかった。じゃあ、後で』

『うん、お休み』

そう言うあたしたちに頷いて、ルイスが席を立つ。階段を上がって二階の居室に向かう彼の姿が完全に消えると、タクの口から深い息がひとつ洩れた。

『……恐ろしいことを口にする、スオウシヤの姫。肝が縮んだぞ』

『あら、意外と小心者なのね。ムシャザ將軍。？風神？の異名が泣くわよ』

？姫？と呼ばれる立場の人にしてはざっくりした言い方で、彼女は切り返した。

口紅を塗っていない、ふっくらとした唇の両端が、きれいに吊り上がる。

『あの頑固者には、あれくらい言わないとダメなのよ。ちょっと休めって言ったくらいじゃ聞かないんだから。仕事中毒もいいところ』

『あの……アマラさんは、ルイスの知り合い、なの？』

おずおずと理緒子が尋ねる。

『ええ、わたしは元「双月」。昔、彼と一緒に副団長をしていたのよ。あと個人的な繋がりといえば』

ポニーテールを揺らして小首を傾げ、なんでもないことのように彼女はさらりと続けた。

『元婚約者ってことくらいかしら』

16-6 (後書き)

長かったので分割。次節で16章終わりです。

突然降って湧いたような旅の休憩時間を、あたしと理緒子は、アマラさんに連れられて街のお風呂屋さんで過ごした。

ヒューガラナだけじゃなく、高地タキ「アチファを含めたこの辺りは火山帯らしく、あたしたちが登ったり下ったりしながら越えてきた山々の向こうには、岩と石だらけの巨峰アツズが聳えていた。通称、死の山。

活発な活火山であるそれは、だけど近づきすぎて他の山の陰に隠れてしまい、目にすることはできない。その代わり、街のいたるところに温泉が湧き出ていた。

ヒューガラナ「温泉街というくらい、街には掘っ立て小屋のような小さなお風呂やさんがいくつもあって、そのうちの煉瓦造りのわりと小綺麗なところにあたしたちは入った。

ここのお風呂は普通とちよつと違う。実はいくら温泉湧き放題といっても、どこもほぼ源泉だから薄めないと危険なのだ。でも、地下を掘っても水じゃなくて温泉が出てしまうこの辺りで、水は貴重品。

そんなわけで湯船に浸かるのではなく、石を敷き詰めた下に源泉を流して、その蒸気を受けた上側に香草で編んだ筵（むしろ）を敷いて寝そべる、いわゆるミストサウナ状態がお風呂代わりというわけ。温度は低めだけど、これが結構効くらしい。

地元の人たちに混じって、早速三人でマグロみたいに並んで転がった。個々のブースは低い石積みで区切られているけど、みんな平気で真っ裸で歩き回るので恥ずかしいなんていってられない。宿から持参した、ささやかな抵抗の大きめタオルを外し、あたしは腕枕をしてうつぶせになった。

たちのぼる温泉の蒸気が、鼻につく独特の香りを放っている。それだけで、なんだか和む。つくづく日本人のDNAを感じる瞬間だ。蒸気か汗か分からない水分に全身を包まれながら、横を向いたり仰向けになったりしているうちに、ヘチマみたいなものをもった垢すりおばさんが登場する。アマラさんがオプションで頼んでくれたのだ。なんと入浴料込みで五十ゼン。夕食より安い。

痛かったらやだなあ。

皮膚だけは弱いあたしは、たくましいおばさんの腕を目にして躊躇したけど、ヘチマもどきの繊維はやわらかくて、がんがん擦られているのに痛みはない。それより、自分の体から出てきたものにびっくりだ。

わあ、これ確実にナニ力が減ったよ！

体重とかプライドとか羞恥心とか。でも充分にお風呂に入れてなかつたから、本当に肌が軽くなった。おばさんと笑顔だけで会話して結構な時間だらだらとしていたら、隣の仕切りからアマラさんが顔を覗かせた。

「xxxxx？」

指環をしてないから聞き取れない。手招きされたので、タオルを巻いて立ち上がると、理緒子が脱衣所に向かう姿が見えた。色白だから、足の裏まできれいな薔薇色に染まっている。

うわ、足ほっそ。

へへ、女の子同士でお風呂に入ると、絶対他の人のハダカって見ちゃうよね。あたしは、めずらしく髪をアップにした理緒子のうなじや、片腕で一周できそうなウエストなんかをばっちり観察してしまった。

水分をタオルで拭きとって、脱衣所の椅子に座る理緒子のところに行く。

「すごいね、理緒子。真っ赤だよ。大丈夫？」

「あ〜っ〜い〜。真紀ちゃん、なんでそんな平気そうなの？」

「結構キテるってば。時間空けてまた入る？」

「もうムリ」

くてん、と理緒子が両手を後ろについでのけぞる。タクが見たら悶絶しちやいそうだ。

華奢な理緒子とは対照的に、タオルが弾け飛びそうな体型をしたアマラさんが、こちらを見てなにか言っただけで来た。指環をしたままの理緒子の左手をとって、言葉を聞きとる。

「暑いなら、向こうの部屋に行きましょうか？」

真つ昼間だというのに脱衣所も混雑してきたことだし、あたしたちは着替えの入った籠を持って、アマラさんの後をついていった。引き戸を開けた瞬間、さあっと涼やかな風が吹きぬける。

薄く切った木を組み合わせてできた、大きな鳥籠みたいなそこは広々として、太陽を遮っているだけなのに風が通ってすごく涼しい。空気が甘い。

床は土で、その上に置いてある簀子（すのこ）の上をぺたぺた歩き、中央にある背もたれのない長椅子に並んで座る。他に一人、二人、離れた椅子で横になって寝ている。

理緒子と二人で熱を冷ましていると、アマラさんがピッチャーごと水を持ってきてくれた。コジ入りの水だ。お礼を言って、三人で飲む。

「あれ、なあに？」

理緒子が長椅子の端に置いてある壺を指差す。アマラさんは歩いてそれをとってきて、ぱか、と蓋を開けて見せた。とろりとしたカラメル色の物体が、ヘラ付きの器に半分ほど。

「女の子の身だしなみよ。せっかくだから、今日はフルコースやっちやいましょうか？」

「ふるこーす？」

アマラさんの笑顔が、ルイスの魔王の笑顔と重なるのはあたしの気のせいなんだろうか。

魔法士だからかなあ。

ラクエルが聞いたら絶対否定しそうなことを思いながら、あたし

と理緒子はアマラさんのするままに、とろとろのそれを腕や足に塗りたくられた。甘い匂いがする。

『これ、なに？』

『蜂蜜』

もったいない気がするけど、パツクかな。と思ったら違った。

『いくわよー』

乾いたとたんに剥ぎ取られるソレ。

『にぎやつー！』

動物みたいな声が出てしまった。だって、まさか蜂蜜に産毛強奪されるとは思わないんだよ。

異世界で脱毛かい！

誰に突っ込んでいいか分からないけど、とりあえず叫ばずにはいられない。ワックス脱毛なんて人生初だ。しかも、イン異世界。

『あー、でもつるつる〜』

『でしょう？ 十日から二週間くらいはもつわよ。はい次ー』

『にぎやつっ』

アマラさん、S決定だ。理緒子は脱毛慣れしているらしく、嬉しそうに自分で剥がしている。恐るべし女子。すごいな女子。あたしも一応女子ですが、すみませんついていけませんごめんなさい。だけど剃刀負けしやすいあたしには合ってるのかもしれないと、ちょっとだけ思う。

思っているうちに、羞恥心が崩壊するくらい色んなところをくまなく脱毛され、オイルを垂らされ髪にも顔にも泥パツクされ、まさに全速力でオードブルからメインディッシュまでを駆け抜けた。

こ、断りきれない自分が憎い。

お休みななのにとっぷり疲れた気がするの、あたしの女子力不足のせいなんでしょうか。

『あなた、意外に着痩せするほうなのね』

最終段階なのか、長椅子に寝そべったあたしの背中を手のひらでマッサージしながら、アマラさんが送心術で話しかける。もはや理

緒子は、専属のエステティシャンみたいな人を呼んでわきあいあいだ。

『お肌もすべすべ。若いつて羨ましいわねえ』

ぼんきゅっぼん、のお姉さまに羨ましがられても内心微妙だ。とつても喜びにくい。

『わたしね……あなたに会うのを楽しみにしていたのよ。彼が入れあげてるって聞いたから』

？彼？は元婚約者っていう彼ですか。噂の発信源はレスあたりかな。なんだか厭な言い方だ。

『どんな子が期待していたんだけど、異界の乙女っていうわりに案外普通なのね』

初めてだ、こんな毒のある送心術は。本当に言葉だけじゃなくて、あたしを否定する冷たいなにかが心に流れ込んでくる。

『まあ、？乙女？なのは確かみただけ』
くすりと笑い声が首筋にかかった。

ああ、笑うことで人を傷つけたり貶めたりするのって、簡単にできるもんなんだ。

あたしは胸底に広がる鈍い痛みを感じながら、黙ってうつむいた。反論する気持ちは、先にぼつきりとへし折られていた。

今まで嫌悪や敵意を向けられたことがないといえば、嘘になる。ただで最初からどこかあたしたちを冷ややかに見ていたのに、親切にお風呂屋さんに連れてきてくれたし、すごく明るくてフランクだったから油断してた。もう、ぐっさりだ。

ルイスのせいだ。

混乱する悲しみが、元凶の男への苛立ちに変わる。婚約破棄の理由は分からないけど、アマラさんがルイスをまだ好きなのは見て分かるのに。なんであたしが、とぼつちりを受けないといけないんだ。あたしの返事なんて最初から期待してないような、独り言に近いアマラさんの心の呟きが、容赦なく伝わってくる。

『彼、今は大事に守ってくれているようだけど、いつかあなたを捨

てるわよ。彼は他人を受け容れることなんてできない人なの。そういう育てられ方をしていないのね。最後には必ず、あなたを捨てるわ』

……ステル？

すごく奇妙な言葉に感じた。一瞬頭の中をルイスの屈託ない笑顔とか心配していた顔とか、髪をかき混ぜる手とか、魔法士の呪文を教えてくれた声なんか駆け巡る。

一緒に仕事をして婚約までしていた相手が言うんだから、本当なんだろう。それでも頭の中のルイスとその言葉が、うまく結びついてくれない。

結びつけない、だけなのかな。

『わたしたち、周りの反対で別れたのよね』

つまり二人の婚約は形式などではなく、恋愛からの発展だったってことだ。

それ以上聞きたくなくて、曲げた腕の中にぎゅっと頭を沈める。だけど流れ込む声は止まらない。

『彼、を嫌がる親戚がいて。だけど今ならわたし、うまく説得できると思うの。だから……あなた、絶対に水門を開けるのよ？ そうじゃないといろいろ困るから。……まあ、彼の目が覚めて、それはそれでいいのかもしれないけど』

こんなにも毒を孕んでいるというのに、その声はどこまでも甘く艶やかだった。根っこに毒をもつ可憐な鈴蘭のように。

なにも想像しないように目を閉じ、頭を真っ白にする。あたしの背中を撫でるこの手が、ルイスの体に触れたり抱きしめたり。ルイスがああ優しい目で彼女を見たり、頭にちゅーとか、それ以上のことをしていたなんて、考えるだけで息が苦しくなる。体は熱く火照ったままなのに、胸の奥が冷たく固く凍りついていく。

『わたし、元気な女の子は好きなのよね。違った形だったら、きっとあなたともいい関係になれたと思うけど……無理ね。わたし、あなたが嫌いだわ』

アマラさんに嫌われるなんて、どうだってよかった。

ルイスが好きだった人が今、目の前にいるというそのことだけが、あたしの心を容赦なく蝕んでいった。

この感情を、あたしは知っている。

嫉妬、だ。

16-7 (後書き)

…すみません。もう1節続きます…。

翌日起きたときには、もう理緒子は部屋にいなかった。荷物はそのまま、あたしはまだ眠気の残る頭で（眠れなかった、ということがないからどうしようもない）階下に降りていった。

「おはよう、真紀ちゃん」

とびきり極上の笑顔で、食堂にいる理緒子が挨拶してくる。挨拶はいいんだけど。

「……なんでエプロン」

しかも頭には三角巾。花柄のその下からは、短いおさがが二本ぴよこんと覗いていて、それがまた絵本から出てきそうなかわいらしさだ。

「お店が忙しそうだから、手伝ってるの。サンドイッチ食べる？」

BLT風」

ベーコン・レタス・トマトの黄金タッグを異世界で味わえるとは思わなかった。

おとなしくテーブルの片隅に腰掛けると、華奢な理緒子の体がくるくると動いて、あっちのテーブルの皿を下げ、こっちのテーブルを拭きする間に、あたしの前にホットサンドイッチを運んでくる。

「へへ、発案者はわたしなの。美味しいと思うから、食べてみてね？」

飛行船で見せてくれた携帯にはお店で食べた食事の写メもたくさんあって、料理が好きなんだと聞いてはいたけど、会ってから体調を崩すことが多い理緒子しか見ていなかったから、なんだか意外だ。焦げ目のついたパニに挟まれたそれを一口かじる。レタスもトマトももちろん元の世界のものとは全然違って、似ているのは歯ごたえくらい。だけど生野菜と燻製肉という組み合わせに、ちよつと酸

っぽいマヨネーズ風のタレがかかったそれは、今までの異世界料理にない新鮮さだった。

「なんか、元気出るかも。」

理緒子が発案したのはBLTだけじゃないらしく、ときおり奥の厨房に呼ばれていく。と思うとウエイトレスのお姉さんの声がかかったりして、引っぱりだこだ。

あたしはBLTパニサンドを香茗茶と一緒に食べ尽くし、お皿を下げるついでに厨房に顔を出した。

「なんか手伝うよ。お皿洗いとか」

「えっと、じゃあ皮むきお願い」

厨房の奥で中華包丁並みに大きな包丁を片手に、バケツ山盛りに積まれた白っぽいサツマイモみたいな芋の皮剥きに挑む。これが意外に苦戦だ。いっぱい実が皮に残ってしまう。

「×××！」

あたしの不器用さをすぐに見抜き、調理人のおじさんがなにか言ってきた。マフォーランド語は初心者だから勘弁して欲しいけど、朝の厨房は殺気立ってて、あたしは追い立てられるように洗い場へ向かわされた。

で、洗い場のおばさんの指示のもと皿を洗う。立ちっぱなしのまま例のヘチマスポンジもどきの小さいやつを片手に、お菊さんも嫌になるくらいの枚数の皿を数時間ぶっ通しで洗いつづけた。

やってくる皿が減ったかな、と思ったのも束の間、怒涛の昼時間に突入して、あたしとおばさんはますますそこから離れられなくなる。

「飲食店でバイトとか、みんなすごいな、おい！」

バイト未経験のあたしのナニカが微妙に目覚める。働くって偉大だ。

忘我の境地に陥ってあたしがひたすら洗い物をしていると、やっと理緒子が顔を見せる。

「ごめん、真紀ちゃん。手伝ってくれてありがとう。もう落ち着い

たから、あがっていいよって」

「はい」

あたしはふやけきつた手をエプロンで拭き、それを外して、厨房の片隅に用意された遅い昼ごはんにありついた。

ミエンという短い餛飩に似たものに、そぼろと野菜を煮込んだスープをかけて食べる。すごく庶民の食べ物らしいけど、これが旨い。獣脂と塩分って、なんで空き腹によく響くんだらう。あつという間に完食だ。

「ごちそうさま。理緒子、これからどうするの？」

「んー、夜の仕込みがあるみたいだから手伝おうかなって」

なんだか理緒子は料理人スイッチが入ったみたいだ。この前までの閉じこもっていた彼女からは想像できないくらい、前向きな感じ。きつと、なにか変わろうって思ったんだらうな。

そのきつかけがタクとの話し合いだったのかは分からない。だけど、昨日のエステの成果だけじゃなく、一心に前を向いた彼女は輝いていて、今のあたしにはまぶしすぎた。

自分が逃げているのは自覚してる。洗い場に籠もっていたのも、ルイスやアマラさんと顔を合わせるのが怖かったからだ。時間が経てばなんとかなるかと思っただけど、時間が経てば経つたぶんだけ、怖さが増したようだった。

「あたし、ちよっと散歩してくる」

「一人で行くの？」

「空気吸いに行くだけ。籠もりっぱなしだったし」

「うん、気をつけてね」

笑って手を振ってみせたけど、よく笑顔ができたと自分で感心してしまう。それくらいあたしは落ちていた。

部屋に戻って、旅用のマントを羽織ろうとして止める。なんだかあたしだとはつきり分かるものに身を包みたくなかった。ちよつと考えて、腰に巻いていた帯紐をほどいて頭から被る。髪の毛を全部覆うように縛り、余った生地をマフラーみたいに首に巻いた。女っ

ぼく見えないように、薄手の無地のシヨールをマント代わりに肩からかけた。

よし。

あたしは廊下を見渡して、知った顔が誰もいないことを確認すると、裏口から外に出た。といつても目的はない。なんだか少し、誰の目からも隠れたかった。

お風呂屋さんに行くときに通った通りを歩き、お店を外から眺める。タクにもらったお金も使い切ってしまったし、下手に荷物をもっていると思つて手ぶらだから、お店の人もあまり熱心に売り込んでこない。

さすがにナアカより大きな都市だけあつて人も市場も倍以上の規模だけど、奥へと伸びる路地は、どきつとするくらい無機質で閑散としていた。

あたしはメインストリートをぶらぶら歩き、大きな建物の前にある噴水に辿りついた。白い石で作られた円形の噴水は、魚とか鳥とかの彫刻が並んでいる。ただし、出ているのは水ではなく温泉だ。

足湯ができるんじゃないのかな。

思つて覗いていると、背後から声がかかった。ハスキーな男の声。どこかで聞いたような気がしてふり向き、あたしは驚いた。

あの鉄色の髪をした、背の高い男が立っていた。たぶんヴェルグとかいう名前だった吟遊詩人の彼は、やっぱり背中に楽器らしい大きな荷物を担いでいる。

言葉が通じないことを思い出したのか、ヴェルグがあたしの腕に触れる。

『浅いから、落ちると頭を打つぞ。気をつけろ』

この人、あたしがなにをしようとしていると思つたんだろう？顔をしかめると、彼はふつと微笑を浮かべた。

『どうした、元気がないな。あの連れと喧嘩でもしたか？』

そつという言い方をするつてことは、この人は乙女護衛隊の人ではなさそうだ。

なんだ、違うんだ。

なんだかそのことに、あたしは妙に安心してしまった。たまには異界とか乙女とか抜きで、誰かと接したかったんだ。

あたしが首を横に振ると、彼は肩から荷物を下ろして噴水の縁に腰掛ける。あのギターに似た楽器を取り出し、組んだ足の上に乗せた。

『元気が出るように、俺が一曲歌ってやる。聞いてろ』

偉そうな言い方だけど、その態度が厭味じゃなかった。素で俺様なんだろう。ちょっと、懐かしい人を思い出す。

シトウラという楽器は、アコースティックギターとエレキギターのちょうど中間のような音がする。ヴェルグは右手にピックを持たず、親指と人差し指、中指に爪をつけて弦をつまびきはじめた。

シャラン…と明るい音が空を駆ける。波のように三連符の続くそのメロディは、ナアカで二番目に聞いた曲だった。だけど少し旋律が早くて、低音を強めに押し出して奏でられるそれは、もっと情熱的なラブソングに聞こえた。歌詞もなんだか違う。

せーころぬー……るーあ？

だめだ、さっぱり意味が分からない。だけど、メロディはきれいでとても覚えやすい。二番のくり返しになる頃には、すっかり耳になじむ。

サビにさしかかったところで、あたしは三度上を歌った。音階が近いからすんなりはまるだろうと思ったら、やっぱりそう。きれいに歌と伴奏にあたしの声に乗る。歌詞はむにやむにやなので、アーとかラーなんだけど、ハモったら、ヴェルグが一瞬驚いた顔をした。喋れないとも思っていたのだろう。意外そうにあたしを見ながらもヴェルグは歌うのを止めず、サビが終わりかけたところで、もう一度リフレインをあたしにうながしてきた。

久しぶりに人と歌って気持ちよくなったあたしは、調子に乗って足でリズムを刻みつつ、今度は数拍遅れて追いかけるように同じメロディを歌い、最後のワンフレーズを上に乗せた。

シトウラの和音がジャラジャラと鳴り響き、あたしとヴェルグの
声が重なって、息を合わせて切れる。周りから起こる拍手と指笛に、
かなりの人数に注目されていたことに、あたしは遅まきながら気が
ついた。

『ほら、頭下げとけ』

送心術で言いつつ、ヴェルグが聴衆に軽く頭を傾ける。あたしも
ぺこぺこ挨拶した。

ヴェルグは話しかけてくる周りのおじさんたちになにか答え、あ
たしの頭に手を置く。

『客がもつと歌えと言っている。他の曲もいけそうか？』

あんまり歌知らないんですけど。

困った顔をしていると、ヴェルグはにやりと人の悪そうな笑顔を
みせて、またシトウラに指を走らせた。これは最初に聞いたやつだ。
メロディは単純だけど、早いなだね。適当にラララで合わせて
いるとばれたのか、ヴェルグが歌詞を追いかけられるように、歌いなが
ら目顔で指示する。目を合わせて、呼吸を合わせて。

リズムに体に乗せながら、仕掛けてくるヴェルグに負けないよう
に返していく。あたしたちの掛け合いに、さらに聴衆が拍手で盛り
たてた。息が切れそうになりながら大盛り上がりで終わったのに、

『おまえの発音はひどすぎる。最悪だな』

ダメ出しキマシタ。

『今度はおまえの好きな歌を歌え。合わせてやる』

余裕をぶつかました発言をされたので、あたしは少し考えて、適
当にノリのいい歌謡曲を選んで歌った。歌詞を間違えても分からな
いところが助かる。

大口を叩いていたヴェルグは、それでもさすがに絶妙にシトウラ
を合わせてきた。ちよつとカントリー風味に仕上がるけど、それは
それでアレンジっぽくていい。

あー、ツークス領主に貸したオーディオがあればいいのに。

ヴェルグに聞かせたらなんて言うんだらう。そんな妄想をしながら

ら、あたしは自分の好きな曲を歌ったり、リクエストされた曲を八モったりしながら十曲近くをこなした。

気がつくと、シトウラの入っていた空の布袋の中に、結構な額の
小銭が入られている。

おお、まさかの路上ライブ！

さすがに歌い疲れたのか、最初の曲をもう一度演奏し終えたあと、
ヴェルグはあたしをうながしてお客さんに挨拶し、爪を外して小銭
を片付けはじめた。そっぴいや日もちよつと傾き加減だ。

『ほら、小遣い。変な遊びに使うんじゃないぞ？』

やっぱりどこかで聞いたような威張り方で、あたしの手には十ゼン
硬貨を一掴みほど乗せる。

「ダンカスアレース（ありがとうございまーす）」

『……おまえは本当に発音が下手だな』

ため息半分の送心術で言い、ヴェルグが声に出して喋る。

「ア・レ・ス」

「あれす？」

「レ」

「うれ？」

「……」

どうも「レ」の発音がうまくないらしい。ヴェルグが呆れた顔を
した。

『二歳児より下手くそだ。もっとしつかり勉強しろ』

「ヤー（はい）」

しぶしぶそう言つと、袋にしまったシトウラを肩に担ぎ、ヴェル
グが笑う。

『おまえ このまま俺と行く気はないか？』

「……え？」

『どうせ、あいつらといてもろくなことは』

『そこまでにしてもらいましょか、旦那』

送心術であり得ない割り込み方をしてきたのは、聞き覚えのある

低い男の声。ジャムだ。

いつの間に現われたのか、ヴェルグの背後に立つ彼は、外套のフード下からでも分かる金色の目を、厳しくあたしと彼に向けていた。ヴェルグが舌打ちする。

『さすがに盗賊上がりは、やるのが大胆だな』

『好きに言うといい。……嬢ちゃん、帰るぞ。みんな待つてる』

ジャムがヴェルグとあたしの中に、体を滑り込ませるように入ってくる。

みんなたつてアマラさんは絶対その中に入らないだろうし、理緒子はタクがいればいいんだし、あたしが帰る意味なんてあるのかな。

ごまかしていた暗い霧が、再びあたしの心を急速に覆う。

『嬢ちゃん。今ここで諦めると、あんたは自分に負けちゃうぞ？

誰かの意味がなくても、嬢ちゃん自身にその意味があればいい。違うか？』

だけど……え???

あたしの頭に新たなクエスチョンマークが生まれた。今、彼は。

あたしの、心を、読んだ……？

気付いた瞬間に思い出したのは、タクの言ってた？ガウルと話のできるマーレイン？の話だ。

動物と話ができるってことはつまり、話のできない相手の心が読めるっていうことで。

ジャムのこと、だったんだ。

そんな彼が、ずっとあたしたちを見守ってくれていたこと。ガウルの件でみせたタクの態度や、襲ってこなかったガウルの群れのことがそれと符合して、あたしはぐつと胸が詰まるのを感じた。

ああ、あたしまた、助けってくれる人から目を逸らそうとしてた……馬鹿だな。

『帰れるな？』

語りかける金色の目の男に頷いて、あたしは、ヴェルグに別れを
告げようとその背後を見た。

そして彼はまた　いなくなっていた。

16・8 (後書き)

注)三度:ここではメジャーコード(長三和音)のこと。

平たく言えばド・ミ・ソの和音。レ・ファ#・ラも同じく。

和音を作るにはひじょーに基本的な音階。

ちなみに「一度」は、ピアノの鍵盤を思い浮かべると分かりやすいです。

黒鍵を挟んだ白鍵同士が一度(≡全音) ド・レ・ミ、ファ・ソ・

ラ・シはそれぞれ一度違う

黒鍵を挟んでない白鍵同士が半音 ミ・ファ、シ・ドはそれぞれ半音違う

鍵盤思い浮かべられる人は知ってるゆーねんって言われそうだ……。
ええ、気温でも角度でもないと分かっていたただけで充分です(汗・)。

第17章 新しい風 リオコワの秘密

1

ずっと、ずっと深い水の底を漂っていた そんな眠りだった。その間に観ていた夢は、現実と虚構が織り交ざったリアルすぎる悪夢だった。

高校の制服を着たわたしは、なぜか小学校にいて廊下を必死に走っている。そのわたしの手をタクが引いてくれているんだけど、けしてこちらを見ない。右脇には真紀が、その隣にはルイスがいて一緒に走っているのに、みんな無言だ。わたしが転んで倒れても、足を止めてもくれない。背中がどんどん遠ざかる。

お願い、待って……待ってよ！

『落ち着きな、嬢ちゃん。それは夢だ』

聞いたことのない男の人の声が聞こえて、わたしは薄目を開く。目の前に金色の瞳が見えて、わたしはまだ夢の続きを観ているのかと思った。

『怖がらせて悪かったな。もう大丈夫だ』

目を動かすと、まだ岩の上なんだけど頭はやわらかい真紀の膝にいて、傍にはタクもいる。

ああ……無事、だったんだ。

思いながら、また意識が遠ざかる。

『寝るといい。今度は悪い夢なんか観るんじゃないぜ？』

まるで眠りの神様のように、低い声がわたしに呪文をかけていく。わたしは再び水の底に沈んでいった。

正直に言うと、それはまったくの眠りというわけじゃなかった。頭は起きているんだけど、体だけが目覚めない。目覚めようとする、また意識が沈む。そのくり返した。

だから、タクがつらそうに吐くため息も、真紀が心配そうに手を握ったり髪を撫でたりするのも分かっていた。抱き上げられ馬車に乗せられ　話しかけられる声が、本当に水の底にいるみたいにはやけて聞こえていた。

「……なにがあつたの？」

「xxx」

「大したことだよ。あたしたちは……て、理緒子がこんな　」

「xxx！　xxx xxx！」

わたしのせいで喧嘩してるのかな。ごめんなさい、大丈夫だから争わないで。いま、いま起きるから。

「……だけど。タクがいろいろ頑張ってくれてたの、知ってるから。

……この馬車、困だつたんでしょ？」

おとり……　まただ、またこの言葉。わたし……あるとき、なんできちんと聞かなかつたんだろう。きちんと、タクになにがあつたのって聞けばよかった。

そうすれば、タクだって一人で抱え込まずに打ち明けてくれたかもしれないのに。

「リオコ　」

わたしの名前を呼ぶタクの音が、少し震えてる。泣いて、るのかな。

思うだけで泣きなくなる。

なにが起こつたのか、正確にはさっぱり分からない。だけど、真紀がいてルイスがいてタクがいて　そのことだけで充分だった。それだけで、わたしは大きな安心に満たされる。

それでも。

なんでタクの声は沈んだままなの？　なんで真紀は泣いているの？

起きたいのに起きれない。意識だけは水の中を行ったり来たりしながら、ばたばたもがいている。なんて情けないんだろう。役に立たないどころか、みんなのお荷物になつてる、わたし。

体力だつて機転だつてないわたしは、こうして気を失つて倒れるくらいしかできないんだ。

哀しい。だけど、それ以上に悔しかった。

起きて、わたしの体。起きて……。

必死に念じる。

足手まといになるなら、せめて心配はさせたくない。心の負担になんてなりたくない。

「……ごめん、お嬢ちゃん。解くの忘れてた。ほら、目を開けてみな」

またあの男の人の声が聞こえ、わたしは瞼に力をこめて持ちあげた。

うつすらと差し込む光。ぼんやりとした影は、誰のものか分からない。

「だれ……?」

つぶやくと声になった。そうであつて欲しいと願いをこめて呼びかける。

「タク……?」

「目が覚めたのか」

ずっと聞きたいと思つていた声が、低くやさしく耳に染み入ってくる。その声に、向けられる眼差しにぐっと胸が痛くなった。あつという間に視界が滲む。

タクが狭いベッドの間をやって来て、覗き込んだ。現実だという実感に、また涙がこぼれる。

「すぐく……すぐく、怖い夢を観たの。タクがいなくなつちやう夢。すぐく……怖かった」

「大丈夫だ、俺はここにいる」

頬を伝う雫を指で拭い、わたしは水の底で漂いながら思つていくつものことを必死で言葉にしようとした。今、伝えなきゃいけない気がしたから。

「わたし、ね……見たの。タクがね、あの、金色の目の人と話して

るの』

『え……』

『村で、タクをね、待つてるとき、見たの。だから……すごく不安で』

『すまない。彼は』

言葉を濁すタクの代わりに、反対側の枕元にきた真紀が教える。

『あのね、護衛の人なんだって。陰でこっそり、あたしたちを守ってくれてたんだってさ。ジャムっていうの。いい人だったよ』

言いながら真紀が、励ますようにわたしの左手を強く握る。

やっぱりあの人、味方だったんだ。

突然現われたり消えたり、呪文みたいなのをかけたなり。タクが気まずそうにしてるってことは、内緒の仲間だったのかもしれない。その事実がなぜだか、すとん、と胸に落ちた。

『……そっか。それで……忍者みたい、だったんだ』

わたしが呟くと、タクはゆっくりした口調で話を切り出した。

『実は、ツークスに立ち寄ったのは船を降ろすためだけじゃない。君たちを守る護衛を確保するためもあったんだ。君が見た金色の目の男……ジャムもその一人だ。まあ、彼は俺が連れてきたようなものなんだが……君たちに彼らの存在を明かすわけにはいかなかった。』

旅に集中して欲しかったことと、彼らの役目が旅の完遂を見届ける意味もあったからだ』

頭がまだ霧がかつたようで、その言葉の意味を理解するには少し時間がかかる。

だけど、タクが傍にいてわたしの目を見て語りかけてくれる事実が、何より嬉しかった。

『護衛は先発と後発の二組に分かれて、ジャムは先発隊の一人だ。俺たちより先を進み、危険なことがないか報せる連絡役なんだ。君が村で見たというのは、その連絡を受けていたときだと思う。本当は夜にしかしないはずなんだが、あのときは緊急で……』

『きん…きゆう?』

『ああ。行くはずの道の途中で、君たちを待ち伏せしている者がいると教えてくれたんだ。だから、馬車を離れた』

『なんで……?』

わたしの問いに、タクは、わずかに唇を噛んで口を開き直した。

『よく似た馬車を仕立て、そっちにおびき寄せようとしたんだ。そうすれば、君たちが戦闘に巻き込まれることはないだろうと、そう思ってた』

『……おとり』

わたしの頭の中で、なにかが繋がる。同時に気を失う寸前まで見聞きしたことが、フラッシュバックのようにリアルに駆け巡った。

あれは、現実だったんだ。あの男たちの声や腕を掴む痛み、口に押し込まれた布の悪臭。叫び声。目の前で舞い上がる砂。

『ああ、そうだ。だが、俺たちが甘かった。敵は用心を重ねて、二つの集団に分かれて攻撃してきた』

『……ファリマって、言ってた』

『え?』

『ファリマの情報がなにかあって、あのひとたち言ってた、よ……?』

冷静さを保とうとそう言うと、タクはしっかりとわたしを見て頷いた。

『そうか、ありがとう』

『へへ、ちよつとは……役に立った?』

『ああ』

くしゃつと顔を崩して、タクが笑った。そのまま自然と手を伸ばして、わたしの髪を撫でる。そのやさしさに、またきゆうと胸が苦しくなった。

よく見れば、タクの顔は疲れたようにくすんでいて、服もなんだか埃まみれでところどころ破れている。つけていてくれたはずのクマのぬいぐるみも、もう腰にはいない。

わたしは泣かないように、ぎゅっと瞼に力を籠めた。

『タク。わたし、ね。くやしいの』

『くやしい？』

『みんなが、一生懸命何かしてるるとき、なにもできなかったのが、くやしいの。……ごめんなさい』

声が、震える。こらえていたはずなのに、涙が落ちてしまった。

驚いたように真紀の声があがる。

『理緒子のせいじゃないよ。あたしが』

『いいの。真紀ちゃんが、助けようとしてくれてたの、分かったら上を向いて、これ以上泣かないように腕で蓋をする。』

『怖かった、けど、分かった、から。でも……』

『リオコ、すまなかった。君を守ると誓ったのに、こんな目に遭わせるなんて、本当に……自分の未熟さが情けない』

謝って欲しいんじゃない。この涙は自分が情けなくて悔しくてだけど、うまく声にならない。

考えていると、真紀が枕元から立ち上がった。慌てて尋ねる。

『真紀ちゃん、どこいくの？』

「お風呂借りに行ってくる。だから、二人でちゃんと話すんだよ？」どこか元気のない顔で、それでも笑って、真紀はそう告げた。なぜだかタクに立てた親指を向けて彼女が去った後には、なんとも気まずい沈黙が残される。

しばらく言葉が出ない。まだ仰向けのまま右隣のタクを横目で窺うと、わたしとおんなじような困惑した顔をしていた。ふと目が合う。

『今のサインはなんなんだ？』

真面目な、それでいておどけるようなその声に、今度はどちらともなく笑みがこぼれた。

第17章 新しい風 リオコの秘密（後書き）

ボディランゲージは異世界じゃ通じないこともあったり。

タクとは、なにを話したってわけじゃない。護衛の人にはどんな仲間がいるかとか、ジャムってどういう人だとか。

二人だけでなんでもない話をするのは本当に久しぶりで、すごく嬉しかったんだけど、反面落ち着かない。肝心な会話が大事なところを避けているのがお互い分かっていたから。

不意に話が途切れ、間の悪い沈黙が下りる。上体だけ起こして背中を枕に預けていたわたしは、居心地の悪さをごまかすように座り直した。

右隣のベッドにこちら向きで腰掛けていたタクが、ふと膝の上に置いた手をズボンへ滑らせ、そこから何かを取り出す。

タクの大きな手の中にすっぽり埋まってしまっただけを見て、わたしはかすかに声をあげた。

見覚えのある青いチエツクの生地。クマのぬいぐるみだったそれは、足がぶらぶらで、鼻も目も取れたよく分からない物体になっている。

なにが、あつたんだろう。

？ 困？の内容をタクは口にしないけど、一言で済ませられることじゃないような気がした。

テイベアがこんなふうにまでなる状況を、あるだけの想像力で思い浮かべてみる。でも、うまくいかない。ちら、とわたしの心の片隅をあつた凶暴な光景がよぎった。

『クマ、ぼろぼろだね。それ、さっき言ってた？ 困？のせい？』

『……ああ』

『そっか。ごめんね、タクにいろいろ負担かけて』

わたしは、あんまり深刻になりすぎないようにそう言った。タク

が無事にここにいて、わたしのあげたぬいぐるみをこうなっても持つていてくれたことのほうが大事だと思いたかった。

タクがふっと、壁のほうに目を逸らす。

『……リオコは怒らないんだな』

呼びかけるでもなく口にされた呟き。かすかに含まれた非難の響きに、わたしは彼を見た。

『怒るって？』

『これを汚してしまったこと』

『だって、それは仕方なかったんでしょう？』

『それに、あの約束』

二人の間に靄のようにわだかまっていたことを口にされ、わたしの胸がきりりと痛んだ。思わず、タクから視線を外す。

？正直でいる？という約束。ただの口約束だけど、タクや周りの人にとつてわたしが？異界の乙女？である以上それは重い。もちろんわたしにとつても、別の意味ですごく大事だ。だけど。

『タクは？急用ができたけど、あとで追いつく？って言ったよね？それって嘘だった？』

『いや』

『じゃあ、約束は守れてるよね』

『だが、君を守ることができなかった』

『わたし、どこも怪我してないよ？』

『体のことではなく』

言いかけ、タクが言葉を濁す。わたしの中に、もわつと灰色の感情が湧いた。

わたし、そんなに守られないといけないものなの？

確かに、襲われたときは怖いなんてものじゃなかった。今こうして安全なところにいるからいいけど、あの時は真紀もタクもルイスでさえ味方に思えなくて、崖っぷちから一人で突き落とされたような気分だった。

たとえ起きていても何も出来なかったかもしれないけど、あのと

き意識を手放してしまった自分に歯がゆさを感じるわたしに、タクの態度はすごくイラつく。

どこまでも守って守って　まるで赤ちゃんだ。それがさらに？ 異界の乙女？ や？ 約束？ のせいで義務になってしまっているところが、余計に腹が立つ。

怒ろうと思うと、泣きそうになった。

『そう……だね。怒りたい、ことはあるよ』

泣かないように、ゆっくりと言葉を区切る。

『なんで、護身術、教えてくれなかったの？』

タクが、少しだけ目を瞠ってこちらを見た。

『そんなことをする必要は……いや。そうだな、俺の腕では信用してもらえなくても』

『信用してるよ！　だけど、わたしだってちゃんと頑張りたいの。』

あんなふうに気を失って倒れて、介抱されるだけなんて、イヤなの』

『リオコ』

『わたし、守ってもらってばかりは』

言ってる間に、目の縁から雫が転がり落ちる。ああ、もうほんとに情けない。

顔に血が昇るのを感じながら、慌てて涙をぬぐったら、ふいに大きな何かに包まれた。

あまり明るくはなかった視界が塞がり、固い生地が額のあたりに触れる。目の前に伸びる腕。頭の後ろに当たる、指の感覚。

ここに、これって……。

タクに抱きしめられているのだと理解した途端、心臓が勢いよく飛び跳ねたまま全力疾走をはじめた。

『泣くな。いや……その、泣いてもいいんだが』

耳の後ろで、ぼそぼそとタクが呟く。

『君の泣き顔を見るのは落ち着かない。君が泣き止むまで、ここにせておいてくれ』

それって普通、逆じゃないのかな。泣くほうが胸を貸して欲しい

って言うはずなのに　わたしは恥ずかしいから言えないけれど。
口を開くと鼓動まで伝わりそうで、わたしは無言で目の前の服を
ぎゅっと摘んだ。

埃、汗、焦げたような臭い。香料の気配もない自然の匂いは、そ
のまま彼の性情のように飾りなくて清々しい。

『助けに行くのが遅れて、すまなかった』

その声に、わたしは嗚咽を抑えきれなくなった。ぽつ、ぽつと音
をさせて、涙が掛け布団に落ちていく。

『あのまま君が目覚めなかったら、俺は自分の命を絶っても後悔し
尽せなかった』

気のせいだろうか、わたしの頭を支えるタクの手が震えている。
顔を上げて彼の表情を確認したかったけど、動けなかった。

タクも、怖かったの、かな。

思い切って、タクの胸に頬を埋めてみる。数瞬遅れて、肩に回さ
れていた腕が力強く背中から抱き込んできた。

『君が無事で本当に良かった』

『タク、震えてるの？』

『……君を失うのが怖かったから』

どきん、と一際心臓が跳ねる。無理やりそれを気のせいにして、
話を続けた。

『し、心配かけてごめんなさい』

『謝るのは俺のほうだ。君に愛想を尽かされても仕方ない』

『全然そんなことないよ。すごく頼りにしてる』

『無理はしなくてもいい』

『無理じゃない。なんで、そんなこと思うの？』

『リオコは、やさしいから』

ふと腕が緩まる。わたしは彼の胸を支えにして、見上げるように
した。すごく近いけど、薄暗いのと気が昂ぶっているのとで、そこ
まで恥ずかしさはない。

とっとなとっとな。早鐘の鼓動が秒針を刻んでいる。

『やさしい？』

『勝手にこの国に呼ばれて水門を探しに行くように言われて、こんなところまで来てるのに、君は文句ひとつ言わないだろう？』

『だって、困って、るんでしょ？』

『できることがあればしたいだけなのに。それとも、そんな力なんてないと言外に言われているのかと怖くなった。口を嚙む。』

『だが、君の住む国ではない。みんなの勝手な願望を受けて、俺のしたこと赦して……なぜリオコは、そんなにやさしくなれるんだ？』

『やさしく、ないよ』

『なんだろう。全然思っても見ないところで、タクと擦れ違ってしまってる気がする。』

『ひよっとしたらタクは、わたしを理想化しすぎてるんじゃないだろうか。？異界の乙女？なんて言葉を今すぐ剥ぎ取って、地面に放り捨ててしまいたくてたまらなくなった。』

『でも できない。いいカツコしたいわけじゃなくて、本当にこの国に水が必要だと分かるから。今までの街だけでなくナアカでは特に乾いた岩地が広がっていて、子どもたちはみんな働いていた。その手助けができるなら、したい。それに、ここはタクが住む世界だ。』

『わたしだって、すごく嫌なこと考えてたりするよ。知ってるじゃない、真紀ちゃんと比べて落ち込んでたりしたこと』

『だが』

『この旅に出たのも、親切からなんかじゃないよ。わたしが、そうしかかっただけ。そうしたほうが真紀ちゃんや……みんなとも離れなくていいし、ここに居る理由なんだって思えるでしょ。それだけだよ？』

『また頬を涙が伝う。指先でそれを払ったけど、今度はタクから目を逸らさなかった。』

『真紀、みたいに、はっきり意見言わないからって、わたしの意志』

がないみたいに、言わないで。わたしは、わたし。ちゃんと考えて、ここに、いるの』

『……すまない。そうだな、俺の考えが足りなかったかもしれない。さっき真紀にも、君を？タカトウリオコ？という個人としてきちんと接しろと怒られたばかりなのに』

二人でそんなことを話してたんだ。少し笑ったら、夜の空気がほんのわずか軽くなった。

そういえば……。

真紀が帰ってくるのが遅い。お風呂、そんなに時間がかかってるんだろうか。

喋ってタクも落ち着いていたのか、やさしく笑って、まだ濡れてるわたしの頬を指先で撫でた。固くて大きな指先が頬をなぞり、唇の端に触れて顎へ落ちる。

『リオコ。じゃあ、俺と旅を続けても？』

了承の印に頷くと、タクが目を細めた。

『……そうか。ありがとう』

タクの手が顔の縁を過ぎて、耳の後ろの髪を梳き下ろす。

その甘い感覚に、ぴり、と全身を未知の電流が走った。心臓のどきどきすら、耳に入らない。

『ここに来てくれたのが君で良かった』

ひっそりとこぼれた囁きが、わたしの中の電流を増していく。満たしていく。

いいの……？

『もう二度と、君から離れたりはしない』

信じてしまって、いいの？

どきどきと夢の中を さっきのとはまるで違う甘い夢を漂っているような浮遊感に包まれる。言葉が出ない。

薄闇の中で、タクの両眼がきれいな星のようにわたしを見つめていた。無骨な手が、ゆっくりと髪を撫でる。

わたしは期待を籠めるように、軽く目を閉じた。瞼の裏にも分か

る影が近づき、熱い吐息が髪にかかる。

え。

タクは、忠実な騎士のように髪の上に唇を触れると、にこりと微笑んで、あっさりわたしを拘束していた腕をほどいた。

『もう眠るといい、リオコ。君は疲れている』

『え、でも……』

『夜更かしはよくない。お休み』

ずっと寝ていたから眠くない、というわたしの訴えは聞き届けられず、結局タクはわたし一人を置いて部屋から出て行ってしまった。

17 - 2 (後書き)

…タクのへたれ。

3

強く、なりたい。

だけど 強くなるって、一体どうということなんだろう？

『よく、分かんないや……』

一人ぼつん、と呟いて、わたしは寝転んだまま、左手を天井に掲げた。エイドスという燃える液体を満たした丸いランプにともる灯が、淡くおぼろに指の輪郭を縁取る。

さつき、タクに抱き締められた。そのことは紛れもない事実なのに、今はもう、あの時のときどきや浮遊感、温もり、彼の匂いがすごく遠い。

なんだったんだろう。

あの瞬間、タクと気持ちが繋がったと思った。わたしが彼を想うように、彼もわたしを想ってくれてるって。だけど、違ったみたい。わたしとタクの間に引かれた境界線は、やっぱり一晩くらいじゃ乗り越えられないんだ。

胸が痛い。苦しい。？好き？って気持ちなのに、こんなに辛い。でも泣きたくなくて、口から細く息を吐き出す。少し指先の冷えた手を握る。

強く、なりたい。こんな想いに負けないくらい。この想いを笑って抱き締められるくらい。

『……どうすれば、いいの？』

答えなんて出ない。

わたしは、胸の真ん中に押し当てた右手を開いた。ぶらぶらの薄汚れたブルーのティディベア。

去り際のタクを必死で引き止めて、渡してもらった。裁縫は得意ってほどじゃないけど、繕って返そうと思う。今度こそ、二人の気

持ちが繋がるように、もう一度。

大事な旅の途中に、恋に浮かれる軽い子だって思われちゃうかな。

また心が揺れる。一人で自問自答していると、ふいに部屋のドアが開いて、再びタクが入ってきた。その腕にはシーツにくるまれた真紀の姿。はっと起き上がる。

『どうしたの？』

わたしの問いに、タクはなぜか苦虫を十匹くらい噛み潰したような顔になった。

『隣の部屋で寝ていた』

となり……って、ルイスのいる部屋だよ、ね？

『え、ええ〜っ！』

思わず叫んでしまう。

『声大きい。マキが起きるぞ』

慌てて手で口に蓋をするけど、タクもどこか気まずそうにわたしから目を逸らし、隣のベッドに真紀を寝かせた。起きる様子のない真紀は、明らかに男物の服を着ていて、なんだかどことなく色っぽい。

こんな格好で、ルイスと二人でなにしてたのよっ。

あらぬ妄想が頭をよぎる。あんまりタクに見せたくなくて、わたしは真紀の首元までしっかり布団を被せた。ちらつと覗くとズボン履いてるみたいで、ちょっと安心する。わりとばさばさ音がしたのに、真紀は完全に熟睡していた。ほんとに寝つきがいい。

『じゃあ、あとは頼む』

タクがそう言って、部屋を去ろうとする。反射的に声をあげた。

『あ………待って！』

足を止め、タクがふり返る。わたしは呼び止めた口実を必死で頭の中で考えた。がんがん鳴っている心臓のせいで、言葉がなかなか出てこない。

『えと、あの……お休み、なさい』

『ああ、お休み』

ふっとタクが笑って、部屋を出て行く。ボタンと音を立てて扉が閉じた瞬間、空気の抜けた風船のようにわたしはその場にへたりこんだ。

好きって、言いそびれちゃった……。

全力疾走したり落ち込んだりした心臓は、しばらくおさまりそうになかったけど、それでも疲れていたのか、わたしは真紀につられるように深い眠りに就いた。　　テイベアを握ったまま。

夢は観なかった。悪夢もない代わりにタクとの甘い夢を楽しむこともなく、わたしは眠った。

気を失っていた分も含めて睡眠をとっていたせいかな、やけに早く目が覚める。隣のベッドの真紀はまだ寝ているので、起きてタオルや着替え一式をもち、一人湯浴みに向かった。宿にはたいいてい別室にお風呂がついているので、ここにもあることは昨日タクに確認済みだ。

エイドスの明かりが小さくなっているけど、外はほんのり白んでいて視界には困らない。廊下に出ると、夜の冷気をまとった空気が体を包んだ。ぶるりと震えたわたしは、歩き出そうとして廊下の片隅にうずくまる影を見つけた。

『……ルイス？』

『リオコか。早いな』

髪をほどいて片側に流し、ルイスが廊下に座ったままわたしを見上げる。目の下に端正な顔が八割減になるほどの、ひどい隈がくつきり浮かんでいた。

『どうしたの、こんなところで』

『頭を冷やそうと思って外に出て、どうやらそのまま転寝してしまつたらしい』

『なんでここに？ タクと喧嘩でもしたの？』

『……いや。彼は呆れてるだけで、喧嘩をしたわけじゃない。ここ

にいたほうが目が覚めるかと思っただんだ」

「寝るのに目が覚める？　一瞬頭が混乱する。しばらく考えて、その意味に気がついた。」

「真紀ちゃんとなにかあった？」

「何かあったら、むしろ私はここにいないよ。リオコは今から湯浴みか？」

「う、うん。そう」

「案内するよ。迷子になったらいけないからね」

さりげなく話題を逸らして、ルイスが立ち上がる。疲れている様子の子の彼にそれ以上何も言えず、わたしはその後についていった。魔法で創った光の玉が、ふわりと飛んで先導する。

大丈夫なのかな、ルイス。

魔法の光に照らされた彼の横顔を見ながら、心の中で呟く。

それでも、わたしが湯浴みから出て部屋に戻るまで、結局ルイスとその話の続きをすることはできなかった。

ちくちく、ちくちく。湯浴みから戻ったわたしは、妙に目が冴えて、まだ日の昇りきらない時刻だというのに部屋の明かりを頼りに針仕事をしていた。異界から持参のソーイングセットを広げ、テディベアの外れかかった足を付け直す。

ちくちく、ちくちく。わたしは無心に布に針を通した。裁縫とか料理って、何も考えたくないときに本当に向いている。目の前の仕事だけに集中すればいいんだから。

「あいたっ」

なんて油断していると、針で指先を突き刺した。ペろりと舐めると、血はすぐに止まる。また針を動かしはじめた。

左足の付け直しは終わり。もう片方の足も、付け根から見えていた綿を閉じて補修する。干切れかかった肩の部分もしっかりかがった。手足が動かさなくてかわいさが減るけど、なくなるよりまだ。両手足がつながったところで、目鼻を付け直す。元の黒いビーズ

はなくなってしまうので、代わりに黒い糸でそれらしく作る。刺繍糸はないけど、普通の糸で何度か結び目を作ってうまく表情が出るように工夫してみた。

『あれ？』

できあがった顔を見たら、前よりきりつと男前。どこかタクに似ている。

『君、持ち主に似ちゃったねえ』

話しかけつつ、頭のとっぺんにぶっすり針を刺し、新しい紐をつける。ちよっとかわいそうだけど、中綿まで通してしっかり紐を結ぶ。これで完了。ソーイングセットを片付けると、入っていた糸が結構なくなってしまうていた。

ほつれ気味だったタクのマントや上着を思い出す。直してあげたいけど、よく使う白や黒、紺色の糸はもうほとんど切れ端だ。

『買いに行こうかな……』

タクからもらったお小遣いもあることだし。出発前に市場に寄ってもらおうかな、と考えながら、わたしは両腕をぐっと上へ伸ばして肩をほぐした。

薄いカーテンの向こうから、爽やかな日射しが煌めいて見える。少しだけすつきりした気分になったわたしは、治療の終わったデイベアを枕元に置いて、束の間の転寝に浸った。

初めてエステに行った。いや、エステというか サウナと垢すりに行ったら、脱毛とマツサージまでついてたというか。そんな感じだ。

旅のことを考えればそんな悠長なことをしてる場合じゃないんだけど、朝食の時に、めずらしくルイスが休憩をとると言い出したのだ。昨日の夜の騒ぎで、わたしたちを守ってくれている人たちも混乱中だからその体制を整えるためだと説明してくれたけど、半分はわたしたちに気を遣ってくれたんだと思う。

情けないなあと思うけど、ルイスの顔色もまだ良くなかったし、その言葉に甘えた。

エステを言い出したのは、真紀曰く？乙女護衛隊？の一人のアマラさんだ。ナアカで転びそうになったわたしを助けてくれた彼女は魔法士で、さらにルイスの元婚約者という大人のお姉さんだ。

気さくで明るくてざっくばらんな雰囲気。目鼻立ちがくつきりしているから、ちょっとした表情がすごく豊かだ。プロポーシオンもすごいし。

真紀もけっこう出るとこ出てるけど、アマラさんはなんだか肉食系の色気がむんむんだ。お風呂屋さんではしっかり目の保養をさせてもらった。

髪から爪の先まで、三人でつるぴかの剥きたて卵みたいな状態でお風呂屋さんを後にする。

『アマラさん、今日はありがとうございました。とつても気持ち良かったです』

『裸で付き合った仲で、堅苦しいこと言わないのよ。敬語を遣わないといけないのは、本当はこっちの方なんだし』

やっぱりアマラさんにとっても？異界の乙女？なんだ。

少し哀しく思っていたら、アマラさんが歩きながら、わたしの顔を覗き込んで、むにゅっとほっぺをつついてきた。

「せっかくかわいいんだから、暗い顔しないの。今日の努力が台無しよ？」

「……はい」

「ほら敬語。女の武器は笑顔よ。笑って、男どもを鼻で使ってやればいいんだから」

にっこきれいな曲線を描く唇の端が吊り上がる。

自信に溢れた女性ってかっこいい。わたしには真似できそうにないけど。

「アマラさんは、ルイスに頼まれてここに来たの？」

「いいえ。依頼主という意味では、神殿がらみと言えればいいかしら。根回しはあの男だけだね」

「あの男？」

「レスライン・カシユゲート。家柄がよくて性格の悪い男が先輩だと、後輩は苦労するのよねえ。」

……あ、別に嫌々来たわけじゃないのよ？」

レスっていうと、ルイスの同僚だっというあの笑い上戸っぽい男の人だっけ。さらさら茶髪の爽やか童顔系の彼が根回しとか想像つかないけど、顔がいい〃ちよっと危ないが刷り込まれてるわたしは、なんとなく納得した。

「それにね、頼まれたの。あなたをよろしくって、イエドの女性魔法士からね」

「ラクエルから？」

驚いた。目をまん丸にしたわたしに、アマラさんが悪戯そうに片目を瞑る。

「そう。自分が行けない代わりに、女性の魔法士をどうしてもつけて欲しいって神官長に談判したそうよ。で、白羽の矢が立ったのがわたし」

そうだったんだ。勝気で心配性で、天都を出るまでずっと傍にいてくれた彼女の顔を思い出す。ずん、と胸が熱くなった。

『大事にされてるわね』

『すごくやさしいの。一緒に来てくれればよかったのに』

『仕方ないわ。彼女は優秀だけど探査に特化した魔法士だから、今回の件には向いてないの』

『そう、なんだ』

『魔法士の力にはそれぞれ特性があるのよ。ルイスみたいに全般を均等にこなせる人は、ほとんどいないわ』

『アマラさんは？』

『わたしは防御。ナアカの店で、わたしが別の人と一緒にいたのを覚えてる？』

ナアカの店っていうと、ヴェルグのシトウラを聴いたときだ。そういえばカウンターにそれっぽい人がいたような。でも全然印象にない。

『覚えていなくて当然よ。あそこにいたもう一人のイジーは、探査の中でも隠密の天才なの。彼の素顔を見た者はいないと言われるくらい、隠れるのが上手いのよ』

『じゃあ、ジャムは？』

その問いに、アマラさんは一瞬きょとんとして、笑い出した。

『彼は魔法士じゃないわ。マーレインだけどね』

そっか。そういえば昨日タクも部下だっけって言った。だけど隠密とか忍者っていうと、ジャムのほうがそれっぽい気がする。

『イェドのというより、ムシャザの私兵ね。普通ではあまりないけど、彼みたいな存在はこういったときに心強いわね。見た目は怖いけど、信用して大丈夫よ？』

『怖くはないの。ちよつと忍者っぽいなあって思ってたから』

？忍者？という言葉がどう伝わったのか、アマラさんは可笑しそうに笑い声をたてた。

『おもしろいこと考えるわね、あなた』

笑ったびに洗いたての長い彼女の髪が揺れて、不思議なきらめきを放つ。

この世界の人たちは、ほとんどがぱつと見黒髪黒目なのに、どこか色を含んだような黒色をしている。アマラさんはワインレッド、タクはインディゴブルー。ラクエルはオレンジっぽくて、ヘクターさんは銀鼠色だ。

本当の漆黒というと、アル王子と王様くらい。こっちの太陽が何か違うのかと鏡で自分を見てみたけど、わたしの猫毛はいつもどおりのコーヒープラウンだった。

色素とかが違うのかなあ。

真紀みたいなことを考える。ジャムの目は金色だし、わたしのいた世界の感覚で判断するのは危険だ。

黒の中にまるでロードライト・ガーネットを砕いてまぶしたような髪は、高い位置でポニーテールにしてあるのに腰まで届いて、彼女が動いたびにふわりさらりと揺れ動く。華やかだけど颯爽としているアマラさんに、すごくよく似合っている。

『あなたが？乙女？で良かったわ。リオコ』

唐突にアマラさんが言い出す。

『高飛車で鼻持ちならない女が来たら、どうしようかと思ってたの。いい子で良かった』

『そう……かな。あんまり？乙女？とか、考えないようにしてて』

『自信がない？』

『うん。だつて、わたし本当に……普通の、子だから』

下を向き、抱えていた苦いものを零すようにそう呟く。女同士だからかな。普段はあまり口にしない弱音が出る。

アマラさんが黙った。真紀はめずらしくわたしと手を繋がずに、一人後ろでぼんやり街の様子を見ながら歩いている。

『？普通？つて、なにかしらね』

ぼつりと、前を見たままアマラさんが言う。わたしは顔を上げた。『わたしからすれば、今の状況は充分？異常？だわ。この世界が乾

くのは予想していたこと。だけど？異界から渡り人が来る？というのは願いでありこそすれ、予測の範疇に入っていなかったことなの。今も魔法士のほとんどが？異界の扉はない？と信じているわ。それが、この世界の？普通？』

『アマラさんは、わたしと真紀が異界から来たって信じてるの？』
『その質問は微妙ね。真面目に答えると、信じたいけど迷っている、というのが本当のところ。あなたたち二人を見る限り、他人を騙して何かするようには見えないし、あなたたちを連れて来た人たちも、そういつた損得を図る人じゃないってことは分かるわ。そして……』
アマラさんは言葉を切り、その大きな猫みたいな瞳でじつとわたしを見た。

『わたしが今まで経験した中で、あなたたちのような存在は見たことがないわ。だけど、どれもわたし個人の経験と感覚からきている以上、客観的な判断材料にはならないの。だから、信じているとは言えないわ。ごめんなさい』

視たことがない？

もの珍しいという話ではないのだと、直感で悟る。

『どんなふうに見えるの？』

『魔法士の視覚を言葉で説明するのは難しいわね。理律と天律があることは知ってる？』

『うん。ラクエルから聞いた』

『簡単に言ってしまうと、あなたたちはこの世界の理律とは異なる何かが働いているように見えるの。不自然に浮いて感じると言えばいいかしら』

『じゃあマーレインの人は、みんな分かっちゃうのかな』

『それはどうかしら。？視る？力をもつものは限られるから。魔法士長さまにはお会いした？』

『ううん』

『そう。今の状況では仕方ないわね。彼の眼は？天嶮の巨人？に匹敵すると言われるの。ひよっとしたらあなたたちを視て、彼なら何

か分かるかもしれないと期待したんだけど』

『てんけんのきょじん？』

『教えてもらってない？ 北方に住む巨人族ダイダロッドのこと。』

彼らは風の声で話し、現在・過去・未来、万里を視通す一つ目をもつと言われるのよ』

『ひ、一つ目巨人？』

そんなのがいるんだ。さすが異世界、とか納得してもいいのかな。

『タクより大きいの？』

『彼の身長はだいたい6シエク半よね。……そうね、見たものの話では8ケーンとも10ケーンとも言うから、彼はダイダロッドの手の平くらいの大きさになるのかしら』

『うわぁ』

タクの身長は、わたしの感覚で190センチくらい。こっちの世界の単位は細かすぎて覚えられないけど、とりあえずとんでもない巨人ってことだけは分かった。

『アマラさんは、わたしたちを信じてないのに守ってくれるの？』

『魔法士としては、この状況はとても興味深いもの。参加できて光栄だわ。それにわたし、一度引き受けたことはやり抜きたい性質（たち）なの』

『アマラさん……強いんだね』

『褒めてるの、それ？』

『うん、もちろん』

大きくかぶりを振って頷くと、アマラさんはふんわりした唇の端を持ち上げて、ありがと、と微笑した。

『だけど、あんまりいい人だと思わないほうがいいわよ』

『え？』

『今日あなたたちを連れ出したのは、単に気晴らしをして欲しかっただけだと思う？』

すつつと背中が冷える。心の中で、ぱちりとなにかが音を立てて符合した気がした。

『？視た？かったのよ、あなたたちをじっくりとね』

ふり向いて、この推測を確信に変えたい。だけど確信が変わるのが怖くて、彼女にわたしが気付いたことを気付かれるのが怖くて、体がこわばる。

『真紀ちゃんに……なにした、の』

『話をしただけよ。わたし、与えられるものを当然のように受け取る女って嫌いな』

与え……られる？ 受け取る？

その言葉が、物理的な衝撃でわたしの頭をがんと駆け巡る。

与えられている？ 真紀が わたしたちが？

冗談やめてよ。

めらりと心で何かが湧き立つ。

わたしたちは与えられてなんかいない。恵まれているし、たくさんの人に助けられている。それは認める。

だけど、住んでいた世界から家族から友人から、いきなり引き離されてここへ来たのだ。今の？乙女？扱いと前の世界の大切なものを比べたら、圧倒的に天秤は後者に傾く。タクは好きだけど、思いつく出や絆の数は比べものにならない。

ああ、わたし全然この世界に馴染んでなんてないんだ。

そのことが今は、少しだけ嬉しい。

わたしは胸を張って言えばいいんだ ？異界の人間です？と。

引け目に思うこともすまなく感じることもないんだ。

変えようのない事実を正面から認めること。わたしに足りなかったのはそれなんだ。

『アマラさん』

呼びかける声は落ち着いている。だって、小学校時代の執拗な嫌がらせに比べれば、これくらいかわいいものだもの。

『アマラさんは素敵な人だと思う。美人だしスタイルもいいし、女の魔法士ってかっこいいし。わたしたちを守ってくれて、すごくありがたいし。でも』

息を切り、すうと吸い込む。アマラさんはどこか不審そうに、こちらの言葉を待っている。

『わたし、あなたのことは好きになれないと思う。これ以上わたしや真紀になにかしてきたら、わたしはあなたを許しません。覚えておいてください』

言い切ったわたしの胸の中は、これ以上ないくらい澄みわたっていた。

17-4 (後書き)

ロードライト・ガーネット・ガーネット(柘榴石)の中でも紫味を帯びた赤い石。

5

『許しません』とか啖呵切ってみたけど、別になにかしようってわけじゃない。ルイスに言えば文句のひとつでも言ってくれるかもしれないけど、言いつけるみたいで嫌だった。それになんとなく、こんなことでこっちの人たちの手は借りたくない。

夕飯になつても真紀は沈んだままだ。少しでも話してくれれば状況もはつきりするし、相談にも乗れるんだけど、ぴったりかつちり殻に閉じこもってしまっている。気持ちは分からなくもないんだけど。

それよりも、落ち込んでいるのが丸分かりなのに、タクモルイスも真紀の『慣れないことをして疲れた』なんて言い訳で納得してしまっているのが歯がゆい。

なんでそこでちゃんと突っ込んで聞かないのよ。

他人事なのにイライラしてしまう。たしかにエステ後の真紀は、つやつやぴかぴかで二割増しくらいに大人びて見える。そのうえ物憂げなせいで、男の子っぽい旅の格好なのに艶めいて、まるで別人だ。

うう、ルイスの鈍感さ。

こういう時にいいとこ見せないでどうするんだと思っけど、言えない。ほんの少しスープを飲んだだけで部屋に引き上げる真紀の背中を見送りながら、わたしは悔しまぎれにお皿の肉の塊にフォークを突き刺した。

『どうかしたのか？ リオコ』

『ベーターにー』

言いつつも、ルイスを睨んでしまっ。その質問は真紀にするとこるなんだってば。

『なんだかすごく責められている気がするんだけど』
『気のせいじゃない?』

刺々しく返して、目の前のお皿に集中する。
薄切りにしてあるお肉は、脂身が筋になって入っているのに、しつこくない。塩気が効いてて、炭で燻したような薫りが獣臭さを消している。

高級ハムみたいだなあ……厚切りベーコンのほうが近いかな。

お肉の正体が気になってタクに尋ねたら、イーという家畜の塩漬け肉だと言われた。ベクやカケロと一緒によく飼われるその家畜は、一般に広く食べられている種類らしい。

ネウロやガウルは癖があって、好き嫌いが分かれるんだそうだ。
向こうで言うジビエ（狩猟による鳥獣肉）みたいな感じかな。

味は美味しいんだけど、付け合わせの蒸かし芋とおいしい塩味がベースで、シンプル過ぎて少し飽きがくる。

ソースとか、もっといろいろあればいいのに。

些細なことがもどかしい。こんなことで世界の落差を感じて、喉に残った塩味がやけに辛かった。

異界から来ているわたしができること。それは特別な何かじゃなくて、たとえばタクにぬいぐるみをぶら下げたり服を繕ったり別の味を試してみたり。そういうこともありなんだと思う。

翌朝わたしは、まだ寝ている真紀を置いて、一人で一階の食堂に向かった。顔馴染みになった宿の女将さんと挨拶を交わす。

『おはようございます』

『おはようございます。朝食は何にいたしましたしょうか?』

『えっと、自分で作ってみたいんですけど、いいですか?』

『お嬢様がですか?!』

貴族のお嬢様設定ってこと、すっかり忘れてた。でもいいや。好きにやらせてもらおう。

『わたしの家では、自分のことは自分でするように躰けられてるん

です。ちょっとだけ厨房、借りさせてくださいね。』

わたしは手早く髪を三つ編みにしてゴムで止め、キッチンへ向かった。いきなり入ってきた見知らぬ女の子に料理人のおじさんも驚いていたけど、会釈をしただけで詮索してくるようなことはなかった。

女将さんが、宿の裏の畑で採れたという野菜類を見せて説明してくれる。こっちの人は、始終気温が高いせいか、傷みやすいので生野菜はあまり食べないのだそう。

ちよつと緑の濃い小松菜みたいなことや紫の瓢箪型をしたもの。白地に黄色い縞の入った、瓜に似たものもある。

少しずつかじってみると、小松菜みたいなのはわりとしゃきしゃきして、しっかりしたレタスみたい。紫のやつは、茄子というより皮の固いトマトだ。瓜っぽいのは青臭いカボチャに似ている。あとは大きなラッキョウやエシャロットに似た野菜とか、なんだか分からない赤い固い実。

香辛料として使う野菜も、いろいろ味見した。厨房にあるものを一通り食べ、わたしは袖まくりをすると、一画を借りて調理をはじめる。

カケロの卵からボウルに卵黄だけを取り、塩、酢、香辛料と混ぜたあとに食用油を少しずつ加えてとろみを出していく。即席マヨネーズソースだ。それから小松菜っぽい葉っぱを洗って手でちぎり、紫のトマトもどきの皮を剥いて輪切りにした。水気をしっかりと切っておく。

昨日食べたイーの肉の塩漬けを薄くスライスして、フライパンで軽く焦げ目がつくぐらいに焼いた。じゅうつといい匂い。

本当はサラダサンドみたいに、野菜てんこ盛りの上に薄切り肉をのつけようと思っていただけ、思いのほか生で食べられる野菜が少ない。結構どれも固いの。水がないからあんまり丁寧に洗えないしね。

なので、料理人のおじさんから手のひらサイズの焼きたてパニを

もらって、ハンバーガーみたいに順番に挟んで、マヨネーズソースをかけてみた。

『あ、意外にいけるかも』

不審そうな顔をしている女将さんとおじさんにもナイフで切って勧めると、おそろおそろ食べた後、笑顔で『グレイトだね！』みたいなことを言われた。味は好評みたい。

うーん、でもマスタード欲しかったなー。

あのほんの少しピリツとする感じがいいんだよね。いろいろ香辛料を試食したけど、イマイチ近いのがないんだ。ちよつと考えて、ラッキョウもどきをみじん切りにしてマヨネーズに加えてみる。なかなかいい感じだ。

『これだったら鶏のほうがいいかなあ。照り焼きチキンも合いそうなんだよね』

パニのもちもちした触感と味を確かめ、わたしは一人でぶつぶつ言いながら調理を続ける。

なんたるこの子？みたいな目で見ていた厨房で働くおじさんたちが、ときどき仕事の合間に覗きに来たけど、気にせず作業続行だ。食へのこだわりは大事だからね。

慣れない角型の包丁は重いけど、切れ味がすごい。一番小さいのを借りていたわたしは、おじさんにコツを教わりながら、食材と格闘を続けた。

『なかなか上手いじゃないか。慣れてるね』

『お料理、好きなの』

『お嬢さんちは料理人いらすになっちまうなあ』

調子に乗ってカケ口をさばいていたら、女将さんに聞いたのか、タクが厨房に顔を見せた。

『リオコ、なにをやってるんだ？』

髪を結んで、ついでに借りたバンダナとエプロンまでしているわたしを見て、タクは目を丸くしている。

『お料理してるの。あ、よかったら味見してって』

調理テーブルの片隅に強引に座らせ、試作品のパニサンドを並べる。

『えっとね、これがBLT風で、こっちが照り焼きチキン風。これがキンピラと牛肉のサンド』

『どれも聞いたことのない料理だな』

BLTはイーの塩漬け肉と小松菜もどきと紫野菜だし、チキンはカケロの肉。キンピラは縞力ボチャと赤い固い実と小松菜もどきの芯の部分を千切りにしたものに、ベクの肉の細切れを合わせて甘辛く炒めて作っている。

『どれが美味しいか、みんなに味見してもらってるの。食べてみて。タクは不思議そうに、でも瞬く間に三つのパニサンドを平らげた。すごい食べっぷりで、こっちが気持ちよくなるくらい。指先についたソースを舐め、タクが空になった口を再び開く。

『うん、最初のが一番あっさりしているな。生野菜が肉とよく合う。二番目のものは美味しいが、別に挟んで一緒に食べなくても別々でもいい気がしたな。最後のはぼろぼろ零れて食べにくかったが、味つけが濃くて美味しかった』

わりと真面目に感想を言ってくれた。びっくりした。どれも美味しいとか、適当にごまかされるかと思ったのに。

『じゃあ、最初が一番いい？』

『そうだな。野菜がみずみずしくて良かった。軽めだから、俺には食事というよりおやつになりそうだが』

まあ、三個一気食いしてもけるりとしてるもんね。

『リオコが料理が上手だとは思わなかった』

『上手なわけじゃないんだけど、食いしん坊なの。美味しい料理とか珍しい食材見ると、挑戦したくなるんだよね。今日はちょっと気分転換も兼ねて、早起きしてがんばっちゃった』

『いい腹ごしらえになったよ。ありがとう、美味しかった』

タクの褒め言葉が、素直に嬉しい。耳たぶが熱くなる。

『真紀ちゃんやルイスにも食べて欲しいな』

『ああ、喜ぶだろうな』

なんてタクとらぶらぶ（？）な会話をしてるのに、周りではわたしの作ったパニサンドの試食がいろんな人の手を渡って、これはどうやって作るんだとかすごい騒ぎになっている。

もー外野うるさいし。

せっかくタクに手料理を食べてもらってうきうきなのに、ゆっくりそんな気分にも浸れない。しかも食堂に来る人が増えはじめたのか、女将さんも手伝いのお姉さんもばたばた走り回っている。苦笑して、タクが席を立った。

『邪魔みたいだから、俺は出るよ』

『わたしもお店を手伝いに行こうかな』

さりげなくタクを追いかける。厨房と店の間になる陰で彼を呼び止め、ズボンのポケットに入れていたティンベアを差し出す。

『はい、直ったから。今度は汚さないでね？』

『……ありがとう』

さすがに恥ずかしくて、タクの顔がまともに見れない。下からちらちらと窺ってしまう。顔が赤くなるのを感じながら、彼の腰紐にクマのぬいぐるみをしっかり結えた。

『出発はもうすぐ？』

『いや、たぶん出るなら夕方だ』

『そっか。じゃあお昼と夕飯も頑張って作っちゃおうかな』

『……楽しみにしてる』

切れ長の瞳をすうと細めて、タクがわたしを見る。心臓がばくんと跳ねた。わたしの間に線を引いてるのに、そんなやさしい目をするなんて反則すぎる。

胸苦しさをぎゅっと底に沈めて、わたしはなんでもない顔を作った。

『じゃあ、あとでね』

『ああ』

自分がふらふらしてるのは分かる。わたしは日本人。ここは異世界。タクも異世界の人。

あちらの世界では、絶対にタクに出会えない。だって騎士だし、剣持ってるし。ルイスなんて魔法士だ。あちらの世界ではそんな人絶対に存在しない。

それに、こつちの世界にはテレビもパソコンも携帯電話もない。たとえわたしの周りの人ごとこつちに来て、きつと生活できない言葉だって文化だって違う。

なんて不自然なんだろう。わたしは一人なのに、二つの世界に囚われてる。

ハーフとかクウォーターの人って、みんなこんな気分になるのかな。

比べちゃいけないけど、そんなことを考える。国が違うだけなら行ったり来たりすればいいけど、ここではそうはいかない。真紀は『みんなを連れて異界に逃げる』なんて言ってたけど、こつちの人が向こうで普通に生活できるなんて想像もできなかった。

すごく真面目に考えすぎかな？ 悲観的過ぎるのかな？

わたしは欲張りだ。？どちらか？じゃなくて？どちらも？を選ばたがっている。

考えないように体を動かす。注文を聞いてメモを取って、テーブルを拭いて、レシピを教えて味をチェックして。中・高と学園祭の模擬店で喫茶をしたから、こういう仕事は多少慣れている。

わたしの考えたBLTサンドは好評で、試しに店に来た人に出したら飛ぶように売れていった。お肉とパニを焼くだけだから、わりと早くできるしね。

問題はマヨネーズソース。たくさんはいらないんだけど料理長さんが気に入ったらしく、どんだけっていうくらい卵を割った。大量に余った卵白、どうしょ？

マカロンにでもするかなあ。

魚のすり身と合わせてはんぺん、とかも考える。そうこうしてい

るうちに、入れ代わりの激しいお客さんの渦の中にルイスとアマラさんを発見した。

真紀ちゃんのないところで、なに迫られてるのよルイス。

かちんときたけど、二人の間の空気は冷静そのものだ。アマラさんがじゃなくて、ルイスが知らない人でもはつきり分かるくらい、タクが隔てる以上の境界線を引いている。突き放しているって言うてもいいくらい。

なんでだろう。

思つて、アマラさんの表情を見て気がついた。平然としてる。つまり、これがルイスの本当なんだ。真紀とわたしが、どれくらい彼の懐の内側にいたか思い知った。

『与えられるものを当然のように受け取る……』

そんなの気付くはずがない。真紀は最初から、ルイスの内側に守られてきていた。外側の彼を知る機会なんてない。

ちよつとだけアマラさんの言いたいことが分かった。でも、それはそれ、これはこれだ。

わたしはできたてのBLTパニサンドをそれぞれお皿に載せて、二人のテーブルに持って行った。

『はい、どうぞ。食べてみて』

『もしかしてリオコが作ったのか？』

青い目を輝かせてルイスが尋ねる。彼を包む温度が緩む。その様子を、アマラさんが厳しい視線で一瞥した。

『うん、そうなの。結構評判いいんだよ』

『美味しそうだな』

早速ルイスが手で持ってかぶりつく。わたしはアマラさんの前にもパニサンドを差し出した。

『……これが、わたしの？普通？だから』

その言葉にアマラさんは、どこかは眼差しをやわらかくした。ためらいもなく大きな口でわたしの作ったパニサンドを頬張り、ルイスと同じくらいの速度で食べていく。

『ごちそうさま』

『はっ』

脊髄反射で出た正直な感想に、口元をハンカチで拭い、上品モードに戻ったアマラさんが微笑む。空のお皿を二人分重ねて、はいと手渡してくれた。

ついつと顔が寄る。薔薇に似た芳香が鼻をくすぐった。

『あなた、昨日よりいい顔してるわ。少しは答え出せた？』

『え……』

『ま、一日じゃ無理か。これだけでも進歩ね』

もしかして……？

わたしの胸を形にならない想いがよぎる。

『アマラさん、わたしたちのこと嫌いなんじゃないの？』

『簡単にいい人って思っちゃダメって言ったでしょう？』

答えにならない言葉を返し、アマラさんは黒紅色の髪をさらりとひるがえした。

『あなたたちはちょっといい子すぎるのよ。少しは他人を思い切り憎んで、嫌えばいいの』

『アマラさん』

『朝ごはん、美味しかったわ』

背後のルイスに聞かれないようにか、アマラさんは小声で素早くそう言くと、ふり返りもせず立ち去った。わたしの手に百ウェン硬貨を一枚握らせて。

BLT効果は、どうやら真紀にもあつたみたい。ゆっくり起きてきた彼女は、朝食後、昨日より少し明るい顔で手伝いを言い出してくれた。

皮むきの才能はいまいちだったけど、言葉も分からないのに裏方のおばさんとすっかり馴染んでお皿洗いをずつとしてくれる。お昼前後は戦場みたかったから、宿の女将さんや厨房のおじさんたちからすごく感謝された。

「ありがとうございます。お客のお嬢様にこんな仕事をさせるなんて、あたしらの首が飛びそうです。とても助かりましたよ」

「いえ、わたしこそ厨房貸してもらったし。よかつたら、夕方も手伝っていいですか？」

「大歓迎ですよ。だけど、お付きの人に叱られませんか？」

「出発まで好きなこととしていいって言われてるから」

「まあ、ここにいたほうが安全でしょうけどね」

女将さんが悪戯っぽく、ウインクする。

「夕方の支度まで調理場は交代で休憩するんですが、お嬢様はどうします？」

「じゃあ、ちよつと買い物に行つてこようかな」

「お一人では行かないで下さいませよ？」

「あ、はい」

とか頷いたけど、真紀はさっき一人で出掛けてつちやつたんだよね。

あの夜の出来事が頭を掠めたけど、どこにいるか知らない護衛の人もいてくれるというし、そんなにしょっちゅう危ないことはないと自分に言い聞かせる。

エプロンとバンダナを外すと、わたしは部屋に戻ってタクから貰ったお金を持ち、日差し避けのマントをくるりと巻いた。外に出たところで、入口に立っていた外套を被った人に声をかけられる。

『お出かけですかい、お嬢ちゃん』

『あ!』

思わず声をあげた。すっぱり被った外套のフードの下から笑いかけているのは、あの金色の目の男の人だった。

『えっと、ジャム、さん?』

『どうも、ジャメイン・ウッドだ。はじめまして、じゃあないよな。タカトウリオちゃん』

久々にフルネームを呼ばれた気がする。カタコトなんだけど、ちよつと嬉しい。

『このあいだはいろいろ不安がらせちまって、悪かったな。大将にも怒られたよ。お嬢ちゃんに見つかるなんて、護衛失格だってな』

『大将?』

『タキトウス・アルディ・ムシャザ。オレの上司みたいなもんだ? みたいなもの? ってことは、ちゃんとした上下関係とは違うのかな。話には聞いていたけど、見た目はルイスよりも年上に思えるジヤムが、タクの? 部下? ってというのが不思議な感じだ。』

『今日は顔色がいい。気分はだいぶ良いみたいだな』

『あ、あのときはお世話になりました』

ぺこりと頭を下げたら、ぶつと笑われた。

『お嬢ちゃんが気にすることじゃないさ。そんなに頭下げたら、すり減っちゃうぞ?』

頭つてすり減るものだけ?

疑問に感じたけど、冗談みたいだったから軽くスルーする。

『買い物か?』

『うん、ちよつと欲しいものがあって』

裁縫系とか、あと調理器具も少し見てみたいんだよね。

『じゃあ、オレが案内するよ。店、分かんないだろ?』

『いいの？ ありがとう、助かる』

ジャムのくだけた雰囲気のせい、いつの間にかタメ口になっていた。右頬に大きな傷のある顔が、くしゃりと笑う。

『オレの仕事は嬢ちゃんたちの護衛。お嬢ちゃんの仕事は、笑顔でいることだ。嬢ちゃんたちを危ない目に遭わせたら、今度こそ大将の寿命が縮んじまうからな。……って、もう一人の子は、一人でどつかにいつちまったが』

『真紀、見たの？』

『追いかけてよと思ったが、やめておいた。なんとなく』

ジャムの目から見ても、真紀はまだ落ち込んでるんだろっか。

心配が顔に出たのか、ジャムがわたしの頭に、ほんと大きな手を載せた。

『目を離してるわけじゃない。あの子は安全だ』

『どこにいるか分かるの？』

『買い物ついでに、声かけに行くか？』

『うん！』

ジャムは本当に不思議だ。タクのように気を遣ってくれるのではなくて、まるでこちらの気持ちがあつてみたい、すつと心に言葉が入ってくる。

オトナの包容力って感じかなあ。

それだけじゃない気がしたけど、とりあえず頼りになりそうな彼と一緒に買い物に出かけた。こつちの世界の雑貨屋さんは、雑貨どころじゃないいろんな種類の品物を売っているらしく、手芸用品に文房具、本、お皿やスパイスまで並べてある。数軒回って見比べ、糸や端切れを数種類。それに携帯用カバーのついた小ぶりの調理ナイフを買った。

『こんなかわいいお嬢ちゃんに手料理作ってもらえて、大将たちは幸せもんだ。なんのための旅だか分かんねえな』

『ジャムも食べる？ さつき、調理場を借りていろいろ作ったの』

『は。そいつは是非味わいたいけど、オレたちは先に発つから無』

理だな。残念だ』

そうか、ジャムたちは先発隊って言うってたっけ。はっと気がつく。『ごめんなさい。じゃあ、今も急いでたりした？』

『いや、大丈夫だ。実は、行く前に嬢ちゃんたちにきちんと会っておきたくてね。大将を誤解されたままだと困るから』

『誤解？』

『そう。お嬢ちゃんは、ナアカの村でオレと大将が会ってるところを見たんだろ？』

『連絡を受けてたって……』

『そ。だけど大将は、こいつのことは言わなかったはずだ』

にやつと意味深に笑って、ジャムは長い外套の合わせを少し開いた。その中を覗き込み、わたしはあつと息を呑む。ジャムを見上げ、またそれをまじまじと見直した。

『これって……』

『そういうこと。大将は不器用でね。自分のいいところをあまり見せたがらないのさ』

ジャムの声はやさしかった。タクのことをすごく大事にしてるのが伝わってくる。

に、しても。

『早く真紀ちゃんにも教えたいな』

『ほら、あそこにいるぜ』

ジャムが目顔で示した先は、大通りの交差点部分がひらけて、ちよつど円形の広場になっていた。広場の真ん中にある噴水近くの一画で人が小さな垣根を作り、その向こうから音楽が聞こえてくる。

調子のよいシトウラの響きと、美しく重なる男女の声。片方は真紀だ。そしてもう片方は。

ヴェルグ……。

あの吟遊詩人の声だ。彼も旅をして、同じようにヒューガラナに辿り着いたんだろうか。

二人の様子が気になって、ジャムと一緒に人垣に近寄る。意外と

混んでいて、背が低いから余計になかなか近づけない。

あれ、この歌って。

どこかで聞いたことがあると思ったら、なんと日本の歌謡曲だ。
有名な男性アイドルグループの懐メロ。母親がよく口ずさんでるやつだ。

その歌の次は、あの？ユリアの花？というバラードだった。ところが歌詞を耳にした途端、わたしは凍りついた。

『 重なる月に 導かれ

界を渡りし 一人の乙女

二人の騎士に 見守られ

辿り着きたる 水の門

神の意志こそ 激しけれ

乙女 その身を鍵と散る

騎士の嘆きは いかにせん

涙つきせぬ 雨と降る

ああ ユリアの花よ

そを染めるは 乙女の血潮

ああ ユリアの花よ

そを揺らすは 乙女の嘆き

ユリアよ……ユリアよ

その花は 永久に咲きにけり 』

前に聞いたのと、まったく歌の内容が違う。いや、部分部分は同じだ。女性が亡くなることと男の人の涙。雨。ユリアの花。

だけどそれらのモチーフが、ほんのわずか形を変えただけで、こんなにも恐ろしい歌に仕上がるなんて。

『 なにこの歌…… 』

知らない間につぶやいていた。荷物を持った手がじつとりと汗ばむのに、感覚がないほど冷たい。

たぶん蒼ざめていたのだろう、ジャムが『大丈夫か』と声をかけた。

『ただの歌だ、気にするな』

『だけど……』

なぜヴェルグが、この歌を歌っているのか。今のこのタイミングで 真紀と一緒に。

指環を持ってない真紀は、きつと歌詞なんて分かるはずもない。それでも、耳で聞いたのを即興で合わせているには上手すぎた。その耳の良さには感心するけど、真紀の口からこんな歌詞が出てくるなんて耐えられなかった。荷物をもったまま、両手で耳を押さえる。

『オレが止めてくる。お嬢ちゃんはどこで待つてな』

立ちすくむわたしを置きざりに、ジャムが人混みをかき分けて進む。そのうちに指の隙間から拍手が洩れ聞こえ、演奏が終わったことが分かった。観客たちが散り散りにその場から立ち去る。

気がつくとき数メートル先の噴水の前で、真紀とヴェルグの間に割り込むようにジャムが立ち、不思議な空気感の睨み合いをしていた。雑踏にまぎれるわけでもなく、会話は聞こえない。

そっか、送心術だ。

真紀には言葉が通じないのだから仕方ない。そこでもうひとつ気がついた。

じゃあ、ヴェルグも送心術が使えるってこと？ まさか魔法士？

あの歌といい、わたしたちの周りに現われたことといい、彼には怪しい点が多すぎる。

ぎゅっと両手を握りしめて、わたしは三人の様子を見守った。じわりと傾いてきた日の光が影を落として、彼らの表情は分からない。そのうち、ふっとヴェルグの姿が消えた。

わたしの頭の中では、まだあの歌詞がぐるぐる回っている。

ユリアの花……そういえば、前の乙女の名前って、たしか。

じつとしていられなくて、わたしはその場で足を返すと、糸を買った雑貨店に飛び込んだ。

『あのっ、ここに？異界の乙女？の伝説が載ってる本って、ありま

すか？
『

結局二冊も買っちゃった……。

わたしは重くなった手提げ袋を両手で持ちながら、勢いに走った自分を少し後悔した。

一冊は、この世界のいろんな伝説が載っているというもの。もう一冊は、あの歌の元になったユリアの花の物語だ。

やっぱり、早まったあ。字読めないの忘れてた。

両方とも子ども向けの絵本なんだけど、魔法話の指環で言葉は分かっても、文字はほとんど理解ゼロだ。帰って荷物からヘクターさんの授業ノートを引っ張り出さないといけないみたい。

荷物を抱えて広場の方へ戻っていたら、途中でこちらにやってくる真紀とジャムに出くわした。

「理緒子！ 来てたんなら、早く声かけてくれればよかったのに」

「だって、さつき来たんだもん。それにあの歌」

言いかけたわたしを、ジャムが目顔で止めてくる。

「その話ここではまずい。宿でしよっぜ」

わたしの手をとってその台詞を聞いた真紀が、不満そうな、そして不安そうな顔をした。励ますように、きゅっと手に力を籠める。

「帰ろう、真紀ちゃん」

宿の前まで来ると、真紀は待ちきれないというように、わたしたちを質問攻めにした。

「どうしたの、いったい？ なんでジャムと理緒子と一緒にいるの？ 歌ってなに？」

宿の入り口とは反対の壁際に立ち、真紀が腕組みをしてわたしたちを睨む。

「お店に買い物に行くのに、ジャムに付き合ってもらったただけだよ。」

真紀はヴェルグとなにしてたの？』

『なにつて……あそこにいたら、向こうから声をかけてきたんだよ。で、一緒に歌う流れになつて』

『ヴェルグに歌詞、教えてもらったの？』

『教えてくれるわけないじゃん。適当だよ、あんなの』
『やっぱり。わたしはため息をついて言った。』

『あの最後の曲の歌詞なんだけど』

『あ、前聞いたのと違ってたよね？』

本当に耳だけは確かだ。そこでジャムが口を開く。

『あの歌には歌詞がいくつかある。どれもユリアの花にまつわる言い伝えが元になつてるが、今さっきのは、そのうちのひとつだ』

『真紀ちゃん。さっきの歌、異界の乙女のことだったんだよ』

『え……』

わたしが覚えている限りの歌詞を話すと、さすがに真紀は顔色を変えた。

『ごめん、全然気付かなかった。でも、周りの人もなんにも反応なかったよ？』

『ただの古い歌だからな。けど内容が内容だから、神殿が歌うことを禁じてる』

『じゃあヴェルグはあたしのこと知つて、わざと？』

ジャムは頷かなかつたけど、逆にそれが肯定をしているように思えた。

『あの人、何者なの？ ジャム、知つてるんでしょ？』

『悪い、嬢ちゃん。それはオレの口からは答えられない。アクイナスの旦那に怒られちまう』

『やっぱりルイスの知り合いなんだ。魔法士？』

『ああ』

『なんで魔法士がシトウラ持つて、あたしたちの周りをぐるぐるしてんの？』

『すまん。本当にオレからは何も言えないんだ。？乙女？だけの問

題じゃない。国のことなんでな』

『……フージェ・ハランがらみ？』

『嬢ちゃんの鋭さはときどき怖いな』

まっただくだ。これが恋愛とか、異性問題にもちゃんと働けば問題ないのに。

ヴェルグの素性も問題だけど、二人で会ってたってことだけでも充分ルイス的には問題なんだけど……気付いてないんだろうな。

真紀が困り顔で、ズボンのポケットから小銭を取り出した。

『路上ライブ手伝ったから、お小遣い貰ったんだけど、返さないとまずいかな？』

『8ウエン50か。ぼちぼち稼いだな、嬢ちゃん』

『賄賂とかになんない？』

『それくらいは平気だろ。アクイナスの旦那には内緒にしておけよ？』

うん、ルイスの機嫌が確実に悪くなるからね。

心の中で大きく同意した。

『で、ジャムはなんで理緒子といたの？ 事務的に隠れてないとまズいんでしょ？』

『ちよつと話があつてな。それと、嬢ちゃんの元気の素を持ってきた』

そう言つてジャムは、『もう起きたかな』と呟きつつ、わたしにしてみせたみたいに外套の合わせ目をそつと持ち上げた。覗き込んだ真紀が、目を真ん丸にする。

それはジャムの左脇の浅いポケットで、長い耳と縞のある体を丸めていた。

『ミヤウ……？』

わたしが見たときには眠っていたその生き物は、ぱつと大きな目を開けると、片方の手を曲げた変な格好でジャムの肩にするりとのぼる。黄色と茶色の縞模様が、夕方の光につややかな金属質の光を弾いた。

『これ、ナアカの市場であたしが買った、あの子?』

『そう。大将が心配して、あのあとオレに引き取りに行かせたんだよ。よっぽどあの店主に信用がおけなかつたらしいな』

タクッてば本当に心配性だ。つまりジャムに手渡していたのは、ミヤウを引き取りに行くための証文の控えだったということ。

『そうなんだ。怪我はどう?』

真紀が、ちょうど目線の高さにあるジャムの肩の上で座るミヤウに顔を近づける。あときはシャーシャー威嚇した野生の生き物は、ただど今回はそこまで怒らずに、尻尾を膨らませてじっとしていた。怪我のあつた左前足は、血が固まって乾いているようだ。

『さすがにまだ治らないか。でも、元氣そうで良かった』

真紀はさつきからずっと笑顔満開だ。見ているこっちまで嬉しくなる。

『じゃあ、怪我が治るまでジャムが世話をしてくれるの?』

『そのことだが、ちよいと相談だ。嬢ちゃんは、旅から帰ってこの子をどうしたい?』

『どうするって……怪我が治ったら、元いたところに返してあげようと思ってるんだけど』

『そうだな。なにも問題なければ、オレもそれがいいと思う。けど、その後のことを考えたことはあるか?』

『そのあと?』

ジャムはゆっくりと問いかけながら、真紀になにか別の道を見つけてさせようとしているようだった。

『また捕まっちゃうかもってこと? それは、人の来なさそうな山奥に放すしか』

『こいつの足は、指が欠けてしまっている。たぶん畏にかかったんだろうな。ミヤウは木に登って生活をするから、こいつにとってはかなり不利になる。それでも返すか?』

『そう……言われても』

『こっちは思わないか。こいつは他のミヤウよりも弱く、劣っていた

から罫にかかった。指がない以上、このさき人に捕まる可能性も大きい。こいつが人の手にかかって死ぬのは、避けられない？運命？だってな』

聞きようによつては、すぐ説得力のある言葉だ。わたしが息をひそめて見守る中、真紀はしばらく黙つて目を伏せ、おもむろにジヤムを見上げた。

『思わない。あたしは、違ふと思う』

力強い声だった。久しぶりに聞く、真紀の迷いのない声。

『避けられない運命なんてないんだよ。運命はね、あたしのところでは？命を運ぶ？つて書くの。命が運ばれていく道すじが？運命？なんだよ。だから、選べるの。自分や他の人の力を借りて、悩んで考えて、選ぶのが運命。』

ジヤムが、この子が罫にかかつて売られてたことが運命つて言うんなら、あたしやジヤムと出会つたのだから運命なんだよ。だから、選べばいい。ジヤム、その子の言葉分かるんでしょ？』

一気に言つと、確信をもつて訊く。

言葉が分かる……？

頭の中で反芻して思い出した。タクの言つてた？動物と話せる原始型マーレイン？のこと。

ひよつとしてジヤムつて、ものすごく変わった人……？

ただ単に？風変わりな？というだけじゃない。目は金色で、フードから少し見えている髪は目を惹く緋色。そして動物の心が分かるだけじゃない、？原始？と呼ばれるマーレインの力。

あの夜襲つてきた男たちがルイスにした扱いを考えれば、ジヤムがどんなふうにくつちの人たちに見られているのか、想像したくないけどできてしまう。きつとジヤムがいくら忍者みたくても、大勢の人の目から逃げ続けるのは無理だ。

忍者、か。

思いつきで使っていた言葉が、ここへきてやけに引っかかる。

本当に、ジヤムは忍んで暮らしていたのかもしれない。彼のこれ

までの言動、雰囲気、容姿、力なんかがパズルのピースのように組み合わさって、急に現実感のある形を生み出す。

真紀の質問には答えず、ジャムは首の裏に入り込んだミヤウをそのままに、すつとその場にしゃがんだ。外套をふわりと広げ、左の端を捲りあげる。

他からは陰になつて見えないように差し出されたその左の二の腕には、幅一センチほどの青黒い刺青が五本、腕輪みたいに彫られていた。上のほうにも、その輪は伸びているようだ。

『これは罪人の刺青だ。罪を犯すごとに一本ずつ数が増えてゆき、三本で懲役。五本で国外追放。七本で極刑になる。』

突然のことに、わたしと真紀は声も出さずにお互い寄り添った。ジャムは、元のように腕を外套の下に隠して、低く独白を続ける。

『オレは昔、どうしようもないやつでな。犯罪と名のつくものたいていのことはやった。一時期は二、三十人を連れて盗賊団なんてものもやったが、結局は捕まつてこつた。』

だが、そのオレの命を大將が救ってくれた。どうせ極刑になるなら、一度死んだ気になつて自分の下で働かないかつてな。』

ジャムは右手を伸ばし、空いている真紀の左手をそつととつた。『一昨日の夜、嬢ちゃん、あの男を極刑にするなど言つたな？』

そのおかげであいつは命を取られないが、代わりに少なくとも五本以上の印を入られるはずだ。』

あとから聞いた話によると、神職とか貴族、特にクガイの身分を持つ人や王族に対する罪を犯した人は、最低でも五紋（刺青五つ）なのだそうだ。つまり、今のわたしたちの立場はそれくらいだといふことでもある。

『刑紋（けいもん）は生涯消せない。それはあいつの犯した罪だから仕方ないことだけど、それでもこの印がある以上、やつは死ぬまで賤民以下の扱いを受け続けるだろう。』

真紀が、わたしたちを襲った男たちの死刑を望まなかったという話は、タクから少し聞いていた。襲われたのは怖かつたけど、誰も

命を落とさなかったから、それでいいんじゃないかとわたしも単純に思っていた。だけど。

一生差別されつづけるって、どんな感じなんだろう。

小学校の三年間のいじめだけでも思い出したくもないわたしには、想像もつかない。でも、ジャムは分かっってしまうんだ。同じような立場だから。

沈んだ表情の真紀の手を掴んだまま、ジャムは笑い皺の多い顔で微笑んだ。

「嬢ちゃんのこと責めてるわけじゃない。ただ、知っておいたほうがいいと思ってな。他から変な形で耳に入るより先に」

「うん、そのほうがいい。ありがと、ジャム」

「なにも責任をとれと言うんじゃない。ただ、そういうことがあると頭の片隅に入れておいて欲しいんだ」

「ん、覚えとく」

子どものように素直に頷く真紀に、ジャムも頷き、それから左手でわたしの手を取って重ねるようにした。

「何かを決めるというのは、例えきっかけがどんな軽い思いつきだったとしても、重いもんだ。あの男の刑罰も、このミヤウの命も

異界の乙女という立場も」

心臓が、一際大きな音をたてた。驚いてジャムを見ると、その金色の目はやさしい光を放つ太陽のように、揺るぎなくわたしたちに注がれていた。

「さつき嬢ちゃんは、運命は選ぶものだと言った。それを忘れないでくれ。自分や他の人の力を借りて、悩んで考えて、選び抜いて

これから二人にしか行けない道を切り開いていくんだ。オレたちは見守ることしかしてやれないが、二人ならきつと出来る。いいな

？」

「……うん」

二人で頷いた。うつむいていたから真紀の顔は見えなかったけど、わたしと同じようにちよつと潤んでいたと思う。ジャムの言葉は、

あたたかい水のように心に沁みていった。

ジャムが、わたしたちの手を離して立ち上がる。

『じゃあ、オレはもう行くよ』

『ジャム、その子のことよろしくね』

『ああ。大事に預かってくよ。嬢ちゃんたちが聖地から戻る頃には、うまく歩けるようになってるだろうさ。そのとき、また考えようぜ？』

うん、と真紀が大きく頭を振る。ジャムはうなじの辺りで丸くなって眠そうにしているミヤウを片手で掬うように持ち上げた。大きな手のひらに、すっぽりおさまる。

『そうだ、嬢ちゃん。こいつに名前つけるか？』

『名前？』

『呼ぶのにいるだろう？』

『そつか。じゃあ、えつとお……？パン?!』

悩んだわりに即答された名前に、わたしは全身の力が抜けていくのを感じた。

真紀ちゃんのネーミングセンスって……。

『……真紀ちゃん、なんで？パン？なの？』

『え、？ジャム？つていえば？パン？じゃない？色もそんな感じだし』

『だったら、ハニーとかチーズとかクッキーとか、いろいろかわいい名前あるじゃない！なんでそこで？パン？を選ぶわけ？』

『なんとなく』

『もー、なんとなくで決めないでよ。普通そこは、いくつか候補を出してその中から選ぶんじゃない!』

たった今？決めること？のイイ話をジャムがしてくれたばっかなのに！

『きなことか小麦とか？』

『なんで粉ものなの』

『マーガリン、バター、カラメル』

『だんだん名前じゃなくなってきた』

『……クロワッサン、バケット、シナモンロール』

ついにはパン攻めできた真紀を、ちらりと横から睨むと、しゅるしゅると音が鳴りそうな顔でしょぼくれた。しなだれる耳と尻尾が見えそうなくらい。

『うう、だめ。あたし優柔不断だから、こういうのはっと思いつきでしないと、迷っちゃうんだよ』

こんな割り切りのいい優柔不断な人、見たことないけど。

だけど、あんまりに情けなさそうだから、つい『いいよ』と言ってしまった。途端、真紀が元気になる。

『よしっ。おまえの名前は今日から？パン？だっ』

ジャムの手の中の丸い毛玉に、つぶりと指を立てる。

『あ、ずっるい。わたしも触りたいのにい』

『へっへー』

言い合つわたしたちの声に、眠たげなミヤウの緑の眼がうつすらと開いた。ジャムはなにも言わずに、ずっと顔中の笑い皺を増やしている。

すっかり日も暮れて宿の食堂に入る人が増えていく中、呆れ顔をしたタクが呼びに来るまでのしばらくの間、わたしたちはそんなくだらない応酬でふざけあっていた。

17-7 (後書き)

* 「刑紋」は造語です。

旅は真夜中からはじまった。目的地のタキ「アマグフォーラは、ここヒューガラナから徒歩で丸一日かけて歩いた先にある、タキ」アチファ高原のさらにてっぺんに位置している。

王様との約束の日から、今日で十日目。あれからまだ十日しか経っていないんだという気持ちと、もう十日も経ってしまったという不安が胸の中でごつごつぶつかった。

時間は、あんまりないんだよね。

旅に慣れていないわたしたちのことと日中暑くなることを考慮して、夕食後仮眠をとってわたしたちは再び旅に出ることになった。

ジャムたちはもういない。旅の道の安全を確認するために、わたしたちより先に出て行ってしまったのだ。もちろん、あのミヤウのパンも一緒に。

タク曰く、

「ジャムは正式な魔法士の訓練をしたことがなくて、治療術だけは致命的にへたくそなんだが、なぜか怪我をした動物になつかれる」のだそう。

「話を通じるから安心するのかな？」

「ただ単に、野生動物と同類にみられているだけだろう」

「冗談でもなくタクはそう言ったけど、口調はやわらかい。この二人、主従っていうよりも、不良のお兄さんとしっかり者の弟っていうほうが近い関係の気がするんだよね。

「荷物は詰めたか？」

「うん。けっこうぱんぱんになっちゃった」

「着替えなどの軽いものを下へ、重いものは上にしたほうが楽に運べる。それと、服は数枚重ね着しておくんだ。この先は低地よりも

冷える。暑ければ脱げばいいから』

これから行く道は、岩と傾斜がひどくて馬車が使えない。仕方なく、それまで馬車に積んでいた荷物からぎりぎりのものを選んで、残りは宿に置いてゆくことになった。

夜中なのに、宿の女将さんと調理師長さんの、ウルマさんご夫婦が見送ってくれる。

『お気をつけて、行ってらっしゃいまし』

『行ってきます』

手を振って、元気に出て行く。わたしと真紀は、いつもの肩掛け鞆のほかに自分の着替えや水、身の回りの小物の入った小さなリュックを背負った。

タクとルイスは、自分の荷物以外に全員の食料やテント用具の入った荷物を持つていく。背負子（しよいこ）と呼ばれる木製の背当のついた台の上に載せられた二つの荷物は、小さな壁くらいの迫力があつた。一番大きな背負子を軽々と担ぎ上げるタクに、ちよつと惚れ直してしまう。

普通聖地に巡礼する人はヒューガラナで荷物持ち兼ガイドを雇うことも多いらしいけど、ルイスは何度か来たことがあるみたいだし、ジャムたちもいるから四人だけで歩いていくことになった。

タクの言つたとおり、深夜の街は思つたよりも冷えている。マントのフードを被り、襟元をしっかり詰める。空が近いせいか、星たちがまるで目の前まで降りてきているような鮮やかさだ。月が出ていないから、さらに視界一面に星空が広がって見える。

魔法光を点したルイスが先頭、真紀、わたし、タクが続く。まだ街並みも途切れないころから道は徐々に上り坂になって、あまり体力のないわたしは少しずつ前の二人から離されていった。

足を緩め、真紀がふり返る。

「だいじょうぶ？」

『うん。まだ最初だもん』

「そだね。がんばろ」

コーラス部なのに運動部並みの筋トレをしていたという真紀は、
すごく軽快に歩いている。前を行くルイスと目を合わせないのが気
になるけど、他はいたって普通どおりだ。

出発する前、アマラさんとの間にあつたことは聞いていた。真紀
はなるべく気にしないようにしているみたいだけど、なんだか痛々
しい。だけど、アマラさんの言動はただの嫉妬ってわけでもなさそ
うだし、気にしたところでどうしようもないから余計に励ましよう
がなかった。

さすがのルイスも真紀の様子がおかしいことに気付いて、アマラ
さんとも揉めたらしい（周りの状況から感じたことだけ）。それ
でも、真紀に直接訊くことまではできないようだ。

考えてみれば、真紀の態度も不自然だ。ルイスのことが好きじゃ
ないというわりに気にしすぎている気がする。わたしからすれば、
あれだけ気の許せる相手ってことは充分恋愛の範疇なのに、真紀的
には、

「保護者ってゆーか飼いまつてゆーか、そんな感じだよ」

『お兄さんとかでもないの？』

「うちの兄あんなにやさしくないし。兄弟でそんなべたべたしない
よ？」

べたべたしてる自覚はあるわけだ。なのに、どうしてそれが恋愛
モードに突入しないのか、わたしは不思議でしようがない。

二、三時間ほど歩いたところで、一度休憩をとった。すっかり街
は抜けて、黒々とした夜の闇がごつごつした大地と空の境目を曖昧
にしている。

道から少し入った岩陰に座り、ブッセージュ茶と干したアジュの
実をもらった。両方とも疲れに効くのだとは、ルイスの説明だ。

『三十分ほど休もう』

歩くのを止めた途端、汗が冷えて急激に寒さを感じる。リュック
から毛布を出し、真紀と二人で蓑虫みたいに体をぐるぐる巻きにし
た。

わたしがちまちまとアジユの実を食べている隣で、さつさと間食を済ませた真紀は、わたしの買った絵本を広げている。

「せ……ころ……んと？ るーあ」

魔法の指環の威力はすごい。本人が言葉だと認識してないものは？音？にしか聞こえないのだ。意味の通じない歌詞みたいな感じだ。本人が意味を理解して発すると、それが正しい言語として聞こえる。外国語だと思って聞いていた歌が実は日本語だったと知ったときのような、あの感覚に近い。もちろん、発音の上手い下手はある。

どういう仕組みなんだろう？

左手の人差し指の紅い指環に目を落とす。最初は指環をずっと嵌めておくなんて慣れなくて、失くさないか心配だったけど、わりともう平気だ。

「るーあ……どれだろ」

『これじゃない？ ？月（ルーア）？』

横から覗きこみ、ヘクターさんの授業ノートを指差す。本当はルイスがタクに読んでもらえば早いんだけど、教えてもらう知識だけじゃなくて、自分たちでちゃんと確かめたかった。結果、二人で頭をつき合わせて解読作業ってわけ。

絵本だけに文字数も少なく、今もっている？異界の乙女？以上の知識が得られるとは思わないけど、ただ詰め込むだけの情報とは違うと思うから。

「月……より、来る……乙女。って、かぐや姫だよね？」

『わたしたち月から来たわけじゃないでしょ。絶世の美女でもないし、無理難題も出さないし』

「むしろ無理難題出されてるほうだからねえ。あー、ユリアさんって一体何者なんだろ」

ちよつと離れた別の岩陰にいるルイスとタクを気にして小声になりつつも、わたしたちはぼそぼそ話し合った。

前の異界の乙女に関して、今のところ分かっていることはこうだ。

1. 百五十年前の月の合のときに、突然現われた。

2・名前はユリア。黒髪黒目の若い女性（しかも美人）だったらしい。

3・二人の騎士と一緒に聖地に行き、無事水門を見つけて雨を降らせた。

4・その後、突然姿を消した。

元の世界に帰ったという説と、亡くなった（その身を引き換えに雨を降らせた）という二つの説がある。

以上。

「おおざっぱすぎだよなー」

「伝説なんてそんなものなんじゃない？　ユリアって名前、やっぱり外国の人だったのかな？」

「でも黒髪黒目でしょ。日本人だって、いろんな名前つけるじゃん。麻理亜とか。まあ、日本人限定つても変な話だけど。そもそも、うちらだって何がどうなつて来たのかも分からんし」

「そうだよねえ」

真紀は家のドアを開けた瞬間に眩暈がして、気が付いたらルイスの家の庭にいたのだという。わたしは道を歩いていて、角を曲がった瞬間に荒野にいた。

あのフラッシュのような強烈な光は見てないのかと聞くと、それはなかったらしい。じゃあ、あの光は一体何だったんだろう。

わたしと真紀は、違う方法で来たのかな……。

別々の場所に現われたのだから、来る手段も違っていたのかもしれないと漠然と思う。ユリアさんの現われた場所ははっきり書いてないけど、もし会えたら、わたしとはまた別の話が聞けたのかもしれない。

解読した内容をメモろうと、リュックの中のペンケースを探る。ぎゅぎゅぎゅに詰め込んだ荷物から筒型の布製ケースを引っ張り出すと、一緒に小さな布袋が転がり出てきた。

五百円玉くらいのころんとした小さな巾着袋は、肌身守り。わたしがお守りを集めるきっかけになった、最初のお守りだ。手作りっ

ばいピンクの花柄の布も、だいぶ色あせてしまってる。

「辛いことがあっても、絶対理緒子なら乗り越えられるよ」

その言葉と一緒に幼い頃にもらったこのお守りは、一番辛いときの心の支えになってくれたものでもある。鞆を返してもらったときも、内ポケットの奥にしまいこんでいたそれを見つけて、本当に安心した。失くしたらいけないので、荷物の底にそつと詰めなおす。

「ふーん。ニグルって？黒？っていう意味だけじゃなくて？暗い？っていう意味もあるんだね。ただ単に黒髪黒目って考えるんじゃない、違うのかもしれないなあ」

『そこ重要？』

「うーん……てゆーか、こつちの人って妙に黒髪黒目にこだわるじゃない。都合のいいように書かれてる可能性もあるし」

『それはあるとは思うけど』

「それに、こつちの人って黒髪っていつても、なんか色が入ってるでしょ？もしユリアさんが異世界の人じゃなくて実はこの人だとしたら、そのへんぼかされてるかもしれないし」

『わたしたちと同じところから来たんじゃないと思うの？』

「まったく別の世界から来たっていう可能性だってあるんだよ？

あたしたちの世界からこつちへ来る方法があるなら、他の世界と繋がってるってこともあるはずだし」

真紀は発想が豊かだ。わたしには考えもつかなかった可能性を突いてくる。

メモる手を止めて考え込んでいたら、真紀がぶに、と指で頬をつついてきた。

「ほーら、眉間に皺寄ってる。かわいい顔台無し」

『いろいろ振ったの真紀ちゃんにくせにい』

「あたしは可能性を挙げてるだけ。いろいろ情報集めて、できるだけのこと考えておいたら、水門も探しやすいなるかもしれないですよ？」

『探しやすいなる？』

「うん。いろいろ見る限り、全部の鍵は水門だと思うんだ。聖地に行ったときに、鍵になる情報を持っておくのとおかないのと同じ、全然違うからね」

に、と力強く笑って、真紀が絵本をぱたりと閉じる。こういうときは本当イイ顔してる。アマラさんのことで悩んでいたのが嘘みただい。

わたしも笑い返して、ペンをしまっ。

『うん。じゃあ、早く聖地に着かなきゃね』

「？異界の乙女？のオシゴトは、着かなきゃ始まんないからね」

真紀が冗談めかす。一緒になって笑いながら、わたしはふと不安に駆られた。

だけどねえ……大事なことがひとつあるんだよね。

真紀にさえ、きちんとは言っていないこと。

わたし、とつくに？乙女？じゃないんだよね……。

このことをタクが知ったら、一体どんな顔をするんだろう？知られたら、絶対に軽蔑されそうだ。だけど、もし？そのことが水門を見つける鍵のひとつだとしたら。

左手の指環をそつと抜きとり、足元に置く。唾を飲み込み、口を開いた。

「あのね、真紀ちゃん。わたし」

17 - 8 (後書き)

17章終わりです。次はタクの出番。

* 2011/6/9 改稿。時間の単位をなくしました。すみません。
。

第18章 荒野 タクの願い（前書き）

【注】 2011/6/23全面改稿しました。

第18章 荒野 タクの願い

1

ヒューガラナからタキアチファへ至る道はたやすいものではないが、荒れ果てた大地に生まれ育った俺にとっては、さほど苦になるものではなかった。旅の同行者に女性二人がいるため荷物が多くなるのは仕方もないことで、それでも多く見積もって往復六日の野営道具一式は背負子ひとつで済む分量だ。

背負子の荷物のほかに使い慣れた長剣を腰に佩き、フード付きのマント、ブーツ。天都で支給された旅装は、あれだけ短い準備期間だったにも関わらず、ぴったりと俺に馴染んでいた。

問題は、荷が大きいことで動きが制限されることだ。タクダと呼ばれる荒野に向いた四足動物を荷馬として連れて行くことも検討されたが、二名の保護対象者に対して護衛も二名。荷馬に裂く人員はなく、その提案は却下された。

「どのみち先発隊も後続隊もいることだ。誰か補助者を頼んでも構わないように思うが？」

「？乙女？の同行者は二名だと、頭の固い神官たちが譲らないのさ」俺の疑問に肩をすくめ、そうルイスが答える。

「聖地に着く人数が多いと、機嫌を損ねて水門が姿を現わさぬとも思っているのだからよ。？乙女？が二人現われた時点で前例は覆されているだろうにな」

水門の所在をめくり、長年神官たちと論議を重ねているせいから、彼の伝説に対する見方は辛辣だ。

伝説どおり異界から渡り人が来るなどと思ってもみなかった百五十年前、異界の乙女はたった二人の騎士と共に聖地を訪れ、水門を開放した。だが今は、王の承認も得た総勢三十名ほどの協力の下、聖地への旅が見守られている。

不穏な動きもある中でそれは非常に心強いが、しかし一昨夜のように対応しきれない事態が起こるのが現実だ。ナアカからちらつくあの男の動きも気になる。

思いを巡らす俺に、ルイスが冷たく釘を刺した。

「タキトウス。前のように一人で突っ走ったら、次は殴るだけでは済まないと思え」

「……分かってる」

ナアカを発つ直前、ジャムから行路上に襲撃者が潜伏していることを知らされた俺は、「態勢を整え、人数を集めて迎え撃つほうがいいのではないか」というルイスの意見を押し切り、先発隊を囿に仕立てて誘き寄せざるほうを選んだ。

結果、戦力を分散させた形となった俺たちは、それぞれに襲撃を受け、守るべき少女たちを必要以上の恐怖に晒してしまったのだ。

襲撃者を一組しか確認していなかったなど、言い訳にもならない彼女たちを狙うのは、あのフージェ・ハラン一族。狡猾な彼らが、功を競わせるために複数に依頼することは予測できたというのに。あとでルイスが腹に拳を一発入れる程度で済ませてくれたのは、軽すぎるほどだ。

万が一に備え、ルイスとの連絡手段は打ち合わせていたが、綱を切られ現われたコマを見たときの俺の驚愕は、言葉などでは表わし尽くせないものだった。

身も凍る恐怖　おのれの体の一部をもぎ取られたような感覚と
いうのは、あのような気持ちと言っただろうか。

同じ過ちは二度とくり返さないと決めたはずなのに……。

拳になりきらぬ、いびつな右手に力が籠もる。

この傷が作られた二年前の戦闘で、俺は守るべき人を喪った。

二度と喪ってはならない。

その想いが、俺をすべてに臆病にさせていた。

二年前、十九の俺はイエド憲兵隊に所属していた。東の都と称さ

れるイエドでの勤務は誇るべきものだが、所詮は辺境の荒野。主な実務はイエド外周の警邏で、コマに乗って見回りをし、小さな揉め事が起こるたびに駆けつける仕事は、華やかさとは程遠いものだった。

それでも、イエドよりさらに荒れたムシヤズ領主の三男という立場には、そんな仕事でもありがたい。城で仕官する二人の兄とは比べものにならない地味な身分ながら、俺はその仕事に誇りを持っていた。

それが起こったのは、始季の終わりのいつにも増して蒸し暑い夕刻のことだった。俺は同僚と共に、いつものように見回りに出掛けた。

イエドの市街から遠く外れた小さな村。すぐ傍にムシヤズとの境界となる荒れ果てた荒野が広がるその場所で、俺たちはターバンを被った男たちが足早に通り過ぎるのを目にした。

「あれは……」

「やめとけ、タキトウス」

同僚が俺の動きを察して制す。

「だが、あの身のこなし……あいつらはただの村人じゃない。それに抱えていたあれは――」

「だから、止せと言っただ。あいつらが見たままの人数だと思っただか？ 絶対にデカイ奴らが近くに潜んでるさ。俺たち二人じゃ、手も足も出ねえよ。戻って上官に報告すればいい。俺たちの仕事はそこまでだ」

このところ郊外で、追いはぎや盗賊たちの横行が盛んなことは知っていた。それが徒党を集めて組織化し、憲兵程度では太刀打ちできない相手となっていることも。

そして、それを討伐するための話し合いが遅々として進んでいないことも。

くそっ。

湧きあがる苛立ちに奥歯を噛みしめる。俺の目には間近に迫る夕

闇ではなく、身を隠すようにして建物の陰へと消えた男たちの抱えていた、幼い子どもの姿だけが焼きついていていた。

なにかに突き動かされるように、コマの拍車を駆る。

「レジー。悪いが、隊長に報告を頼む。俺はあいつらの後を追う」
「待て、タキトウス！」

同僚の制止を振り切り、俺は彼らの後を追った。そして一軒のあばら家の前で、やつらの手から逃れようと走る、小さな人影と出くわしたのだ。迷うことなく、その体をコマの上へと掬いあげる。

クイ族の白い雷紋が浮かぶ衣服に包まれた、細く骨ばった体。両腕はロープできつく縛られ、短い黒髪に縁取られた顔は蒼ざめ、おびえきっていた。

「君を助けに来た。俺の名はタキトウス。君は？」

「……ロニ」

「ロニ、君は俺が守る。君をもう一度、父さんと母さんに会わせるよ」

思いつきにも似た、だが本気の約束。しかしそれは、数刻ののち、あつけないほど簡単に破られた。

「わあああああつ！！」

夜空を引き裂くほどに叫んだのは、俺自身だ。

二つの満月が、白々と荒野を照らす夜だった。

三つめの月、ミイカが空に現われる頃、俺はすべての運命が狂ったことを知った。

赤い月　赤に染めあげられた大地。

月の三神は、運命の女神たちだという。

その夜、女神たちは一人の小さな命を召し上げ、俺の運命を地獄へと突き落とした。

なぜ、今頃こんなことを……。

俺は聖地への道を進みながら、脳裏にまざまざと甦る過去の出来事を打ち払うように、一瞬固く両眼を閉じた。

足を止め、背中荷物に担ぎ直す。足音が途絶えたのに気づいたのか、前を行くりオコがふり返った。笑いかけると、安心したように笑顔を返してくる。ぎこちなく石の道を登る彼女を追い、俺もまた、ゆっくりと歩みを再開させた。

あの夜の光景を忘れたことはない。右手の傷が治り、日常に戻れるようになって、つねにそれは胸の奥にしこりとなってわだかまり続けていた。

それでも、そのすべてを辿るように鮮明に思い起こしたのは、悪夢に魘されなくなったここ最近では、本当に久しぶりのことだった。始祖神イシエンナとイシユナムの眠る聖地へと赴く気持ちこそさせるのか。それとも、この星夜と荒れた岩山の寂しい光景が、脳裏の奥の記憶を刺激するのか。

すべては巡り合わせというが……本当に不思議なものだ。

ロニを喪ったあの荒野で、異界の乙女たる少女に出逢ったことも。そして今、その少女らと共に旅をしているということも。

これらすべてが運命の歯車のひとつだというのなら、人生とはなんと残酷なものだろうと思う。

俺の心が、また過去を彷徨う。

あるときクイ族の子・ロニを連れて逃げた俺は、荒野に誘い込まれ、最終的に一個小隊ほどの盗賊たちを相手取ることになった。同僚の危惧したとおり、やつらは東方最大の盗賊団「紅連鬼（ぐれんき）」の一味だったのだ。

弓矢と剣戟の鳴り響く中、俺は夢中で戦いつづけ ふと振り返った俺の目に、隠れていたはずのロニが、折れた剣の刃を受けて倒れる姿が飛び込んできた。

俺の口から絶叫が迸る。俺は手のひらが裂けるのも構わずに、素手でその刃を掴んで引き抜いた。背後に迫る、いくつもの盗賊たちの影。

雲間に隠れた二つの月を追いかけ、最後の月が地平から真紅の顔

を覗かせたその時、俺は、これまで知ることもなかった俺自身の深い闇の中へと堕ち込んでいった。

その先のことは、ほとんど記憶にない。気がつくと俺は一人荒野を彷徨い、ガウルを連れた男に助けられて生き延びていた。生き延びてしまったのだ。

同僚の知らせを聞いて駆けつけたイエド騎兵隊によると、荒野に倒れていた盗賊の数は二十七。逃げ出して捕えられたものが十八だという。

その地に広がる光景の凄まじさに、まるで死と戦いの神ヴォードの神風が吹き荒れたようだとクイ族の長老が語ったことから、俺は？風神？の異名を呼ばれるようになった。

なにが？神？なものか。

たったひとりの命さえ守れなかった俺には、賞賛の声すら罪を糾弾しているように思えてならない。周囲から称えられれば称えられるほどに、俺の闇は深くなっていた。

右手を負傷し、憲兵としての職も気力も、すべてを失ったその俺に声をかけてきたのは、イエド城主ミア・ヴェール・アルマン王子その人だった。

「俺に仕える」

近衛に引き立て、さらに將軍の号を与えるという申し出に、俺は戸惑いを隠せなかった。

あの夜の出来事を包み隠さず打ち明け、固辞しようとする俺に、王子はむしろ淡々と言葉を続ける。

「これは、おまえのためではない。長年手をこまねいていた盗賊団をたった一人で討伐した者に対し、何の褒章も榮譽も与えぬでは俺の名が墮ちる。イエドのためだ。拝命しろ」

「ですが、私には過分にすぎます」

「どのような理由であれ、おまえの成したことは事実だ。鬼退治をした風神の申し子が城にいるとなれば、魔除けくらいにはなるう？それに、俺はおまえに守られてやるつもりなどないぞ。代わりに

おまえは、俺に剣を教える。どのみちその傷では、おまえも一から修行をやり直さねばならぬのだろう？」

十三とは思えぬ風格を漂わせ、緑の瞳を細めて王子が笑う。

「俺に仕える、タキトウス・アルディ・ムシャザ。おまえは俺の傍で、おまえ自身が真に守るべきものを探すがいい」

そうしてその言葉通り俺は近衛となり、二年後の満月の夜、一人の少女と出逢ったのだ。ふたたび守るべき存在に。

赤い幻月ミイカ。淡いヴェールをまとった月の末姫は、素顔を見た者に来るべき未来を教えてくださいという。

あの日、真紅の月に照らし出された先には、血と闇に彩られた絶望しか広がっていなかった。

だが今は。

すべてはここに繋がっていたというのか……ミイカよ。

あの夜の未来が、彼女に巡り合うための道であったというのならば。

ミイカよ。この醜く歪んだ俺の手に、今度こそ守るべき未来を

掴ませてくれ。

18-2(前書き)

【注】 2011/6/23全面改稿しました。

信仰心がまったくないわけではないが、異界の乙女という存在にとりたてて関心があるわけではなかった。神官ならいざ知らず、騎士の家系に生まれた俺は、神に精神的な拠り所を求めこそすれ、実益を求めることに否定的でもあった。

たしかに、世界の渇きは深刻だった。もともと豊かではないイエド近在はさらに荒れ、水をあまり必要としないコメイをはじめとした作物も多く枯れて、たびたび城の備蓄を開放しても追いつかないほどだった。最南のアウスマや離国トウーサでは、餓死者も出たと聞く。

伝説の三月の合に願をかけ、篝火の焚かれた神殿で読経が響く中、俺は騒ぎから逃れるようにコマを連れて荒野に出た。

策謀の渦巻く宮廷にあつて、誤解を招くほど飾り気のない王子に仕えるのはさほど苦ではないが、城勤めはやはり窮屈だった。自身を戒めるためにも、俺はあの荒野に出掛けるのが日課になっていた。

一人コマを走らせ、岩と砂の広がる大地にたどり着く。ひとつに重なった月の浮かぶ空はやけに昏く、かつて血と叫び声で満たされた大地は静まりかえっていた。

かすかに声が聞こえる。俺はそちらへコマの首を向け、荒野にたえずむ人影を見つけた。

「誰だ？」

迷い子かと思って尋ねると、その人影はいきなりふらりと地面に倒れた。コマを降り、腕に抱き起こす。

これは……。

俺の胸を不思議な想いがよぎる。

最初は子どもかと思っていた。髪も結っておらず、小柄で、服は足が見える短さ。だが、違った。

若い女性。やわらかく、それでいて芯の通った体は、吸い付くようなしなやかさだ。咲きはじめの花のような甘い香りは、彼女自身から匂うのだろうか。

重なり合っていた月が離れ、ゆっくりと辺りに光が戻る。明るい満月に照らされたその肌は白く、やわらかそうな茶色の髪が頬にかかっている。

俺は指先でその髪をそつと脇へ避け、息を確かめた。彼女の様子を確かめるといふよりも、これが現実のものであることを確認したかった。

あたたかい。

薄桃色の唇に触れ、はつと指を引つ込める。指先に走る熱が、彼女の吐息なのか自分の体温なのか分からなかった。

本当に現実なのか……？

辺りを見回すが、乾ききった地面にコマや車輪の跡はなく、彼女自身の足跡も数歩先で途切れていた。持ち物らしきものも見当たらない。気を失ったままの彼女を腕に抱いて、俺は城へと戻った。

彼女が異界の乙女ではないかと思いはじめたのは、城の客室に寝かせたあとのことだ。俺が女性を連れ帰ったと知り、部下や女官たちは最初下世話な想像をしたようだが、彼女を見た途端、皆一様に凍りついたようになった。

肉体の造形は、俺たちと同じ。だがその顔立ち、肌、髪の色や服装は、明らかに異質だった。

「隊長、この方はまさか……」

「俺にも何とも言えん。たった一人で荒野にいたのだ。まさか盗賊の一味とも思えぬし、な」

「冗談言わないで下さいよ、隊長。こんなかわいらしい盗賊がいてたまるもんですか。それに、どちらかかっていうと」

部下のハーゲン・クルスが言いかけ、声を途切らせる。彼の視線

を追い、俺も唇を引き締めた。

まだ目覚めぬ少女の閉じた瞼から、ひとすじの光るものが流れ落ちたのだ。聞きなれない言葉が洩れる。誰かを呼んでいるようだ。

親か……兄弟か。

エイドスの明かりの下で見る顔は、思いの他あどけなく、穢れを知らぬ幼子のようでもあった。

「ハーゲン、この数日内に行方不明となった女性の情報を集めてくれ。年は十二才から十八才程度。イエドに限らず、周辺都市もあたって欲しい」

「はっ！」

「それから誰か別の者に命じ、彼女の居た辺りの搜索をしてくれ。身元に繋がる何かがあるかもしれない」

「了解です」

「女官長、信頼のおける侍女を一人貸してくれ。できるだけ口の堅いものがいい」

「シエナがよいでしょう。早速呼びます」

「ああ。その後で医師の手配も頼む」

「かしこまりました」

女官長とクルスが一礼して退ったのを確かめると、俺はもつとも話を聞きたい相手呼び出した。

「ジャム」

「はいよ、大将」

気軽に返事をして、窓辺にすとりと影が立つ。特異な素性と能力を持つ彼は、一人になりたいと言わない限り、必ず俺の傍にいた。

「中に入れ。ある人を視てほしい」

「まったく、オレに千里眼はないって言ってるだろうによー」

文句を言いつつも、ジャムは音もなく窓を開け、部屋にやってきた。燃えるような赤髪と金色の双眼をもったこの男は、実はあの「紅連鬼」の首魁（リーダー）だった男だ。

ひよんななりゆきから身元を引き受けることになった彼は、それ

以来、陰ながら俺の手助けをしてきている。彼の存在は、城の中でもほとんど知る者はいない。

稀有な黄金の瞳が、ベッドで眠る少女を一瞥した。

「へえ……これが例の」

「まだ決まったわけじゃない」

「決まりだと思っぜ？ 大将」

にやり、と意味深な微笑を口唇に含ませ、異能の男が告げる。

「オレにそれが訊きたかつたんだろ？」

「おまえ今、自分に千里眼はないと言ったばかりだろう」

「千里眼はないね。けど、さすがにあれは分かったさ」

「あれ？」

「？異界の扉？」

「な……！」

咄嗟に俺は、あげそうになつた声を抑えた。

「まさか、視えたのか？」

「視えたっつー範疇には入んねえな、あれは。なんつーか……荒野の一箇所になにかが流れ込んだっつーか、変わったっつーか。初めての感覚だつたぞ。まともに魔法士の訓練を受けてないオレでも、肌がざわざわしやがつた。ま、すぐに消えたけどな」

「やはり彼女は異界から……？」

「今までにない何か起きたかもしれない場所で、大将はこんな格好した子を拾つたんだろ？ で、今日は三月の合の夜。となりや、答えはひとつつきやねーだろ」

「あまりに符合しすぎではないか？」

「ま、どっかの馬鹿魔法士が、なにかやらかしたとも考えられなくもないけどな」

乱暴な口調で冗談めかすが、ジヤムの顔は真剣だつた。

「そもそも？ 予言？ なんてものが怪しすぎるんだよ。異界の扉が開いて、そこから渡り人とやらが来たとして、それがこの世界を救ってくれるなんざ、オレは信じちやいねえしな」

それは俺も同じ気持ちだ。世界の危機を救う聖女の存在は心の支えとなるだろうが、だからといって、それを信じきって運命を任せてしまうのは賛成できない。

第一、本当に神に人を救う意志があるならば、あときロニの命を奪うことや、多くの子どもたちを盗賊団の犠牲にすることを止めるべきだったではないかと俺は思う。

渴きは、すべてのものに等しく降りかかる災厄だ。しかし、そこに飢える者と飢えない者の差異が現われるのは、人の社会のあり方の問題なのだ。

特異な外見と能力を持って生まれたジャムは、その底辺にいた男でもある。苦い声が続ける。

「この世界は循環してる。いつかどこかで必ず雨は降るだろうさ。だけど、それは人の祈りや神さまが引き起こすんじゃない。降るべくして降るもんだ。」

異界は、この世界が在るように、どこかには在るだろうよ。どんなところかは知らねえが、オレたちと似た人も住んでいるだろうさ。けど……自分の意志で来たのでなけりゃ、オレたちただの人攫いだぜ」

一気に言うと、ジャムは右頬に大きな傷のある顔を、なんとも言えぬ表情に歪めた。

一番気にかかっていたことを彼に尋ねる。

「彼女は、人なのか？」

「人だ。魔法力はほとんどねえな」

強力な精霊加護者（マーレイン）の断言に、俺は大きく息を吐いて、手で顔を覆った。彼女が人であることを哀しみたいのか喜びたいのか。迷いを払うように髪に指を通す。

「彼女は今なにを……？」

「おいおい、大将。女の子の心を覗こうなんざ、紳士とは言えねえぜ？」

「ふざけるな。必要なことだ」

「泣いてる女の子の心を読むことが、か？」

鋭くジャムに睨まれ、俺は涙の跡の残る寝顔から一瞬目を外した。その目尻には、まだ銀色に光るものが滲んでいる。

「……大きな木造の家と老婆。三十代くらいの男女……たぶん家族だな。それにお香だ」

「お香？」

「神殿で焚くやつに似てたが、あとは知らねえ。もう訊くな。これ以上は、頼まれても読まねえぞ」

「すまん。無理を言ったな」

言動はがさつで見た目もいかつい男だが、女性と子どもに対しては俺以上に弱いのだ。初めて逢った二年前のあのとき、ロニの死に俺以上に憤りをみせた男だ。

黙って肩をすくめ、ジャムが立ち去ろうとする。

「ジャム、もうひとつ頼まれてくれないか。送心術の出来る女性魔法士を連れてきて欲しい」

「フージャイの監視班にそんなのがいると聞いたが……オレが動いていいのか？」

「構わない。隠密ではあるが、面倒なら王子の名を出せ。出来るだけ早いほうがいい」

「あの生意気なチビ王子に話すのか？ それこそ面倒なことになるぞ」

「話さないわけにはいかないだろう。それに、どのみち城に連れてきてしまった以上、耳に入らないはずがない。王子もマーレインだ」

「ち、とジャムが舌打ちをする。

「大ごとになるな。あんたも……その子も」

「守るさ」

「今度こそ、必ず。」

告げなかった言葉は、赤い髪を持つ男には、だが伝わったようだった。

18-3(前書き)

【注】 2011/6/23全面改稿しました。

生粋のブーシエの一族である俺の家族は、長兄はイエド騎兵隊の連隊長、次兄はその参謀として確固たる地位を築き、一線からすでに身を退いた父も現在の軍総大将である叔父とともに北方の平定に活躍した？戦神？の異名をもつ猛者（もさ）であった。

その環境にあつて、俺もまた物心つく前から、剣に限らずありとあらゆる武術を叩き込まれていた。その際に言われたのが、

「おまえは、ひとを守る劔（つるぎ）たれ」

という言葉だ。おのれの剣と力は、弱きものを守るためにこそあるべきだというその教えは、ことあるごとに刷り込まれ　？守る？という意味すら漠然としたまま、俺は守るべきなにかを探すように訓練と仕事に打ち込んでいた。

あの夜、リオコに出逢うまでは。

彼女が目覚めたと女官のシエナから知らされ、俺は部屋に向かった。ベッドの上で半身を起した彼女は毛布で体をくるみ、脅えたように片隅に身を引いている。まだ目の縁に残る涙。

「気分はどうだ？」

声をかけたのが失敗だったか、彼女はさらに身を縮こませた。

自分が若い女性や子どもに安心感を与える外見ではないことを自覚している俺は、黙って水を差し出す。が、首を振って断られた。

さて、どうやって接したのか。

ジャムに頼んだ、送心術を使える魔法士はまだ到着していない。他人の心を読む彼をこちらに置いておくべきだったかと、いささか後悔の念がよぎった。

そのとき、彼女がはじめて声を発した。細く不安げな、だが甘さ

を感じる声。

「xxxxx?」

尋ねるように、何度かベッドを指差す。

「ここはイエドだ。東の都、イエドの城だ。君はイエドの傍のムシヤザの平原にいた。……君の名前は?」

分からないのか、首をまた横に振る。

「俺の名前はタキトウスだ。タキトウス」

「たき……とす?」

つたない呼び方。思わず、笑みが洩れた。短いほうがいいかと言
い直す。

「タク」

「たく?」

俺の名が甘く響く。名前を呼ばれて嬉しいと思うなど、子どもの頃以来だ。

彼女が、自分の胸を指で示す。

「りおこ。たかとうりおこ」

「リヨーコ?」

上手く発音が出来ないと、彼女はゆっくり音を区切って話
した。

「り・お・こ」

「リオコ」

そう呼ぶと、彼女 リオコは本当に嬉しそうに笑った。その場
が一瞬、明るくなったと感じたくらいに。その明かりは、俺の胸に
も確かになにかを灯した。

その明かりを消さないように、分からないと知りつつも、俺はこ
ちらの言葉でリオコに話しかけ続けた。

「心配するな」

君が泣いたり、沈んだ顔をしたりすると周りまで影が差してしま
う。まるで、月が雲に隠れるように。

なんとか彼女の笑顔を取り戻そうと、味方だと分かってもらおう

と 俺はリオコの右手を取り、騎士の礼を捧げた。白い花のような手の甲に唇をつけ、生涯で初めての言葉を口にする。

君に伝わらなくともいい。これは俺の、俺自身に対する誓約だ。

「俺は永遠に君を守ると、君に誓う」

「これが、おまえの守るべき者か？」

リオコと対面した場で、アルマン王子はそう俺に訊いてきた。俺が荒野で彼女を拾い、保護の一切を手配したことはすでに連絡済みだ。

？永久の緑葉？と称される瞳が、興奮にきらきらと輝いている。

「なるほどな、確かに？異界の乙女？のようだ。よかるう。おまえに彼女の警護を任せる。これよりその娘は、私の客人だ。丁重に扱え」

「……は」

俺は、寛大ともいえる処遇に驚きつつも、頭を下げた。同時に厭な予感が胸中をよぎる。

年の初め、王が「異界の乙女を連れてきたものに王位を譲る」と公言し、宮廷を揺るがす騒ぎとなったことは聞いていた。

そのときは王子も特に関心を示したようではなかったが、

目の前に本物が現われると、こうも変わるものか……。

獲物を見つけたに似た表情でリオコを見つめる王子を、俺は重い気持ちで眺めた。王子はまっすぐな気性の分、思い込んだら引かぬ性格だ。

王子がおのれの益を優先させて、リオコの意志にそぐわぬことをしようとしたら、俺は一体どちらにつくべきなのだろうか。

この俺を受け入れてくれた王子には大恩がある。だが……リオコには他に護ってくれる存在がないのだ。

クルスに調べさせたが、失踪者の中に彼女に該当するような者は見当たらなかった。ジャムの断定もさることながら、その荷物、服、言葉、すべてが彼女をこの世界の人間ではないと証明していた。頑

迷な神殿さえ納得させるほどに。

送心術を使うラクエルを通して確認したところ、リオコがいたのは「カナガワケン」。そこに両親と三人で暮らしていたという。

ジャムの読んだ記憶の？老婆？ということと符合しないが、亡くなった人を思い出すことはよくあることだ。

まだ十六の一人娘を突然失い、家族はどれほど心を痛めていることだろう。

なんとしても、彼女を元いた世界に帰さねば……。

気がつく俺は、こちらの衣服に身を包み、シエナやラクエルに少しずつ信頼を寄せながらも、時折すぎるような顔で不安を見せる彼女を支えることに、すべての時間を注いでいた。

それでも、彼女が？異界の乙女？であることがはっきりすればするほど、平穏な環境からは遠ざかっていく。

「これより天都に向かうぞ。リオコを王にお披露目する」

「性急すぎませんか、王子。彼女は昨夜到着したばかりです。ほとんど食事も食べていない。もう少し時間を空けては……」

「時間などないのだ、タキトウス。アクイナスにも？渡り人？が現われた」

「まさか……」

「今すぐ王に接見し、リオコが本物の？異界の乙女？だと証し立ててやる。なに、こんな茶番などすぐに終わらせてくれるさ。あの荷物は今しばらく俺が預かるぞ。いいな？」

「……承知いたしました」

頷くしかなかった。彼女を守るといったところで、俺は所詮一介の騎士。王や王子の決定に逆らえるはずもない。

彼女を隠し切るべきだったのか……。

そんなことはできるはずもないと知りつつも、その考えが幾度も俺の胸を行き過ぎた。

リオコが異界に戻るためには、天都の魔法士や神殿の力が必要なのだ。彼女が？乙女？である以上、この世界における立場や身の安

全は保障される。

仕方のないことなのだとおのれに言い聞かせつつも、おとなしく俺たちの言うことに従うリオコを見ると胸が痛んだ。

しかし……アクイナスとは、リオコとどう関係があるのだろうか。もう一人の？渡り人？という存在が気にかかる。ジャムの言うように異界が実在するならば、それに繋がる扉が複数あっても不思議はないように思われた。

だが、政治的理由から？異界の乙女？を演出しているのであれば、不要な争いにリオコを巻き込むことになる。それが気がかりだった。西の地であるアクイナスは、イエドとは違い、緑深い山に囲まれた土地柄だ。その領主はもともとカヌシエの家系で、神殿と深い所縁のある血筋だという。優秀な魔法士を幾人も輩出したと聞くが、それが過去に？異界の乙女？の警護をして聖地に赴いた一人だったとは、今回初めて耳にしたことだった。

それより有名なのは、その跡継ぎとされる長子のことだ。生まれつきほとんど色を持たず、代わりのように持って生まれたマーレインの力はずば抜けて、最年少で天都魔法士団の最高峰「双月」の士団長になった男だ。

「　　ありゃ、オレでも手を出したくねえな」

一度遠目に彼を見たというジャムの感想がこれなのだから、その魔法力は推して知るべしだ。

「　　そんなにすごいのか？」

「　　恐ろしいくらいに非の打ち所がないのよ。魔法力の一部に特化された性質を持つのが普通だが、こいつはそれが？ない？んだ。まさに完璧だな。敵に回さないほうがいいぜえ、大将」

「　　心しておこう」

迷ったが、俺は王子に申し出て、ジャムを旅に同行させることにした。普段は表舞台を嫌う彼も、思うところがあつたのか、俺の部下に身をやつして天都に向かうことを了承した。

同時に王子の同行も決定し、浮き足立つ部下たちを押さえ込むよ

うに、俺は強引に人員を編成し、馬車を仕立てて旅の途についた。

救いは、渦中にあるリオコが進んでこの旅に協力してくれることだ。もちろん言葉も通じないし、状況をきちんと把握していないのだろうが、最初の反応から泣いて抵抗されるくらいは覚悟していた俺にとって、彼女の反応は意外でもあった。

俺の体調を気遣ったり、わがままといえれば御者台に乗りたいたいと言ったくらいで、無邪気に風景を見てあれはなんだと尋ねる程度。

本人は平凡な生まれだと言ったようだが、プライドばかりが高い貴族のお嬢様に比べて、よほどきちんと躡けられてきたのではないかと思う。王子の周りに群がる女性たちの扱いに辟易していた俺には、リオコのような女性は新鮮ですらあった。

野営のために馬車を停めたときも、みずからコマを連れて行くことし、クルスが慌てて止めに行っていた。

「ありがとうございます。ハーゲン」

たいした仕事でもないのに笑顔でそう言われて、やに下がっていたクルスの間抜け面ときたら、見るに耐えなかった。クルスだけではない、ほとんどの部下がリオコのやわらかな雰囲気には惹かれていた。

「ここは是非、王子の妃になっていたただかねば」

「神殿が承知せぬだろう。？異界の乙女？だぞ」

「ああ、残念だ。俺は王子よりも、リオコさまにお仕えるほうが百倍いいんだがな」

「まったくなあ。かわいらしいしお優しいし、そのうえいい香りはするし……」

「おまえたち」

問答無用で俺が部下たちを殴りつけたのは、当然の帰結というやつだろう。

『異界の乙女は彼女です』

アクイナスが連れてきたもう一人の渡り人は、公式の審問会とも

いえる王の御前での対面で、リオコとなにやら話した後、決然と言
い放った。

「いったい何故……」。

どちらかというの内気なりオコが、自分からそう主張するなど考
えにくい。これもアクイナスの策略かと反対の壁に立つ金髪の魔法
士を見れば、このうえない仏頂面を浮かべていた。

「……違うのか？」

アクイナスといえば？氷？と称されるほど冷徹で、敵味方とも容
赦ない男だと聞く。だが今見る限りでは、なりゆきが心配で仕方の
ない保護者にしか思えなかった。

俺が思いを巡らしている間に、とうとう二人の異界の乙女は、王
に保護と生活基盤を保證させてしまった。

「まったく……この先が思いやられる。」

突拍子もないマキというもう一人の乙女に、リオコが振り回され
なければいいかと憂鬱に考える。だが、これまでにない晴れやかな
笑顔と、その指に嵌まる魔法話の指環の存在に俺の頬も緩んだ。

これでようやく、きちんとした会話ができるのだ。魔法を介在し
て伝わってくる言葉は、少々耳に違和感があるものの、通じないも
どかしさに比べればましだった。

指環を嵌めたりオコは、言葉が通じることを確認すると、俺とラ
クエルに向かつて深々と頭を下げる。

「二人とも、これまで本当にいろいろとありがとう。これからも、
よろしく願います」

魔法を使って伝えたい最初の言葉がこれだということが、素直に
嬉しかった。ラクエルが半泣きのような笑顔になったが、感情が表
に出にくいだけで、俺も同じような気分だった。

「もちろん、お傍におります」

「ああ、これからもずっと俺たちがリオコを守る」

「俺が？と言いたいが、断言はできない。彼女の周りには、王に
王子に神殿。そしてアクイナスが関わる以上、魔法士も絡んでくる

からだ。

さらにあの対面の場に顔を連ねていた、多くのクガイの存在も無視できない。国の主幹部たる天都では当然とも言える光景だが、政権を巡る争いが根を張っているならば、あの場は彼らにとっても敵味方を見極める舞台であつたに違いない。

お披露目の夜宴に聖地への旅の支度と、一陣の疾風がすぎることなく慌しく物事が進んでいく中、俺は気の休まらない思いでリオコの傍にいた。

それにしても、なにが役に立つかわからんものだな。

不本意な栄誉と？将軍？の称号を得て良かったと思えたのは、これが初めてかもしれない。それがなければ、俺はリオコの傍に居続けることはできなかつただろうからだ。

アクイナスことルイセリオ・アクイナシア魔法士は、予想以上に接しやすい男で、彼の知己であるレスライン・カシユゲート「弧月」土団長やヤーマトウー口神官長なども、恐れていたように自己の利益を優先させる人たちではなかつた。

そのことには安堵を覚えたが、同時にプレッシャーも感じていた。そもそも、本来なら俺が逆立ちしても目通りの適わぬ人ばかりなのだ。

「これは驚いた。イエドの英雄に会えるなどは……」

「乙女の警護はこれで安心だな。任せたよ」

「しつかり頼みますよ」

口々にそう言われれば、緊張せざるを得ない。幸いクガイに目立つた動きはなかつたが、盲点は身近にあつた。アルマン王子だ。

異界の乙女が二人いるという異例の事態に、王位継承の件を一度白紙に戻そうとした王の処置が不満だつたのか、王子は単身マキに接触したのだ。

甘かつたな……。

王位に翻弄され続けてきた彼の鬱屈した想いを、軽く見すぎていた。

王子と話がしたいとマキが言い出さなかったら、彼はどれほどの処罰を受けることになっていただろうか。なにしろ王が認めた？異界の乙女？に危害を加えようとしたのだ。下手をしたらイエドの領地を召し上げられ、身分剥奪のうえ受牢を申し付かってもおかしくはない。

やはりクルスたちでは役に立たなかったか……。

一度に二つを守ることは出来ない。分かっていることながら、俺は万全の態勢を布くことの出来なかったおのれの不甲斐なさを恥じた。それなのに。

「俺は、おまえを決して裏切らない。ミア・ヴェール・アルマン・シド・マフォーラス・コーツァ・イエドとしてここに宣言する」

あの王子の心をマキが動かした……。

共にした朝食の席で、一皮も二皮も剥けたような穏やかな王子の顔を見ながら、俺は奇妙な感覚に襲われた。

ルイス、王子、そして俺自身。異界から来た二人の少女を取り巻くすべての環境が、怒涛のように滞っていたものを押し流し、未知のステージへ生まれ変わっていつているような　そんな気がしたのだ。

扉、か……。

彼女たちが開け放ったのは、世界を繋ぐ扉ではなく、俺たちの命運だ。

転がりはじめた玉がすぐには止まらぬように、この変化は波紋を広げていくだろう。それが一体なにを引き起こすのかは分からない。その激しい波の中で、俺はこのままりオコの傍に居ることができるのだろうか。

君を守るのは、俺であり続けたい。

その思いが？守る？ということから逸脱した感情だとは、俺はそのときまだ気付かなかった。

18-4(前書き)

【注】 2011/6/23 18章全面改稿しました。
すみません…元「18-3」の内容と同じです。

4

「……ク。タク」

ずっと過去の記憶に浸っていた俺は、名前を呼ばれ、はっと我に返った。

目の前でマキが下から覗き込み、ひらひらと手を振っている。

「タク、くろいよ?」

? 暗い?と言いたいのだろうか。つたないマフオーランド語で心配の声をかけてきた異界の少女に、俺は少々情けない気持ちで首を振った。

「いや、平気だ。心配をかけてすまない」

「へーき?」

何でもないので伝えたいが、いかんせんマーレインではない俺に送心術は使えない。感情表現が豊かなほうでもないので、身振りでもうまく伝えることができなかった。

悩んでいると、マキがにと笑って、自分の両頬を指先で押し上げる。

「タク、くろい。わらって!」

たしかに日に焼けた地肌は白いとは言えないが、なんとなく可笑しくて苦笑する。それを見てマキは満足そうに頷くと、背を返して小さな歩幅で先を歩きはじめた。

タキリアチファ、そして聖地アマグフォーラに辿り着く行路は、勾配が急な岩の道だ。体を鍛えていたというマキはわりと平気な顔をしているが、華奢なりオコには辛いらしく、弱音は吐かないものの徐々に歩みが遅れがちになっていた。

最初は道を知るルイスが先に立っていたが、魔法士でもある彼がリオコの近くにいた方がいいだろうと、今は最後尾を任せている。

ときおり彼に手をとられながら、懸命に階段状の岩を登る少女をしばしふり返り、俺は歩みを再開させた。

暑くなる前にできるだけ進もうと深夜に出発を決め、これまでに三度の休憩を挟んできたが、少し長めの休憩をとったほうがいいのかもしれない。暁闇の青さをかき消し、荒野に昇る白熱した光を仰ぎつつ、そんなことを考える。

先人が歩んだやや磨り減った岩ではなく、先の尖った大きめの石を踏みしめるように進むマキが、また俺をふり向いた。足を止め、左の拳を宙に突き出す。

「ひゅーがらな」

右拳をそのだいぶ上にかざして、

「あまぐふおーら。……わたし、どこ？」

「ここくらいかな」

両拳の空間の下から三分の一辺りを指差すと、マキは眉を八の字にして不満を示した。

「え〜。xxx」

言っている内容は分からないが、おそらく文句だろう。俺は笑って大股にマキに追いつくと、頭を一撫でして、荷物の後ろをぽんと叩いた。

「ほら、文句を言っていないで行くぞ。歩かないと着かない」

「タク、いじわる〜」

教えたばかりの言葉を使って、マキが睨む。どうしてもマフォーランド語の悪口を教えてくれとねだるのに負けてしまったのだ。女性は見ても言葉遣いも品良くあって欲しいのだが、それは男の勝手な願いなのだろうか。

「いじわるじゃない。早く聖地に着きたいだろうか？」

「つきたいだろうか？」

「そうだ。がんばれ」

「タク、がんばれ？」

「……俺は君に言ったんだが」

「言ったんだが？」

鸚鵡返しの言葉は、微妙に会話になっっているようでいて、相互理解には程遠い。またも考えこむ俺に、マキが首を傾げる。

「タク、くろい？」

どこまで俺を黒くすれば気が済むんだ。出会ったばかりの頃、リオコとも魔法話の指環なしで同じように会話をしていたはずだが、ラクエルの通訳があつたせいも、もっと意思の疎通が出来ていた気がする。

「困つたな。思ったより難しい……くそ」

「くそ？」

思わず洩れた俺の独り言を、すかさず聞きとがめる。また女性に悪い言葉を教えてしまった。

「今のは忘れる」

「わすれる？ ない。くそね。くーそー」

「くり返すな」

「くーそー」

分かつてやっているのかと思うほど、悪ガキのような笑顔を浮かべて、マキが道を駆け出す。

「待て、マキ！」

「やーだ。くーそー」

「マキ！」

どう怒つても逆効果のようだ。俺は心中でやれやれと頭を抱え、同時にしばらく見ていなかったマキの曇りない笑顔に安堵を感じた。リオコと違い、喜怒哀楽のはっきりしたマキは、この旅の全員の元気の源だ。ときどき突っ走りすぎるが周りの様子もよく見ていて、リオコを慰めたり、ときには俺も叱咤され、ずいぶんと助けられた。呆れるくらい前向きなマキの様子がおかしいと感じたのは、ヒューガラナの街に着いてからだ。最初はある襲撃のせいだろうと思っていたが、休養のためにスオウシャの姫と一緒に公衆浴場に行った後から、さらに口数が極端に減っていた。

「話を聞いたほうがいいんじゃないのか、ルイス」

前夜、思い余ってそう言い出した俺に、彼女を最初から保護してきた男は冷静に否定した。

「話があるなら彼女のほうからするよ」

「自分からは言いにくいこともあるだろう」

「マキは子どもじゃない。私たちに話して解決することなら、きちんと話すさ。まあ変な方向に考えていないとも限らないが……自分から話さない以上、無理に聞く気はないよ」

「自分に心当たりがあるとは思わないのか」

「あの夜は何もなかったと言っているだろう。無理を強いられたのはこちらのほうだというのに。忍耐がもってくれて良かったよ」

まったく。俺とリオコを二人きりにさせた後で、マキがルイスの部屋を訪ねたのは予想していたが、まさかあんな薄着でいるとは思ってもみなかった。ベッドに二人でいるのを見た時は、反射的に剣を抜いてしまうところだった。

ただでさえ王子からマキを頼むと言いつかっているというのに、守るべきものが？乙女？を穢してどうするということだ。彼が一時の衝動に負ける男だとは思わないが。

「女性が本気で弱っている時に付け入る気はないよ。君が部屋に来てくれて助かった」

状況が違えばどうなっていたか分からないような口振りでルイスは言い、朝よりは良くなった顔色で淡い金の髪をかきあげた。

「だが君に言われなくとも、マキの様子は私も気にはしていたよ。

心当たりも、ないでもない。アマラーリーヴァ」

廊下にいた、先発隊の一人である魔法士の女性に呼びかける。かつて彼と同じ「双月」に所属していたという彼女は、すでに旅装束に身を包んでいた。

「どうしたの？」

「君は、マキに何を言ったんだ？」

「突然なんの話？」

緩やかな弧を描いた蛾眉が、胡乱げにひそめられる。ルイスは眉ひとすじ動かさず、もう一度尋ねた。

「君と出掛けた後からマキの様子がおかしい。なぜだ？」

「女心は浮き沈みが激しいものよ。そつとしておいてあげなさい」

「アマラリーヴァ・ラクス・スオウシア。君はいつから私に命令できる立場になった？ 彼女たちに関する一切は、私に権限がある。話したまえ」

昼間見せていた親しさとはまるで違う態度に、姫の美しい顔が歪んだ。結んだ齒の隙間から、絞るように言葉が吐き出される。

「……あなたのせいだわ」

「なに？」

「あなたのせいだと言っているのよ、ルイセリオ。あなたがあの子を好きになったから」

元婚約者だという女性の言葉に俺はどきりとしたが、ルイスの表情は変わらない。いや、マキたち以外のことで彼の顔色が変わったのを見たことがなかった。

「私情で彼女の心をかき乱したと言うのか」

「自惚れないで！ あなたがあの子を好きになることなんて分かっていたわ。そういうことじゃない、いつまでもわたしに恋愛感情があるなんて思わないで」

「確かに、あの時も別れを切り出したのは君のほうだったな、アマラリーヴァ。ではなんだ？」

「私情でかき乱しているのはあなたのほうだというのよ、ルイセリオ。あなた、あの子をこちらに引き止めようとしてるわね？ 卑怯な男」

「……なにが言いたい」

「わたしの力を忘れた？ わたしは？ 視える？ のよ。あの子たちは、ここにはいけないの」

「アマラ、もう一度だけ訊く。マキになんて言った？」

「たいしたことじゃないわ。わたしたちの過去を少し話して、？ あ

あなたは嫌いだ？と言ってあげただけ」

その瞬間、俺が止める間もなくルイスが姫の両肩を掴んだ。突然の苦痛に悲鳴があがる。

「家族とも住んでいたところからも切り離され、命を狙われ、この国の勝手な命運を背負わされた十六の少女に、君はそんな言葉を吐いたのか」

「たいした思い入れね、「双月」土団長どの。だけど彼女は異界の人間よ。渡り人なの」

「だから」

「分かっていないのね。渡り人は、元いたところへ帰るからこそ？渡り人？なのよ」

大きくはない彼女の一言は、俺の胃の腑に鈍い衝撃をもたらした。元いたところへ帰る？　そうあるべきだと頭では分かっていたも、共に居るうち知らず知らずに目を背けていたその事実が、急に大きく目の前に横たわって感じた。

ルイスも同じだったに違いない。わずかに顔色を変える。

「だが伝説では」

「ええ、乙女の行方は分かっているわね。聖地でなにが起こるのかなんて、誰も予測がつかないことだわ。だけど、もし帰る道があった場合、あなたはあの子にどちらかの世界を選ぶように迫ることになるの。それができる？　あの子の心を二つに引き裂くことが」

肩を掴まれたままスオウシャの姫は、むしろ労わるように、ルイスの頬に手のひらを触れる。

「あなたが、あの子を好きになるのは分かった。あなたが本当に心許せる相手だということも。でも本気で大切に思うなら、あの子を突き放すべきだわ。向こうの世界へ未練なく帰れるように」

「アマラ、君は」

「？乙女？の真贋に関わらず、あの子たちを大切にしたいという気持ちは分からなくもないわ。もし帰るのだとしても、出来る限りのことをしてあげたいという態度も理解できる。だけど、あの子たち

はやさしすぎるわ。帰りたいたい気持ちとあなたたちの好意との間で板ばさみになるでしょう。いえ、もうなっているのかもしれないわね?」

姫の黒紅色の大きな瞳が、ちらりと俺を見た。

「あの子たちは若すぎる。家族のもとで暮らすことが幸せなのよ。ルイス、あなたにはなかなか難しい決断でしょうけど」

「……なにを視たんだ、アマラーヴァ。彼女たちの未来に」

俺の胸がどきりと跳ねた。スオウシヤの姫の千里眼は有名だが、未来視をもっていたのか。

未来視とは、文字通り未来を視る力だ。とはいえ具体的な内容ではなく、未来のある瞬間や切り取られたイメージであることが多い。当たる確率もまちまちだという。

「泣いていたのよ」

「泣いていた?」

「そう。見たこともない場所で、あの子たちは泣いていた。二人で抱き合って、どうしようもなく哀しそうに泣いていたわ。まるで

運命のすべてを恨むように」

息の詰まる言葉だった。ふら、とルイスが姫から手を離して後ろへ退る。

「……嘘だ」

「いいえ。わたしの未来視が外れないことは、あなたが良く知って
いるはずよ」

「姫。その場所というのは、聖地なのか?」

俺の問いに、スオウシヤの姫は未来を視る瞳をこちらへ向けた。淡い赤を含んだ双眸が翳る。

「分からないわ。わたしが知る限りでは、聖地にあんな場所はなかった。なにかの建物の中のような……あれが水門と言われれば、そうなのだろうと答えるしかないわね。それくらい、見たこともない不思議な空間だったわ。すべてが淡く輝いていて」

「他には?」

「ごめんなさい。未来視は制御できる力ではないの。その人を視て、飛び込んでくる映像の断片がすべて。わたしにこれ以上の力はないわ」

「いや……いいんだ。ありがとう」

「アマラ。では君は、彼女たちがこの世界に来たことを後悔するから、心を傷つけても構わないとも思ったと？」

「違うわ。この世界に決別する理由のひとつになればいいと思っただけ。あまり居心地がいいと、恨む気持ちも半減するでしょう？ 嫌いだと言ってやれば、反発する力も強くなるもの」

「まさかりオコにも？」

「失敗しちゃったけどね。なかなか根性が座ってるのね、あの子」

ひよいと肩をすくめて明るく言われれば、今さら責める気も起らない。

なるほど、リオコがいきなり厨房に立っていた理由がこれで少し見えた。

不快な想いをしていなければいいが……。

「悪女としてはあまり上手いほうではないな、スオウシヤの姫」

「あなたも騎士としてはなかなかだけど、男としてはいまひとつなのね。ムシヤザ將軍」

魔法士という男社会で生き抜いてきたせいかな、姫から毒のある言葉がさらりと洩れる。

「わざとかと思ったら、わりと無意識なんだもの。一瞬、彼女の応援に回ろうかと思っただわ」

「他は納得できないが、その言葉にだけは賛成だな」

「見解の相違ね。理解してもらえなくて残念だわ、ルイス」

「二度と彼女たちに変なことは吹き込むな」

「……与えられた仕事は果たす、とだけ約束しておくわ。じゃ、先に行くわね。土団長どの、ムシヤザ將軍」

スオウシヤの姫はにこりと笑うと、束ねた髪をひるがえして部屋を出て行った。

その後、姫の残した未来視の内容についてルイスと話すことはなかった。だが言わなくとも、お互い苦い薬を含んだようにそれが心にわだかまっていることは分かった。

運命のすべてを恨む、か……。

夜を洗い流すごとく急速に明ける、朝空に向かって歩く少女の後姿を目で追う。

そして、交錯する過去との思い出を封じ込めるように、俺は瞼を伏せた。

あのとき未来を知っていれば、俺はロニを助けようとはしなかっただろうか。

血塗られた過去。しかし、すでに過ぎ去った時間を変えることはできないのだ。

大地の稜線がくつきりと空から切り離され、ふたたびの朝がだが、確実に昨日とは違う朝が訪れる。

俺は足を止め、後ろから遅れてくる二人を待った。俺の姿に気づき、リオコが桃色に染まった顔をほころばせる。

いつか、この出逢いを後悔する日がくるのかもしれない。

俺に未来を視る力はない。見えるのは、今だけだ。

今、俺は君を守りたいと願う。それだけが唯一分かることだから。

「休憩にしないか。少し腹が減ってきた。朝食にしよう」

『じゃあ、わたしまたサンドイッチ作るね』

差し伸べられた小さな手をとる。出逢った最初から、そうであるように。

俺は、この手を振り払うことなどできない。

18-5(前書き)

【注】 2011/6/23 18章全面改稿しました。

異界の娘たちが聖地への旅に出立するにあたり、俺はヤーマトウ
ー口神官長に呼び出された。

「楽になさい、タキトウス・ムシャザ」

ひざまずき、拝礼をしようとする俺を、神官長が立つたまま制す。
俺は軽く頭を垂れ、部屋の入り口付近に控えた。

マキやりオコは気軽に名を呼んでいるが、神官長は太政大臣と並
ぶこの国の柱となる方だ。現在はそこまで神殿が隆盛を誇っている
わけではないが、過去には王よりも神官長が権力を持っていた時期
もあつたと聞く。

若干二十七歳の彼がその地位にあるということは、適任者が他に
いなかったというだけでなく、旧弊な老神官たちを御しこなせる技
量が備わっているという実証でもあるのだが、異界の娘たちにその
ことは詳しく告げていない。

これ以上の重圧は必要ないし、神殿側としても、個人として親し
みを持つてくれるほうが懐柔しやすいというものだ。もつとも、ま
さかマキに怒鳴られたり、勉強を教えたりする羽目になるうとは思
わなかっただろうが。

それでも、一人息子を抱える彼は、神官長という立場以外にも二
人に親しみを感じているようにも見受けられる。

俺は、威厳のある黒銀の髪を長く伸ばしたその男を、まっすぐに
見つめた。

「何の御用でしょうか、ヒジリ・アーダ」

「あなたに、ルイスとともに乙女たちの旅の同行を頼みたいのです」
俺は再度頭を下げ、了承を示した。

「光荣なことです」

「そこで確認をしたいのですが……タキトウス・ムシャザ。貴方の主は誰です？」

その言葉に含まれたものに、俺は瞬時考え、口を開いた。

「私の騎士の誓いは、ただ一人リオコにだけ捧げています」

「王子は？」

「私に守られる気はないので、代わりに剣を教えろと言われました」
素直にそう答えると、神官長はわずかに目を見開いた。

「なるほど。では、ムシャザ。あなたはなにがあるうとリオコを守るということでしょうか？」

「改めて申しあげるまでもございません。ただ」

「ただ？」

「これをご覧ください」

俺は右手の手袋を脱いで、彼に傷跡を見せた。腱や神経が切れ、最初はぴくりとも動かなかった指は、今は曲げ伸ばしに支障はないものの完全な拳を作ることにはできない。使える指と手のひらを鍛えあげ、手袋に滑り止めをつけるなどして、ようやく前とほぼ同レベルの抜き打ちができるようになるまでに一年半以上かかってしまった。

「剣を遣うには支障ありません。ですが、私を兵力のひとつとするならば、真実を知っておいて頂いたほうがよろしいかと」

「剣を抜く手を見たものがない？風神？と聞き及んでいたのですが」

「見る者が未熟なのでしょう」

「……恐ろしい男ですね。ですが、まあ剣に支障がないのであれば、それに問題はないでしょう。ルイスや乙女たちに打ち明けるのは任せます。それよりも 問題はこちらでしょうね」

神官長が、一抱えほどの黒い革の鞆を差し出す。

「これを、あなたからリオコへ返して下さい」

「しかし……これは」

リオコは失くしたと思っていただろうだが、彼女の唯一の持ち物で

あるその鞆は、俺の部下が見つけたあとアルマン王子へと渡り、王に預けられていた。王が異界の乙女と断定した以上、一日も早く返すべきだと王子に訴えていたが、まさかこのタイミングで戻ってくるとは思ってもみなかった。

「私からでよろしいのでしょうか？」

「あなたが返すことに意味があるのです。一度信頼をおいた相手の別の面を知り、動揺するところにこそ乙女の真価が現われるだろうというのが、陛下の仰せです」

これにはさすがに驚いた。王位継承のことといい期限を二週間に区切ったことといい、王にはどうも乙女に対し、他の者とは異なる感情が潜んでいる気がしてならない。

それより不安なのは、この鞆を見てリオコがどう反応するかだ。出逢った当初の泣き顔を思い出し、俺は暗澹とした気分になった。

「もし私が警護の任を外されるようなことになれば」

「心配はいりません。他の護衛も含め、別の者がツークスで手配します」

別の者、つまり神官以外という事だ。今回の件は神殿が主導ではないのだと俺は感じた。

リオコたちの部屋も王城にしつらえていたし、なにより旅の出立が性急すぎる。

神殿側を強引に押さえ込んでいるのか……。

そこにはやはり王の意志が絡んでいる気がする。だが、分からぬことを思い悩んでも仕方ない。俺は腹を括って鞆を受け取った。

「ところでヒジリ・アーダ。他の護衛という件ですが、私の部下も一人、その中に加えて頂きたいのですが」

動き出した歯車は、止まらないのだ。

「タク、くろいっ！」

香ばしい朝食の香りの漂う中、またも過去に想いを飛ばしていた俺に、マキが指を差して怒る。俺は一瞬手にしていたカップを落と

しかけ、隣でルイスが茶を喉に詰まらせた。ごほごほとむせる。

「なんだ、急に」

異界の言葉でまだぶつぶつ言うマキに、リオコが、簡易の竈（かまど）に貼りつけたパニを器用にへうでひっくり返しながら手を伸ばした。途端、魔法の指環が威力を発揮する。

『だって、タクつてば、ここんとこずつと暗い顔してるんだもん』

『マキちゃん、くろいって言ってたよ？』

『えっ！』

マキが、きよとんとした顔でリオコを見る。

『ほんとに？ え、？くろい（ニグル）？って暗いって意味じゃないの？』

「暗いという意味もあるが、？服の色が暗い？というくらいにしか使わないぞ。？暗い？は？オスキュロ？だ」

ルイスに教えられ、マキが言いにくそうに「おすきゆるう」と呟いた。きつと俺を睨む。

『タク、違ってたんなら早く教えてよ！』

「なんとなく意味は通じたから、いいと思ったんだ」

ただ単に直すのが面倒だっただけが、そう言つと、マキは子どもみたいに頬を膨らませて文句を続けた。焼きあがったパニを皿に移すのに、リオコが手を離してしまつて意味はさっぱり分からないが、通じなくてもしゃべるのを止める気はないらしい。

しゃべりながら、火にかけた鍋の中でイーの干し肉と野菜を炒めたものをパニの上に盛りつけていく。二つのことを同時にするせいか、手元が狂つて野菜が皿に零れた。

リオコが笑つて、フォークで盛りつけを丁寧に直し、上からもう一枚パニを被せる。また顔を見合わせ、二人でなにやら笑つた。

「二人とも、しゃべつてばかりいるとお茶が冷めてしまうぞ」

俺の横ではルイスが、甘いものの好きな彼女たちのために、ブッセージュ茶に蜂蜜と干した果実を薄く切つて加えている。

不思議な光景だな。

談笑しつつ食事の支度をする二人は、異界から来た少女。ルイスは魔法士団「双月」の士団長。一介の騎士である普通の俺が、この場にいることが不思議でならない。さらにこれが、この世界の明暗を分けるかも知れない、聖地へ向かう旅の途中だというのだ。

「こんなに穏やかな気持ちで旅をするとは……」。

それでも、この穏やかさがいつまでも続けばいいと願うのは、いろいろと過去をふり返って弱気になっているせいなのだろうか。

「あー、また、タクくろいつ」

「？暗い？だと言っているだろう」

「いいんだよ、もう。タクは？黒い？で」

途中から指環の力を借りてルイスの言葉を聞き取ったマキが、勝手に決めつける。

「断定されると、まるで俺が腹黒いみたいだな」

「似たようなもんじゃん」

「マキちゃん、そういう言い方はないんじゃない？……はい、タクの分」

リオコが？サンドイッチ？とやらを盛りつけた皿を手渡してくれる。薬味として最後に絞ったコジの香りが食欲をそそった。こちらの料理を異界風に仕立てたそれは、当然リオコの創作で、ヒューガラナの宿ではかなりの評判だったらしい。

「護衛のくせにお嬢ちゃんの手料理付きとは、待遇が良すぎねえか、大将」

とジャムに皮肉を言われたが、旅のはじめは体調を崩しがちだったリオコが、生き生きと自分から積極的になにかをしようとしているのだから、俺にそれを止める気はない。

今は、料理にくわえてヒューガラナで買った神話の絵本に夢中のようにだ。俺たちに尋ねることなく、二人だけで頭をつき合わせて少しずつ読んでいく様は、端から見ても微笑ましかった。

朝食の片付けを終え、さすがに徒歩の旅の疲れが出たのか、肩を寄せ合ううちに居眠りをはじめた二人に気付き、俺はその傍に簡易

の日除けを立てた。

今はまだ二人のいる場所は岩陰になっているが、じきに日が天頂から差す。地上より強烈なその光に、彼女たちを晒すのはしのびなかった。

「相変わらず気のつく男だ」

別の岩陰に座り込んだまま、ルイスが褒め言葉にもならぬ口ぶりで言う。

「それだけ気が回るのに、なぜ君はリオコの気持ちを無視するんだ？」

「気持ち？」

「私に言わせる気か？ 彼女の目や態度を見れば分かるだろう。リオコは君に好意を寄せている」

言われなくとも、それは分かっていた。不安からさがるように向けられていた視線が、次第にその奥に熾火（おきび）のように熱いものが湛えられはじめたことに、胸が騒がなかったわけではない。しかし、彼女は異界の人間。彼女を守り、元の世界に帰すことこそが俺の役目なのだと言い聞かせてこれまで過ごしてきた。

「スオウシヤの姫も言っていただろう。渡り人はいずれ帰ると」

「そんなことにこだわっているのか？ くだらない」

「だが、姫の未来視は外れないと、おまえも知っているのだろう？」

「未来視は？ 泣いている？ だ。？ 帰る？ わけじゃない」

冷静な青の瞳が、すつと俺に突きつけられる。

「いずれ離れ離れになるかもしれないから、恋愛の対象にはならないと？ 馬鹿げた信条だ。それだったら、誰とも恋など出来ないぞ？ この世界にいるものでさえ、ずつと共にいる保証などない。だいたい、どのみち死ぬときはばらばらだろうからな」

かつてスオウシヤの姫と婚約し、破談となった彼の言葉は軽いものではない。

それでも、俺は頷くことができなかった。ルイスが呆れたように肩をすくめる。

「第一発見者という好条件があり、かつ相手も好意を寄せているというのに、なにをためらっているんだ。私だったら、すぐに応えるのにな」

思わず彼を睨んだ。なにを考えているのだ、この男は。しかも第一発見者という好条件だと？

「そう睨むな。リオコには手を出さないよ。妹みたいなものだし、応援すると約束したしね」

「……本当に、あのときマキに手は出していないのだろうか？」

「出していないよ。第一これだけ見張られているというのに、どう手の出しようがあるというんだ。でもまあ……マキがリオコみたいな目で見てきたら、どうなるか分からないな」

左手が自然と剣の鯉口に触れる。

「冗談だよ。怖い男だな」

「おまえこそ本気で言っているのか、ルイス。異界の乙女ということとを差し引いても、相手はまだ十六。しかも、知り合ってまだ二週間だぞ」

「図体だけでなく、頭まで固い男だな、君は。お互いの気持ちさえあれば、些細な障害など問題にならないよ」

「道德の問題だ。旅の最中に絶対に手を出すなよ」

「……私の侍従のようなことを言うんだな」

ルイスの身近に常識を備えた人がいると分かって、少し安心だ。剣から手を離す。

「前の乙女のことだが」

「唐突にルイスが話を切り替える。」

「いろいろと調べてみたが、どうも不可解だ。不明な点が多すぎる」「乙女の行方のことか？」

「それだけじゃない。どこから来たかもさ。読んでみる」

小さな冊子を差し出す。最初のページをめくってみて、俺は驚いた。

「これは……」

「わがご先祖の手記さ。だが、肝心なことは一切書いていない。異界の乙女とどこで出逢ったのか、その後どうなったのか　いや」
語を切り、ルイスは東の間目を閉じた。

「書いていないことはそれだけではない。共に聖地に行ったというもう一人の騎士についてもほとんど触れられていないんだ」

俺は手記をめくって見た。内容の多くに乙女である？ユリア？の名が出てくるが、時折？彼？という表記が垣間見える。

「もう一人については、著者のキリアンと親しいということ、カーツオ以上の出自であること。それに男であるということ以外、分からない。関心がなかったわけではないだろう。好意を寄せる女性との旅に、男二人で付き従うんだ。だが、巧妙なまでに彼の描写が省かれている」

「つまり、意図的に隠されているということか？」

「そう。それらすべては、何者かの意志によってわざと空白にされた。ここまでの影響力をもつものは、ただひとり　当時の王デューノールフェイド・マキアス・サーブル・マフォーラス、その人さ」

王。鍵とも思えるその語句に、俺は出立前によぎった考えを思い出した。

ルイスにリオコの鞆を託された経緯と、そのとき感じたことを話すと、思い至るように幾度か頷く。

「ひよっとしたら、王は乙女について何かご存知であらせられるのかも知れぬな……」

「王が？」

「現王デューノールサルディン陛下は、ああ見えて努力家だね。歴史に深い造詣をもち、特に雷王デューノールフェイド陛下を規範のように考えていらっしやるそうさ。ちょうど最初の乙女の訪れた治世の王であると同時に、様々な事業を起こした方だからな」

「では、オルフェイド王の遺した何かを見習って、このようなことを？」

「ないとは言い切れん。もしやすると、もう一人の騎士は王家に連なる者かもしれんな」

だとすれば、王家に都合の悪いことを隠蔽されているのだとも思える。

都合の悪いこと……オルフェイド王は乙女になにをしたのだ……。

昏い考えが胸中を渦巻く。ぼつり、とまたルイスが言い出した。

「タキトウス。タキアチファのかつての役割を知っているか」

「……ああ」

重い気持ちで俺は頷いた。アチファは、聖地タキアマグフォーラに至る高地の名であるが、同時に聖地の入り口の村の名でもある。その村はかつて？供犠の村？と呼ばれた。供犠つまり、生贄のことだ。

死の山アツズの一脈である当地は、地盤が固く、また降り積もる灰と岩で作物など受け付けぬ荒れ地であった。そこに居を構えた人たちの生きていく術は、聖地を管理し、訪れる者から寄進を受けることだった。

聖地の管理とは、訪れた者たちの願いが聞き届けられるよう、手助けする意味も含まれる。今でこそ嚴重に禁じられているが、過去には供物となる動物を世話し、請われれば村の娘や子どもを差し出すこともあったという。

そう 聖地におわす始祖神は、血を求める神なのだ。

だからこそ、最初の乙女の伝説も、悲惨な結末がまことしやかに伝えられるのだ。

事実であつてたまるものか。

決意にも似た気持ちで俺は思う。それは知らずに言葉として出ていた。

「……犠牲になどさせない」

「君ならそう言ってくれると思っていたよ、タキトウス・ムシャザ」
ふつと口唇に笑みを湛え、ルイスが俺を見る。

「なんだ。やっぱり君もリオコが好きなんじゃないか」

「そういう問題ではない。俺は彼女を守ると誓った。それは絶対に果たす。それだけだ」

「まあ……そういうことにしてもいいが」

皮肉にルイスは肩をすくめる。

「私の想いはね　恋ではないのだよ、おそらく。これは、執着だ」
「……」

「たぶん私には、恋愛感情は存在できないんだ。アマラとの婚約も、彼女が私を望んだというだけだったしね。私のような者を求める女性など、他にいないと思っっていたから」

異なる色とずば抜けたマーレインの力を持つ彼。貴族として産まれたことで天都で高位に登り詰めたが、貴族とは元来保守的なものだ。彼の受けてきた扱いは、社会の下層を生きてきたジャムと同じ峻烈さであったことは想像に難くない。

「だが、この私が、生まれて初めて自分から欲しいと思った相手に出逢った。私はね……これを手放す気など、これっぽっちもないよ」

それは宣言だ。俺とは真逆の、掴み取る激しさを秘めた誓い。青い瞳が、妖しい炎を灯す。

「母親だと名乗る女が、子どもの両手を引つ張って奪い合う逸話があるだろう？　審判は、痛がる子どもの手を離れた女を母親だと認めるが、私は愚かだと思うね。真に求める相手ならば、腕が裂けようが、私なら離さない。」

すでに彼女はこの世界を知ってしまった。どちらの世界を選んでも、必ずその選択を悔いるのであれば、私はこちらに引きとどめることに力を惜しむ気はないよ」

俺の胸をいささかの不安がよぎった。

「なにをする気だ？」

「なにも。彼女を庇護し続けるだけさ。なにしろ最初から彼女の傍にいたのは、この私だからね。彼女にとって、この世界の基準となるものは私だ。幸いにも、彼女は私をすごく信頼してくれているよ」

うだし、ね……」

俺は呻いて、片手で頭を押さえた。執着どころではない。これが好意が原点だからまだよいものの、ひとつ間違えば犯罪に近い。

決めていたはずの俺の覚悟が、なんと甘っちょろく感じるのか。俺は深くため息をついた。

マキ、おまえを守る男はとんでもないやつだぞ。

警告をしたいが、かといって聖地に辿り着く直前の今、不安にさせるのも気が進まない。第一、彼女を傷つけるところか守ろうとしているのだ。

人の想いとはままならぬものだな……。

もう一度息をつき、次第に中天へと昇る日輪を眺める。荒れた岩肌その先に、天へと突き立つ数本の鋭い岩山が小さく望めた。

あれこそが、聖地だ。

18・5(後書き)

推敲しているうちに日付マフタ…。長くてすみません。ひょっとしたら後日切るかも。。。

俺たちは順調にタキ「アチファ」の村に着くと、一般の巡礼者たちと同じように、村の入り口でイカカスの葉の浮かんだ聖水で身を清めた。

供儀の村であったアチファは、これまでに通って来たどの村より小さい。その集落のつましさに異界の少女たちは少し驚いていたようだったが、おみくじ入りの菓子などをたくさん買って、村の子どもともずいぶん打ち解けたようだった。

アチファの村には泊まらず、そのまま聖地への旅を進める。高度が増してきたせいか辺りは肌寒く、いささか息苦しい。マキが咳をしていたのも気になって、夜は早目に野営を張り、眠りに就くことにした。

テントは二張り建て、一方にリオコとマキ、もう一方を俺とルイスが使う。だが、いくら先発隊の三人がいるといっても見張りは必要だ。ルイスが先に休み、俺は三時間後に交代することにした。

「ではタキトウス。何も起こらないと思うが、頼んだぞ」

「ああ」

答えたのも束の間、片方のテントからリオコが飛び出してきた。

『大変！ マキちゃんがすごい熱』

「なに?!」

横になりかけていたルイスが跳ね起きる。隣のテントを覗くと、毛布に包まっていたマキがぼんやりした目を向けてきた。

「大丈夫か？」

ルイスの声かけに、マキは何かを探すように辺りを見回した。自分の荷物に手を伸ばし、取り出した紙になにやら書き出す。リオコが読みあげた。

『？昔からヘントウセンが腫れてよく熱出すから、たぶんそれだと思っ。寝てれば治る？だつて』

「診せてみる」

ヘントウセンというのがよく分からないが、ルイスが傍らにひざまずき、慣れた仕草でマキの喉や額に手を当てる。

「すまない、俺が近くにいたのに」

「この気温の変化と旅の疲れのせいだろう。気にするな」

また、マキが文字を書く。それを見て、リオコが怒ったように眉を寄せた。

『なにが？後から追いつくから先に行つてて？よ。置いていけるわけないじゃない』

「リオコ。今から薬湯の作り方を書くから、タクと行って作つてきてくれ。マキ、君は寝るんだ」

マキの手から紙とペンを取り上げ、ルイスが命じる。さらさらとそれに書き付け、俺に渡した。職務柄、魔法士は薬草学に通じているものも多い。

「私の荷物の中にそれらが入っているから。それと、もう一枚毛布を頼む」

「分かった」

俺はリオコをうながし、テントを出た。去り際にふり返ると、ルイスが、気だるそうに目を閉じるマキを背後から抱きかかえて座りこんでいた。壊れやすい宝物を扱うようなやわらかな手つきと眼差しに、俺は知らず微笑する。

少しでもマキが嫌がったら、簡単に手を離してしまいそうだな、これは。

彼が執着と言い切る感情の片鱗は、澄んだ愛情に満ちているように思えた。

俺は無言で、テントの布の扉をそつと閉ざした。

ルイスが処方した薬湯を飲み、マキは少し容態が落ち着いたよう

だった。万能の魔法士の力があるならば薬など要らなさそうだが、治癒術はあくまで本人の生命力を高めるものだ。弱っている体に、強引な治癒はかえって病状を悪化させることになる。

「一気に熱を下げると負担がかかる。五、六時間ほどかけてゆっくり下げていくよ。それでも急なんだから」

「分かった、頼む」

「ルイス、マキちゃんをお願いね」

心配そうなりオコの頭を撫で、ルイスがマキのいるテントに戻る。俺たちは小さな焚き火の傍で並んで座った。火から外した鍋には、多めに作った薬湯が、まだ苦い香りを放っていた。

黙って火を見つめるリオコが、うとうとと船を漕ぎはじめる。

「リオコ、俺はどのみちここで火の番をするから、向こうのテントで休むといい」

『ううん。いい、ここにいます』

「休むことも必要だ。この先もう少し歩くから、体力を残しておかないと」

『でも……ひとりで眠るのはいや』

呟くように言い、リオコは立てた膝の上に頭を伏せた。彼女なりに不安なのだろう。俺はマントを脱ぎ、彼女の背中に着せかけた。

「寒くないようにしろ。ここは冷える」

『ありがとう、タク』

ほんのりとリオコが笑う。はにかみながら向けられる視線に、また胸がざわめいた。

俺は強引に彼女から目を外し、燃える炎に意識を集中させた。ルイスの言い草ではないが、弱っている女性の心に付け込むような真似はしたくない。

そちらを見ているわけではないのに、痛いほど視線を感じる。まるで目の前の炎をそのまま視線に溶かし込んだようだ。

だめだ。

心の中で、強く否定する。

一度ヒューガラナで話したときに、衝動に負けて抱きしめてしまった。二度とあんなことはできない。もし今度彼女を腕に抱いたら。

だめだ。そんなことはできない。

剣の鞘を固定する帯に結び付けられた、動物の人形。リオコが自分の持ち物を約束の印だとくれた。俺が彼女のものであることを示すように結ばれた、彼女と色違いの人形。

俺たちが結びつくのは、それくらいでいい。

「……ねえタク」

熱を秘めた声が俺を呼ぶ。だめだ、それ以上は。

「タク、わたしね……」

「リオコ。君を最初に見つけたのは俺だ。最初からずっと……俺が君の傍にいた」

唐突に言い出した俺に、リオコが戸惑った顔で頷く。

「う、うん。ずっと助けてくれたよね」

「俺は以前、街の人を守る仕事に就いていた。そのときに、君を見つけた場所の近くでひとりの子どもを死なせてしまったことがあるんだ」

「え……」

「盗賊に誘拐された子でね。ロニという名前だった。まだ十才のかわいらしい子だったよ。だけど、俺は守れなかった」

俺はリオコを見た。そして、彼女が傷つくことを知りながら、次の言葉を口にした。

「だから、俺は君を守ることが使命のように思っている。君を守ることができるのであれば、俺の罪も償えると」

嘘だ。そんな想いなど、とっくの昔に超越している。それでも俺は、彼女を突き放す言葉を吐く。

「弱い男だろう？　俺は今まで、そんなことを考えながら君の傍にいたんだ」

俺を嫌いになれ。そして何の未練も残さずに、元の世界に帰るん

だ。

「軽蔑したか？」

『……ううん。全然』

リオコは首を振ると、両膝を腕の中に囲うようにして、俺を見上げた。にこりと笑う。

『ずっとね、傍にいてくれるのに、タクがなにか別のこと考えてるの、分かった。わたしとタクの間には、超えられない境界線みたいなものがあるんだって。それが、その口ニって子のことなんだね』

「あ……ああ」

『話してくれないかと思ってた。良かった、話してくれて』

おかしい。なぜリオコは笑っているんだ。

「身代わりのように思われて、嫌じゃないか？」

『ううん。だって、タクが大切にしていた子なんでしょ？ わたしはその子じゃないけど、大切だった子のことを忘れるなんてできないし……その子だって、タクに覚えてもらって嬉しいと思うもん』
なんてことだ。どういうわけか裏目に出たらしい。途方に暮れて、おのれの拳に目を落とす。

いびつな手。それですら、リオコは好きだと言ってくれたのだと思いつく。

「君は何でも許せてしまっただな」

少しだけ苛立つ。俺がどんな想いで君の傍にいたいと思うんだ。睨むように彼女に目を向け、はっとした。

もうリオコは笑ってはいなかった。訴えるように　どんな火でも灼き尽くしてしまうほどの熱を湛えた瞳を、ひたと俺に注いでいる。

『だって、わたしタクが好きだから』

迷いのない声。

『わたし、タクが好きだから、許せないことだって許しちゃうんだよ。好きなんだもん』

「リオコ」

思わず、手を伸ばして抱きしめたい衝動に駆られた。強く拳を握る。テントではマキが苦しみ、ルイスが懸命に治療している。

『わたし、タクのことが好き』

『だめだ』

なぜ分らない。だめなんだ。君はここから去るのに。俺の傍から。

『なんで？ なにがだめなの？』

『いけない、リオコ。そんなことは簡単に口にしていいことじゃない。君は一番近くにいた俺を好きだと勘違いしているだけだ』

『簡単じゃないよ！ わたし、どれだけ』

『君はいずれ帰る。君を必要とし、待っていてくれる人のもとへ……俺が必ず送り届ける。だから』

俺を憎んでも嫌ってもいい。俺を、君の中から消さないでくれ。

『俺のことは忘れる』

『タク』

リオコの瞳から涙が溢れ、ぼろぼろと零れ落ちた。それを拭ってやりたいが、代わりにぐつと目を背けた。

『泣くな。君はまだ若い。今からいくらでもふさわしい男が現われるだろう』

『や……だ。タクじゃ……ないと、や、なの』

『リオコ』

『なん……で……？ わたし、別の世界の子だから、だめ、なの……』

『そうだ』

違う。本当は君が何者だろうと構わない。

『なんで……？ わたし、タクたちと、なにも、変わらないよ……』

『だが君は、俺の運命を変えてしまった。俺自身さえ制御できないほうへ。』

『タク。ちゃんと……わたしを、見てよ』

そんなのは当然だ。ずっと最初から見つめ続けてきた。

『？乙女？とかじゃなくて、ちゃんと、わたしを……見て』

これ以上何を見るんだ。君は脆くて、すぐに不安そうな顔をして、それでも心配かけまいと周囲に気を配って。マキと比較して落ち込んだりもするけれど、自分自身のペースで前に進もうともがいていた。

本当はもつと身勝手に、わがまを言って、泣いて周りを困らせてもよかったのに、そんな気遣いすら杞憂に終わるくらい、君は強かった。

？わたしも力になりたい？ 恐ろしい目に遭った後でも、そんなふうに見えるほど。

リオコ、君は自分の弱さばかりを否定するが、その前に進もうとする意志や、他人を受け入れる心。やさしい笑顔にずっと俺は支えられてきたんだ。

そう。俺は、守るはずの君に、ずっと救われてきたんだ。

だから、俺は何より君の幸せを願う。傷ついても哀しませても、君自身が幸福に暮らせる未来を。

それは、元の世界へ帰ること。

そして俺は、誰より守りたい君の心を拒絶する。するしか、ないんだ。

「リオコ、君はすばらしい女性だ。だが、俺が君の傍にいるのは、君が異界の乙女で世界が水門の開放を必要としているからだ。俺はただの護衛にすぎない。」

君のことは大切だ。だが、それを恋愛感情に結び付けないでくれ。君は成人前だし、他の男性をよく知らないから

「知……って、るよ。わたし、付き合っていた人、いたもの」

……………なんだって？

一瞬、頭から冷水を浴びせかけられた気がした。まだ涙目のリオコが、強く俺を睨み、怒ったように続ける。

『二人だけ、だけど、あっちの世界できちんとお付き合いをしてい

た男のひと、いたの』

二人も？ いや、付き合いにも種類がある。俺は動揺を見せまいと努力した。

「その、付き合いというのは手紙のやりとりのような？」

『タク、わたし十六だよ？ ちゃんと告白されて、デートとかしてえつと、まあ最初の人とはグループ交際みたいな感じだったけど、二人目とはその……オトナのお付き合いというか』

俺から目を逸らし、リオコが泣き顔とは違う赤さの顔でもによもによと呟く。

『……だし』

「は？」

『だから、わたしもう？乙女？じゃないし』

「……………」

頭が真っ白になる、というのはいさうなことをいうのだろうか。

一瞬、時間の流れすら凍りついた気がした。頭の中でリオコの台詞が何度もこだまして、意識がどこかに飛んでいく。

ようやく飛び去った意識を繋ぎ直し、俺は変な音になりそうな声を振り絞った。

「つまり、君は……婚約を？」

『せ、正式には違うけど、結婚しようとは言ってもらったよ？ だって、さすがに好きでもない人とは……できないし』

服の裾を指でくしゅくしゅにしなから、リオコが言い訳するように言う。涙は止まっているが、顔は首まで真っ赤に染まっていた。地が黒いせいで分かりにくいけど、きつと俺ものぼせたようになってるに違いない。正体不明の熱が全身をかつかと駆け巡っている。

「そうか、ちゃんとした人のようで、良かった……………」

『ちゃんとしてないよ？ この春、二股かけられてたのが分かったから、別れたの』

「君と婚約をしているのに…………他の女性と…………？」

知らず、地の底を這うような声が出る。そこに含まれる剣呑さは、はっと我に返ったりリオコが、慌てたように手のひらを振った。

『あ……だから婚約とかじゃなくて、あのっ！ 二股はシヨックだったけど、もう別れたし忘れたし……ごめんね。わたし、変なこと言っちゃった。お願い、忘れてっ！ お願いっ！』

「……………ああ、分かった」

両手を合わせて懇願するリオコにようやくそう答えたが、俺の意識は熱に浮かされたようにうつろだった。

なぜだろう。いまずぐ異界の扉とやらをこじ開けて、その男に決闘を申し込みたい気分だ。

弱いな、俺は。

矛盾しているのは分かっている。リオコを突き放さなければという気持ちと、彼女の心を独占したい欲望のせめぎあいを抑えきれない。

もしリオコが他の男を見るようなことがあれば、彼女を害する者たちと同様に いや、それ以上に激しく剣を向けてしまいそうな自分がここにいるのだ。

執着とは、ルイスも旨いことを言ったものだ。

苦い気持ちで思う。彼女への想いが、もう簡単に引き剥がせないほど深く心に根を下ろしてしまっていることを、俺は今さらながらはつきりと自覚した。

混乱する俺の気持ちを映すように、頭上に広がる夜空は、星を抱きながらもどこまでも暗く深かった。

7

夜明け前、ルイスがマキのいるテントから出てきた。小さくなった火の傍で、リオコは俺が持ってきた毛布に包まり、眠っている。疲れた様子の彼にブッセージュ茶を差し出せば、軽く礼を言っ受けて取った。

「マキの様子は？」

「とりあえず熱は下がった。後は本人の体力次第だな」

持続的に長時間魔法力を行使したせいか、ルイスの顔色は白いうより灰色だった。

「大丈夫か？」

「いろいろと疲れたよ。それより君は？　なんだかこの世の終わりみたいな顔しているが」

あっさりと看破され、俺は話そうとしてためらった。リオコが寝ている傍では言い出しにくい。

俺の視線に気付き、ルイスが無言でリオコを抱き上げて、マキのテントに連れて行く。戻って元の位置に座るや、「で？」と俺をうながしてきた。

「その、二人を一緒に寝かせて大丈夫なのか？」

「うつる病気じゃない。喉の辺りにある腺が炎症を起こしかけて、熱が出ているだけだ。　で、はぐらかすなよ？　こっちは疲れてるんだ」

「ああ……」

うながされるままに、俺はリオコに告白されたことを話した。ルイスは驚きもなく、青い目を興味深そうにまたたかせる。

「彼女もずいぶん思い切ったものだ。悪い男だな、君は」

「そ……そうか？　はつきり断ったんだが」

「自覚がないときていれば世話はない。それで？ 君が死にそんな顔をしている原因は、それだけじゃないんだろ？」

「……付き合っている人が、いたらしい」

「はあ？とルイスが素っ頓狂な声をあげる。慌てて制した。

「二人が起きたらどうする！」

「起きないように細工はしてある。一、二時間は平気だよ」

万能の魔法士はけろりとして言い、呆れたように俺を見た。

「おめでたい男だな、君は。彼女の過去に異性の影がないとでも思っていたのか？ リオコは女性として充分魅力的だよ。他の男が放っておくはずがないだろう」

確かにツークス領主のような不屈き者が他にいたとしてもおかしくはないのだが。

「その……リオコは付き合っていた相手と、わりと、深い仲……だったらしい」

「ふうん？」

「お……乙女じゃ、ないと、言っていた」

断崖絶壁から飛び降りたつもりでそう告げたのに、ルイスは目を丸くすると、肩を震わせて笑いはじめた。俺の眉間に縦皺が増す。

「なにが可笑しい」

「いや……先を越されたと思って」

「なに！……！」

反射的に剣の柄に手をかける。ルイスは笑いながら、首を横に振った。

「違う違う。リオコに手を出そうというんじゃないさ。あ………まったく、言い寄る男はいただろうと思っていたが、まさか………ね。リオコには完敗だな」

笑いをおさめ、ルイスがなんとも複雑な表情で俺を見る。

「怒らないで聞けよ、タキトウス。実際のところ？ 異界の乙女？ は二人もいらないだろう？」

「いきなり何を言い出すんだ、ルイス」

「まあ聞けよ。私はね、もし聖地が本当に？異界の乙女？の犠牲を
求めるようなら、彼女を？乙女？でなくしてしまえばいいと思って
いたんだ」

乙女デナクシテシマエバイイ。奇妙な記号のように聞こえたそれ
が、はつきりと脳に刻み込まれた瞬間、俺は叫びだしそうになった。
片手で口を押さえるが、代わりに耳まで熱くなる。

「おまえ……それ、本気で言ってるんじゃないだろうな？」

「本気だったよ、わりとね。だけど、どこまで純潔が重要視される
かはさておき、さすがに二人とも？乙女？じゃないとなると水門の
神に申し開きができないからね。この計画は白紙だな、残念ながら」
飄々と言つてのけるが、この男は、リオコを犠牲にしてもマキ
の安全を優先させる気だったのだと悟り、俺の肌がぞわりと粟立っ
た。拳を握り締める。

「おまえ、本当に一体なにを考えている？」

「マキの幸せ」

「リオコを犠牲にして、マキが喜ぶとでも思っているのか？」

次第に激昂する俺に、氷の冷たさを纏った青い目が向けられる。

「だから言つただろう。私の想いは執着だと」

「間違つているぞ、おまえ……」

「分かつている。だけど……もうどうしようもないんだ」

俺は握つた拳の行き場を失った。

ああ、この男もどうしようもない想いの闇にいるのだと思つた。
恋をしているのだと。

「恋愛などいくらでもできると言うだろう？　だけど、私は違う。
マキを失ったら、同じように他人を欲することはもう二度とないと
思うんだ。それくらい、替えようがない」

俺は拳を開いて、弱まってきた焚火に小枝を投げ入れた。

「そこまで言い切れるのか。羨ましいくらいだな。俺は……迷つて
ばかりだ。リオコをきちんと両親の元へ帰してやりたいのに、踏ん
切りがつかない」

「私も迷うさ」

ルイスは、ほどけた金色の髪を手ぐしでかきあげた。憂いを含んだ、彫像のような横顔。わずかにはだけた胸元に輝く金糸の髪が舞い落ち、男でさえどきっとするような色香だ。

なぜこれを見て、マキが普通でいられるかが不思議でならない。「マキは恋愛には疎そうだが、一度気づいたら一気に傾きそうじゃないか？」

「気がつくまで保護者でい続けると？ 完全に安心できる相手と認識されて、他の男の名を口にされると、さすがにどうでもよくなってくるよ」

「マキが？」

「……さっき夢うつつで、私を誰かと間違えた」

吐き捨てるようにぼそりと告げられれば、さすがにあり得ないと笑い飛ばせなくなる。

マキが……他の男の名を？

「友人や家族ではなく？」

「寢床で寄り添っている相手を、どう間違っただ？ ？しーくん？が女の名であれば、問題はないがな」

それはどう聞いても、男性の愛称のような気がしてならないが。いや、だがまさかマキが？

「……異界で決闘するなら援護するぞ」

「ありがたい申し出だが、自分の敵は自分の手で捻り潰すのが私の信条でね。だが……そうだな。決闘の立ち会い人はお互い交替で、というくらいはお願いしようかな」

かすかに笑みを取り戻すと、ルイスはカップに残った茶を一気に飲み干し、休息のためにテントへ去っていった。

日が昇りはじめた頃、マキとリオコが起きてきた。もう少し寝ていてもいいのだが、日が昇ると起きる習慣がついてしまったらしい。

『おはよう』

「……おはよう」

あれ以降初めてのリオコとの会話は、だが目を合わせることはできなかつた。無言で薬缶を火にかける俺に、マキがリオコの左手を掴んだまま、そつと話しかけてきた。少し声が掠れている。

「ルイスは？」

「寝ている。先に朝食を作るよ。できてから起こせばいい」

「あの……大丈夫、なの？」

確かにいろいろと大丈夫ではないのだが、俺は笑ってマキの頭をぼんと撫でた。

「心配するな。彼は強い」

『でも、一晩中治療術使ってたんでしょ？ あたしのせいで』

大丈夫でないのはそのせいではないのだが、それを俺の口から言うわけにもいかない。

「君が元気な顔でいれば、彼の苦労も報われる。心配なら、あとできちんと自分でお礼を言うといい」

『うん。ありがと、タク』

嬉しそうに笑う顔は、いつもと同じだ。裏表どころか表しかないような屈託ないその態度は、どう見ても想い人を胸に秘めているようではない。

女性は最大の謎だ、と言ったのは誰だったかな。

軽いため息が洩れる。やや離れたところで、何気なく朝食用のパニを作るリオコをちらりと見、俺はパニを焼く小さな石窯を積みはじめた。

起きてきたルイスは、顔色こそ良くなっていたが、いつもと様子が違うようだった。それに気付いてか、マキの態度もぎこちない。

俺はまだリオコと目が合わせられない状態だし、これまでにないほど旅の雰囲気は固いものになっていた。

朝食を終えて荷造りを済ませた後、マキがお手洗いにいきたいと言いつつ出す。

「近くにいろよ」

『近くでトイレ済ませるなんてありえないし!』

『じゃあマキちゃん、指環持って行つといて?』

リオコが魔法話の指環を外して差し出す。紅い石を嵌めたそれを右手につけ、マキは俺たちがついて来ていないことを確認するように、幾度か振り返りつつ、岩陰へと入っていった。

女性の品位を傷つける行為はしたくないが、一人になる今が一番危険だ。俺はルイスと目で会話し、少し遅れてその後を追った。幸い身長があるので、斜面にいるマキの姿は容易に視界に入る。

俺が見ていると知ったら烈火のごとく怒りそうなので、数ヶーン手前で足を止めた。

ふいに、風が踊った。

なんだ?

緊張を漲らせた俺の脳裏に、それを裏づけるように、ジャムの?

声?が響き渡る。

『大将! まずいぞ、やつらが来る!』

肉声ではないその声を同時に感知し、ルイスがこちらへ向かって叫んだ。

「マキ!」

刹那、ルイスと俺の体が青白い光に包まれる。ただの光ではない。突然現われたその光は、蛇のように細長く、自在に動いて胴、手足、頭と絡んだ。動こうとすると強く締めつけ、まるで金縛りのごとくまばたきまで固定される。

電光の檻の向こうで、マキに近づく背の高い男の姿が垣間見えた。

マキ……!

鉄色の長髪を首の後ろでくくり、宵闇を思わせる藍摺(あいずり)の服、特徴的な銀の格子紋。

闇の女神スザナを祀る神官一族の証であるそれを睨み据え、俺は喉の奥で苦く吐き捨てた。

「……ファリマめ」

肩越しに、青白い閃光が大きく炸裂して消える。背後でルイスが呪縛を解いたのだと察する間もなく、俺は歯を食い縛って強引に体を動かすや、剣を掴み、縦横にそれを揮った。

キイイ……ン、と澄んだ金属音をたて、拘束が解ける。粉々になった光の蛇は、きらきらと輝く塵を舞い散らせ、ふっと朝の空気に溶けて消えた。

その隙に、やつはマキを片腕に抱いて岩の高みへと逃げていた。「待て！」

追う俺の前に、やつと同じ藍摺の装束と覆面に身を包んだ一群が現われる。手には細身の白刃。迷うことなく俺はそれらを斬って捨て、一気に跳躍すると、やつの頭上へ切っ先を振り下ろした。

鈍い衝撃。光、そして遅れて爆発音が俺を襲う。

まるで目に見えぬ巨大な砲弾に打ち抜かれたように、周囲の岩ごと吹き飛んだ俺は、勢いよく下の斜面に突き落とされる。

『タクツ！』

マキの悲鳴。耳でそれを捉えながら、俺は体を丸め、砂煙と共に足から岩の上に降り立った。

俺を吹き飛ばした男が、掠れた低声を皮肉に響かせる。

「さすがは風神。図体のわりに身軽なことだ。が……こちらはどうかかな？」

告げるや、まるで朝陽をかき消すように、やつの周りに数十もの鈍い灰色の光球が出現する。

その不気味な光の雨を撃ち下ろす瞬間、闇の女神の加護を受けた魔法士　ヴェルギウス・アスペル・ファリムスは、はっきりと不敵な微笑を唇に刻んでいた。

18 - 7 (後書き)

こんなところですが、タクの章はおしまいです。
次章は閑話予定。

Interlude ? 男たちの真実(1)

(1) 会談 王と彼らと彼女

私が忘れかけていた古い書物を引っ張り出して読んでみると、突如荒々しいノックが響き、短丈のマントを肩から掛けた男が部屋に飛び込んできた。

褐色の肌もつやかな見上げるようなその偉丈夫は、母方のハイト族の風習に習って頭を剃りあげ、その左半分を見事な刺青で覆っている。マントの下の綾織の上着は土埃に塗れ、彼が長らくの国内調査より戻ったばかりだということを示した。

私に私的なものはほとんど存在しないが、内密な個人会談を行うためのこの「星辰の間」にこんなふうに行っていると、よほどに火急の用件らしい。

本越しにちらりと目だけを向ければ、その男 魔法士長オリザリオ・アーヴェンは恭しく一礼した後、私の左隣の男に向かって吠えた。

「なぜこんなところにいるのだ、シャルル！ おかげで、報告会で大臣どもの吊るし上げを喰らったではないかっ！」

「君が大臣たちの吊るし上げなどに屈しない人間だということは知っているよ、オズ」

左隣の男シャルローズ・セバン・カトウアは、書きかけの書類に半白の頭を傾けたまま、そう答えた。二、三の語を加え、それを私に示して確認をとると、書類の束を調子よく両手で整える。

オズが仁王立ちしたまま、不服そうに太い腕を胸の前で組んだ。

「私にあの阿呆どもの相手をさせて、おぬしはこんなところで書類作りか」

「おかげで早く仕事が済んだよ、オズ。ありがとう？」

「心にもないことを言うのは止めてくれ。で、それはどんなものだ

？」

私が目で促したので、オズは向かいの席に腰掛け、卓上に軽く身を乗り出す。

「とりあえず、君の報告を受けて中西部山岳地方の開拓は一時中止の決定を。さらに従来どおりの徴税は無理と判断したので、別途方法を提示することにした」

「方法？」

「ひとつは、前期の納税を減らして後期もしくは中途期に持ち越せる分納制。もうひとつは、新たな作付け用のテム芋の苗またはコメの備蓄を政府で売り出し、その購入費用を納税分として加算することが可能な補填制だ。これは上限が全体の二割までとするが、状況を見る限りではこちらが多くなるだろうな。地方領主の判断にもよるが」

「やはり減税はならんのか」

「君の気持ちは分からなくもないが、今の時点では無理だ。一度減らすと、元へ戻すのに？増税？せねばならなくなる。この意識の差は大きい。それに早魃の被害状況を等級付けした君の調査報告には感心するが、等級に合わせて納税額を変えとなると、それも問題だ」

「なぜだ」

「分からないかね、オズ。その理屈でいくと、等級ひとつの違いでコメイ一樽どころか百樽ほど差がつくのだよ。誰しも税は少ないほうがいい。民たちは必ず等級に不満を感じて、我先に被害状況の深刻さを提訴してくるだろう」

一度語を止め、シャルルは外見と同じく枯れきった声音を繋いだ。「飢えているのは一部地域だけではない。この国全体が、すでに飢餓の状態にあるのだ。そして不満は容易く政府に向かうだろう。」

皆おのれのことと頭がいっぱいなのだよ。重症地域分を肩代わりするという意識など、生まれる余裕もない。まして貴族に平民を救う義務があると考える者は、無いに等しいのだよ。残念ながら」

小さいながら貴族の生まれであるシャルルは、最後の言葉に若干のやさしみを籠めて、平民出身のオズを見た。ふう、とオズの禿頭が椅子の背にのけぞる。

「一月走り回った私の時間は、無駄に終わったな」

「……私は無駄とは思いませんが」

それまで黙っていた、右隣のヘクトヴィーン・レニアス・クガイ「ヤーマトウーロが静かに口を挟んだ。長く下ろした黒銀の髪をさりりと揺らし、微笑む。

「あなたの詳細な被害状況の報告と極端な救済政策を事前に聞いているからこそ、主要八省の大臣たちはカトウア大臣のこの提案を受け入れざるを得ないでしょう。閣下の提案は瑣末なものに見えましようが、民にとっては大きな救いとなるはずです」

「……小僧めが、いっぱしに言うようになりおったな」

乱暴に呟き、オズがにやりと口の端を持ち上げた。子どもみたいな彼にとつて、部下と仲の良いヘクターは幼少時より知り尽くした相手でもある。若き神官長の微笑が苦笑に変わった。

「ところで、異界の乙女とやらをもつ聖地に向かわせたそうだが」

「ええ、一刻も早いほうが良いとの総意がございまして」

「一度会ってみたかったものだがな」

天嶮の巨人に匹敵する千里眼の持ち主と言われる彼は、独り言のように洩らした。

「異界の扉の調査は誰が？」

「カシユゲート魔法士に一任してあります」

「レスが？」

この師匠と違い、出歩くよりも王城から策の網を広げること得意とする弟子の意外な行動に、オズは張り出た額の下の目を大きく見開いた。

「あなたに言われてするくらいなら自分からした方がいいと、快く承諾して下さいましたよ？」

「そいつは結構なことだ。あいつの手綱の取り方が上手くなったな」

「魔法士長どののお褒めに預かり、光栄です」

「あとで借りを作ったと言われぬように気をつける。あいつは根に持つからな。じゃあ、乙女の護衛はルイスか……当然だな」

珍しい金髪魔法士は、乙女の発見者というだけでなく、前回の乙女の護衛をしたキリアンの直系でもある。

「で、本物くさいのか？」

「それを私は真つ先に君に聞きたかったんだがね。君がなかなか旅から戻らないから、機会を失ってしまった。まあ今回は神殿が主導だから、私は口を出す気はないがね」

シャルルが骨ばった広い肩をひよいと竦めた。わざと染め分けたように左が白、右が黒の二色の髪をきつちり纏めあげ、オズをもしのぐ身長は痩せぎすで、太政大臣の墨色の礼服に身を包んだ姿は？ 死神？と称されるほど威圧的で表情に欠ける。が、今の彼は気心の知れたものばかりが集うせいか、いつになく和やかだった。見るものが見れば、という程度ではあるが。

王立学院の後輩というヘクターが、彼に教える。

「一応レスの紹介で、アマラーリーヴァを派遣しています」

「スオウシヤの姫の千里眼は未来視だろう。役に立つのかね？」

「未来視は、特定の未来が見えるわけではない。制御も不可能だが、これまで外れたことはない。ただし、未来視で見た映像の解釈を間違うと悲劇に繋がりがねん危険はある。両刃の劔（つるぎ）だな」

「で、間違った解釈もまた未来の一部というわけか……笑えんな」

「人生は悲劇の皮をまとった喜劇さ」

シャルルの独白にオズは皮肉に答え、書類と共にテーブルに置かれたコメイの鞘を手を取った。調査より自身が持ち帰ったそれは乾ききり、中身などないほどに痩せている。指で押せば、ぱりりと音をたて、呆気なく砕け散った。

「ひとつ質問なのだが、神官長どの。この早魃が神の意志ならば、なにゆえ神は異界の乙女を遣わされたのだろうか。まるで……神が、御自身の意志をみずから覆しているようではないか」

はつと息を呑みたくなるほどの厳しい問いに、ヘクトヴィーンはしばし黙り、口を開いた。

「魔法士長どの。神の意志とは、計り知れぬものです。例えるならそう……あなたの着ている服の布地と同じく幾つもの糸が絡み重なり、織り合わされることによって初めて紋様の形を成す、壮大な織物のごときものと言えるでしょう」

テーブルの向こうの鮮やかな錦を眼差しで示し、謡うように続ける。

「早魃も異界の乙女も無論われわれも、その糸の一連（ひとつら）に過ぎないのです。すべては大いなるひとつの意志　なれど、それが一体いかなる形を織り上げるのか、同じ織物のささやかな糸であるわれわれには推測することしか出来ません」

「……織物、か。上手いことを言う」

からかうように言うオズの目は、だが昏く静かだった。

「卑小な人の身で神の意志を語ろうというのですから、口先くらいは上手くもなります。」

ただひとつ、われわれがはつきりと理解しているのは、神はすべてのものに？在れ？と……生も死も苦も楽も等しくこの世界に存在することを赦して下さるといふことのみ。それを試練ととるか奇跡ととるか、これはすべて人の心なのです」

「人の心……か」

「ええ。わが主神アーミテュースは太陽神ゆえ、日照りのたびに、かつては怒りを鎮める血生臭い儀式が捧げられたこともありませう。それでも太陽がわれわれの生活になくってはならぬことは、誰しも認めるところでしょう。そこに善悪も正邪も、ましてや矛盾など存在しません。どちらも真実だからです」

説法に慣れた声は、大河のさざめきのようにどこまでも漂い、陽光の差し込む室内を不思議な温度で満たした。

「光も闇も水も大地も人も、そして異界の乙女ですら、善なるものでありまた害悪にも成り得るもの。どちらであるか　それは神が

定めるのではなく、われわれ自身が選びとらねばならぬものなので
す」

ヘクターの低声が語り終えてなお、室内は水を打ったような静寂
に包まれていた。

ふいに手を打つ乾いた音が、部屋の奥から響く。内宮に続く裏戸
から衣ずれとともに現われたのは、薄紅色の衣装をまとった第一妃
ミア＝コラーユ・ジエニア・エメリア・スウーマだ。

波打つ栗色の髪をやわらかく結び上げ、聡明な光を宿す新緑の瞳。
三人の子を産んだと思えぬしなやかな肢体を包んだドレスは、(襷)
ひだ)を詰めただけの簡素な仕立てで、宝石は指環のみ。

それでも、けして暗くはない室内がさらに輝きに満ちるように思
えるほど、彼女の放つ気品は惜しみなく周囲を照らしていた。

「素晴らしいお説教でございました、ヒジリ・アーダ」

「ありがたきお言葉にございます。ミア＝コラーユ妃殿下」

立ち上がり、ヘクターが腰を折って彼女の右手を手のひらに取る。
「会談の場で説法など、少々無粋でございました。習い性というの
は困ったものです」

「そんなことはございませんわ。どうせ魔法士長の愚痴に太政大臣
どのが茶々を入れてごまかしていたのでしょうか？ 政治のことで頭
がいっぱいな殿方に、少しは世の中の真理を考えるお時間を差し上
げるというのも、有意義なものですわ」

鈴の音を振るように軽やかにそう告げると、第一妃は童女のごと
くあどけなく微笑んだ。

「つい、と私の元に寄り、読みかけていた古書の縁を指先で押さえ
る。」

「せっかくヘクターが良い話を聞かせてくれたというのに、いささ
か品位に欠けてしましてよ？」

「話は聞いていた」

「話を聞く時は、きちんと人の目を見るようにと習いませんでした
こと？ 国民の鑑(かがみ)がこのようなことでは困りますわ」

するりと古書を持ち上げる。取り返そうとした私の手が空を切った。

「おい、それは私の仕事だぞ」

「顰め面をして本とにらめっこをするくらいならば、他の皆の智慧を借りればよいではありませんか。幸いここには、国でそれと知られた賢者がお揃いあそばされましてよ？」

その本を後ろに控える若い男に手渡す。侍従かと思って睨めば、驚いたことにそれは、艶やかな黒髪を背に流し、彼女と同じ緑の瞳を持った若き王子であった。

私の視線に気付き、わずかに口元を曲げる。

「私は単なる母の付き添いです。ただし、乙女に関わる問題を解き明かすというのなら、是非お手伝いさせていただきます。このたびの乙女の一人を保護した者として、私にも責任がございますゆえ」

「殿下、私にもそれ見せて下さいよ。あ、私はこれを持って来ておりましてね？ 謎解きのお役に立てましたらと」

銀色の見慣れぬ四角い物体を手の内で振り、そう言って横から顔を出したのは、かつて神童の名をほしいままにしたツークス領主だ。丸眼鏡をかけた顔を剽軽に崩す。

困惑しきつた私を眺め、シャルルが小さく笑いを零した。

「太政大臣の私に神官長、魔法士長、第一王子、学院の元神童、それに妃殿下まで揃われては、お一人で解決に臨まれるわけには参りませぬようですよ？ 陛下」

賛同するのか、オズとヘクターまでが微笑を浮かべている。私はますます表情を顰め、そして諦めたように溜め込んでいた息を吐き出した。

Interlude ?

男たちの真実(1) (後書き)

これで出揃いました。

Interlude ? 男たちの真実(2)

(2) 日記 王と彼らと彼女と、そして(前編)

友人は反対するが、俺はこの日記を残そうと思う。

彼女がここに この世界に確かにいたという証拠とするために
彼女はほとんど何も持たずにやってきて、かけがえのないものを
残して去っていった。その名を花につけてやるくらいしか、俺はし
てやれなかったから。

ユリア。俺はおまえを……。

私とその本に辿り着いたのは、偶然からだった。当時ある悩みを
抱えていた私は、その元凶を探るべく王専用の書庫を漁り、それを見つけた。

第一妃親子に席を譲り、オズの隣に移ったシャルルが、中の紙が
茶色く変色した革表紙の日記を手に取り、ぱらぱらとめくる。

「ディーノ」オルフェイド……例の、王后制を撤廃した最初の王で
すな」

「オルフェイド王といえば最初の異界の乙女が訪れた時の王であり、
数々の灌漑事業を成し遂げた方だろう。なぜそこで王后制の撤廃を
取りあげるのだ」

アルマンが、不満の声をあげる。シャルルは私を見ずに、薄い唇
に笑みを湛えて首を振った。

「いえ、ふと思ひ出されましたので」

「閣下、王后制は本当に撤廃されたのですか？」

ツークス領主が、丸眼鏡の向こうから目を輝かせて問う。空気の
読めぬやつだ。

「確かにオルフェイド王以降の王は、后を迎えず、複数の妃を娶って数ある子の中から王太子を選出するのが慣例となつていますが、王后位を撤廃したとは記憶していませんが？」

生き生きとそう続けた後、まだ二十一才の領主はテーブルの向こうのジェニアに目を遣り、その隣の王子を見て、しまったという顔で片手で口を覆った。今さら遅い。

間の抜けた元神童に、早熟の天才だの奇才だのと呼び称された男が溜息と共に教えた。

「事実上の、という意味での撤廃だ。かの王はなにしろ、正妃たる王后を迎えずに妾妃を迎えた最初の王ゆえな」

「ですが、オルフェイド王の妃は御一人だったように思いますが？」
とりなすようにヘクターが口を挟めば、またも領主が混ぜ返す。

「御一人つて、あの無知文盲の無名貴族の娘でしょう？ 子もなさず他の妾妃も迎えずで、王亡きあと熾烈な後継者争いを起こした引き金ではありませんか」

「御子が生まれても生まれてなくても、争いは起きる。王位というものはそういうものだ」

そう、かくいう私も、それで五人の子を亡くした。そのうち二人はジェニアとの子で、そのことがきっかけで私はこの妾妃制に疑問をもつようになった。

私自身も先王ディーノールハディンの第二妃の子で、十二人の兄弟がいる。だから王が王后を迎えずに多くの妃をもつのは当然と思っていたが、二人目のミアシルを亡くし、ジェニアとの仲に亀裂が入ってようやく目が覚めたのだ。

そもそもジェニア以外の妃は、前太政大臣クロヴィス・レン・クガイーフージェ・ハランが差し出してきた、かの血族の娘だ。わが母もその一族だというに、空恐ろしいことこのうえない。

目の覚めた私は、手を回してアルマンをイェドに移し、ジェニアを厳重な守りの下に置いた後クロヴィスを解雇。シャルルを起用して、本格的なフージェー族の排斥に着手した。

その際にこの元凶を作った男に興味を持ったのだが、そのことはあえて口に出さずとも良いだろう。シャルルは気がついたようだが。堪りかね、オズが強引に話を戻す。

「それで、今ここでなぜディーノ・オルフェイドの名が出るのだ？」

「ああ。この日記が、かの王のものだからだよ」

そう答え、シャルルは片眼鏡を掛けると、日記を読みはじめた。

- - - - -

天鳴三年 吉の月八日

この日は生涯で忘れ得ぬ日だ。ソロンの予言した、三月の合の日というだけでない。

その夜、俺は初めて彼女と出逢ったのだ。

夜二の鐘が鳴った頃、湯浴みを済ませた俺は一人寝室に向かった。休むには早い時間だが、実は神官長から異界の乙女を召還する儀式に参加するよう言われていたのを、体調が優れぬと言いついて早々に引き上げたのだ。仰々しいお祭り騒ぎに付き合っ気にはなれなかった。

ベッドに横になると、部屋の隅の窓から月明かりが淡く差しこんでいる。満月にしては暗いそれは、合の始まりを意味していた。しばらくじっと青い光を見ていたが、何も起こる様子はない。

ため息をつき、寝返りをうった。横向きになって目を閉じる。すると。

どさつという音と共にベッドが弾んだ。というより、確実に量感のあるものが背中側の空いている箇所にとさたと感じ、俺は咄嗟に枕の下の短剣を引き抜いて身を起こした。

驚いた。

そこにいたのは若い女だった。衣服は纏わず、大ぶりのタオルを一枚素肌で巻いているだけだ。夜這いは初めてではないが、明らか

に気を失っている。しかも艶やかな髪は、したたるほどに濡れていた。

どこから来たのかと天井を見上げる。戸板が外れたようにはない。壁も床もベッドそのものにも仕掛けは見当たらなかった。

手っ取り早く本人に聞いてみたいが、肩を揺さぶっても女は目覚めない。戯れに、裸身を覆うタオルを解いてみる。

細いわりに豊かな胸元。硬い印象の腰の線は、まだ男を知らないのだろうと思った。おぼろな月の光に照らされる象牙色の肌は美しく、正直悪くない眺めだった。

顔を良く見ようと身を乗り出すと、低く呻き、女が瞼を開けた。

心臓を撃ち抜かれるというのは、あのような瞬間を言うのだろうか。長い睫毛に縁取られた大きな瞳を見た瞬間、俺は世界がひっくり返ったような衝撃を受けた。

俺を魅了したその瞳は、次には大きく見開かれ、振り上げた右手を俺の頬に打ちつける。小気味いい音が左耳の傍で鳴った。

「おい待て。おまえが忍び込んできたんだぞ？」

手首を捕らえてそう告げれば、みるみる目に涙を溜めた女が、まったく聞き覚えのない言葉で喚きはじめた。

「なにを言っているんだ。言いたいことがあるなら、せめて通じる言葉で喋れ」

そう言ってから、俺はやっと気がついた。

濡れた髪、穢れを知らない体、初めて聞く言葉。

振り返ると、窓から差し込む月光は、今まさに満月の明るさを取り戻しつつある。

「そこを動くな！」

女に命じ、俺はガウンを羽織ると部屋のドアを開け、大声で侍従を呼ばわった。

「キリアンを呼べ！ 今すぐ即刻ここへ連れて来るのだ。例の指環とやらを持参させよ！」

-
-
-
-
-

その場を包む何とも言えない沈黙を破ったのは、どうにも空気を読めない男カイエ・エルタダ・カーツォ・ツークセアだった。

「やー、他人の日記というのは恥ずかしいものですねぇ。聞いているだけで背中がかゆくなつてきましたよ」

頭に花畑でもありそうな若者に、オズが冷たい一瞥をくれる。

「それよりも、どうということだ？ 最初の異界の乙女を発見したのはキリアン魔法士ではなく、オルフェイド王だというのはか？」

「ええ。さらに問題は、異界の扉がこの王城の」
「僕の居室にあるということだな」

ヘクターの言葉を継いでそう言つてやれば、皆からすごい形相で睨まれた。予想していたことではあるが、いささかたじろぐ。

大規模な？異界の扉？探索を指揮し、その不首尾を大臣たちに厳しく責めたてられた魔法士長の眼差しは、特に殺気立っているようだった。

「つまり、陛下はずっとこのことを御存じで？」

「そう怒るな」

「怒っているではありません。呆れ果てているのです。王、これを御存知の上で、異界の乙女を見つけた者に王位継承権を与えるなどとおっしゃられたのですか？」

「そうだ」

泥沼の王位継承争いは、ずっと悩みの種だった。フージェー族の勢力を削ごうとする私が誰かを指名すれば、おそらく確実にやつらはその者の命を狙うだろう。全面戦争に火をつけるようなものだ。

アルマンをイエドに遠ざけている今はまだいいが、彼ももう子どもではない。状況を理解し、天都に来ることを望むかもしれない。そこで考えたのが、異界の乙女の威光を借りることだ。

異界の乙女は神殿の領域。その発見者もまた、丁重な保護下に置かれる。神殿はフージェー族とも密な関係で、古くはむしろ神殿側に主導があつた。下手をすれば内部分裂を引き起こしかねない、か

の一族が一番手を出しにくい領域。それを引きずり出してやるうと思っただのだ。

幸い、異界の扉は王の寝室にあるらしい。となれば発見者は、私かその側近の者となるはず。

「で、ご自身が発見者となることで、王位継承者の指名権を絶対化しようとお考えで？ 異界の乙女の祝福を得た王が申すことならば、いかにフージェ・ハランといえども口を出すのは難しくなりましようなあ？」

隠していたことに腹を立てているのか、険の籠もった言い方でシャルルが私の考えを代弁する。

それを聞いて目を丸くしたのが、わが子アルマンだ。

「王は、本当にそのようなことを……？」

「まるで目論みは外れたがな。失望したか？」

数日前、彼が嬉々として異界の乙女発見の報告に来た時は、胸が潰れる思いだった。アルマンを蹴落とすためのフージェー族の罠ではないかと疑い、どれほど神経を磨り減らしたか分からない。ヘクターが眉を顰めるほど詳細に荷物や周辺を探らせても、リオコが偽者であるという証拠が見つからなかったのが幸いだ。

ここへ来て、やや大人びた冷静さを纏うようになった王子が、ふっと私から目を逸らす。

「いえ。王は、誰かに王位を譲る気などないのではと考えておりましたゆえ」

「それは大きな誤解ですよ、王子。この方は毎日、早く楽隠居をさせると私にせっついて仕方ないのですから」

「余計なことを言うな、シャルル」

「こんな機会は滅多にありませんので、しっかり言わせていただきます。とはいえ、この案は貴方にしては考えたほうですね」

「遠回しな皮肉ならいらんぞ？」

「褒めているのですよ、一応。前もってご相談いただきましたら、かの一族を抹殺する罠などに良い智慧をお授けできましたでしょう

に

ふふふと不気味な含み笑いと共に告げられれば、相談しなくて良かったような気もしないでもない。

「たいした隠し玉ですね、この日記は」

「他になにが書いてるのだ？ 大臣」

「ツークス領主の言い草ではありませんが、奥歯のむずがゆくなる甘い描写がちらちらと。良ければお読みしますが？」

「……いや、いい」

顔を赤らめて、アルマンが俯く。少年らしいその様子に、イエドにやったのは正解だったと心中で安堵していると、横目でジェニアが睨んできた。息子の純朴さを喜んでなにが悪いというのだ。

シャルルの手が、紙音が流れるように日記のページをめくっている。あれで一字一句読めているのだから、天才の頭脳というのはほんと呆れる。

「ああ、ここは面白い。オズ、見てみる」

「ほう……異界の単語の一覧だな。？ニホンゴ？というのか。ふむ、表音文字と表意文字があるのだな。神聖文字に近い気もする」

「表音文字が二種類あるうえに表意文字のこの種類の多さは……よくも聞き出せたものだ」

数ページにわたる文字の羅列と解説に、さすがのシャルルも呆れた声を洩らす。

「こちらは見たような文字だ。古語、いや古代魔法文字に似ているな」

「ディーノ＝オルフェイドとは、つくづく驚くべき王であるな。欲しい情報を的確に記してある。？これはエイゴという他国の言葉で、素養として学校で習うもの。この言葉は広く異世界で話されているらしい？そうだ」

「そういえばマキも、異界には百近い国があると言っていたようです」

身を起こし、ヘクターがテーブルの向こうから覗き込めば、たち

まち小さな日記は頭の影に埋もれた。覗き損ねた青年領主が不平を洩らす。

「師匠、僕にも見せてくださいよ。し・しよ・う！」

「年功序列という言葉を思い知れ、若造」

オズの一喝に青年は口を噤んだが、代わりになにやら手の中の物体をつつきはじめる。確かこの部屋に来たときに「謎解きの手助けをする」と言っていたものはずだ。

武器とも思えぬその物体の表面を彼の指先が弾いた、そのとき。

「！」

目の覚めるような音の渦がそこから響き渡った。アルマンが立ち上がり、腰の剣に手をかける。

だが、いつもならば真つ先に攻撃を仕掛けるオズは、泰然と椅子に腰掛けたままだった。盤上に付いた手を顎に当て、ちらりとそちらに目を配る。

「小僧、なんだそれは？」

「……さすが魔法士長。動じませんね」

「魔法力ひとつ感じぬ物体だ。音を発する以外に、何か芸ができるのか？ できぬのなら止める。耳にうるさくてかなわん」

「まあ、お待ち下さい。お見せしたいのは、こちらです」

銀色の物体の上半分を明るく照らす、光の窓を指で示す。そこには色が渦を巻き、同時に数語の文字列が浮かんでは消えていた。

「これは、今回の異界の乙女から預かった？ おーでいお・ぶれいやー？ というもの。音楽を再生できる機械です。この文字はおそらく流れている曲の題名を表わしているのでしょう」

「ふ……ん、なるほど。この日記にある？ エイゴ？ と同じ文字のようだな」

「でしょう？ 僕はこれを確かめたかったですよ」

砕けた口調で言い、ツークス領主はようやく手の中の異界の楽器を止めた。

「なぜ、異界の文字がここに存在すると？」

「リオコ嬢の荷物を調べた後、返したというのが気になったんです。返したということは調べ終えたということ。つまり、その荷物が異界のものであると断定できる証拠。比較対象となる何かを天都は隠しているのではないかと睨んだんです。当たり前、でしたかね？」

小面憎く笑う。元神童というのは、嘘ではないようだ。

事実、リオコの荷物にあった文字類はすべて私自身の手で調べ、異界のものだと確かめたのちに返却を許した。 たったひとつを除いて。

鞆の内ポケットに入っていた封書。それを解読した時、私はかの少女が間違いない異界から来たのだと確信したのだ。

あれを知ることが、あの娘にとって良いことなのか……。

分からぬ。それでも、この場でなにがしかの答えが出ることを私は期待していた。

もし、皆がここでわたしの出した考えと同じ答えに達するならば、そのときは。

いかにしても、どのような責任もとる覚悟はできていた。

思いを巡らす間にも、領主の軽口は続く。

「まさか言語そのものが、こんなふうには体系化されて残されているとは思いませんでしたよ。やー、師匠に頼み込んでついて来た甲斐がありました」

「それはリオコの荷物の中にはなかったようだが？」

「えーあー、あのもう一人の方がうるさくてですね。持っておくように言われました」

「うるさかったのはあなたでしょう、カイエ」

ヘクターが指摘すると、悪びれずに肩をすくめる。

「ここにいらっしやる方々と同じく、僕も疑うのが仕事です」

「要するに、おまえがうるさく疑うから、マキが腹を立てて証拠の品を渡して行ったという訳か。……マキらしいな」

語尾にかすかに甘いものが混じる。思わず王子を見つめた私の足を、テーブルの下で、こっそりジェニアが爪先で蹴ってきた。触れ

るな、ということらしい。

そうか、アルマンは異界の乙女を……。

長年離れていたわが子の成長ぶりに、いささか気分が老け込む。

口元に手を当て、流れ出る嘆息をごまかした。

「しかし、異界の言葉を見るだけでなく耳で聞くというのも新鮮な感覚だな。？ニホンゴ？の曲はあるのか？」

「ありますよ。ただし問題がひとつ」

領主はおーでいお・ぷれいやーを手にかざし、もったいぶった仕草で指を一本立てる。

「魔法士長。魔法で？声玉（こえだま）？を送る場合、相当の技量と魔法力があると聞きますが、確かですね？」

「ああ。おまえが何を言いたいのか分からんが、声玉の術をもってしても、その音楽機械のような業は無理だろうな」

「まさに、言いたいのはそこです。これは異界の文明そのものです。僕たちの文明に似たものはあっても同じものではありません。いや、できないのです。」

さらにもうひとつ問題なのが、物には対価が必要だということ。

すなわち、未知の文明の産物であるこのおーでいお・ぷれいやーから音・光・文字の再生を促すと、目には見えない、声玉で言う魔法力に相当するものが消費されるわけです。ところが僕たちに、それを補充する手立てはない。話を総合すると

「使い過ぎると動かなくなるということか。もったいぶるな、この馬鹿造」

オズが、顎を乗せたままの指先で、塵ほどの魔法光の欠片を領主の額に命中させた。

「あだっ！」

「そんなことは分かっている。おまえやわれわれだけでなく、勿論異界の乙女もな。使い過ぎれば二度と動かなくなる、代え難い故郷の品をおまえに託した想いをどれほどのものだと思っているのだ、愚か者め」

「……分かってますよ、僕だって」

手のひらで額を押さえ、言い訳をする子どものように青年領主が
呟く。

「たった一度会っただけの人間に、こんな貴重なもの手渡して、憎
まれ口叩いて出て行って。返す保障もないのに、勝手に信じて。だ
から僕も、来たくもないこんなところへ出てきたんじゃないですか」
「……」

「せめてこれが本物だって、誰もが認める証拠だと胸を張って公言
できるようにするために、こんなところまで来たんじゃないですか
！」

「だったら、簡単なことだ」

オズの声は揺るぎない。

ヘクターのような流れる水を思わせる声ではなく、大地に差し込
む朝日のように胸をさす声。

「おまえ自身が、まず信じればいい。この　　オルフェイド王が信
じたように」

差し出された日記を見つめる青年の瞳は、ほんのわずか潤んでい
るようだった。

Interlude ? 男たちの真実(2) (後書き)

注(王后)おうごう(と読みます。

日本語ではないのですが、「王妃」だと「妃」と混乱するので
使用しました。

Interlude ? 男たちの真実(3)

(3) 日記 王と彼らと彼女と、そして(後編)

天鳴三年 壱の月二十六日

待望の雨が降る。そして俺は、世界で最も大切なものを失った。

今も後悔することがある。それは、彼女を一人で聖地に向かわせたことだ。

断っておくが、決して彼女から目を離れたわけではない。巨大な石柱遺跡である聖地 その一端に触れた途端、彼女は、俺とキリアンの前から煙のように姿を消してしまったのだ。

俺たちは、なかば狂乱状態になって彼女を探し回った。そして一時間近く経った後、消えたときと同じように突然、彼女が再び俺たちの前に現われたのだ。

『ごめんなさい。わたし、もう一緒にはいられないの……』

唐突に告げ、すでに泣き顔だった彼女は、ぼろぼろとその場に泣き崩れた。訳も分からず、俺はただ彼女を抱きしめるしか出来なかった。

なにがあつたのか、なぜなのか。一体どこへ消えていたのか。

俺たちの問いに、彼女は『答えられない』と言うばかりだった。

その左腕には、今までなかった光り輝く幾何学模様の紋が浮かび上がっている。

「なんだ、これは？」

『分からない。なんだか、印みたいなのをつけられて……？ 鍵？ だつて』

「聖地の中に誰がいるのか？」

『言えないのよ、オルフェ。本当に無理なの。これ以上わたしを困らせないで』

「……そいつを殺してやりたい」

『だめ！ そんなことをしちゃだめよ。そんなことしたら……みんなが不幸になっちゃう』

大きな瞳に溜まる涙を指で拭い、彼女は気丈にふるまった。

『わたし、この世界が好きだから。雨、ちゃんと降るように、お願いしてきたから』

「もうどうだっていい。おまえがないのなら、この世界に意味などない」

『だめだよ、オルフェ。王様は、この国のこと一番に考えないといけないんでしょう？』

「行くな。俺にはおまえが必要だ」

『……オルフェ、ごめんね。でも、行かなくちゃ』

「行くな……っ！」

『今まで、ありがとう。オルフェが立派な王様になるの、わたしずつと見てるから。ずっと　ここで見てるから』

そう言つと、彼女は俺の腕の中からするりと抜けた。抜け落ちた温もりは、俺の心の一部を奪っていったようだった。

手に嵌めていた指環を取り、彼女はそれをキリアンに返すと、彼を抱きしめる。

「ありがとう、キリアン。オルフェ。……さよなら」

そして、彼女は消えた。

何も無い石の壁を見つめる俺の眼に、光るものがよぎる。それはぼつりと足元の岩に落ち、小さな染みを作った。次第に数を増し、俺の髪や肩を叩きはじめる水の雫に、つられるように俺は空を見上げた。

鈍い色の空。待ちに待ったはずの雨は、天が声をあげて泣いているように思えた。

雨がこんなに冷たいものだ、俺はこのときはじめて知った。

.....

「本当に……この通りのことが起こるのだろうか」

「起こらないとは言い切れません。ただ、起こるとも言えないでしょう」

アルマンの不安に、シャルルが冷静に意見を述べる。

「なにしろ、前の乙女とは別の扉で来た乙女たちですよ？　しかもお二人も。なにが起ころうと不思議はありません」

「……そうだな」

冗談めかせば、強張っていた顔もわずかに緩む。

「しっかし、どうも納得できないんですよねえ」

「なにがだ、若造」

「オルフェイド王の行動ですよ。公務を放り出して、二十日間近くも乙女の随行をしたことはまだいいんですよ。問題は」

手を伸ばし、領主が盤上の日記を指先で叩く。

「こんな詳細に言語の一覧なんぞ作れる人が、なぜ無学文盲の娘を娶ったかってことです。しかも、あれだけ異界の乙女に骨抜きにされておきながら」

「まだこだわるか」

「だってそうでしょう？　かの王は様々な面で完璧なんですよ。政策も人格も革新的なところも、まさに？　雷王？　の名にふさわしい偉大さだ。ところが、たったひとつ欠けているんです。いや欠けているのではなく、そぐわないと言っているでしょう」

「一説には、心に秘めた相手とそっくりな容姿をもった娘を見初めて、強引に妃に迎えたと聞きますが」

ヘクターの言葉に頷いて、オズが続けた。

「確か、妃の名はユーリアナ。まさに想い人の名前をマフォーランド風につけたわけだが、真名はなんと言ったのかな、シャルル」

「ミア・ヴィオラ・ユーリアナ・ルーア・タチアナ。別名ユーリアナ・トゥーディ。王の側近タチアナ公の養女となったが、出自は不

明。タキ「アチファの村を訪れた際に王が見初めたとも言われる」

「そして身分の低さゆえ、王の寵愛を一人受けながらも妾妃に留まり、亡き後も王墓に共に埋葬されることはなかった」

「本当か?!」

付け加えられたツークス領主の一言に、アルマンが驚きの声をあげる。妾妃に対し、そこまで厳しい措置をとられることは歴史上滅多にないことだ。

「おかしいですよねえ? この妃に関してはおかしなことばかりです。なぜ、あれほどの威勢を誇った王が、寵愛する女性をこうもないがしろにしていたのか。あるいは、ないがしろにされることを許していたのか」

よく口の回る青年領主は一度語を切り、促すように一同を見渡した。

「そこで、観点を考えてみてはどうでしょうか? オルフエイド王に関わる怪しい点はすべて、彼の意志であるとするんです」

「王の意志? つまりそれは……」

「異界の扉および、王自身が発見者であり乙女の随行者であったこととの隠匿。そして何者ともしれぬ娘を妃にしたこと、その遺体を誰にも知られぬ場所に埋葬したこと。これらすべてが、ひとつの意図の下にあったのだとしたら?」

「妃であることの利点を考えればよいだろうな」

思ってもみない方向へ進む話を、意外にもシャルルが後押しした。「非常時には王の代理ともなる王后に比べ、妃は公的な立場が薄い。権力は弱い、そのぶん公に身を晒す必要はなくなる。姿を見せぬ王の恋人というわけだ。」

まったく、かの王はこの妃をどこまでも隠したいらしいな。遺体までも」

「それに、妃の時間はわりと自由でしょうしねえ。字を覚えたり、さまざまな勉強をしたりする暇があるわけだ。あるいは……文字を教えることとかも、ね」

意味深な眼差しが、古びた日記に注がれる。アルマンとヘクターが戸惑いの顔を合わせ、オズが驚きの声をあげた。

「まさか、そのようなことが……」

「有り得ないと言いつ切れませんか？ この単語の一覧の分量と丁寧さは、二十日やそこから仕上げられるものじゃありませんよ。当時としては画期的なオルフェイド王の灌漑事業も、もしかしたら別の智慧が働いているという可能性だってあるのですしね？」
信じろ、と言ったのはあなたですよ、魔法士長。」

その場を得心したような空気が流れる。張り詰めた後に訪れる安堵感に似た、やわらかく差し込む希望の光。

「では、乙女は」

「この物語には、続きがあるということだ」

シャルルが先程まで読みあげていたページをめくった。その先に文字を書き込めるページはなく、硬い革の裏表紙が本の終わりを告げている。

ぱたりと音をたてて閉じられた日記の裏には、1の刻印がうつすらと刻まれていた。

やはり……。

私は頬杖をついたまま、固く両目を閉じた。皆が私と同じ結論に達してくれることを願っていたが、得も言われぬ感慨が胸中を突き上げる。

もし、これが真実であるなら。

もし、たった一人の女性を守るために、これらすべてが在ったのだとしたら。

私は一体、今まで何に囚われていたのだ……。

過去の自分の愚かさを痛感する。これに気付かなければ、大事なものを失くしていたかもしれないという思いが、私の身の内を冷たくさせた。

テーブルの下で、左手を伸ばす。わずかに身じろいだ妃が、細い指を指に絡めてきた。

「ジェン。この後、乙女たちが無事に還ってきたら……言いたいことがある」

「……はい、わが君」

小さな声で交わされた会話を耳聡く聞きつけ、シャルルが軽く私を睨む。

「陛下、これ以上の隠し事はご勘弁くださいよ？」

「なに。単に？慣例？というやつを打ち破ろうというだけだ。大したことではない」

乱暴に言えば、やや驚いた顔で皆が見た。ヘクターがテーブルの下の手を見透かすように微笑み、その視線をアルマンへと移した。

「では……王位継承問題も、これで解決というわけですね？」

「乙女を見つけた者に王位を譲るという約定、陛下ならば果たしていただけるかと信じておりましたわ」

「誤解しているようだが、神官長。母上」

艶やかな声で、アルマンが呼びかける。

「乙女の正式な発見者は、わが部下ムシャザとアクイナシア魔法士だ。あの二人が王位に就きたがるとは思えぬが、候補とするならば彼らの方であろう？」

「しかし、ミア＝ヴェール」

「それに……俺は、今は王位など欲しいと思わぬ」

にやりと口唇に笑みを湛えて告げられれば、あのツークス領主ですら目を瞠った。

「お、王子。俺って……」

「おまえこそ？僕？だとか抜かしていただろう。そのことは良い。ともかくも俺はまだ、王位に興味はない。だからといって今ここでイエドに帰る気などないが……少し、おのれのやるべきことを探してみたいのだ」

なにが彼にこの台詞を言わせたのかは分からぬ。それでも、ジェニアに良く似た線を描く顔立ちは、天へと羽ばたく若い猛禽のごとくまっすぐに澄んでいた。

「私の目には、殿下の御心はすでに決められているように視えますが？」

「単に胆（はら）を括ったというだけだ、魔法士長。俺は未熟だ。知らぬことも多い。それをこれから掴み取るのに、露ほどもためらいはせぬと決めたまでだ」

「微力ながら、お力添え申し上げます」

「ああ、頼む」

泰然と頷けば、ジェニアが私と繋いでいるほうとは別の手を、王子へと差し伸べた。その手を取り、彼が私を見る。

「すべての準備が整いましたら、そのときは貴方から直接王位を奪いに参ります」

「……よかるう」

来るがいい、わが息子よ。猛禽の爪をわが喉元へ喰らいこませに訪れる日が、今から楽しみだ。

まさか、このような会話を交わす日が来ようとはな……。嬉しいような苦いような複雑な想いが去来する。神聖な空気を、ツークス領主の声が破った。

「ですが、王子。乙女を天都へ連れて来た褒賞くらいは頂いてもいいんじゃないですか？」

「ああ、それは俺も少し考えていた」

物をねだるなど滅多にない息子に、思わず問いただす。

「なんだ、申してみよ」

「いえ……このたび王がどうしても私をイエドに戻されるならば、承諾する代わりに母を共に連れて行くつもりでおります」

「まあ素敵」

につこりと嬉しそうに、ジェニアが息子の手を握る。が、私はちつとも嬉しくない。

「それは……認められぬ」

反射的にテーブルの下で繋いだ手に力を籠めた。ジェニアが睨む。「あら、わたくしはイエドに参りましてもよろしくてよ？」

「認めぬと申しとおろうが」

ようやくただ一人を傍に置くことに決めたというのに、冗談ではない。その想いが顔に出ていたのか、一同から失笑が洩れた。

アルマンまでもが、困ったように頬をほころばす。

「分かりました。では、お二人で参られればよろしいでしょう。天都と違ってなにもありませんが、イエドは良いところですよ。歓迎いたします」

二人で、か。それも楽しそうだ。

「ああ……良いだろうな」

かすかに笑う。戸惑い、それでもはつきりとした笑みをアルマンが返した。

オルフェイド王よ。このような結論でいいのだろうか……？
心の内で、そつと過去に呼びかける。

そなたが守り抜いたものがあるように、私にも守るべきものがあるのだ。

この私の決断を、後世のものは愚かだと誹るかもしれぬ。それでも、再び繋いだこの手を離す気など、可能性すら私の頭にはなかった。

……乙女たちよ。なにが起ころうと、例えどのような真実を目にしようと、必ず聖地より戻り来たまえ。

再び見えたそのとき、私は語ろう。かつての乙女が何を遺したのかを 何をもたらしたのか、その真実を。そして、この手紙に託された人の想いを伝えよう。

われわれは、はかない一本の糸だ。だからこそ、繋がってゆける。神が思い描こうとした紋様でなくとも、われわれはこの手でおのれ自身の人生を描いてゆけばよいのだ。

迷いながらも歩む道、共に繋がるこの想いこそが、真の運命なのだから。

私はもう一度微笑み、后と繋いだ手をそつとテーブルの上に置いた。

Interlude ? 男たちの真実(3) (後書き)

次章はマキです。(時間がちょっと戻ります。)

聖地に近づく急勾配の岩の道は、登れば登るほど空気が乾燥してきて、厭な予感はしていた。言動から元気印に見られがちなあたしだけ、喉、弱いんだ。コーラス部としては致命的なんだけど、合唱をはじめたきっかけもそれだったりするわけで。

ヒューガラナを出せばらしくして、いがらっぽいなーと思っただけ、ルイスは登山慣れしてない理緒子につきつきりだし、タクは珍しく考え事に没頭していて、ふざけて話しかけるくらいしか出来なかった。まだきちんとマフォーランド語も話せないしね。

で、気張っていたら、予想通り発熱。野宿のテントで横になったとたん悪寒がして、さすがに理緒子に気分が悪いと訴えた。手のひらをあたしの額に当て、理緒子が悲鳴をあげる。

「すっごい熱じゃん！ やばいよ、すぐにルイス呼んで来る！」

いや、そこまで大袈裟にしなくても思っただけ、その頃には喉の奥が風船でも詰まったように重くて熱くて、声が出なくなっていた。体を起こしたくても、ふわふわして力が入らない。

ああ、またみんなの足引っ張っちゃうな。

ガウルの子のことも迷惑かけたのに、こんなことで旅が遅れるのが申し訳なかった。

「xxxxx？」

やってきたルイスがマフォーランド語で、大丈夫か的なことを言ってくる。あたしは横になったまま、ずりずりと荷物を引き寄せ、ルーズリーフに？昔からへんとうせん（漢字が分からなかった）が腫れてよく熱出すから、たぶんそれだと思う。寝てれば治る？と書いて見せた。

それを読みあげた理緒子の声や、ルイス、タクの声が耳の中で変

に反響して、うるさくてかなわない。とりあえず、今は一人で横になつて眠りたかった。

？後から追いつくから先に行つてて？と書き足すと、理緒子がむつとした顔になる。

「置いていけるわけないじゃない」

でも、もうすぐ心が弱つてた。すぐくお家に帰りたい。ルイスにルーズリーフとペンを取り上げられ、支えるように腕を回されると、あたしはぐったりと倒れこんでしまった。

夢を観ていた。夢の中のあたしは、自分の部屋のベッドで寝ていた。夢だなと思つたのは、周りでのろんな物音がするのに、起きれなかつたから。

一階で母さんが料理している音。包丁で何か刻む音とか、フライパンで焼いてる音。冷蔵庫の蓋を開け閉めする音。板の間を歩く足音。

「真紀、ごはんよー」

のんびりした明るい母さんの声が呼ぶ。

「はよ降りて来いや。飯でー」

なぜか県外に行つてるはずの兄の不機嫌な声。

「真紀、寝てるのかー？ ご飯、冷めるぞー」

父さんが部屋を覗き込む気配。

なのに起きれない。あたしはここに居るのに、返事もできない。

あたし、ここだよ。お願い、誰か起こして。

心の中で呼びかける。体が重くて重くて、顔を動かすこともできない。ふと、ふんわりとした柔らかいものが頬に触れた。少しくすぐりたい。

薄目を開けると、目の端に淡く光る金色の毛並。頭に触れるやさしい体温。飼い犬のミニチュアダックスのシナモンだ。ちゃんと専用の犬ベッドを部屋に置いてあるのに、調子が悪くて寝てると、こうして時々枕元に来るんだ。に、しても顔が見えない。

しーの馬鹿。人がしんどいのにお尻向けて寝るなよ。

腹が立って、指で突いてやろうと手を伸ばす。長毛にしては短い金色の毛束は、だけどいつもと違って、さらりと繊細にあたしの指の間を通り抜けた。

あれ、シナモンじゃない……？

不思議に思つて、目を凝らす。あつたかいし金色だし、こんな傍にいるのはシナモン以外に考えられないし、とあたしは思いを巡らす。

「しーくん？」

呼びかけてみれば、誰かが答えた。マキ、と呼ぶ声。不思議に響く声色。

ああ……あれ、あたし一体今どこにいるんだつたけ？

思い返す。自分の部屋でベッドに寝てて、ご飯なのに起きれなくて じゃなくて。

そうだ、部活から帰って家のドア開けたら、変な場所に居たんだ。今ベッドに寝てるってことは、あれは全部夢だったんだ。別の世界のかっこいい魔法士の人に出会って、理緒子っていう子と友達になって。

『マキ』

そう、こんなふうにやさしい声で呼ばれたっけ。年上でひねくれて、でもやさしくてちょっとセクハラで、あたしの髪が好きだつて、守るって言うてくれたのに突然元婚約者とか現われて 彼のことちよつといいなって思つてたあたしは、かなりショックで。

『マキ。マキ、しつかりするんだ』

やさしい声で呼ばないですよ。一生懸命好きにならないようにしてたのに、なんでいつも気にかけてくれるの？ 大事なものを見るみたいなお目で見えるの？

『マキ、お願いだから、この薬を飲んで』

薬ってなに？ あたしはもうすぐ起きて、母さんの作った晩御飯食べるんだから。こんな夢なんて、すぐに覚めちゃうんだから。

青空みたいな目の色とか、笑い皺とか、低く笑う声とか、長くてきれいな指とか、思ったより広くてしつかりした胸板とか、みんな忘れ
ムナイタ？

ぼやけた脳みそに広がるキーワード。頬に当たる平たい感触は、ベッドじゃない。それに視界に差し込む金色のふわりとしたものは、髪の毛だ。

「ルイス……？」

え、これって夢じゃなかったっけ。あれあれ、どっちが夢だ？
呆けたままのあたしの頭に、聞き慣れた男の声が響く。

『マキ、薬を飲んで。楽になるから』

やけに息が近い。あのソファでべったりしたときよりも、確実に密着している。なんだかこう、後ろから抱きしめられて半分彼を下敷きになっている感じだ。

熱でぼやけるあたしの目に、あたしを抱きかかえる彼の体から、淡い光の粒子みたいなものが立ち昇っているのが見えた。

きれい……だなあ。これって治療術……？

そんなに密着するほど、あたしの容態は悪いんだろうか。これ以上迷惑かけるのもまずいから、薬くらい自分で飲まないと、と頭を起こす。

『ほら、これで熱が下がる』

口元に差し出されたそれを眺め、あたしはちよつと止まった。いや、お椀に入っている液体が薬だってことは分かる。うん、そんな匂いがするよ。

だけど、熱に浮かされてるあたしでも、それが不味い雰囲気だっというのは分かった。だってどう見ても、青汁も真っ青な深緑色なんだよ。しかも、ライムグリーンが点々と。

無理。むりむりむりむり、絶対こんなの無理！ 錠剤とは言わないけど、せめて粉薬！

反対向きから覗き込むルイスを見上げて、視線で訴える。それをどうとったのか、ルイスはややお椀を取り上げて横を向いた。

ふう、青汁回避。

と思つたのに。突然あたしの頬に手を当てたルイスが、顔を近づけてきた。視界がふさがる。同時に生ぬるいどろりとしたものが、口いっぱい広がった。

にが……っ！

熱もいっぺんで吹き飛ばような苦さだった。正確には、にがにがにがにがにがにがい、人生最上級の不味さだ。しかも驚いている間にごっくんしてしまうし、口の中のものになくなったと思つたら、なんと次が来た。

ルイスの馬鹿っ！

殴つてやりたいけど、体に思うように力が入らない。熱なんて出したの誰だよ、まったく。

薬の苦さだけじゃなくて、涙が滲んだ。だってだって、初めてだったんだよ？

幼稚園の頃のちゅーはカウントされないとかじゃなく、本当に真正銘の初めてだったんだ。

ルイスの馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿あぁっ！

恋愛値の低いこのあたしにも、一応夢つてものがあつたんだよ。遊園地とか浜辺でとかじゃなくてもいいから、気持ちの通じ合った人ときどきうっつりの感動的な経験をさ。

でも現実には、なかば強引に薬を飲まされてるわけで。しかも、きつちり六回。

えーえー、さすがのあたしも数えたよ。大事なことから、この熱で動かない頭をフル回転させましたとも。

もう、ほんと最低だよ……。

相手がルイスだったことじゃなくて、こんなふうな事務的にされたのがすごく嫌だった。口の中は苦くてたまらないし、体は熱くてぼうつとしてるし。

あたしの口を強引に開けたルイスの唇が、ちゅっと湿った音をたてて離れていく。状況だけ考えればすごく濃厚なんだけど、口の中

は薬だらけでニガニガだ。ファーストキスは良薬の味だなんて、もう乙女心真つ二つの粉々だ。

目の端でルイスがお椀を下に置いたのが見えたから、終わったと思ったら。

『ほら、お水飲んで』

ちよつと待った。それは水筒でくれれば自分で飲むし！

「ん……っ」

抵抗しようとしたら、変な声が出た。あたしが押し返そうとしてるのが分かったはずなのに、ルイスはそのまま口移しで水を飲ませてる。鼻から出たらどうしてくれる！

ちよつと待っててば……息、しんどいし。

しかも、なんだか今までより長い。水が流れ込んで口の中がすつきりしたせいか、彼の感覚がさつきよりはつきりと伝わってきた。

ルイス……？

距離ゼロからの息がやけに熱い。熱でもうつったんだろうかと、瞼を開ける。

ちよつと斜めの、逆さ向きから見るルイスの顔は、表情がはつきり分からなかった。

「マキ……」

マフォーランド語で何か呟いている。よく分からないけど、ダメだとかちゃんと見てとか言ってるみたいだった。しかもすごく苦しそうな声で、囁くように。

「ルイス……？」

不安になって手を伸ばすと、ルイスが顔を上げて指先を軽く握ってきた。

『ごめん……でも、これで熱が引くから』

治療術を使いすぎて送心術が使えなくなったわけではないらしい。ルイスは残った薬をとるつもりか、あたしの唇を指で拭い、額に貼りついた髪の毛をかき分けた。

『すぐに良くなる』

おまじないのように、額に唇を落とす。握った指先にもキスをし
て、あたしを後ろから抱えた体勢のまま、繋いだ手をお腹の上に置
いた。

なんでよ……？

薬の味が染み込んでいくように、重なった手の乗るお腹が鈍く痛
む。

ねえ、ルイス。もし熱が出たのが理緒子だったら、今と同じよう
にしたの？

同じように薬を飲ませて、額にキスして、手を繋いで一緒に眠る
の？

アマラさんにも、同じことをしてきたの？

あたしって、醜い。

自分がこんなに彼のことを独占したがってるなんて、思いもしな
かった。

口に残る苦い味は、確かに薬のはずだったのに、あたしの心をど
うしようもなく苦く昏く蝕んでいった。

2

スイッチが切れたように、いきなりぱきつとあたしの頭は覚醒した。

そこにはもう、ルイスはいなかった。喉はまだ鈍く痛んだけど、体はすっかり軽くなっている。夢かと思って薄暗いテントを見渡せば、あのお椀が枕元に見えた。ほんの少し残る、不気味な緑色の液体。

夢じゃ……なかつたんだ。

唇に触れ、考え込む。でもあたしの恋愛スキルは低すぎて、何も答えを思いつかない。

隣に理緒子がいる気配がしたので、相談しようと思えば起き上がると、毛布に包まった彼女は泣いていた。

「どしたの、理緒子」

「ま……まきちゃあん」

泣きべそをかきながら、理緒子が情けない声をあげる。

「どうしよう……わたしタクに、？乙女じゃない？って言っちゃったよお……」

まじすか？！

咄嗟に驚きの声をあげるのだけは止めた。布のテントじゃ、大きな声は筒抜けだ。

「な、なんでまた？」

「うう……えと、勢いでタクに好きって言っちゃって」

「ほー」

「そしたら、タ、タクが、近くにいた自分を好きだって勘違いしてるだけだろって……忘れろって……」

毛布を両手でぎゅっと握り締め、理緒子が嗚咽する。

「君は男の人をよく知らないだろうって言われたから、思わず、言っちゃった、の……」

「乙女じゃないって?」

「……うん」

「……」

「ごめん、正直? タク大変だったなあ? って感想しか出てこない。

同情できないあたしって、友だちとして失格なんだろうか。とりあえず、言える範囲で話を繋ぐ。

「そりゃ、タクも驚いただろうねえ」

「う……は、はしたない子だって、思った、よね……?」

はしたないとか何とかより、好きって言われて断った相手から、そういう攻め方されて引かない男っていないんじゃないだろうか。まあ当事者じゃないから断定はできないけど。

しかも、タクって明らかに理緒子のこと好きな雰囲気だったはず。それが『自分を忘れる』なんて言ったってことは、彼なりの考えがあったわけ。

なんか腹立ってきたな。

変な言い方かも知れないけど、あたしはわりとタクのことを買ってる。ご主人様のアルと一緒に、口下手だから誤解されることも多いけど、タクはだいたい? 相手基準? で物事を考える。状況をみて自分のしたいことよりも、相手にとって自分がどうしたら一番いいかを優先させるタイプなんだ。

だから、彼が理緒子にきつちり一線引いてる感じとか、じれったいけど好ましく思ってた。自分だけの感情で突っ走るより、ぜんぜんいい。だって理緒子の意志を尊重してるってことだから。

なんでそんなことも分かんないんだろう。

目的の聖地に辿り着く直前の今、タクに告白したり、彼にそんな台詞を言わせるようなことをする理緒子がすごく身勝手に思えてしまう。

ずっと近くで見えてきたから、理緒子が本当にタクを好きなことは

分かる。でも、だからって素直に気持ちをぶつけることがいいとは限らない。相手にとっても、自分にとっても。

「理緒子さ、もう……タクのこと諦めた方がよくない？」

「え……」

「だってさ、うちら帰るんだよ？ それなのに、タクと両想いになつてこの先どうすんの？ タクだってそう思ってるから、断るようなこと言つたんじゃないの？」

また泣かせちゃうなと思つたのに、理緒子は真つ赤な涙目のまま、あたしをぐいと睨んできた。

「真紀ちゃんには分かんないよ」

「なにが」

「最初からルイスに守られて大事にされてる真紀ちゃんには、わたしの気持ちなんて分かんない！」

「ああ、分かんないね。好きになるのは勝手だけど、なんで後先考えずに口に出しちゃえるの？ タクが困るの、分かりきつてたでしょう」

「先のことなんていいの！ わたしは？ 今？ の話をしてるの！」

いつものやんわりした口調が嘘のように激しい口振りで、理緒子が言い返した。

「なんで？ 帰るから？ とか？ 帰るべきだ？ とか決め付けるの？ 先のことなんて、分かんないじゃない。ひよっとしたら、水門だって開かないかもしれないのに」

「分かんないから考えないってわけにもいかないでしょう？」

「考えてないわけじゃない。だけど、それよりもわたしは？ 今？ の方が大事なの！」

間の置かない、真つ直ぐな答え。あたしの胸に突き刺さる。

理緒子は、ぼろぼろ涙を零しながら拭きながら、それでも一気に言葉を吐き出した。

「わたしは、タクが好き。今まで二人付き合つたけど、自分から好きになつて告白した人っていなかった。すごく怖かった。でも言い

たかったの。今この想いを伝えないと、この好きって気持ちを引き落とすと伝えないと、わたしはわたしじゃなくなっちゃう気がしたから。未来は大事だよ……向こうの世界も大好き。でも、今のわたしを精一杯できなかつたら、それだって無意味なんだよ。わたしは今？をちゃんと大事にしたいの。だから、この気持ちは真紀ちゃんにも、誰にも否定させない。絶対に」

言ってる内容は、本当に自分勝手な自己中心なことだと思う。だけど、小さな体から噴き出すような気魄に、あたしはただ圧倒された。

だって、気づいたんだ。理緒子は誰よりもちゃんと自分自身と向き合って、この結論に辿り着いたってことに。

強くなっただなあ、理緒子。

それに比べて、あたしのこのうじうじさはどうよ？ 情けないったらありやしない。

誰よりも何よりも、自分が一番自己中心的でわがままにならないで、他に誰が肩代わりするっていうんだ。自分自身が自分の味方にならないで、どうやって胸を張って？自分？として生きられるんだよ。

馬鹿だな、あたし。

思ったら涙が滲んできた。「ごめん」と呟いて、理緒子に抱きつく。

泣いてるあたしに気がついてか、理緒子が軽く息を呑んだ。

「……わたしこそ、ごめんね。なんか頭いっぱいになったやっつて」

「うっん、こっちこそごめん。簡単に諦めろって言ったわけじゃないんだけど、恋愛スキル低いから、他にうまいこと言えなくて」

「それは分かっている。けど、真紀ちゃんには味方になって欲しかったな。だって、わたしもう、ふられちゃってるんだよ？」

「……そっか、そうだよ。ごめん」

「うっん。怒ってすっきりした。また、元気な時に聞いてくれる？」

「今じゃなく？」

「だって、真紀ちゃん病み上がりでしょ？」

忘れてました。そういえば泣いたのと考えたので、頭がくらくらする。治療術の反動か、強烈なだるさが襲う。

「やば……めっちゃだるい」

「まだ夜明け前だよ？ もうちょっと寝れば？」

「んー、でもなんか寝たくない」

そういえば、理緒子に言われた台詞で気になることがある。

「ね、あたしってそんなにルイスに大事にされてるように見える？」

「うん」

そうなのかなあ。大事な相手に、強引に薬口移しとかしないと思っただけだなあ。

「ひよっとして、疑ってる？」

「うん。ルイスがあたしを大事にする理由が思い当たらない」

「まあ、大事にされてるっていうより、真紀ちゃんはルイスの内ポケットに入れられてるっていうか、テリトリー圏内に囲われてるっていうか、そんな感じなんだよね」

微妙に表現が怖いですけど。

「ルイスって、実は人付き合いが下手なんだと思うの」

「社交的なほうではないね、確実に」

「だからね、急に大事な人ができて距離感がうまく掴めないんじゃないかなあ。それに、真紀ちゃんは恋愛ベタでしょ？ 踏み込まれると引いちゃうんじゃない？」

「うん、どん引き」

つか、踏み込まれたっていうより、捻じ込まれたっていうか再認識してすごく恥ずかしくなってきたぞ。

「だから、さらにルイスが追いかけて泥沼なんじゃん。追いかけるほうが燃えるからさ、恋愛って」

「なんだか理緒子が恋愛の師匠のようだ。」

「だけどルイス、理緒子にだってやさしいよ？」

「わたしが真紀ちゃんの友だちだからに決まってるでしょ」

「へ？」

理緒子が、物分りの悪い生徒を見るような目であたしを見る。

「あのね。ルイス、真紀ちゃん以外に眼中にないよ？　なんで信じられないの？」

「でも」

「恋愛に疎いのはしょうがないし自信がないのも分かるけど、でも保護者とか飼い主とかって、いつまでもごまかさないで」

「ペそ、と理緒子があたしの頭に手を置く。」

「ちゃんと真面目に考えてあげて。そうじゃないと、ルイスに失礼だよ」

「理緒子……」

「答えがNOでも、きちんとルイスの気持ちに向き合ってあげて。ね？」

あたしの心のもやもやと見透かすように、理緒子が笑う。少し寂しそうに。

やっぱり理緒子は強いや。

失恋したばかりなのに、恋愛経験値ゼロのあたしにそういうことを言えるって、自分がいろんな痛い想いをしてきたからなんだろうな。

ぐっと唇を噛み締めて、あたしはそのまま理緒子の肩に頭を乗せた。

「真紀ちゃん？」

ここで理緒子にさっきのことを話せば、きっと相談に乗ってくれるだろう。だけど、それじゃダメなんだ。あたしが自分でちゃんと答えを見つけないと、ルイスと自分の気持ちとに向き合えないといけないんだ。

「がんばる」

「ん、がんばれ」

くそお、タク。こんないい子ぶっちゃって、後悔しても知らない

からな。

ってか、とつくに後悔してるだろうな、たぶん。

なんて思いながら肩でごろごろなついているあたしの頭を、理緒子のやわらかい手が何度も撫でる。これじゃあ慰める相手が逆だ。

失恋しちゃった友だちには、たぶん？もつといい人がいるから元気出して？とか？あんなやつ泣いて忘れちゃえ？とか励ますのもありなんだと思う。だけど、今はふさわしくない。

なんだか理緒子はそんなことを超えてるくらい、自分でしっかり立って前を向いているように感じた。

3

眠れなくなつたあたしたちは、日が昇るころには服を着替え、テントの外に出た。火の傍にはタクが一人座っている。徹夜とかじゃないといいけど。

『おはよう』

『……おはよう』

まずい、タクと理緒子が目を合わさない。焦って話題をふる。

『ルイスは？』

『まだ寝ている。先に朝食を作るよ。できてから起こせばいい』

夜の様子がおかしかったから、念のために聞いてみた。

『あの……大丈夫、なの？』

『心配するな。彼は強い』

あたしを気遣つてか、自分のほうがよっぽど大丈夫じゃない顔で

タクは言った。

『でも、一晩中治療術使つてたんでしょ？ あたしのせいで』

『君が元気な顔でいれば、彼の苦勞も報われる。心配なら、あとで

きちんと自分でお礼を言うといい』

タクがそう言うんなら少しは安心だ　と思つたのに、ところが

全くちつとも大丈夫じゃなかった。

テントから出てきたルイスは、顔色が良くないとか機嫌が悪いとかではなく、表に薄い氷を張つたようにあたしを寄せ付けなかった。最初にアキナスで会つた時なんてものじゃない。まるで別人みたいに、冷たい眼差し。

一体どうしたんだろう。

昨日の夜のことの原因じゃないかと思うけど、ちつとも思い当たらない。第一、熱で浮かされていたんだから、夢と現実がごっちゃ

で自分が何をしたかも正確に思い出せなかった。

前にもルイスとすれ違ったことがある。お披露目のパーティを抜け出したときだ。

そのときは明らかにルイスは怒っていて、タクのとりなしもあって、話し合って仲直りができた。だけど今回は、話をする以前にルイスは完全にあたしを彼の領域から遮断していた。

ああ……そうなんだ。

理緒子の言った「内ポケットに入れられてる」っていう意味が、やっと分かった気がした。そこから出されて、その温もりを失ってはじめて、あたしはそのことを思い知ったんだ。

もう、今までみたいに話せないのかな。

考えるだけで喉の奥が震える。

頼みのタクは、理緒子を意識しすぎて右手と右足同時に出るようなことになってるし、理緒子は理緒子で気にしないようにする素振りがかえってわざとらしい。まるで、それぞれが全く違う方向を向いて立ち竦んでいるような、そんな気まずさがあたしたちの間には立ち込めていた。

あたしたちは、ばらばらになっていた。

聖地が目の前なのに……どうしたらいいんだろう。

ごつごつした岩山の先に聳える、四角い塔のような石柱群を仰ぐ。聖地であるタキ・アマグフォーラにあるのは、巨大な謎の石の建造物だ。一番大きな柱と、それを囲むように三つ（正確には四つらしいけど、ひとつは崩れた）の柱が不規則に並んでいる。

理緒子が買った絵本によると、石は一番大きいもので幅5チエク、奥行き2チエク、高さ8チエクというから、五百×二百×八百メートルなんていうビル並みの大きさだ。

あまりの大きさと形の良さから、古代人の建造物だとか神さまの武器（神の槍というらしい）と呼ばれたりするみたい。北の果てに棲む一つ目巨人のダイダロッド族が創ったんじゃないかという話まであるようだ。

さすがに大きいだけあって、タキ「アチファに入る手前から見えはじめたその姿は、だけど全然近づいていつている気がしない。

鈍く朝日ははじいて建つ姿は、確かに異様な風格を備えて映った。

こんなばらばらな状態で、本当にあれに挑めるのかな。

まるで巨大な風車に立ち向かうドン・キホーテ。象に喧嘩を売るネズミの気分だ。

ズボンのポケットから、小さな紙切れを取り出す。

？ル パサロ ヴォランテ サ クエ エス ウヌ パラ レ シエル パラ ヴォラール（飛ぶ鳥は、空が飛ぶ場所であることを知っている）？

アチファの村で買った、お菓子の中に入っていたおみくじの言葉だ。日本語で言う、適材適所みたいな意味かな。

？飛ぶ鳥は、空が飛ぶ場所であることを知っている？

人に空は飛べない。だけど鳥にとって、空は飛ぶための場所だ。

じゃあ、あたしにとって聖地は何のための場所なのだろう。あたしはその答えを、すでに持っているのだろうか。

……分らないや。

白く輝きを増す空に、手のひらを掲げる。

あのターバン男の故郷だというアチファの村は、彼の言ったとおり、貧しくて小さな村だった。岩と石と砂と灰と、村にあるのはそれくらいだ。草もなくて、茶色だか灰色だか分からない、丸くてぺたつとした葉っぱが岩陰に少し生えているだけ。キッキーナの姿もない。

そんな枯れきった景色の中で、肩を寄せ合うように数軒の石組みの小屋が建っている。それだけだった。

ルイスたちの説明によると、この村は作物がほとんど育たず産業もなく、聖地を守る役目のために昔からあるのだそうだ。

『聖地を守る？』

『そうだ。聖地の周りを清め、訪れる人に祝福を与える。それがこの村の役目だ』

村の入り口では、入る前に巡礼者が手足をすすぐように、例のイカカスの葉が浮かんだ大きな水桶と洗い場があった。だけどその水も茶色く濁っていて、本音を言うと、ちっとも清められている感じではなかった。

冗談っぽく「ぜんぜん聖水じゃないよね」なんて突っ込もうとして、できなかった。しなくて良かったと思う。そこにいた村の子どもの持つカップの中身は、聖水と同じかそれ以上に澱んだ水だったから。

目だけぐりぐりと大きくて、痩せた骨の浮く体。不自然に突き出たお腹。あたしたちがただの巡礼者だと信じて、その子が無邪気に歓迎してくれるから、余計に胸が痛んだ。

きつとあたしたちの世界にも日本にも、実際に目にしていないだけで、貧しい人たちはいるはずだ。だから、軽々しく助けたいなんて思うのは間違っているのかもしれない。それに、雨が降ったくらいで、この子たちの状況が簡単に良くなるわけではないのも分かっていた。

それでも、なんとかできないかって思う気持ちは嘘じゃない。できるのが、ヴェルグから貰ったお金を全部つぎ込んで、その子の親が売っていたおみくじ菓子を買ってくらいたったとしても。

ここに今、あたしがいることに意味があるってことも、きつと嘘じゃない。

意味があるように切り拓くから……この手で。

翳した手を拳に握る。

くだらない思いつきのじゃんけんからはじまった、この旅。じゃんけんには、グーチョキパーじゃないものもある。象と人とアリ。人は象には負ける。でも、一番弱そうなアリが象に勝つんだ。

あたしは、人よりネズミよりちっぽけなアリになる。象に勝つために。

下を向いたらすぐに萎えそうになる気持を押し込めて、あたしは空に立つ白い石の柱を睨むように仰いだ。

19 - 4 (前書き)

*暴力表現あり。

異変は、あたしがトイレに行った直後に起きた。いくら狙われたり見張られたりしてるとしても、やっぱりトイレくらいはプライバシーを守って欲しい。そう思って、一人でふらっと少し上の岩場に登ったのがいけなかった。

ややくぼんだ周囲から隠れた岩陰に辿り着いた途端、まるであたしの行動を予期していたように、目の前に男が現われる。

長身、鉄色の長髪をくくった鋭い目つきの男、ヴェルグだ。いつも背中に背負っていたシトウラは今回はない。代わりに、長い剣を腰に差していた。

ぞくり、と厭な予感が掠める。立ちすくむあたしに、ヴェルグが右手を伸ばした。

『こちらへ来い』

『い、いやだ』

後ずさるあたしに、ヴェルグがにやりと笑って近づく。

横目で周囲を窺うと、崖下まで追ってきていたタクに、青白く光る太いロープのようなものが巻きついて見えた。しかも、生きてるみたいにくねくねうねって、完全に彼の動きを封じ込めている。

なに……あれ。

『あなたが、したの……？』

『そうだとしたら、どうだというのだ？』

『最っ低！』

さらに一步、あたしに近づく。その瞬間、瞼の裏で青白い光が一旦輝きを増して消えた。

タクが、と違ってふり返った際に、ヴェルグはあたしの腕を掴ん

で強引に抱き寄せると、そのまま岩場の上段をひとつふたつと跳び上がった。

『待て！』

タクの怒鳴り声が追いかける。あたしはヴェルグの腕の中でもがきながら、必死で後ろを向いた。

いつの間にか現われた藍色の服を着た集団が、目の端を歩き過ぎる。ひらめく白刃の光。

剣を抜いたタクが、それらを薙ぎ払って藍色の渦の中から飛び出てくる。弾丸のように鋭く跳躍し、大柄な体があたしとヴェルグの頭上まで跳んで、一気に剣を振り下ろした。

ヴェルグは逃げようとせず、唇に笑みを浮かべてそれを迎え
刹那、ものすごい光と爆音が響いてタクの体が弾け飛んだ。

『タクッ！』

さすがに戦闘慣れしているのか、タクは衝撃を吸収するように宙で体を捻り、足から崖下の地面に着地する。ほっと息が洩れた。

『さすがは風神。図体のわりに身軽なことだ。が……こちらはどうか？』

ヴェルグが告げるや、周囲に不気味な光がいくつも浮かんだ。鈍い輝きを放つ、灰色の光球。魔法光のようだけど、確実に何かが違う。違っていた。

なにこの魔法……。

ざわざわと背筋が粟立つ。なぜだかはっきり分かった。ヴェルグの使う魔法は、ルイスのとはまるで違う、光と闇のような対極の関係だっということが。

怖い……タク、ルイス。逃げて！

悲鳴をあげる余裕すらない。ヴェルグが唇に笑みを宿したまま、灰色の光を撃ち下ろした。

ギン！と鈍い音が響いて、あたしは一瞬目を瞑る。間近で舌打ちの音が聞こえたので、瞼を開けると、タクが次々と剣で灰色の光を打ち落とす姿が見えた。

すごい。剣で魔法を防げるんだ。

そういえばジャムが、タクは国中で強い人の十位以内だと言っていたのを思い出す。

灰色の光は剣で斬っても碎けるまではいかないけど、うまく弾いて勢いを殺し、地面に叩き落としていく。その作業をタクは、切れ間のない流れるような動作でやってのけた。まるであの大きな剣が風の幕を作って、一切の攻撃を防いでいるみたいに。

苛立ったのか、また舌打ちをしたヴェルグが、あたしを掴んでいない左手を上空に掲げる。すると今度は数百、数千もの灰色の光が、辺り一帯を埋め尽くすように発射された。逃げ場なんてない。

蒼ざめるあたしの視界の片隅を、鮮やかな色がよぎった。目の覚めるようなその赤は、タクを守るようにその場に現われた男の髪の色だ。

『ジャム』

正体不明のマーレインはタクの前に立ち、素早く腕を掲げる。見えないはずの力は、だけど魔法力同士がぶつかるせいか半球状の壁となつて淡く輝き、灰色の光を防いだ。

『あなたの足止めのせいで、ぎりぎりの登場じゃねえかよ。まった
く』

『半端者どもが……こいつらの相手でもしているがいい。地の精ゲ
ブよー!』

『マキー!』

ルイスの声が叫ぶ。捕らわれたまま首を捻ると、理緒子を庇いつつこちらを仰ぐ彼の姿が目に入った。その二人の前の岩が突然、生きてるようにぼこぼこ盛り上がりはじめる。

岩は、角のある蛇の首と尾をもった化物の形を作ったかと思うと、物理法則を完全に無視して二人に向かって動き出した。岩製のごつごつした四肢が、重い音をたてて歩み寄る。それはジャムとタクの前に現われ、彼らを一画へじわじわと囲い込んでいた。

『さて、行くか』

満足そうに、ヴェルグが促す。その手を引き剥がそうと、あたしは闇雲に手足を振り回した。

『触わんなっ。なにが目的だよ!』

『異界の乙女とその一行が邪魔だという者がいてな』

『それって、フージェ・ハラン?』

『わりと状況を理解しているんだな。そうだ。だけどまあ、それはたいした理由じゃない。俺は元々おまえをここへ連れてきたやつらと相性が悪いんだ』

『相性で人の命狙うなっ』

『口がたつんだな、おまえ。しゃべらなかつたのは言葉が通じないからか?』

あたしの右手の指環を見つめ、意地悪くヴェルグが笑う。

『うるさい。相性だか権力闘争だか知らないけど、なんであたしたち殺そうとするのよ? あんただって、雨が降ったほうがいいんじゃないの?』

『降らなければ降らないで構わん』

『……え』

『この世界の渴きは必然だ。早魃で飢える者がいたとしても、それは弱いからだ。弱いものが淘汰されて強いものが生き残っていく。自然の摂理とはそういうものだ』

抑揚なく告げられた言葉は、強がりでも大袈裟でもない彼の本心のようだった。

『おまえ、少しは俺に感謝しろ。このまま聖地に行っていたら、殺されていたかもしれんのだぞ?』

『なんでそうなるのよ』

『ヒントを与えてやっただろう。歌だ』

あたしの脳裏を? ユリアの花? の歌詞がよぎる。あれは確か、彼女の命と引き換えに雨が降ったという内容だったはず。

『ただの伝説でしょう?』

『だが真実かもしれん。おまえは、おまえの命と引き換えにしても、

この世界に雨を降らそうとしているやつらの言うことを鵜呑みにするの？』

『……そんな』

『俺と来い。俺なら、おまえを異界の乙女などではなく一人の人間として扱える。水門のことなど忘れてしまえ』

甘い誘いだ。揺らぐ心をぐつと抑える。

『あたしを殺すんでしよう？』

『無為な殺生は好きじゃない。俺が受けた依頼は、水門の開放の阻止だ。それができれば、誰がどうなるうとあいつらの知ったことじゃない。おまえが俺のものになるうが、構わんさ』

『なんで理緒子じゃなくて、あたしなの？』

『もう一人の娘は、完全に守護者の男に骨抜きにされているだろう。ああいうのは厄介だ。感情に目が眩んで、どんな真実を語っても聞き入れない。その点おまえは、自分の考えを持っている。おまえなら俺の言うことが分かるはずだ』

ぐつと腰を抱き寄せられ、低くてハスキーな声が耳元で囁いた。

『俺と来い。大事にしてやる』

『や……だ』

『あの色なしに未練でもあるのか？ あんな王の人形のような男など、忘れる』

『ルイスはそんなんじゃない！』

『そうか？ あいつは、王の命が下れば躊躇なくおまえを殺すぞ。でなければ護衛になど選ばれるはずなからう？』

怖い。頭が真っ白になるほど怖さを感じるのは、心のどこかで彼の言っていることが真実だと分かっているからだ。だけど、認めたくない 認めるわけにはいかない。

密着する腕と胸は大きくて硬くて、ルイスとは全然違う、巖（いわお）のような強健さだ。

……いやだ。

ふいに嫌悪感が襲う。あたしは腕をもぎはなそうと身をよじり、

爪で彼の手をひっかいた。

『放せつ。あたしはあんたとなんか行かない!』

『強情だな。少しはなついてるかと思っただが』

『うるさいっ』

いい奴だと思っ一緒に歌なんか歌った自分を全力で罵倒したくなつた。

『気の強い女は嫌いじゃないが、我が儘を言うと少々強引にするぞ?』

『うるさ』

あたしの言葉は途中で途切れた。ヴェルグが空いている手で、あたしの頬を張つたからだ。

力加減したんだろうけど、耳の奥がしびれ、顔の右半分がじんじんと熱を帯びる。何よりしゃべってる途中だったから、歯で唇の内側を切つて、口の中に血の味が広がった。

……なんだ、こいつ。

殴られたショックで、あたしは逆に怒りの沸点が下がるのを感じた。温厚が服着て歩いてるような父親は勿論、あの乱暴な兄でさえ、どんなにキレても殴ることは絶対なかった。

そういうこと、か。

この男の器量の小ささが見えた気がする。口ではどんなに巧いこと言つても、所詮暴力で女を従わせようという、あの盗賊たちと同じレベルだとあたしは決めつけた。

ぜつたいに従つてやるもんか。

黙り込んだあたしをおとなくなつたと思つたのか、ヴェルグが掴んでいた手をわずかに緩める。

『やつと観念し　ぐあつ?!』

ヴェルグが変な声をあげたのは、あたしがやつの向こう脛を思いつきり蹴つて、足を踏んづけたからだ。くそ、今だけピンヒールが履きたかつたよ。

よろめく彼の胸を両手で突き飛ばし、拘束の外れたあたしは、さ

らに地面を蹴って砂と石をぶちまけて逃げた。

『え……うそ』

逃げたのはせいぜい十歩足らず。それだけしか行き場のない、小さく張り出た狭い岩棚にあたしたちはいたのだ。我ながら、きちんと状況を確認しなかった馬鹿さ加減が情けない。

しかもそこは急な勾配の崖の途中で、下まではゆうに二十メートルはある。高飛び込みでもしたことがない高さだ。

頭庇っても確実どころかの骨が折れるな、これは。

足から落ちて足を折るか、自分の贅肉を信じてお尻からいつてみるかと悩むあたしに、早々と立ち直ったヴェルグが余裕の態度で近づいてくる。

あたしは左手で岩の壁にすがりながら、それでも後ろに退った。ぼろ、と足元の岩が欠けて落ちる。あたしの居場所はもう、爪先立つほどのスペースしかなくなっていた。

眼下に見える台地では、首の長い岩製ステゴサウルスを相手にルイス、タク、ジャムが奮闘を続けている。砕いても元が岩だから、ダメージがなくて苦戦してるみたいだ。

『愚かな真似はやめる。こちらへ来い』

『いやだつて言ったの、聞こえなかつた？ 分かつてると思っけど、あたしが今ここで落ちて死んだら、あんたは異界の乙女を自分の手で殺せなかつたつていう不名誉だけじゃなくて、王様とその他もろもろをがつつり敵に回すことになるんだよ。』

言つとくけど、籬（たが）の外れたルイスはかなり怖いよ？ そ

れでもフージェ・ハランは、あんたを護ってくれるかな？』

『死ぬ気か？』

『あんたに捕まってみんなの足手まといになるくらいなら、別にいかもね。異界の乙女は一人いれば充分だし』

『本気で言っているのか？ 馬鹿は止める』

あたしは思いきり息を吸い込んだ。そして、そこから飛び降りた。

19 - 4 (後書き)

*ステゴサウルス：ジュラ〜白亜紀に生息した草食恐竜。背中にトゲのような骨状の板が並ぶ姿で有名。剣竜という下目名が個人的に気に入っている。現存しても、たぶん人は襲わないんじゃないかと思う。

5

いや、飛び降りたっていっても、いきなり下までぽーんと跳んだわけじゃない。

結局あたしは自分の足とお尻両方を信じて、適度なところに着地すると、傾斜角度70 近い斜面を滑り降りることにしたのだ。

『あわわわわ』

腰を落として踵を踏ん張る。ががががと、激しい音をたてて鋭い石の破片が飛んでいく。

不恰好だけど、逃げるにはこれしか考えつかなかった。だってやっぱり怪我とか死ぬのは嫌なんだよ。でも、さすがに打ち身とか擦り傷なんて気にしてる場合ではなかった。

あれだけ脅したから、一瞬ヴェルグは追うのをためらうだろう。その一瞬でどこまで逃げ切れるか。あたしがあいつを出し抜く公算は、そこしかない。

焦点がぼやけるくらい振動に、あたしは前へとつんのめりそうになるのを必死で堪えた。スキーとかスノボと一緒に。怖くて体を引っこめると余計に転びやすくなる。あたしは顔から突っ込むのを覚悟で、低く前のめりに体重をかけた。

と、いきなり体が持ち上がる。宙に投げ出される感覚。眼の端にさっきまでいた場所にはなかったはずの岩が、高々と突き出て見えた。

ヴェルグ……そっか、あいつが岩を。

岩恐竜を創った相手なら当然かと、あたしは冷静に思った。このまま叩きつけられたら痛いだろうな、と軽く覚悟を決める。そのとき。

『風精ビャクーガ』

艶やかな声が響いたと思うと、あたしは別の力に抱き止められていた。

まるで自分が木の葉にでもなったみたい、下から吹き上げる猛風に支えられ、ふわりと地面に足を着く。といつても、やっぱり傾斜は60強。

ざざ、と流れる砂を踏みしめ、ふらつく体を立て直すあたしを、その人が呆れ顔で見た。

『なにやってるのよ、馬鹿な子ね。死にたいの？』

『……アマラさん』

ジャムがいるから近くに来てるんだろっとは思ってたけど、登場早々すごい発言だ。

『あーあ、顔に傷作っちゃって。自分でさらに見栄えを悪くしてどうする気？』

『や、あのアマラさん。そんなことを言っている状況では』

『なに言ってるの。こんなの想定内よ。わたし、未来視もってるって言わなかった？』

聞いてません。てか、想定内ならもっと早く助けて欲しかったんだだけ。

あ、そっか。あたし嫌われてるんだった。

なのになんで助けてくれたんだろっつと、あたしは黒紅色の髪をなびかせて立つ年上の女性を見上げた。

やけに風が収まらないと思ったら、彼女の足元で風が渦を巻いて、アマラさんは地面からほんのわずか浮き上がっている。居丈高な声が、あたしたちの間を割って入った。

『女。その娘を寄越せ』

『馬鹿言わないですよ。いくらどん臭くてぱつとしない子でも、あんなに渡すわけないでしょう？』

相変わらずの女王さま口調で、アマラさんが言い返す。

『おまえもどうせ、その娘がいなくなっただ方が都合がいいのだろう。違うか？』

『フアリマってるくでもないと思ってたけど、つくづく馬鹿ね。わたしが公私混同すると思う？ 仕事をきっちりこなせないようじゃ、一人前の女って言わないのよ』

下方に開いたアマラさんの両手の中に、ソフトボールくらいの旋風が集まる。

『それにわたし、自分のおもちゃをとられるのって嫌いな。あんなに手出しはさせないわ』

『笑わせるな！』

アマラさんが放った風の弾丸を、ヴェルグが力の幕で弾いた。鈍い光のヴェールに触れた途端に弾は四散したけど、さすが風。すぐに寄り集まって一頭の大きな獣に変わった。

風の唸りとも獣の咆哮ともつかない声をあげて、巨大な猫科動物がヴェルグに襲いかかる。

『ちっ！』

ヴェルグが身を屈めてそれを避け、避けた瞬間、腰の剣を抜き放つと下から上へ斬り払った。頭から縦半分に裂かれた風の獣が、煌めきを放ちながら散り散りに大気に還る。

『ビャクーガ！』

『風精程度で俺には勝てんぞ。これで終わりか、女？』

闇を切り取ったような真っ黒な刃の剣を掲げ、ヴェルグが不敵に笑う。本当にこれほど？ 不敵？ って言葉が似合う男もいない。それくらい凄みのある表情だった。

『闇の精レイキ』

その言葉と同時に、足元を冷たい何かか吹き抜ける。厭な空気だ、と思っただら、急に辺りに黒雲が立ち込めて、昇ったばかりの太陽を隠しはじめた。

あつという間に薄暗くなる視界の中、一際黒いもの　あたしや周囲の岩から伸びる影がゆらりと揺れ、そのまま身を起こす。にゅと手と手が伸び、あたしとアマラさんの足に絡んだ。

気持ち悪っ！

冷たくも熱くもなければ、痛くもない。だけど圧迫感があって動けないっていうのは、ものすごく気味が悪かった。竦むあたしの横で、アマラさんの冷静な声が命じる。

『火精スウザよ 灯れ』

以前ラクエルが見せてくれた、手のひらサイズの炎ではなかった。最後の言葉の息が吐き出されたそこから紅蓮の炎が宙を奔り、渦を巻きながら闇を舐め尽していく。

灯るところの騒ぎじゃない、大火事だ。あたしたちを拘束していた影も、簡単に解けてしまう。

『すご……』

『わたしって防御型なのに、なぜか火精と相性がいいのよねー』

なんとなく分かるような気がしますが？

『スウザ、やっちゃって』

どんだけ適当な命令なんだ。いいのか魔法士。お祈りの言葉とか聞いて描いていたカツコイイ魔法士像が崩れていくぞ。

命令主の性格か、渦を巻いた火の精は踊るように自在に宙を跳ね、熱と耀きを散らしながら影たちを追い散らしていく。明るいのが苦手なのか、影は千切れ、また岩陰に入り直してどんどん消えた。

ところが。逃げているように見えた影たちは、するするとヴェルグの方へ集まったかと思うと彼の影と溶け合い、雲を突く巨大な影法師となって立ち上がる。

目鼻もない顔が、ぱっくりと縦に割れる。そのまま首が伸び、頭全体が口になったように、闇は炎の渦を丸ごとごぶりと呑み込んだ。

『うへえ』

『さすがはファリマ。？闇？の名を冠せられるだけはあるわね』

どこかで聞いたことのある名前だ。あの山賊たちが襲ってきたときに、ファリマって名前がでたとか理緒子が言っていたような。

『ねえアマラさん。ヴェルグって、ひよっとして有名人？』

『どういう論拠でその質問に至ったかは疑問だけど、一部では知られているわね』

右拳に人差し指を立て、その周囲に炎の輪を作ったアマラさんが、あたしを見向きもせずに答える。フリスビーのように投げ撃たれたそれが、勢いよく巨大影法師の首を刎ねた。転げ落ちた頭はすぐに本体に吸いとられ、首からはまた新しい頭が生える。うーんエンドレス。

『とりあえず、疑問には後から答えるわ。今はおとなしく待ってなさい』

『……わん』

？待て？と言われたのでそう返すと、生ぬるい視線があたしに向けられた。

『あんたって……まあ、いいわ。じゃ、そのままいい子でそこに居なさい。守ってあげるから』

くしゃ、とあたしの頭を撫でる手は、どこかやさしい。ちょっと心が和んだけど、そんな平穏な空気を許してくれる現状ではなかった。

アマラさんの炎の輪で切り刻まれた闇は、空中でばらばらになると、今度は普通サイズの人型となってそれぞれに襲いかかる。

『くっ！』

さすがに分散されると攻撃するにも限度がある。アマラさんは腕で大きく半円を描き、炎の壁を作って防御に転じた。だけど闇はしつこかった。

炎が揺らめいて落ちる影。それがまた意志を持ってゆうらりと動きはじめた。

『このやろっ』

あたしはアマラさんの背後に伸びるその手に向かって、足元の大きめの石を投げつけた。が、勿論手ごたえはない。なのに逆に腕を掴まれそうになり、あたしは身を引こうとして盛大に尻もちをついた。

『マキッ！』

アマラさんがあたしの脇に滑り込む。

『なにやってるの。待ってって言ったでしよう!』

『場所は動いてないよ。投げただけ』

『転んだら一緒でしょう、馬鹿な子ね。コマだって、待ってって言われたら飼い主の言うことくらい聞くわよ』

なんかだんだん、けなされるのも慣れてきたぞ。

『守るって言ったんだから、きちんとして信じなさいよね?』

『信じてるよ。だけどアマラさんにばかり戦わせるの、やなんだもんっ。じつと待ってて怪我されるなんて嫌だよ!』

『……ほんと馬鹿な子』

炎を映すアマラさんの顔が、ふつと微笑む。

『馬鹿だけど、仕方ないから絶対あんたを守ってあげるわ。それにね 助けて、思わぬところから来るものよ?』

告げた瞬間、あたしたちの周りに広がっていた炎の壁が変化した。炎を作っていたひとつひとつの何かが急激に拡散して熱を消し、輝きだけを残した小さな粒子となって複雑な網目模様を成す。光の粒で出来た繭玉に、あたしたちは包まれていた。

その光の繭の向こう側で、いくつもの小石ほどのものが鋭く走り、影を貫いて岩に突き刺さる。影たちは標本箱の中の虫さながら、大地に次々と縫い止められていく。

ヴェルグが忌々しげに言葉を吐き捨てた。

『影使いか……』

『? 闇のファリマ?を相手にするのですから、当然でしょう?』

この忌み技を存分に発揮できる機会ができて、光栄ですよ』

場にそぐわないやわらかな声でそう言ったのは、平凡な中肉中背の魔法士イジードだ。

『遅いわよ、イズ』

『勘弁してくださいよ、姐さん。あの土人形のおかげで準備していたものが埋まって、大変だったんですから。二人ともさっさと行っちゃっし……』

『愚痴はいいから、早くこの闇をなんとかなさい』

さすが姐さん、助けてもらったのにこの大上段。うん、今度からあたしも？姐さん？って呼ぼう　呼ばせてくれれば、だけど。

イジーははあ、と肩を落とすと、両手を軽く広げてヴェルグに對する。もちろん斜面から仰ぐ形だけど、彼の手のひらにぞろりと数十本の真つ黒なナイフが現われた刹那、黒の剣をもったヴェルグが崖を蹴って跳びかかった。

真つ暗な闇の波を引き連れたヴェルグは、その上を滑るように進み、唸りをあげて剣を揮う。イジーが投げるナイフがどんどん払い落とされていく。体格も威力もスピードも、完全にヴェルグが勝っていた。

『ぬるいぞ、小僧！』

『たかが五つしか違わないあなたに、小僧呼ばわりされたくないんですよ』

ヴェルグの勢いに圧されるように、ふわりゆらりと攻撃を避けるイジーは、持っていたすべてのナイフを投擲し尽くしてしまったようだ。

最後の一本を弾き飛ばし、ヴェルグが会心の笑みを浮かべる。だけどイジーは、波打つ闇と刃がすぐそこまで迫るのに、微動もしなかった。

『ああ、そういえば私、名乗り忘れていましたね。ヤムートと申します』

『……なに？』

『お初にお目にかかります、ヴェルギウス・アスペル・ファリムスどの。あなたには』

イジーの十本の指が広がり、複雑な軌道を描いて曲がると、見えない何かを絡めて一気に引き寄せる。その瞬間、辺りを包んでいた闇が、高波をあげて粉々に砕け散った。

『負けて差しあげませんよ？』

『貴様……？隠形（おんぎょう）？のヤムートか』

『いかにも。お見知りおきいただき恐れ入ります、とっておきま

しょうか、一応』

弾かれたように見えたナイフ。それをヴェルグに纏わる闇すべてに命中させ、柄についていた極細の糸を同時に別方向へたぐって引き裂く、なんて離れ業をやったのけた魔法士は、気軽な調子で肩をすくめた。

かちんときたらしいヴェルグが、風を巻いて剣を打ち下ろす。微笑を浮かべたイジーはそのまま剣を受け、切っ先が触れたと同時に彼の体はうすっぺらな映像となって飛散した。

『……小僧め』

『？隠形？の名をとる私の特性は、隠密に偵察。あなたと同じく闇の眷属を使うこと。得意技は　幻術と、呪縛です』

破片のままイジーは喋り続ける。低く罵倒し、ヴェルグが剣でそれらを薙ぎ払った。

イジーの破片はあっけなく光の点になって消えたけど、代わりにじやらりと思わぬ重さを纏った音が耳を打つ。蒼く底光りする金属の鎖に剣を持った腕をとられ、ヴェルグは上空に鋭く視線を突きつけた。

いつの間にか崖の高みに登っていたイジーが、手袋をはめた手できり、と長い鎖を引く。

『対魔法士用の封魔具ですよ。闇を使うあなたにも効くよう、特別に改良済みです』

『ふざけた真似を』

『あなたがうるついているのに、何の対策も講じないと思われているとは心外です。目障りなので、そろそろご退場願いますよ。うかが。姐さんよりも何より、あの方の忍耐がそろそろ尽きそうなのでね？』

言った傍から、下の台地のほうで爆音が立て続けに聞こえる。うん、誰のことかなんとなく分かったよ。

『あなたの足止めも限界のようですよ？』

『ほぞけ』

『言うこと為すこと年寄りめいてますね。そろそろ引き際というや

つでは？』

『代わりに貴様が消える、小僧！』

ヴェルグは腕に絡んだ鎖を片手で掴み、さらに胴に半周巻きつけると、全体重をかけて長身を捻る。『うわっ！』と情けない声をあげて、イジーが崖上から吹き飛んだ。

それでも、喚び寄せた闇をクツシヨンにふわりと降り立つ。じゃらん、と解けた鎖が彼の後を追った。

『あーあ。力技とはまいりましたねー』

『まいってないで、さっさとやっちゃいなさいよ』

アマラ姐さん、？殺っちゃいなさい？に聞こえますよ？

『えーっ、無理ですよ。だって、おれ闇討ちとか騙し討ちとか不意を突くとか隠れて狙うとかじゃないと戦えませんよ？ これでも自分の力量はよーく知ってますから』

おい、どんだけ卑怯なんだこの魔法士。

緊張感のないえへら顔のイジーは、それでも油断なく腕に鎖を巻きつけ、ヴェルグを仰いでいる。長い髪が真っ黒な光背のように舞い、彫像となって佇む長身の周りには、再びじわじわと闇が染み出し始めていた。

イジーの持つ長い鎖が、蛇みたいに彼の腕から足元にとぐるを巻いて浮かび、先端を持ち上げて警戒を示す。

『それに、もうあちらが本気で限界みたいですよ』

『それもそうね』

仲がいいんだか悪いんだか分からない魔法士コンビが互いに言い合った、そのとき。

『 オウリーン 』

どこからか不思議に澄んだ声が、大気に響き渡る。そして次の瞬間、真っ白な光が満ち、その場から一切の影と色と音が消え失せた。

19・5(後書き)

*ヴェルグ(25才)、イジー(20才)の設定。

ちなみにアマラさんは23才で、ルイスと同一年です。

『いや、まさか光精を喚ぶとはねー』

『妥当なところですよ。相手が相手なんだから』

『まあ、若様にしては耐えたほうですかね。あーあ、せっかく喚んだおれの闇精が……』

へえ、イジーって普段の一人称は？おれ？なんだーと、あたしは二人のゆるい会話を聞きながらぼんやり考えていた。

どうやら忍耐の切れたルイスが、二頭の岩恐竜の真上に巨大な魔法光を喚び寄せたらしい。それがさっきの光の渦だ。眩しすぎて、まだ眼がちかちかする。

教えてもらったところによると、さっきからアマラさんたちの言っている？ナントカ精？というのは、ずばり精霊のことだそうだと。いっても、あたしたちの感覚とはちよつと違う。

前にラクエルから説明された、物質のもととなる？素？という概念。これが天律の働く領域では？神霊？となる。つまり、理律の支配するこの世界での太陽は、天律ではアーミトウスという神さまになるってこと。ちよつと分かりにくいけど。

で、精霊はその二つの領域を行き来できる唯一の存在だ。理律にも天律にも影響を及ぼせる。だから、無限の領域である天律に働きかけて現実世界の理律を動かそうという魔法士にとって、精霊を喚ぶということは、もっとも具体的に威力のある効果をもたらせるわけだ。

ここで、マーレインとそうでないものの差が出る。精霊加護者であるマーレインは、生まれながらにして精霊に喚びかける力を持つ人間だ。同じマーレインでも力の特性によって喚べる精霊が限られてくるそうだけど、まあそんな中でオールラウンド型のルイスは

別格ということだ。

精霊の中で特に喚ぶのが難しいのが光と闇らしく、闇精をあそこまで操作できるヴェルグもすごいんだけど、彼の喚んだ地精と闇精に直接光精をぶつけて相殺させるなんて、場数を踏んだ魔法士でもちよつと呆気にとられる出来事だったようだ。

大丈夫かな、ルイス。

あたしにあれだけ治癒術を使った後なのに、そんな大掛かりなことをするなんて無謀すぎる。とはいえ、ルイスに無理をさせる原因を作ったのは他ならないあたしなわけで。

『ほら、イズ！ しつかりしなさい。圧されてるわよ！』

『だから勘弁してくださいよー、姐さん』

夫婦漫才みたいな会話をしながらも、実は二人とも現在鋭意戦闘中だ。闇を消されたヴェルグが、一気に百体近い集団を創り出したからだ。

さつきもタクに襲いかかったこいつらは、幻より一歩進んだ？ 傀儡？ という術で、術士の魔法力の一部を物質化した存在だ。相応の魔法力をくうけれど、一度決めた命令には最後まで従い、また実際の兵士並みの攻撃力をもつので、かなり厄介らしい。

自分と同じ藍色の服を着、剣を手にしたその傀儡たちをルイス、タク、それにジャムへ差し向け、ヴェルグは単身あたしを守るアマラさんを狙ってきた。イジーが援護に入るけど、鍛えあげた長身から繰り出される剣さばきは、反撃するどころか近寄ることすら許さない。

タクの剣が変幻自在な風なら、これは他を排して真っ直ぐに突き進む稲妻だ。その終着点にいるのが自分っていうのが、どうにも納得しがたいけれども。

なんだか優勝商品みたいなことになっているあたしは、目下アマラさん特製の光の繭玉にひとり守られて、？ 待て？ の最中だったりする。

精緻なレースというより、細かく張ったクモの巣に雨粒が乗って

きらきらと光っているのに似た美しい魔法の鳥籠は、戦闘の余波で飛んでくる魔法の欠片はもちろん小石や砂まで防いでくれるのに通気性は確保された優れものだ。

すごいなあ。

触ってみたいが、アマラさんに止められているのでぐつと我慢。待て？と言われたのだから、今度こそ本当におとなしくしておかないとまずい。

ヴェルグはあの闇色の長い剣を、アマラさんはレイピアのような細身の剣、イジーは鎖を腰に巻き両手にS字型の短剣を持って、休むことなくそれぞれに打ち合いを続けている。

精霊は一度喚び出したものを還すと（強制送還含む）続けて召喚することはできないらしく、三人とも大きな魔法は使わないけど、魔法光や炎、風の流れを変えたりという細かな魔法と剣の動きを組み合わせた独特の戦い方でぶつかっていく。

下の台地では、タクとルイスが背中合わせに立って、傀儡集団に剣で応戦している。理緒子の傍にいるジャムは、なんと素手だ。指先を切ったグローブをつけた拳で、がんがん傀儡たちを殴り飛ばしていく。だけど数が多い。

光の盾に護られている理緒子に、隙間から敵の手が伸び、あたしは思わず叫んだ。

『りおー！』

「えいつ！」

傀儡に声があるのか知らないけど、悲鳴をあげたのはやつのほうだった。理緒子はタクからもらったという短剣を手に、震えながらも相手に向かって振り回していた。

理緒子を襲う傀儡に、後ろからジャムが拳を叩きつけ、足で蹴り飛ばす。

『大丈夫か、お嬢ちゃん。無理すんなよ？』

「うん、でも負けたくないから」

理緒子にも聞こえるオープンな送心術で訊いたジャムが、その答

えを聴いてちよつとだけ笑う。おつきな手で、理緒子の頭を撫でた。
『それじゃあ、ちよいと本気で片付けに行くか』

今まで本気じゃなかったんかい！

心の中で突っ込むけど、もろもろの原因をつくった張本人としては肩身が狭くてやりきれない。誰一人怪我をせず、というのは無理にしても、無事にこの戦いに勝利するのを祈るので精一杯だった。

あたしがヴェルグに従うことでケリがつくならそれでもいいんだろうけど、彼の目的は水門の開放の阻止だ。簡単に許してくれるわけもない。

魔法士じゃないけどマーレインのジャムが、理緒子の周囲に光の盾を複数創って多面体に組み立てる。魔法の形状に創り主の性格が反映されているようだ。

右手でそちらを、左手で傀儡を叩き潰しながら、ジャムは『大将』と声をかけ、頷いたタクと位置を入れ替わる。その瞬間、示し合わせたようにルイスが宙に駆け上がり、ジャムが百倍速くらいのスピードで傀儡を周囲から一箇所に追い込んでいった。

軽やかに空中で身を翻したルイスが、そのまま塊となった傀儡集団へ容赦なく魔法光の雨を浴びせる。さっきヴェルグが創り出した灰色の光より範囲は狭いが、威力と数は倍以上だ。光のゲリラ豪雨が辺りを真っ白に染める。

雨が熄んだ後には、青い服の残骸を散らして、傀儡があらかた消えていた。その中、ゆらりと何かが動いた。漂う傀儡の切れ端がひとつひとつ中空へ貼り付き、形を成していく。

『なんだあれ……』

『ちっ。使鬼（しき）を出してきましたか』

ヴェルグに打ち返された体勢を整えながら、イジーが呟く。

『使鬼？』

『魔法士が使役する？鬼？のことよ。ちなみに鬼は動物と精霊の間のような存在。半分生身つとこね』

なんだかアマラさんが口にする物騒な気が　　いやいや。二人

は、ほんの数メートルに迫ってきたヴェルグを懸命に食い止めている。二対一（正確には五対一）なのだから、いい加減疲れが見えてもいいはずなのに、彼の勢いは一向に衰えなかった。

イジীর言う使鬼は、切れ切れに飛び散った魔法の欠片を繋ぎ合わせ、いびつな形となったそこから生き物となつて躍り出た。

黒光りする体毛、尖った耳、長い口吻。四本の肢に六つの眼をもち、どこかガウルを思わせる。宙で身をよじった異形は二つに分かれると、地響きをたてて大地に降り立った。

二股の尻尾までそっくりなその鬼たちは、一方が漆黑、もう一方が黒に白い鼻筋の入った姿をしている。

『黒弦、白弦。そいつらと遊んでやれ』

『御意』

抑揚のないヴェルグの命令に、鬼たちが答える。喋ったというより、ジャムの使うオーブンな送心術と同じ、頭に響く声だ。

大型犬の五倍くらいはあるその獣の迫力と声に、理緒子が怯えるのが見てとれた。あたしは光る檻のぎりぎりまで寄つて、みんなに迫る鬼たちを見下ろす。

どれくらいの強度があるんだろう、この魔法の檻って。

確かめるように、そつと指で弾く。ぽわんと光は揺らめくが、すぐに消えるようにはない。それに外からの衝撃をあれだけ防げるんだから、かなり信用していいはずだ。

狭い中を数歩退る。あたしの動きを察したアマラさんが叫んだ。

『待ちなさい、マキ！』

『とおりやつ！』

その声を振り切るように、あたしは内側から魔法の檻をぐいと肩で押した。丸い形状をした光の檻が、堰を切つたように傾斜60度強を転がりはじめ。中のあたしは痛くはないが、ミックスジュースになりそうな具合だ。

階段状の崖の縁に辿り着いたところで勢いよく跳ね、光の繭玉は重力のままに黒い鬼の背中に落ちた。理緒子の方へ向かいかけてい

たそいつが、予想外の方向からのダメージを受けてうつ伏せに倒れる。衝撃で、光の玉がぱりと割れた。

『マキ!』

ルイスの声が聞こえ、眼の隅に金色の影が飛び込む。手を伸ばそうとしたあたしは、別の何かにくいと襟首をとられ、再び空中に投げ出されるのを感じた。どうやらもう一匹の鬼が、ルイスより先にあたしを捕まえたらしい。

こんなに何回も宙を飛ぶなんて、人生初だなこりゃ。

ほんの数秒の滞空時間にそんなことを思ったあたしの体を、力強い腕が抱きとめる。硬い、巖のような逞しさ。

『おまえのほうから来てくれて嬉しいぞ、娘』

甘いハスキーな低音が、ぞわりと囁く。肌が総毛立った。

『うるさい! 誰が好きで来るもんかつ。放せっ!』

『強情な娘だ』

どこか愉しそくに言い、ヴェルグは剣を持っていない左腕であたしを抱えたまま、さっきまでいたところと台地の中間にあたる斜面へ立った。

やや遅れ、崖の方からアマラさんとイジーが斜面を飛び跳ねて駆けて来る。阻むように、その前へ黒白の鬼がひらりと舞い降りた。

ルイスたちの前には黒の鬼。光の檻の直撃なんてへっちらんな様子だ。

『娘。おまえがおとなしくしないと、不要な誰かが傷つくぞ?』

『うるさい! おとなしくしてもしなくても傷つけるくせにつ!』

『俺はわりと紳士だぞ? おまえのことも助けてやっただろう。娘、忘れたのか?』

『忘れてないけど、それとこれは別! 第一、紳士な人が他人のこと? 娘? なんて呼ぶもんか。あたしの名前は? 朝野真紀? だ!』

えい、と足を踏もうとして、難なく避けられる。やっぱり二番煎じはダメか。

あたしを抱え込むヴェルグの笑みが深くなった。

『そうか……ならば、俺と来い。アサノマキ。水門のことなど忘れて、俺と共に行こう』

闇に光が融けるように、甘い誘惑の響きが耳元から全身に流れ込む。ふ、と体から力が抜けるのを感じた。寝落ち寸前の浮遊感に似ている。

気持ち悪い。

生理的な嫌悪が、本能のように疼く。あたしは傷ついた口の内側を歯で噛むと、右手を振りかぶって思いきりヴェルグの頬を叩いた。お返しはこれくらいじゃ足りないけどね！

『行かない！ 放せ。あんたの言うことなんて信用できない！』

叩かれたことが意外だったのか、ヴェルグは眼を見開いてあたしを見た。

『おまえ……真名を捕らえたのに、平気なのか？』

『馬鹿な男ねえ。その子が異界から来たってこと、忘れたの？ 異なる界に属しているのに、こちらの律が通用するわけないでしょう。あんたお得意の呪声術（じゅせいじゅつ）は通じないわ』

黒白の鬼と睨み合いつつも、アマラさんが女王様口調で皮肉る。
？呪声術？つて、厭な響きだ。ヴェルグの鉄色の眼が、すうつと細まる。

『なるほど、な……。それで、俺との接触も見逃していたというわけか。ますます面白い』

『面白がるな』

『魔法の通じぬ異界の娘……それに歌声も良い。発音はいまいちだが、教えてやればいいことだしな。体つきも悪くない。おまえとなら、強い子ができそうだ』

なんでそうなる！

胸を叩くあたしの動きを胸に閉じ込め、腰を抱く手があやしく太腿を這う。ぴったりと体が押し付けられ、耳元で低く囁きが吹き込まれた。

『俺の子を産め、マキ。一生大事にしてやる』

密着する肌の感触も撫でる手も、囁く声も吐息もすべてに對して、あたしの心と体のすみずみが拒否していた。それでも前と違って、彼の腕と体はがちりとあたしの関節を押さえて、まったく身動きがとれない。

イヤだ……イヤだ。こんな気持ち悪い。助けて、ルイス……！
殺される恐怖とは違う何かが、あたしの声を奪った。こんなに怯えるのは、あたしが女だからなんだろうか。

大声で止めてと言いたいの、心の中の叫びはどうしても声になつてくれない。抵抗もできずに、ただ身を硬くするしかなかった。

助けて……ルイス！ ルイス、怖いよ……助けて！

凍りついていたあたしは、たぶん周りから見ても絶対に助けを求めている状況ではなかったと思う。だけど、唯一特異な力をもつ男が、あたしの心の声に反応した。

ド……ン、とヴェルグの左耳の傍、あたしの頭の上ぎりぎりを、大砲の弾のように何かが突き抜ける。ふっと密着していた体が緩んだ。

『くそ、こんなところでこの力あ使いたくはなかったんだが……。てめえ、いい加減その子から離れるよ。オレは女子供を泣かせるやつは、嫌いでね』

『……半端者が』

ヴェルグがせせら笑う。

背中越しに見えない砲弾を叩きつけたジャムに、黒い鬼がごうと咆えかかった。が、彼の懐から飛び出した小さな動物に鼻面をひつかかれ、牙が空を切る。パン、ナイスアシストだ。

『魔法士として術も磨いていないくせに、マーレインの力を統御できるとでも？』

『悪いが、オレは規格外だな。ちよつとは世の中見たほうがいいぜ、坊ちゃん！』

ジャムが威勢よく大地を蹴る。それは、睨み合いの均衡を崩す一歩だったに違いない。彼が動いた刹那、複数の場所でさまざまに出

来事が起きた。

イジーが腰の鎖を黒白の鬼の首に投げてからめとり、その体を踏み越えてアマラさんがこちらへと走り出す。

跳躍するジャムの後ろから再び黒い鬼が襲いかかり、ルイスがその背に魔法光を放つ。

ジャムを迎え撃つヴェルグが、即座に蒼い光の盾を正面と左に作り、剣を構える。

そしてジャムは 飛び上がった瞬間、姿を消した。

いや、完全に消えたわけじゃない。すごい速さで、一人一人分の質量に相当するものがジグザグに駆け上がってくるのが分かる。時折見える、赤い髪と金色の瞳。

『な……っ！』

さすがのヴェルグも攻撃のタイミングが掴めない。と、左から来たアマラさんの剣先が光の盾に突き刺さり、魔法が碎ける。同時に目の前ぎりぎりに現われたジャムが、やつの腕の中からあたしを掬いあげ、宙高く弧を描いて離れた大地に着地した。

ざん、と砂音が響き、ヴェルグの頭上で十字を描くように交錯したアマラさんも地面に降り立つ。

『大丈夫？ マキ』

『……うん』

いろんな感情が押し寄せて泣き出しそうになり、あたしはようやくそれだけを言った。

あたしを姫抱っこしていたジャムは、片手を離して地面に下ろすと、わさりと頭を撫でた。

『えらかったな。もう大丈夫だ。 旦那、こっちは問題ない。 あとは好きにしな』

ジャムの呼びかけに、低く応えてやって来たのはルイスだ。黒い鬼は、と見ると、タクに剣を向けられ、唸り声をあげたまま右に左に動いて、攻撃をしかねている様子だった。

あたしの前に立ったルイスが、身を屈めて覗き込む。今朝の冷た

かった瞳はあたしを拒絶することはなかったけど、どこか昏い光を秘めていた。指先で、右頬に触れる。

『殴られたのか?』

『でも、さっき殴り返したから』

それよりも抱きしめられて撫で回されて、変な言葉を囁かれた方が嫌だった。すぐにここから帰って、お風呂で全身くまなく洗い流して聖水降りかけて塩撒きたい。あれが人生初のプロポーズだったとか、みじめすぎる。

あたしの心中も知らず、ルイスがいつもの保護者めいた表情をみせた。

『まったく君は、無謀なことをする。アマラがいてくれてよかった』
勝手だと分かっているけど、今ここでルイスの口から彼女の名前が出るときつい。精神的打撃のダブルパンチだ。今日みたいな日を厄日って言うんだろうな、本当。

泣きそうになるのを堪えていたら、肩にルイスの手がかかった。一瞬あの男を思い出して体が震える。はっと彼が身を引いたので、目の前の上着を握ると、今度はルイスがその手の上にそっと手を被せてきた。

この指先も手のひらもあいつじゃないんだと心の中で言い聞かせていたあたしは、ルイスの表情が変わったことに気がつかなかった。尋ねる声が、これまでにないほどの硬さを帯びる。

『あいつと……何があった?』

『旦那、今はやめとけ。それより先にすることがあるだろう?』

あたしの心情を気遣って、ジャムが声をかけてくれる。ルイスはぼさぼさに乱れたあたしの髪を軽く整え、頬を指でさすって治癒術を施した。

『そうだな……すまない。君に聞くべきではなかった。君はこれから一切、あいつのことなど一瞬たりとも思い出す必要はない。すべて忘れるんだ。いいね?』

『さ、殺人とか、やだよ?』

『大丈夫。君を傷つけ踏みにじった罪を、あいつにきっちり贖わせてやるだけだ』

ルイスの何かが振り切れたらしい。あたしに微笑みかける顔は今までの彼のものなのに、それまでとはまったく違っていた。

ブリザードが吹くのも魔王が光臨したわけでもない。ルイスはただひたすら、指を近づけたら切れそうな、凄まじいなにかを纏っていた。

『聖地を壊すのだけは勘弁しろよ、旦那』

『分かっている。マキを頼む』

そう言い置いて、ルイスはあたしから離れる。

アマラさんと戦闘をはじめたヴェルグに向かって歩き出す彼の拳が、固く、真っ白に握り締められているのをあたしは見た。

7

ルイスの行動に気付いたヴェルグは、アマラさんの剣を力で押し戻すと、にんまりと笑みを浮かべた。

「やはり来たか、アクイナス」

「ファリマ。この状況の不利は、貴様も分かっているはずだ。すべてを投じること可能だが、そうなればお互い無事では済まない。負けが分かっている試合で、深手を負いたくなくなる？」

ちらりとヴェルグの視線が、二頭の鬼を行き来する。

「それで？」

「一対一の勝負だ。私が勝ったら、今後一切、水門にも異界の乙女にも関わるな」

「負けたら？」

「……貴様の好きにしる」

「よかるう」

ヴェルグが例の真っ黒な剣を構え直す。手首が返ってその刀身がひらめいた途端、剣が1.5倍もの大きさに変化した。わずかに湾曲した幅広の剣は、先に鋭い角をもち、槍か矛のようだ。振り回すたび、ヴ……ンと異質な音が響く。

一方ルイスは、あたしたちを戦闘から離すためか、小高い岸壁の上に跳躍して降り立った。ヴェルグが挑発する。

「剣を抜け、アクイナス。「双月」の力を見せてみる！」

それに乗ったわけでもないだろうけど、ルイスはおもむろに腰に手をかけ、これまでに抜いたことのなかった二本の剣を一気に引き抜いた。

空気が、割れる。そうとしか言いようのない感覚が辺りを貫く。

長さの違う二本の剣を両手に掲げ、崖のてっぺんに立つルイスは、

さながら翼を広げた大鳥のようだ。

瞬間、鳥は翼を大きくうち振るい、一陣の疾風と共に崖から舞い降りた。いや風というより 大気と圧力と重力が巨大な耀く流れとなつて、大地を砕きながらヴェルグに襲いかかる。

それへ向けて、同じように周囲のなにかを青白く纏わせ、漆黒の剣が振り下ろされた。二つの力がぶつかり合つた刹那、一瞬世界が暗くなり、途方もない音と光と衝撃をもつて爆ぜる。

理緒子たちのもとへ辿り着いたあたしは、アマラさんの光の繭・即席バージョンの内側から、その一連の光景を啞然と眺めていた。

……なんだこれ？ 特撮？？ CG？？？

CG だつたらさっきの岩恐竜とか目の前にいるどつかい犬二匹のほうがよくばどそれっぽいなんだけど、今まさに数メートル先で行なわれている戦いの凄まじさに、脳が考えることを拒否していた。

指環を嵌め直してあたしと手を繋ぐ理緒子が、ぽつりと呟く。

『なんか……すごいね。さっきまでと全然違う』

『「双月」だからな』

ジャムが当然の顔で言う。これって？ だから？ で済まされるレベルなん德斯カ？

『なに信じられない顔してるのよ。天都魔法士団最高峰の一団をまとめる男なのよ？ これくらい当然よ』

『でもおれ、久しぶりに若様が双剣を抜いたところを見ましたよ。』

『さすがですね。やー怖い』

『確か「双月」の剣は、攻撃のための武器というより魔法力を増幅させる鍵と聞いたが？』

タクの問いに、元「双月」のアマラさんが答える。

『一般的にはそういう話が伝わってるわね。剣に限らず魔法士の武器となるものは、いざというときのために魔法力を備蓄したものであることが多いのだけど、ルイスの場合はまったく逆なの。』

魔法力が強すぎて、制御するために双剣が必須なのよ。鍵といえは鍵なんだけど 増幅ではなくて？ 解放？ のためね』

む、じゃあ今までのルイスの力って？

『三割つてところじゃない？ 久しぶりの解放で暴走しなけりゃいいけど。わたしじゃ止められないわよ？』

アマラさんがトンデモな発言をする間にも、激突を続ける二人の魔法士は、巻き起こる砂塵の嵐にすっかり隠れてしまっている。

や、閃光とか爆音とかすんごい震動とか、そういうのは伝わってくるよ。でも正直怖くて、あまり正視できない。理緒子と二人ひつつきもつつきして、時々「うわ」とか声をあげながら、様子を窺うしかなかった。

現在あたしたちは全員、一固まりになってアマラさん特製の光の繭玉？晶壁（しょうへき）？の中にいる。なんと、あの二匹の鬼も一緒だ。

鬼は岩が飛ぼうが雷が落ちようがそこまでダメージがないらしいけど、あまりの戦闘の激しさに理緒子がかわいそうだと言い出したのだ。あたしの動物好きがだいぶん伝染ったらしい。

ヴェルグに『見張っている』と言われたせいか、二匹ともお座りをして、完全に待ての姿勢だ。『誰かと違って賢いわねー』と厭味を言われるのはご愛嬌。うう、アマラさんのドSっ。

理緒子にお礼を言うつもりか、黒弦（こくげん）という名前の真っ黒な方がおつきな鼻面を近づけて、パンに再び前肢でぱしりとはたかれていたが、それ以外は唸るもこともなかった。

六つの眼がどこまで視えているのか、二人の戦っている方をじつと仰いでいる。時折三角の耳がぴくぴく動いたり、二股のしっぽをばたばた振るのがたまらない。

まあ、あたしたちもはらはらしながら見守るしかないから、同じようなものなんだけども。

『そういえば、真紀ちゃん。体は大丈夫なの？』

『あー、うん。ルイスが治してくれた、と思う』

ぶたれた頬と口の中を治癒術かけてくれたのは分かったけど、それ以外の打撲とか擦り傷は知らないうちに治っていた。いろいろ気

をとられすぎて、気付かなかったのかもしれない。

『二回も崖から落ちたのに無事で良かったよお。貴重な体験だよね？』

敢えてしたかったわけではありませんが。

『ただど途中、ヴェルグと一緒に引っ越すかと思っただけで心配しなかった。なんか、すっごい口説かれてるっぽく見えたもん』

指環を持ってなかった理緒子の目には、そう映ったんだろうか。

口説かれ方が違うんだけど。

大事なところはきっぱりと否定しておく。

『ない。あいつとなんて200%ない！』

『でも、真紀ちゃん結構仲良かったでしょ？ タイプかと思っただけに』

ヒューガラナときは確かにいいやつだと思っただよ。それにね。

『なんとなくあいつ、うちの兄に似てるなあって思ってたの。ぜんぜん違うけど』

『お兄さん、かっこいいの？』

『顔は似てないよ。雰囲気……なんとなく。ギターが上手くて目つきが悪くてガタイが良くて、ちよつとぶつきらばうで態度が俺様なところが似てる』

『真紀ちゃんって、ブラコン？』

同じ血縁なのにだいたい出来が違う相手にコンプレックスがないと言えは嘘だけど、それとは若干いや、かなり意味合いが違う。あたしを手下？みたいにいるやつに「いつか思い知れ」という感情はあっても、ラブはない。断じてない！

『違うよお。身近なうえに存在が強烈だから思い出しただけ』

『そーなんだ。よかった』

なぜか理緒子がほっとした顔で頷く。なんでもない会話にだいたいが気分が平常に戻ってきたあたしは、つい余計なことを口にした。

『だいたいヴェルグってさ、最悪なんだよ。人の顔殴るし、セクハ

ラだし』

軽く言った途端、周りの空気が凍った。おや？セクハラ？がどんなふうに変換されたんだろう。ええと日本語では？性的嫌がらせ？。うん、合っているが言語的破壊力は絶大だ。

アマラさんがさつと、傍に立つジャムとタクとイジーを押しつけて割り込む。真面目な顔であたしの腕を掴み、声を潜めた。

『マキ、あんたあいつに何されたの？』

『平手でぶたれた』

『他は？』

『……ぎゅってされたり、撫で回された』

『それだけ？』

『……俺の子ども産めって』

小声だったけど、その答えに理緒子が驚きの声を呑み、アマラさんが横を向いて聞いたこともない罵倒を十くらい並べたてる。『あいつ××潰しておけばよかった』なんていうのは聞こえないふりだ。あたしに向き直って、尋問を再開する。

『それ以上はされてない？』

『うん。殴り返したし』

『そういう問題じゃないの。ルイスは知ってる？』

『ううん、話してない。今後一切思い出す必要はないって言われたし』

『……気付いてるわね。まあ、改めて言うこともないでしょうけど。あれ以上キレられても困るしね』

晶壁の向こうで雲海のように広がる砂煙の切れ間から、時折金と黒の影が垣間見えて、二人が激しく位置を変えながら戦っているのが分かる。もう誰かが助けに行くとか止めるとかいうレベルではなく、こちらへ火の粉がかからないようにするので精一杯だ。

それにしても、軽く人間超えちゃった感じのルイスもあれだけど、対等に戦えるヴェルグも相当だ。聞くと、彼は？闇のファリマ？として有名な魔法士なんだけど、この？ファリマ？というのがそもそ

も曲者なのだという。

『ファリマは天都の西にある主権領だけど、領主より神殿が主勢力をもつ数少ない領地のひとつなの。そして彼は、そのファリマ神殿に属する魔法士なのよ』

『天都の魔法士じゃないんだ』

『そう。今ではそういった人はほとんどいないんだけど、実は魔法士って、もともと神殿から派生した存在なのよね』

話の飛躍についていけないあたしたちに、イジーが説明する。

『昔は神殿が自分たちの宗教価値を高めるために、積極的にマールインを集めて擁護していたんです。精霊を使う人を実際目にする、みんな神さまの言うことを信じやすくなるでしょう？』

それで神殿が権力を持ちすぎたために、王がそのマールインの集団を別の機関として独立させたのが、魔法士の始まりなんです』

『天都魔法士は、一般にヤーマトウーロが宗主である太陽系神殿の一門から派生したものなの。もちろん魔法力は個人の特性に則ったものだけど、彼らは押しなべて太陽神アーミテュースの加護を受けるわ。ルイスやイズは特例ね。』

対してファリマは、闇の女神スザナを祀る一門。そこに属する彼は、絶対の闇の加護を受けるのよ。だから、彼は当代の？闇のファリマ？というわけ』

こもこも語る二人の魔法士の説明に、ようやく話が見えてきた。

なるほど、ねえ……。

ヴェルグが相性が悪いと言うはずだ。本当に対極なのだから。

『闇＝悪というわけではないのですが、ファリマの存在は不文律でしてね。天都魔法士には手を出せない裏の領域に通じているためにお互い快く思っていないとも表立って対立することはできないんですよ。仲の悪い兄弟みたいなものです』

『裏の領域？』

『いわゆる暗殺とか呪いとか、そういう類いです』

いやそれ、ちゃんと取り締まるっよ！

タクが苦笑いで話に加わる。

『闇の魔法士の存在はただの噂話だと思っていたが、実際に目にするに驚くべきものだな』

『彼らは特に呪声術などの精神系の魔法術が得意でしてね。まあ今回の傀儡術の見事だったこと。惚れ惚れし……ぐふっ！』

口走ったイジーが、アマラさんに脇腹を肘打ちされて沈んだ。恐るべし姐御。

『ね、アマラさん。なんであたしに呪声術通じなかったの？ 治癒術とか送心術は平気なのに』

そう聞くと、女性魔法士は意外に真面目な顔で教えてくれた。

『治癒術も送心術も、確かにそれなりに方法 というかコツを学ぶ必要があるんだけど、魔法術の中では？ 基素魔法？ もしくは？ 基素繰術？ と呼ばれる基本のひとつなの。』

 だけど呪声術は、声に魔法を籠めて相手の意志を奪い、誘導する魔法。使う人が限られる高位の魔法で、天律と理律を大きく動かす必要があるのよ。おそらくその違いね』

『へー』

『魔法士という立場から言わせてもらうと、あなたたちは、まだこの世界の律に馴染んでいない？ 浮いている？ 存在なのよ。そのせいで、かかりにくいんだと思うわ。少し賭けではあったんだけど、それまでも彼と一緒にいたのに大して影響を受けていなかったでしょう？ だから、大丈夫だと踏んだの』

『まさかヴェルグの歌って、呪いとかわらないよね……？』

『呪いじゃないわ。？ 術歌（じゅつか）？。歌で、聞いている相手の心を魅了して操るの』

じゅーぶん怖いですよ。

『あたしたちもこの世界に長くいたら、そーゆー魔法にかかるのかな？』

『断言はしないわよ。わたしも異界の人間なんて初めてなんだから姐さんのイケズっ。』

『ただ……あなたたちはここ数日、この世界の物を食べ、生活を
して、この世界の人たちと関わっているでしょう？ それは少なくと
も、こちらの律に影響を及ぼしているということだから、可能性が
ないとは言えないわね』

そういえば、ヴェルグに名前を呼ばれたときに変な感覚があつた
と思ひ出す。

『じゃあ、あたし危なかつたのかな？』

『別の意味で、あんたはいろいろと危ないことをしたでしょーが』
アマラさんが、むに、とあたしの頬を引っ張る。生温い笑いを洩
らし、タクが疑問を挟んだ。

『送心術は基本だというのが、イエドではできるものをあまり見な
かつたが？』

『実は送心術は、賛否が分かれるの。体に手を触れて、一方的に相
手にだけ聞こえる声を送るのって、一般の人にはかなり嫌がられる
のよ。特にブーシエには評判が悪いわね。天都魔法士では必須の基
礎項目だけど、地方では領主の意向が反映されるから、そのせいじ
やないかしら。』

魔法士じゃないマーレインは、結構気軽に使うでしょ？ あれは
プロ意識の差ね。魔法士は徹底的に一般人に対する魔法力の制限を
教えこまれるから、送心術の行使には慎重な人が多いのよ』

そう言つてアマラさんは、ジャムに『あんたは特殊すぎね』と突
つ込んだ。うん、その通り。

さすがに元「双月」の副団長だっただけあつて、アマラさんの説
明はすごく分かりやすい。呪声術がどんなものかも実例を挙げて教
えてくれる。その中で気になることがあつた。

『真名を捕られるとダメなの？』

『呪声で真名を呼ばれたら、もう意志を持つことは不可能と思つた
ほうがいいわね。その前に見知らぬ相手に真名を預けるという行為
が、かなり危険なことなのよ』

『あー、なんかヘクターさんからそれっぽいこと聞いた気がする』

『気がするんじゃないやなくて、しっかり覚えておきなさい。魔法士に限らず一般人でも、不用意に相手の真名を口にしたら、それは喧嘩を売ってるのと同じなんだから』

ん？　なんか引つかかったぞ。

そういえばツークスで（フリだったけど）ヘクターさんが領主に苦言を呈していたときに、フルネームを呼んでいたような。つまりあれは本気で怒ってたっていうことで（フリだと思うけど）　　っ
てことは。

『じゃあ、ヒューガラナでアマラさんがルイスの名前呼んでたのって……？』

『先に仕掛けたのは彼のほうよ』

今にも舌打ちしそうな言い方で、アマラさんが肯定する。あれ、じゃあ仲良しってわけじゃなかったんだ？

『当たり前でしょう。あいつ？　未来視を持つ君が先発隊なら、もう少し指示の仕様があったんじゃないか？　なんて言っつて、八つ当たりしてきたのよ？　判断ミスで守護すべき相手を危険な目に遭わせたのは自分なのに……！　思い出しても腹が立つ！』

割合本気であたしたちの心配をしてくれてたんだ。嬉しいけど、すんごく分りにくいよ！

『言っただでしょ。仕事はきっちりするわよ、わたし』

『うん。守ってくれてありがと』

へへ、と笑うと、アマラさんの手がまたほっぺを摘んできた。

『三度目はないわよ？　晶壁の強度を上げていたからよかったものの、使鬼に一発喰らわせる前にあんたが死んでたかもしれないんだから』

『う……！　ごめんやひやい』

『まったくもう、あんまり心配させないですよ？』

疲れたときに沁み込む甘いお菓子みたいに、その声は優しい響きに満ちていた。

ふと、少し前にも思った素朴な問いが口を突いて出る。

『あまらひゃん。あたひを嫌いにやのに、にゃんで守ってくりえるの？』

『仕事だから』

『断わりえばよかったによに』

『そうね。確かにあんたは嫌い。……あ、あんたのほっぺはイイ感じよ？』

何フエチですか。なんだか感触を楽しみたいにあたしのほっぺたをふにふに触って、アマラさんはやつと手を離れた。

『……悪かったわよ。いろいろ口走ったけど、一応は謝っておくわ。おお、すごい。女王様が謝ってくれた。でも、なんでだろう。胸のもやもやは、すつきり晴れた感じがしない。アマラさんとルイスが仲良しじゃないことも、はつきり分かったのに。』

アマラさんは大きな猫みたいな瞳をきゅつと細め、なんだか複雑な笑みを口の端に浮かべてあたしを見た。

『だけど、多少の意地悪は見逃してよ？ 積年の恨みがあるんだから』

『積年？』

『知らなくていいのよ』

『でも……』

会ったのは三日前なのに、と思うあたしの疑問に、それ以上アマラさんの答えはなかった。

だらだらと会話するあたしたちの周りでは、ますます激しく、ちゅどーんと吹き出しが出てきそうな勢いで砂と岩と光が弾け飛んでいる。崖が割れたり岩がなくなったり。砂煙で隠れているが、これが消えたらかなりの地殻変動の惨状が現われること確実だ。

さらに崖の向こうにそびえる聖地のとっぺんが、さっきからずつとぐらぐら揺れているように見えるのは、あたしの目の錯覚なんだろうか。錯覚ということをお願いしたい。

『若様、だいぶ荒れてますねー』

『いろいろ溜まってるせいじゃない？』

アマラさんの突っ込みに、なぜかタクが驚いたようにむせる。そういえばタクは、今朝のルイスの超低気圧の原因を知ってるみたいだった。いつのまに男同士仲良くなったんだろう。

『ねえタク。ルイスって、今朝なんで機嫌悪かったの？』

知ってるよね？と目に力を籠めて問えば、嘘の得意じゃない肉体派は言いにくそうに、だがすんなりと教えてくれた。

『彼は、君が向こうの世界で親しい交際をしている人がいるんじゃないかと心配していた』

親しい交際？ もっと率直に理緒子が聞き返す。

『真紀ちゃん、彼氏いるの？』

『いないよ』

十六年間フリーだったの。だよ、と全員一致で返されるのもツライですけど。

『なんでそんな話になったんだろう？』

『寝言で好きな人の名前でも呼んじゃったんじゃない？』

ごほんとタクがむせた。ほんと分かりやすいな。

「あ」
「あ、ただ、好きな人の名前呼ぶって……名前……寝言……夢……」

思い当たった。当たったけど、これって教えたほうがいいんじゃないか。なんだか余計に誤解が生まれそうな気がしないでもないんですけど。

「……？しーくん？かあ……」

「だれそれ？」

「……うちの犬」

「ごふつとタクがむせて沈んだ。驚きと笑いでネジが飛んだらしい。ネジ飛ばしたいのは、こっちだってば！」

「？イヌ？が何か知らないジャムとイジーとアマラさんに理緒子が説明すると、三人とも大きく頷いて全開の笑顔になった。」

「そりゃ旦那も気の毒に」

「やー、もうこのままでいいんじゃないですか？」

「黙ってなさいよ。面白そうだし」

「た、他人事だと思って！」

「ただ、馬鹿な男よね。気になるんだったら、さっさと聞けばよかったのに」

「で、即答でマキさまに？イヌの名前だけど？とか言われちゃうんですか？それも面白……わ、若様が可哀相じゃないですか」

「イジーもたいがい分かりやすい人だよ。実はアクイナス出身だという彼は、平凡を絵にかいたような特徴のない顔をにこにここと崩して、人知を超えた戦闘を繰り広げる？若様？を仰いだ。」

「でも、それであの荒れ様なんです。納得です。本当に聖地壊さなければいいですけど」

「や。やっぱりどう見ても聖地揺れてるよね？」

「遠目だからどこまで無事か分からないけど、古いものだし輝とか入ってないか心配だ。なんとたつて地盤は繋がってるんだし。」

「オレは、この場所であんだだけの魔法力が使えるほうがどうかと思っせ」

頭が痛くて仕方ない、と赤毛の男が洩らすのを聞いて驚いた。

『このあたり、なにか違うの？』

『場が違う。別の力が強く働いて、魔法力がうまくまとまらない。詳しい説明は姫さんたちに聞いてくれ』

『あんたって、魔法力が大きいわりに基礎ができてないからしんどいのよ』

『放つといってくれ』

『教えてあげるって言ってるのに』

『いらねーよ』

二人の掛け合いはいつものことらしく、イジーが小声で『すみません』と謝ってきた。一番下って辛いよね。

『別の力って、聖地があるせい？』

『そのあたりがどうも……力の場の中心に聖地を置いたのかもしれないですし、聖地があることによってこの場ができたのかもしれない。可能性は両方あります』

『卵が先かニワトリが先かってやつだね』

『そんな感じですよ』

『じゃあ、ルイスも今結構しんどいのかな？』

『若様はいろいろと規格外ですからね。おそらくファリマは、この力場（りきば）を利用してこちらの戦力を削いだつもりなのでしょうが、？閃光のアクイナス？を甘く見てもらったら困ります』

『あれ、？氷のアクイナス？じゃないの？』

『それは学院時代の仇名ですね。なんでも、いじめてきた上級生たちを氷漬けにして空き教室に一晩放置したとか。あとは若様の見た目と性格から、その呼び方が広まったみたいですね。』

今は？閃光？とか？殲滅（せんめつ）？とか？白紙？とか、いろいろ呼ばれています』

『白紙？』

『若様が参加した戦闘は、敵味方問わず？白紙？にされるそうですよ。さすがですよねー。憧れちゃいますよ。あはははー』

あれだな、イジーの語尾の？です？は？DEATH？に変換されてるな、絶対。

？閃光？か……。

その名を表わすように、まばゆい魔法の光が砂煙の中から断続的に輝く。あたしは理緒子とつないでない方の手を、ぎゅっと握って胸に押し当てた。

二人の戦いの続く中、みんな普段どおりのなんでもない会話をしていたけど、それがなかったら不安で不安で、どうしようもなくうろたえまくっていたかもしれない。

冗談混じりにルイスの強さを教えてもらっても、爆発音が響くたびに必死に心で打ち消すのは簡単じゃない。あたしよりルイスのほうが大変なんだと分かっている。

『そんな顔しないの』

ぼふ、としなやかな手のひらがあたしの頭に載った。

『彼は勝つわ。わたしの千里眼を信じなさい』

『アマラさん……』

『まあ、あんたのための戦いなんだから、多少は責任感してもらわないと困るけどな？』

やっぱり辛辣に、だけどどこか哀しそうにアマラさんは続けた。

『ルイスはね、外見のせいで産まれた直後に親の住む屋敷から離され、マーレインの力のせいで故郷からも離されて、たった一人で生きてきたのよ。だから他人の受け入れ方が分からないの。』

心を開いても、その芯は常に閉ざされていたわ。本人にもどうしたらいいか分からないようだった。それでもいいと思っていたのよ。周りも彼自身もね……だけど』

深いガーネットの瞳が、遠くの砂塵に向かう。ため息にも似た苦い微笑。

『まいつちやうわよね。その彼が、変な格好をした、どうってことない容姿の子と二人で仲良く笑ってるんだもの。ひとつの椅子に座って、肩寄せ合って……本当に楽しそうに』

『え……』

血の気が引いた。

それは確かにあったこと。だけど、その場にはあたしとルイス以外誰もいなかったはずで。

千里眼…… 未来視。

『それ、いつ視た、の？』

『……昔の話、よ』

ああ、アマラさんの積年の恨みはこれなんだと、あたしは悟った。未来のルイスとあたしを視たことは、きっと婚約解消できちゃうくらい強烈なことだったんだ。

『アマラさん、あたし……』

『謝らないですよ。自分の決断を他人や運命のせいにしたくはないの。これは、わたしのプライドだから』

ぴしりとあたしの言葉を撥ね退け、それでも再びこちらを見た深紅色の双眸はやわらかかった。

『わたしが視るのは、確定された未来の分岐点。そこに辿り着く道程や感情は、まったくの未知なのよ。だからわたしは、これが自分で選んだ道だと誇りをもっているわ。』

ねえ。二人は、これから先に起こることを知りたいと思う……

……？』

繋いでいる手の間で蒸れる熱が、急に冷たく感じる。あたしは顔をあげて隣の理緒子を見、ほっと緊張がほぐれるのを感じた。

彼女の瞳は、困ったように笑っていた。なにを選んでも、どのみち行くんでしょ？と。

あたしも同じ微笑を浮かべて、ゆっくりとかぶりを振る。

『うっん、いいや』

『わたしも』

『……本当に？』

『うん。聖地に行ったあとで、合ってたか教えてよ』

『それじゃ予知でもなんでもないじゃないの』

『いいんだよ、それくらいで』

占いとかも好きだけど、先に答えをはぐって読むミステリなんてつまらないから。

アマラさんがちょっとだけ眼をまたたかせ、意地悪い笑みを唇にのせた。

『じゃあ、ルイスが勝つって言わなければよかったかしら？』

『それは教えといて。心臓に悪いから』

ほんとに地響きとか爆発音とか砂柱とか冷や冷やするから。いくらルイスなら大丈夫って信じてても、体が無事じゃなかったら意味がない。

時間、どれくらい経つんだろう。

ルイスがとんでもなく強いんならさくつと勝って欲しいのに、結構長いこと戦ってる気がする。びくびくして理緒子の背中に逃げるあたしの頭を、今度は別の大きな手が撫でた。

『そう心配するな。彼はアクイナスだ』

『あら將軍。わりと魔法士に詳しいのね？』

『マーレインの力について調べているうちに知っただけだが』

あれ、アクイナスって領主の息子だからってという呼び方じゃないんだ？

『アクイナスもフアリマと同じく、古代より続く格式ある神殿を擁する領地だ。無論彼は天都の魔法士だが、領主の息子であれば土地神の加護は強く受けているはずだ』

『アクイナスの祭神はフェイオー。太陽神アーミテユースの伴神で智慧と調和の神であり、すべての神の伝令役。つまり、太陽神の立ち入れない闇の女神の領域さえ、彼には入れるのよ』

万能の意味が分かった気がした。アクイナスの名がすでに、すべての領域に通じることなのだ。

『だから嬢ちゃんも安心して　う、』

笑いかけたジャムが、途中で言葉を止めて凍りついた。見る見る蒼ざめ、苦しそうに肩を丸める。上着から顔を出したパンが、心配

そくにチィと鳴いた。

『ま……ずいぞ。旦那、あれ、を喚ぶ、気、だ……』

切れ切れの呟き。その一音一音が紡がれることに、何かが変わっていきのが分かった。はっと周りを見渡すと、青さの戻っていた朝の空に急速に黒雲が立ち込め、覆い尽くしていく。

靄のように流れるそれではなく、はつきりと形のある天を突く積雲だ。胸が騒ぐ。二頭の鬼が立ち上がり、牙を剥いて威嚇するけど、微妙に尻尾が股の間に納まっている。

アマラさんが上品さをかなぐり捨てて舌打ちし、周囲を囲む晶壁の内側にもう一重魔法の壁を創り出した。

『あんの馬鹿っ！ 聖霊喚ぶなんてどうかしてるわ。本気で聖地壊す気なの?!』

『もうおれ、若様にだったらやられてもいいかもです』

『くだらないこと言っていないで手伝う!』

やり合いつつ、それでも真剣な顔で魔法士たちが守護のための魔法を強化するのを眺め、タクがぼつりと呟く。

『確かフェイオーは、人々に調和と平穏をもたらすのではなかったか?』

『正確には、変化のあとの平穏よ。かの神の相は改革。伝令は変化を告げるために訪れるものだわ』

そりゃそうだわ　なんて納得しているゆとりもなく。

天が暗みを増すのとは対照的に、大地では満ちていた砂煙が薄らいでいく。その中に佇む、二つの影。一人は立ち、一人は膝をつき、まだ対峙を続けているようだ。

軽く見たこともない峡谷ができてたり、崖の稜線が大きく崩れるけど、それでも二人はどちらも五体満足に見える。黒雲に青白い火花が幾すじも走り、人影をまばらに照らし出す。

ルイス。

きゅっと胃が縮こまる。いつの間にか息を止めていたあたしは、立っているほうの影の頭頂に金色の光が差すのを認め、ほうっと吐

き出した。安心したわけじゃない。彼の両手はまだ剣を握ったまま
で、戦いの途中であることは明らかだった。

息を洩らしたのは、彼の顔のせいだ。無表情というより、人とし
てのなにかが欠落した面差し。そこに浮かびあがる二つの瞳だけが、
燐光のごとく輝きを深めていく。

異世界人のあたしでも分かる、恐ろしいほどの魔法力が彼を中心
に渦を巻いて、天空の黒雲へと立ち昇る。対峙するヴェルグがうず
くまったまま何もしないのは、すでに対抗する力が失われているか
らだ。

ルイス……だめだよ。それ以上したら。

『大丈夫って言ったくせに……ルイスの馬鹿』

八つ当たりにも似た気分でそう口にのぼせると、なぜか涙が溢れ
てきた。

分かっている。馬鹿なのはあたし。彼を人でない領域にまで踏み込
ませ、とんでもないものを喚んで人の命を奪おうとするほど怒らせ
たのは、全部あたしのせいだ。

人じゃなくなっていく彼が怖いんじゃない。ただ、哀しかった。

彼の表情がなくなればなくなるだけ、彼の心が壊れていくような気
がした。

ルイス……帰って来て。お願い。

祈るような気持ちで、見つめ続ける。

本当は気付いていた。あるときあんなに嫌だったのは、ヴェルグ
に触られたからじゃなくて、ルイス以外の人に抱きしめられたから
だってこと。あたしの心と体に触れていいのはルイスだけ。傍に居
て、髪を撫でて、耳元で囁かれたいの一人だけだ。

答えなんて、とっくに出てる。ただ認めたくなくて、認めたら自
分が変わってしまうんじゃないかと怖くて、馬鹿なくらい臆病だっ
たんだ。

四重五重に張り巡らされた晶壁の向こうで、人ならざる青い瞳を
した光の存在が、その名を吼えた。

「ルージン……!!」

雲の中で高まりつつあった電光が、一声と同時に解き放たれ、一頭の長大な獣となって身をくねらせて襲来する。それはルイスの頭上で二つに分かれると左右の剣へと吸い込まれ、次の瞬間、うずくまる相手へ突きつけた剣先から数倍の輝きをまとって迸った。

幾重に護られてもなお耳に響く圧力と爆音。たち籠もる砂塵と降り注ぐ砂礫。

理緒子も、アマラさんでも一瞬目を瞑る光景だったけど、あたしは目を逸らさなかった。だって、見たんだ。ここからの距離じゃ分かるはずのない、彼の表情を。

稲妻を放つ直前、ルイスは確かに少しだけ意地悪そうに口の端で笑ってみせたのだ。

……ルイス。

辺りを包んでいた白い靄が、大気の流れと共にゆっくりと引いていく。黒焦げ、深く穿たれた地面。その数センチ先でうずくまる男。そして、変わらぬ位置にいるもう一人は、ほどけた金色の髪をゆるやかになびかせ、二つの剣を左腰に納めて大地に立っていた。

それを目にした途端、あたしは走り出していた。晶壁は　ぶち破ったのか、上手いタイミングで消してくれたのか分からない。あたしの眼にはただ一人、金色の髪のひとつの姿しか入っていないかった。ごろごろと転がる岩を乗り越え、石を蹴散らしてひたすら走る。

この一歩一歩が、すぐくもどかしくてたまらない。気付いた彼が、こちらを振り返る。

数瞬前まで人ではなかった瞳が、少し驚き、すうつとやさしく三日月を描いた。

「マキ」

いつものあたしを呼ぶ声。想いが先走って、足がもつれる。

あたしは半分転びかけ、前につんのめった勢いを借りて、そのまま彼のお腹に抱きついた。

「ルイス……!!」

「マキ？」

何か言おうとして、ルイスはお腹に回された手に指環が嵌まっていないことに気付いたらしい。

『どうかしたのか？』

普通の調子でそう送心術で聞いてきたから、「どうかした、じゃないだろうっ！」と返そうとして止めた。それよりも言いたいことがある。

「ルイス、あのね……」

不思議なものだ。本当、こういうのって言えちゃうもんなんだな。自分の人生じゃ絶対ありえないと思ってたけど、どうしても言いたいんだ。言葉が心を突き破って、溢れ出てくるみたい。

「大好き」

通じなくてもいい。今は、自分の言葉で伝えたかっただけだから。日本語は分からないはずなのに、それでもルイスはさつきよりも数倍やさしい笑顔であたしを抱きしめ返してくれた。

『君がいてくれてよかった』

「あたしも」

しまった、マフォーランド語すっぱ抜けた。でもまあいいや。

無事を確かめるように彼の胸板を触り、左右の手をとる。裏表確認。よし、指もちゃんと五本ある。顔にも首にも傷はなし。髪の毛焦げてない。よおし、いい男っぷりは変わってないぞ。

一通りルイスを見分して満足したあたしは、嫌な記憶の上書きも兼ねて、ぴったりべったりくつついた。ルイスがちよつと困った顔をする。

『マキ、本当になにかあったのか？』

あつたよ。大きな心理的变化がね！　だけど語学力と恋愛経験値不足が邪魔をするんだ。

「ネイ（ないです）」

『本当か？　我慢せずに、きちんと私に打ち明けてくれ』

もつ言っちゃったし。つか、なんで腕を外そうとするんだ？　せ

つかく乙女心を堪能しているというのに。

『あとでちゃんと話を聞くから』

「真紀ちゃん、ルイス！」

背後から聞こえる理緒子の声。そうだ、忘れてました。めっちゃんみんなの前でした。

急に恥ずかしくなって、あたしは焦って腕をほどくと、一、二、三歩飛び退った。それでまた転びそうになって結局ルイスに抱きとめられたのは、お決まりのナントカってやつで。

慌てたついでに、もうひとつ大事なことを思い出す。

「……あーあ。結局、トイレ行きそびれちゃったなあ……」

好きだと自覚した相手の腕の中で、こんなことを考えるあたしは、本当に心底まったく恋愛に不向きなんだと思う。

文字通り目と鼻の先に雷を落とされたヴェルグは、さすがに負けを認めたらしく、無駄な抵抗をすることはなかった。鞘に直した剣を大地に投げ捨て、ルイスの指示のもと、イジーが特製の鎖で後ろ手に捕縛するのにも、あつけないほどあつさり従う。

あの鬼たちがさぞ怒るだろうと思つたら、鎖を巻かれはじめた主人を見るなり、二頭は全身の毛が逆立つほど驚いて跳び出し。

「あ……れ？」

倉庫くらいもあつた二頭のガウルもどきは、なぜか2・5頭身サイズの子どももの姿になると、てけてけつと小走りにヴェルグに駆け寄る。

「ぬ、主さまあつー！」

「ぬしささまあつー！」

なんだあのかわいいの。大きさは幼児なんだけど、明らかに違う。丸くて大きな頭のとっぺんは尖がり、目は細く吊り上がっている。丈長の上着に、だぼつとしたズボンと先の曲がった靴。一人は白で一人は黒だ。

糸目のキューピー。

そうとしか言いようのない彼らは、鎖を巻かれたヴェルグにおろと纏わりついた。

「主さま、ご無事で？」

「おいたわしや、主さま」

それにヴェルグが二言三言答えると、二匹の鬼はくるりと向きを変えて、こちら、というかルイスを見上げる。

「大鳥の若君。戦い、お見事でした」

「お見事でした」

『……ありがとう』

『主さまはお役目を果たされたのみゆえ、どうか寛恕召されよ』

『ご無礼、ご容赦召されよ』

揃って、ぺこりと一礼する。バネ仕掛けのお人形さんみたいな動きだ。ちよつと、まじでかわいいんですけど。

『君たちも気をつけて帰りなさい』

『あい』

『あい。では、失礼つかまつる』

白黒二匹の鬼はもう一度頭を下げると、ぽんと空中で後ろに跳ねる。それは今度、見覚えのある雫形の胴をもった弦楽器となつて、ジャラリと音をたててヴェルグの足元に転がった。

思わず理緒子と顔を見合わせる。

えーと、つまりあの巨大ガウルがキューピーで、キューピーがシトウラで、シトウラが……ガウル？

なんだかよく分からないが、マフォーランドの鬼は奥が深そうだ。長いネツクを掴み、ルイスが片手でそれを持ち上げる。慌ててあたしは理緒子と手を繋いだ。

『なかなか良い使鬼だ』

『厭味か？ それよりもこんな鎖などで繋がずに、今のうちに殺しておいた方がいい。俺はあの盗賊崩れのように、刑紋をつけて見張るわけにはいかぬぞ？』

ルイスは挑発に苛立つふうもなく、静かに笑って、使鬼のシトウラをイジーに手渡した。

『命は奪わないと彼女に約束した。私も、おまえが彼女の目の前から消えてくれればどちらでもよい』

『甘いな。俺は、いつか必ずおまえを殺しにゆくぞ』

『……来るがいい。愉しみにしている』

口の端に浮かんだ冷笑は、ルイスの本気だ。もうほんと男同士の牽制って、胃と心臓に悪いったらありゃしない。

あたしは近くにきたルイスの服の袖を掴んで、きゅっと引き寄せ

た。自然と、彼の右腕が腰に回る。

『腑抜けたものだな、アクイナス。貴様のそんな姿を見るとは思わなかったぞ』

『好きに言え』

『言つさ。娘、その男に飽きたらいつでも来い。相手をしてやる』

『やだ』

即答でお断りだ。ぬう、睨んでいるのに笑うとは失礼なやつめ。

鎖に巻かれてるわりに平然としているヴェルグは、ふと隣の理緒子に目を遣った。

『もう一人の異界の娘。先程わが使鬼を守りの中に入れてくれたこと、礼を言う。あの戦闘では危なかった』

『なんで知ってるの？』

『使鬼たちから聞いた』

いつだろう。ルイスたちに驚いた様子はないから、使役する側とされる側にはなにか特殊な伝達方法があるのかもしれない。

だけど、ヴェルグってわりとドライな奴かと思ったけど、手下なんて使い捨てってタイプでもなかったんだ。そう思って、ふいに彼の言っていた台詞が耳に甦った。

『ねえ、あんたさ。さつき、弱いものがやられて強いものが生き残るのが当然って言ってたよね？ だから、水門が開かれなくてもいいって』

『ああ』

『本当にそう思ってるの？』

『だとしたら？』

『それって、おかしいと思う。だって人間って、そんなに強い生きものじゃないんだよ？ あんただって、赤ちゃんときはお母さんのお乳に育てられたんだろっし、他の人にたくさん助けてもらったはずなんだよ。』

あんたの切り捨てる弱者って、そういう子たちのことだよ？

それは過去の自分を切り捨てるってことでしょう。つまり、未来を捨てるのと一緒にじゃないの?」

「別に子どもを切り捨てるというわけではない」

「じゃあ弱者って誰? お年寄り? それこそあたしたちの未来の姿だよな。」

お金とか立場の違いもあるけど、それだって人が集団で暮らす以上、どうやっても上と下が出来るんだよ。自分がいつ一番下に転げ落ちるかもしれないこの不安定な状況で、どうやって何を切り捨てられるの? どれをとっても自分自身になり得る何かをあんたは選べるの?」

続けざまの問いに、ヴェルグが黙り込む。あたしは少し語調を弱めた。喉がまだ完全じゃなくて、渴いた空気に少しからむ。

「あんたは、さっきの戦いで鬼たちの助けを借りた。けど、それは卑怯なんじゃなくて必要だったからでしょう? それと同じだよ。」

他人の助けを借りるって、ダメなことじゃない。自分の弱さを認められずに、いつまでも立ち上がれなくて前に進めない方が、よっぽど馬鹿だよ。立ち上がれないなら、助けを求めて手を借りればいい。歩き出した後で、今度は自分が誰かに手を貸せばいいだけなんだから」

「……手を貸す、か」

「あたしたちがどこまで役に立てるか分からないけど、やらないよりましたでしょ? 手を貸したつもりで一緒に転んじやうかもしれないけど、そのときはそのときでまた考えればいいし」

軽くそう締めくくったら、ヴェルグがふっと笑った。小馬鹿にしたのではなく、どこか苦味を含んだ微笑。

「こんな甘いことを口走る娘の世話とは、苦勞がしのばれるな、アウナス」

「そうかもしれないな」

否定しろよ、ルイス?

「だが、だからこそ私は、彼女たちと共にここにいる。それを悔い

ることは、これまでもこの先もない』

さらりと、挨拶程度の口調で簡単にそう言いきり、ルイスはあたしと理緒子を促した。

『……さて、行こうか。余計な時間をとってしまったな。すまない』
『大きな荷物は置いていきなさいよ。見ておいてあげるわ。半日あれば往復できるでしょ？』

アマラさんが声をかけてくる。任せとおいて下さい、とイジーも片手を振ってきた。マッドな気質の彼は、ヴェルグの鎖の端を握ってさつきからご機嫌だ。

ジャムはというと、聖地の力場とかいうのにあたつて、前よりもっと調子が悪そうだ。逆立てた赤毛が、しゅんとしおれている。

『なんかヤバイ雰囲気だが……旦那と大将がいるから大丈夫だろ。気をつけて行きな』

わしわし、と両手であたしと理緒子の髪の毛をかき回す。

タクが崖下から、あたしたちの肩掛け鞆を持って来て並んだ。お礼を言って鞆の紐を肩に通すと、途端に旅の気持ちに戻る。ルイスたちの戦いは決着がついたけど、あたしたちはこれからなんだ。

ようやく鎮まった周囲の雰囲気に安心したのか、ジャムの服の間から、パンが顔を出してつるりと彼の肩を駆け上がる。怪我はほとんど気にならないみたいだ。

あたしと理緒子は、見送りをしてくれる三人とパン、ヴェルグ、シトウラにいるはずの鬼たちに手を振って、聖地に向かって一歩歩き出した。

その時。

『や……ばいつ！ みんな逃げろっ！！ あれは』

ジャムの怒鳴り声に、あたしたちは振り返って天を仰いだ。

え……？

聖地のそびえる崖に続く、いくつも重なり連なった岩山の尾根。ごつごつした空との境の一部が、大きく揺れて、剥がれて　ぐるりと擦じれる。

ええええええっ?!

いくつ?え?がつくんだというくらい心の中で絶叫し、あたしはそれが、今までの自分の常識の中に絶対に納まらないものであることを理解した。さっきのヴェルグの岩恐竜なんてレベルじゃない。

山が動く。それは自然の成し得るものではなく、確実に別の意志をもった?何か?だった。岩でできた山は大きく伸び上がると、ぎこちなくこちらへその身を傾けてくる。

そう この山は、人の形をしていたのだ。

『……ダイダロッド。なぜこんなところに……』

ルイスの眩きに、あたしは理緒子の絵本で見た一つ目巨人の挿絵を思い出した。あれはもうちょっと頭に毛とかも生えてて、人に似ていた。

だけどこれは、形こそ人の輪郭をしているけど、まったく異なる生き物だった。

いや、生き物と呼べるかどうか。動いてるんだから生きているんだろうけど、それはなんだか山とか川とかを見て?生きている?と呼ぶ感覚にすごく近い。?彼?はもう、自然そのものだった。

動いた岩山の頂点、人でいう頭に当たる場所の一部が裂け、巨大な真紅の目玉が現われる。白目はなく、様々な赤の渦巻く虹彩の中心で輝く金色の瞳。まるで火山の噴火口で煮えたぎるマグマが覗いているようだ。

耳はもちろん、鼻も口も、よく分からない。山の一部を引き剥がしたみたいな手足は二本ずつに見えるけど、大きすぎて全景が掴めない。それでも、なぜか恐怖心はなかった。

驚くあまりに感覚が麻痺しているのか。それとも、昏倒寸前のジヤムの肩に乗るミヤウのパンが、怒りもせず彼を見上げていてせいかもしれない。

繋いだ右手に力が入ったから隣を見ると、理緒子が、どこか惹きつけられるように陶然と彼を仰いでいた。あたしも視線を戻す。と、未知の感覚が全身を貫いた。

《……ヨ。……ラ……又》

送心術とも違う。もつと大きな意志に捕まえられて、漂うその中に浸け込まれたみたいだ。

響き渡る声の波が全身を満たす。

《いかい……ノ、むす……め……タチヨ……》

切れ切れの意志が、繋がりをもって言葉として伝わってくる。

《いかいノ、むすめタチヨ。あれヲ、めざまサセテハ……ナラヌ》

え？

《あれニちかツイテハ、ナラヌ。めざまサセテハ、イケナイ》

目覚めさせてはいけない　？あれ？とはつまり、聖地のことだ。

たどたどしい意志を理解したあたしは、反射的に心で訊いていた。

どうして？　なんでいけないの？

《……ソガ、ねむリヲえらシダ。ふたたび、めざまサルコトハナラヌ》

だけど、みんな水を欲しがっているんだよ。危ないことではないでしょう？

《あれハ、ねむラセテオカネバ、ナラナイ》

そんなに危険なの？　じゃあどうして、今までそのままにしておいたの？

彼の手は、足は、聖地など簡単に捻り潰せそうなほど大きく、力強いはず。

その問いかけに、声は応えなかった。

あたしは、唯一感覚のある右手の温もりだけを支えに、押し寄せ
る大きな流れに攫われそうな自分を堪えた。星の核（コア）のよう
に赤く燃える瞳に、もう一度尋ねる。

ねえ。あなたは、本当は何が言いたいの？　何を心配している
の？

荒々しく躍動を続ける原初の炎が、わずかに瞬いた。

《……ヲ……テ》

囁かれるように、どこか祈るようにその言葉が告げられ、唐突に

あたしたちは意識の海から放り出された。ぐらりと揺れる感覚。

『マキ!』

ルイスに呼ばれ、腕を掴まれて、あたしはようやく正気に返った。やけに空が近いと思ったら、座り込んでいるそこは、見たこともない花畑だ。手を繋いだままの理緒子も、目を丸くして辺りを見回している。

頭を振って、説明を求めるようにルイスを見上げた。

『君たちの様子がおかしいと思ったら、いきなりダイダロッドが私たちを手に乗せたんだ』

『え、じゃあここは……』

『彼の手のひらの上』

花、咲いてますが？

そうだな、と同じく座り込んだルイスが苦笑する。なんだかすこすぎて、もう苦笑以外に反応のしようがないんだ。現実を確かめるように、片手でほっぺをつねる。

今いる場所は教室の半分くらいの広さで、岩ともつかないゆるやかな凹凸をもつ固い表面には、苔が生え短い草が茂っていた。数種が混在する緑の狭間で白や黄、ピンクの花が咲き、小さな虫が飛んでいる。

彼の横顔を下から仰ぎ見る位置にいるせいで、全身がそんな調子なのだと分かった。左肩のあたりには木が生えて、なんだか鳥のさえずりまで聞こえる。アクイナス、天都と続いて三番目に緑豊かな場所が巨人の体の上とか、笑い話にもならない。

あたしと理緒子、ルイス、タクの四人を乗せた手のひらは、本当にゆっくりと、だけど足で登るのでは比較にならないほどたやすく切り立った崖を越え、白く天にそそり立つ聖地の足元へと、あたしたちを運んだ。

一番大きい石柱のすぐ傍に、指先が差し出される。といっても、指一本の厚みが数メートルあるのだ。及び腰で段差を探すあたしの横で、ルイスが身軽く飛び降り、こちらへ両手を広げて差し出す。

『ほら、おいで』

胸に飛び込めつていうのなら、それは無理っ。

それに結構距離があるんだよ。仕方なくぎりぎりまで降りてしゃがみ、あたしはルイスの両手に掴まった。よいしょ、と弾みをつけて前に飛ぶ。

思ったより地面が遠くて、やっぱりルイスに抱き止められたことに關しては、自分の墓穴つぷりを噛み締めるしかなく。

『捕まえた』

笑いながらそう告げられると、捕まえられたのが体だけじゃないんだと思い知る。してやったりみたいな顔に、これまでの態度が全部計算づくに思えてきた。

悔しいから、ひさびさに鼻を摘んでやる。今朝のあの機嫌の悪さはどこいったよ？

じゃれていたら、理緒子を両腕に抱き上げたタクが、すとりと近くの地面に降り立った。

『しまった。その手があったか』

本当に何を考えてるんだ、ルイス。肘打ちをお見舞いして、彼の腕から抜け出る。好きなんだと自覚したら、今まで平気で許していたことが急に恥ずかしく思えるのは身勝手なのかな。

「……おい」

どこからか呼ぶ声が聞こえ、あたしはそちらに向かいかけて足を止めた。ここは聖地のある、あの崖の上。先程いた場所とは百メートル以上も離れているうえに、ほぼ90°に近い直滑降の断崖だ。

理緒子と手を繋ぎ直して、安全と思われる位置から身を乗り出すようにして覗くと、三人とパンがこちらを見上げている。そこから色のないシャボン玉に似た丸いものが浮かんで、空中ではちんと弾けた。

『だいじょうぶ、です、か？』

出来の悪い合成音のようなイジーの声が響く。『平気だよー』と手を振り返すと、玉はもうひとつ浮かんできて、また割れた。

『彼に、逃げられて、しまいました。ごめんなさい』

イジーがほどけた鎖を手にもち、大きく左右に振っている。ルイスがやつぱりな、と苦笑いをこぼした。

『闇は逃げ足が速い。いつまでも捕まえておけるものではないさ』

左手を伸ばし、手のひらの空間に吐息を吹きかけて、バレーボールくらいのシャボン玉を作る。手を離すと、それはふわふわと下に降りてゆき、声を残して消えた。

『仕方がない。しばらく、そちらを頼む』

イジーが両手で大きな丸を作って了解を示す。ふと影が消えて空が明るくなった気がしたので、頭上を仰ぐと、あの巨人がのっそりのっそり帰っていくところだった。

《 コノほしヲ、まもツテ》

この星を護って。

最後に言われたのと同じ意志が、上空からふわりと心に滲んで、ふっと消えた。隣を見ると、理緒子と目が合う。巨人の声が聞こえたのは、二人だけみたいだ。

『なんだったん、だろうね』

『なんだろうね』

それでも、彼にとつて、すごく大事なことを言いに来たのだということだけはお互い分かった。

花畑を纏った巨人は、太陽の動きと同じくらい自然に、大地の震動が気のせいに感じるほどの速度で山のほうへと歩き去っていく。

その巨大な後ろ姿は、やがて本当の山にまぎれて分からなくなった。

本来は北の果てに棲むという、すべてを識る偉大な巨人。

あたしたちがその言葉に託された彼の想いを知るのは、それほど先のことではなかった。

『 見るものは何もないと思うが』

来たことのあるルイスが乗り気じゃない中、念願の聖地に辿り着いたあたしたちは、早速いろいろと探索して回った。実際間近で見

る石の遺跡は、大きな岩の塊が無造作に大地の上に建っている、それだけといえばそれだけだった。

一番大きな柱と周りの小さな柱は思ったより距離が離れていて、不規則に点在している。三本の小さな柱はどれも斜めに傾いて、ほとんど崩れかけている状態だ。

白光りして見えた表面も遠目ほどきれいではなく、枯れた草が根元にまとわりつき、ところどころカビか苔っぽいもので黒ずんでいる。指で拭くと下は鈍い淡灰色で、角度によってはきらきらとした光を反射するけど、特にどうという感じではなかった。

ただ、やはり形は異様だ。わずかにいびつな直方体は、角がきれいに取ってあって、いかにも人工物に見える。

一通り眺めて一番大きな柱の前に戻って来たあたしは、やや離れたところからじっくりとそれを仰いだ。ちよつと四角い柱の角から両面を見る形となつた視界の左端に、長方形の長い辺に沿って大きな染みが縦に数個並んでいる。

角度のせいか、あたしはただの汚れでしかないその黒ずみが、何かの記号か模様に見える気がした。強引に書くと、こんな感じだ。

<

工
<
?

なんだろう？

思つて首を横に傾けたあたしは、自分の目を疑つた。それは、よく知っている文字に見えたから。そして、あたしはそれをすんなり読めたのだ。

まさか。

走り出す。狂ったように聖地の柱のそこかしこを叩きはじめたあたしに、驚いた他の三人が近寄ってきた。

「どうかしたの？」

そう訊いて理緒子が手を握ってきたから、あたしはさすがのように背の低い彼女を見つめた。

『りおこ……』

どうしようどうしようどうしよう。

あたしたちは、本当に　ここに来てはいけなかったのかもしれない。

無言で、壁の探り当てたものを指で示す。見る見る理緒子の顔色が変わった。

そこには、さっき読んだ文字が、正しい向きと形で小さく記されていた。

MAHORA

『これって……』

『なんなのこれ……なんなんだよ一体』

その文字の下には、十六年間慣れ親しんだ国の標章に似たものが刻み込まれている。

手のひら大の円の外周を、指で撫でるように触れる。ふっとその縁が青白く発光した。

『真紀ちゃん、だめっ！　目覚めさせたらいけないって……！』

『わっ！！』

引き込まれる。そう思って、あたしは理緒子の手を振り払おうとした。だけど、彼女の細い指はかえってあたしの指の間に滑り込み、しっかりと絡んでくる。

理緒子……！

繋いだ二つの手が、真っ青な光を放つその円の中に吸い寄せられる。体が宙に浮く。

どちらが掴んでいたのかは分からない。あたしたちは得体の知れない何かに呑み込まれながら、それでも離れないように、ただただ固く手を取り合っていた。

細くちりりとしたものが巻きつき、右手の爪の先から肘のあたりまで重くしびれる。急に冷たい水に突っ込んだときのような、じいんと芯に響く鈍い痛み。

真っ暗な中で、誰かの声が聞こえた。巨人の意識とも人の声とも違う、感情や性別のない音声。

「 遺伝子レベル確認。正常。リロードを開始します」

に……ほん、ご……？

ぼんやりと目を開ける。倒れこんだそこは冷たくつるりとした床で、周囲は不自然なほど暗かった。ぼつぼつと灯る明かり。それは次第に数を増していく。

ここは……。

星の明かりなんかじゃない。ましてや、火でも魔法でもない。

「リロード完了。システム再セットアップ。起動準備完了。メイ
ンコンピュータ起動します」

その声が無感情に告げた瞬間。

まばゆい人工の光が、一面を照らし出した。真っ白く輝く金属でできた床と天井。壁を覆う巨大スクリーン。無数のボタンが並ぶ台座。曲線を描く銀色の椅子。

あたしの頬を、ひとすじの涙が伝う。

怒りでも哀しみでもない。ただ、すべての感情が行き場を失くして、はちきれて暴発しそうだった。

あたしは隣で泣いている理緒子を抱き寄せると、どうしようもなく声をあげて泣いた。

不自然な明るさを纏った歯切れのよい音声が、あたしたちを容赦なく現実へと叩き落す。

「Welcome to the 「MAHORA」 Stars

hip 星間亞光速宇宙艇「まほら」へようこそ！

もし今、運命というものがここにあるなら、あたしは全霊をかけて
それを、呪う。

19 - 9 (後書き)

次章はリオコ視点に移ります。

第20章 水門 リオコの夢

1

真紅の一つ目をもつ巨人から、聖地を目覚めさせてはいけないという声が響いてきたとき、わたしは不思議な感覚に包まれた。例えるなら、今まで見ていたものに突然別の方向から光が当たったような、そんな印象に似ている。

水門が眠るといふ聖地。あんな超人的な魔法をふるうルイスでさえ分からなかったそこに、本当にこの世界が必要とするものが存在するのかという疑問が、改めて心に芽生えた。そして聖地で消息を絶った、前回の乙女のことも。

水門が世界にとって善いものなら、その代償は一体なんだというんだろう。

幸運なんて、所詮不幸の大小の比較だ。よりリスクが少なく済むほうを、わたしたちは？正しい選択？だと思う。犠牲を払わなくていい未来なんて、あるはずがない。

そのことに気付いたわたしは、急に白く輝く石柱遺跡が恐ろしくなった。

真紀は「だめもとでやってみる」と言うけど、未来は試してみることなんてできない。一度きりだ。少しだけ覗いて「じゃ、やーめた」なんてできるわけもない。だから、わたしたちはいつも迷って立ち竦むのに。

開けてはいけないという禁忌の箱。それは蓋を開けた瞬間、世界に向けて中のすべてを撒き散らすのだ。急速に不安が、闇となって心を覆いつくす。

だけど、反対の意志を伝えに来たはずのあの巨人は、わたしたちを手に乗せると、聖地まで丁寧に運んでくれた。

試されている……？

そんな気がする。わたしは用心深い気持ちで、念入りに巨大な岩の立つその場所を見渡した。猪突猛進型の真紀は、あちこちを飛び跳ねるように行ったり来たりしている。

運動が得意じゃないわたしは、時々タクに手を貸してもらって、ごろごろと転がる岩や穴をまたぎ、巨大な石たちをひとつずつ目を凝らして回った。大事なことを見落とさないように、じっくりと。だけど、重要なものはもっと大きな視点が必要だったみたいだ。

一番大きな石をやや離れたところから見上げていた真紀が、突然左に小首を傾げる。

「ま？」

呟いたと思ったら、血相を変えて遺跡に走り寄り、ばしばしと壁を叩きはじめた。わたしも同じように首を傾げ、彼女の見ていた方を仰ぐ。確かに言われてみると、壁の汚れがなにかの文字に見えなくもない。

MA……HO……。

タクたちと一緒に、凍りついたように柱の一点を見つめる真紀に近づき、手を握る。

『どつかしたの？』

彼女の指が指したのは？MAHORA?の文字。

……ああ。

あの巨人が告げにきたのは、このことなんだと即座に理解した。それから起こったことは、まったくの理解不能だったけれど。

「Welcome to the MAHORA Stars
hip 星間亜光速宇宙艇「まほら」へようこそ！」

開けた箱から飛び出してきたのは、混沌と狂乱。憤怒と悲嘆。哀惜と望郷。後悔。

心の奥底のどす黒い感情すべてが溢れ出し、わたしたちは、ただ泣いた。

「まほら？とは、古い日本の言葉で？すばらしい場所？という意味だ。？まほるば？というほうが一般的かもしれない。」

この場所にそんな名前をつけたということは、造った人たちが、ここに夢や希望のようなものを託そうとしていたということは分かる。だけど。

セイカンアコウソクウチュウテイ？

その言葉に頭がフリーズする。ファンタジーは好きだけど、SFは大の苦手だ。

すごい光の飛び交う魔法士同士の戦いや？鬼？と呼ばれた巨大犬、さらに巨人まで出てきた拳句のこの状況では、頭が恐慌状態になって当然と思う。もうぐちゃぐちゃのめっちゃめっちゃだ。

感情のストッパーが全部はじけ飛んだように、わたしは真紀と抱き合って泣きながら、それでも一生懸命頭の隅で考えを巡らせる。

セイカンって星の間……？ アコウソク……高速じゃないよね。すごく速いってこと？

だめだ、すごく馬鹿な子みたいな思考になっている。だって、今ここで日本語を聞くななんてまったくの予想外だ。いきなりすぎて、ぜんぜん現実が形になってくれない。

ウチュウテイ……宇宙船の仲間かな。う……宇宙船……？？

『ここ……宇宙船、なの……？』

『分かんない。調べて、みる』

ぐい、と拳で涙を拭って、真紀が立ち上がる。わたしは座り込んだまま、白い光に包まれる無機質な空間に立つ、彼女の後姿を茫然と見送った。

床に置いた左手に視線を落とす。きつと真紀はなにかあったら一人で背負い込んだじゃうから、あの丸い模様が光を発したと同時に、わたしは繋いだ手を強く握った。強気で突っ走るくせに、真紀はすごくもろい部分がある。だから、今度こそ絶対についていこうと思っていた。

わたしだつて強いわけじゃない。だけど弱くても二人いたら、一人分の強さくらいになれるかもしれないから。

青い光に触れた瞬間、左手の指先から肘まで、ぴりぴりとした痛みが走った。恐くて目を瞑ってしまつたから、何があつたのかはわからない。でもまだ違和感の残るその腕には、不思議に光る紋様が残されていた。花にも流水のようにも見える曲線。螺旋。渦。

それは腕の途中で、なにかに邪魔されたように縦半分がふつりと途切れ、完全な形は分からない。それに全部の模様を見たところで、意味なんて解読できる雰囲気ではなかつた。

そもそも……ここ、どこよ？

直前の状況を頭で幾度か反芻してみても、ぼんやりと聖地の遺跡の中だろうと結論づける。

現状が呑み込めなくてもイェドで目覚めたときのような不安がないのは、日本語を聞いたせいだろうか。

正面には、映画館並みの巨大スクリーン。わたしが知っているものよりやや横長で、奥行きがぐつと膨らんでいた。その前の机には、ずらりとボタンにキーボード、レバーが並ぶ。

スクリーンに沿うように曲線を描いて広がるそれらは、機能的すぎるくらいシンプルなデザインだ。机におさまる椅子やバーは、金属のチューブで出来たオブジェにも見える。

宇宙船というと、もっといろんな機械が所狭しと並んでいる気もするけど、なんだかとても洗練されたオフィスのようだ。そこまで考えて、足りないものに気がついた。

人が、いない……。

遺跡なんだから当然だけど、人がいることを想定して造られた空間は、色のない景色をさらに空虚に感じさせた。それでも遺跡に命が通っていることを示すように、スクリーンパネルは淡く発光し、いくつかの計器は光を点滅させている。

さすがに用心したのか、真紀はそれらに手を触れないように、慎重にひとつひとつ覗いていつていた。

弧を描いて繋がるデスクの一面、円の端の飛び出した部分に差し掛かった途端、そこから丸い光が筒となって立ち昇る。慌てて真紀の傍に走った。

『な、なにも触ってないよ？』

『じゃあ、センサー？』

おどおどと、お互いまだ涙の残る顔で言い合う。

光の筒はほどなく、その中心に背の高い人間の映像を結びはじめた。

背が高く、浅黒い肌。後ろへ流した黒髪は長く背に下ろされ、細かな紋様の入った上着はゆったりとした造りで、どこかヘクターさんの格好に似ている。濃い眉に高い鼻すじ、薄い唇。切れ長の両目は落ち窪んで、瞳の色は分からない。

宇宙人というには少々古代の雰囲気漂うその人物は、無表情のまま語りはじめた。

『ようこそ、異界の渡り人よ。わが名はソロン』

はっと左手の指環に視線を落とす。確かこれは、ソロンという人が創ったはず。しかもその人は異界の乙女の予言をした人で。

『そなたがここを訪れたということは、すなわち水門の覚醒が無事成されたということだ。まずは歓迎と……礼を申し上げる』

ちよつと待った。そんなのした覚えないつてば！

驚くわたしたちを置き去りに、ソロンは淡々と続ける。VTRのようなものなんだろうか、顔はこちらに向いているのに、見られている感じがまったくしない。

『そなたは、なぜ自分がここに呼ばれたかと疑問に思うだろう。それに答えるには、まずこの世界の話をしなくてはならない。』

ここは、そなたらの因果によって成された世界だ。その末(すえ)に、われわれは誕生した』

言い回しが古臭いうえに状況説明が曖昧すぎて、まるつきり理解できない。それでも我慢して聞き耳を立てる。

『そなたらの成したことを、私はこの地に眠る記録映像を見た。お

のれが住まう星をおのが手で滅ぼし、この星へと逃れる道程をこの目と耳で識ったときに、私は確信したのだ。

過去のあやまちは、過去のものに償わせるべきだと』

なにを……言っているんだろう、この人は。

償うべき何かを、わたしたちがしたとでもいうんだろうか。けど、それがどうして水門と結びつくんだろう。さっぱり分からない。真紀も眉間に皺を寄せているけど、彼がただの再現映像だと気付いているのか、反論の言葉はなかった。

『われわれが住まうこの世界は、そなたらの末である、わが祖が拓いたもの。本来のあるべき姿を捻じ曲げて、住み良いように創り変えた仮初めの世界だ。』

しかし われわれは、もはやここから立ち退くことも移り住むすべも持たぬ。だからこそ、われわれには水門が必要なのだ』

両脇に下ろされていたソロンの手が、ぐっと拳を握る。

『わが祖らが降り立ったこの星は、まだ若く、天からの熱も地を覆う熱も人に耐えられるものではない。ひとびとの生き延びるすべを探してこの地に辿り着いた私は、人を護るために祖が創りたもうた水門の存在を知った。』

だが、われわれに水門を開けることは叶わぬ。叶わぬゆえに、私は祖と元を同じくする存在を招き喚ぶことにした。それが、そなただ。渡り人よ』

拳が解かれ、すつと右手がこちらを指差す。

『その腕に、すでに水門の鍵は刻まれた。じきに水門は目覚め、その役割を果たすだろう。この世界に偽りの豊かさをもたらすために偽り。』

まったく予測していなかったその言葉は、わたしの胸に鋭く刺さった。おさまっていた涙が、また噴き出しそうになる。

『そなたは、私を深く恨むことだろう。しかし残念ながら、そなたがここへ来るときには、私はすでに亡い。そう……そなたの世界でいう？ジゴク？とやらで、永劫の炎に灼かれている頃であるうな』

口元に浮かぶ、酷薄な微笑。その胸に当てられた手に視線を向け、わたしはどきりとした。

皺の深い、老人のように枯れて節くれだった手。顔立ちは陰影にまぎれてはつきりしないけど、張りのある声に比べて、年齢がかけ離れてすぎているように思える。

青年にも老人にも見える彼は、変わらぬ調子で言葉を紡ぎつつけた。

『これは、そなたに理解と選択を与えるために、この地の遺物を借りて遺したものだ。今、そなたは鍵を手にし、水門を目覚めさせた。そなたが選ぶべき道は二つ。このまま水門を開放し、人の世に束の間の潤いをもたらすか。前世の罪がもたらした水門を、人の触れぬ奥深くに眠らせるか。それは、そなたの意志にかかっている』
一度語を切り、彼は吐き出すように短く、衝撃的な言葉を告げた。
『渡り人よ。そなたは、ここから還ることはならぬ』

え……？

すうつと全身から血の気が引いた。真っ白ながらんどうの空間に、ただ彼の声だけが流れていく。

『そなたをこの地へ召還する次元魔法を理律に組み込むために、私は魔法力を使い切ってしまった。もうすぐ、この体は土に還るだろう』

干からびた手が、きらびやかな服を強く掴む。

『いかように私を恨み、罵るがいい。私の罪は深い。だが、そなたとて同じ罪を負うのだ。神が創りたもうた世界を改変することを選び、この地で水門とわれらを生み出した。その罪はそなたにも、われわれにも流れ続けている。生きるとは罪深い。この召還は、贖いなのだ。』

……渡り人よ。この世界は、そなたの末となるものたちの生きる世だ。この世界を愛し、共に生きてくれることを私は願う』

音声がぼやけ、ザ…と砂嵐が流れるように、彼の姿が乱れる。

『さらばだ。渡り人よ、そなたの決断に幸いあれ。では……ジゴク』

で逢おう』

その言葉を最後に、彼は動きを静止した。わたしは点滅を続けて佇むその姿から、なぜかしばらく目を離せずにいた。

頭の中に浮かぶのは、それまでの混乱に輪をかけた混乱。そして、やり場のない怒りだ。

この人が、わたしたちをここへ喚び寄せた……。

しかも、身に覚えのない？罪？が理由で。彼の言っているとおり、ここがわたしたちの子孫が創ったところだとしても、わたしたちには何の関係もないというのに。

一方的な理屈を並べ立てられ、選択を迫られ、さらに帰れない次々と突きつけられる事柄に、なにもかも投げ出してわめき散らしたくなる。

ガタリ、と背後で音がし、ふり向いたわたしは、近くの椅子を足で蹴り飛ばしている真紀の姿に目を丸くした。

『ま……真紀ちゃん？』

「ああ、ごめん。ちょっと頭にきてさ」

答える声は低く、抑揚がない。目が据わっているようだ。

真紀はきれいなカーブを描いた金属製の椅子を蹴り、蝶番をいじると、ぱきんとパイプの一本を取り外してしまう。なにをしているのだろうと見ていたら、鉄棒くらいの太さのそれを片手で掴み、バツトを揮うように軽く宙で振った。

ものすごくイヤな予感。

「よし」

『え、と……？よし？じゃなくて、真紀ちゃん何する気？』

「腹立ったから、こいつぶっ壊す」

『……まじ？』

本当に、わたしが一番理解に苦しむのは、一緒に召還されたこの
同い年の友だちの行動かもしれない。

第20章 水門 リオコの夢（後書き）

…どうしてもシリアスが続かない（汗・；）。

ふう、と息を吐いて、真紀が両足を広げ、おぼろな男性の映像に半身に向けて立つ。

確かに彼の言い分には腹が立つたけど、光の筒の中にいるソロンさんはただの映像だし壊してもしょうがないんじゃないかとおろおろするわたしの前で、好戦的な友人は片目を瞑り腕をまくって、狙いを定めるように幾度かパイプの先をそちらへ向ける。

あ、あの模様の半分は、真紀の腕にあるんだ。

パイプを持つ彼女の右腕に、わたしの左腕と同じ光る渦巻き模様を見つけ、現実逃避的にそんなことを考える。

わたしの思惑なんて知るわけもなく、真紀は両手に持ったパイプを大きく振りかぶると、一気に打ち下ろした。長さ1メートルほどのパイプが、まだらな彼の姿を裂き、鈍い響きをたてて何かに当たる。ばりり、と火花が走り、映像ごと光の筒が消えた。

わ、ほんとに壊した……。

大きく息を吐き、真紀が切れ長の一重で、きつと辺りを見回す。

「さっさと出ていき、ここの管理者！」

艶のあるアルトが、威勢のいい広島弁で啖呵を切った。

「出てこんと、こいつみたいに二度と出て来れんなるけど、それでもええんね？」

『ちょ、真紀ちゃん。何言って……』

「さっきのソロンさんの話、理緒子も聞いたよな？ あの人はここへ来ていろんな情報を知って、ここの機械で自分を録画したわけよ。ってことは」

手にしたパイプを肩にとん、と乗っける。

「あのソロンとかいう人に余計なことを吹き込んだ馬鹿がここにお

る、ゆうことよね？」

『……あ』

そうだ。ソロンさんのしたことにばかり気を取られていたけど、彼はここで水門の存在やこの世界のことを知った。そしておそらくここで最期を遂げた。

『でも、人の気配しないよ？』

「たぶん人じゃないんよ。ここへ来た最初、どっかの声が？メインコンピュータ起動します？って言うたんよね」

『あ、それ聞いたかも』

「つまりうちらが来るまで、ここのシステムは死んどったわけよ。なにがスイッチになっただんか知らんけど」

乱暴に言い、真紀は複雑な視線を自分の右手に注いだ。

「そのシステムが黒幕じゃと思う。水門も……この訳の分からん召還の茶番も」

『こ、壊さなくてもいいんじゃない？』

「なに言うとするん。害虫駆除は巢から根絶ゆうのは常識じゃろ？」

にっと笑う。なんだか真紀が生き生きしてる。どうも広島弁になると、何かが降りてくるというか。

『真紀ちゃん、ヤのつく家業の人みたくなってるよ？』

「日本語の分かる相手なら、ちよっと余計に脅しかけといた方がいいかと思って」

『なるほど』

広島って喧嘩を売りたいくない県民の上位三位くらいには絶対入ってそうだもんね。そのとき。

《へえ〜。今度の？乙女？は、ずいぶんと乱暴なんだなあ》

突然、軽い笑い声とともに不思議な音声が響いた。

「だれっ」

《君が呼んだんじゃないか。ここの管理者って》

録音されたものでも、機械で合成された音でもない。それはむしろ、あの巨人から響いてきた深い声の波に酷似していた。

目の前の大きなスクリーンが白く光りだし、いきなりはじけたかと思うと、空間にふうわりと何かの姿が浮かび上がってくる。

青年と呼ぶにはわずかに足りない、同じ年くらいの若い男性。半端な長さの髪が淡い金色に輝き、後光みたいに顔周りでたなびく。白い肌も服も、どこか燐光を放っているようだ。

淡い色彩の中で、二つの瞳が深海の碧を纏って際立った。まつすぐな鼻梁と花びらのように繊細な曲線を描く唇。それらが顎の尖った小さな輪郭の中で、完璧な配置をみせている。

中性的な容姿は、浮世離れた雰囲気もあって、ギリシア彫刻や宗教画の天使を連想させた。といつても着ているのは、縦襟のシャープな仕立ての軍服っぽい上着にズボン、シンプルな靴。

せつかくだから、トーガとかチュニツクとかで出て欲しかったなあ……。

少々残念に思っていると、深い海の色の双眸がすいっと細くなつた。

《わりとのん気なんだな、君たちは》

『……え?』

「はっ?」

真紀とほぼ同時に声をあげ、横目でお互いくだらないことを考えていたのだと確認し合う。

「あんたも人の考えが読めるの?」

《一応は》

『こ、コンピュータなの?』

《コンピュータ、という表現がそもそもちょっと違うんだよ。理解してもらえないのを承知で言ってしまうと、この船は人工知能が組み込まれたコンピュータによって統御されているんだけど　実は、僕がそれに乗っ取っちゃったんだよね》

「はあ???」

『まじで?』

《あゝ、いいなあ。二十一世紀っぽい反応で》

宙を漂う少年が、くすくす笑う。ふわりと舞い、テーブルの片隅に腰掛けた。実際は座つてないのだろう、なんとなく彼の後ろにボタンやライトが透けて見える。

「……幽霊？」

「うん、近いね。僕はもともと人間で……ちょっと特殊な力を持っていてね。このシステムをハッキングするために意識を同調させて操作していたら、肉体が死んだ後でも意識だけが残っちゃってさ。気がついたら離れられなくなってたっていうか、融合しちゃったっていうか」

自分で幽霊と言い切るわりに、彼は天使そのもののほがらかな笑顔を浮かべる。

「自我なんて勝手に消滅するだろうと高を括つてたんだけど、まさかここまで残り続けるとは思わなくてねー。いやあ僕、最強だからなあ」

「魔法士、なの？」

わたしの質問に、彼は少し寂しそうな顔をした。

「違うよ。僕の時代に？魔法？というものは存在しなかった。それに近い力はあつたけどね」

「今は……いつ？」

「残念ながら、西暦五千年以上としか言えない。メインが休眠しても補助システムは作動しているんだけど、すべての情報が遅滞なく記録されているわけじゃないんだ。ここと地球の誤差を正確に計算できているとも限らないしね」

五千年。途方もなさ過ぎて、驚く気にもならない。これまで充分驚いたことだし。

真紀が授業中の生徒みたいに右手を挙げる。パイプは左手だ。

「質問！今は、あたしたちのいたところから三千年先くらいの未来で合ってる？」

《正解》

「ここは、地球じゃない別の星なの？」

その問いに、彼は片手を挙げてぱちんと指先を弾いた。途端、巨大スクリーンが宇宙に変わり、中央に青い星が映し出される。

《そのとおりだ。これが、君たちの現在いる惑星。僕たちの呼び方で？トヨアシハラ？だ。正式名称は？TA012？。？012アマテラス星系の第三惑星にあたる》

分からない言葉が出てきた。前を向いている真紀の袖を脇からこっそり引つ張る。ふり返り、真紀はわたしの意図を悟ると、向き直ってまた右手を挙げた。

「はいはい、もっと分かり易い説明でお願いしまーすっ」

《それでも充分噛み砕いてるんだけど？》

「相手が理解してくれなかつたら、説明の意味ないじゃん。本当に頭のイイ人は、お馬鹿な子にも分かるように説明できるもんだよ？

ほら、自分ですごいって言ったんだから頑張って」

《そういう意味で言ったんじゃないんだけど》

メインコンピュータを乗っ取ったという彼は、秀麗な眉間に皺を浮かべ、細い指先を当てた。

《じゃあ、かなり遠回りになるけど順を追っていこう。まず、君たちのいた地球からだ。

地球は、恒星である太陽を中心に周回軌道を描く？惑星？のひとつだ。恒星はだいたいひとつだけど、惑星は複数ある。こういった星々の組み合わせをまとめて？系？と呼ぶ。地球は？太陽系？だね。ここまではいい？》

わたしたちに確認を取り、続ける。

《そっくり同じじゃなくても、太陽系と似たような環境をもつものは宇宙にたくさんある。

ソロンの遺したメッセージにもあったと思うけど、僕らの先祖つまり君らの子孫は、あるときいろんな事情で地球を捨て、他の星に移り住むことを計画した。

そのとき候補となった別の太陽系には、便宜上、名前がつけられた。日本神話にちなんで、中心となる恒星は太陽神である？アマテ

ラス？。移住に適すると考えられた惑星には、日本の古い呼び方である？トヨアシハラ？というものがそれだ。？TA？はトヨアシハラの略だね。

この候補となったアマテラス星系は、全部で31。そのうちの12番目が、最終候補地であるこの星というわけ。分かった？》

「火星とか金星とか、月とかには行かなかったの？」

《君たちの時代から百年余りのちに、地球は？大統一時代？を迎える。？国連？がさらに発展したものだと考えてくれていい。その規定により、太陽系内にある星はどれも、特定国の独占利用が厳重に禁じられているんだ。

もちろん月開発は進められていたから、そちらへ移住した者も多い。火星と金星は主に資源開発に用いられて、居住星としては成り立っていない。もちろん、これはこの「まほら」が地球を旅立つ前までの情報にすぎないけれどね》

「なんで、移住をすることになったの？」

《ようやく本題だね。その前に、ちょっとこっちのほうをさせてもらえるかな？》

また彼が指を鳴らすと、今度はぱくりと床の一部が開き、そこから円盤型の銀色のものが飛び出してきた。円盤の上下が割れ、その間から青く光る丸いレンズともさっとした機械が顔を出す。

空飛ぶハンバーガー？

ロボットらしいそれは、くるくる回りながら真紀が壊した台座部分まで飛ぶと、具にあたるところからハサミのついた細長い手を四本伸ばした。器用に壊れた部品をとり除いて、破片と一緒に次々と床の穴に落とす。それから新たな部品を取り出し、青い火花を散らしながら組み立てはじめた。

「修理ロボット？」

《そう。船内は広いから、定期的にメンテナンスが必須だね。こういった自律型ロボットが役に立つ》

『他にもいるの？』

《掃除や管理用のがいくつか。メインとは一部切り離しているから、僕が眠っていても、不備があれば彼らが自分で動いてくれる》

「電池切れとかしないの？」

《使うたびにエネルギーを消費して他から補充する必要のある機器類というものは、二十世紀初頭には根絶されたよ。今はロボットも自律・自活・自営業が鉄則だ》

終わりの一文句がなにかおかしかったけど、とりあえず、すごいねーとスルーする。

空飛ぶ修理ロボットは台座部分の補修を終えると、今度は真紀のほうへ飛んできた。ピロ口と音を出して手を伸ばす。真紀がパイプを差し出すと、それを持ち、瞬間に元の位置へ繋ぎ直してしまう。《ああ、ついでに溶接しておいてよ。まさか椅子を壊してくるとは思わなかった。いやさすが旧時代の人間。発想力が豊かだよね》

なんだろう、微妙に褒めていない気がする。真紀も妙な顔になっただけど、そのことを指摘する代わりに別の言葉を洩らした。

「壊したのに怒らないんだ？」

《前の？乙女？は素手で殴りかかったよ。まあ、拳を痛めたのは彼女の方だったけどね。

あの映像は結構強烈だからね。暗い内容のくせに強面のおじさんが喋るから、余計に心象悪いし。僕が当たりよく改竄してあげてもいいんだけど、それだとちよつと違うでしょ？》

『じゃあ、全部知ってるんだね』

《……そうだね。知っているよ》

少年のようで、だけど若くしては表わすことのできない静謐な微笑。テーブルに座り、足を組んで頬杖を付き、こちらを見る彼は、その瞳の色と同じ深海のような声で言った。

《このことを君たちに語るために、僕は百五十年間待っていた。そう思うよ。じゃあ、始めようか》

椅子の修理を終えた円盤が、ピロ口と鳴いて床へ戻るのを見計らい、立ち上がる。そこで真紀が三度手を挙げた。

「その前に、肝心なこと忘れてる」

《なに？》

「名前だよ。自己紹介。あたしは朝野真紀。彼女は……」

『高遠理緒子です。で……あなたの名前は？』

その問いに、彼は少しはにかみ、まるで本物の少年のような顔でうつむいた。

《レイン。僕はレインと呼ばれている》

今も昔も。

付け足された小さな言葉は、本当にかすかで、だけど口に出来ない彼のすべてを物語っているようだった。

20・3(前書き)

天災・人災の表現が出てまいります。ご注意ください。

3

《さて、どこから話すべきかな》

腕組みをしてそう呟いた彼に、

「ねーねー、レインって年いくつなの？」

『兄弟いるの？』

「前の乙女ってどんな子だった？」

『どこから来たとか、知ってる？』

「結局マフオーランド人って日本人なの？」

『ぜんぜん似てないよね。なんで？』

「この宇宙船って、動くの？」

『今、地球ってどうなってるのかな？』

立て続けに二人で思いつくままの質問を浴びせたら、天使の容姿をした少年は、きれいな顔をものすごく厭そうにしかめた。なんてもったいない。

《君たち、うるさいよ？ 女三人で姦しいっていうけど、二人でも充分すぎる》

「じ……じめん」

『じめんね』

謝ると、レインはふうつとため息をついて、ふわふわと宙を漂う金髪に指を滑らせた。感覚ってあるんだろうか。

《とりあえず、立ち話もなんだから座って》

テーブルに収まっていた椅子がふたつ、床に接した脚の部分を滑らすように、こちらへとやってきた。少し固めだけと思ったより居心地のいいそれに、真紀と並んで座る。

レインはわずかに浮き上がり、やや上方からわたしたちを覗き下ろした。深い碧の双眸が、不思議な光を湛えている。

《さっきの質問にはあとでまとめて答えよう。先に、君たちには少し？未来？を知ってもらおうよ。今ここに居る意味を理解してもらおうためにね》

黙って、二人で首を縦に振る。光る少年が、心得たように頷きを返した。

《さて 授業開始といこう。歴史の時間だ》

告げたと同時に、彼の姿が光の粒子となって弾け、背後のスクリーンに吸い込まれる。と、強く輝きを帯びたそこが、ふっと光を消したかと思うと、前に見たのとは違う青い惑星を映し出した。

ここじゃない別の星 地球、だ。

鳥ではなく宇宙船にでも乗っているようにその星を彼方から仰ぎ見、次の瞬間わたしたちは急激に地上に引き寄せられた。

エジプト。メソポタミア。中国。インカ。名前も定かじやない太古の文明の足跡が、絵巻物のように目の前に繰り広げられていく。スクリーンの片隅に光る数字がA Cの文字を消す頃、壁画は絵画となり、文字が溢れはじめ。

そのうちそれは写真になり音が流れはじめ、動画となって画面を埋め尽くした。そして起こる砲撃、銃弾、軍隊の列。收容される何万もの人々。戦車、軍艦、戦闘機 宙に舞い上がる巨大なキノコ雲。

人類が月に辿り着き、映像がカラーになった後でも戦いは止まない。大地を踏みにじり、次々と家が壊され蹂躪されていく。雨となつて地に降り注ぐミサイル。銃を抱える子どもたち。

一方で世界は華やかだ。多くの国々が競う博覧会やオリンピック。美しい名の元を手を取り合う多種多様な人種。新幹線、航空機、巨大な橋。密集する高層ビル。物理的にも経済的にも、積極的に人々は交じりあう。

PCが普及をはじめインターネットが登場すると、それらは飛躍的に活発さを増した。国の壁が壊れ大国が崩壊し、これまで表に出なかつた国が次々と台頭をはじめ。

表が輝いているだけに、裏側の闇は深い。飢餓、汚染、麻薬、自ら破滅へと向かう人たち。またも争いの火種が噴き出し、強力な武器は天高くから飛んできては、街を焦土に変える。報復に次ぐ報復。光と闇をめぐりしく入れ違いながら、だけど互いの深度を増すように対極の方向へ発展を遂げる世界は、火に焼かれても、大地の鳴動に潰され海の波に襲われても、むしろそちらを喰い尽くす勢いだ。

やがて、わたしたちの知らない時間へと歴史は突入していく。

荒れ狂う天候に翻弄される世界。ようやく自然に歩み寄ることを覚えた人間だけど、それでも遅すぎた。

削られ呑み込まれ、大きく形を変える大地。銀色に輝く都市はついに大地を離れて浮遊し、人の手によって造り込まれた世界は、さらなる上空へと発展の矛先を向けた。巨大宇宙ステーション、幾隻もの宇宙船。天地を繋ぐエレベーターが神の造形のごとく光臨する。活発化する天上の陰で、虐げられた地上もまた変貌を遂げる。海も山も川も湖も、残されているはずなのに、それはもう？自然？ではなかった。かけ離れた人工の緑。花。水の青。

ひどいと思う一方で、自分が土の道を歩いたのはいつだろうと記憶を呼び起こす。

家族でキャンプに行ったとき、とか？

舗装されていない道路なんて、よほどの場所じゃないとなかったとつくにわたしの周りでも、これと同じことが起こっていたのかもしれない。ソロンの言葉が甦った。

わたしたちの？罪？が、これ……？

目の前の歴史絵巻はまだ続いていく。幾度も起こる紛争、暴動。鎮圧、抑制と繰り返されるそれは、武器や手法が違ってても、これまで見てきた戦争となんら変わりはない。

……なんで学ばないんだろう。

すでに？過去？だと分かっても苛立つ。哀しくなる。

そしてついに 各地で同時に巨大なキノコ雲が上がり、地上は

火の海に包まれた。

地獄。

その形容詞しか思いつかない光景に、両手で口を覆う。ぼろぼろと涙がこぼれ出た。

これが未来？　これが？　過去？？

火が消えた後には、塵なのか雲なのか厚い灰色の靄が地表を覆い、それは何十年経っても薄れることはなかった。破壊を逃れた空中都市から、銀色の巨大な物体が宇宙に向けて何基も発射される。そのうちの高層ビルに似た見覚えのある四角いそれが、「まほら」なのだと直感した。

視点が宇宙へと返る。

暗黒の海の中、灰色に沈黙した惑星を離れて船たちが銀色の光となつて四方へ照射されていく様子は、まるで星が終焉を迎え、最後の光を放っているように見えた。

辛くて、ぎゅっと隣の温もりを抱きしめる。やわらかい真紀の腕が、抱きしめ返してきた。

説明も、一切の注釈もなかった。それでもレインが伝えたかったことが、胸の奥深くまで真つすぐに、容赦なく突き立てられた気がした。

《　今見たものは、すべて事実だ。正確には事実の一側面にすぎないけれどね》

気がつくとスクリーンは白さを取り戻し、目の前にはレインが浮かんでいた。

眩しく感じる明かりに、頬の涙を拭う。真紀も目を赤くしていた。《前回の乙女もソロンも、君たちと同じものを見た。勿論、予備知識のないソロンにはかなり説明をしたけど、僕が伝えたのは？　起こった事実？　だけだ。それを知って出した彼の結論が……君たちの召喚というわけだ》

「なんで、わざわざ呼ぶの？　水門、開けたいだけなんですよ？」
《それには「まほら」が、このトヨアシハラに着いてからの歴史が

関係している。

さつきも言ったけど、この星は第二の地球として、31の候補の中から選ばれた。けどその根拠となったのは、地球から観測するデータと小さな探査船が持ち帰った試料から分かる断片的な事実にすぎない。「まほら」が到着する前、実態を詳しく知るために調査隊が入ったけど、それでもすべてを完璧に把握できたわけではないんだ。

それらから分かったことは、トヨアシハラが地球で言う三疊紀程度の時代にあるということ。大気その他この星を構成する物質に人体に有害なものは発見されなかったこと。そして、人類に類似するような知的生命体は確認できなかったことだ》

「開拓団みたいだったんだね」

《むしろ開拓団そのものだったと言うべきだね。開拓用のロボットはいくつもあつたけど、それでも世界設計は未知数だった。特に懸念されたのは、人体への影響だ。この星がまだ古環境にあるということが重要視されたけれど、問題はむしろ別にあつた。

君たちは、この人たちに何か違ったものを感じなかつたかい？》

「違ったもの？」

《そう。彼の召喚に引き寄せられたのだから、それなりに分かるはずなんだけどね》

言われて首をひねる。

『……髪がきらきらしてる、とか？』

「あ、黒髪なのに不思議な感じがするよね。なんかこう、光る色が混じってるっていうか」

《まさしくそれだ。僕たち四十一世紀の人間が分からなかつた未知の因子。僕はそれを？クオリア粒子？と名付けた》

「くおりあ？」

《クオリアとは？感覚質？とも呼ばれる、主観にもなつた心的質感のことだ。ざっくり言ってしまうと？感じること？。赤いとか、わくわくするとか、そういった感覚のことを脳科学的に偉ぶって言

うとそうなるんだよ。

視覚や聴覚といった五感の感覚と喜怒哀楽などの感情　それらは全部？脳？が決定していることだというのは知ってるね？》

「な……なんとなく」

《例えば、僕の声も姿も、実際には無いものだ。それを僕が、目や耳ではなく君たちの脳に直接働きかけて、在るように感じさせている》

『えっ?!』

思わず声をあげて頭に手を当てれば、レインは可笑しそうにくすり笑った。

《わりと僕らの時代には普通のことなんだけどね。脳科学も二十一世紀から注目されはじめたから、近いことはあったと思うよ。脳に電極を埋め込んで痛みをコントロールするとかね。

僕の力は機械を介さず、それを直接脳同士で行なえるものだと思ってくれればいい》

ぽかんとするわたしの隣で、真紀が腕を組んで眉間に皺を寄せる。「まっつたく理解不能だけど、とりあえず了解。で、ナントカ粒子がいったいなんなの？」

《うん。クオリア粒子が長期的に人に干渉しつづけると、脳の感覚機能を飛躍的に高める働きをすることが分かったんだ》

「つまり？」

《魔法の源は、それ》

端的に告げられた言葉に、二人でしばらく呆気にとられる。

それに魔法が物質としてあると言われると、なんだか不思議な気分だ。理解可能な世界に収まったことへの安堵感と、謎めいたものへの憧れが打ち砕かれた失望が混じり合う。

《源という言い方は少し違うかな。僕たちのもっていた力が魔法として発展する大きなきっかけが、その超感覚質微粒子であり　同時に彼らを大きく変貌させた要因でもある》

『どづいうこと?』

《多少は予測されていたことではあるんだ。地球とは異なる環境で長い時間軸を過ごす、人に遺伝的变化が訪れるだろうということ
はね。

「だけど、僕たちはクオリア粒子の存在を知らなかった。変異は予測されたものをはるかに超え、地球から来たはずの僕たちの未裔は、まったく違う新しい人種になってしまった。君たちの言う？マフオ
ーランド人？に、ね……」

「おずおずと真紀が手を挙げる。

「で、それと水門が何の関係が……？」

《では、復習しよう。ここは、君たち日本人系地球人の子孫、仮に
開拓者と呼ぶ彼らが脱出のために乗ってきた宇宙船の成れの果てだ。
他の星へ移住して生活できるだけの最新技術をすべて搭載してある》
「うん」

《転じてこの星は、開拓者たちの予想をいろいろと超えてしまった。
ひとつしかない大陸は環境が安定せず荒れ狂い、地球でいう三疊紀
にあたる地上はまだ二酸化炭素が濃く、オゾン層はごく薄い。もち
ろんそれには手を加えられたが、完璧ではなかった。

「いろいろと老朽化していた「まほら」は、あるとき天候管理シス
テムの一部を損失した。原因は太陽活動の活発化による磁気的影響
だ。まだ薄いオゾン層は太陽が放つ強力な電磁波を阻みきれず、シ
ステムの機能に混乱をきたしたために緊急停止したんだ》

「それが……水門」

《と、ソロンは呼んだけどね。正確には天上水域貯留管理システム
Management of Impound Celestial Aquae 通称MICAシステムだ。大気圏に拡散し
がちな水蒸気をコントロールし、定期的に雨として還元する天候管
理の要となるシステムだよ》

MICA（ミーカ）……み、ミイカ？

「たった今、聞いちゃいけない言葉を聞いた気がする。真紀と顔を
見合わせる。」

「今、ミイカて言った？」

《ああ、マフォーランド人は月だと思ってるらしいね。まあ、合ってるんだけどね。人工だけど衛星だから》

『あんなでつかいの、人工衛星なの？　だって月でしょ？』

《一から造ったわけじゃないよ？　核となる小惑星を捕まえてハイパーコンピュータを搭載し、周回軌道に乗せただけだ》

変わらないの天使の顔で、レインはけろりと言う。未来人の感覚は大きすぎて理解不能だ。

「まさか、他の二つの月も人工衛星とか言わないよね？」

《いや、あれはもともとこのトヨアシハラが持つ衛星だよ。ひとつには監視機能を付加してあるけど》

なんだか不穏な発言だ。だけど、今は月にこだわってる場合じゃない。

《話を戻そう。MICAに限らず、移住用に配備されたシステムはすべて、ここ「まほら」のメインコンピュータと繋がっている。そのためMICAが機能を回復するには、ここから一度リセットする必要があるんだ》

「レインがすれば？」

《できないんだよ。僕はあくまでもシステムであって、使用者ではない。開拓者は、移住星の命綱といふべきメインと各システムの機能を守るために、厳密なプログラムを組んだ。》

この「まほら」の使用者　正式には継承者と呼ぶべきけどを認証するための鍵（コード）に？遺伝子？を採用したんだ。さらに外部知的生命体に遭遇する可能性を踏まえて、地球人もつとやうと？日本人？しか受け入れないようにした。これがすべての災いだ。

前にも言ったように、マフォーランド人はすでに日本人でも、地球人ですらないのだからね》

「使用者の設定を書き換えるとか、だめなの？」

深い海の色の瞳が、哀しげに微笑む。

《……人は不思議なものでね。繁栄には争いが付きものだと思じている。争いのせいで星から脱出したはずなのに、数が増えると意見も分かれ、時と共に本来の目的を失ってしまうんだ。

高度な技術を持つがゆえに争いの種になると考えられた「まほら」は、古い時代に使用者によって？休眠？させられた。MICAが活動を停止する以前にね。だから書き換え不可能のまま、技術は埋もれてしまったんだよ》

『そしてソロンさんが発見した……』

《そのとおりだ。彼の魔法力は強烈でね。僕は強引に？覚醒？させられたけど、彼は使用者には成り得なかった。理由は……想像のとおりでよ。

ここまで説明したから分かったよね？ここを発見したソロンがなぜ？君たちを召還したのか。召還する必要があったのか》

「自分たちじゃ水門を開けられないから、わざわざ過去の人間を喚んだ……？」

《そう。復讐も兼ねてね》

『なんで……わたしたちなの？』

《残酷なことを言うようだけど、喚ばれるのは君たちである必要はどこにもなかった、というのが真実だ》

がたん、と真紀が椅子から腰を浮かせる。

「……なんか無性に殴りたくなってきた」

《僕が意識の上での存在だと説明したのに、その行動は無意味だとは思わない？》

レインが冷ややかにそう諭した、そのとき。

耳の傍で大きく空気が破裂する音と同時に、部屋全体が大きく揺らいだ。

慌てて椅子を蹴って、真紀にしがみつ。真紀が抱き止め、庇うようにわたしをやや背中側に回した。一緒にがんばるって決めたのに、やっぱりこういいうときに彼女は心強い。

『なにがあったの？』

魔法の影響で二重がかつた声を厳しくして、真紀がレインに問う。光でできた少年も立ち上がり、無言で画面に手を差し伸べた。映像に切り換わったスクリーンには、見覚えのある岩が転がった大地と　こちらを仰ぐ、タクとルイスの姿。

どこかにマイクを仕掛けているのか、ルイスの喋る声がスピーカーを通して室内に響く。

『水門の神、聞こえるか。今すぐ彼女たちを解放しろ』

それは、要望というより恫喝。彼の両手はすでに、抜き身の二つの剣を握り構えている。

魔法士戦のときの比ではない、怒りに満ちた青い目がこちらを射抜く。

『解放しなければ、この場のすべてを破壊する』

ぱりり、と画像が乱れ、金色に輝きを帯びる彼の頭上に、あの恐ろしいまでの稲妻が今まさに再び宿ろうとしていた。

わたしと真紀を解放しなければ遺跡を破壊すると宣言したルイスは、言葉通り、すでに黄金の光を纏って稲妻を喚び寄せつつあった。わたしたちは抱き合い、固唾を呑んで、スクリーンに映るその光景を食い入るように見つめる。

？水門の神？と呼ばれたレインが、宙に浮かんだまま、皮肉な微笑を唇に刷いた。

《へえ、？神？を相手取るにとしては随分と不遜な態度だね。これは少し、思い知らせてやらないといけないかな？》

ぱちりと指を鳴らす。スクリーンに蛍光色の数字と文字列が流れたかと思うと、十字を持った丸い枠が、ぴたりとルイスとタクの頭上で止まった。

見たことのある構図　そう思って、その丸枠の傍で点滅する？
LOCK ON？の文字に背筋が凍る。

『なに、してるの？』

《向こうが魔法を使うなら、こちらもそれなりの手段を使わせてもらう。監視衛星には防衛機能も備えていてね。地上の特定個人をレーザー砲で遠隔射撃するくらい造作もない。なんて言うのかな、こういうの……神の鉄槌？》

『ちょ……だめだよ！』

『絶対だめっ！』

物騒すぎる内容に声を揃えて否定すると、碧の瞳がきよとりと丸くなった。

《や、だって正当防衛だよ？　ここにあれ落とされたら、君たちだつてただじゃ済まないし》

『だめなものだめなの!』

『ねえ、説得とかできない? わたしたちは無事なんだし……』

《やってみてもいいけど、聞く耳もつかない。人の神経逆撫でするのは得意だけど、説得は苦手なんだよね》

不機嫌そうに天使の美貌を顰め、水門の神は腕組みをした。お願い、と手を合わせると、小さな息をついて、肩をすくめる。

《あまり期待はしないでよ》

そう言いおき、彼は姿を消した。

真紀とくつついたままスクリーンを仰いでいると、いきなり画面が強烈な光で満ちる。まさか稲妻が、と思って蒼ざめれば、一瞬のちに驚きに目を瞪るルイスとタクの姿が映し出された。

どうやったかは知らないけど、どうやらレインがああ稲妻を消したらしい。神さまらしくあちら側に話しかけるレインの声が、こちらにも一緒に響いてくる。

《 愚かな男だ。おまえがその力を行使すれば、中にいる者がどうなるか分かるだろうに》

『水門の神……本当にいたのだな。彼女たちを貴様に捧げるくらいなら、貴様もろとも我が手にかけるのにためらいはない』

《そのために命を捨てるのか》

『愚問だ』

再びルイスが金色の光を帯び、タクが長剣をすらりと抜いて構える。

『われわれは彼女たちを護るために在る。そのためなら、この命が尽き果てるも本望』

二人の靱い眼差しに、どきりと胸を突かれる。不謹慎だけど、ものすごく嬉しい。だけ。

『やだつ。死んじゃやだよ! レイン止めて!』

弾かれるように真紀が悲鳴をあげた。わたしも声を張りあげる。

『お願い、死なないように言って。わたしたちは無事だから、大丈夫だって!』

『この声、届かないの？ ねえレイン』

《……あああつ、もうほんとうるさいな、君たちは！》

神さま口調をかなぐり捨てて、レインが怒鳴る。タクとルイスが少し動揺した。

『どういうことだ？』

『われわれ人の言うことなど、所詮くだらぬという訳か』

こちらの会話が聞こえてないから、なんだか解釈が物騒な方向へ進んだらしい。お腹の底が冷える。真紀と繋ぐ手に力を籠めた。

『お願い、レイン！ もうちょっと待つように言って！』

《この状態じゃ無理だ》

『……なんだと？』

言い返したのはルイス。もうほんとに混乱してる。真紀が叫んだ。『ねえ、レイン！ 二人をこっちに連れてきてよ、あたしたちが入ってきたみたいに。あたしたちが無事なことを確認すれば、きっと二人とも変なことしないから！』

《……いいだろう。だけど、後悔しても知らないよ？》

『後悔など』

タクが言いかけた瞬間、二人の体が光に包まれた。

《彼女たちの望みだ。君たちを？過去の世界？へ案内しよう》

厭味たつぷりの偉そうな言い方で、レインが告げる。と、同時にスクリーンから光の固まりが消えた。わずかな時間差で室内に光が満ち、わたしたちははっと振り返った。

スクリーンとは反対側の無機質な扉ともつかない壁の前に立つ、レトロな旅装束の男の二人。二人とも剣を手にしたまま、啞然とした様子で周囲を眺め、唐突にわたしたちに気がついた。

『マキ！』

『リオコ！』

口々に叫んで、こちらへ駆け寄る。両手に剣を持っていたルイスはさすがに収めたけど、タクはまだ片手に長剣を提げたまま、左腕でぐっとわたしの体を抱き込んできた。それだけで、彼の広い胸に

わたしはすっぱりと納まってしまっ。

『良かった、無事で』

『う、うん。心配かけてごめんね』

『……涙を？』

まだ潤んだ眼と瞼の赤さに気付いたのか、タクが気遣わしげに覗き込む。武骨な指先が、そっと触れた。

泣いたのとは違う理由で、わたしの顔全体に血が昇る。自分でふっておきながら、この優しさは絶対に反則だ。彼の顔が見られなくて、目を逸らす。

『ちよつと、いろいろ驚いて』

『驚く？ まあ……確かにそうだな』

ちら、と肩越しにスクリーンやボタンのついたテーブルが並ぶ光景に視線を送り、タクが苦笑した。わたしたちの横では、ルイスの腕に抱え込まれた真紀が質問攻めにあっている。

『乱暴なことはされてないか？ 怪我は？』

『もう、大丈夫だってば！ はーなーせー』

ごめん真紀、勢いで繋いだ手が外れちゃったんだ。送心術でも同じ言葉が伝わっているのか、ルイスの胸を平手ではしばし叩く真紀は、林檎みたいに顔が真っ赤だ。なんだかかわいい。

思わず笑ったら、頭の上をタクの吐息がかすめた。

『本当に良かった。君たちが目の前で消えてしまったから……もう二度と会えないのかと思った』

低く告げられた言葉は簡素で、だけど深い響きに満ちた囁きだった。彼の顔を下から見上げる。左目の上に傷のある精悍な顔が、心配という言葉以上のなにかを漂わせてわたしを見つめていた。

『……タク』

わたしが言葉を続けようとしたとき、きらりと目の端を光が流れ、その流れがひとつの形となって宙に立った。

《はい、そこまで。感動的な再会は後回しにして、先に説明を続けたいんだけど》

突然現われた碧の瞳をした光る少年に、わたしを腕に抱いたまま、タクが剣を向ける。ルイスは真紀を背中に庇い、剣呑な眼差しを注いだ。

『貴様が水門の神か……』

《だつたら？》

『彼女たちは連れ帰る。貴様の犠牲にはさせない』

「待つてよ、ルイス！ 違うんだって！」

真紀が日本語で訴えるけど、当然通じない。傍に行きたくても、タクは大きな腕と胸で、がちりわたしの体を捕らえていた。ここにも行かせないくらいに。

う、嬉しいけど、ヤバイよお。

レインは明らかに、この二人が気に入らないらしい。冷酷な、まるで本当に人知を超えた存在のように、高みからこちらを睥睨する。独り言のような呟きが洩れた。

《愚かの極みだな。これがわが末裔の果てとは……情けないにもほどがある。この未来を選び、その娘たちをここへ連れ来たのは、他ならぬおまえたちだろうに。見え透いた偽善ぶりに反吐が出そうだ》

『なに……？』

《連れ帰るといふなら、彼女たちの意見を聞くといい。どうしたいのかを》

ルイスが真紀をふり向く。タクも顔を向けてきたから、わたしはやつと口を開いた。

『あのね、今この「まほら」のこととかの説明を受けてたの。まだ途中だし、聞きたいこともあるから、もう少しここにいてもいい？』
『危険なことはないのか？ 無理強いでは？』

《……っていうより、むしろ君たちのほうが？ 無理強い？ してるよ
うに見えるんだけど？》

レインが皮肉る。本当に人の神経を逆撫でするのが得意みたいだ。納得していないのか、送心術で真紀と会話していたルイスが再び顔

を上げた。

「貴様が神なら、人心を惑わすなどたやすいだろう。　っ！」

言い返す途中で台詞が切れる。わたしは咄嗟に、両手の中に悲鳴を殺した。

いきなりルイスが苦しげに喉に手を当てたかと思うと、目に見えない手にそこを持って引っぱられでもするように床を離れ、天井高く吊り上げられていく。

碧色のレインの二つの瞳が、LEDライトのように強く輝いていた。

《相手を至高の存在と呼んでおきながら、畏怖することもしないのであれば、身をもって分からせるしかないな？》

瞬間、ルイスの体が目にも止まらぬ勢いで横の壁に吹き飛んだ。だんつと鈍い音をたて、ルイスの背中が壁に張り付く。

「やだっ！　レインやめてっ！」

「だめ、放してえっ！」

金切り声に近い声で叫ぶと、宙吊りになっていたルイスの体が、どさりと床に落ちる。真紀が走り寄った。

「もう、レインの馬鹿！　乱暴しすぎだよ！」

《椅子壊してパイプで殴りかかった人に言われたくないね》

言い返し、レインは光の粒子に変わると、今度はうずくまるルイスのすぐ傍で人の形になった。脂汗をかく彼の顔を間近で覗き込む。《ふうん。マフォーランド人になって徐々に力が弱まってきているって話だったけど、わりと君は強いんだね。上手くコントロール出来ているようではないけど》

どう気付いたのか、腰の二本の剣に目を移す。

《開放も統制も学ばせるものがないか……仕方ないな。君たちが選んだことだ》

「なんの……ことだ」

《昔の話さ。この星に旧時代の文明は必要ないと、そう君たちの先祖が判断したという、それだけのことだ》

眩き、レインはすうつと碧の瞳を細くした。まるでルイスの何かを押し量っているようだ。

《なるほど、形質欠損は色素体にのみ顕われたのか……どうも魔法は分からないな。確か？律？とやらを動かすのだったか。肉体への影響もずいぶんと緩やかなようだ。面白い》

「面白がらないでよ、レイン」

《生のマフオーランド人に接する機会は少なくてね。いいサンプルだ》

まったく、どこまで人を人扱いする気がないんだか、この神さまは。

心の中で愚痴る。同じだったのか、真紀も厭そうに眉間に皺を作った。気にせず、レインはどこか上機嫌で独り言を続ける。

《ああ、そう。君はわりと早い段階から決めていたんだな……心中とはロマンティストなことだ。そうか、あの男をここまで引き寄せたのもそのためか……？》

『なにを、言っている。いい加減離れろ』

手で払いのけようとするが、ルイスの指は光の少年を素通りする。ルイスが呻いた。

『……まいったな』

《そう、僕は本物だ。君たちの知る超次元の存在とはまた違った意味での、自由意志をもった無形の非生命体だよ。幽霊と呼んでも差支えないけど？》

『不思議だ。あなたは……この世のものに視える』

《正解だ。やっと理解してくれたようだね》

『なぜ、途中で攻撃を止めたんだ？』

《彼女たちがそう望んだから》

その答えに、わたしたちも驚いた。光となって漂う少年が、ふわりと立ち上がる。

《意図したわけではないが、彼女たちは僕を目覚めさせ、その身に鍵が刻まれた。彼女たちは、正式なここの使用者として認められた

ということだ。使用者に僕は逆らえない」

「鍵……？」

呟き、ルイスが真紀の右腕を掴んで袖をまくった。慌てたように、タクもわたしの手を取る。それぞれの素肌に刻まれた光る流水模様を見つけ、少しの間二人は重く沈黙した。

「痛みはないのか？」

「うん。もう平気」

《消えては困るものだからね。定着に十日ほどかかる。あとは馴染んで、分からなくなるよ》

「ほんと？」

《鍵が常時分かるような状態では危険だから、必要なときにのみ現われる。女性の体を傷つけて申し訳ないけど、心配はないよ。四十一世紀の技術を甘く見ないで？》

前までの軽い口振りに戻り、レインは微笑むと、ルイスから離れて先程の位置へ戻った。

真紀の手を借りて起き上がるルイスに、タクが呼びかける。

「ルイス、彼は本物の神なのか？」

「いや……神ではなく、それに近いこの世の存在だ。まさかこのようにものが在るとは、想像してもみなかった」

なんとなく理解した。

そっか。ルイスはマーレインだから……。

特別な？目？をもっているルイスにとって、この？コンピュータに乗った元人間の意識体？なんていうレインは、とてつもなく危険極まりない存在に視えたのだろう。

そんな存在と気付きながら、それでも危険を顧みずにわたしたちを助けようとしてくれたのだと思うと、本当に正直、震えるくらい嬉しさが湧きあがった。真紀も同じように感じたのだろう、何も言わずルイスにぴったり寄り添っている。

わたしは黙って力を抜き、背中を包む力強い腕と胸とに体を預けた。タクの腕がほんの少し緩み、今度は包むように優しく引き寄せ

てくる。

《……君たち、仲がいいのはいいんだけど、状況分かってる？》
レインの声に我に返る。かあつと耳たぶまで熱くなった。それでも、わたしに回された腕は離れなかった。

真紀の手を引いて戻ってきたルイスが、こほん、と軽く咳払いをして光る少年を見上げる。

『失礼した。ところで……ここは一体どこなんだ？』

《　　またそこから説明なの?!》
レインの声が裏返る。

やっぱり、そうなるよね？

同じことを喋るのが面倒だ、という極めて人間臭い理由で、この宇宙船「まほら」のメインコンピュータであるレインの代わりに、わたしたちはタクとルイスにあらましを説明した。

科学の知識がまるでないはずの二人は、ここが宇宙船という乗り物で、それに乗って地球という別の星から来た人がマフオーランド人の祖先となったこと。

水門はその地球人が遣したもので、今は壊れてしまっていること。そのことを知ったソロンが、水門を直すために過去の地球からわたしたちを喚んだことなどの、しどろもどろな話を辛抱強く聞いていた。

椅子に座り直した真紀が、左隣のルイスを覗き込む。

『今ので分かった？』

『おおよそは。つまり君たちは、私たちの遠い祖先にあたるということか？』

出してもらった椅子に腰掛け、深く腕組みをした姿勢でルイスが訊く。

『祖先だけど、遺伝的には違う。君たちは彼女たちの子孫から分岐した、まったく新しい人種だ』

『イデン……マキが前に言っていた？人を作る素（もと）？だな』

『うん、設計図みたいなもの』

『……君、なんでこっちの世界でそんな話したの？』

『ごもつともな疑問だ。えへへ、と真紀が笑ってごまかす。

『彼女たちとわれわれは、さほど違うように見えないが？』

『そうだね。遺伝子レベルでは0.024%しか違わない。だけど？違う？という事実には変わりはないよ。どんなに似ていても、事実

はごまかせない》

『しかし……なぜ、わざわざ三千年も前の時代から喚んだんだ？』
タクの疑問に、レインが厳しい表情になった。答えるのが厭な
ではなく、答え方が難しいという感じた。

《僕たちの時代に近くなると遺伝子汚染が深刻だね。過去を調べた
ソロンは、おそらく彼女たちのいた二十世紀代以前が一番安全だと
考えたんだと思う》

『イデンシオセン？』

《マフオーランド人には関係ないから詳しくは割愛するけど、より
若い状態で長生きするために遺伝子を弄る人が後を立たず、三十世
紀半ばにそいつらが暴走して一大社会問題になったんだ。おかげで
四十世紀にもなると、個人情報にゲノム配列や遺伝子地図まで載せ
る羽目になるんだよ。最悪もいいところ》

『今の地球は？』

《ああ、それを言うのを忘れていたね》

白い手がひるがえる。誰ともなく、はっと息を呑む音がその場を
奔った。

そこには、あの最後に見た光を失った灰色の惑星が、まだそのま
ま真っ暗な宇宙の中に死体のように浮かんでいた。

《この状況下でまともな人間は存在しないだろう。ソロンもそう考
え、時間軸をさかのぼることを思いついたんだ》

『すごい、ひとだったんだね』

《すごい男だ。執念だよ。彼は恐ろしく頭の切れる、偏った考えの
持ち主だね。この「まほら」のある重要な点を発見してしまった。

「まほら」が日本の船だというのは分かると思うけど、いくら捨
てたとしても、まだ僕らにとって地球は母星で、特に日本はとても
大事な母国だね。出航前「まほら」に乗船する人々は、遠い未開の
星から故郷の状況を知るために、定点となる座標を日本の各地に遺
したんだ。

彼は、それを悪用した》

『まさか、それが扉……？』

《そうだ。僕らの技術は優秀でね。地球があの状態でも、映像に映るものはひとつもなくとも座標は生き続けていた。彼はそれに時限性を備えた魔法を組み込んだんだ》

『ジゲンセイ？』

《タイマーだよ。MICAの止まる原因となつた太陽活動の周期予測は、この「まほら」で計算できるからね。厳密にはそこまで一定のサイクルではないんだけど、MICAが停止して天候に異常が発生するまでの期間も見込んで、彼はおよそ百五十年ごとにこれが修正されれば良いと考えた。

そして定期的に、ある条件下で発動するような魔法を定点に仕掛け、分かりやすいように予言として遣したんだ》

『条件下って、三月の合のこと？　なんで合の日なの？』

《象徴的な出来事だからということがひとつ。もうひとつは、そのときだけ月が一個に見えるだろう？　太陽光を反射して輝く月は、実は太陽からの電磁波などの有害光線も地上へ届けている。ひとつに見えるということは、ここへ届くその電磁波類が一番少なくなるということでもあるんだ》

『少ないと、どうなの？』

《外部からの影響が最小限になり、正確に魔法が発動しやすくなる》
当然、天体の公転周期が分かっていたら合の日は簡単に割り出せるものだしね、と付け加えるレインの声を聞きながら、わたしは背中を冷たいものがさかのぼるのを感じた。そこまで計算されていたのだと思うと、空恐ろしくなる。

眉を顰め、タクが考え深げに言葉を洩らした。

『執念というより、まるで狂気だな』

《その意見には賛成するよ。彼は正気ではなかった》

ルイスの青い瞳が、鋭くレインを見る。

『そこまで把握しているのに、あなたは彼を止めなかったのか？

ここを管理する存在であるなら、止めるべきでは？』

《できれば僕も止めていたよ。僕は地球人としては史上最高最強だったけど、？魔法？は例外だ。もともと地球人ということ以前に、意識体である僕に魔法の源となるクオリア粒子は浸透されない。影響を受けないだけじゃなく、それを扱うことも不可能なんだ。今言ったことは、すべて状況から導き出された推論に過ぎない》

大きな息をひとつ吐き、レインは続けた。

《正直言つて、僕も前の？乙女？が来るまでは、ソロンの魔法が本当に発動するとは思っていなかった。まあ休眠状態だったから、それどころじゃなかったというのもあるけど》

真紀が首を傾げる。

『あれ、ソロンさんに起こされたんじゃないの？』

《寝ているところを強引に起こされたから、いなくなったらまた寝ちゃったんだよ》

『彼はその後どこに？』

《分からない。僕を叩き起こして歴史やこの星の状態を知った後、MICAのリセット以外で使えるものすべてを行使して天候を安定させ、次元魔法をセットして去った。もちろん記録を遺してね。魔法にほぼ全生命力を注ぎ込んでいたから、その後どうなったかは想像つくけど》

映像で見た、老人のような手をした背の高い男性の姿が臉をよぎる。

彼は魔法士というより、まるで僧侶のようだった。そうかもしれない。彼はこの世界のために怒り、哀しみ 誰よりも救いを求めていた。

『だけど、やっぱり納得いかないよ。なんで、あたしたちなの？なんであたしたちが……こんな目に、遭うの？』

？こんな目に？というところで、真紀は少し語調を落とし、左隣を窺った。気にするなというように、ルイスが彼女の手を握る。

わたしたちの前に浮かぶレインはやや黙り、静かに、答えではなく問いを口にした。

《さつき「まほら」がここへ来るまでの歴史を見たよね。その中で、君たちのいた二十一世紀は特別だったと思わなかったかい?》

『特別……?』

《そう。君たちが生まれた二十世紀とその後の二十一世紀。この二百年に起こったことは、歴史上のキーポイントとなることばかりだ。DNAの発見にヒトゲノムの解読、有人宇宙船の飛行。核エネルギーが開発され、初めて核兵器が使われたこと。二つの世界大戦。そして環境破壊の加速化と化石燃料の枯渇。これらはすべて君たちのいた時代に起きたことだ。そのどれを無くしても、今のこの星の状況は有り得なかった。

肯定的な意味でも否定的な意味でも、君たちの時代が地球を

マフオーランド人を含めた全人類の未来を決定付ける、重要な曲がり角だったんだよ》

『過去のあやまちは、過去のものに償わせるべきだ』

ソロンの遺した言葉が、耳元で甦る。

鉛が沈むように重苦しく沈黙するわたしたちに、詫びるつもりか、レインは胸の前で両手のひらをそっと合わせた。

《彼のしたことは、どんな理由であれ許されることではない。それは僕も認める。だけど、そこに至った彼の想いを、少しでもいいから考えてみて欲しいんだ。どんなに理解できなくてもね。これは、僕からのお願いだけど》

ふと、ソロンだけでなく、レイン自身も過去に対して同じ想いを抱いたことがあったのかもしれないという気がした。その想いはもう、彼の中で別の形に昇華してしまったのかもしれないけれど。

真紀が、うん、と首を振った。

『分かった、考えてみる』

『わたしも。納得できるか、分かんないけど』

ありがとう、とレインが小さく口元をほころばす。彼が悪いわけじゃないのに、と思ひ、だけど同じくらいソロンが悪いってわけじゃないんだと、そのとき初めて気がついた。

誰も悪くないなら、なぜこんなことが起きたんだろう。

すれ違った想いの連鎖が生んだ結末は、考えるにはあまりにも重すぎて、わたしはその悩みを心の片隅にとどめて手放した。

さわやかな少年の声が説明を再開する。

《ソロンの魔法は、僕が知る範囲では、特定の人間を設定できるほどの精度はなかった。ただ、どんな人間が対象となるか予測がつかなかったわけではないんだ。

クオリア粒子が感じとれる鋭敏な感覚の持ち主ということはもちろん、次元を超えるだけの体力と柔軟性のある若さ。さらに、身体的には女性のほうが耐久性に優れているからね。十代の女性だろうとは思っていた。二人というのはさすがに予想外だけど》

『前の乙女も十代？』

《十八。君たちより年上だね。名前は、辻由梨亜（つじゆりあ）》

『やっぱり日本人なんだ』

《日本人を喚ぼうとしていたんだから当然でしょう？ 彼女はこの…… 定点Kから来た》

レインの手がもう一度ひるがえると、スクリーンには、見覚えもあるよりちよつといびつな日本地図が広がった。

そこに光る点が六つ。九州、中国地方、近畿、東海、関東、東北。定点Kは近畿地方だ。

関西方面に疎いわたしには、いまいち県名がはっきりしない。分かるのは小さくなった琵琶湖くらいだ。

『どこだろう？』

『琵琶湖の手前だから……京都？』

『キヨウ？』

ルイスの発言に、真紀と二人で止まった。似ているよ、確かに似ているけど、でもまさかね？

変な汗をかくわたしたちなど気にも留めず、平然とレインが肯定する。

《ああ、そのまさかだよ。この国は、建設時に日本の古い都市名を

使用したらしいからね。マフォーランドだって、元は？まほら共和国？だよ。なんであんなことになっちゃったんだか」

最後の方は、たぶん愚痴だ。愚痴は言うし我が儘は言うし、レインはコンピュータシステムっていうより、かなり人間寄りな気がする。

なんてわたしが抱いた感想とは全然別のことを、真紀は考えていたらしい。

『ここ、最初は共和国だったんだ？』

『元が民主国家だったんだから当然だよ。残念ながら？日の出ずる国の天子様？のご嫡孫は異郷の地に向くことを良しとされなくて、ここには降り立ってないから、余計にね』

つまり、この星には一般の小市民しか来なかったってことだ。

『長い航行をする中で「まほら」内では社会が形成され、民主的な行政が機能していた。だけど開拓という局面ともなると、全く別だね。強い指導者が求められた。そこから身分社会が生まれたというのは……僕より彼らのほうがよく知ってるんじゃないかな？』

前より幾分ましな、それでも冷ややかな光を含んだ碧の瞳が、二人の男を見る。

レインがマフォーランド人を嫌う理由が、少し分かった。嫌いというか、腹立たしいんだと思う。わたしたちからすれば未来人であるレインは、すごくこの星に期待を抱いて、理想の社会を築こうとしていたはずだ。それなのに、今は時代を逆行するような絶対君主制が国を支配している。

失望、してるのかな。

光に包まれた天使の顔は、微笑ともつかない表情にごまかされ、何も読み取ることはできなかった。

突っかかるレインに乗ることもなく、ルイスは困惑した吐息を小さく洩らして、話題を逸らした。

『政治的な議論は置いておいて、乙女の話に戻ろう。彼女は？キョート？から来たということだが、君たちはこの図でいうと、どこか

ら来たんだ？』

聞かれて、『広島』『神奈川』とそれぞれ答えると、画面の点が二つ赤く光った。

《定点HとTだね。Tが少し西へずれているようだ》

『え！ ってことは、うちにその定点があつたってこと？』

自宅の玄関からやってきたと言う真紀の声に、レインが顔をしかめた。だからもつたいないってば。

《違う。君の家付近に？ 将来？ 定点が置かれるということ》

『あ、そつか。未来か。……え、あれ？ どゆこと？？』

《いいかい、この地球は約三十光年離れている。光の速度で、辿り着くまでに三十年かかるということだ。だから普通に考えて、さつき見た地球の映像は？ 三十年前？ の映像であるべきだよな？》

『う、うん』

《だけど、光の二倍の速度で情報が送れたら？ 誤差は十五年に縮まる。じゃあ……三十倍の速度なら？》

『同じ、時間……』

《そう。さっきの映像は？ 今の？ 地球の姿だ。光ではない別の粒子を使ったこの技術は？ 時間補正？ と呼ばれるんだけど、ソロンはこれに魔法で介入した。時間補正技術を用いた超光速通信を取り巻く二星間の次元を弄つたんだ。

大きなボールを想像するといい。左右から力を入れて押しつぶすと、全体の質量は同じなのに、中央の距離は短くなるね。光の三十倍の速度で飛ぶものが、速度を落とさずに飛距離を縮められるとどうなるか 時間を、通り越すんだ》

『……タイム、トラベル？』

《原理的にはね。そうやってソロンは？ 過去の定点？ に接触し、情報を送るよう指示を出した。》

同時に一時的に捻じ曲げられた次元には、反発する力が生まれる。それは膨大なエネルギーとなって定点に歪みをもたらし、歪みは周辺のを巻き込んで正常な状態へ戻る……つまり、未来に還るん

だ。これが、彼のしたことを僕なりに解釈したことだ》

『……ごめん。SFすぎて、よく分かんない』

《はは、僕も似たようなものさ。SFというよりファンタジーだね。なにしろ過去へ飛んで、さらに三十光年も離れた場所から生きたままの人間を捕獲しようなんていう、とんでもない魔法だからね。何がどうなっているか、こつちが聞きたいくらいだよ》

軽々しく？捕獲？とか言わないで欲しい。生贄にされた気分だよ。《ともかく、君たちは定点の近くにいて巻き込まれた。不運としか言いようがないね》

『扉の出口の設定はどうなっているんだ？』

《なかなかいいところを突いたね。たぶんソロンは、この「まほら」を指摘したのだと思うけど、ここは船自身が帯びた宇宙放射線、コンピュータ等の放つ磁場、「まほら」を眠らそうとした人たちの魔法なんか複雑に絡んでいてね。近づくものはたいてい弾かれる》
ジャムが言ってた？力場？のことだ。あれだけ魔法が使えるのは本当に異例だよ、とレインはルイスに皮肉を言い、続けた。

《定点から飛ばされたものは「まほら」の場に弾かれ、仕方なく地の方へ散ったんだと思う。これはもう推測とかじゃなくて、ただの予想だけ》

『では、こちら側から扉を開けることは……』

《不可能だね。扉の？取っ手？はこちら側には存在しない。一方通行なんだ》

一方通行。ソロンの言っていたことは、本当だったってことだ。

わたしたちは、帰れない。

魔法士のルイスは？扉？の正体に、考え深げに呟いた。

『それで、いくら彼女たちの来たところを探しても、何も発見できなかったというわけか』

《？全く何も痕跡がない？のど？彼女たちの世界に繋がるものがない？という意味は違う。きちんと調査すれば、そのフィールドに時空を捻じ曲げた強い力の痕跡があったはずだ》

『だけどレイン。未来の技術……あ、過去かもしんないけど、それも加わってたんなら、今まで知られている魔法とは全然別物になっていたはずだよ？』

真紀の言葉に、レインは少し表情を緩めた。

《確かにそうだ。前の乙女が来たときに僕もずいぶん調べたけど、ソロンの技術は解明できなくてね。魔法が使えない以上、僕にはお手上げだ》

『じゃあ……やっぱり、あたしたちは』

《帰ることはできない。残念ながら》

きっぱりと告げられた言葉は、これまでの皮肉な陰を一切消して、むしろ慈しむような穏やかさに満ちていた。

『前の乙女は、どうなったの?』

《百五十年前の人の安否ということなら、答えは分かりきっていると
思うけど?》

問いで返された答えに、わたしたちは口をつぐんだ。

亡くなってる、んだ。やっぱ、そうだよな。

それぞれの考えに沈むように黙り込んだわたしたちを眺め、レイ
ンがふわ、と上方に移動する。

《彼女については、またゆっくり話すよ。これでだいたいの質問は
済んだかな?》

『まだ。ね、レインっていくつなの? 家族は?』

《……こだわるね、君。「まほら」のメインコンピュータと結合し
た意識体に年齢や家族構成が関係ある?》

『同年くらいなのかなーって』

《死んだとき? いくつだったか覚えてないよ。自分の死亡記録な
んで探す気ないし》

『……あなたはそもそも人だった、というのは確かなのか?』

ルイスの問いに、レインは不思議な光を湛えた瞳を向けた。

《なぜ?》

『あの力は、人の成し得る範疇なのか?』

《ああ、さっきのあれね》

レインはすいっと飛ぶと、スクリーン近くのテーブルの上に立っ
た。

《僕は? 稀人(まれびと)? だ》

スクリーンに縦書きで、? 稀人? という漢字が流麗に描き出され
る。

《最初は？稀な人間？？珍しい人？？という意味ではなかったんだけど、今ではその意味で使われることがほとんどだ。僕は一応生粋の日本人系地球人だけど、一般人にはないこの　？力？を備えて生まれた》

碧の瞳がきらりと光ったと思うと、いきなり椅子ごとわたしたちの体が浮き上がった。

『きや……………』

不安定ではない。見えない手にひょいと掴み上げられたような、空気そのものが押しあがったような、不思議な感覚だ。

『わー、すごい』

『これは……………どうなっているんだ？』

素直に驚く真紀と、訝しむタク。ふわふわ漂う椅子に腰掛けたまま、ルイスは眉間に皺を寄せ、顎に手を当てて考え込んでいる。

『これが分からないんだ。なぜ天律を動かさずに、理律のみが働くんだ？　しかも働かそうとする力をほとんど感じない』

ことり、と軽い音をさせて、わたしたちを床に降ろし、レインがその質問に答えた。

《君は、途中捻じ曲がったとはいえ僕たちの血を引いているんだから、多少は分かるはずだよ。彼女たちは聞いたことがあると思うけど、これがいわゆる超能力と呼ばれるものだ》

『ちよ……………超能力う？』

《そう。サイコキネシス（念動力）、テレパス（精神感应能力）、テレポート（瞬間移動）、デポート（物体移送）、アポート（物体転送）、パイロキネシス（発火能力）、クリアボヤンス（透視）、プリコグニション（予知能力）……………僕が使えるのはこれくらいかな》

『待つて、多すぎて分かんない』

『つか、それほとんどじゃない？』

《だから僕、地球人類史上最強つて言ったじゃない。冗談や遊びで、この「まほら」の全システムを乗っ取るなんてしないし、できない》

天使の美貌の少年は、あくまでも爽やかにっこりと笑う。状況を理解しようとするつもりか、タクが真剣な顔で、椅子の背を指の甲で弾いた。

《椅子に仕掛けはないよ?》

『そうだろうとは思うが、気になるんだ。俺は、魔法士でもマーレインでもないからな』

そういえば、マーレインと稀人って音が似てる。これも元は同じ言葉だったんだろうか。

まれびと……稀人。まれにん?

くだらないことにわたしが頭を悩ませている一方で、ルイスはまだ?超能力?について考え込んでいた。

『あのジャメインという男の使う力に似ていたようにも思うが』

『ジャムは魔法士の訓練を受けたことがないマーレインだから、全部が力任せなんだと本人が言っていた』

《ああ、あの赤い髪の子? そうだね、使い方としては彼が一番近いかな》

自然に男同士の会話に入ってきたから、気付くのが一瞬遅れた。びし!と勢いよく真紀が右手を挙げる。

『ちよつと待った!なんでレインがジャムのこと知ってるの?』

《監視衛星があるって言ったじゃない。僕が休眠しても、分岐した各システムが全部休止するわけじゃないよ?》

『ずっと見てるの?』

《ポイントはある程度絞るけど、必要な情報の取捨選択は僕が行なう。EMIは働き者だね》

『イミ?』

《EMI Extra Mark ground Investigation。外部地上記録調査システム》

ミイカが天候を操る人工衛星で、イミが監視衛星。

『……ツワークには何もしてないよね?』

《なんで、そこで非難の目を向けられるわけ?》

『乙女の夢を壊したから!』

頬を膨らませて、じと目で睨む。月の三女神の神話、結構好きだったのに、夢が台無しだよ。

《え、なに。そこ、僕が謝るところ?》

『うん!』

《えー。じゃあ僕も、新しい使用者はもっと物静かな子が良かったとか、要望出してもいい?》

『……レイン、壊すよ』

真紀にまでざろりとした視線を向けられれば、自称・元人類史上最強の少年は、わずかに顔を引きつらせた。タクとルイスが噴き出す。

《ちょっと、笑うとこじゃないでしょう?》

『失礼した』

『いいやマキ、もうちょっと言ってやれ。彼は少し横暴すぎる』

『だよー。あたしもそう思う』

『あ、わたしもー』

《なに、その連帯感》

感じ悪う、と呟いて、整った唇を曲げるレインは、本当にただの男の子みたいだ。

コンピュータを乗っ取ったこともあるんだろうけど、ソロンのしたことか歴史のことをあれだけすらすら言えるのだから、きっと元々頭は良い方なんだろう。それに彼は何百年もここにひとりではたはずで、見た目通りわたしたちと同じ年頃では有り得ないのは分かる。

だけど、時折見せる子どもみたいな態度が、彼をすごく身近に感じさせた。

説明してくれたのがレインじゃなかったら、もっと状況は辛かったのかもしれないな。

ふと、そんなことを思う。

真紀がしつこく、また前の質問を引つ張り出してきた。

『で、この宇宙船って動くの?』

《正しくは宇宙艇。?艇?というのは、真つすぐ進む船ということだ。地球から脱出してきた乗り物が、帰還することを考慮して造られているかどうか、ちよつと考えれば分かるでしょ?》

『箱舟って感じだね』

《ああ、単一神を崇める某宗教風に言つとそうかもね》

真紀が不服そうに、わたしから手を離して腕組みをした。

「レインてさ、なんでそう、こんがらがった物の言い方するわけ?」

《人の心理というのは、一言で表現できるものじゃないよ》

「レイン、人じゃないし!」

言い返す真紀に、わたしが声もなく笑っていたら、椅子の背越しに顔を覗かせたルイスが、

『何と言っているんだ?』

と訊いてきた。わたしは笑いながら説明し、真紀の腕をつついた。

『真紀ちゃん、指環』

『あ、忘れてた。レインに日本語通じるから、つい』

ルイスが苦笑して眉尻を下げる。

『忘れないでくれ。しかし、意識体だからという理由だけで、言語が関係ないのがよく理解できないな』

《テレパスというものは元来、双方向性でね。意識の波長を合わせることから、思考状態や論理がよほどの飛躍を見せない限り、だいたいの意図は通じ合う。』

もちろん、そんなに深く読むわけじゃなくて、言葉として発する直前の意識を拾う程度だから、プライベートは守られる……: というところまで言っておいた方が安心かな?》

意地悪い笑顔で告げられれば、そこはかとなく厭な予感がよぎる。

『レイン、自分で最強って言つてなかつた?』

《うん》

『じゃ、プライベートも覗けるんじゃない?』

《そこを肯定すると、すごく彼らから殺気を飛ばされる状況に戻る

から嫌なんだよ》

『……それ、肯定と同じだから』

《はは。だよなー》

にこにこレインが同意する。人だったときもこんなノリだったのかな、という疑問が心中を掠めたけど、黙っておいた。

《だけど、その指環も役に立つものだね。ふーん、作っておくものだなあ》

『レイン、なにか知ってるの？』

《知ってるもなにも、僕が作ったから》

『は???』

みんな目が点だ。

『ソロンが創ったのではないのか？』

《石の部分はね。魔法力をもたない人間を補助するように、なにか魔法を仕込んだらしい。僕が作ったのは台座の部分だ。古い時代で言うICチップに似たものを搭載して、翻訳機能を備えさせたんだ》
『翻訳……』

《そう。ソロンがうるさくてね。地球人は使用する言語が違っていると、意思疎通のためのツールを作れと無茶難題を持ちかけたんだよ。もう、断るのも面倒だね。二十世紀代の日本語データもマフォーランド語データもあるから、適当に作ったんだ》

ルイスが目を輝かせて、身を乗り出す。

『どう作ったんだ？』

《マフォーランドの技術で再現するのは難しいね。原理としては、テレパスの応用だ。》

喋ろうとする直前に湧き起こる脳の言語野の微量な電磁電圧変化……これをマフォーランド語に変換し、対応する音を喉や口の筋肉を動かして声として出す。その時間差は0.01秒ほどだ。ほぼ同時通訳だけど、本人には違和感が二重音声となって感じられる。

逆に聞いた言葉は、最初に音、つまり単なる振動として指環に認識され、それを言葉として変換した情報が微細電流となって脳へと

伝わる。だから、指環に触らないと機能しないんだ》

『指環本体を触らなくてもいけるよ？』

《微細電流が伝わる範囲なら問題ない。本当にわずかな電圧変化だから、あまり厚みのあるものや密度の高いものが間にあると、伝わりかたがおかしくなる。》

それに、これは日本語からマフォーランド語への翻訳対応ツールだから、マフォーランド人が持つても何の変化も起こらないしね》
『ソロンが遺した創り方というのは？』

《後世いろいろと詮索されては困るから、それらしいことを書いておいておくみたいなこと言ってたけど？ 石の部分は彼の手によるものだし》

ルイスが難しい顔で黙り込んだ。そういえば、もう一個魔法話の指環を創ろうとしてたんだっけ。

『では……もう創れないということか』

《試作品ならあるけど？》

レインの一言に、ルイスの目がきらりと光った。獲物を見つけて今すぐ獲って食べちゃう的な眼光の鋭さに、思わず真紀と引く。

『それを是非譲り受けたいのだが、どうすればいい？』

《……君、露骨だね。まあ君たちには、貴重な？使用者？を保護して無事にここへ送り届けてくれた貸しがあるからね》

『では』

《特別に割引くよ。前払いでよろしく》

レインが、天使の笑顔で悪魔なことを言う。真紀が冷たい眼差しを注いだ。

『ただであれば？ レイン』

《この世に二つしかないものを？ しかもここにあるのは日本語への対応ツールとして作った試作品で、これひとつしかないんだよ》

『試作品なら別にいいじゃん』

『いや、物には対価を支払うのは当然だ。前払いとはどれくらいだ？』

《ああ、お金じゃなくていいよ。君の 体で》

言った瞬間、レインの輝きが急激に増して、ルイスの体をざあつと光の洪水が走り抜ける。がくり、と金色の頭が横向きに倒れた。真紀が悲鳴をあげる。

「レイン、何したのっ?!」

《彼の力の扉を開けたただけだよ。ちよつと強引だったけど、悪い影響はないはずだ》

『ほんとに? なんて分かるの』

《だって僕、? 神さま? だから?》

「自分で言うなっ」

言い返し、真紀が気遣わしげに金髪の男を覗き込む。胸が動いているから呼吸しているのは分かるけれど、なんだか顔色が蒼い。

と、ふいに青い目が開き、大きな深呼吸を吐いてルイスが頭を持ち上げた。

「大丈夫?」

『頭が……くらくらする』

呟き、ルイスは何かに驚いたように、腕に掴まって自分を見つめる真紀をまじまじと見返した。

「ルイス?」

『……いや、心配ない。ありがとう』

そう言っつて、見ているこちらがどきつとするほどの甘い笑顔を浮かべる。わたしとタクの存在を忘れたように真紀を引き寄せ、繊細な手つきで髪を撫でた。

《おっと、そこまで。いい加減に閉じなさい》

レインがふわりと近寄つて、ルイスの額に指先を当てる。かすかにルイスが眉をしかめた。

《今は仮に僕が閉じたけど、あとでちゃんと自分でできるようにね?》

『すごい……感覚だった。あれが、マレビトの力か?』

《そう。君たちの魔法とは感覚器官の使い方が異なるはずだ。すぐ

に慣れる……っていうか、慣れてくれないとね。君には僕に、？魔法？を教えてもらうから」

『なるほど。前払いにしては、後々の努力を要するのだな』

《嫌なら指環あげないよ？》

『努力しよう』

即答で応じ、ルイスは椅子の上で上体を起こした。戸惑う真紀に、もういちど艶のある微笑を向ける。真紀が変な顔になった。眉をひそめ、光る少年に呼びかける。

「れーいん。本当はなにをしたの？」

《えーと。だから扉をね？》

「……まさか、ルイス。人の心読めるようになったとか言わないよね？」

日本語が分からないはずのルイスが、気まずそうに視線を逸らした。

『君が聡いのを、また忘れていた』

《自分でばらさないでよ。ってか君、分かり易すぎるから》

『そうかな』

《最初に読んだ対象が、自分に好意的な相手でよかったよねー》

『それは、もちろん』

本当に、嬉しくて仕方ないというようにルイスが顔をほころばず。部外者のわたしまで照れるくらいだ。真紀が、髪に隠れた耳たぶまで真っ赤になった。一体何を思ったんだろう？

わたしの手を取り、真紀は半分涙目でルイスを睨む。

『……絶対、忘れて。今すぐ、即行で！』

『あー、うん。ごめん、嬉しくて忘れられそうにない』

『レイン、力戻して！』

《無理。目の悪い人が視力を改善されたら、見させないわけにいかないのと同じ。あきらめてよ》

『うう、二人ともサイテー』

真っ赤な顔で涙ぐむ。完全にいじけた真紀に、さすがのレインも

困り顔になった。

《力を全開放すると、読もうとしなくても他人の考えが飛び込んで来るんだよ。特に君は、あのとき彼に気持ちを向けていたから読まれやすかったんだ。》

前もって忠告をすべきだったね。謝るよ、ごめん《

『マキ、そんなに私に読まれたのが嫌だったのか？』

『断りもなくプライベートを盗み見されたのが嫌なの！』

『そうか、すまなかった。これからは、きちんと統制できるようにするから』

『やり方、分かるの？』

『力を開放された瞬間、彼から力に関する知識がすべて流れてきた。魔法の使い方とはまったく違うが、訓練すれば可能だと思う』

すこ。

初めて目覚めた力をコントロールできると言い切るルイスもだけど、あの一瞬でそこまでの状態に彼を引き上げたレインは、本当に神さまみたいだ。

その言葉に真紀の機嫌もやや持ち直す。それなのに、タクが余計なことになった。

『心が読めるのなら、指環はいらないのではないか？』

レインが額に手を当てて呻く。

《……そこは黙っていようよ》

『なしだよね』

『ダメ、絶対ダメ！ 心読むのはんたーい！』

真紀が、ぶんぶん首を横に振る。乙女心を何だと思ってるんだろ
う、まったく。

『ありえないよね』

『ねー？ 全然分かってない』

『ほんと』

なんて会話をしていたら、レインがぽつりと、心の底からしみじみタクとルイスに洩らした。

《君たち、あの二人と旅してきたんだよね。嫌にならなかった？

あのやかましさが四六時中でしょ？》

『そうか？ なかなか楽しいぞ』

『退屈をしないのは確かだ』

《それ、心広すぎだよ。ちよつとだけ尊敬するね。僕だったら絶対、途中で逃げ出すのに》

そのぼやきに『えー』 『レイン心狭いー』 と言い返したら、光る少年は海の色の瞳で、おしゃべりを続けるわたしたちをきつと睨んだ。

《あーもー、ほんと君たちうるさい！ 僕の静かな時間を返してよ！》

『え、なに。レイン、やっぱり壊れとく？』

『もう一回眠るとか？』

《……僕は本気で、君たちを眠らせたいよ》

レインが混ぜ返すから余計に、だけど半分ふざけて言い合う会話は、無軌道なまましばらく迷走して、数分後タクとルイスのお叱りをきっちり三人で受けることになった。

20・7 (前書き)

遺骸の描写があります。ご注意ください。

そして、字数が最多になりました。長いです。すみません。

7

《で、二人はこれからどうするの?》

いきなりのレインからの質問に、一瞬分からなくて、きよとんとする。

《二人がここに来たのは、雨を降らせるためでしょう? 君たちが望むのなら、今すぐMICAをリセットしてシステムを再起動させる。そうするとマフォーランドに雨は降ると思っけど?》

『あー……』

真紀と顔を見合わせ、考える。

『ね。そもそも、なんで雨降らないの?』

《トヨアシハラ マフォーランド人の言うTEEに、ひとつの大陸しか存在しないからだ》

スクリーンに、平面化されたマフォーランドの世界地図が映し出される。

いびつな楕円形の大きな陸地と下の方の島々。それを取り囲む、ただっ広い海。

《君たちのいた地球は、東西にも南北にも陸地が点在していたよね。海も分断されていた。だから天候は割合、均等な循環をみせていたんだよ。》

雨はそもそも、そのほとんどが海から蒸発した水分が雨雲となって溜まって降るものだ。雲を運ぶための風は、寒暖の差によって起きるけれど、この星では陸地がひとつ。風は主に陸から海へと流れ、内陸にまで雨雲が運ばれることは滅多にない。雨は、海に注がれる。いつのデータなのか、世界地図上を白い雲が渦を巻いて流れていく。天気予報で見るように早回しされたそれは、大きな大陸にはほとんどやって来ない。

たまに大きな渦が発生して陸地の縁に引つかかるけど、あれじゃ台風レベルだ。マフォーランドの人たちが望んでいる雨とは全然違う。

《陸と海の境は、陸の熱気と海上の冷気がぶつかり合い、環境が不安定となって荒れ狂う。そのために開拓者たちは、少し内陸に入り込んだ、海に繋がる大河の畔に最初の国を構えた。その河も、やがて大部分が干上がってしまったけれどね。》

MICAは意図的にその大陸上で雨雲を発生させ、陸地の気温を下げることで、人がより住みやすい環境を作るためのシステムだ《スクリーンの前に立つ光の少年が、腕組みをしてこちらを見つめる。》

《さて、どうする？ すべては君たち二人の判断だ》

タクとルイスは何も言わず、わたしたちの方を見ようとしてもしない。わたしは画面から目を逸らし、顎に指先を当てて考えを巡らせた。MICAが再起動すれば、すぐマフォーランドが助かるのは分かっている。だけど、素直にそうして欲しいと言いだせない。重い気持ち、胸の底のほうにつっかかっていた。

？この星を護って？

巨人の言葉が、耳の奥でリフレインする。護る。それは、本当にマフォーランドに雨を降らせること、なんだろうか。

MICAのシステムは、まるで夢のようだ。わたしたちが知っているものより何倍も優れた、未来の技術。でも、それがあっても美しかった地球はあの灰色の星に変わってしまった。

もしこの判断をすることで、この星も地球のように灰色に沈黙する星になってしまったら。そう思うと、恐くて答えを導き出せない。真紀が、低い落ち着いた声で沈黙を破った。

『あたしは決めた。答えは、理緒子が決めたあとで一緒に言おう。お互いの判断を大事にしたいから』

『うん……うん』

そう言われると、なおさらプレッシャーだ。どうしよう。

『悩んでるなら、保留って手もあるよ?』

『うん……』

考えるのは後回し。わたしの得意な手だ。だけど今は、それは違
うと思う。

目を閉じ、胸に手を当てて呼吸をゆっくり繰り返す。乾いた大地。
熱い風。出逢ったものたち、動物、人。ルイス　タク。わたしは
瞼を開けた。

『レイン、水門を開けて。雨、降らせて欲しいの』

わたしの左手を握ったまま、真紀がほおおお、と大きな息を吐き
出して、その場にしゃがみこんだ。

『よかったあああ。意見違ったら、どうしようかと思ったああ
あ』

『じゃあ、真紀ちゃんも?』

『うん。MICAのリセットよろしく。水門の神さま?』

唇の両端を持ち上げ、にっこレインに笑いかける。

『ただし、ひとつ確認しておきたいんだけど……今はMICAを動
かすことを頼むけど、あとから止めるということも可能だよ?』

《ああ、できるよ》

『それに、レインを眠らせるということも、できるんだよね?』

《……君たちが望めば》

なぜそんなことを聞くんだろう。そう思って真紀を見たら、彼女
は苦笑して教えた。

『あたしは最初から雨を降らせてもらうつもりだったんだ。そうじ
やなきや、みんなで王様に首切られちゃうからね』

忘れてた。そんな約束、したんだっただ。

『だけど、理緒子も悩んだと思うけど、「まほら」やMICAは文
明が高度すぎて、この世界への影響が大きすぎる。それに、この
使用者はあたしたちでも、所有者はマフォーランドの人たちのはず
なんだよ。この先どうするかは、あたしたちじゃ決められないし、
決めるべきじゃない。だから、凍結もできることを知っておきたか

つたんだ』

《君が、単なるうるさい女の子じゃなくてよかったよ》

『それ褒めてなーいつ』

盛大に真紀が頬をふくらませる。レインはくすりと笑い、わたしたちに両手を差し伸べた。

《じゃあ、決定でいいかな？》

『うん』

『よろしく』

《承知した。 鍵を》

金色の光でできた手に、真紀は右手を、わたしは左手をそれぞれ重ねる。

腕に刻まれた輝く紋様が、ひとつに繋がる曲線となって浮かびあがった。光の渦巻きは、次の瞬間、身をくねらせてレインの体に絡みつく。彼の全身を未知の幾何学模様が踊り、跳ねた。

海の色 of 双眸が、強く、深い煌きを放つ。そのままレインは首を反らし、わたしたちには分からない言語を呟いた。と。いきなりその体が、四方に砕け散る。光の粒となった残骸はすぐに消え、一瞬スクリーンも何もかもが真っ暗になり、やがて灯りはじめた。

ひとつ、ひとつと空間が光を取り戻す光景の中、まだ手を差し出したままのわたしは、意識の片隅で急速に何かが構築されはじめるのを感じた。

かちかちかちかち。すさまじい速度で、目には見えない編み棒がそれを紡ぎ出していく。

演算子。

まったく聞いたことのない言葉が、頭をよぎる。

素数。不確定要素。エントロピー。位相空間。変換。解。

意味を成さない言葉の羅列は、おそらくわたしではなくレインの「まほら」の意識だ。瞬く間に織りあげられていくそれらは、面となり立体となって、複雑な花びらをもつ薔薇のように意識の海の中に咲きほころんだ。

ぱりり、と指先から肘までを熱い痛みが走る。思わず指を丸め、違和感に気がつく。

あれ？

《はい、完了》

いつの間にか閉じていた瞼を開けると、粉々になったはずのレインが最初のと看と同じ体勢で、わたしと真紀の手をとっていた。きゆ、と差し出した手を握ってみる。やわらかい、人の手の感觸。

『……レイン、いつ人間になったの？』

《すべてを台無しにする台詞、言わないでよ。君たちは鍵を通して僕と繋がったから、感觸がリアルに感じられるだけ》

『へー』

真紀が手を伸ばして、レインのほっぺたを指先で軽く挟む。

『あ、ほんとだ。つまめるー』

《……夢かどうかを確かめるなら、自分の頬をつまみなよ》

『レインのをつまむのに意味があるんじゃない』

《どう考えても、意味ないから》

『結構さわり心地いいよ？』

《おかしな趣味に目覚めないでくれる？》

だめだ、この二人。真紀がボケで、レインがツッコミ担当にしか思えない。

わたしが笑い出し、見守っていたタクとルイスが苦笑に頬をほころばせた頃、「まほら」のはるか上空で、雨雲の到来を告げる雷がひっそりと鳴り響いた。

わたしたちをここへ連れてきたお礼に、ルイスが魔法環の指環を望んだのに対し、タクの望みは小さなものだった。

『みんな疲れているから、しばらくここで休ませて欲しい。落ち着いて相談したいこともあるしな』

《構わないよ。客室は存在しないけど、船室はどの部屋も居住空間として成り立つように作られている。誰もいないから、好きな部屋

を選ぶといい》

それを聞いて、真つ先に駆け出したのは真紀だ。スクリーンとは反対側の一画へ向かい、壁のように見えるそこに手を触れる。センサーでもあるのか無機質な壁はぱくりとZ型に開いて、奥に広がる細長い空間へと道を繋げた。

「わ、すごい」

「マキ、一人で行くな」

《危険はないよ？ 僕が見てるし》

追いかけるルイスの後姿に、レインが声を投げる。宙に浮いたままうつぶせに寝そべると、肘枕をして上空からタクを見下ろした。

《本当にそんな願いでいいの？ 右手の怪我治すとか、簡単にできるよ？》

「なんでもお見通しだな」

タクが苦笑って、いびつな右手を軽く握る。わたしは尋ねた。

「レイン、本当に簡単に治るの？」

《手首から上を丸ごと替えたほうがいいみたいだから、ちょっと時間はかかるけれどね。本人の体細胞クローンを使った代替器官を作るのに十二時間くらいかな。あと、慣れるまで少しかかるし》

「十二時間って、立派に早いよ」

わたしは眉をしかめた。クローンなんて、どうやったらそんな短時間で出来るんだか。

最先端技術を知る由もないタクは、わたしたちの会話を黙って聞いていた。

《どうする？》

レインにふられ、彼は軽く首を横に振って、断りを示す。

「いや、ありがたいが……俺には、この手で充分だ。それ以上を望む気はない」

《身の丈を知るといいのはいいことだけど、こだわりすぎても大事なものを失うよ？》

「……………」

《諦観は美德のように思われがちだ。が、それを言い訳に足掻くことを止めて、自ら可能性を閉ざす愚かさや紙一重ということを忘れない方がいい》

どこか意味深な言い方に、タクが複雑な表情で黙り込んだ。

タクの右手指は曲がって、怪我の痕も生々しく残っているし、ときどき上手く動かせないこともある。剣を遣う騎士という立場にとってそれはすごくハンデだと思うから、わたしは治したらいいと単純に考えてしまうけど、治すということは同時に他人の力を借りることもでもある。誇り高いタクは、あまり受け入れたがらないだろう。それに手を丸ごと取り替えてしまうなんて、怪我から必死で回復してきたそれまでの時間を、まるで否定してしまうことにも思える。人工の明かりの中でも藍色の輝きを帯びる瞳が、ずっとレインに向かった。

『水門の神』

《レインでいいよ》

『……レイン。先程の申し出、少し考えさせてもらえないだろうか』
《いいよ。ゆっくり休んだ後に、答えを出すといい》

『ありがとう。だが……申し出を受けるとすると、褒美を二重にもらってしまうことになるな』

《はは、気にしないで。最初から休んでもらうつもりだったし》

よいしょ、と起き上がり、レインは空中で胡坐をかく。

《それに彼女は、ここでくつろぐ気満々みたいだしね？》

言葉尻が終わる前に、ばたばたと足音をさせて、探検に行っていた真紀がルイスと戻ってきた。

「すごいよ、理緒子！ ホテルみたい。見においでよ！」

『ほんと？ 行ってみようかな』

ちら、と横目でタクを盗み見、わたしは通路に向かう素振りを見せた。気付いて、タクも足をそちらに向ける。

『では、世話になる』

《どうぞ。恩ならいくらでも売るよ》

『高い買い物になりそうだ』

『レイン、変なものを売らないでよ？』

わたしが軽く睨めば、光る少年は悪戯そうにまた笑った。

《失礼だなあ、君は。僕はわりと良心的な商売をするよ？》

『商売っていう段階で間違ってるんだってば！』

「あはは」

同意するように、真紀の笑い声があがる。わたしは彼女と手を繋いで、通路を歩き出した。後ろからやってくるタクの気配に耳を澄ませながら。彼とレインとの会話に含まれた意味を、心の片隅で考えながら。

真紀の言ったとおり「まほら」の中の部屋はどれも、すごく広いわけじゃないけれど、ホテルの一室みたいだった。土足なのが気が引ける。

清潔な広いベッド。リビング。台所。シャワールーム。水を使わない洗濯機まであって、本当にここですばらく暮らしても問題なさそうだ。

《「まほら」が地球を出て到着するまでの三十余年間、人が快適に過ごせるように細心の設計がされたからね。日常生活にはまったく支障はないはずだよ》

「うわ、どの部屋にしよう〜」

スライド式のドアを次々と開け、真紀がかたっぱしから部屋を覗いていく。造りはだいたい似ているのに、インテリアの色、形、配置が違うだけで、これでもかかっていうくらい様々な内装の部屋が並んでいた。それは同時に、元の持ち主の素性も想像させてくれる。

モノトーンで統一されたシックな部屋は、たぶん男性の一人暮らし。おもちゃの散らばった、アースカラーの部屋は小さい子供のいる家族。ピンクで統一された部屋は、若い女性。

ふふ、おもしろいなあ。

真紀の後ろから覗きながら、わたしは想像に浸った。オークルと

コーラルピンク、黄色の小花柄を差し色にしたかわいらしいカントリー調の部屋がいいだろうか。

真紀は、茶系のアジアンテイストの部屋が気に入ったらしいけど、決めかねているようだ。次の部屋を覗いて、わたしは『あ』と声をあげた。

他の部屋よりも少し天井が高く、色調は暗い青と水色。リネンの白が眩しくコントラストをつけている。調度品は木彫で、磨きぬかれた木目が美しい。ベッドは天蓋付きのキングサイズだ。

ここがいいかな。

思っていると、真紀が「いい感じだね」と言ってきた。

『ここにしようかな』

「あたしはあっちにする」

いつの間にか決めたらしい真紀が、向かいの部屋を指差す。行ってみると、そこは天井の梁が見える、落ち着いた雰囲気のある部屋だった。床はモスグリーン、壁はダークブラウン。色の違う緑を折り重ねたような調度類は、森の中にいるようだ。

『うん、いいんじゃない？』

「タクたちはどうするのかな？」

『一人一部屋って、なんか贅沢じゃない？』

「部屋が余ってるからいいしょ」

なんて言いつつ、真紀はまだ他の部屋を覗こうとする。通路を行ききった角の一室に手を当て、首を傾げた。

「あれ、ここだけ開かない」

『鍵がかかっているのかな？』

不思議に思っ、つい癖で指環を嵌めた左手を伸ばす。わたしの左手と真紀の右手が重なると同時に、ぱしゅ、と軽い歯擦音がして、ドアがスライドした。

「あ、開いた」

真紀が室内に足を入れる。そのとき唐突に、レインの怒鳴り声が頭の中に響いた。

《わ〜っ、ちょっとそこはストップ!》

制止と同時に、傍らで黄金の光が渦巻く。なにがそんなにまずいんだらうと、わたしは何気なく室内を見回した。

これまで見た中では少し広めの一室。いびつな半円を描く内装は、床にボルドーの絨毯が敷き詰められ、調度品は黒茶と白。小部屋のない室内を分けるパーテーションは、花柄のシルクスクリーンの入った屏風風で、どことなく和のテイストが漂う。

中央に置かれたベッドはピンクのサテン生地の手拭いで覆われ、華やかかつ上品だ。だけど、なぜかその上に大きなガラスケースが載っている。

それを目にした途端、胸が奇妙な音をたてた。ぴしり。

先に見つけた真紀が棒立ちとなり、こわばった顔でわたしを振り返る。

「えーと。たぶん、理緒子は見んほうがいいと思う」

動揺しているのか、広島弁で言われた忠告に、なぜだかわたしは耳を貸さなかった。磁力に引かれるように近づき、それが何か気付いた瞬間、抑えることのない悲鳴が口からあがった。

『リオコ?!』

『どうした!』

タクとルイスが部屋に駆け込んでくる。わたしは喘ぐように両手で喉元を押さえ、その場にしゃがみこんだ。

ガラスケースの中にいたのは、人だった。きれいなラベンダー色のドレスに身を包み、髪を結って銀色の小さな額飾りをつけている。固く目を閉じたその人が亡くなっているのは、動かないということだけじゃなく、明らかだった。

茶色く変色した皮膚。たるんで、しわだらけで乾ききり、骨の形まで分かるくらいだ。

ミイラ。

亡骸が恐かったんじゃない。この人は？前の乙女？だと直感的に分かったからだ。

なんで……ミイラに、なってる、の……。

胸の前で組まれた皺だらけの手が、自分の手の外観に重なる。わたしもこの人のようになるんだと思ったら、急に息ができなくなつた。ひつと息を吸い込む。苦しい。

「理緒子！」

真紀が気付いて、わたしの口にハンカチをあてる。ひつひつと断続的に息を呑みながら、わたしは？彼女？から目が離せなかった。その視線を遮るように、太い腕が、真紀ごとわたしを引き寄せる。

タク。

わたしを腕に抱き、だけどタクはこちらを見ることなく、厳しい眼差しを光でできた少年へ突きつけた。

『どういうことだ？』

《見たとおりだよ。君たちの言う、先代の異界の乙女の遺体だ。彼女の望みに従って、暮らしていた部屋に安置した》

そこまで言って、レインはわたしたちにすまなそうな顔を向けた。《君たちが見たらショックを受けるのは分かっていた。誰の目にも触れないよう鍵を掛けていたんだけど、マスターキーの持ち主である君たちには無意味だったってこと、忘れていたよ。ごめん》

ルイスが傍らで腰を落とし、わたしを見上げる。手が差し伸べられ、治癒の魔法で少し息が楽になった。だけど、過呼吸は精神的なものかほとんどだから、楽になるとぶりかえしそうな境目で、わたしは浅い呼吸を繰り返した。

『タキトウス、彼女を部屋に』

『分かった』

タクが体を抱え上げようとする。背中に回された腕を手で押さえ、わたしは首を横に振った。

『リオコ？』

苦しくて胸が弾け飛びそうで、気持ちも混乱して泣きそうだったけど、わたしは踏みとどまった。きちんと説明されて、納得しなかった。タクを押しつけるように、一歩前が出る。

『なん……で、ここで、死んで、るの……？』

《一言で説明できる状況じゃない。君が落ち着いたら、時間を作つてゆつくり話すよ》

もういちど強く首を振る。

『今、教えて。この人……ずっと、ここに、いたの？』

睨むように、強く金色の少年を見つめる。

もし水門を開けに来た彼女が、そのときからここに居るのなら、わたしたちも？

考えたくもない未来の姿が、悪夢となつて胸の内を渦巻く。それを必死に押し殺し、レインの返事を待つわたしの手と肩をとり、真紀も彼に顔を転じた。

『それに関連して、あたしからも質問。彼女、なんでマフォーランドの服着てるの？ レインが着てる未来人の服の雰囲気と全然違ふよね？』

え？

息が止まる。ルイスがベッドに近づき、ガラスケースの中の彼女をまじまじと見下ろした。わたしも見たかったけど、恐くてそれ以上足が動かない。代わりに、隣でしゃがむ真紀に尋ねる。

『なんで、まほうらんの服って……？』

『ルイスのお母さんが着てたのに似てたから。紫の襟の詰まったシンプルな感じのラインのドレスで、あんまびらびらしてないの』

『……父の趣味が古風なんだ。よく憶えていたな』

そうか、真紀はアクイナスでルイスの自宅にお邪魔して、ルイスパパと揉めたりしたんだった。聞いた話を思い返していたら、気が逸れたのか、ちよつと呼吸が落ち着く。

ガラスケースを覗き込んでいたルイスが、なんとも言えない表情でレインを振り向いた。

『確かに、初期ヴィオラ様式のドレスだ。それにこのティアラキッキーナとクツクルが意匠されているとは……まいったな』

『クツクル？』

『小さな白い鳥だ。賢くおとなしく、一生一組の番（つがい）で寄り添う。愛情と平穩の象徴で、同時にある特定の身分を指す鳥でもある。』

……レイン。どう見てもこれは、我が国の王後の宝冠に見えるのだが、この女性は一体何者だ？』

『彼女は？辻由梨亜？本人だよ。ただしマフォーランドで付けられた名前は、ユーリアナ・トゥーデイ。またの名をミア・ヴィオラ・ユーリアナ・ルーア・タチアナという』

『なんだと？』

『本当か？』

タクとルイスが同時に驚愕する。わたしと真紀は、まるで置いてけぼりだ。

『いや、それで話を通じるのか。オルフェイド王のただ一人の王妃が彼女であるならば、ここに王後の宝冠があるのも頷ける』

『なぜ、オルフェイド王が異界の渡り人を王妃に？』

『例の姿の見えぬもうひとりの騎士が鍵だろうな。確か前の乙女は？キョート？から来たはず。これがもし？キヨウ？に姿を現わしたとするなら……？』

『まさか……王みずからが発見者であつたとでも?!』

『可能性は高い。当時王は即位して二年、二十五才の若者だ。乙女は十八。年齢的にもつり合う。しかも、同年のキリアンとは王立学院で共に学んだ仲だと記憶している。』

私も愚かだな。ソロンの指環をもつキリアンの前に乙女が現われるなんて都合が良すぎるはずだ。逆だったんだ。乙女が現われたから、指環をもち、かつ魔法士である彼が護衛として選ばれたんだ』
めずらしく一気に語ったルイスに、タクが深く頷く。

『なるほど、確かに話は通るな』

『むしろ、そう考えなければ辻褄が合わない。キリアンの手記に出遭いについて書かれていなかったこと、もうひとりの騎士の素性が隠されていること、乙女のその後の行方が何も伝わっていないこと』

『ま……待つてよ、二人とも。全然話が見えない』

男同士の会話にようやく真紀が口を挟むと、レインがおどけたように肩をすくめた。

《だから、一言で説明できる状況じゃないって言ったじゃない》

『ひとつ教えてくれ、レイン。彼女はなぜ王墓ではなく、ここに埋葬されたのだ？』

《死期を悟った彼女のほうから来たんだ。ここに骨を埋めたいと》
『なぜ？』

《彼女は、この世界をとて愛していた。彼女の夫も含めて、すべてをね。だから、この「まほら」を含めた？過去の遺産？がこの世界に与える影響をとて案じていた。鍵である自分の死後、再び過去を眠らせようとしたんだ》

『それは』
なおも問い重ねようとするルイスを、レインは片手を挙げて止める。

《いろいろ聞きたいことはあるだろうけど、今は彼女のほうが優先だ。部屋で休ませて》

『あ、ああ。そうだな』

タクが壊れ物にでも触れるように、そつと頭を撫でてくる。後ろをふり仰ぐと、藍色の瞳がほんの少し微笑んだ。

『さっきの部屋に行くか？』

『……うん』

疑問はぜんぜん解決した気がしないけど、それでも最初に比べて気持ちは鎮まっていた。詳しいことは分からなくても、少なくとも前の乙女がこの世界の好きな人と結婚していたという事実には、心の重荷が少しだけ軽くなった気がする。

タクの手が背中に回り、ひょいと足元が掬いあげられる。

ふえ……？

『じゃあ、先に休ませてくる』

『あ、あたしも一緒に』

指先を掴んで真紀が言う声が、なんだか遠い。ゆっくりと横を見ると、すぐ傍にタクの顔。

ち、近……。

さつきとは違う意味で、呼吸が詰まる。一気に心臓が全力疾走をはじめた。

体中を跳ね回る鼓動が飛び出していかないように念じるわたしの耳を、レインと真紀の声が上滑りする。

《君はだめだ》

『なんでよ？』

《君たちは、二人でひとつのマスターキーなんだ。迂闊に一緒にはさせられないよ。君たちの行動は予測不能だからね。今回みたいなのが二度あつては困る》

『うー分かったよ。じゃ、お願いね、タク』

『ああ』

低く答える声が、密着する胸からも震えて響く。あまりに急に距離が縮まりすぎて、息吹や心臓の音を一時停止しようとして硬くなるわたしをちら、と見下ろし、タクが苦笑する。

『ほら、落ちないように掴まって』

『う、うん』

首に腕を回すのは無理だったけど、彼の服を両手でぎゅっと握つたのを確認し、わたしを抱えたままタクが部屋から出る。

『……じゃあ、私も』

「抱っこ出来ないから！ もお、触 わーるーなああっ！」

なんていうルイスと真紀のやり取りや、

《あつれ、僕、ひよっとして部屋割り間違えたかなー……》

なんてレインのぼやきは、半分以上わたしの頭を通り過ぎていった。そのときのわたしは、目の前に広がる広い胸板とその上にある彼の横顔を見つめるだけで精一杯だった。

お姫様抱つこのまま、わたしをあの青い部屋に連れて行ったタクは、大きなベッドの上にわたしの体をぼすと載せた。クッションは固めだけど、自分が羽根になったみたいに体重が受け止められる。安物ではないと感じさせる心地よさ。

絹に似たシートもなめらかな手触りで、何百年何千年も使われていなかったとは思えない。一体どれだけの時間と手間とお金がこの「まほら」に投じられたのだろう。

現実を把握しきれなくて、ぼんやりと室内を見渡すわたしの傍で立っていたタクがどこか慌てたように身をひるがえす。

『なにか飲み物を探してくる』

『あ、うん』

大股に部屋の隅の方に向かったはいいけど、そこにある扉らしきものは、取っ手もなければボタンも鍵穴もない。当惑して固まったタクの後姿に、わたしはベッドを滑り降りて横から覗きこんだ。壁を四角く区切ったそこは確かにドアに見えるのに、手で触れても何も変化がない。

『センサーが点かないのかな？』

故障かと思つて前のほうでひらひらと指を動かすと、細長い光が横にさつと過ぎ、いきなりドアが開いた。その先は洗面所だ。

『なんだろう？ 変なの』

《 君は鍵を持つ者として認証されたけど、彼はされていないからね》

わたしの独り言に、突然レインの声が答えた。見回すけど、彼の姿はない。

《僕はこの「まほら」のシステムそのものだと言ったでしょう。君

たちが何かをしようとするれば、すぐに分かる《

『だったら、すぐに開けてくれれば良かったのに』

《彼に対しては反応できないんだよ。地球人じゃないから》
変なの。すごく不便で不自然。

『タクとルイスも認証してよ。使用者の命令は絶対なんですよ？』

《結構システムの根幹に関わることなんだけど……まあ、今回だけ特例ということなら》

語尾が終わると、天井からタクに向かって、金色のきらきらした光の粉が舞い落ちてきた。彼の肩や髪を通り抜け、光が溶け入る。最後の一粒がなくなると、再びレインの声が聞こえた。

《それじゃ、ごゆっくり》

皮肉な香り漂う台詞に、思わずタクと顔を見合わせて苦笑してしまふ。恥ずかしくなり、ごまかすように開いたドアの先を覗き込む。するとタクが手で制して、わたしに待つように言った。

『危なくないよ？ たぶん』

『君は他人を信頼しすぎる。用心に越したことはない』

『でも、「まほら」の鍵はわたしなんだし』

『それはレインが言ったことだろう。自分の身を守りたいのであれば、少しは疑いを持って』

『それじゃあ……タクたちも疑ってこと？』

その質問にタクは少し黙り、『そうだ』と頷いた。それきり会話を拒絶するように腰の剣に手をかけたまま先に洗面所に入り、奥のバスルームらしき小部屋を開けて誰もいないことを確認する。

『大丈夫だ』

だから危なくないって言ったのに。

心の中でぼやきつつ、わたしは洗面台に立った。蛇口らしきものはないけど、白い大理石模様のテーブルには楕円の窪みがあって、洗い桶っぽくなっている。

水、出るのかな。

きれいに磨かれた窪みに手をかざすと、側面の空気孔に見えた小

さな穴からシャワー状の水が出てきた。見ていたタクが無言で驚く。水は数秒で止まり、持ち上げた手に洗い桶の枠から一斉に空気が吹きつけられた。残った水滴が一瞬で乾く。

『うわ、早っ』

顔を上げれば、壁だったそこは鏡に変わっている。体を離すと、ただの壁に。近づくと鏡に。

『おもしろ〜い』

遊んでいたら、背後からタクの苦笑が聞こえた。

『すごいな。これが？過去の文明？か。俺にはどうなっているか、さっぱり見当もつかない』

『わたしにも分からないよ？』

『だがリオコは、そこから水が出るのも、あの壁に絵が出る仕掛けにも驚いていなかっただろう？』

『うん、似たようなのはあったから』

『そうか……本当にまったく違う文明なのだ。繋がりがあるのだと言われても、想像もつかない。リオコには今まで随分、不便な思いをさせてしまったのだな』

ぼつりと洩らされた終わりの言葉に、驚いてわたしはタクを振り返った。

皮肉で言ったのでも、卑下したのでもない。純粹にタクは、感じたことを喋っただけのようだった。何もてらうことなく自然と他人の立場に身を置いて考えられる人なんだと、今さらながら感じる。

その配慮の深さが彼の善さであり、ときどき、わたしの理解を超える部分でもある。

彼との溝の深さを肌で感じ、わたしは自分の腕をぎゅっと握った。ぎこちない空気をまぎらわそうと、体を動かして部屋のおちこちを見て回る。

奥の部屋は、浴槽はないけど明らかに浴室で、ドアの前に立つと半透明のパネルが現われ、水温や中の環境設定が変えられるみたいだった。部屋の天井付近にある銀色のボールが、シャワーのようだ。

シャワー浴びたいな。

そう思ったけど、さすがにタクには言い出しにくかった。代わりにさっきに洗面台で手と顔をしっかりと洗い、何度か口をすすぐ。しばらくぶりの無味無臭の水に、元いた世界を思い出した。こちらの水は、沸かさないと飲めないものがほとんどだったから。

眉のなくなつた自分の顔をぼんやりと眺めながら、ハンカチで拭う。めりはりのない顔立ちは、化粧を落とすと、すごく子どもっぽい。小さなハンカチを押し当てたまま、鏡越しにタクに視線を向ければ、彼の姿はなかった。

……えっ！

焦つて、洗面所を飛び出す。タクは、持って来ていたわたしの手提げ鞆を丸テーブルに置き、広いベッドの手前側に浅く座つて考え事をしているようだった。わたしに気付き、目を上げる。

『だいぶ落ち着いたようだな。良かった』

『う、うん。ありがとう』

『じゃあ、俺はこれで』

立ち上がり、出て行くこうとするタクを慌てて引き止める。

『え、ちょ……タク。い、一緒にいてくれないの？』

『さすがにまずい。幸い部屋はたくさんあるみたいだし、君もひとりのほうが落ち着くだろう？』

それは確かにタクと一緒にいたら、いろんな意味で落ち着かないけれど。

『でも、ひとりだと心配だし』

『心細かったら、声を掛ければいい。すぐ隣の部屋にいる』

タクの答えはきっぱりしていた。あるとき体と一緒に掬い上げられた浮き立つ気持ちだが、急激にぺしゃんこにしぼむ。

壁越しになにを話せて言うの……？

昨日のわたしの言葉は、彼にはなにも響かなかつたんだと思うと、情けなくて泣けてきた。哀しい。やるせない。悔しい。

負の感情に傾いたシーソーが、部屋を出ようとする広い背中を見

た途端、大きく音をたててへし折れた。

『ま、待ってっ!』

呼び止める声ひっくり返る。突然の制止にタクの足は止まったけれど、それ以上にも考えていなかったわたしの頭は真っ白になった。

『え……ええと、わたし、今からシャワー浴びてくるから、終わるまで待ってて!』

わくわく。もう、なに言ってるんだろ、わたし。

『や、その、か、体を洗ったほうが、もうちょっと気分も落ち着くかなあって。だ、だから、ちょっとそこで待っててっ!』

キングサイズのベッドを指差すと、タクがおぼつかなく頷いて引き返してくる。

わたしは小走りになって、自分の荷物をテーブルからひったくると、胸の前で抱えた。絶対に困惑しているはずのタクの表情を見るのが怖くて、絨毯から目が離せない。

『べ、べつにすごく汚いとか、そゆわけじゃないんだけど、でもね』
『分かった。待ってる』

ぱつと顔をあげると、ベッドに腰掛けたタクは、苦笑とも言える微笑みを見せていた。全身が熱くなる。

『す、すぐ戻るから!』

『ああ』

荷物を押し抱いて、また小走りに浴室に駆け込む。不安になり、そつとドアの隙間から窺うと『逃げないよ』と低い声が再び苦笑した。

『ここにいるから』

『……うん』

そんな小さな心配りが嬉しい。ドアを閉め、とろけそうな気持ちにひとりふにゃふにゃと浸っていて 気がついた。

これって……まさか最悪のパターン?

わたしのタクへの気持ちはバレバレ。さらに告白してふられた。

それなのに、『シャワー浴びてくるから待ってて』なんて。

『わたし……痴女？』

ドアにすがりついていた体が、ずそぞそ、と床までずり落ちる。アメーバ並みにぐんにやりと落ち込んだわたしの前髪の手先で、きら、と光の粉が舞った。

《自分でそういう結論に達する人もめずらしいと思うけど？》

『……覗き見しないでよ、レイン』

今度は姿を現わした「まほら」のメインコンピュータの幻影に、うらめしく眼差しを送る。両膝を揃えてしゃがみこみ、同い年くらいの綺麗な顔立ちが、間近でわたしを見下ろした。

《いくら僕でも心配するよ。君たちは予想外な性格だしね》

『ごゆっくりって言ったくせに』

《ゆっくりしてるじゃない。床にへばりついてるけど》

両手について勢いよく頭を振り上げれば、レインの顔にぶつかりそうになるけど、彼は一瞬で避けて少しだけ後ろに退った。

《色仕掛けって、合わないと思うよ？》

『……分かってるもん。タク、ちよー真面目だし』

《君にも、似合わない》

わりと真面目な顔で言われた。元の造作がいいから、ちよつとどきつとする。海の色から視線を外し、床に落とす。

『……レインは、好きな人いた？』

《「まほら」が出航するまでの二千年分の恋愛データならあるけど？》

やんわりと話を逸らされた。天使の美貌に皮肉を滲ませて、元は人間だった光の幻影は、膝に載せた握り拳に頬を当て、首を傾げてわたしを窺う。

『データなんて意味あるの？』

《統計学を甘くみないでよ？ 占いの多くが統計的な数値に因るもの。そして、占う内容のほとんどが恋愛相談だ。といっても、異世界人同士の恋愛は、残念ながらデータにはないけど》

『前の乙女は？』

《由梨亜は君と全然違つよ。ぎゃーぎゃー騒がなかつたし、護衛をここへ入れてくれなんて言わなかつた》

冗談っぽくレインは言つたけど、本当なんだろうと思つた。二つ上だと聞いてたけど、「まほら」であんな衝撃的なことを知つても、ひとりでじつと耐えていたつてことが想像もつかない。二年後のわたしでも、絶対に泣いていそつなのにな。

『大人、だつたんだね』

《そつという性格なんだよ。なにかにぶつかったときに、君たちみたいに脊髄反射の感情で反応できない。一瞬止まつて、考えて、そこから動く。動きはじめたら止まらないけどね》

『そつなんだ』

《頑固なのは君たち以上。彼女がマフォーランド人として暮らすことを選んだのは、相手の男のストーカーばりの粘り勝ちだ》

『なにそれ？』

小さく嘖き出すと、レインも天使の顔をほころばせた。

《やつと笑つたね。面白い話の続きを聞きたければ、体じゃなくて頭をすつきりさせといで？》

眼差しで、ドアのほうを促される。わたしはまたうつむいた。床についた膝頭を両手でぎゅっと掴む。

『別に、今さらタクとどうなりたいとか思わないんだよ？ あ、えと思つけど、そこまで強引にどうかしたいわけじゃないの。ただ…』

…ちやんと話を、したくて』

《じゃあ、彼にそつ言えばいい》

『話したくないって言われたら？』

《そんな器の小さい男は忘れてしまえばいい。……理緒子》

ごく自然なイントネーション。初めてわたしの名を呼び、光の少年は碧の双眸を細めた。

《君が今不安に思つているのは、全部？もし？や？たぶん？の話だ。だけど、僕のように人の考えも読めない君が、本当はどうなのかを

確かめる手段はひとつしかない。話すことだ《

『でも……』

《いいかい。二人の間に起こった問題は、君ひとりで解決できるものじゃない。むしろ二人の問題なのに、君ひとりが勝手に結論を下してしまっほうが、相手に失礼だとは思わない？》

そんな考え方ははじめてだ。わたしの知らない時間を生きてきた少年が、微笑む。

《話をしておいで。どうしても無理だったら、神さまから二人で話をするように託宣が下ったとでも言えばいい》

『……強引』

小さく笑えば、彼は悪戯そうに片目を瞑る。

《使えるものはなんでも使うべきだよ。？求めよ、されば与えられん？と言うでしょう。欲しいものを指をくわえて見えていても、手には入らない。

君たちの時間は短い。悩むくらいなら、ためらわず手を伸ばせばいい》

光でできた繊細な手が、わたしの頭に乗り、髪を撫でる。ぬくものがない、けどどやわらかな感触。わたしは頷いた。

『分かった。けどやっぱり、シャワー浴びてくる』

《なんで？》

『使えるものはなんでも使えって言ったでしょ？』

《そういう意味じゃなくて》

『いいから。あ、着替えとかある？』

《脱衣所の上棚に部屋着があるけど。そうじゃなくてさ》

『なら大丈夫ね。ほら、あっち行って』

鍵のある左手で、目の間にしゃがむ少年の肩をよいしょと後ろへ押す。うわつと声をあげ、レインが壁を抜けてひっくり返った。壁から両足の突き出たホラーな体勢のまま、うっ、と呻く。

《……ふられちゃえ、とか呪ってもいい？》

『だーめ。ほら、早く出てって。絶対、盗み見しちゃだめだからね

？』

上下逆を向いた足を壁に押し込む。どういう仕組みなのか、光でできた少年の体は、難なく白い無機質な壁の向こうに消えていった。よし、完了。

脱衣所に立つて、服の裾に手をかけ、もう一度宙を見渡す。

『レイン、見ないでよ？』

《僕もそこまで命知らずじゃない》

声だけが降ってくる。空中をきつと睨んだ。

『どつという意味よ?!』

《そのまんまだよ。ま、結果報告愉しみにしてるよ》

それきり声は途絶える。気を取り直して衣類を脱ぎはじめると、清潔なフーリングに細かな灰色の砂がばらばらと零れ落ちた。

せつかく着替えるんだし、洗濯していいのかな。

聖地にいるにしては、あまりにも緊張感がなさ過ぎるかもしれない。

だけど、わたしは今日ここで自分の住んでいた世界の未来を知り、この世界の過去を知り、閉ざされてきた歴史を知った。そして、雨を降らせることを決意した。だから今だけは、少しくらい気を抜いても許されるんじゃないかと思う。

何色でもない透明な雫が一粒、左目から滲んで転がり落ちた。拳を口に当て、喉の震えを押し込める。

大丈夫、わたしはまだ前に行ける。

こんなところで膝を折りたくない。レインの言つとおり、ためらわず手を伸ばして走り抜けるために、わたしは淡い蒸気のたつ浴室へと向かった。

20・8(後書き)

ごめんなさい、次で章結です。

20・9 (前書き)

ちよつと時間が遡ります。

タクはずるい。『俺を忘れる』なんて、わたしの恋愛感情を頭ごなしに否定しておいて、『無事で良かった』とかお姫様抱っことか、紛らわしすぎる。

彼のやさしさは万人平等で、それはすごく美点なのだろうけど、反面八方美人だ。そのやさしさに惹かれるのは、きつとわたしだけじゃないと思う。

タキリアチファに向かう途中、足の遅いわたしは先頭のタクからだいぶ離れてしまつて、通じない会話をしながら真紀とじゃれあう彼の姿を後ろから眺めることしかできなくて、すごく胸が痛んだ。

真紀は恋愛音痴だけど、タクに一目置いているらしく、それがいつ恋愛に転ぶか不安で仕方ない。わたしが彼の特別じゃないから、余計に。

二人を見るわたしの様子に気付いたのか、ルイスが斜面を登る手を貸しながら、気を逸らすように話しかけてくる。

『リオコ、二人の住んでいた国の言葉を教えてくれないか？』

『日本語のこと？ いいけど、どうして？』

『指環がひとつしかないから、いろいろ不便だろう？ 君たちがこちらの言葉を覚えるのも大変だし、だったら私が君たちの国の言葉を覚えるのもいいかと思つて』

つまり、真紀がマフォーランド語を覚えるのを待っていられないから、自分も日本語を覚えようつてわけだ。分かりやすい理由に笑いがこぼれた。

『ルイス、一途だね』

『これが伝わらないんだけれどね』

本当、それが一番の謎だ。通じているような気もしないでもない

んだけど。

『どんな言葉を覚えたいの?』

『まずは挨拶かな。あとは……愛の告白?』

『もう! ルイスってば、単刀直入すぎ!』

『曖昧に言うよりいいだろう? ごまかしよのない言葉で、きちんと伝えたいんだ』

口調は軽かったけど、青い眼は真剣だった。もうじき聖地に辿り着く。旅の終わりに、彼もなにか結論を出そうとしているのかもしれない。

羨ましいな。

汗ではなく、嫉妬で目の前が曇りそうだ。真紀が悪いわけではないのは頭では分かっているのに、心が、否定する。なんて醜い。奈落に滑り落ちそうな気持ちを無理矢理つなぎ止めて、足元と聞こえる声に集中した。

『リオコの国では、どうやって気持ちを伝えるんだ?』

『うーん、?好きですか?とか?付き合ってください?って言うかなあ。だいたい男の子からだけど、女の子からもありだよ。わたしはしたことないけど』

『?愛してる?とは言わないのか?』

『それは付き合った後でお互いよく知り合ってからだよ。最初から言うなんて、ストーカーっぽいし』

『そう思われるのも困るな』

わたしに合わせ、ゆっくりとした歩調でやや斜め後ろを歩きながら、ルイスが笑う。

『じゃあ、?好きだ?って言うにはどう言えばいい?』

普通に答えようとして、指環で変換されてしまうことに気がついた。左の人差し指から外してルイスに渡し、口に出す。

「?好きです?」

「シユキデス?」

「す・き」

「スキ？」

こくこく、と頷くと、ルイスはわたしの手に指環を戻した。

「スキ？が？好き？ということか？」

「そう。？です？をつけるのと丁寧な言い方になるの？」

「なかなか難しいな。？スキデス？……」

なめらかな歩みで山道を進みつつ、ルイスはぶつぶつと何度も復唱する。その後も指環をやり取りしながら、？こんにちは？などのいくつかの単語を教えた。片言の日本語を一生懸命しゃべるルイスが、ちよつとだけ可愛い。

タクなら、きつとこんなこと考えつかないだろうな。

思っていると、ルイスが唐突にその名前を口にした。

「タクは、君になにも言つてこないのか？」

「なんだか……興味、ないみたい」

「そんなことはないだろう。ヒューガラナで気を失った君を見つけたときの彼の取り乱しようときたら、普段からは想像もつかないくらいだったけど？」

「でも、タクはみんなにやさしいから」

ルイスの足が止まる。ふり返ると、青い瞳が戸惑うようにわたしを見ていた。

「彼は君の騎士だろう？」

騎士の意味がよく分かっているかわたしは、首を傾げた。

「アル王子に仕えてるんじゃないの？」

「仕えている主人は騎士の主（あるじ）とは限らない。ブーシエの生まれのものは、すべからく国の騎士であるべしとは言われるんだが、今はもっと個人に捧げることが多くて……」

再び歩きはじめながら、ルイスが言葉を探す。

「主人は職務上の契約だが、騎士がおのれの主と定める相手とは、剣の盟約を交わすことで成り立つ。もっと精神的に結びついた関係なんだ。だから主を持たない騎士の剣は、魂が欠けているとも言われる」

『剣の盟約?』

『誓いを立てるんだ。よく聞いて』

また立ち止まり、ルイスはわたしの左手から指環を抜きとった。

「 ミ ジュエリ クエ ミ ヴィ デイフェニトウ アル エ
タルネル」

指環を戻して尋ねる。

『聞き覚えは?』

『ある……ような』

答えながら記憶を探る。聞いたのはかなり前だった気がした。確かベッドにいたわたしの手をとって キスをして、そんな言葉を囁いてくれたような。

『最初のとき、かなあ?』

『最初?』

『こつちに来た夜、イエドのお城で目が覚めたあとタクと少し話したの。全然言葉は通じなかったんだけど、そのときに言ってくれたと思うよ、たぶん』

眉間にくつきりと縦皺を寄せ、ルイスがきれいな顔立ちをしかめる。

『それは、本当に最初の最初じゃないか』

『う、うん。そうだね』

『……あの堅物め、なにを考えてるんだ。そんなに分かり易いのに、なんでこじれるようなことをするのか、まったく意味が分からないぞ。それだけ覚悟を決めているのなら、さっさと思い切っ飛ばせばいいものを』

えーと、こつちも意味不明。

ルイスの独り言に心で突っ込む。置き去りにされた気分で、ちょっとふくれた。

『ね、なあに? 今のが騎士の盟約?』

『ああ、盟約のための誓言 誓いの言葉だ』

『どんな意味?』

その問いに、なぜかルイスはにやりと意地悪く口の端を上げた。

『それは私からは答えられないな。彼に聞くといい』

『どうやって？』

『教えてあげるから、言葉を覚えて』

やっぱりルイスつて、Sなんだよね。なぜだか今度はわたしがマフオーランド語を習う番になり、覚えると、またわたしが別の日本語を教えて。慣れない発音にお互い苦労しながら、二人でそうやってしばらく言葉の教えあいこを続けた。

そうしながら、わたしの中で漠然としたひとつの想いが形を成していく。

タクが本当に、わたしを騎士の主に見望んだのなら。

騎士が生涯でただ一人選ぶという、剣の主に見望んだのだとしたら。

わたしは、少しでもタクの特別になるのかもしれない。

かすかに抱いた願い。それは、その夜の告白で、あまりにもあつけなく簡単に打ち砕かれてしまったけれど。

『好きだと勘違いしているだけだ』

『俺のことは忘れる』

『ただの護衛にすぎない』

投げ返された、いくつもの拒絶の言葉。だけど、その中に彼自身の気持ちは含まれていなかった。そのことをどうとっていいか、わたしの答えはまだ出ない。

……なんにも分かんないよ。

分からないのなら、することはひとつだ。

過去とも呼べない出来事を思い出していたわたしは、生温かいシャワーの雨に打たれたまま、そつと瞼を開いた。壁のタッチパネルでシャワーを止め、？ドライ？に切り替える。すぐに銀色のボールは、宙に浮いた状態で温風を噴き出して回りはじめた。あつという間に、体も髪も床まで乾く。

ふわつく髪を手ぐしで整え、脱衣所で白い前合わせのワンピースに着替える。袖ぐりが筒状で、洋風の浴衣のようだ。貧弱なわたし

の体も、やさしく包み込んでくれる。

レインの言うとおり、わたしは色仕掛けに向いていない。アマラさんや真紀のような女性的な曲線とは程遠い体つきだ。

だけど、今のわたしはいろんな意味ですごく汚れている気がして、どうしても清めたかった。清潔な澱みない気持ちで、もう一度タクと向かい合いたかった。

鏡の前に立ち、荷物の中から化粧水と乳液を出して顔と首に少量はたく。それ以上はせずに、唇にトリートメント用のクリームを軽く塗った。お化粧ゼロ。この顔で再告白なんて、恐すぎるだろうか。

だめだめ、余計なこと考えないっ。

カバンの底に入れた肌身守りを、両手でぎゅっと握る。ぺしんと頬を叩いて気合を入れ、勢いよくバッグを締め直した。ピンクのクマが宙を跳ねる。そして、ドアを開けた。

ベッドに座っていたタクは、やっぱり落ち着かなかったみたいだ。わたしを見た途端、はっと腰を浮かせる。すかさず言った。

『タク、話があるの。そっちに行ってもいい？』

『……………ああ』

タクが、ベッドサイドの左側に寄って座り直す。空いた空間の端っこに腰をかけると、背が低いから少し足が浮いた。横を向いたまま切り出す。

『あのね』

なにかから言おう。息を吐いて、止める。

『？ミ ジュエリ ケエ ミ ヴィ ディフェニトウ アル エタルネル？って、どういう意味？』

訊いた途端、タクが凍った。この凍りつき具合は、わたしが『乙女じゃない』って口走ったときで二度目だ。

『誰から……………それを？』

『ルイスが教えてくれたの。だけど、意味はタクに教えてもらえっ。最初に会った日に言ってくれた言葉だよね？』

重ねて問えば、タクはものすごく気まずそうに顔を背けた。広い手のひらで、さらに表情が隠れる。気まずい沈黙に、さすがに不安になった。

『ごめん、変なこと訊いた？』

『……いや。君の口から出るとは思わなくて、驚いただけだ。今は騎士の誓言だ。滅多なことでも耳に入る言葉じゃないから、一瞬』

ふう、と大きな息。まだ考えるように額に手を置き、タクがこちらを見る。

『一瞬、誰かが君に剣を捧げたのかと思った』

動揺のポイントがちょっとずれていた。なんで、わたしが他の人の剣の主を選ばれるなんて思っただろう？

『今のところ、言ってくれたのはタクだけだよ？』

『そうだな。俺も、もったときちんと公言しておくべきだった。君の騎士は俺だと』

？君の騎士は俺？。

頭の中でその台詞が、鐘の音のようくり返し鳴り響いた。

『なんだか……すごく、特別な気がするんだけど』

『そう、だな。騎士は、剣の主を生涯ひとりしか選ばないから』

その言葉で堪えていたものが切れた。

『なんでっ！　なんで簡単にそんなこと言うの?!　わたしの気持ち、あれだけ否定したのに、なんで』！

掴みかかりそうなくらいの勢いで怒鳴ると、タクが瞬時目を伏せた。それでも切れ長の大きな双眸は、逸らされることなくわたしを見つめ直してくる。

『簡単に言ったわけじゃない。どの言葉も……。リオコ』

呼びかけ、伸ばされた右手が、そつとわたしの髪に触れた。

『言い訳をさせてくれ。俺は言葉が下手だから、うまく伝わるか自信がないが……俺は君を守りたかった。だから、君を守るために君を傷つける言葉を言ったんだ。矛盾しているよな』

『なに……それ』

『初めて会った時のことを覚えているか？ 君は泣いて怯えて、すぐ家に帰りたがっていた。だから俺は君を守りたいと思ったし、無事に家へ送り届けようと心に決めた』

『あの子の代わりに？』

『それもあるが、同一ではない。俺は君を守ることで、この剣と俺自身にはじめて価値を見出せたんだ。だから君の傍にいられるのは嬉しかったし……それがこのまま続けばいいと思わなかったわけじゃない』

藍色の眼に湛えられた複雑な想いの奥を読み取ろうと、彼を見つめる。でも続けられたのは、まったく予想もしない言葉だった。

『だけどスオウシヤの姫から、君たちが未来で？運命のすべてを恨むように泣いている？と告げられたときに思ったんだ。ここへ来たことが間違いなら、君はこの世界と深く関わりあうべきじゃない。そのため、俺の存在が足枷になってはならない』

喉が震えた。体の芯が灼けるように痛い。

『なんで、勝手に決めつけるの？』

『君に未来を教えて、後悔するから気をつけるとでも言うのか？ 君を困らせるのが分かっているのに、何を言えというんだ？』

苛立たしげに問い返されれば、反論する声が喉で止まった。

『リオコ。君は飛行船で俺に？正直でいてくれ？と言った。それを守る気持ちに、嘘偽りは無い。だが、？正直である？ことと？すべてを話す？ことは違う』

『どこが違うの？』

『君が知ったところで、どうすることもできないものもあるからだ。ヒューガラナの襲撃のことも、アルマン王子が隠匿した荷物のこともそうだ。』

終わってしまった後なら何とでも言えるが、もしこの先で同じことが起きたとしても、俺はすぐには君に告げないだろう。信頼や誠実さの問題ではなく、知ることによって君自身の負担や危険が増すからだ。

事の成り行きの目途もたたないうちに、俺は君を下手に不安がらせたくないし、危険なことに巻き込みたくない』

『……』

『君の生まれ育った環境を俺は知らない。だが、世の中には知らないほうが良いこともある。君自身ではどうやっても解決できない問題を、丸のまま投げつけるようなことを俺はしたくない。それが、俺の？守る？というやり方だ』

かつてないほど熱心に、一気にタクが語った。その真摯な口調に、うなだれてしまう。

全然違ってたんだ。

タクがわたしを想ってくれる、その気持ちの根底にあるのは、強い責任感だ。異世界に突然転がり込んだ小娘に、どれだけの配慮がなされていたんだろう。わたしの恋愛感情なんて、所詮そのうえに胡坐をかいていただけの飾り物にすぎない気がした。

『ごめんなさい、タク。わたし勝手なことばかり言って……』

『君が謝ることはない。君を不安させたのは、俺のいたらなさだ』
髪に触れるタクの手が、その逞しさとは正反対の繊細さで撫で下ろす。あたたかい指が頬を滑り、その感覚に自分が泣いていたことに気がついた。

『俺は君を泣かせることしかできないんだな、いつも。君の笑顔が見たいのに』

『だって、タクいじわる言うし……なのにやさしいし。すごく、混乱するの』

『すまない。たぶん、俺自身がずっと迷っていたせいで。自分の気持ちからずっと目を逸らし続けてきたから。リオコ』

名を呼び、タクは苦いものを吐露するように低く囁く。

『俺は、レインが？君たちは帰ることができない？と告げたのを聞いたとき、正直嬉しかったんだ』

『え？』

『二人が帰るべき場所を奪われたというのに、軽蔑してくれてもい

い。それでも、これでやつと自分の気持ちに背を向けなくていいと、きちんと君の傍にいられると思っただ。だから』

髪を撫でていた手が肩先にかかり、ぐっと抱き寄せられる。目を閉じ、なにかに祈るように、タクがわたしの髪に額を押し当てる。

『この先もずっと、君の傍にいたい。君の騎士でいさせてくれ』
『どう、して……？』

『君を守ることが俺の存在する意味だから』

心臓が弾け出しそうだった。近すぎる彼の顔に、眩暈がするほど恥ずかしいのに、目が離せない。髪の毛の一本一本に耳があるみたいに、全身が次の言葉を待っている。

もつとはつきりした一言をと欲張るわたしの気持ちとは裏腹に、タクは、そつと両瞼を持ち上げて照れたように微笑んだ。

『あの言葉は？私は永遠に貴方を守ると誓う？』という意味だ。この誓いは、一度立てたら覆すことはない。言葉も風習も知らない君に捧げたのは、少しずるかったな』

『……ううん、そんなことは』

ないけど、と続けようとして、びくつと体が震える。タクがもう一方の手を、わたしの頬を包むように添わせた。

『俺は、卑怯な男だ。絶対に君を故郷へ帰すと誓ったのに、帰れないと知ったとたん態度を翻すなんて、騎士としては失格だ』

『……どういう意味？ 期待しても、いいの？』

心の中で、不安と希望がせめぎ合う。

『それに、わりと嫉妬深い。もし君が心変わりして逃げたら、この世の果てでもあの世までも追いかけていく。それでも……俺を君の騎士にしてくれるか？』

『……はい』

至近で響く重低音の囁きに、浮き上がる気持ちを必死で抑える。

だめ。いま期待しては、だめだ。

彼にとっては騎士と主。それだけの関係なのだから。

『じゃあ、もう一度きちんと盟約を結ばせてくれ』

『どつするの？』

『俺がさっきの誓言を言つて剣を渡すから、？汝をわが生涯の剣（つるぎ）と認めます？と言つて、口付けて返してくれ。いいか？』

『うん、分かった』

タクはわたしから離れると、長いマントをざばりと翻してベッドに座るわたしの前で膝をついた。腰の長剣を鞘ごと剣帯から外して、それを右手に水平に持ち、左手を拳にして床につき、こちらを見上げる。

『タカトウ・リオコ。私は、永遠に貴方を守ると誓います』

差し出された剣を受け取るうとして、あまりの重さに上体が前にのめる。両手で持ち上げることができずに腕を震わせていたら、『膝に置いていいから』と言われた。

仕方なく剣を横向きに膝に乗せ、両手を添わせる。

『タキトウス・アルデイ・ムシャザ。汝をわが生涯の剣と認めます』
少しだけ柄の部分を持ち上げ、唇を触れた。冷たいのに、どこかぬくもりのある感触。未知の金属でできたそれは、使い込まれてところどころ磨り減り、余計に逞しく感じた。

タクの分身にも思えるそれを両手で持つて返そうとすると、彼の腕が伸びてくる。だけどその手は膝の上の剣を素通りして、わたしの体の脇に置かれ、あつと声をあげたときにはもう、唇が塞がれていた。

思いのほか柔らかな、やさしい拘束。目を閉じて、その意味を充分知らされた後で、それは言葉として耳元で告げられた。

『好きだ』

『……わたしも、大好き』

その答えに、顔を寄せたままタクはかすかに笑い、これまでの距離を埋めるようにわたしの髪に指を絡ませて引き寄せる。髪から離れないままの親指が、また目尻に浮かんだ涙を拭いた。

『やっぱり、タクずるい』

『どっこがだ？』

『だって、いきなり欲しかった言葉をくれたりして』

『ずるいのは君だろう。俺がいる前でツークス領主に言い寄られたり、ルイスと親しくしたりしていたくせに』

『そ、それは……』

『それに人が必死で我慢しているのに？好きだ？と言ってくるし、拳句の果てに前に恋人がいただと？異界へ帰す気があれで一気になくなつたよ』

な……なんで、わたしが責められてるの？

急すぎる展開に、頭の中でクエスチョンが飛び交う。それなのにタクは、床に膝立ちになつた状態で、鼻が触れ合うほどの近さで文句を言い続けた。

『帰れないというから、これでやっと落ち着いて口説けると思ったのに、湯浴みをするから待てと言うし、出てきたらこんな薄物を着ているし。君は、どこまで俺の忍耐を試せば気が済むんだ？』

『……タク、怒ってるの？』

『君が俺の気持ちを信じてくれるまで、離したくないくらいに』

そう告げる藍色の瞳は笑っていた。そのあたたかさに胸が一杯になる。泣きそうになり、急いで指先で睫毛の先の雫を払った。

『じゃあ、しばらく怒つたままでいいよ』

『……そうだな』

答えるタクは、やっぱり笑顔だった。わたしも笑って、今の幸せな気持ちを閉じ込めるように、彼の首に両腕を回す。頬に雫れ落ちた涙は、不思議なほど温もりに満ちていた。

甘い雨音が聞こえる。それは、いつしか音のない雪の降りしきる景色に変わっていた。

タクの腕に包まれ、わたしは久しぶりに懐かしい夢を観た。雪中、小学校の低学年だったわたしに、お守りと一緒に渡された言葉。「辛いことがあっても、絶対理緒子なら乗り越えられるよ」

ふふ、わたし頑張つたよ。乗り越えたよ……ねえ。

おぼろな面影にそつと呼びかける。

分かつているよ、というように、その人が首を横に傾けた。丸い毛糸の帽子の下で、肩先にかかるきれいな黒髪がさらりと揺れる。やさしい笑顔が、涙ぐんでいた。

「行くわよ、理緒子」

手が引つ張られ、わたしは横を見上げる。まだ若いママの姿。その隣にはパパ。

「じゃあ、あの人はだれ……？」

泣き顔なのに、その人は太陽よりもまぶしく微笑んでいる。

「たとえ、この先にながあつても」

「ああ、この人は。」

「絶対に×××だから」

夢の中に消えた言葉。だけどそれは、忘れていたわたしの中の大事な欠片を確かに埋めた。

20 - 9 (後書き)

20章終わりです。

陰でこっそりルイスのスキルがUPしました(笑)。

最後タク&理緒子の間になにかあったかは、ご想像にお任せします
…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497n/>

魔法王国へようこそ！ ~ Welcome to the Mafo-land ~

2011年9月27日00時32分発行